

茨城県教育財團文化財調査報告第339集

姥久保遺跡

一般国道6号千代田石岡バイパス
(かすみがうら市市川~石岡市東大橋)
事業地内埋蔵文化財調査報告書6

姥久保遺跡

財團法人茨城県教育財團

平成23年3月

国土交通省
財團法人茨城県教育財團

姥久保遺跡

一般国道6号千代田石岡バイパス
(かすみがうら市市川~石岡市東大橋)
事業地内埋蔵文化財調査報告書6

平成23年3月

国土交通省
財団法人茨城県教育財団



姥久保遺跡2区遠景（西から）



墨書き土器集合

序

茨城県では、均衡ある地域発展と地域交流圏の形成を図るため、人・物・情報・技術等が活発に交流できる開発を目指しており、県内の高速交通網を早期に形成するとともに、アクセス道路や地域間を結ぶ国道などの道路整備が計画的・効率的に進められています。

千代田石岡バイパスは、国土交通省が石岡市内を中心に発生している交通渋滞を解消するため、土浦市中貫地先から石岡市東大橋地先に至る延長15.7kmのバイパスとして計画されたものです。

しかしながら、この事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である姥久保遺跡が所在することから、これを記録保存する必要があるため、当財団が国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成19年10月から平成20年1月、平成20年6月から8月までの期間にわたってこれを実施しました。

本書は、姥久保遺跡の平成19・20年度調査の成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることによりまして、教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、かすみがうら市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成23年3月

財團法人茨城県教育財團
理事長 稲葉節生

例　　言

1 本書は、国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成19・20年度に発掘調査を実施した。茨城県かすみがうら市大字市川大塚51番地の1ほかに所在する姥久保遺跡の発掘調査報告書である。

2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調査 平成19年10月1日～平成20年1月31日

平成20年6月1日～8月31日

整理 平成21年2月1日～3月31日

平成21年11月1日～平成22年3月31日

平成22年4月1日～4月30日

3 発掘調査は、平成19年度が調査課長瓦吹堅のもと、平成20年度が調査課長池田晃一のもと、以下の者が担当した。

平成19年度

首席調査員兼班長 藤田哲也

主任調査員 杉澤季展 平成19年10月1日～10月31日

平成20年1月1日～1月31日

主任調査員 本橋弘巳 平成19年11月1日～平成20年1月31日

調査員 菊池直哉 平成19年10月1日～12月31日

平成20年度

首席調査員兼班長 三谷 正

主任調査員 田原康司

主任調査員 櫻井完介

4 整理及び本書の執筆・編集は、平成20・21年度が整理課長村上和彦のもと、平成22年度が整理課長桜村宜行のもと、以下の者が担当した。

平成20年度

主任調査員 本橋弘巳

調査員 佐々木愛理

平成21年度

主任調査員 本橋弘巳 平成21年11月1日～平成22年3月31日

主任調査員 櫻井完介 平成21年12月1日～平成22年2月28日

平成22年度

主任調査員 舟橋 理

5 本書の執筆分担は、下記のとおりである。

佐々木愛理 第1章～第3章3節1・2

本橋弘巳 第3章3節3～5節1・2・3(2)～(5), 4・5, 第6節

櫻井完介 第3章5節3(1), 概要, 写真図版

舟橋 理 校正

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、X = +19.680m, Y = +38.120mの交点を基準点（A 1 a1）とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

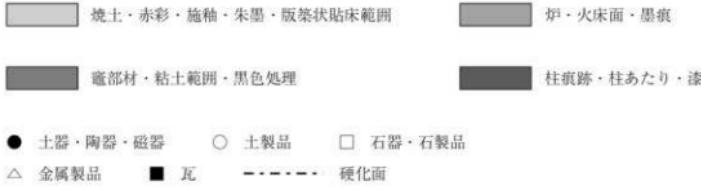
大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C…、西から東へ1, 2, 3…とし、「A 1区」「B 2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa, b, c…j、西から東へl, 2, 3…oとし、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1区」「B 2 b2区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構	SI - 壺穴住居跡	SB - 掘立柱建物跡	SA - 柱列跡	SK - 土坑	SD - 溝跡
	SN - 粘土探掘坑	HG - 遺物包含層	PG - ピット群	P - ピット	
遺物	TP - 拓本記録土器	DP - 土製品	Q - 石器・石製品	M - 金属製品・鉄滓	T - 瓦
土層	K - 搾乱				

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

- (1) 遺構全体図は1区が300分の1、2・3区が200分の1で掲載し、各遺構の実測図は60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。
- (2) 遺物実測図は原則として3分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。
- (3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。



4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

5 一覧表・遺物観察表の表記については、次のとおりである。

- (1) 計測値の単位はm, cm, kg, gである。なお、現存値は（ ）で、推定値は〔 〕を付して示した。
- (2) 遺物観察表の備考欄は、残存率や写真図番号、その他必要と思われる事項を記した。
- (3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

6 壺穴住居跡の「主軸」は、炉（窯）を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N-10°-E）。

目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
姥久保遺跡の概要	1
第1章 調査経緯	5
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 調査経過	6
第2章 位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3章 調査の成果	13
第1節 遺跡の概要	13
第2節 基本層序	13
第3節 1区の遺構と遺物	15
1 平安時代の遺構と遺物	15
(1) 粘土探掘坑	15
(2) 遺物包含層	16
2 中世の遺構と遺物	20
火葬土坑	20
3 その他の遺構と遺物	21
(1) 土坑	21
(2) 溝跡	22
(3) 遺構外出土遺物	24
第4節 2区の遺構と遺物	28
1 古墳時代の遺構と遺物	28
豎穴住居跡	28
2 奈良時代の遺構と遺物	60
(1) 豊穴住居跡	60
(2) 掘立柱建物跡	71
(3) 土坑	80
(4) 溝跡	82
3 平安時代の遺構と遺物	83
(1) 豊穴住居跡	83
(2) 掘立柱建物跡	127

(3) 土坑	129
4 その他の遺構と遺物	132
(1) 土坑	132
(2) 溝跡	137
(3) ピット群	138
(4) 遺構外出土遺物	139
第5節 3区の遺構と遺物	145
1 古墳時代の遺構と遺物	145
豎穴住居跡	145
2 奈良時代の遺構と遺物	150
(1) 豊穴住居跡	150
(2) 土坑	163
3 平安時代の遺構と遺物	166
(1) 豊穴住居跡	166
(2) 掘立柱建物跡	212
(3) 柱列跡	221
(4) 土坑	224
(5) 溝跡	227
4 中世の遺構と遺物	231
墓坑	231
5 その他の遺構と遺物	232
(1) 柱穴の可能性がある土坑	232
(2) 土坑	233
(3) 溝跡	238
(4) ピット群	239
(5) 遺構外出土遺物	242
第6節 まとめ	247

写真図版

抄録

姥久保遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

姥久保遺跡は、かすみがうら市の北東部に位置し、恋瀬川右岸の標高8～23mの河岸段丘下位から上位、台地上にかけて立地しています。今回の調査は、国道6号バイパスを通すための工事（国道6号千代田石岡バイパス事業）に伴い、遺跡の内容を記録保存するため、茨城県教育財団が行ったものです。平成19年度の第1次調査は2,683m²、平成20年度の第2次調査は1,444m²の面積で、第1次の1区では台地上の傾斜面部、2区では河岸段丘下位、第2次の3区では河岸段丘上位を調査しました。



遺跡3区全景（上が南東方向）

調査の内容

河岸段丘下位の2区では、古墳時代前期（約1,700年前）から平安時代（約1,200年前）の竪穴住居跡42軒、掘立柱建物跡8棟、河岸段丘上位の3区では、古墳時代前期と奈良時代（約1,300年前）・平安時代の竪穴住居跡30軒、掘立柱建物跡6棟などを確認しました。今回までの調査で当遺跡は、古墳時代から平安時代までの複合遺跡であることが判明しました。また、台地上の斜面部の1区では、投棄された遺物を含む層（遺物包含層）が確認できました。

－2区に多く見られる貼床の住居跡－

2区では、版築状貼床の住居跡11軒が確認できました。版築とは、種類の異なる土を入れては突き固めることの繰り返しによって、丈夫な地下構造物をつくるための技術で、版築された床の断面をみると層がサンドイッチ状に見えます。

貼床の作業工程



地面に豊穴を粗掘りするため、
底面は凹凸があります。

底面にロームブロックや粘土
粒子などを入れて平らに突き固め
ます。



第26号住居跡の貼床も、ローム
ブロックや粘土ブロックを含む層
の上に粘土粒子を含む層を貼って
いるのが分かります。



第41号住居跡の貼床の上に第16
号住居跡の貼床が確認できます。
2軒ともに床面に白い粘土を貼っ
ています。

2区は、緩やかな斜面部に土が堆積していることから、土に締まりがなく、水はけも悪い場所に豊穴住居をつくっています。このことから、丈夫な床がつくりにくかったのでしょうか。丈夫な床で、湿気が無いように粘土・焼土・炭化物などを混ぜて突き固め、版築状の床をつくったと考えられます。

－3区に多く見られる墨書き器と古代の文房具－



昔の役人が文字を書いた想像イラスト

古代の役人が使う文房具には、硯、刀子、水滴、筆、墨などがあります。硯には円面硯や風字硯などの種類があります。また、土器の裏側を硯として使ったものもあります。刀子は、木簡の間違った字を削って消したり、木簡を再利用する際に字を消したりするために使われました。



9世紀前葉とみられる第43号住居跡を中心として左の写真のような円面硯や刀子が出土しました。この遺跡には、文字の書ける人物が住んでいたのでしょうか。



2・3区からは多くの墨書き器が出土しました。「上殿」のように身分の高い人をイメージさせるものや、「鳥」のように動物を表す文字、「芳」は縁起のよい文字、「十」は数を示す文字、「田」は生産に関わる文字、「@」のように記号を表すものまで出土しています。

—姥久保遺跡から出土した遺物—



古墳時代前期（約1,700年前）の土器です。壺や壺、お供え物に使つたと考えられている高壺、底面が球状の壺を乗せるための器台などが出士しています。



奈良時代（約1,300年前）の土器です。現在のお茶碗にあたる壺や煮炊き用の壺など、日常的に使われていた土器が出土しています。



平安時代（約1,200年前）の遺物です。壺のほかにお皿のような「盤」、壺に掛けるときの鍔のついた「羽釜」。食べ物を蒸すため、底部に孔の開いた「甑」、瓦などが出土しています。



平安時代の「置き壺」です。両脇に持ち運ぶための把手がついており、背面には通風口があけられています。住居に備え付けられている壺とは違い、持ち運びが可能な壺です。

調査の成果

今回の調査は、遺跡の東部から中央部付近にかけて実施しました。調査区の幅が狭く、断片的であることから、遺跡の一部を調査したにすぎませんが、2区の竪穴住居跡からはロームブロックや炭化物、焼土粒子、粘土粒子などを積み重ねた版築状の貼床が検出され、古代の土木技術の一部を垣間見ることができました。

特に2・3区では、平安時代の竪穴住居跡から土器に文字や記号が書かれている墨書き土器が出土しており、当遺跡の性格を知る上で貴重な資料となるでしょう。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所は、かすみがうら市及び石岡市において一般国道6号千代田石岡バイパス（かすみがうら市市川～石岡市東大橋）の道路整備を進めている。

平成10年11月12日、国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般国道6号千代田石岡バイパス新設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照合した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成11年2月8日から3月3日に現地踏査を、平成12年10月12・13日に試掘調査を実施し、姥久保遺跡の所在を確認した。平成12年11月21日、茨城県教育委員会教育長は国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長あてに、事業地内に姥久保遺跡が所在すること、及びその取り扱いについて別途協議が必要である旨を回答した。

平成15年3月10日、国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項（現 第94条）の規定に基づく土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。平成15年3月12日、茨城県教育委員会教育長は現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長あてに、姥久保遺跡について工事着手前に発掘調査を実施するよう通達した。

平成19年1月31日、国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して一般国道6号千代田石岡バイパス（かすみがうら市市川～石岡市東大橋）新設事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成19年2月22日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長あてに、姥久保遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の発掘調査機関として財團法人茨城県教育財團を紹介した。財團法人茨城県教育財團は、国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成19年10月1日から平成20年1月31日まで第1次発掘調査を実施した。

平成20年2月8日、国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に一般国道6号千代田石岡バイパス（かすみがうら市市川～石岡市東大橋）における埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を再度提出した。平成20年2月14日、茨城県教育委員会教育長は国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長あてに、姥久保遺跡について第2次発掘調査の範囲及び面積などについて回答した。また、併せて調査機関として財團法人茨城県教育財團を紹介した。財團法人茨城県教育財團は、国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成20年6月1日から8月31日まで第2次発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

姥久保遺跡の調査経過については、その概要を表で記載する。

平成 19 年度

期間 工程	10月	11月	12月	1月
調査準備 表土除去 遺構確認	■			
遺構調査		■■■■■		■■■■■
遺物洗浄 注記 写真整理		■■■■■		
補足調査 撤収				■

平成 20 年度

期間 工程	6月	7月	8月
調査準備 表土除去 遺構確認	■		
遺構調査		■■■■■	
遺物洗浄 注記 写真整理		■■■■■	
補足調査 撤収			■■

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

姥久保遺跡は、かすみがうら市大字市川字大塚51番地の1ほかに所在している。

当遺跡が所在するかすみがうら市は、茨城県の中央部に位置し、東に霞ヶ浦、西に筑波山系の山々が連なっており、平成17年度に霞ヶ浦町と千代田町の二町が合併して誕生した市である。

当遺跡が立地する新治台地は、筑波山を中心とする筑波山塊の南東山麓から霞ヶ浦にむかって半島状に突出し、当市の北を東流する恋瀬川と土浦市内を流れる桜川によって挟まれた標高20～30mほどの平坦な地形をなしている。また台地縁辺部は、恋瀬川、天の川、雪入川などの小中河川の開析によって浅い谷津が樹枝状に発達しており、沖積低地が広がっている。地層は、未固結の砂を主とした浅海性の貝化石を産する石崎層を基盤として、強内湾性の貝化石を産する見和層、さらに茨城粘土層(0.3～5.0m)及び鹿沼軽石層(0.15m)を挟む関東ローム層(0.5～2.5m)が連続して堆積し、最上部は腐植土である黒色土層である。

かすみがうら市北部の市川地区は、恋瀬川によって開析された谷津が洪積台地に樹枝状に入り込んでおり、台地、低地など起伏に富んだ地形を造出している。当遺跡は、恋瀬川右岸に形成されたやや起伏に富む台地上から恋瀬川流域に広がる河岸段丘上にかけて広がっており、標高は7～24mである。台地上は主に山林や畠地で占められており、低地は水田や宅地として利用されている。調査前の現況は1区が畠地および荒地、2区が宅地、3区は荒地であった。

第2節 歴史的環境

恋瀬川流域の石岡市やかすみがうら市には、多くの遺跡が分布している。ここでは、恋瀬川流域の主な遺跡を中心に、時代ごとに概観する。

恋瀬川流域における旧石器時代は、未だ不明な点が多い。左岸に位置する宮平遺跡では、残核3点が出土しているほか、正月平遺跡や田島遺跡(田島下地区)〈23〉では、ナイフ形石器が出土している¹⁾。近年の開発に伴う発掘調査により、ほかの遺跡からも旧石器時代の遺物が出土しているが、石器製作跡や人々の生活痕跡を示す遺構は、確認されていない。

縄文時代は、恋瀬川流域の台地上に分布する多くの遺跡で確認されている。左岸には、早期の貝塚が確認された高根遺跡〈13〉や田島遺跡(田島下地区)、前期の石器製作跡が確認された田島遺跡(南光院地区・南光院下地区)²⁾〈24〉、中期から後期の集落跡が確認された宮平遺跡がある。右岸には、ハマグリやアサリなどの自然遺物のほか、魚骨や獸骨などが出土した早期の地蔵塚貝塚、中期のラスコ土坑が確認された三村城跡³⁾などがある。

弥生時代の遺跡は、左岸には、後期初頭の土器が出土した駄鬼塚遺跡〈14〉のほか、弥生土器と土師器の共伴が確認されたことで知られる外山遺跡などがある。右岸には、後期の住居跡9軒が確認された松延遺跡〈10〉、同じく後期の住居跡11軒が確認された石岡別所遺跡⁴⁾〈8〉などがある。ほかにも、恋瀬川流域の台地縁辺部には後期に比定される遺構が確認されている。

古墳時代になると、遺跡数は増加する。左岸には、前期と後期の堅穴住居跡が確認された田島遺跡（南光院地区・南光院下地区）や田崎遺跡（27）などがあり、田島遺跡（三面寺地区）⁵⁾（25）では、前期と後期の堅穴住居跡が多く確認されている。右岸にも、前期から後期の松延遺跡、前期の市川遺跡⁶⁾（7）のほか、宮台遺跡（3）、南原A遺跡（4）などがあり、恋瀬川流域の沖積低地に面した台地縁辺部や低地に沿った河岸段丘上に集落が多く立地していることが明らかとなっている。さらに、古墳群も数多く確認されている。方形周溝墓3基と円墳11基、前方後円墳1基からなる後生車遺跡（12）や、円墳7基、方墳2基、前方後円墳1基からなる松延古墳群（11）、円墳6基、前方後円墳3基が確認された別所古墳群（9）など、当遺跡周辺にはいくつかの群集墳が知られている。ほかにも、当遺跡と隣接している県指定史跡の熊野古墳（2）や、恋瀬川対岸に所在する舟塚山古墳（26）を含む舟塚山古墳群も存在している⁷⁾。周知のとおり、舟塚山古墳は東国第2位の規模を誇るもので、常陸国の有力な人物であったとみられる。

奈良時代になると、律令体制が確立していく。常陸国の国府は『和名類聚抄』に「常陸國府。在茨城郡、行程上三十日、下十五日」とあるように、茨城郡に置かれた。石岡市教育委員会は、平成18年の常陸国衙跡⁸⁾（19）第6次発掘調査において東臨殿を確認し、常陸国衙跡内にいくつかの官衙域を形成していたことが明らかとなった。当遺跡から見た恋瀬川対岸は、常陸國分寺跡⁹⁾（17）や常陸國分尼寺跡¹⁰⁾（16）のほか、鹿の子遺跡¹¹⁾（15）、茨城庵寺¹²⁾（20）、茨城郡衙跡（21）なども所在しており、古代常陸国を中心地となっていた。特に鹿の子C遺跡からは、国文書など常陸国の国政の一端を知る貴重な漆紙文書が発見された遺跡として注目されている。

中世になると、武家が台頭して勢力争いが起こり、戦国乱世へ流れていく中、各地に城郭の築造が見られるようになる。石岡市域では、鎌倉時代に常陸国衙において政務を執っていた常陸大掾馬場資幹が外城の地に石岡城（22）を築城した。南北朝時代には、大掾氏と小田氏との間で抗争が激化し、八代詮国は現在の石岡小学校の場所に城を移して府中城跡（18）とした。これにより石岡城は外城として、府中城の出城としての性格を強めた。高野浜城跡や三村城跡などは、この時期に築城された出城跡である。旧千代田町域では、下河辺政義が13世紀に創建したとされている県指定史跡の志筑城跡のほか、市指定史跡の中根長者屋敷（5）などが台地上に所在している。やがて中世末期には、大掾氏や小田氏の抗争が起こり、北から勢力を伸ばしてきた佐竹氏の支配下に入るようになった。

徳川家康が江戸に幕府を開くと、徳川頼隆を藩祖とする府中藩となり、陣屋が置かれた。古来から水運交通に恵まれていた石岡の地は、周辺集落や各地からの物産集散地としての性格を色濃くし、特に酒・醤油など、醸造業を中心とした商人層の活躍が目覚ましかった。また、陸路も発達し、江戸から水戸、さらには東北地方へ延びる浜街道が当遺跡の西を通り、県指定史跡の千代田の一里塚（6）が残されている。

*文中の〈 〉内の番号は、表1、第1図の番号と同じである。なお、本章は財團報告第244集を基にし、若干加筆したものである。

註)

1) 蛭泉達司「田島遺跡（田島下地区）一般国道6号千代田石岡バイパス（かすみがうら市市川～石岡東大橋）事業地内埋蔵文化財調査報告書1」『茨城県教育財团文化財調査報告』第253集 2006年3月

2) 小野政美「田島遺跡（南光院・南光院下地区）一般国道6号千代田石岡バイパス（かすみがうら市市川～石岡東大橋）事業地内埋蔵文化財調査報告書2」『茨城県教育財团文化財調査報告』第287集 2008年3月

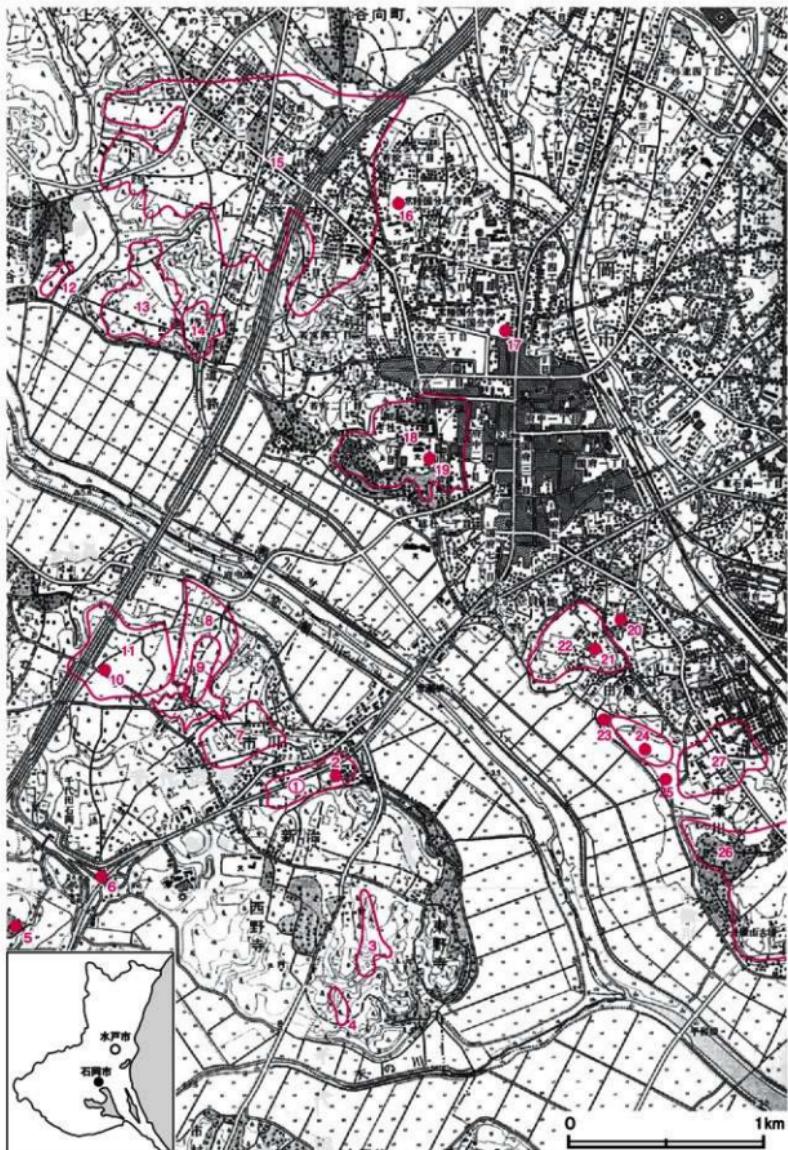
- 3) 栗田功「三村城跡 一般県道飯岡石岡線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」「茨城県教育財団文化財調査報告」第299集 2008年3月
- 4) 後藤孝行「石岡別所遺跡 一般県道石岡つくば線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」「茨城県教育財団文化財調査報告」第244集 2004年3月
- 5) 飯田浩彦「田島遺跡（三面寺地区）一般国道6号千代田石岡バイパス（かすみがうら市市川～石岡東大橋）事業地内埋蔵文化財調査報告書3」「茨城県教育財団文化財調査報告」第311集 2009年3月
- 6) 西宮一男・鈴木幹男「千代田村埋蔵文化財調査報告書（I）市川遺跡・根崎遺跡・清水並木経塚」千代田村教育委員会 1969年2月
- 7) 石岡市文化財関係資料叢書「石岡市の遺跡－歴史の里の発掘100年史」石岡市教育委員会 1995年3月
- 8) 石岡市教育委員会「常陸国御跡」国御城の第6次（西脇殿・推定曹司地区）調査現地説明会資料 石岡市教育委員会 2007年3月
- 9) 安藤敏孝「常陸国分寺発掘調査報告書」石岡市教育委員会 1995年3月
- 10) 安藤敏孝「常陸国分尼寺発掘調査概報」石岡市教育委員会 1996年3月
- 11) 佐藤正好「渡辺後夫「常磐自動車道開通係埋蔵文化財発掘調査報告書4-官部遺跡・鹿の子A遺跡・砂川遺跡」「茨城県教育財団文化財調査報告」X VI 1982年3月
- 佐藤正好・川井正一「常磐自動車道開通係埋蔵文化財調査報告書5 鹿の子C遺跡」「茨城県教育財団文化財調査報告」第20集 1983年3月
- 12) 小笠原好彦・黒澤彰哉「茨城麻寺1」石岡市教育委員会 1980年3月

参考文献

- ・茨城県教育行政文化課「茨城県遺跡地図（地名表編・地図編）」 2001年3月
- ・茨城県史編集委員会「茨城県史 原始古代編」茨城県 1985年3月
- ・千代田村教育委員会「千代田村史」千代田村教育委員会 1970年2月
- ・石岡市編さん委員会「石岡市史」（上巻）石岡市 1990年7月

表1 姥久保遺跡周辺遺跡一覧表

番号		時代						番号		時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世
①	姥久保遺跡			○	○	○	○	15	鹿の子遺跡		○	○	○	○	○	○
2	熊野古墳			○				16	常陸国分尼寺跡					○		
3	宮台遺跡			○	○			17	常陸国分寺跡					○		
4	南原A遺跡			○	○			18	府中城跡					○	○	
5	中根長者屋敷跡	○		○	○			19	常陸国衙跡					○		
6	千代田の一里塚					○		20	茨城廃寺跡					○		
7	市川遺跡			○				21	茨城郡衙跡					○		
8	石岡別所遺跡	○	○	○	○	○		22	石岡城					○	○	
9	別所古墳群			○				23	田島遺跡(田島下地区)	○		○	○	○	○	
10	松延遺跡	○	○	○		○	○	24	田島遺跡(南慈麿・南慈麿下恵)	○		○	○	○	○	
11	松延古墳群			○				25	田島遺跡(三面寺地区)			○	○	○	○	
12	後生車遺跡			○				26	舟塚山古墳			○				
13	高根遺跡	○		○	○		○	27	田崎遺跡	○	○		○			
14	鐵鬼塚遺跡		○													



第1図 姥久保遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000 分の 1 「石岡」「常陸高浜」「柿岡」「常陸藤沢」）



第2図 姫久保遺跡グリッド設定図（かすみがうら市都市計画基本図 2,500 分の1）

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

姥久保遺跡は、恋瀬川右岸の標高約7～24mの河岸段丘下位、上位と台地上に立地している。調査区は便宜上1～3区に分けており、台地上の斜面部を1区、河岸段丘下位を2区、河岸段丘上位を3区と呼称した。調査前の現況は畠地、宅地及び荒地であり、調査面積は4,127m²である。

今回の調査によって、堅穴住居跡72軒（古墳時代2区15・3区2、奈良時代2区5・3区8、平安時代2区22・3区20）、掘立柱建物跡14棟（奈良時代2区6、平安時代2区2・3区6）、柱列跡2列（平安時代3区）、粘土探掘坑1基（平安時代1区）、火葬土坑1基（中世1区）、墓坑1基（中世3区）、柱穴の可能性がある土坑7基（奈良・平安時代各3区）、土坑88基（奈良時代2区2・3区3、平安時代2区3・3区4、時期不明1区2・2区33・3区41）、溝跡10条（奈良時代2区1、平安時代3区1、時期不明1区2・2区3・3区3）、遺物包含層1か所（奈良・平安時代1区）、ピット群4か所（時期不明2区1・3区3）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に78箱出土している。主な出土遺物は、繩文土器（深鉢）、弥生土器（壺）、土師器（坏・椀・高台付椀・高台付皿・蓋・壺・器台・高坏・高盤・鉢・壺・甌・耳皿・ミニチュア）、須恵器（坏・高台付坏・蓋・盤・高盤・鉢・短頭壺・短頭壺蓋・甌・甌・長頭瓶・円面侃・コップ形土器）、灰釉陶器（椀・皿・長頭瓶）、綠釉陶器（椀・皿）、土師質土器（小皿・羽釜・置き甌）、陶器（壺・甌）、土製品（球状土錘・管状土錘・支脚・紡錘車）、石器（ナイフ形石器・砥石）、石製品（紡錘車・双孔円板・鏡形未製品）、金属製品（刀子・鎌・紡錘車・釘）、瓦（平瓦・丸瓦）古錢（永楽通寶）、鐵滓などである。

第2節 基本層序

調査区は南北に長く、地形が起伏に富んでいるため、各区ごとにテストピットを設定して基本土層の観察を行った。1区は、D 125区にテストピット1を設定し、地表面の標高が15.5m、地表面から2mほど掘り下げた。2区は、A 182区にテストピット2を設定し、地表面の標高が7.2m、地表面から2mほど掘り下げた。3区は、C 147区にテストピット3を設定し、地表面の標高が24.0m、地表面から1.5mほど掘り下げた。

各区の土層は、色調・構成粒子・含有物・粘性などから1区が11層、2区が8層、3区が6層に細分でき、1区は第2層上面、2区は第1層上面、3区は第2層上面で遺構を確認した。観察結果は以下のとおりである。

調査1区

第1層は、黒褐色の表土層である。粘性、締まりとともに弱く、層厚は40～50cmである。

第2層は、橙色のハードローム層である。粘性、締まりとともに普通で、層厚は10～20cmである。

第3層は、にぶい橙色のハードローム層である。粘性、締まりとともに強く、層厚は5～10cmである。

第4層は、にぶい橙色のハードローム層から常総粘土層への漸移層で、砂粒・鉄分を少量含んでいる。粘性、締まりとともに強く、層厚は15～20cmである。

第5層は、明黄褐色の常総粘土層で、砂粒・鉄分を少量含んでいる。粘性、締まりともに強く、層厚は20～25cmである。

第6層は、にぶい黄褐色の常総粘土層である。砂粒を少量含んでいる。粘性、締まりともに強く、層厚は25~45cmである。

第7層は、浅褐色の常総粘土層である。砂粒・鉄分を微量含んでいる。粘性、締まりともに極めて強く、層厚は5~10cmである。

第8層は、暗褐色の砂礫層である。粘性は弱く、締まりが強く、層厚は5~20cmである。

第9層は、明黄褐色の砂層である。粘性は弱く、締まりが強く、層厚は5~20cmである。

第10層は、にぶい黄褐色の砂層である。粘性は弱く、締まりが強く、層厚は5~10cmである。

第11層は、にぶい黄色の砂層である。粘性は弱く、締まりが強く、層厚は下層が未掘のため不明である。

調査2区

第1層は、黒褐色の斜面へ流れ込んだ堆積土で、ローム粒子を微量含んでいる。層厚は6~12cmである。

第2層は、暗褐色の斜面へ流れ込んだ堆積土で、ロームブロックを微量含んでいる。締まりが強く、層厚は28~44cmである。

第3層は、オリーブ褐色の粘土層への漸移層で、粘土粒子を多量、黒色粒子（鉄分）を微量含んでいる。粘性、締まりともに強く、層厚は4~34cmである。

第4層は、灰黄色の粘土層である。粘性、締まりともに強く、層厚は7~32cmである。

第5層は、暗灰黄色の粘土層で、砂粒を少量含んでいる。締まりが強く、層厚は6~20cmである。

第6層は、黄褐色の砂層で、礫を微量含んでいる。粘性は弱く、締まりが強く、層厚は6~25cmである。

第7層は、オリーブ褐色の砂礫層である。粘性は弱く、締まりが強く、層厚は10~30cmである。

第8層は、にぶい黄色の砂礫層である。粘性は弱く、締まりは強い。層厚は下層が未掘のため不明である。

調査3区

第1層は、暗褐色の耕作土で、ローム粒子を少量含んでいる。層厚は24~34cmである。

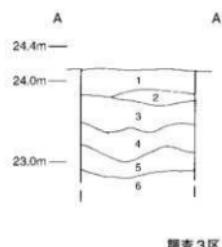
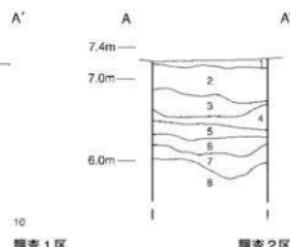
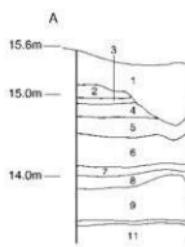
第2層は、褐色のハードローム層である。締まりが強く、層厚は6~18cmである。

第3層は、褐色のハードローム層である。粘性、締まりともに強く、層厚は24~42cmである。

第4層は、第3層よりやや暗い褐色のハードローム層である。粘性、締まりともに強く、層厚は22~42cmである。

第5層は、褐色のハードローム層である。粘性、締まりが強く、層厚は6~20cmである。

第6層は、褐色のハードローム層である。鹿沼バミスブロックを少量含んでいる。粘性、締まりともに強く、層厚は下層が未掘のため不明である。



第3図 基本土層図

第3節 1区の遺構と遺物

1 平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、粘土探掘坑1基、遺物包含層1か所を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 粘土探掘坑

第1号粘土探掘坑（第4図）

位置 調査1区東部のD 12e7区、標高155mの台地上の斜面部に位置している。

重複関係 第1号遺物包含層を掘り込み、第10号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北東部及び北西部が調査区域外に延びているため、規模は長軸250mで、短軸は0.90mしか確認できなかった。形状及び軸方向は不明である。深さは90cmで、底面には凹凸があり、壁はオーバーハングしながら立ち上がっており、底面には凹凸があり、壁はオーバーハングしながら立ち上がっている。

覆土 16層に分層できる。粘土ブロックや砂粒を含み、不規則な堆積状況から埋め戻されている。

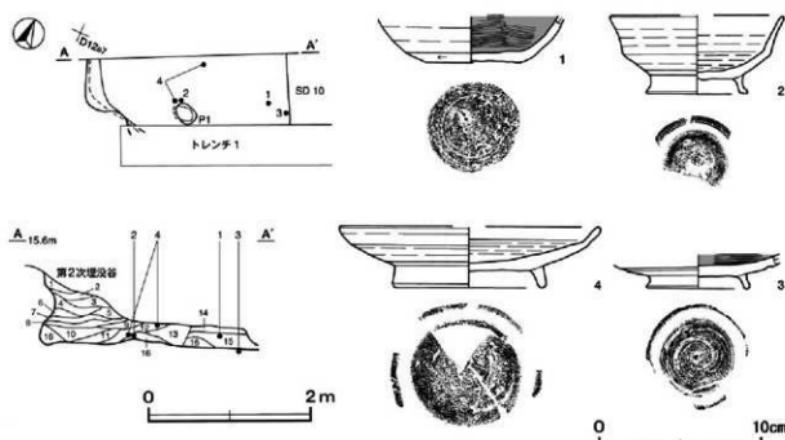
土層解説

1	灰	褐	色	砂粒中量	燒土粒子微量	9	黑	褐	色	粘土ブロック・砂粒少量
2	黒		色	砂粒少量	燒土粒子微量	10	にふい	黄褐色	色	粘土ブロック・砂粒微量
3	灰	褐	色	砂粒少量	燒土粒子微量	11	黒		色	粘土ブロック中量、砂粒少量
4	褐		色	砂粒中量		12	にふい	黄褐色	色	粘土ブロック多量
5	褐	灰	色	砂粒中量		13	黒	褐	色	粘土ブロック中量、砂粒少量
6	灰	褐	色	砂粒少量		14	褐		色	砂粒中量、粘土ブロック少量
7	黒	褐	色	砂粒中量		15	黒	褐	色	燒土粒子・炭化粒子・砂粒微量
8	暗	褐	色	砂粒中量		16	暗	褐	色	粘土ブロック・砂粒中量

遺物出土状況 土師器片28点（坏6・高台付皿1・壺類21）、須恵器片54点（坏4・高台付坏3・盤1・蓋2・壺類44）が出土している。3は底面、1・2・4は覆土下層から出土している。

所見 壁はオーバーハングして立ち上がっており、粘土層まで掘り込んでいることから粘土探掘坑ととらえた。

時期は、出土土器や重複関係から9世紀後葉に比定できる。



第4図 第1号粘土探掘坑・出土遺物実測図

第1号粘土探査坑出土遺物観察表（第4図）

番号	種別	部種	口径	高さ	形状	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土器	环	-	(2.9)	5.6	長石・石英・漂母・ 白色粒子	にふい黄橙	普通	底部下端回転ヘラ削り 内面横筋のヘラ削り 底部回転ヘラ削り	覆土下端	30% Pl. 4
2	瓶型器	高台付環	[10.8]	4.8	[6.2]	長石・石英・ 白色斜状物	灰黄	良好	底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け	覆土下端	30% Pl. 4
3	土器	高台付瓶	-	(2.1)	6.2	長石・石英・漂母・ 水色粒子・白色斜状物	棕	普通	内部横筋のヘラ削り 底部回転ヘラ削り後、 高台貼り付け	底面	30%
4	瓶型器	瓶	[D6.0]	3.7	9.2	長石・石英・漂母	にふい棕	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	覆土下端	60% Pl. 4

(2) 遺物包含層

第1号遺物包含層（第5～7・15図）

位置 調査1区北東部から南西部のD 12d9～E 11d4区、標高125～145mの台地上の斜面部に位置している。

調査方法 黒色系の土で埋まつた埋没谷が確認できたため、トレントを設定し、埋没土の堆積状況及び遺物の包含状況の調査を行つた。

重複関係 第1号粘土探査坑、第1号火葬土坑、第10号溝に掘り込まれてゐる。

規模と形状 地形的には、北東方向から南西方向に入り込んだ谷津と、その谷津から北方向へ派生した小谷津に面している。東側及び南側が調査区域外に延びているため、南北方向15m、東西方向62mしか確認できなかつた。

土層 遺物を包含している層は、トレント1では4層、トレント2・3・4では6層にそれぞれ分層できる。いずれのトレントも、傾斜面から流入し、現在の地表面から約2.0～1.0m下にかけて自然堆積した土を基本としている。

トレント1土層解説

第2次埋没谷埋没土（表土下層）

1	黒	褐	色	土器粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量	11	黒	褐	色	砂粒中量、燒土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
2	暗	褐	色	ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量、燒土粒子微量	12	黒	褐	色	砂粒多量、ロームブロック・燒土ブロック少量、
3	黒	褐	色	砂粒中量、ローム粒子少量、燒土粒子微量	13	暗	褐	色	炭化粒子微量
4	黒	褐	色	燒土ブロック・砂粒少量、炭化物・ローム粒子微量	14	黒	褐	色	ローム粒子・燒土粒子・砂粒微量
5	黒	褐	色	ローム粒子・燒土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量					
6	褐	褐	色	砂粒少量、ローム粒子・燒土粒子微量					
7	暗	褐	色	ローム粒子・砂粒少量、燒土粒子微量					
8	黒	褐	色	砂粒中量、ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量					
9	黒	褐	色	砂粒少量、ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量					
10	暗	褐	色	ロームブロック・燒土ブロック・炭化粒子少量、砂粒微量					

トレント2土層解説

第2次埋没谷埋没土（表土下層）

1	黒	褐	色	燒土ブロック・炭化物・砂粒少量
2	暗	褐	色	燒土粒子・炭化粒子・砂粒微量
3	黒	褐	色	ローム粒子・燒土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量
4	褐	褐	色	砂粒少量、ローム粒子・燒土粒子微量
5	黒	褐	色	燒土ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量
6	暗	褐	色	ロームブロック・燒土ブロック・炭化粒子少量、砂粒微量
7	黒	褐	色	ローム粒子・燒土粒子・砂粒微量

トレント3土層解説

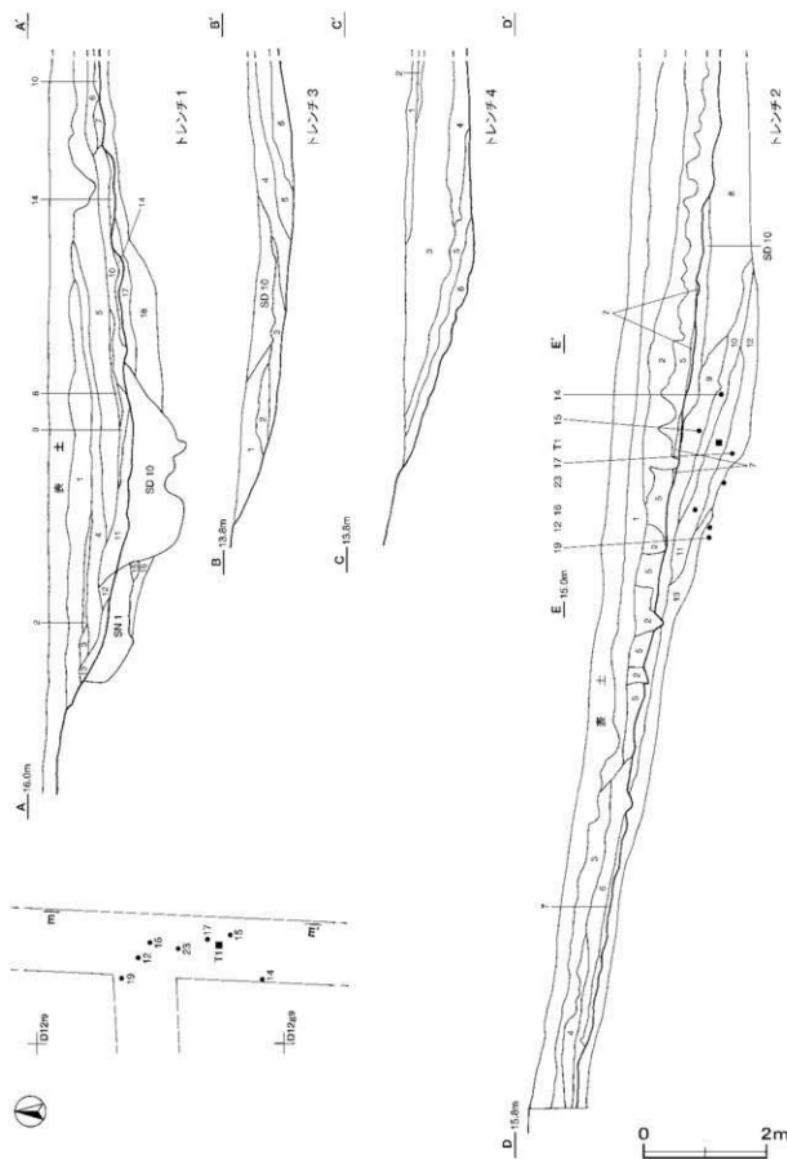
第1次埋没谷埋没土（第1号遺物包含層）

1	にふい黄褐色	砂粒中量、燒土粒子少量、炭化粒子微量		
2	黒	褐	色	燒土粒子・炭化粒子・砂粒少量
3	にふい黄褐色	砂粒中量、燒土粒子・炭化粒子微量		

トレント4土層解説

第1次埋没谷埋没土（第1号遺物包含層）

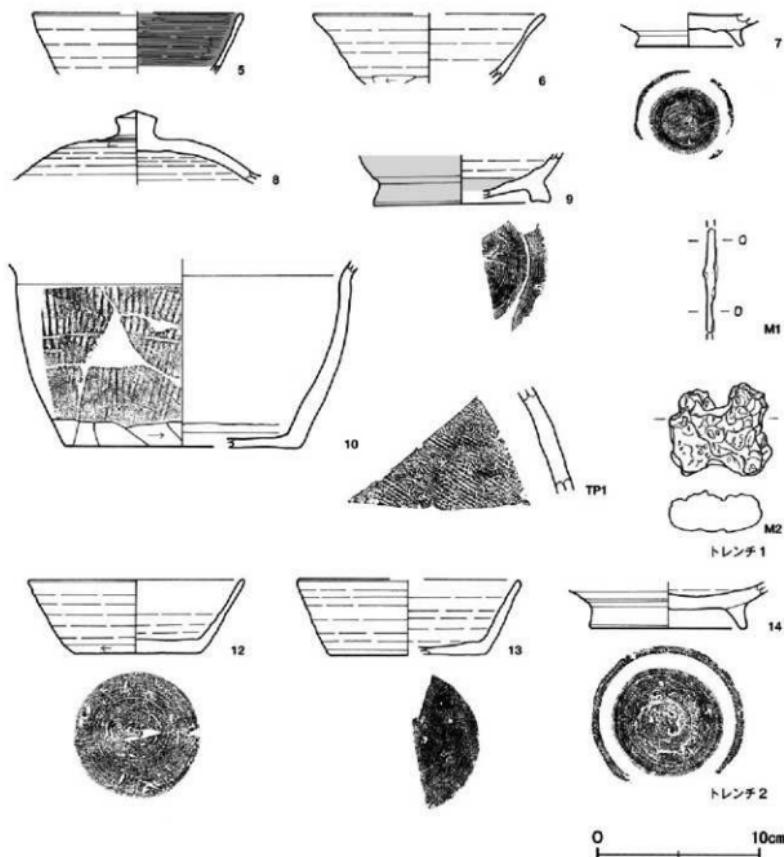
1	明	黄	褐	ローム粒子多量、砂粒微量	4	黒	褐	色	砂粒少量、燒土粒子・炭化粒子微量
2	暗	黄	褐	燒土粒子・炭化粒子・砂粒微量	5	灰	黄	褐	燒土ブロック・炭化粒子・砂粒微量
3	褐	褐	色	砂粒少量、燒土粒子・炭化粒子微量	6	黒	褐	色	ローム粒子・砂粒微量



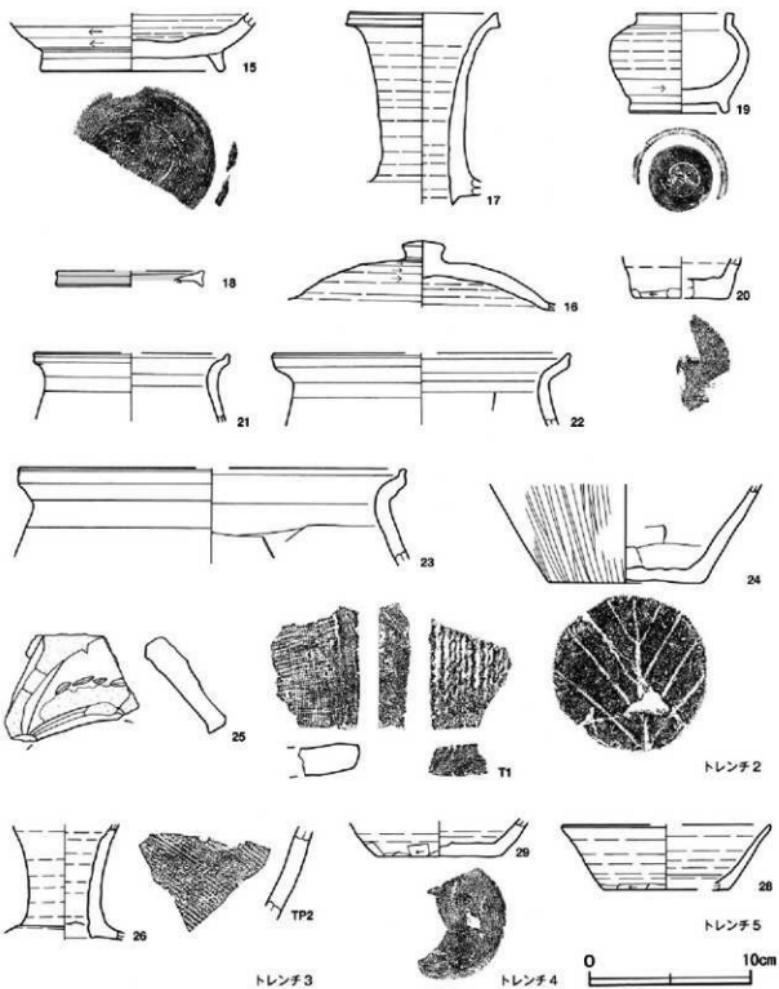
第5図 第1号遺物包含層実測図

遺物出土状況 土師器片 763 点（坏 142・高台付椀 33・蓋 1・高坏 2・壺類 583・瓶 1）土師質土器片 1 点（置き甌）、須恵器片 1072 点（坏 308・高台付坏 103・盤 1・蓋 90・高盤 9・長頸瓶 4・小形短頸壺 1・壺類 18・鉢形壺 1・壺類 535・瓶 2）、灰釉陶器片 26 点（碗 4・長頸瓶 7・壺類 15）、瓦片 3 点（平瓦）、鐵製品 1 点（鎌）、鐵滓 1 点が出土している。遺物の出土量はトレンチ 1・2・3 が多いことから、北方向へ派生した小谷津のはうが濃密に遺物を包含しており、北東方向から南西方向に入り込んだ谷津のはうが希薄となっている。

所見 本包含層は、北東方向から南西方向に入り込んだ谷津と、その谷津から北方向へ派生した小谷津に面している。その北東側の河岸段丘上位には、奈良時代や平安時代の集落跡が存在していることから、出土した遺物は周辺の集落から投棄されたものや、流れ込んだものと推測できる。本包含層の形成時期は、出土土器から 8 世紀から 9 世紀にかけてと考えられる。



第 6 図 第 1 号遺物包含層出土遺物実測図（1）



第7図 第1号遺物包含層出土遺物実測図（2）

第1号遺物包含層出土遺物観察表（第6～7図）

番号	種別	部種	口径	厚さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
5	土罐器	环	[12.8] (3.7)	-	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	に赤い斑紋	普通	内面模様のへら書き	トレンチ1	20%
6	黑漆器	环	[14.0] (4.3)	-	-	長石・石英・雲母	灰	良好	全体下端手持ちへり削り	トレンチ1	20%
7	土罐器	高台付楕	-	(2.0)	6.6	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	棕	普通	内面模様のへら書き 底部ナデ痕、高台貼り 付け	トレンチ1	30%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
8	灰窓器	壺	-	(4.4)	-	長石・石英	灰	良好	天井部回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け	レンチ1 PL.4	30% PL.4
9	灰釉陶器	長頭瓶	-	(3.0)	[10.8]	織密	輪廓灰黄 胎土灰白	良好	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け 外・内 底面施釉	レンチ1 PL.4	10% PL.4
10	灰窓器	鉢	-	(11.5)	[D4.4]	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	輪灰黄	普通	体部回旋の平行叩き、下端回転のヘラ削り	レンチ1 PL.5	20%
12	灰窓器	环	13.2	4.5	8.0	長石・石英	オリーブ灰	良好	底部下端回転ヘラ削り	レンチ2 PL.4	40%
13	灰窓器	环	[13.6]	4.6	[9.4]	長石・石英・ 白色針状物	灰	良好	底部下端無調整、底部回転ヘラ削り	レンチ2 PL.4	40%
14	灰窓器	高台付杯	-	(2.8)	9.4	長石・石英・雲母	灰白	良好	底部下端貼り付け	レンチ2 PL.4	40%
15	灰窓器	高台付杯	-	(3.6)	[11.2]	長石・石英・雲母	輪灰	良好	底部下端回転ヘラ削り、底部回転ヘラ削り	レンチ2 PL.4	30%
16	灰窓器	壺	-	(4.1)	-	長石・石英・ 白色針状物	輪灰	良好	底部下端無調整	レンチ2 PL.4	90%
17	灰窓器	長頭瓶	9.0	(11.8)	-	長石・石英	輪黄褐 胎土灰白	良好	底部回転ヘラ削り	レンチ2 PL.5	30%
18	灰釉陶器	長頭瓶	[9.0]	(9.9)	-	織密	輪黄褐 胎土灰白	良好	外・内面施釉	レンチ2 PL.5	5%
19	灰窓器	小形短頭壺	6.0	6.0	6.0	長石・石英	灰	良好	底部下端回転ヘラ削り	レンチ2 PL.4	95%
20	灰窓器	壺	-	(2.6)	[5.8]	長石・石英	灰	良好	底部下端手持ちヘラ削り	レンチ2 PL.4	10%
21	土師器	壺	[12.0]	(4.2)	-	長石・石英・ 赤色粒子	灰	普通	口縁部横ナデ	レンチ2 PL.5	5%
22	土師器	壺	[18.2]	(4.0)	-	長石・石英・ 赤色粒子	[にふい]中間	普通	口縫部横ナデ 体部内面ヘラナデ	レンチ2 PL.5	5%
23	土師器	壺	[23.8]	(5.9)	-	長石・石英・雲母	[にふい]粗	普通	口縫部横ナデ 体部内面ヘラナデ	レンチ2 PL.5	5%
24	土師器	壺	-	(6.1)	9.6	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	[にふい]黄褐	普通	体部下端回転のヘラ削り 内面ヘラナデ 灰 胎土無着	レンチ2 PL.5	10%
25	土師質土器	置き壺	-	(6.7)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	[にふい]黄褐	普通	外・内面ヘラナデ	レンチ2 PL.5	5%
26	灰窓器	長頭瓶	-	(7.1)	-	長石・石英・ 白色針状物	灰褐	良好	クロコナデ	レンチ3 PL.5	30%
28	灰窓器	环	[12.8]	4.0	[7.8]	長石・石英・雲母	黑	普通	底部下端手持ちヘラ削り、底部手持ちヘラ削 り	レンチ4 PL.5	10%
29	灰窓器	环	-	(2.3)	7.6	長石・石英	灰	良好	底部下端手持ちヘラ削り	レンチ4 PL.5	20%
TP 1	灰窓器	壺	-	(6.5)	-	長石・石英	灰	良好	体部内円叩きと斜傾の平行叩き 内面ナデ	レンチ1 PL.6	
TP 2	灰窓器	壺	-	(5.6)	-	長石・石英	灰	良好	体部内円叩きと斜傾の平行叩き 内面ナデ	レンチ2 PL.6	

番号	種別	長 S	幅	厚 S	重量	材質	手法の特徴ほか	出土位置	備考
M 1	罐	(6.4)	0.4	0.5	(10.4)	鐵	侧面四角形 肩身部欠損	レンチ1	
M 2	鉄滓	5.7	6.3	2.6	75.8	鐵	楕球形	レンチ1	
T 1	平瓦	(7.5)	(5.6)	2.0	(122.6)	長石・石英・雲母	凹面布目 凸面刻印叩き	レンチ2 PL.5	

2 中世の遺構と遺物

当時代の遺構は、火葬土坑1基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

火葬土坑

火葬土坑は、空気を取り込む坑を「開口部」、遺骨の火葬した坑を「燃焼部」。通気調整を行うために開口部底面から燃焼部底面を掘り込んだとみられる溝を「通気溝」に分けた。軸については、開口部から通気溝を通り燃焼部の長軸（径）の中心を結ぶ線とした。

第1号火葬土坑（第8図）

位置 調査1区東部のD 12e9区、標高14.0mの台地上の斜面部に位置している。

重複関係 第1号遺物包含層を掘り込んでいる。

形状 軸長0.85mで、軸方向N - 83° - EのT字形を呈している。

燃焼部 燃焼部は長径1.32m、短径0.54mの椭円形である。深さは25cmで、底面はほぼ平坦である。通気溝は長さ0.34m、上幅0.40m、下幅0.20mで、深さは20cmである。燃焼部の底面及び壁面は赤変硬化している。

覆土 4層に分層できる。焼土や炭化物を多く含んでいることから埋め戻されている。第3層中から火葬骨片

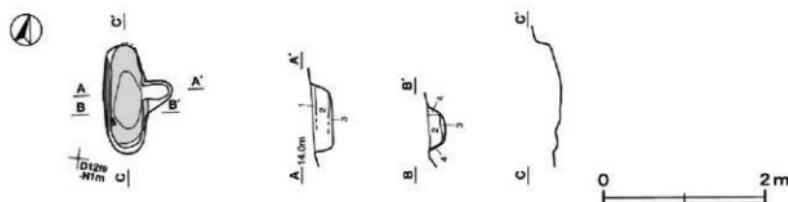
を確認した。

土層解説

- | | |
|-------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色 烧土粒子・炭化粒子微量 | 3 褐褐色 炭化物中量、焼土ブロック・骨片少量 |
| 2 黒褐色 炭化物・焼土粒子微量 | 4 橙褐色 烧土粒子多量 |

遺物出土状況 混入した土器器片 23 点（坏 3・甕類 20）、須恵器片 22 点（坏 5・甕類 17）が覆土中から出土している。

所見 本跡に伴う遺物は出土していないが、時期は、遺構の形態から中世と考えられる。



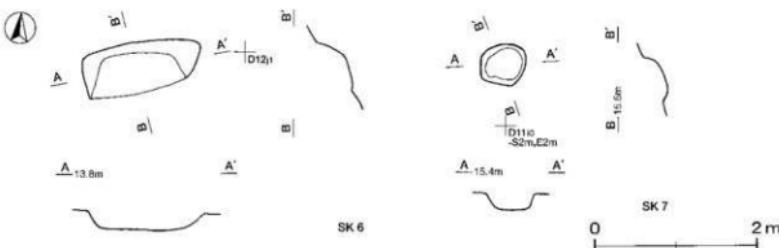
第8図 第1号火葬土坑実測図

3 その他の遺構と遺物

近世以降及び時期不明の遺構は、土坑 2 基、溝跡 2 条を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 土坑（第9図）

今回の調査では、土坑と思われる遺構に第 1・5~7 号まで番号を付けて調査したが、平安時代の粘土探掘坑及び中世の火葬土坑については、項を設けて前述した。その他の土坑については、図示できるような出土遺物がなく、時期や性格も不明であるため、実測図及び一覧表で掲載する。



第9図 その他の土坑実測図

表2 その他の土坑一覧表

番号	位 置	長径・幅方向	平面形	規 模 (m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備 考
				長軸(径) × 短軸(径)	深さ(cm)					
6	D110	N - 28° - E [長方形]	長方形	1.50 × (0.64)	24	緩斜	平坦	自然	土器器・須恵器	重複関係(古→新)
7	D110	-	円形	0.54 × 0.50	20	緩斜	盤状	自然	土器器・須恵器	

(2) 溝跡

第1号溝跡 (第10・11・15図)

位置 調査1区東部のD 12e5～D 12h5区、標高13.5～15.0mの台地傾斜面に位置している。

重複関係 第1号遺物包含層を掘り込んでいる。

規模と形状 北から南方向に走り、第1号遺物包含層の上端付近で右へカーブを描きながら南西へ延びている。北側が調査区域外に延びているため、確認できた長さは12.50mである。コーナーを挟み、走行方向は北～南溝がN-163°-E、北東～南西溝がN-127°-Wである。上幅1.20～2.20m、下幅0.40～0.80m、深さは40～70cmである。断面形状はU字状で、両壁は緩やかに立ち上がっている。

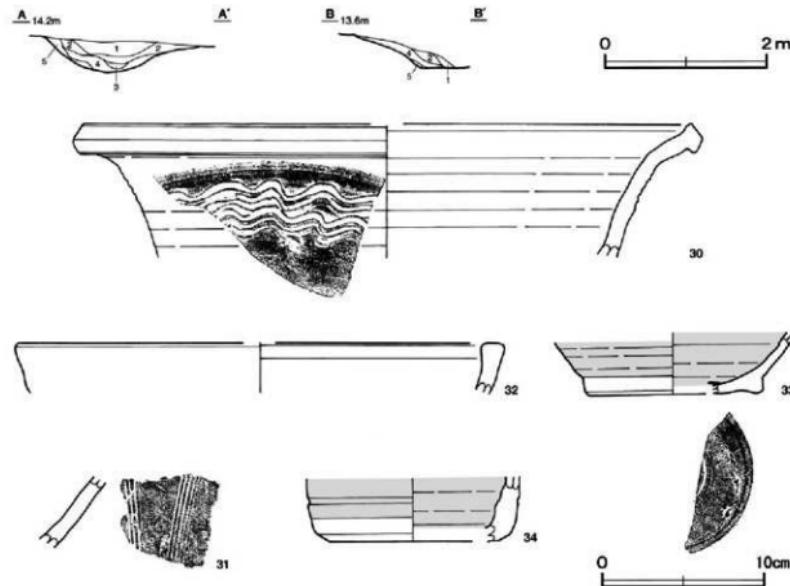
覆土 5層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1	にふい・黄褐色	砂粒少量、粘土ブロック・燧土粒子・炭化粒子微量	4	暗褐色	砂粒微量
2	灰褐色	砂粒少量、粘土ブロック微量	5	褐色	砂粒微量
3	にふい・黄褐色	砂粒中量			

遺物出土状況 覆土中から土師質土器片4点(皿1・擂鉢1・内耳鍋2)、陶器片4点(鉢1・水指1・壺2)、瓦片2点(平瓦)が出土している。そのほかにも、混入あるいは流入したものと思われる縄文土器片1点、土師器片48点、須恵器片39点が出土している。

所見 本跡は、等高線と直交するように掘り込まれた区画溝と思われる。時期は出土遺物や重複関係から中世後半から近世前半と考えられる。



第10図 第1号溝跡・出土遺物実測図



第11図 第1号溝跡出土遺物実測図

第1号溝跡出土遺物観察表（第10・11図）

番号	種別	器種	口径	形高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
30	陶器	甕	[37.6]	(8.1)	-	長石・石英	オリーブ黒	良好	口縁部外面輪郭直状文を施文	中央部覆土中	5%
31	土師質土器	鉢	-	(4.4)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	に赤い粒	普通	体部内面5条一單位の接目	中央部覆土中	5%
32	土師質土器	内凹鉢	[29.8]	(3.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナメ	南部覆土中	5%
33	陶器	鉢	-	(3.7)	[10.4]	緻密	釉・暗赤褐色	良好	側面・底面高台取り出し 外・内面に鉄袖を施す 内底面下サイン板	北部覆土中	5%
34	陶器	水指	-	(3.9)	[10.4]	緻密	釉・暗褐色	良好	側面・底面高台取り出し 外・内面に鉄袖を施す 体部外下面下端 泥鰌	中央部覆土中	5%
35	陶器	甕	-	(5.5)	-	長石・石英	灰黄	良好	普通 体部外面格子叩き	中央部覆土中	5%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	手法の特徴ほか	出土位置	備考
T2	平瓦	(7.3)	(8.0)	1.7	(90.8)	長石・石英・雲母	門・凸面ナメ	北部覆土中	

第10号溝跡（第12・15図）

位置 調査1区東部のD 12d7-D 12g9区、標高125～145mにかけての台地上の斜面部に位置している。

調査方法 埋没谷調査のため、5本のトレンチ（トレンチ1～5）を設定した。本跡は、その内の3本のトレンチ（トレンチ1・2・3）内の土層観察面において、確認できたものである。

重複関係 第1号粘土探掘坑、第1次埋没谷（第1号遺物包含層）を掘り込んでいる。また、本跡の覆土上面に、第2次埋没谷の埋没土（表土下層）が堆積している。

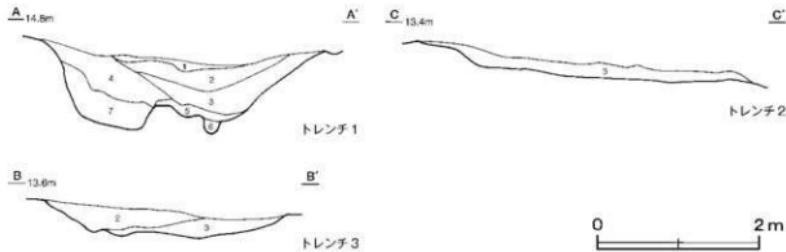
規模と形状 トレンチ1・2・3内の土層観察面での確認、及び北西側及び南東側が調査区域外に延びている。確認した長さ12.00m、走行方向はN-158°-Eで、D 12g9区で南北方向にやや屈曲して調査区域外に至っている。規模はトレンチ1が上幅3.50m、下幅0.80～1.20m、深さ100cmで、トレンチ3は上幅3.00m、下幅1.30m、深さ40cmである。断面形は逆台形で、壁は外傾して立ち上がっていることから、箱蓋研状の溝と推測できる。トレンチ1では、溝の掘り直しが確認でき、掘り直された新しい溝の底面には、径20cm、深さ14cmのピットが掘り込まれている。

覆土 トレンチ1では7層、トレンチ2では1層、トレンチ3では2層に分層できる。ロームブロックや焼土ブロック、砂粒を含み、不規則な堆積状況から埋め戻されている。

土層解説（A-A'・B-B'・C-C'共通）

1 黒褐	色	砂粒多量、ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	4 黒褐	色	ロームブロック・焼土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量
		炭化粒子微量	5 黑	褐	色 砂粒少量
2 黒褐	色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量	6 灰黄	褐	色 砂粒多量
3 灰褐	色	焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量、ローム粒子微量	7 黑褐	色	ロームブロック・砂粒少量

所見 本跡は、等高線と直交するように掘り込まれた区画溝とみられる。重複関係から平安時代以降であることは明確であるが、本跡に伴う遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。



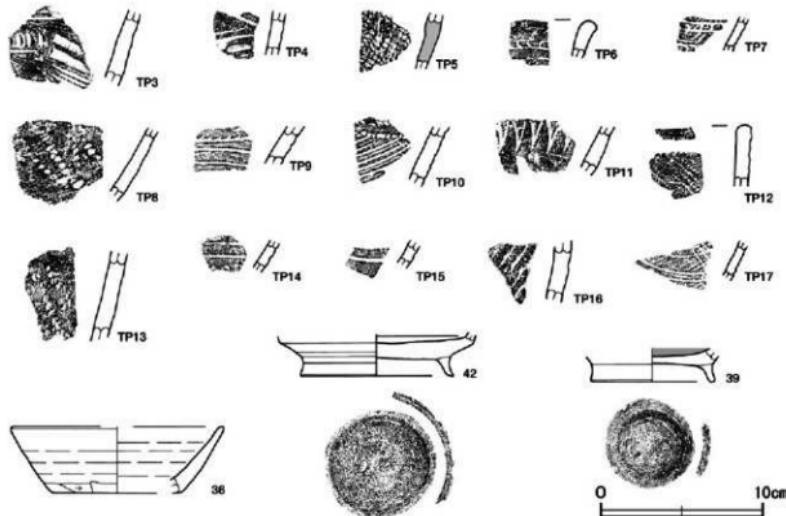
第12図 第10号溝跡実測図

表3 その他の溝跡一覧表

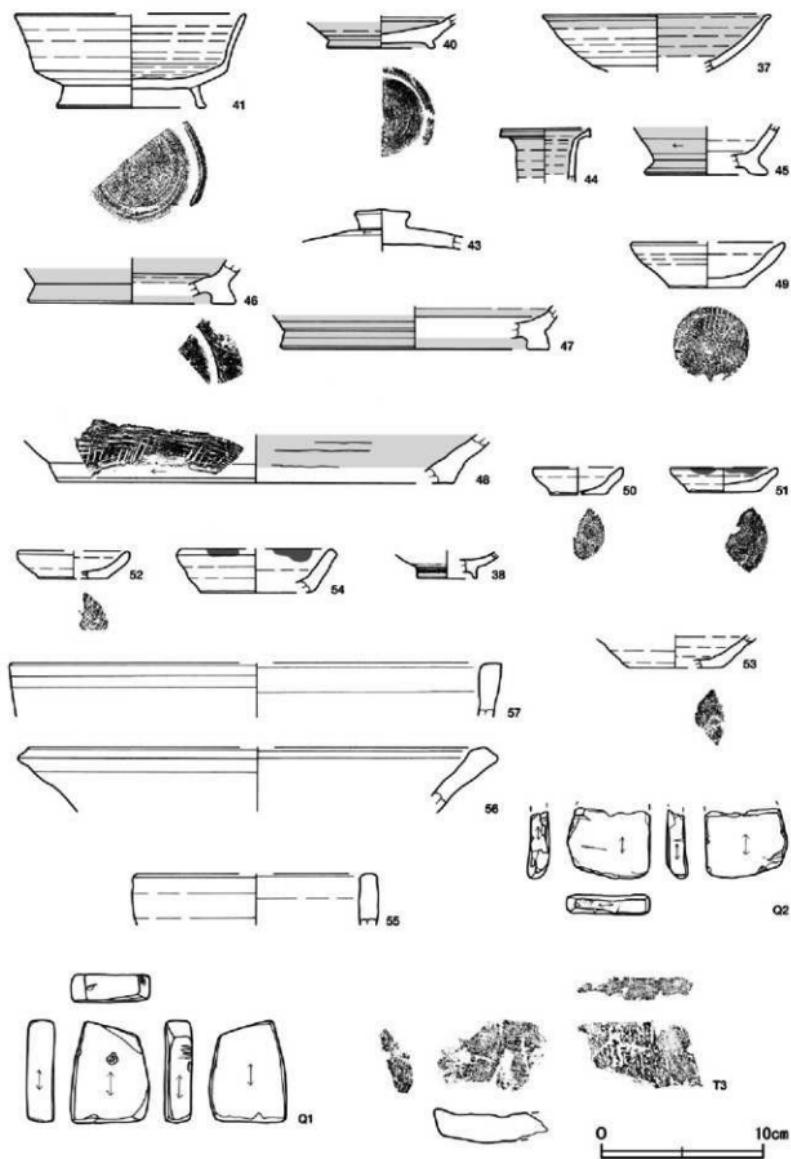
番号	性 質	方向	形狀	規 模 (m. 深さはcm)			断面形	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備 考 重複関係 (古→新)
				長さ	上幅	下幅						
1	D12e5 ~	N - 163° - E	曲輪状	(12.50)	1.20 - 2.20	0.30 - 0.80	22 - 50	U字形	傾斜	U字	自然	土師質土器・陶器、 K.
	D12e5	N - 127° - W										
10	D12d7 ~	-	(12.00)	3.00 - 3.50	0.80 - 1.30	40 - 100	逆台形	斜傾	凹凸	人為	HGL, SN1 → 本跡	
	D12e9	N - 158° - E										

(3) 遺構外出土遺物 (第13・14図)

今回の調査で、表土層等から遺構に伴わない遺物が出土している。ここでは、土器（縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・土師質土器）、磁器、瓦（平瓦）、石器（砥石）など、特徴的な遺物について実測図及び遺物観察表を掲載する。



第13図 遺構外遺物出土実測図 (1)



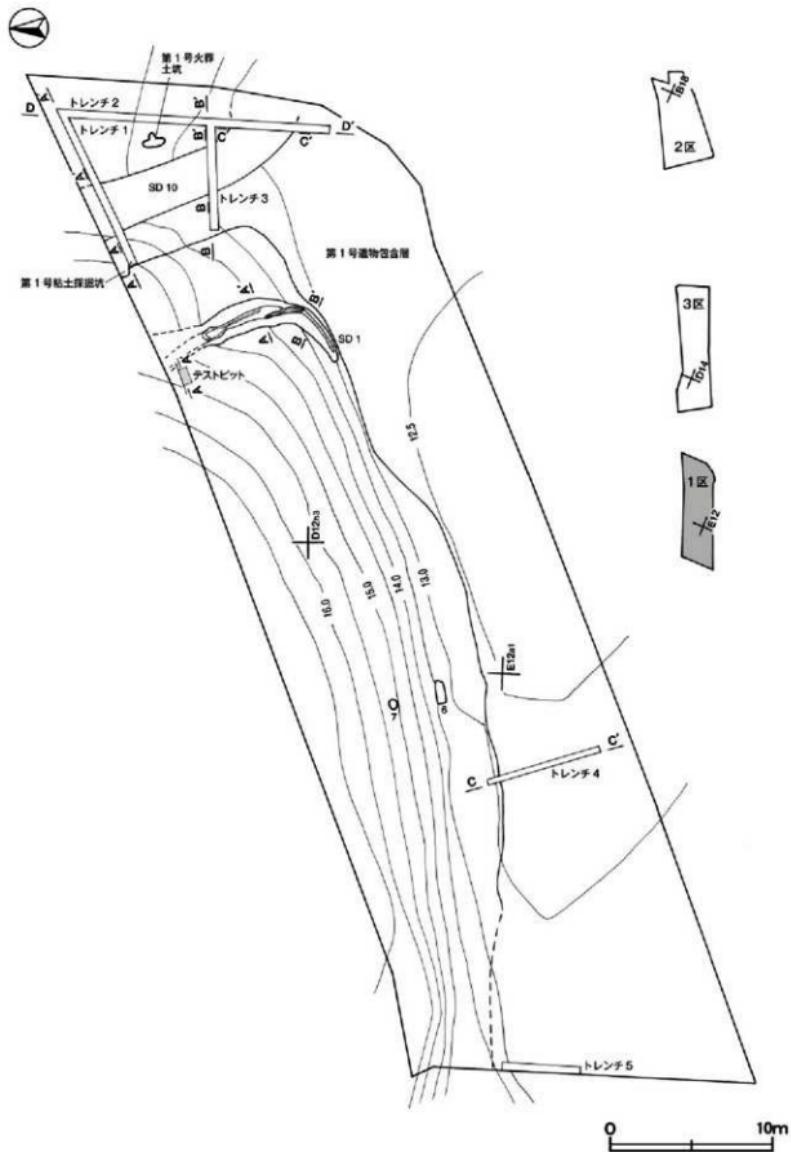
第14図 遺構外遺物出土実測図（2）

遺構外出土遺物観察表（第13・14図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様	手法	特徴	ほか	出土位置	備考
36	灰陶器	环	[13.0]	4.1	[8.0]	長石・石英	灰	良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部手持ちヘラ削り	D12区表土	10%			
37	灰陶陶器	碗	[14.0]	(3.5)	-	緻密	にい・黄橙 胎土 にい・黄橙	良好	体部下端回転ヘラ削り 口縁部外・内面施釉	E11区表土	10%			
39	土師器	高台付碗	-	(2.6)	[7.4]	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	明黄褐	普通	底部回転ヘラ削り後 高台貼り付け	D12区表土	20%			
41	灰陶器	高台付环	[14.2]	5.7	[9.0]	長石・石英・ 白色粉状物	灰	良好	底部回転ヘラ削り後 高台貼り付け	E11区表土	40% PL 5			
42	灰陶器	高台付环	-	(2.7)	[9.4]	長石・石英	灰	良好	底部回転ヘラ削り後 高台貼り付け	E11区表土	40%			
43	灰陶器	罐	-	(2.6)	-	長石・石英	灰	良好	卉丹部回転ヘラ削り	D12区表土	10%			
44	灰陶陶器	段皿	-	(2.1)	[8.6]	緻密	種々黄 赤土色 胎土	良好	底部回転ヘラ削り後 高台貼り付け 外・内面 施釉	E11区表土	20% PL 5			
45	灰陶陶器	長皿敷	[5.4]	(3.3)	-	緻密	灰	良好	外・内面施釉	D12区表土	5%			
46	灰陶陶器	長皿	-	(3.1)	[7.4]	緻密	良	体部下端回転ヘラ削り 同底高台貼り付け 外 面施釉	D12区表土	5%				
47	灰陶陶器	短颈瓶	-	(2.8)	[12.8]	緻密	種々黄 赤土色 胎土 にい・黄橙	良好	底部高台貼り付け 外面施釉	D12区表土	5%			
48	灰陶陶器	短颈瓶	-	(2.7)	[10.4]	緻密	灰	良好	底部高台貼り付け	E11区表土	5%			
49	土師質土器	小瓶	[9.4]	2.8	4.6	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にい・黄橙	良好	体部斜削の平行引目 下端ヘラ削り 内面ヘラ ナダ	E11区表土	5%			
50	土師質土器	小瓶	[5.4]	1.7	[3.4]	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にい・黄橙	普通	底部回転糸切り	E11区表土	30%			
51	土師質土器	小瓶	[6.6]	1.5	[4.4]	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にい・黄橙	良好	底部回転糸切り 外縁部・内面油焼付着	E11区表土	30%			
52	土師質土器	小瓶	[6.8]	1.7	[4.2]	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	灰	普通	底部回転糸切り	E11区表土	20%			
53	土師質土器	罐	-	(2.0)	[5.8]	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	灰	普通	底部回転糸切り	E11区表土	10%			
54	土師質土器	小瓶	[9.2]	2.7	[6.8]	長石・石英・ 赤色粒子	明黄褐	普通	口縁部外・内面油焼付着	E11区表土	10%			
55	土師質土器	茶釜	[14.6]	(3.2)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	普通	口縁部外・内面クロナダ	H G 1 トレンチ6	5%				
56	土師質土器	罐	[28.2]	(4.0)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にい・黄	普通	口縁部外・内面横ナダ	H G 1 トレンチ7	5%			
57	土師質土器	内耳罐	[30.0]	(3.3)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にい・黄	普通	口縁部外側2条の横ナダ 内面横ナダ	H G 1 トレンチ5	5%			
58	罐	碗	-	(1.7)	[3.6]	緻密	灰白	良好	体部下端・高台削り・高台内に1条の発射孔 がる	H G 1 トレンチ7	5%			
TP 3	礎文土器	深鉢	-	(4.5)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にい・黄橙	普通	脚部直線的沈文を施文	H G 1 トレンチ2	PL 6			
TP 4	礎文土器	深鉢	-	(2.8)	-	長石・石英・ 鐵鏽	灰	普通	脚部直線的沈文を施文	H G 1 トレンチ2	PL 6			
TP 5	礎文土器	深鉢	-	(3.5)	-	長石・石英・雲母・ 鐵鏽	にい・黄橙	普通	脚部單面沈文記しを施文	H G 1 トレンチ2	PL 6			
TP 6	礎文土器	深鉢	-	(2.3)	-	長石・石英	にい・黄	普通	口縁部平行沈文・底形文を施文	H G 1 トレンチ2	PL 6			
TP 7	礎文土器	深鉢	-	(2.3)	-	長石・石英	にい・黄	普通	脚部平行沈文・底形文を施文	H G 1 トレンチ2	PL 6			
TP 8	礎文土器	深鉢	-	(4.4)	-	長石・石英・ 赤色粒子	明黄	普通	脚部具沿縫文・底形文を施文	H G 1 トレンチ2	PL 6			
TP 9	礎文土器	深鉢	-	(2.5)	-	長石・石英・ 赤色粒子	明黄	普通	脚部沿縫文・変形底形文を施文	H G 1 トレンチ2	PL 6			
TP10	礎文土器	深鉢	-	(3.8)	-	長石・石英・ 赤色粒子	明黄	普通	脚部沿縫文底形文を施文	表土	前期水平 PL 6			
TP11	礎文土器	深鉢	-	(2.6)	-	長石・石英・ 赤色粒子	灰	普通	脚部沿縫文・利刃文を施文	表土	前期水平 PL 6			
TP12	礎文土器	深鉢	-	(3.7)	-	長石・石英・雲母	普通	口縁部沿縫文L字を施文	表土	中期水平 PL 6				
TP13	礎文土器	深鉢	-	(5.6)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にい・黄橙	普通	脚部複数沿縫文L字を施文	S D 1 覆土 PL 6				
TP14	礎文土器	深鉢	-	(2.2)	-	長石・石英・ 赤色粒子	にい・黄	普通	脚部沿縫文を施文	H G 1 トレンチ2	PL 6			
TP15	礎文土器	深鉢	-	(1.8)	-	長石・石英・ 赤色粒子	にい・黄橙	普通	脚部沿縫文を施文	表土	後期水平 PL 6			
TP16	礎文土器	深鉢	-	(3.7)	-	長石・石英	にい・黄橙	普通	脚部沿縫文を施文	表土	後期水平 PL 6			
TP17	弥生土器	広口壺	-	(2.5)	-	長石・石英	にい・黄	普通	脚部底面に附着剤一種(廻面2条) 矩文・鉛接 底形文を施文	H G 1 トレンチ2	PL 6			

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	手法	特徴	ほか	出土位置	備考
Q 1	砾石	6.3	4.8	1.7	85.4	砂岩	砾面4面	1面上に研磨痕	1面上に凹み	D12区表土	
Q 2	砾石	(4.3)	5.1	1.3	[44.4]	泥岩	砾面5面	3面上に研磨痕		E11区表土	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	手法	特徴	ほか	出土位置	備考
T 3	平瓦	(4.3)	(8.1)	1.6	(73.3)	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	門面布目	凸面長脚叩き		E11区表土	PL 5



第4節 2区の遺構と遺物

1 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴住居跡15軒を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

竪穴住居跡

第1号住居跡（第16・17図）

位置 2区南西部のB 17d2区、標高8.0mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第3号掘立柱建物、第2・4号土坑、第1号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.94m、短軸4.64mの方形で、主軸方向はN-72°-Wである。壁高は26~32cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦な貼床で、踏み固められた痕跡は確認できなかった。貼床はローム、焼土、粘土ブロックや粒子、砂粒を含んだ第8・9層を埋めて構築されている。壁下には壁溝が巡っている。

竈 西壁のやや北寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで98cmで、燃焼部幅は40cmである。袖部は、粘土粒子を微量含んだ第12層を第13層の上に積み上げて構築されている。火床部は床面を10cm掘り込んで、ロームブロックを含んだ第13・14層を埋土して構築されている。火床面は床面とほぼ同じ高さを使用しており、赤変硬化していない。煙道部は壁外に26cm掘り込まれ、ほぼ直立している。

竪穴解説

1 黒褐色	ロームブロック・粘土粒子微量	8 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・ 粘土ブロック・砂粒微量
2 無褐色	焼土粒子・粘土粒子少量、炭化物・粘土粒子微量	9 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒微量
3 灰褐色	粘土ブロック・焼土粒子・砂粒少量、 ロームブロック・炭化粒子微量	10 黒褐色	焼土ブロック・粘土ブロック微量
4 黒褐色	ローム粒子・砂粒微量	11 黒褐色	焼土ブロック・炭化物少量、ロームブロック・ 砂粒微量
5 黑褐色	粘土粒子少量、焼土粒子微量	12 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
6 灰褐色	粘土粒子中量、焼土粒子少量	13 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量
7 におい褐色	焼土ブロック・炭化物・ローム粒子・粘土粒子 少量	14 黒褐色	ロームブロック少量

ピット 5か所。P 1~P 4は深さ34~38cmで、配置から主柱穴である。P 2の西側で確認したP 5は深さ26cmで、補助柱穴とみられる。

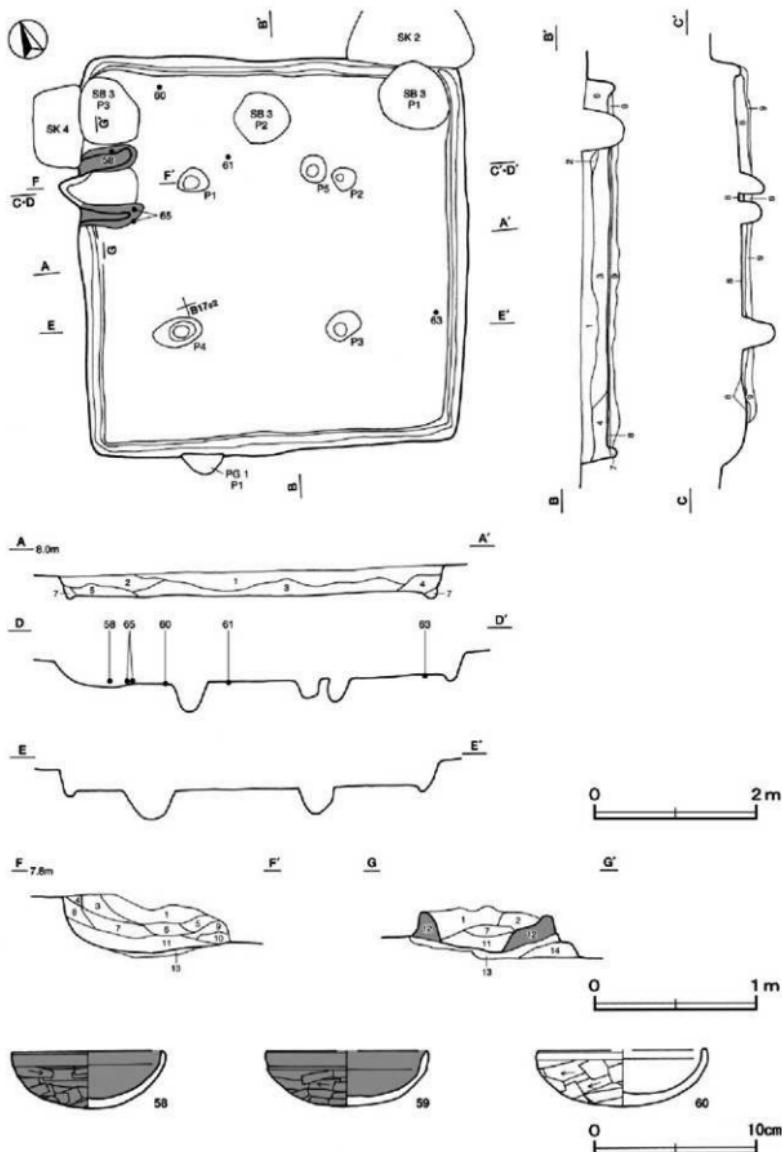
覆土 7層に分層できる。ロームブロックや粘土ブロックなどが含まれていることから埋め戻されている。第8・9層は貼床の構築土である。

土層解説

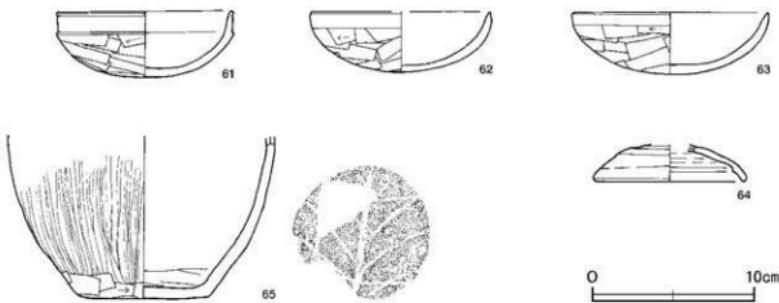
1 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック微量	5 黒褐色	ロームブロック少量
2 黒褐色	粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土ブ ロック微量	6 極端褐色	ロームブロック少量
3 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロ ック・炭化物微量	7 極端褐色	ローム粒子中量
4 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘 土粒子微量	8 黒褐色	ローム粒子中量、粘土粒子微量
		9 明褐色	ローム粒子多量、粘土粒子少量

遺物出土状況 土師器片1017点（坏119、高坏3、甕類895）、須恵器片1点（蓋）のほか、混入した繩文土器片51点（深鉢）、石器1点（石鏃）、鐵滓1点、礫1点が出土している。61は北部、60は北壁付近、63は東壁付近の床面からそれぞれ出土しており、廐絶後の早い段階で投棄されたものとみられる。58・65は竈の袖部内からそれぞれ出土しており、竈の袖部構築時に混入したものである。62・64は覆土中からそれぞれ出土しているほか、細片のため図示できない多量の土器片も出土している。

所見 時期は、出土土器から7世紀後葉に比定できる。



第16図 第1号住居跡・出土遺物実測図



第17図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表（第16・17図）

番号	種別	器種	口径	盤高	底径	底上	色調	焼成	手法の特徴は	出土位置	備考
58	土師器	杯	9.4	3.5	-	良石・石英・雲母	灰青	普通	体部横位のヘラ削り	竪壁部内	80%
59	土師器	杯	[9.8]	3.4	-	良石・石英・赤色粒子	に赤い粒	普通	体部横位のヘラ削り 外・内面黑色処理わずか	覆土中	40%
60	土師器	杯	[10.4]	3.5	-	良石・石英・雲母	に赤い粒	普通	体部横位のヘラ削り	床面	50%
61	土師器	杯	10.8	4.1	-	良石・石英・雲母・赤色粒子	に赤い粒	普通	体部横位のヘラ削り	床面	80%
62	土師器	杯	[11.0]	3.7	-	良石・石英・雲母・赤色粒子	浅黄相	普通	体部横位のヘラ削り	覆土中	40%
63	土師器	杯	12.0	3.8	-	良石・石英・雲母・赤色粒子	に赤い粒	普通	体部横位のヘラ削り	床面	80% ±1.18
64	黑墨器	壺	9.2	(2.3)	-	良石・石英・雲母・赤色粒子	灰	普通	横み削離	覆土中	50%
65	土師器	壺	-	(16.0)	8.0	良石・石英・雲母・赤色粒子	暗	普通	体部横位のヘラ削き 下端横位のヘラ削り	竪壁部内 底木板直	30%

第2号住居跡（第18・19図）

位置 2区南西部のB 17e5区、標高8.0mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第9号住居、第9号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南部が調査区域外へ延びているため、短軸は4.76mで、長軸は4.97mしか確認できなかった。

平面形は長方形で、主軸方向はN-36°-Wである。壁高は27~35cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、床面全体が踏み固められている。西コーナー付近の覆土下層から焼土塊および炭化材が少量出土しているが、床は焼けていない。

炉 7か所。炉1・2は、中央部からやや南北壁寄りに並列している。炉1は長径42cm、短径34cmの楕円形で、床面を2cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は火を受けて赤変硬化している。炉2は長径48cm、短径42cmの楕円形で、床面を4cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は火を受けて赤変硬化している。ほかに、5か所の炉が中央部から北西壁に向かって直線状に連なっていることを確認した。いずれの炉も平面形は円形あるいは楕円形を呈しており、確認面が硬化していることから、炉1・2を使用していた以前の炉とみられる。炉3は深さ4cmであるが、ほかは深さ1cmに満たないため、5か所の炉の新旧関係は不明である。

炉土層解説（炉1・2共通）

1 黒色 焼土粒子微量

貯蔵穴 南コーナー部付近に位置している。長軸90cm、短軸80cmの隅丸長方形で、深さ40cm、底面は平坦である。

壁は外傾して立ち上がっている。貯蔵穴の北西側は幅30cm、高さ2cmほどの高まりを有している。

貯蔵穴土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

2 暗褐色 炭化物中量、ロームブロック・焼土ブロック微量

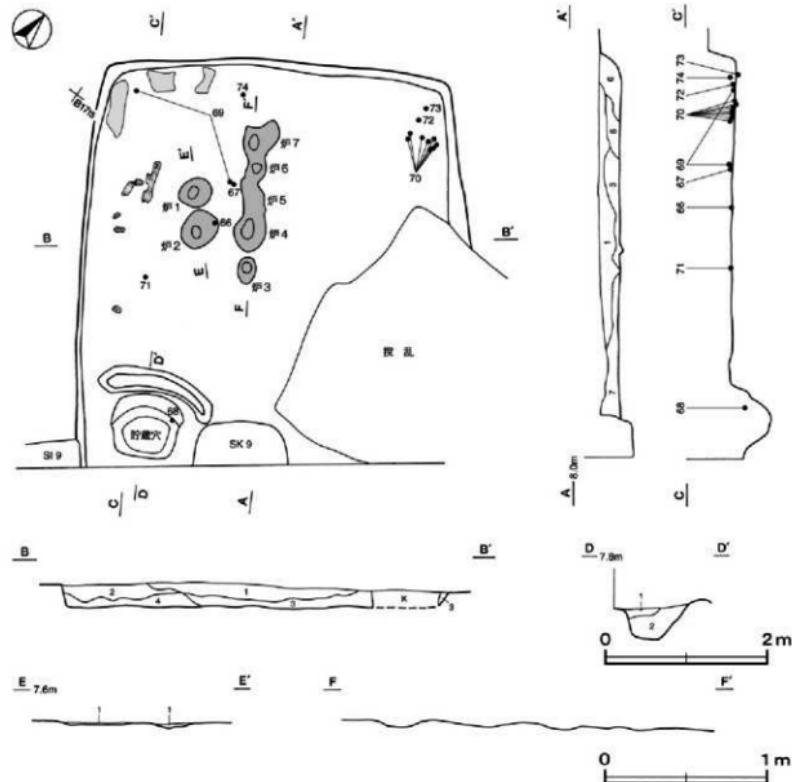
覆土 7層に分層できる。ブロック状に堆積していることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・鉄分微量
- 2 黑褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 3 極暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子・鉄分微量
- 4 黑褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量

- 5 暗褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック微量
- 6 黑褐色 烧土ブロック・炭化物少量、ロームブロック微量
- 7 極暗褐色 ローム粒子・鉄分少量、炭化粒子微量

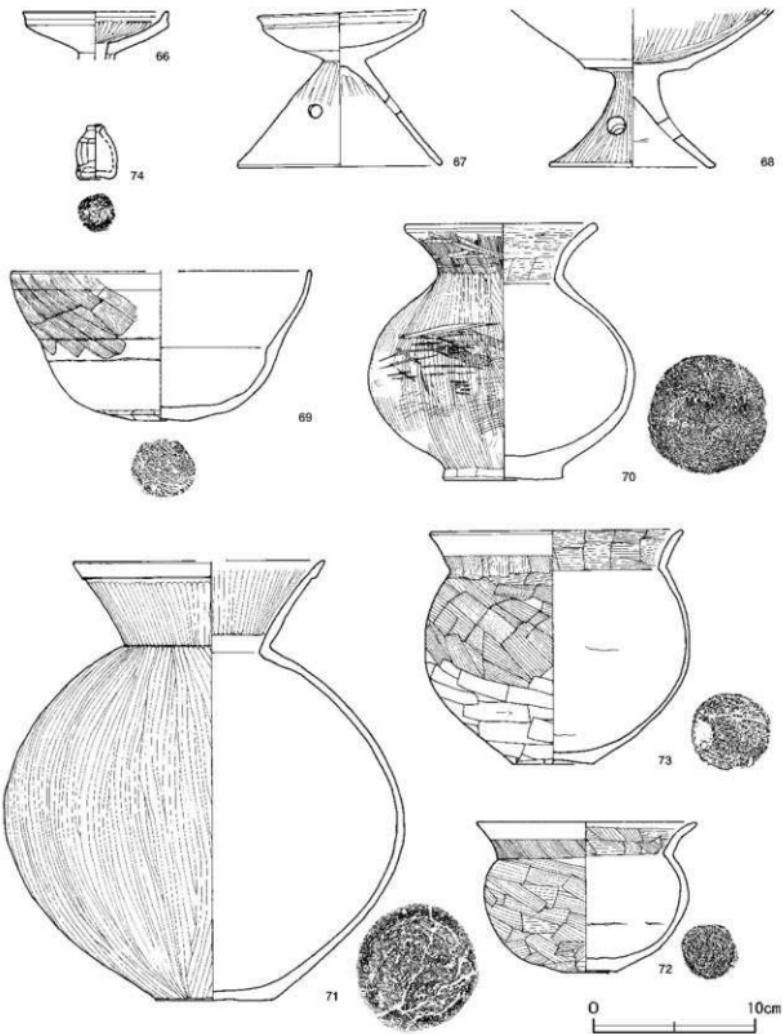
遺物出土状況 土師器片624点(坏57、器台3、高坏2、鉢1、壺2、甕類558、ミニチュア1)のほか、混入した繩文土器片78点(深鉢)が出土している。66は炉2の火床面、68は貯蔵穴の覆土上層から出土している。67は中央部、72-73は北コーナー付近、71は西部の床面からそれぞれ出土している。69は中央部と西コーナー付近の床面からそれぞれ出土した破片が接合しているほか、70は北コーナー付近の床面に散在した破片



第18図 第2号住居跡実測図

が接合しているなど、多量の土器が床面から出土している。いずれも廃絶時に廃棄されたものとみられる。74は北西部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀前半に比定できる。床は焼けていないが、焼土塊や炭化材の出土状況から焼失住居の可能性がある。



第19図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表（第19図）

番号	種別	器種	口径	基高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
66	土師器	器台	9.0	(2.9)	-	長石・石英・雲母・赤色粘土	にぶい赤茶	普通	受部内面鉄射状のハラ焼き	伊吹床面	30%
67	土師器	器台	10.2	9.6	12.2	長石・石英・赤色粘土	深	普通	脚部外面縦條のハラ焼き 内面ヘラナデ	床面	90%
68	土師器	高环	-	(9.7)	[10.2]	長石・石英・雲母	深	普通	底部内面斜傾状のハラ焼き 脚部外面縦條のハラ焼き	岩崎穴 覆土上層	PL19
69	土師器	鉢	[18.4]	9.2	4.0	長石・石英・雲母	にぶい黄茶	普通	口部外面横條のハケ目 体部下端横條のハラ焼き 底部内面横條のハラ焼き	床面	40%
70	土師器	壺	[11.4]	15.8	7.2	長石・石英・雲母	にぶい茶	普通	口部内面横條のハラ焼き 底部内面横條のハラ焼き	床面	80% PL19
71	土師器	壺	[15.6]	27.1	7.0	長石・石英・雲母	にぶい黄茶	普通	口部外面横條のハラ焼き 体部腹壁のハラ焼き	床面	80% PL20
72	土師器	壺	13.4	9.3	3.4	長石・石英・雲母	にぶい茶	普通	足部半斜傾のハケ目 下端横條のハラ焼き	床面	100% PL19
73	土師器	壺	15.4	14.4	4.8	長石・石英・雲母	深	普通	底部外面縦條のハケ目 内面横條のハケ目 体部側面のハラ焼き	床面	90%
74	土師器	ミニチュア	1.0	3.3	2.0	長石・石英・雲母	にぶい黄茶	普通	ヘラナデ 底部ナデ	覆土下層	100% PL21

第8号住居跡（第20・21図）

位置 2区中央部のB 17b6区、標高75mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第4・25・39号住居、第17・19・31・44号土坑、第2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.00m、短軸5.18mの長方形で、主軸方向はN-50°-Eである。壁高は8~27cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、踏み固められた痕跡は確認できなかった。遺存している壁下には、壁溝が巡っている。

ピット 4か所。P1~P3は深さ12~24cmで、コーナー付近に位置している配置から補助柱穴とみられる。

P4は深さ6cmで、南東壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと推定できる。

貯蔵穴 東コーナー部に位置している。長径90cm、短径84cmの円形で、深さ50cm、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。北東壁から南東壁にかけて、幅24cm、高さ3cmのL字状の高まりを有している。

貯蔵穴土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	3 暗褐色	ローム粒子少量
2 茶褐色	ロームブロック少量	4 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量

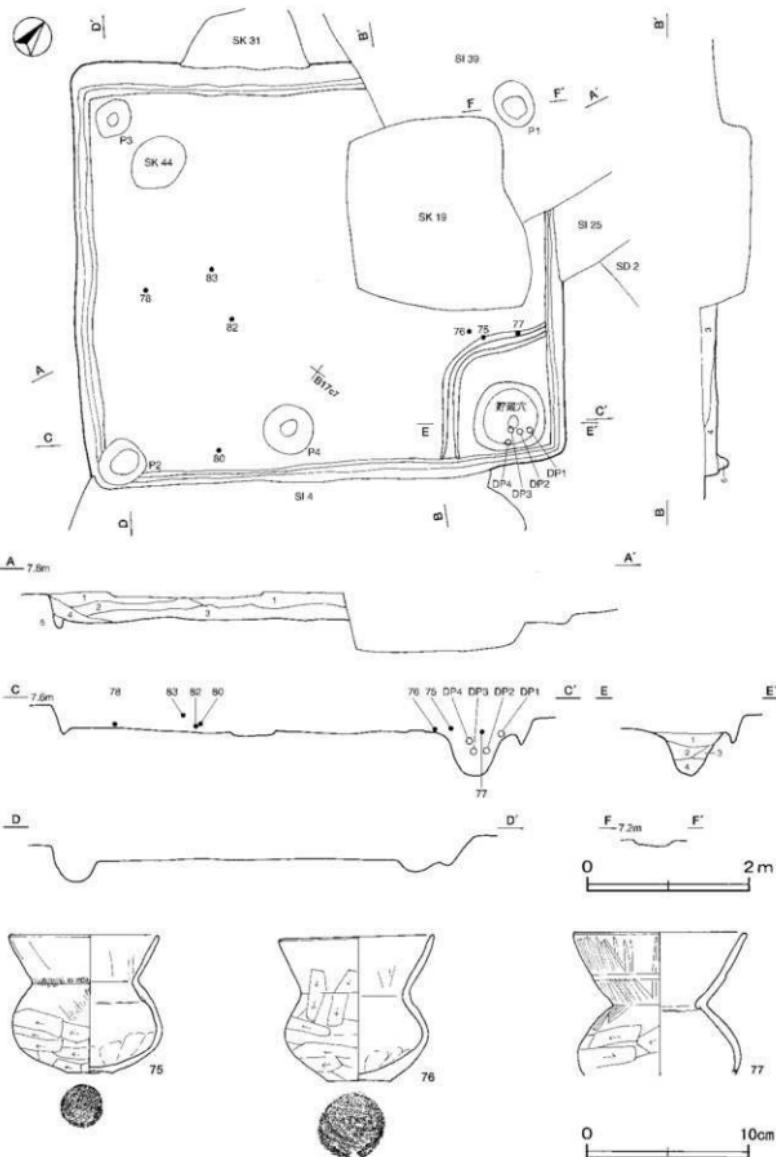
覆土 5層に分層できる。ブロック状に堆積していることから埋め戻されている。

土層解説

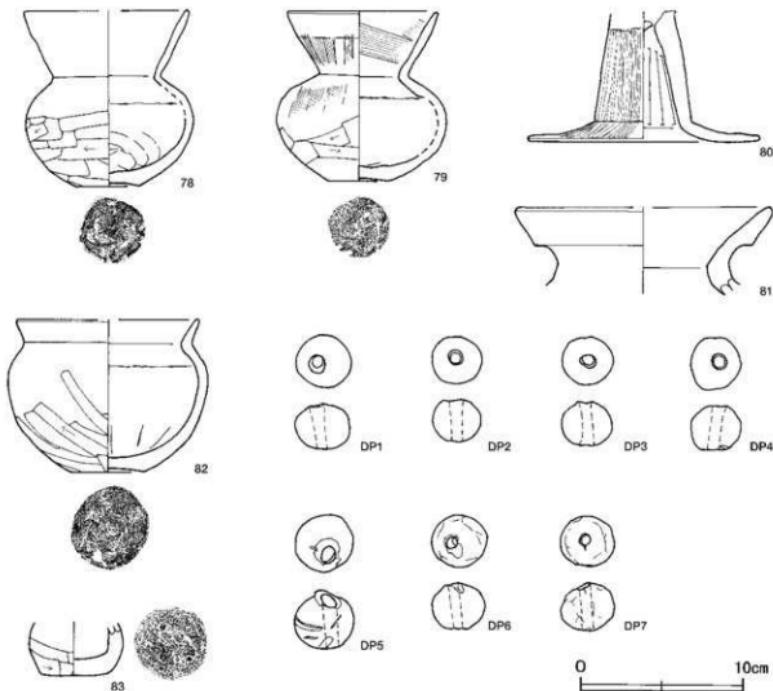
1 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	4 灰褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量
2 茶褐色	粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量	5 灰褐色	ローム粒子中量
3 灰褐色	ロームブロック・焼土粒子微量		

遺物出土状況 土師器片1047点(壺37、壺5、高环54、鉢1、壺類50、壺類899、ミニチュア1)、土製品7点(球状土錐)のほか、混入した繩文土器片39点(深鉢)、弥生土器片4点(壺)、躰7点が出土している。75~77はL字状の高まり部付近、78は南部の床面からそれぞれ出土している。DP1~DP4は貯蔵穴の覆土上層から中層にかけて、80は南東壁付近の覆土下層、82・83は中央部の覆土下層・覆土中層からそれぞれ出土している。79・81、DP5~DP7は覆土中層からそれぞれ出土しているほか、多量の土器片が出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉に比定できる。



第20図 第8号住居跡・出土遺物実測図



第21図 第8号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡出土遺物観察表（第20・21図）

番号	種 別	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	色 调	焼 成	手 法 の 特 殊 は か	出土位置	備 考
75	土罐器	甌	9.0	8.4	2.6	長石・石英・雲母	にふい黄橙	普通	口縁部外側ハラ削り、ナデ 体部上半ハラ削り ナデ 下半部のヘラ削り、底部ヘラ削り	床面	90%
76	土罐器	甌	9.4	9.0	3.8	長石・石英・雲母	にふい黄橙	普通	口縁部外側ハラ削り、底部ハラ削り	床面	90% P1.18
77	土罐器	甌	10.5	(8.8)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐	普通	口縁部外側ハラ削り、底部ハラ削り	P1.18	60%
78	土罐器	甌	[9.9]	10.8	3.7	長石・石英	にふい黄橙	普通	体部下半横倒のヘラ削り、底部ヘラ削り	床面	80% P1.18
79	土罐器	甌	9.1	10.5	3.7	長石・石英・赤色粒子	にふい褐	普通	口縁部外側ハラ削り、ナデ 内面横倒のヘラ削り ナデ 下半部のヘラ削り、底部ヘラ削り	覆土中	70% P1.18
80	土罐器	壺	—	(8.0)	[D4.30]	長石・石英・赤色粒子	にふい褐	普通	脚部外側横倒のヘラ削り	覆土上層	20%
81	土罐器	甌	[15.4]	(5.4)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	明褐	普通	口縁部外側ハラ削り、ナデ 体部上半ハラ削り、ナデ 下半横倒のヘラ削り、底部ヘラ削り	覆土中	5%
82	土罐器	甌	[11.2]	9.4	4.6	長石・石英・赤色粒子	にふい黄橙	普通	体部下半斜倒のヘラ削り、底部ヘラ削り	覆土上層	60%
83	土罐器	ミニチュア	—	(3.3)	4.3	長石・石英	にふい黄橙	普通	体部下端横倒のヘラ削り	覆土中層	50% P1.21

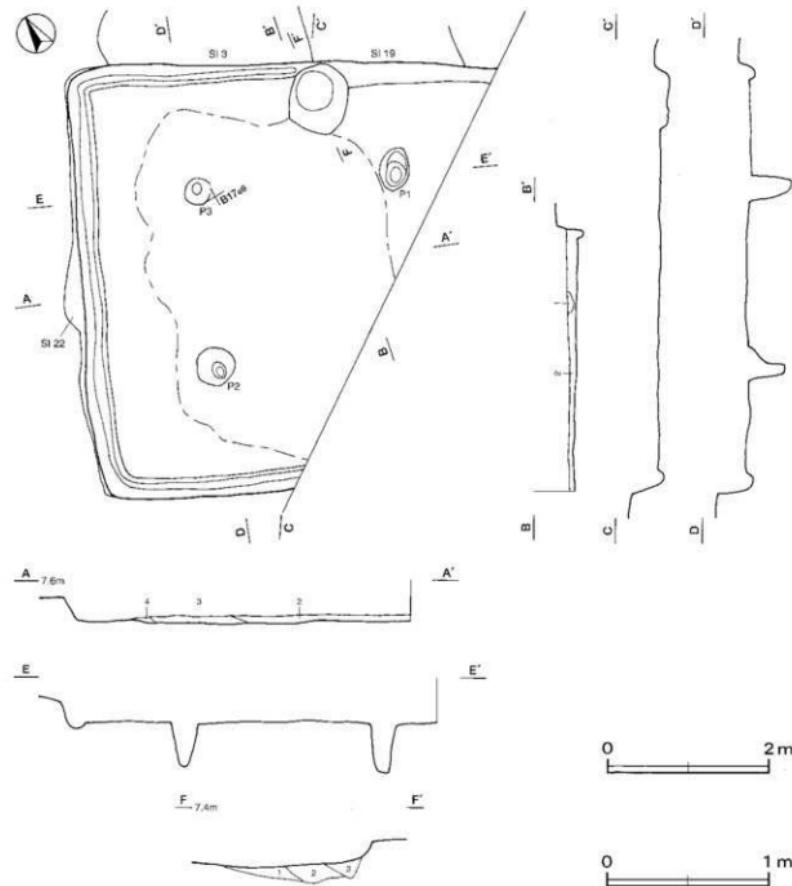
番号	器 形	径	厚さ	孔 径	底 面	材 質	特 殊	出土位置	備 考
DP 1	球状土錐	33	2.8	0.7~1.0	25.9	土(長石・雲母・赤色粒子)	表面ナデ 一方から穿孔	約縦穴 覆土上層	P1.29
DP 2	球状土錐	30	2.6	0.9	19.9	土(長石・雲母)	表面ナデ 一方から穿孔	約縦穴 覆土中層	P1.29
DP 3	球状土錐	31	2.7	0.7~0.9	22.3	土(長石・雲母)	表面ナデ 一方から穿孔	約縦穴 覆土中層	P1.29

番号	形 様	径	厚さ	孔 径	重 量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
DP 4	透状土跡	3.2	2.8	0.7~0.9	24.4	土(長石)	表面ナデ 一方向から穿孔	石器穴 覆土上層	PL.29
DP 5	透状土跡	3.6	3.6	0.8	41.7	土(長石・石英)	表面ナデ 一方向から穿孔	覆土中	PL.29
DP 6	透状土跡	3.3	2.8	0.7	25.5	土(長石・石英・赤色粒子)	表面ナデ 一方向から穿孔	覆土中	PL.29
DP 7	透状土跡	3.3	2.9	0.7	27.2	土(長石・石英・赤色粒子)	表面ナデ 一方向から穿孔	覆土中	PL.29

第 18 号住居跡 (第 22・23 図)

位置 2 区中央部の B 17e9 区、標高 7.5 m の河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第 3・19・22 号住居、第 20 号土坑に掘り込まれている。



第 22 図 第 18 号住居跡実測図

規模と形状 南東部が調査区域外へ延びていて、北東・南西軸は5.35mで、北西・南東軸は5.20mしか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定でき、主軸方向はN-27°-Eである。壁高は確認面から30~35cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。北東壁の東側を除いた壁下には、壁溝が巡っている。

ピット 3か所。P1~P3は深さ42~60cmで、配置から主柱穴である。

竈 北東壁の中央付近で竈の掘方だけを確認した。遺存している平面形は長径86cm、短径70cmの楕円形で、床面を15cm掘り込み、焼土粒子や炭化物、粘土粒子を含んだ第1~3層を埋土して構築されている。掘方底面は床面から緩やかに落ち込み、壁はほぼ直立している。

電鋸方土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	3 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
2 灰褐色	ロームブロック・粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量		

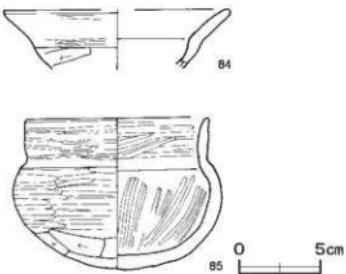
覆土 4層に分層できる。下層のみであるが、不自然な堆積状況から埋め戻されている。

土跡解説

1 いぶい青褐色	粘土粒子多量、ローム粒子微量	3 黒褐色	ロームブロック微量
2 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量	4 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片190点(环32、壺類158)のほか、混入した繩文土器片21点(深鉢)、弥生土器片1点(壺)、土製品1点(块状耳飾り)、網片1点が出土している。84・85は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、上部に構築された第22号住居と平面形が類似しており、出土土器に大きな時期差がないことから、本跡から第22号住居へ建て替えたものとみられる。時期は、出土土器から6世紀中葉に比定できる。



第23図 第18号住居跡出土遺物実測図

第18号住居跡出土遺物観察表(第23図)

番号	種別	容積	口径	高さ	底径	胎土	色調	地成	手 法 の 等 級 ほ か	出土位置	備考
84	土師器	环	[13.8]	(3.6)	-	良石・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外面横凹のヘラ削き 体部横凹のヘラ削り	覆土中	5%
85	土師器	壺	11.0	9.3	-	良石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横凹のヘラ削き 体部上半横凹のヘラ削き 下半横凹のヘラ削り 内面放射状の削き	覆土中	80% PL18

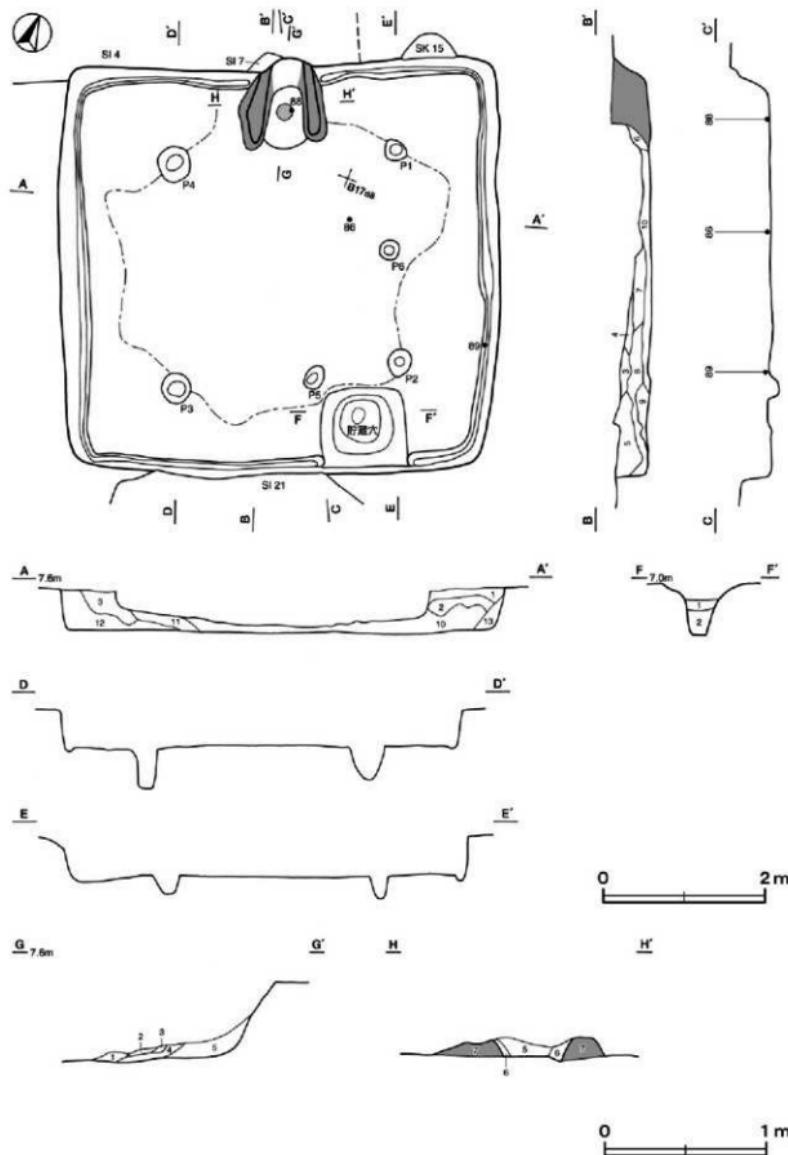
第20号住居跡(第24・25図)

位置 2区中央部のB17d7区、標高75mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第4・7・21号住居、第12・15号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.44m、短軸5.03mの方形で、主軸方向はN-20°-Wである。壁高は45~50cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。



第24図 第20号住居跡実測図

竈 北壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 112cm、燃焼部幅 44cm である。袖部は粘土粒子、砂粒を多量に含んだ第 7 層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ 16cm 挖り込まれ、外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1 黒褐色	燒土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量	5 灰褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒中量、燒土粒子少量、炭化粒子微量
2 にい青褐色	燒土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量	6 にい青褐色	ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒中量、燒土粒子少量
3 灰褐色	ロームブロック中量、粘土粒子・砂粒少量、燒土粒子・炭化粒子微量	7 にい青褐色	粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子少量
4 黒色	炭化粒子多量、燒土粒子・砂粒微量		

ピット 6か所。P.1 ~ P.4 は深さ 25 ~ 50cm で、配置から主柱穴である。P.5 は深さ 16cm で、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと推定できる。P.6 は深さ 18cm で、性格は不明である。

貯蔵穴 南壁のやや南東コーナー寄りに位置している。長軸 106cm、短軸 84cm の長方形で、深さ 64cm である。底面は平坦で、上部に段を有している。

貯蔵穴土層解説

1 褐色	ロームブロック少量	2 にい青褐色	ロームブロック中量、粘土粒子・砂粒少量
------	-----------	---------	---------------------

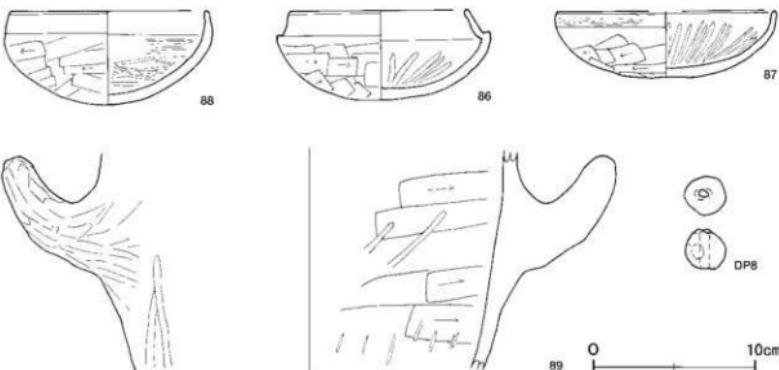
覆土 13 層に分層できる。ブロック状に堆積していることから埋め戻されている。

土層解説

1 灰褐色	ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子少量、粘土粒子微量	6 灰褐色	ロームブロック微量
2 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量、燒土ブロック微量	7 黒褐色	ロームブロック少量、粘土粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック中量	8 灰褐色	ロームブロック少量
4 黒褐色	ロームブロック中量、燒土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量	9 灰褐色	ロームブロック少量
5 褐色	ローム粒子多量	10 黒色	ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片 510 点（坏 26、楕 3、高坏 2、壺 2、甕類 473、瓶 4）、土製品 1 点（球状土錐）のほか、混入した繩文土器片 84 点（深鉢）、弥生土器片 3 点（壺）、剥片 3 点、罐 2 点が出土している。88 は竈の火床面から逆位の状態で、86 は中央部、89 は東壁際の床面からそれぞれ出土している。87・DP8 は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 6 世紀後葉に比定できる。



第 25 図 第 20 号住居跡出土遺物実測図

第 20 号住居跡出土遺物観察表（第 25 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
86	土師器	杯	10.8	5.4	-	良石・石英・赤色粒子	に赤い痕	普通	体部横位のヘラ削り 内面放射状のヘラ磨き	床面	90%
87	土師器	杯	[13.3]	4.1	-	良石・石英・雲母	に赤い痕	普通	体部横位のヘラ削り 内面放射状のヘラ磨き	覆土中	P1.18
88	土師器	杯	12.0	5.6	-	石英・雲母	明赤	普通	体部横位のヘラ削り 内面横位のヘラ磨き	覆火床面	90%
89	土師器	瓶	-	(13.5)	-	良石・石英・赤色粒子	透	普通	体部横位のヘラ削り 内面横位のヘラ削り 破	床面	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	底径	材質	特徴	出土位置	備考
DP 8	埴土罐	2.5	2.4	0.6	13.1	土(良石・石英・雲母)	ナデ 一方向から穿孔	覆土中	

第 22 号住居跡（第 26 図）

位置 2 区中央部の B 17e8 区、標高 7.5 m の河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第 3・19 号住居、第 20 号土坑に掘り込まれている。第 18 号住居跡の上部に構築している。

規模と形状 南東部が調査区域外へ延びており、北部が第 19 号住居に掘り込まれているため、北東・南西軸は 5.32 m で、北西・南東軸は 4.28 m しか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定でき、主軸方向は N - 58° - W である。壁高は 23 ~ 52 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、踏み固められた痕跡は確認できなかった。

竈 北西壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 112 cm で、燃焼部幅は 50 cm ほどである。袖部は、多量の白色粘土ブロックを含んだ第 10 層を積み上げて構築されている。火床部は床面から 20 cm 堀り込み、ローム粒子、粘土粒子を含んだ第 11 層を埋土して構築されている。火床面には支脚として使用された高壙が出土しており、周囲は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ 15 cm 堀り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。第 9 層は支脚の高さを調節した土で、綺まりが非常に強いた。

竈土層解説

1	暗褐色	色	粘土粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	6	黒褐色	色	炭化粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子微量
2	褐褐色	色	ローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量	7	暗褐色	色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3	褐褐色	色	焼土粒子・粘土粒子少量、ローム粒子微量	8	褐色	色	ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量
4	黒褐色	色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子微量	9	暗褐色	色	ロームブロック・焼土ブロック少量
5	暗褐色	色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	10	灰褐色	色	ローム粒子多量、焼土粒子・粘土粒子微量

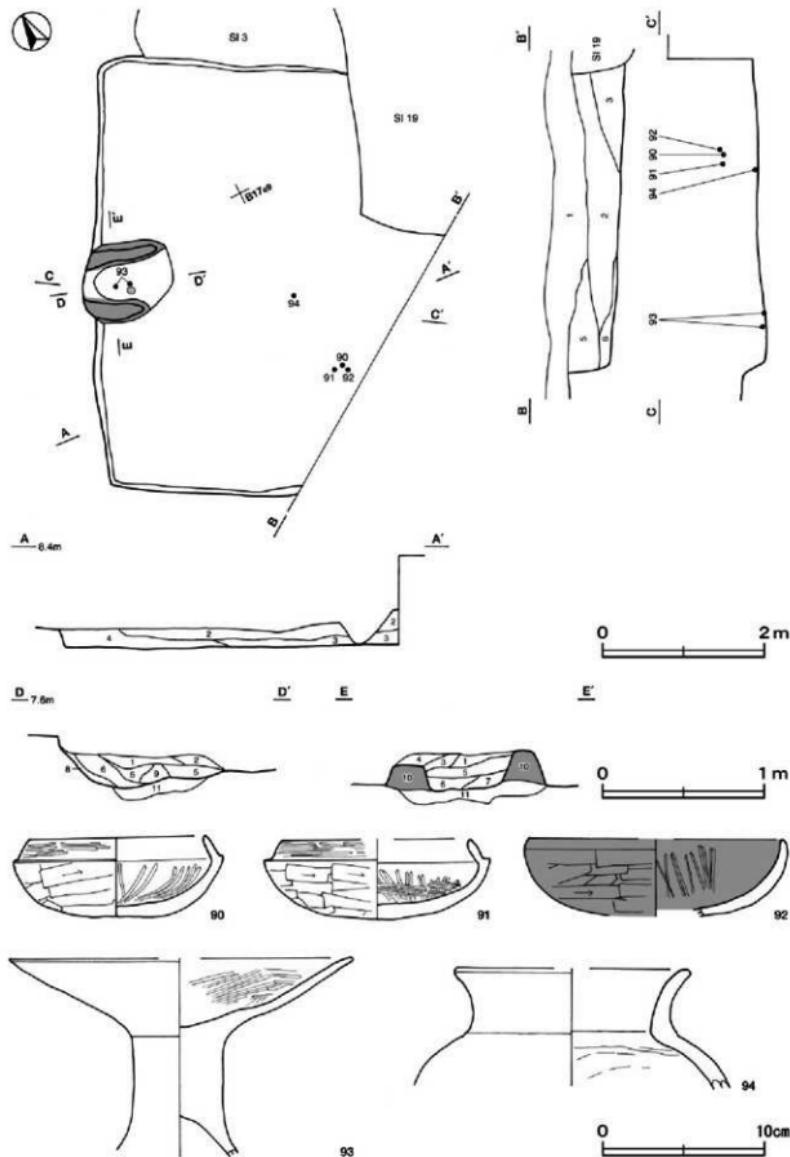
覆土 5 層に分層できる。ロームブロックを各層に含んでおり、水平に堆積している不自然な状況から埋め戻されている。第 1 層は本跡が埋没した後に堆積した黒色粘質土である。

土層解説

1	黑褐色	色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	4	黑褐色	色	ロームブロック・炭化物微量
2	暗褐色	色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	5	暗褐色	色	ロームブロック・焼土ブロック微量
3	無暗褐色	色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量	6	暗褐色	色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量

遺物出土状況 土師器片 221 点（壺 39、高杯 3、甕類 179）のほか、混入した繩文土器片 26 点（深鉢）、弥生土器片 2 点（壺）が出土している。93 は竈の火床面から逆位の状態で、94 は中央部の床面からそれぞれ出土している。90 ~ 92 は南部の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、下部に構築されていた第 18 号住居跡と平面形が類似しており、出土土器に大きな時期差がないことから、第 18 号住居跡から本跡へ建て替えたものとみられる。時期は、出土土器から 6 世紀後葉に比定できる。



第26図 第22号住居跡・出土遺物実測図

第 22 号住居跡出土遺物観察表（第 26 図）

番号	種別	部種	口径	部高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
90	土師器	杯	10.7	5.0	4.7	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部外周側底のへラ削き 体部横底のへラ削り 内面放射状のへラ削き 体部底部へラ削り	覆土上層	100% PL18
91	土師器	杯	[11.5]	4.9	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外周側底のへラ削き 体部横底のへラ削り 内面放射状のへラ削き 体部底部へラ削り	覆土上層	80%
92	土師器	杯	[15.6]	(4.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部横底のへラ削り 内面放射状のへラ削き	覆土上層	40%
93	土師器	高杯	[20.8]	(12.6)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	体部内面へラ削き 外面剥離著しく溝壁不明 支脚転用	竪穴表面	20%
94	土師器	甕	[D4.25]	(7.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外・内へラナダ	床面	5%

第 28 号住居跡（第 27・28 図）

位置 2 区中央部の B 17b9 区、標高 7.5 m の河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第 29・36 号住居跡を掘り込み、第 24 号住居、第 4 号掘立柱建物、第 2 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 4.78 m、短軸 4.18 m の長方形で、主軸方向は N - 50° - W である。壁高は 30 ~ 53 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北西壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 96 cm で、燃焼部幅は 36 cm である。袖部は、ローム粒子を含んだ第 7・8 層の上に、粘土ブロックを含んだ第 6 層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は赤変硬化していない。煙道部はロームブロックを含んだ第 9 層を貼り付けており、奥壁で段を有し、外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1	暗褐色	粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	5	暗褐色	粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
		炭化粒子微量	6	にぶい黄色	粘土ブロック多量
2	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	7	暗褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量
3	黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子微量	8	板暗褐色	粘土ブロック少量、ローム粒子微量
4	暗赤褐色	炭化粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子微量	9	褐色	ロームブロック少量

ピット P 1 ~ P 4 は深さ 50 ~ 76 cm で、配置から主柱穴である。P 5 は深さ 53 cm で、南西壁際のやや南コーナー寄りに位置しており、出入り口施設に伴うピットと推定できる。P 6 は深さ 10 cm で、性格は不明である。

貯蔵穴 南東壁のやや東コーナー寄りに位置している。長軸 82 cm、短軸 66 cm の隅丸長方形で、深さ 44 cm、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	3	黒褐色	ロームブロック微量
2	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	4	黒褐色	粘土ブロック少量、ローム粒子微量

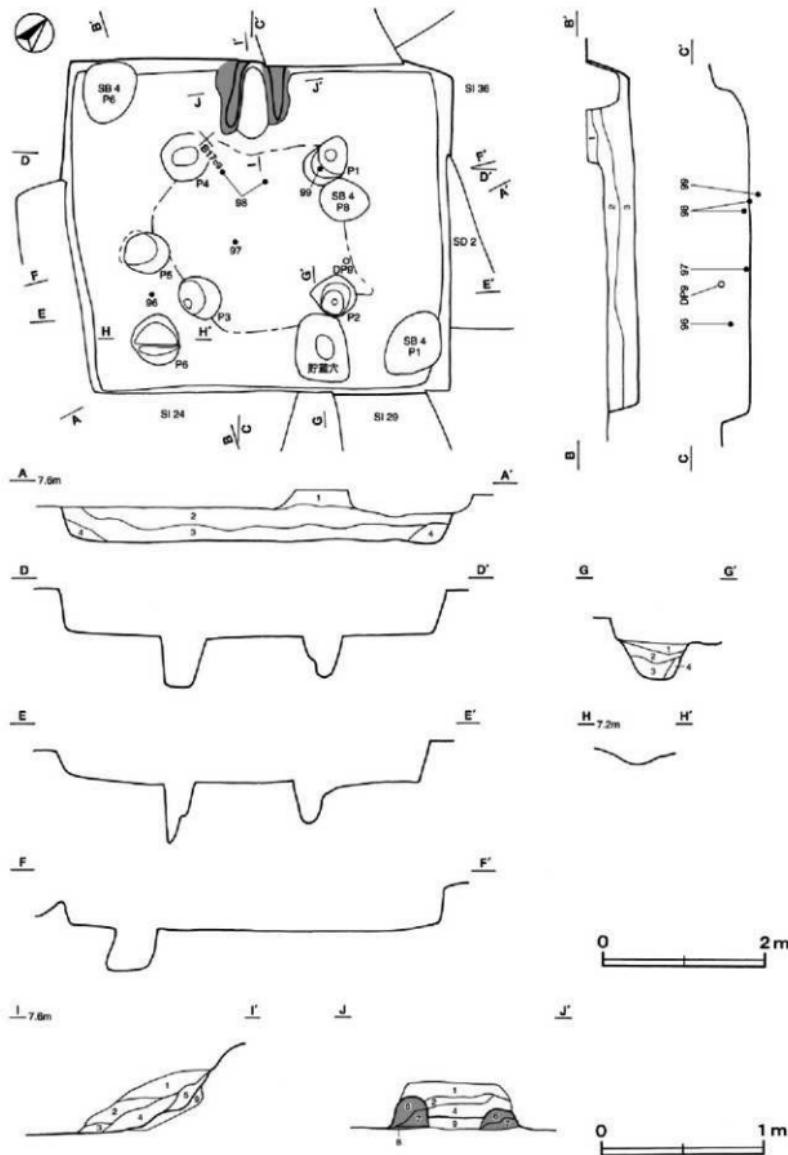
覆土 4 層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積である。

土層解説

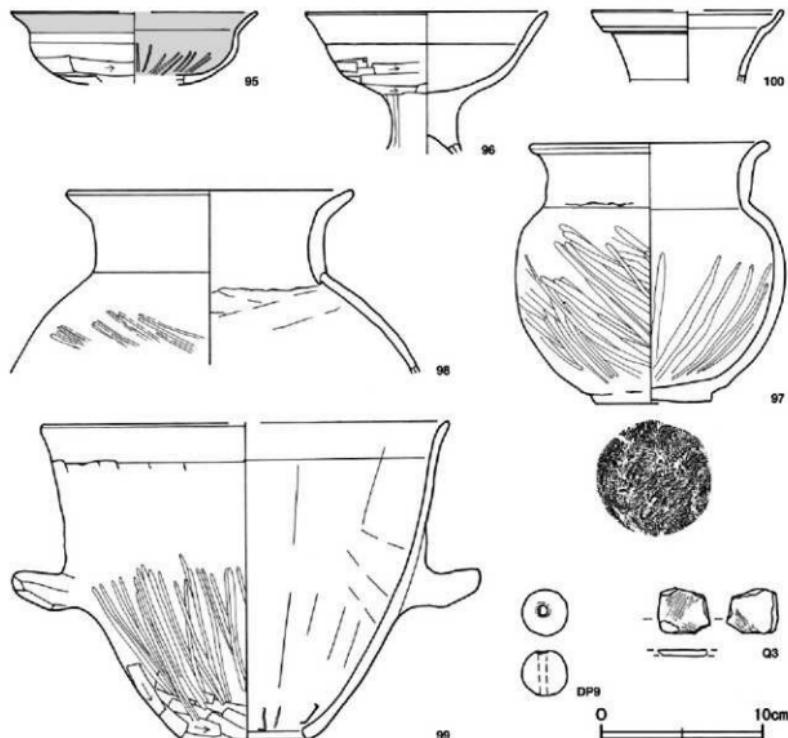
1	にぶい褐色	ローム粒子中量	3	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
2	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	4	にぶい褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片 716 点（杯 127、碗 1、高杯 6、壺類 578、瓶 4）、須恵器片 1 点（罐）、土製品 1 点（球状土錐）、石製品 1 点（円板状未製品）のほか、流れ込んだ繩文土器片 46 点（深鉢）、弥生土器片 6 点（壺）、不明鉄製品 1 点が出土している。98 は中央部の床面と覆土下層からそれぞれ出土した破片が接合している。99 は P 1 の覆土上層、97 は中央部の覆土下層からそれぞれ出土しており、廃棄後の早い段階で投棄されたものとみられる。96 は南部、DP 9 は中央部の覆土上層、95・100・Q 3 は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 6 世紀前葉に比定できる。



第27図 第28号住居跡実測図



第28図 第28号住居跡出土遺物実測図

第28号住居跡出土遺物観察表（第27・28図）

番号	器種	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
95	土師器	环	[15.0]	(4.4)	-	長石・石英・赤色粒子	に赤い粒	普通	体部斜面横凹のヘラ削り 内面放射状のヘラ削り	覆土中	30%
96	土師器	高环	14.7	(8.8)	-	長石・石英	に赤い粒	普通	軸部横凹のヘラ削り 脚部底付のヘラ削き	覆土上層	40%
97	土師器	甌	14.2	16.1	7.2	長石・石英・雲母	に赤い黄緑	普通	体部外・内面斜位のヘラ削き	覆土下層	90% PL19
98	土師器	甌	17.5	(11.3)	-	長石・石英・雲母	赤	普通	体部斜位のヘラ削き	床面	20%
99	土師器	甌	[24.6]	19.5	7.8	長石・石英・赤色粒子	に赤い粒	普通	体部下端横凹のヘラ削り 下平底付のヘラ削き 脚部横凹のヘラ削り	P1 覆土上層	30% PL21
100	陶器器	甌	[11.6]	(4.4)	-	長石	赤灰	良好	内面自然釉	覆土中	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP 9	球状土器	2.9	2.7	0.6	20.0	土(長石・赤色粒子)	一方向から穿孔 孔周側面取り	覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q3	円板状 未焼成	(2.8)	(3.2)	(0.4)	(6.0)	滑石	表・裏面平坦に研磨 未穿孔	覆土中	PL20

第29号住居跡（第29～31図）

位置 2区東部のB 17c0区、標高75mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第36・42号住居跡を掘り込み、第24・28・31号住居、第4・5号掘立柱建物、第2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸485m、短軸458mの方形で、主軸方向はN-41°-Wである。壁高は48～60cmで、外傾して立ち上がっている。

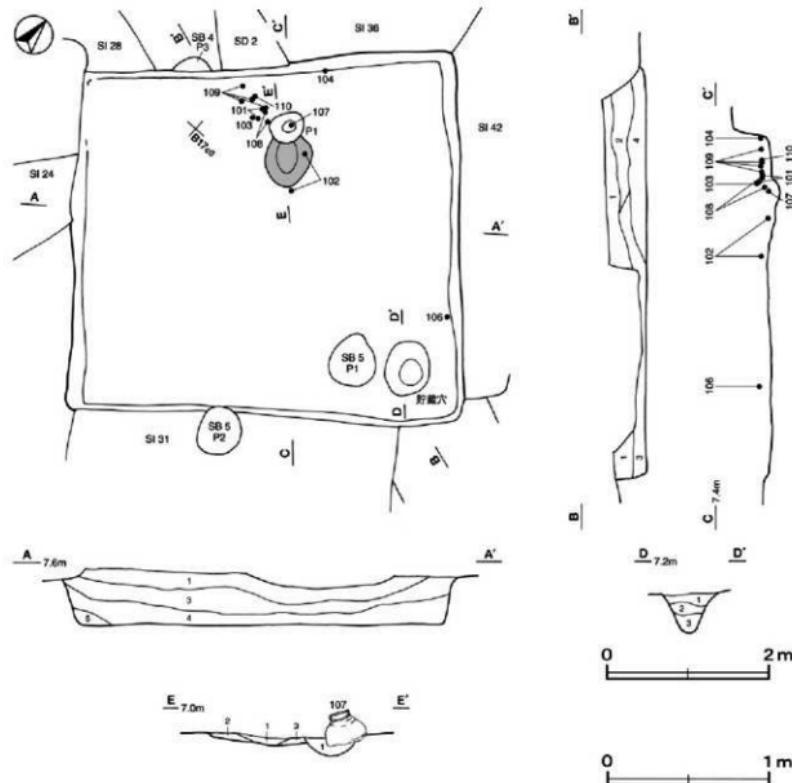
床 平坦であるが、踏み固められた痕跡は確認できなかった。

炉 中央からやや北西壁寄りに付設されている。P1に掘り込まれているため、短径は58cmで、長径は60cmしか確認できなかった。平面形は楕円形と推定できる。床面から深さ8cm掘りくぼめた地床炉で、炉床は火を受けて赤変色化している。

炉土層解説

- 1 短赤褐色 燃土ブロック少量、ローム粒子微量
2 短褐色 燃土粒子少量、ローム粒子微量

- 3 黒褐色 ロームブロック・燃土ブロック微量



第29図 第29号住居跡実測図

ピット 炉の北西部に位置しており、長径 42cm、短径 36cm の梢円形で、深さ 10cm、底面は皿状である。炉を掘り込んでいることから、廃絶時に掘り込まれた落ち込みである。

ピット土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子微量

貯蔵穴 東コーナー部に位置している。長径 65cm、短径 52cm の梢円形で、深さ 48cm、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|-----------------------|--------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物微量 | 3 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物・粘土粒子少量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量 | |

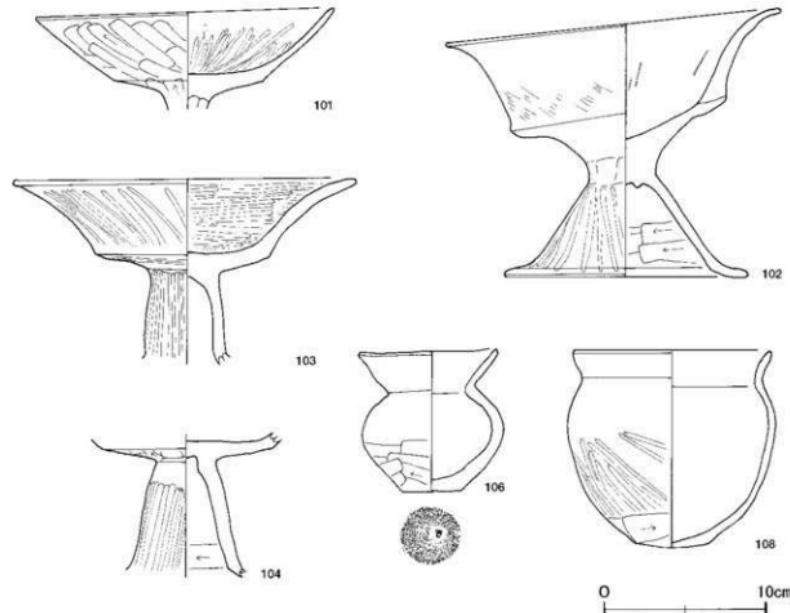
覆土 5 層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積である。

土層解説

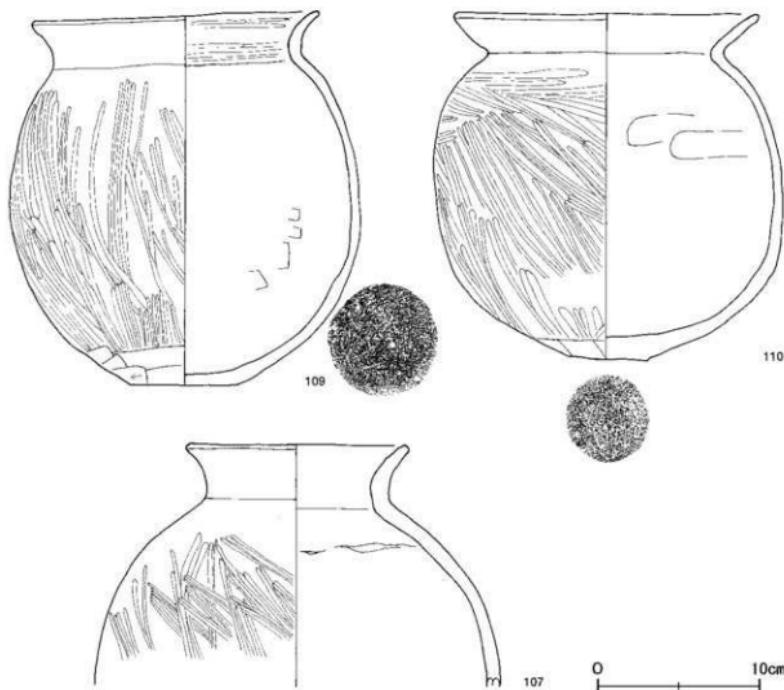
- | | |
|-------------------------|---------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子微量 | 4 暗褐色 ロームブロック・炭化物微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 ロームブロック微量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片 157 点(環 9、壺 1、高环 12、壺 6、甕類 129)のほか、流れ込んだ繩文土器片 27 点(深鉢)が出土している。106 は、東コーナー部付近の北東壁際の覆土下層から出土している。101~104・108~110 は、炉周辺から北西壁際にかけての覆土下層からばばまとまって出土している。107 は体部下半を欠き、下部が P1 内に埋没していることから、廃絶時に投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器からに 5 世紀中葉に比定できる。



第 30 図 第 29 号住居跡出土遺物実測図 (1)



第31図 第29号住居跡出土遺物実測図(2)

第29号住居跡出土遺物観察表(第30・31図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
106	土師器	甕	8.4	8.7	3.6	長石・石英・半色粒子	橙	普通	体部下半横位のヘラ削り	覆土下層	90%
101	土師器	高坏	18.2	(6.3)	—	長石・石英・漂母	に赤い橙	普通	底部外表面のヘラ削り 内面放射状のヘラ削り	覆土下層	60%
102	土師器	高坏	20.5	16.5	15.0	長石・石英・漂母	に赤い黄橙	普通	体部斜面バヤ削れ ナマ 脚部外表面擬似のヘラ削り	覆土下層	90% PL.19
103	土師器	高坏	21.0	(11.2)	—	長石・石英・漂母	に赤い黄橙	普通	体部外表面擬似のヘラ削り 内面横位のヘラ削り	覆土下層	80%
104	土師器	高坏	—	(8.9)	—	長石・石英・漂母・半色粒子	橙	普通	体部外表面擬似のヘラ削り 縁部外表面のヘラ削り	覆土下層	40%
107	土師器	甕	13.6	(15.0)	—	長石・石英・漂母	に赤い橙	普通	体部斜位のヘラ削り	PL.覆土上層	50%
108	土師器	甕	12.0	12.0	(4.4)	長石・石英	に赤い橙	普通	体部下半横位のヘラ削り 下端横位のヘラ削り	覆土下層	90% PL.19
109	土師器	甕	17.4	23.2	6.5	長石・石英	黒灰	普通	白線部内面横位のヘラ削り 体部擬似のヘラ削り 上端横位のヘラ削り 底部ヘラ削り	覆土下層	80% PL.20
110	土師器	甕	18.3	21.3	5.0	長石・石英	黒灰	普通	体部斜位のヘラ削り	覆土下層	90% PL.20

第30号住居跡(第32・33図)

位置 2区北東部のA 1710区、標高7.5mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第5号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北西部から南東部にかけては調査区域外へ延びているため、北西・南東軸4.18m、北東・南西軸3.65mしか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定できるが、主軸方向は不明である。壁高は20~33cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部と推定できる範囲は踏み固められている。

貯蔵穴 南コーナー部に位置している。長径76cm、短径70cmの円形で、深さ60cm、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。貯蔵穴と床面を区画するように、幅40cm、高さ10cmのL字状の高まりが巡っている。

貯蔵穴土層解説

1 細 暗 色 ローム粒子少量、炭化粒子微量	3 極 暗 暗 色 ローム粒子微量
2 黒 暗 色 粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	4 黒 暗 色 粘土ブロック・ローム粒子微量

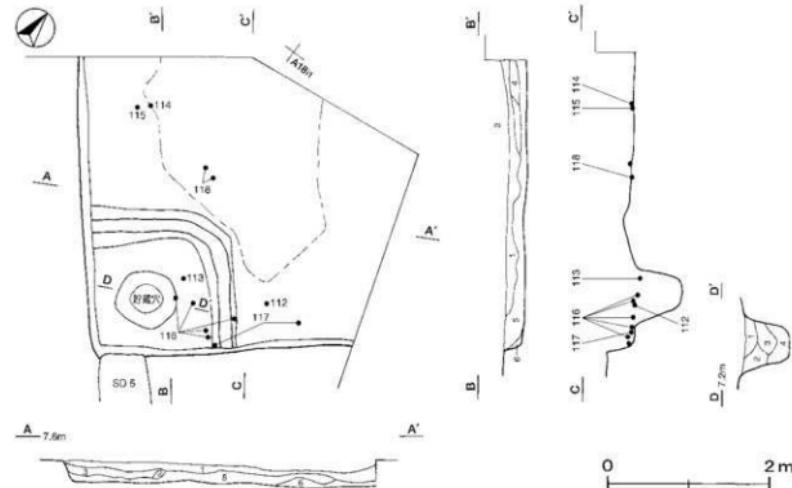
覆土 6層に分層できる。覆土下層にあたる第2・4・5層は、ロームブロックや粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。覆土上層にあたる第1・3層は、ローム粒子が主体であることから自然堆積である。

土層解説

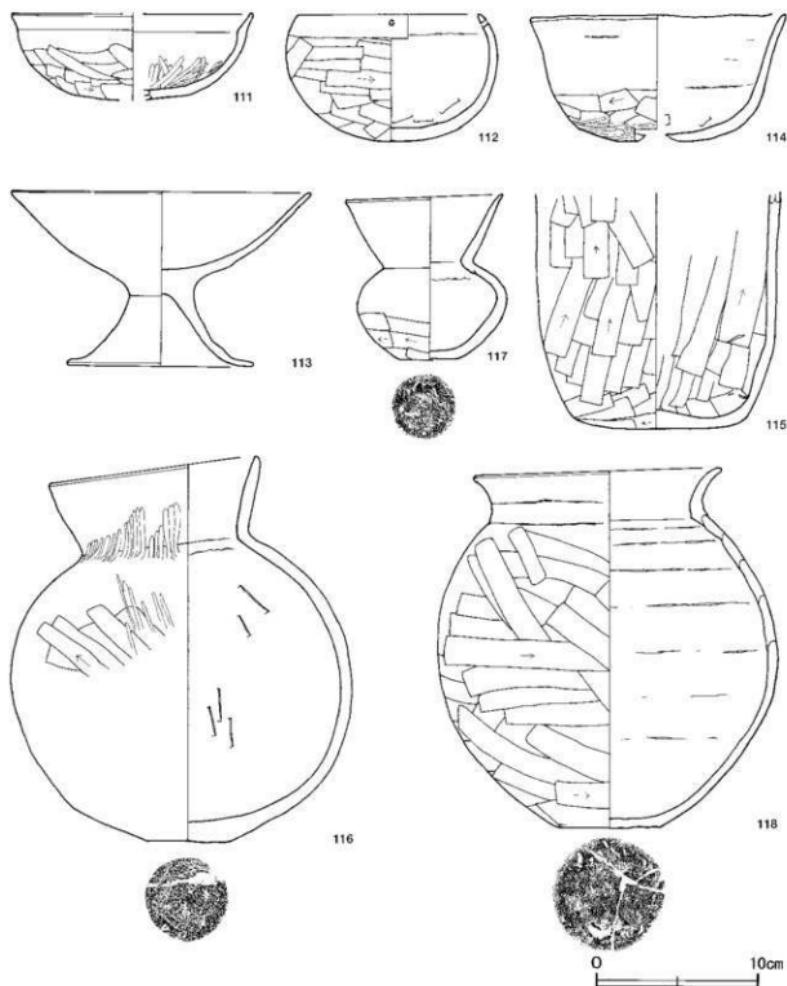
1 黒 暗 色 ローム粒子・炭化粒子微量	4 暗 色 ロームブロック少量
2 にほい黄色 粘土ブロック多量	5 暗 暗 色 ロームブロック・炭化粒子微量
3 黒 暗 色 ローム粒子微量	6 暗 暗 色 粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片193点（壺21、楕1、壙2、高壺11、鉢2、壺1、甕類154、瓶1）のほか、混入した繩文土器片15点（深鉢）、弥生土器片1点（壺）、軽石1点、剥片1点が出土している。114~115は西部、112~117は東部、113は貯蔵穴周辺の床面からそれぞれ出土している。118は中央部の床面から出土した破片が、116は貯蔵穴の覆土上層と貯蔵穴周辺の覆土下層からそれぞれ出土した破片が接合している。いずれも廃絶後の早い段階で投棄されたものとみられる。111は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀後葉に比定できる。



第32図 第30号住居跡実測図



第33図 第30号住居跡出土遺物実測図

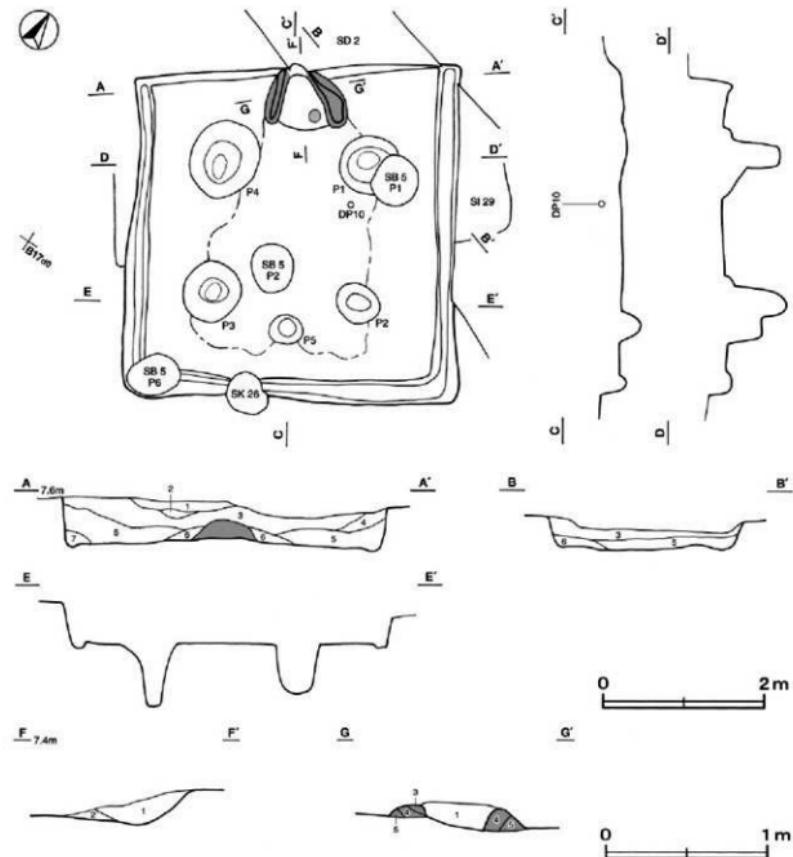
第30号住居跡出土遺物観察表（第33図）

番号	種 别	部 類	口 径	身 高	底 径	胎 土	色 调	焼 成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
111	土器	环	[14.7]	5.2	-	良石・石英・漂母・赤色粒子	にふい地	普通	体部外周横割のハラ削り 内面散射状のハラ削り	覆土中	20%
112	土器	碗	11.2	7.8	-	良石・石英・漂母	明暗	普通	体部外周横割のハラ削り 口縁部摩孔2か所	床面	90%
117	土器	罐	9.7	10.2	3.5	良石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部下半横位のハラ削り	床面	70%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
113	土師器	高环	18.5	10.7	11.5	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐	普通	二次焼成のため輪郭不明	床面	70% P1.19
114	土師器	鉢	15.5	7.8	-	長石・石英・雲母	にふい状模	普通	底部外周横位のヘラ削り 底部へラ削き 脇部に焼成後の空孔上り所	床面	70% P1.20
115	土師器	鉢	-	(14.5)	10.5	長石・石英・雲母	明黄褐	普通	体部外周横位のヘラ削り	床面	70% P1.20
116	土師器	甕	12.7	23.6	5.0	長石・石英・雲母	褐	普通	底部外周縦位のヘラ削り 底部へラ削き 上半に側面へラ削き 脇部へラ削り	覆土下層	90% P1.20
118	土師器	甕	15.0	22.1	6.2	長石・石英・雲母	明褐	普通	口縁部内面側へラ削き 体部横位のヘラ削り	床面	80% P1.20

第31号住居跡（第34・35図）

位置 2区中央部のB 17c0区、標高75mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。



第34図 第31号住居跡実測図

重複関係 第29号住居跡を掘り込み、第5号掘立柱建物、第2号溝、第26号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸420m、短軸4.06mの方形で、主軸方向はN-34°Wである。壁高は25~48cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部は踏み固められている。北西壁以外の壁下には、壁溝が巡っている。

竈 北西壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで86cmで、燃焼部幅は56cmである。袖部は粘土ブロック、粘土粒子を含んだ第3~5層を積み上げて構築されている。火床部は床面とはほぼ同じ高さを使用している。火床面はやや右袖寄りに位置しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は火床部から壁外へ10cm掘り込まれ、継やかに立ち上がっている。

竈土層解説

1	暗	褐	色	ローム粒子・粘土粒子微量	4	灰	褐	色	粘土ブロック少量、ローム粒子微量
2	暗	褐	色	ローム粒子・粘土粒子少量	5	灰	褐	色	ローム粒子・粘土粒子微量
3	赤	褐	色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量					

ピット 5か所。P1~P4は深さ62~80cmで、配置から主柱穴である。いずれも柱材が抜き取られているため、確認面の径は大きい。P5は深さ25cmで、南東壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと推定できる。

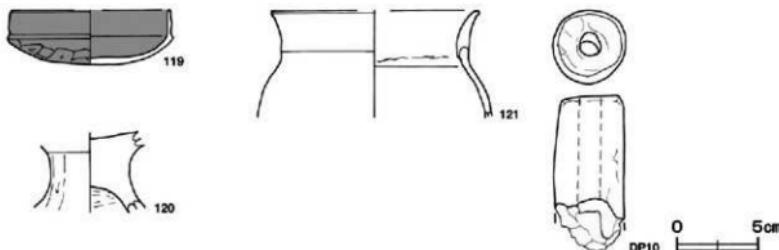
覆土 7層に分層できる。第4・6・7層は含有物が粒子主体であることから自然堆積で、第1・2・3・5層は含有物がブロック主体であることから埋め戻されている。

土層解説

1	暗	褐	色	ロームブロック・焼土粒子微量	4	黒	褐	色	ローム粒子微量
2	暗	褐	色	粘土粒子微量、ロームブロック微量	5	褐	褐	色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子微量
3	無	褐	色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	6	暗	褐	色	ローム粒子・粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片1310点（环103、高杯8、甕類1199）、須恵器片1点（环）、土製品7点（球状土錐6、管状土錐1）のはか、流れ込んだ繩文土器片86点（深鉢）、剥片1点、礫9点が出土している。DP10は中央部の覆土上層、119~121は覆土中からそれぞれ出土している。ほかの土器は細片のため図示できないが、覆土中層から上層にかけて多量に出土している。

所見 時期は、流れ込んだ出土土器から6世紀前葉に比定できる。



第35図 第31号住居跡出土遺物実測図

第31号住居跡出土遺物観察表（第35図）

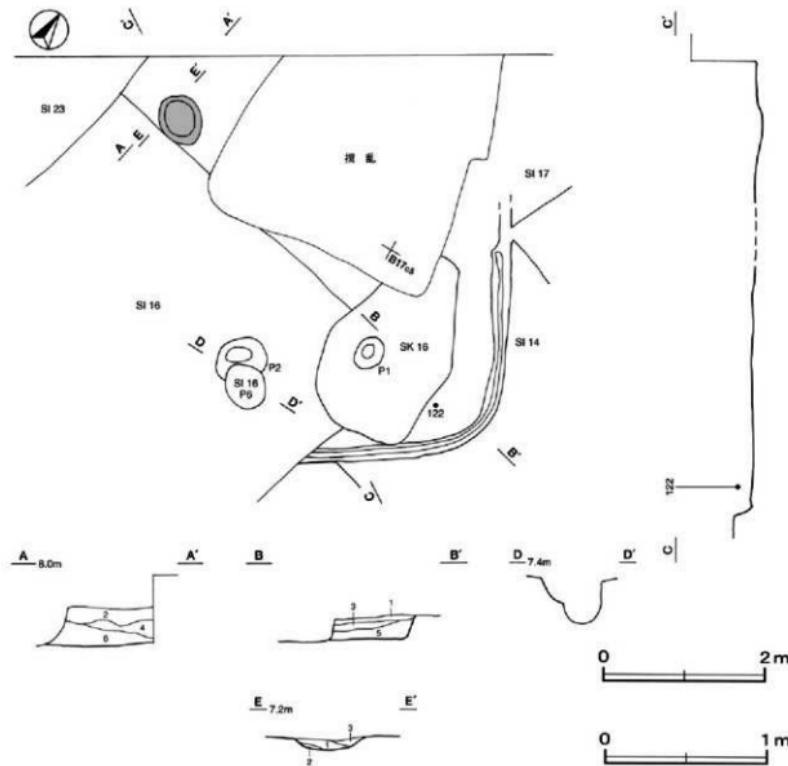
番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特徴 は か	出土位置	備考
119	土器器	环	[9.2]	3.4	-	石英・赤色粒子	褐	普通	体部横位のヘラ削り	覆土中	40%
120	土器器	高环	-	(4.8)	-	長石・石英・ 水色粒子	に赤い橙	普通	脚部横位のヘラ削り	覆土中	5%
121	土器器	甕	[12.6]	(6.6)	-	長石・石英・ 水色粒子	褐	普通	体部外・内面ナデ	覆土中	5%

番号	器種	大きさ	径	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DF10	管状土器	(9.5)	4.4	1.3	(182.7)	土(長石・石英・ 水色粒子)	表面わずかに指擦痕残る	覆土上層	P129

第32号住居跡（第36・37図）

位置 2区中央部のB 17b4区、標高7.5mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第14・16・17・23号住居、第16号土坑に掘り込まれている。



第36図 第32号住居跡実測図

規模と形状 北部が調査区域外へ延びており、北東部が擾乱を受けていることや南部から西部にかけては第16・23号住居などに掘り込まれていることなどから、北西・南東軸5.00m、北東・南西軸4.58mしか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定できるが、主軸方向は不明である。壁高は21~30cmで、外傾して立ち上がっている。

床 遺存状況が不良のため、一部が確認できただけである。ほぼ平坦であるが、踏み固められた痕跡は確認できなかった。東コーナー部付近の壁下には、壁溝が巡っている。

炉 中央部と推定できる位置に付設されている。長径66cm、短径50cmの楕円形で、床面を5cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は火を受けて赤変硬化している。

土層解説

- 1 黒 色 ローム粒子・焼土粒子少量
2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量

- 3 暗褐 色 ロームブロック少量

ピット 2か所。P1は深さ46cmで、東コーナー部付近に位置していることから主柱穴と推定でき、P2は深さ30cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと推定できる。

覆土 6層に分層できる。ロームブロックが多量に含まれていることから埋め戻されている。

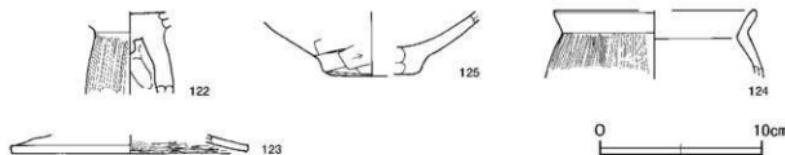
土層解説

- 1 灰 色 ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
焼土粒子微量
2 黑 褐 色 ロームブロック少量・焼土粒子微量
3 褐 色 ロームブロック中量・炭化物微量

- 4 極暗褐色 ロームブロック・燒土ブロック少量
5 暗褐色 ロームブロック中量
6 暗褐色 ロームブロック少量・焼土ブロック・
炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片100点(坏7、器台2、高坏4、甕類87)のほか、混入した繩文土器片11点(深鉢)、羽片1点が出土している。122は東コーナー部付近の覆土上層、123~125は覆土中からそれぞれ出土している。いずれも廃絶後に投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から5世紀前葉に比定できる。



第37図 第32号住居跡出土遺物実測図

第32号住居跡出土遺物観察表(第37図)

番号	種 别	器 形	口 径	器 高	底 径	胎 土	色 調	燒 成	手 法 の 特 徴 ほ か	出 土 位 置	備 考
122	土師器	高坏	-	(5.1)	-	長石・石英・漂母・ 赤色粒子	褐	普通	脚部縦横のハラ削き 内面指圧痕	覆土上層	10%
123	土師器	高坏	-	(1.1)	[14.4]	長石・石英・漂母	褐灰	普通	底部内面横段のハケ目	覆土中	5%
124	土師器	甕	[12.4]	(4.2)	-	長石・石英	明赤褐	普通	体部縦横のハラ削き	覆土中	5%
125	土師器	甕	-	(3.9)	[6.0]	長石・石英・漂母	褐灰	普通	体部下端横段のハラ削り 底部木薙痕	覆土中	5%

第34号住居跡(第38・39図)

位置 2区北東部のA179区、標高7.5mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第33・35・38号住居、第7号掘立柱建物、第48号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北部が第35号住居、南部が第33号住居、西部が第38号住居などに掘り込まれているため、東

西軸は3.75mで、南北軸は2.58mしか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定できるが、主軸方向は不明である。壁高は10~15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 南西部のみ若干低くなっているが、ほぼ平坦である。中央部が踏み固められている。

覆土 3層に分層できる。不自然な堆積状況から埋め戻されている。

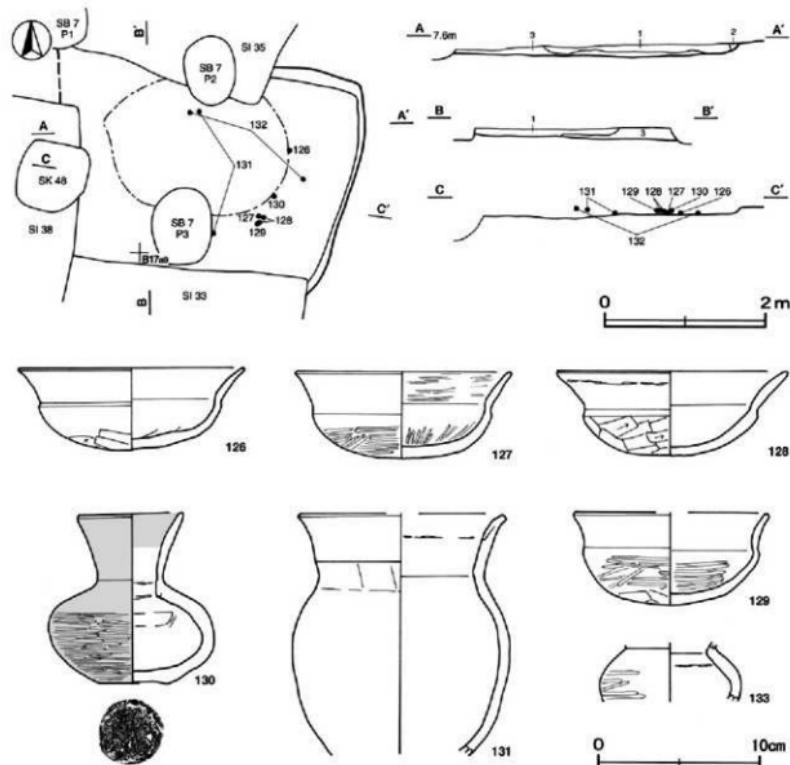
土層解説

- 1 稲 帽 褐 色 ロームブロック微量
2 褐 色 ローム粒子少量

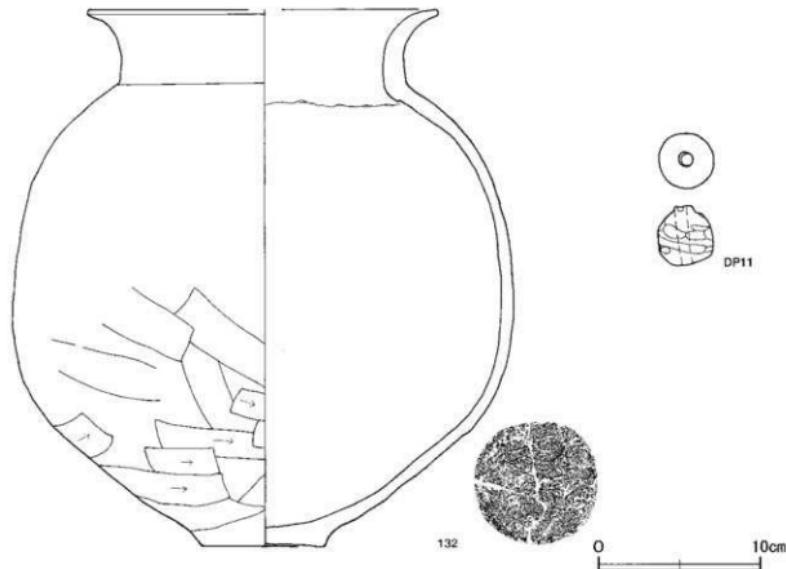
- 3 帽 褐 色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土器片293点（壺42、壺1、甕類249、ミニチュア1）、土製品1点（球状土錘）のほか、混入した縄文土器片1点（深鉢）、礫8点が出土している。132は東部の床面と中央部の覆土上層、131は中央部の覆土上層と南部の覆土下層から出土した破片がそれぞれ接合しているほか、126~130は東部の覆土下層からそれぞれ出土しているなど、中央部から東部にかけて多量の土器片が散在して出土している。133・DP11は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀前葉に比定できる。



第38図 第34号住居跡・出土遺物実測図



第39図 第34号住居跡出土遺物実測図

第34号住居跡出土遺物観察表（第38・39図）

番号	種別	器種	口径	脚高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
126	土師器	鉢	13.8	5.0	-	長石・石英	明赤褐色	普通	体部下端から底部へラ筋引き	覆土下層	80%
127	土師器	鉢	13.1	5.4	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	口縁部内面側位のヘラ削き 体部外側側位のヘラ削き 内面放射状のヘラ削き	覆土下層	80% P1.18
128	土師器	鉢	14.1	5.3	-	長石・石英・雲母・小繊維	にぶい赤褐色	普通	体部側位のヘラ削り	覆土下層	70% P1.18
129	土師器	鉢	[11.7]	5.7	-	長石・石英・水色粒子	にぶい橙褐色	普通	体部外・内面側位のヘラ削り 底部ヘラ削り	覆土下層	50%
130	土師器	鉢	6.5	10.5	4.1	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	明赤褐色	体部下端横位のヘラ削き	覆土下層	100% P1.18
131	土師器	鉢	[12.6]	(14.8)	-	長石・石英・雲母・水色粒子・小繊維	明赤褐色	普通	底盤による調整不明	覆土下層 覆土上層	60%
132	土師器	鉢	[21.4]	33.0	7.4	長石・石英・雲母	橙褐色	普通	体部下端横位のヘラ削り 底部ヘラ削り	床面	50%
133	土師器	ミニチュア	-	(3.9)	-	長石・石英	にぶい橙褐色	普通	体部下端横位のヘラ削き	覆土下層	10%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP11	埴生土錠	3.3	3.6	0.8	37.7	土(長石・石英・雲母)	表面一部ヘラ削き 一方向から穿孔	覆土中	

第36号住居跡（第40・41図）

位置 2区北東部のB 17b9区、標高75 mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第42号住居跡を掘り込み、第28・29・33号住居、第2号溝、第47号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南部は第28・29号住居に掘り込まれているため、東西軸は4.96 mで、南北軸は3.68 mしか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定できるが、主軸方向は不明である。壁高は13～22cmで、

外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部は踏み固められている。北西コーナー部付近の覆土下層から焼土塊と長さ25cmほどの炭化材が出土しているが、床は焼けていない。

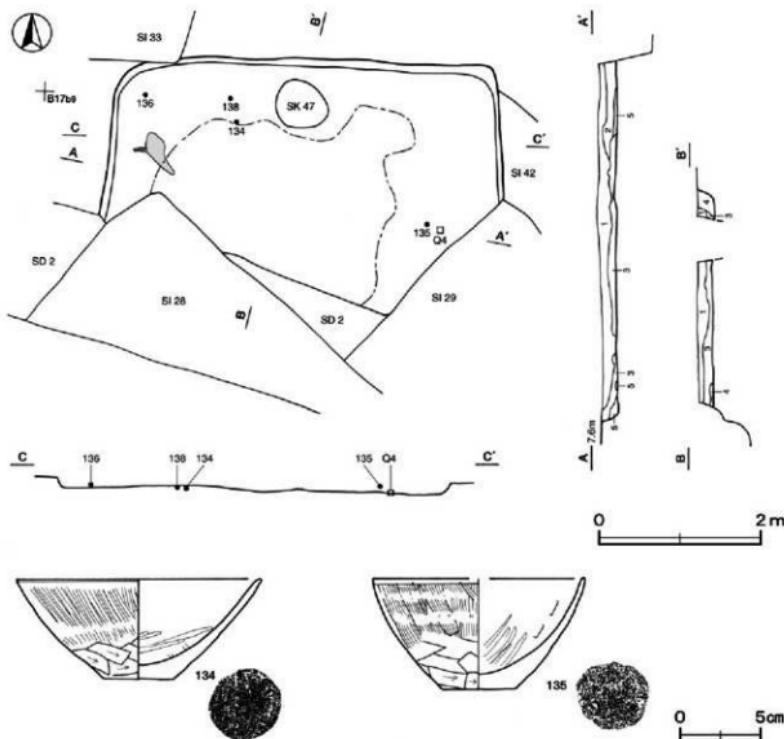
覆土 5層に分層できる。不自然な堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

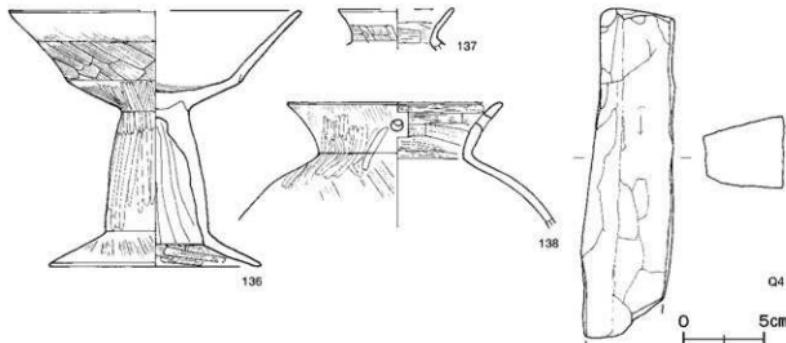
1	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	4	褐色	ロームブロック中量
2	暗褐色	炭化物・ローム粒子微量	5	褐色	ロームブロック少量
3	無色	褐色			炭化物・ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片123点(坏26、楕4、埴9、高坏27、甕類57)、石器1点(砥石)のほか、混入した繩文土器片95点(深鉢)、甕4点が出土している。134は北部、Q4は東部の床面から、136は北西コーナー付近、135は東部の覆土下層からそれぞれ出土している。138は北部の床面と覆土中からそれぞれ出土した破片が接合している。いずれも廃施後の早い段階で投棄されたものとみられる。137は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀前葉に比定できる。床は焼けていないが、焼土塊や炭化材の出土状況から焼失住居の可能性がある。



第40図 第36号住居跡・出土遺物実測図



第41図 第36号住居跡出土遺物実測図

第36号住居跡出土遺物観察表（第40・41図）

番号	種別	器種	口径	部高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴は	出土位置	備考
134	土師器	碗	15.0	6.2	4.3	長石・石英・雲母	黒	普通	外縁横窓のハケ目後、相いへう焼き 下縁横窓のハケ目後、内縁横窓のハケ目後	床面	100%
135	土師器	碗	[13.0]	6.8	4.3	長石・石英・雲母	黒	普通	外縁横窓のハケ目後、相いへう焼き 下縁横窓のハケ目後、内縁横窓のハケ目後	覆土下層	50%
136	土師器	高杯	[17.8]	15.7	12.9	長石・石英・雲母	に赤い模様	普通	外縁横窓のハケ目後、下縁横窓のハケ目後 内縁ハケ目後、脚部窓部のハケ目後	覆土下層	70% PL19
137	土師器	甕	[7.0] (2.5)	-	-	長石・雲母・半透明粒子	に赤い模様	普通	口縁部から体部斜窓のハケ目後、相いへう焼き 内縁窓部のハケ目後	覆土中	20%
138	土師器	甕	13.2	7.6	-	長石・雲母	黒褐	普通	口縁部外縁横窓のハケ目後 内縁横窓のハケ目後、ナダ 内縁横窓のハケ目後、相いへう焼き	床面 ナダ 白縁黒燒成窓の穿孔	30%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 4	石	(20.0)	5.8	4.3	766.0	粘板岩	剥離激しく研磨面のみ遺存	床面	PL29

第40号住居跡（第42図）

位置 2区東部のB 18c1区、標高 7.5 m の河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第37号住居、第2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 大半が調査区域外へ延びているため、東西軸 2.60 m、南北軸 2.21 m しか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定できるが、主軸方向は不明である。壁高は 58 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、踏み固められた痕跡は確認できなかった。

貯蔵穴 北西コーナー部に位置している。長軸 110 cm、短軸 78 cm の隅丸長方形で、深さ 50 cm、底面は平坦である。壁はほぼ直立している。

貯蔵穴土層解説

1	無暗褐色	ローム粒子微量	4	無暗褐色	ロームブロック少量
2	暗褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック微量	5	に赤い模様	粘土ブロック少量
3	褐色	ロームブロック少量	6	黒褐色	炭化物微量、粘土ブロック微量

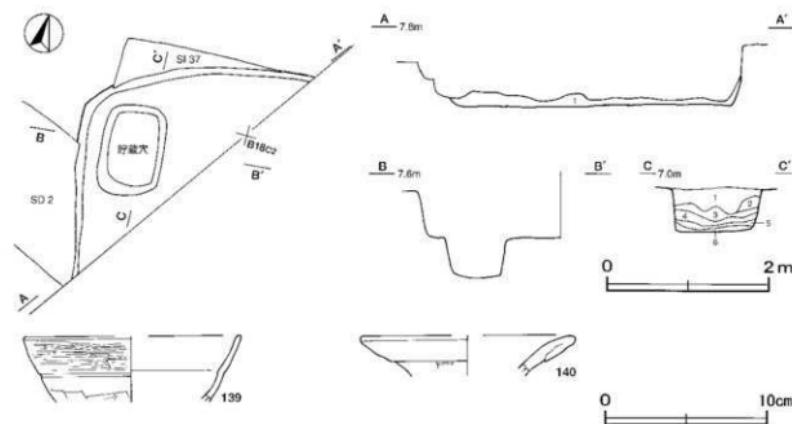
覆土 上部に第37号住居が構築されているため、下部の1層しか確認できなかった。含有物はローム粒子が主体であることから自然堆積とみられる。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子微量
---	-----	---------

遺物出土状況 土師器片 29 点（碗 1, 壺 1, 壺類 27）のほか、流れ込んだ縄文土器片 12 点（深鉢）、弥生土器片 2 点（壺）が出土している。139・140 は覆土中からそれぞれ出土している。ほかの出土土器は細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器から 4 世紀前半に比定できる。



第 42 図 第 40 号住居跡・出土遺物実測図

第 40 号住居跡出土遺物観察表（第 42 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	はか	出土位置	備考
139	土師器	碗	[D]3.4]	(4.0)	-	具石・雲母	褐	普通	口縁部外側裏のへき離き 体部裏のへき離	はか	覆土中	10%
140	土師器	壺	[D]3.0]	(2.5)	-	具石・石英・雲母	明赤褐	普通	頸部外側ハケ日後、ナデ	はか	覆土中	5%

第 42 号住居跡（第 43 図）

位置 2 区北東部の B 17b0 区、標高 75 m の河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第 29・36 号住居、第 2 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 西部が第 29・36 号住居に掘り込まれているため、北西・南東軸 5.30 m、北東・南西軸 0.94 m しか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定できるが、主軸方向は不明である。壁高は 10 ~ 18 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、踏み固められた痕跡は確認できなかった。

覆土 3 層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積である。

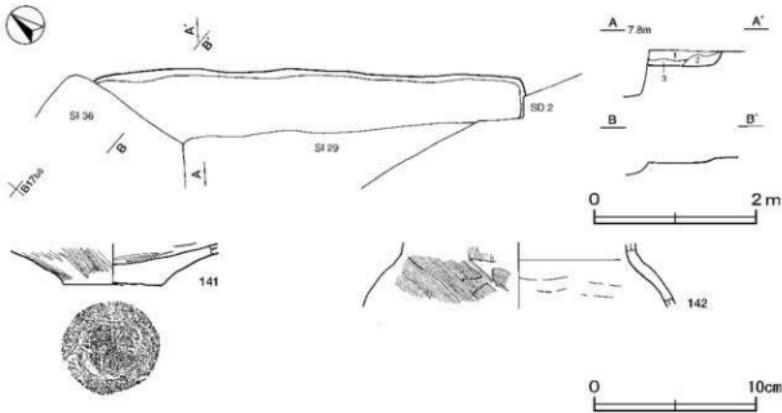
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量
- 2 黑褐色 炭化物・ローム粒子・燒土粒子微量

- 3 黒褐色 ロームブロック・燒土粒子微量

遺物出土状況 土師器片 53 点（器台 1、壺 1、壺類 51）のほか、流れ込んだ縄文土器片 18 点（深鉢）、弥生土器片 4 点（壺）も出土している。141・142 は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、重複関係や出土土器から 4 世紀代に比定できる。



第43図 第42号住居跡・出土遺物実測図

第42号住居跡出土遺物観察表（第43図）

番号	種別	部種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特徴 は か	出土位置	備考
141	土師器	壺	-	(2.6)	6.0	長石・石英・雲母・水色粒子	明赤褐	普通	体部下端窓のハナ削き	覆土中	10%
142	土師器	壺	-	(4.0)	-	長石・石英・雲母	明褐	普通	体部表面斜面のハナ削り	覆土中	5%

表4 古墳時代住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m)		床面	壁構	内 部 施 設			覆土	主な出土遺物	時 期	備考	
				(長軸×短軸)	壁高 (cm)			木柱穴	通人門	竪窓					
1	B1762	N - 72° - W	方 形	4.94 × 4.64	26~35	平組	全面	4	-	1 竪 1	-	人 为 土師器、原壺器	7世紀後葉	本跡→SK3-2, PG1	
2	B1765	N - 36° - W	[長方形]	(4.97) × 4.76	27~35	平組	-	-	-	伊 7	1	人 为 土師器	4世紀前半	本跡→SK2, SK9	
8	B1756	N - 50° - E	長方形	6.00 × 5.18	8~27	平組	全面	-	1	3	-	1 人 为 土師器、球状土器	5世紀後葉	本跡→SK4-25~39, SK17-19~31~44, SD2	
18	B1769	N - 27° - E	[方形-長方形]	5.35 × (5.20)	30~35	平組	一部	3	-	-	竪 1	-	人 为 土師器	6世紀後葉	本跡→SK3-19~22, SK20
20	B1767	N - 20° - W	方 形	5.44 × 5.03	45~50	平組	全面	4	1	1 竪 1	1	人 为 土師器、球状土器	6世紀後葉	本跡→SK12~15	
22	B1768	N - 58° - W	[方形-長方形]	5.32 × (4.28)	23~32	平組	-	-	-	竪 1	-	人 为 土師器	6世紀後葉	本跡→SK14~16~17, SK20	
28	B1759	N - 50° - W	長方形	4.78 × 4.18	30~33	平組	-	4	1	1 竪 1	1	自然 土師器、原壺器、球状土器、石製品	6世紀前葉	SD29~36→本跡→SD24, SK20, SD2	
29	B1760	N - 41° - W	方 形	4.85 × 4.58	48~60	平組	-	-	-	伊 1	1	自然 土師器	5世紀中葉	SD26~42→本跡→SD24~28~31, SK4~5, SD2	
30	A1759	-	[方形-長方形]	(4.18) × (3.65)	20~33	平組	-	-	-	-	1	自然 土師器	5世紀後葉	本跡→SD5	
31	B1760	N - 34° - W	方 形	4.20 × 4.06	25~48	平組	一部	4	1	-	竪 1	-	自然 土師器、原壺器、人 为 瓦狀土器	6世紀前葉	SD29~4~5→SD5, SD2, SK26
32	B1764	-	[方形-長方形]	(5.00) × (4.58)	21~30	平組	一部	1	1	-	伊 1	-	人 为 土師器	5世紀前葉	本跡→SK14~16~17~23, SK16
34	A1759	-	[方形-長方形]	(3.75) × (2.58)	10~15	平組	-	-	-	-	-	人 为 土師器、球状土器	6世紀前葉	本跡→SK33~35~38, SK7, SK48	
36	B1769	-	[方形-長方形]	4.96 × (3.68)	13~22	平組	-	-	-	-	-	人 为 土師器、砾石	5世紀前葉	SD42~本跡→SD28~33, SD2, SK47	
40	B18c1	-	[方形-長方形]	(2.60) × (2.21)	58	平組	-	-	-	-	1	自然 土師器	4世紀前葉	本跡→SK37, SD2	
42	B1760	-	[方形-長方形]	(5.30) × (0.94)	10~18	平組	-	-	-	-	-	自然 土師器	4世紀代	SD2	

2 奈良時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡6棟、土坑3基、溝跡1条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第12号住居跡（第44図）

位置 2区中央部のB 17d6区、標高7.5mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第11・13号住居に掘り込まれている。

確認状況 遺構を確認した段階で、床の上部は削平されているため、下部構造しか確認できなかった。

規模と形状 南北軸3.12m、東西軸3.06mの方形で、主軸方向は不明である。確認面から底面までの深さは2~3cmが遺存しており、壁は外傾して立ち上がっている。

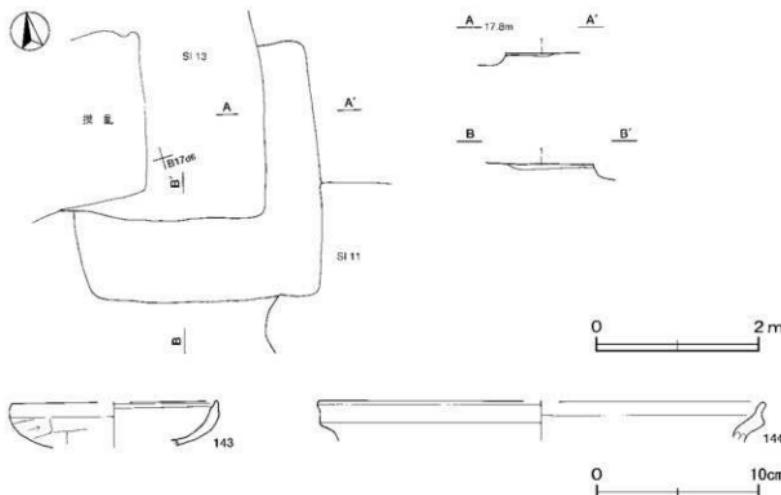
床 貼床の構築土1層のみを確認した。

貼床土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片146点（壺14、甕類132）、須恵器片51点（壺27、高台付壺2、蓋9、瓶1、甕類12）のほか、繩文土器片8点（深鉢）が出土している。143・144を含めた出土土器は、いずれも貼床の構築土内から出土しているもので、混入したものである。

所見 時期は、貼床の構築土から出土した土器や重複関係から8世紀前半と推定できる。



第44図 第12号住居跡・出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表（第44図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
143	土師器	环	口2.6	(2.7)	-	長石・石英・雲母	に赤い黄澄	普通	体部横位のヘラ削り	粘土構造土内	10%
144	土師器	壺	口2.4	(2.4)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ	粘土構造土内	5%

第13号住居跡（第45・46図）

位置 2区中央部のB 17c6区、標高7.5mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第12号住居跡を掘り込み、第14号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.68m、短軸3.00mの長方形で、主軸方向はN-77°Wである。遺存している壁高は20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。遺存している壁下には、壁溝が巡っている。

竈 第14号住居に掘り込まれているため、掘方の一部が確認できただけである。西壁のやや北西コーナー部寄りに付設されている。長径68cm、短径60cmの楕円形で、深さ16cm、底面は皿状である。

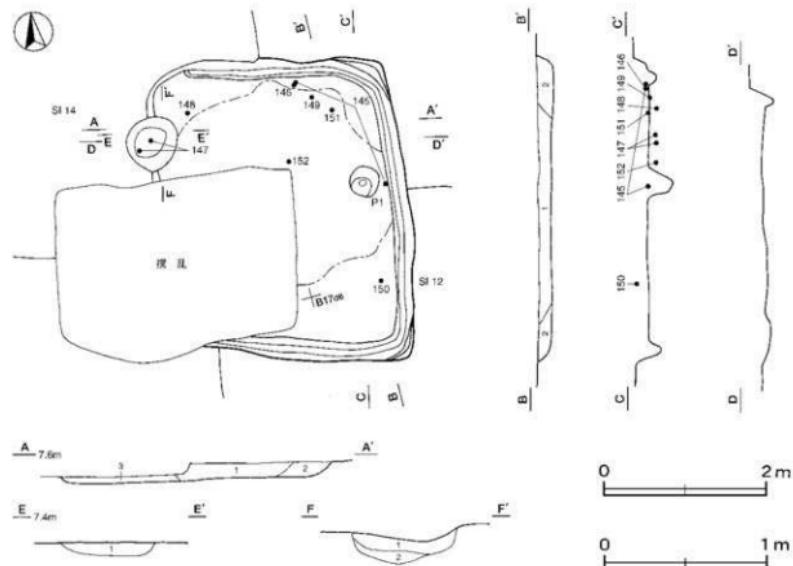
電磁方土層解説

1 黒褐色 烧土ブロック、炭化物、粘土粒子少量。
ロームブロック微量

2 暗褐色 烧土ブロック、粘土ブロック、炭化物、
ローム粒子少量

ピット P1は深さ32cmで、東壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットとみられる。

覆土 3層に分層できる。各層にロームブロックを含んでいることから埋め戻されている。



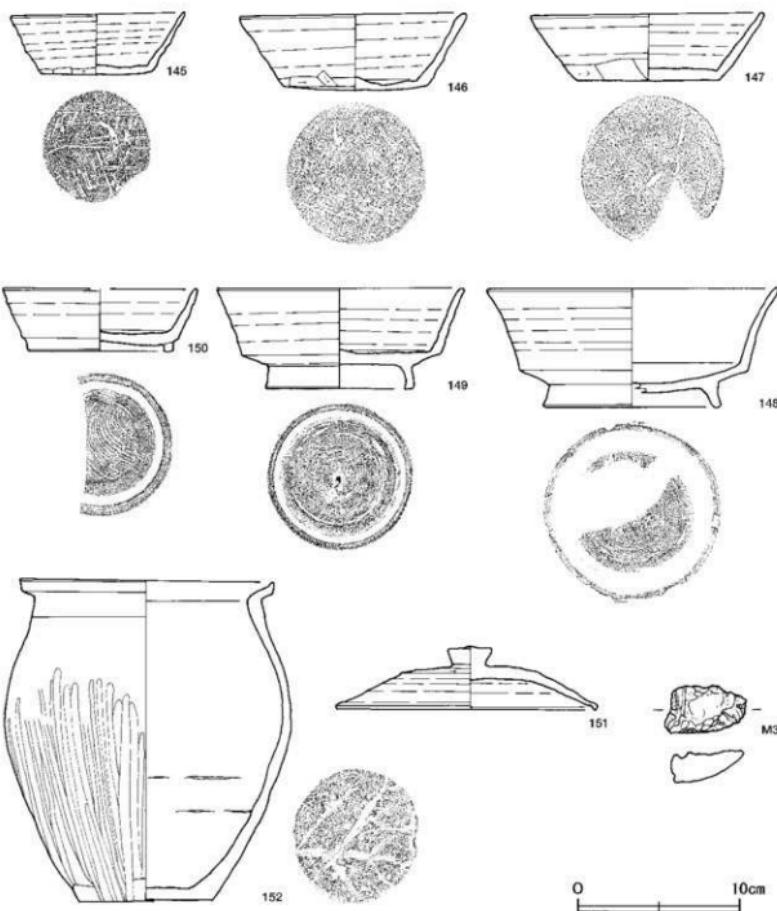
第45図 第13号住居跡出土遺物実測図

土層解説

- 1 無暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
 2 無暗褐色 ロームブロック微量
 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック
 微量

遺物出土状況 土師器片 125 点（坏 27, 壺類 98）、須恵器片 81 点（坏 47, 高台付坏 6, 蓋 3, 盤 12, 高盤 2, 壺類 11）、楕状溝 1 点のほか、流れ込んだ縄文土器片 16 点（深鉢）、弥生土器片 1 点（壺）が出土している。145・146・149・151 は北東コーナー部付近、148 は北西コーナー部付近、152 は中央部の床面からそれぞれ出土している。いずれも廃絶後の早い段階で投棄されたものとみられる。147 は竪掘方の覆土中層、150 は南東コーナー付近の覆土上層、M3 は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 8 世紀後葉に比定できる。



第 46 図 第 13 号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表（第46図）

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
145	灰窓器	杯	10.7	4.0	6.8	良石・石英・雲母	黄灰	良好	底部下端手打ちへラ削り 底部回転へラ削り 多方向のへラ削り	床面	90% PL.21
146	灰窓器	杯	13.8	4.8	8.7	良石・石英	黄灰	良好	底部下端手打ちへラ削り 底部回転へラ削り 一方削りへラ削り	床面	80% PL.21
147	灰窓器	杯	14.2	4.2	8.8	良石・石英	暗灰	良好	底部下端手打ちへラ削り 底部多方向のへラ削り	壁面 中盤	90% PL.21
149	灰窓器	高台付杯	15.0	6.2	8.9	良石・小礫	緑黄灰	良好	底部回転へラ削り後、高台貼り付け	床面	80% PL.22
148	灰窓器	高台付杯	17.8	7.3	10.6	良石・石英・白色粘土質物	灰	良好	底部回転へラ削り後、高台貼り付け	床面	90% PL.22
150	灰窓器	高台付杯	[11.8]	3.8	8.6	良石	灰	稍糊	底部回転手作り柱、周縁部回転へラ削り 高台貼り付け	覆土上層	40% PL.21
151	灰窓器	蓋	16.0	3.9	-	良石・石英・小礫・白色粘土質物	暗灰黄	良好	天井部回転へラ削り	床面	100% PL.22
152	土罐器	蓋	15.4	19.8	8.0	良石・石英・赤色粒子	灰	普通	底部下端位のへラ削り 底部木葉痕	床面	90% PL.23

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M.3	陶枕溝	5.0	2.9	2.0	39.8	陶	中核部は切断されている 表面は暗灰褐色で平滑、裏面は灰黄色で粗い	覆土中	

第16号住居跡（第47～50図）

位置 2区中央部のB 17c4区、標高75mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第32号住居跡を掘り込み、第14・15・23号住居、第16号土坑に掘り込まれている。第41号住居跡の床上に構築している。

規模と形状 長軸6.40m、短軸5.93mの不整形で、主軸方向はN-73°-Wである。壁高は34cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は、本跡よりも古い第41号住居跡の床面上にロームブロックを含んだ第20～27層を埋めて、その上部にロームブロックや粘土粒子、砂粒を含んだ第16・17・19層を平坦に薄く積み上げて構築されている。南壁と東壁の一部の壁下には、壁溝が巡っている。

竈 上部は第23号住居に掘り込まれているため、下部しか確認できなかった。遺存している規模は焚口部から煙道部まで50cmで、燃焼部幅30cmである。袖部は地山を三角状に削り出して基部としていることだけを確認した。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は赤変硬化していない。煙道部は壁外に16cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
2 暗褐色 焼土粒子少量、ロームブロック・粘土粒子微量

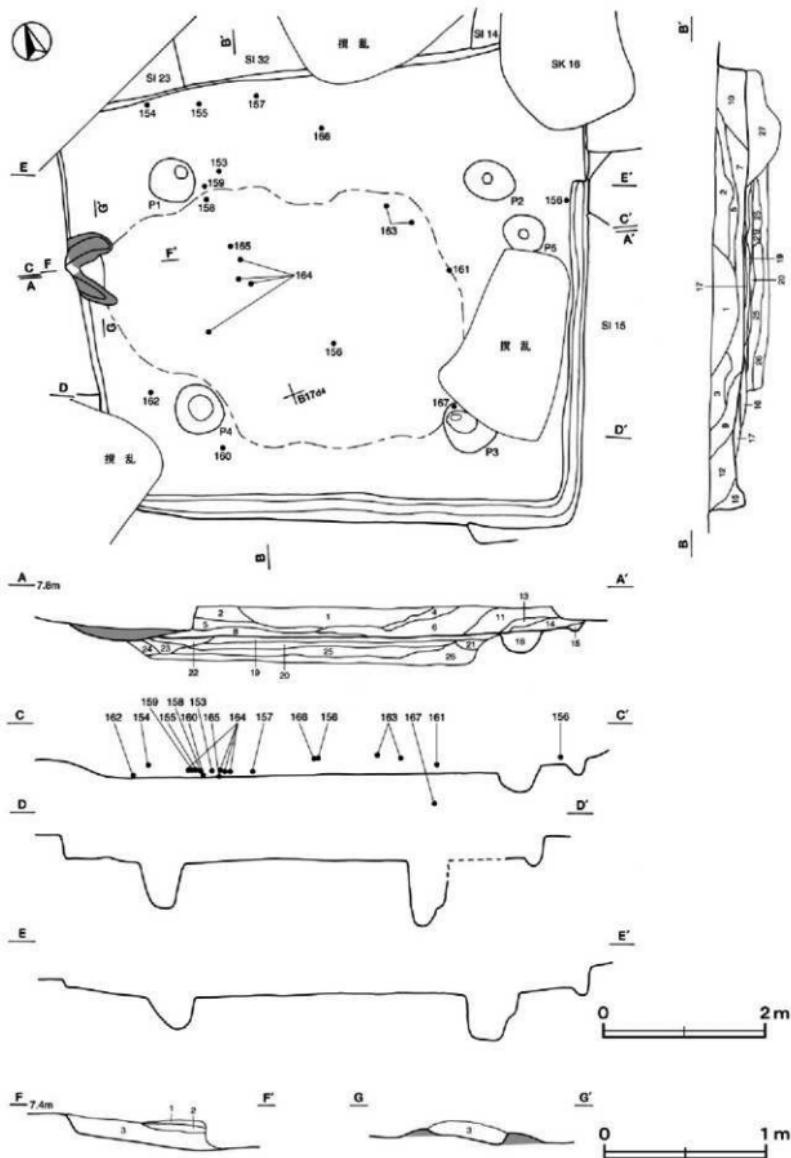
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土粒子微量

ピット P.1～P.4は深さ40～80cmで、配置から主柱穴である。P.5は深さ32cmで、東壁際のほぼ中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットとみられる。

覆土 15層に分層できる。不自然な堆積状況であることから埋め戻されている。第18層はP.5の土層で、第16・17・19～27層は貼床の構築土である。

土層解説

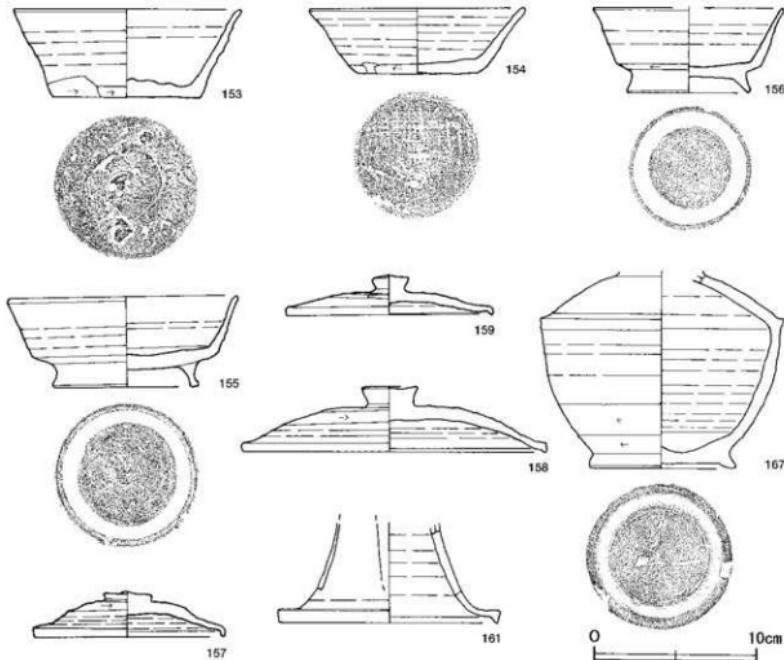
- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色 炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック・ローム粒子微量
- 3 暗褐色 烧土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量
4 暗褐色 ロームブロック中量
5 褐色 粘土ブロック・砂粒中量、烧土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 6 灰褐色 烧土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
7 黑褐色 烧土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量
- 8 暗褐色 烧土ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子少量
9 にぶい黄褐色 ローム粒子中量、燒土粒子少量、炭化物微量
10 暗褐色 粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
11 暗褐色 烧土粒子中量、粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック・炭化粒子微量
12 灰褐色 烧土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
13 にぶい黄褐色 ロームブロック・粘土粒子・砂粒中量
14 黑褐色 ロームブロック少量、烧土粒子・炭化粒子微量
15 黑褐色 ロームブロック・炭化粒子微量



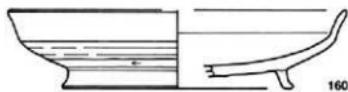
16	黒	褐	色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量	21	暗	褐	色	ロームブロック少量
17	黒	褐	色	焼土粒子・粘土粒子・砂粒中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量	22	赤	褐	色	焼土ブロック中量、粘土粒子少量、ローム粒子微量
18	暗	褐	色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量	23	赤	褐	色	ロームブロック・粘土粒子中量、ローム粒子少量
19	黒	色	色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量	24	灰	褐	色	粘土粒子多量、焼土ブロック・ローム粒子微量
20	黒	色	色	ロームブロック微量	25	黄	褐	色	ロームブロック多量
					26	青	リーフ色	色	ロームブロック微量
					27	黑	褐	色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒中量

遺物出土状況 土師器片 2250 点（坏 90、甕類 2160）、須恵器片 622 点（坏 344、高台付坏 23、蓋 66、盤 6、高盤 18、鉢 19、瓶類 1、甕類 143、瓶 2）、土製品 3 点（球状土錘 1、支脚カ 2）、鐵製品 2 点（刀子）が出土している。ほかに、覆土に混入した繩文土器片 62 点（深鉢）、弥生土器片 5 点（甕）、土師器片 14 点（高台付碗 7、器台 1、高坏 6）、石製品 1 点（鏡形未製品）、剝片 3 点、鐵片 8 点、瓦片 2 点、貼床の構築土内に混入した繩文土器片 3 点（深鉢）、土師器片 161 点（坏 13、甕類 151）、須恵器片 32 点（坏 12、蓋 3、盤 2、甕類 15）が出土している。165 は中央部、160 は南部の床面、167 は P 3 の覆土中層からそれぞれ出土している。153・158・159・164 は中央部、155・157 は北部、162 は南西部の覆土下層、156・161・163 は中央部、154・166 は北部の覆土上層、168・M 4・M 5 は覆土中からそれぞれ出土している。覆土上層から下層に廃絶時の埋め戻しの際に投棄されたものとみられる土器片が多量に出土している。

所見 本跡は第 41 号住居跡の床面に構築していることから、第 41 号住居跡から建て替えたものとみられる。時期は、出土土器から 8 世紀後葉に比定できる。



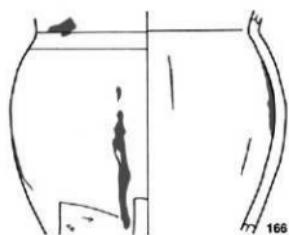
第 48 図 第 16 号住居跡出土遺物実測図（1）



160



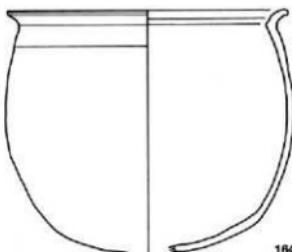
163



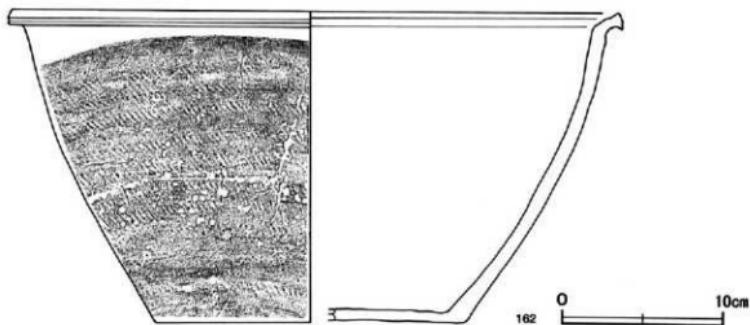
166



167



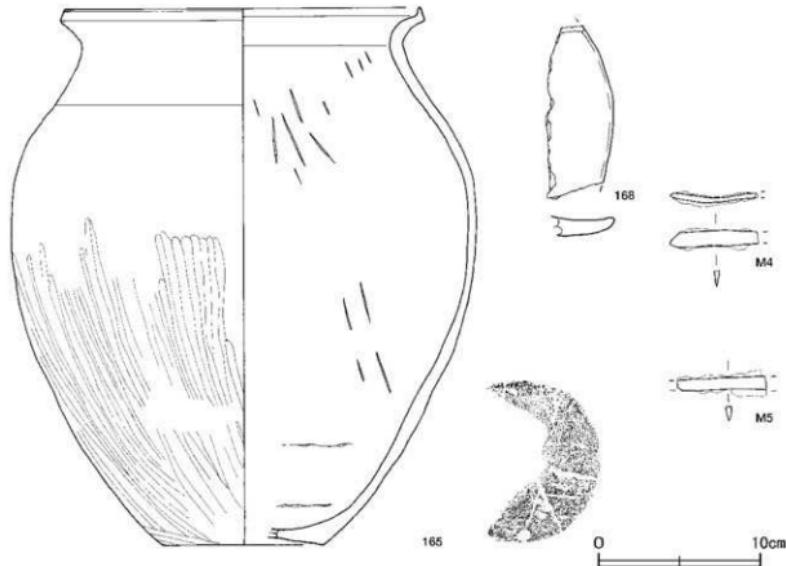
164



162

10cm

第49図 第16号住居跡出土遺物実測図(2)



第50図 第16号住居跡出土遺物実測図(3)

第16号住居跡出土遺物観察表(第48~50図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
153	瓶	壺	13.8	5.5	9.0	良石・石英・雲母・赤色粒子	にふい黄褐	普通	底部下端手摺りへラ削り 底部回転へラ削り 多方向へラ削り	覆土下層	80% P1.21
154	瓶	壺	13.0	4.0	7.4	良石・石英・雲母	黒灰	良好	底部下端手摺りへラ削り 底部回転へラ削り 多方向へラ削り	覆土上層	80% P1.21
155	瓶	高台付杯	14.0	5.6	8.8	良石・石英・雲母・白色粒子状物	灰	良好	底部回転へラ削り後、高台貼り付け	覆土下層	80% P1.22
156	瓶	高台付杯	[11.6]	5.2	7.4	良石・石英・雲母	黒灰	良好	底部下端手摺りへラ削り 底部回転へラ削り後、高台貼り付け	覆土下層	50% P1.22
157	瓶	壺	11.6	2.8	-	良石・石英	灰	良好	天井部回転へラ削り	覆土下層	10% P1.22
158	瓶	壺	18.6	4.1	-	良石・石英・雲母・黑色粒子	黒灰	良好	天井部回転へラ削り	覆土下層	90% P1.22
159	瓶	壺	12.6	2.4	-	良石・石英・白色粒子状物	黒灰	良好	天井部回転へラ削り	覆土下層	60% P1.22
160	瓶	壺	[20.6]	4.8	[14.0]	良石・石英・雲母	灰白	良好	底部下端回転へラ削り 底部回転へラ削り後、高台貼り付け	表面	40%
161	瓶	高壺	-	(6.2)	[13.4]	良石・石英	灰	良好	脚部外・内面クロコナデ	覆土上層	10%
162	瓶	壺	37.5	19.1	[19.2]	良石・石英・雲母	灰白	普通	底部斜位の平行引き 下端ナデ 底部へラ削り	覆土下層	70% P1.23
163	土師器	壺	14.0	16.2	8.4	良石・石英・雲母	にふい橙	普通	底部下横位の平行引き	覆土上層	80% P1.23
164	土師器	壺	17.2	14.9	-	良石・石英・雲母	黒褐	普通	底部下横位・内面ナデ	覆土下層	70% P1.23
165	土師器	壺	22.0	33.0	(9.6)	良石・石英・雲母・白色粒子	にふい橙	普通	底部下端回転のへラ削り 底部本業直	表面	40% P1.23
166	土師器	壺	-	(13.8)	-	良石・石英・雲母・白色粒子	にふい橙	普通	底部下端横位のへラ削り 外・内面突出付着	覆土上層	20% P1.22
167	瓶	壺	-	(12.1)	8.7	良石・黒色粒子	黒灰	良好	底部下端回転へラ削り 底部回転へラ削り後、高台貼り付け 自然釉 ヘラ記号「×」	P3 覆土中層	60% P1.22
168	土師質土器	羽釜	[20.6]	-	-	良石・石英・雲母	にふい橙	普通	脚部 横十字	覆土中	5 %

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 4	刀子	(5.5)	1.1	0.3	(6.2)	鉄	基部欠損	覆土中	
M 5	刀子	(5.6)	(0.8)	0.3	(8.7)	鉄	刃部・基部欠損	覆土中	

第 17 号住居跡（第 51 図）

位置 2 区中央部の B 17b5 区、標高 75 m の河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第 32 号住居跡を掘り込み、第 5・14 号住居、第 11 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 西部は調査区域外へ延びている。南部は擾乱を受け、第 14 号住居に掘り込まれており、本跡の床上に第 5 号住居が構築されているため、南北軸 3.32 m、東西軸 1.82 m しか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定され、主軸方向は不明である。

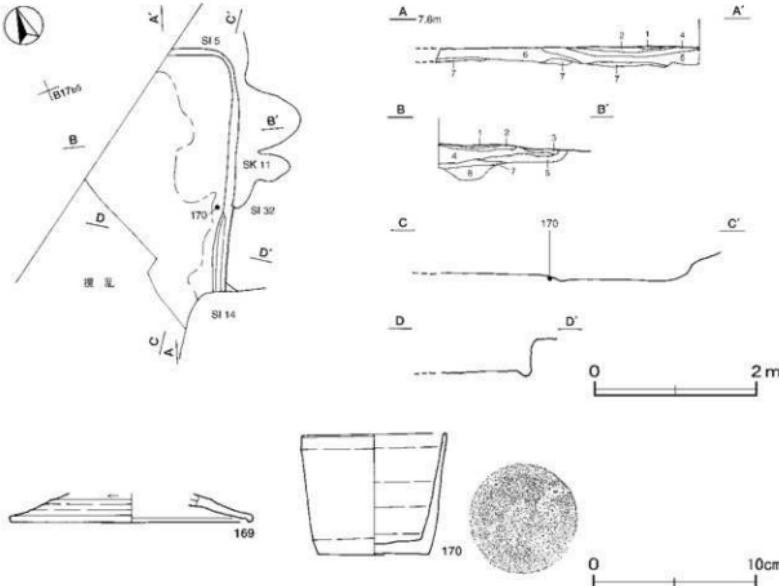
床 平坦な貼床で、壁際を除く範囲が踏み固められている。貼床の構築土は 8 層に分層できる。貼床は下部にロームブロックを主体とした第 4～8 層を埋めて、上部にロームブロックや粘土粒子、砂粒を含んだ第 1～3 層を積み上げて構築されている。遺存している壁下には、壁溝が巡っている。

貼床土層解説

1 にぬ 黄褐色	ロームブロック多量、粘土粒子・砂粒微量	5 黒褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
2 浅黄褐色	粘土粒子・砂粒多量、ロームブロック微量	6 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 黄褐色	ロームブロック多量	7 黒褐色	ロームブロック微量
4 紫褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量	8 灰褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 須恵器 1 点（コップ形土器）のほか、貼床の構築土内から縄文土器片 8 点（深鉢）、弥生土器片 1 点（壺）、土師器片 93 点（壺 2、壺 1、甕類 90）、須恵器片 33 点（壺 15、盤 2、蓋 3、甕類 13）が出土している。170 は東壁際の床面から出土しており、廃絶後の早い段階で投棄されたものとみられる。169 は貼床の構築土内から出土している。

所見 時期は、重複関係や出土土器から 8 世紀後葉と推定できる。



第 51 図 第 17 号住居跡・出土遺物実測図

第17号住居跡出土遺物観察表（第51図）

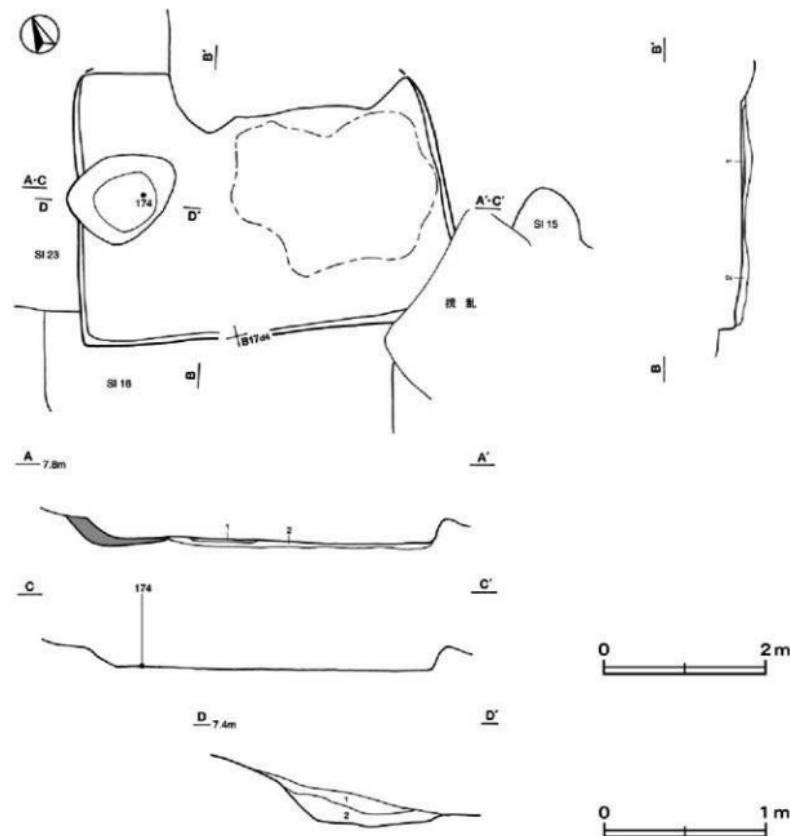
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
169	瓶	蓋	口15cm	(1.8)	-	長石・石英	灰	良好	天井部回転ヘラ削り	居住構造上 内	20%
170	瓶	コップ形上部	8.6	7.5	6.8	長石・石英 黒色粒子	灰	良好	体部ロクロナメ 底部ナメ	床面	20% PL.22

第41号住居跡（第52・53図）

位置 2区中央部のB 17c4 区、標高 75 m の河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 本跡の床上に第16号住居が構築されており、第15・23号住居に掘り込まれている。

規模と形状 第16号住居が上部に構築されたことで壁や北部が削平されているため、長軸は 4.56 m で、短軸は



第52図 第41号住居跡実測図

3.30mしか確認できなかった。平面形は長方形と推定でき、主軸方向はN-79°-Wである。壁高は28~30cmで、外傾して立ち上っている。

床 平坦な貼床で、中央部から東部にかけて踏み固められている。貼床は下部にロームブロックや炭化粒子を多量に含んだ第2層を、上部に粘土粒子を多量に含んだ第1層を中央部に薄く積み上げて構築されている。貼床の構築土は2層に分層できる。

貼床土層解説

1 黒褐色 粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量、
ローム粒子微量

2 褐色 ロームブロック・炭化粒子中量

窓 西壁に窓が付設されていた痕跡だけを確認した。遺存している平面形は長径140cm、短径100cmの梢円形で、深さ50cmである。覆土に粘土粒子や焼土ブロック、炭化物を含んでいるが、煙道部や火床部、袖部は遺存していない。

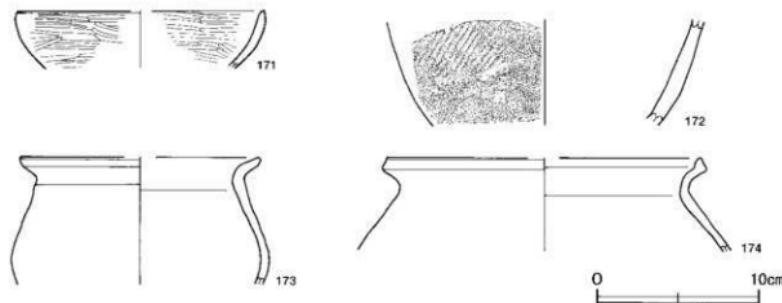
竪土層解説

1 細赤褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック少量、炭化物・
ローム粒子微量

2 細リーフ状 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片71点（壺1、甕類70）、須恵器片3点（壺、鉢、甕類）が出土している。ほかに、混入した繩文土器片1点（深鉢）が出土している。174は窓の覆土上層、173は窓の覆土中層からそれぞれ出土している。171・172は貼床の構築土内からそれぞれ出土しており、混入したものである。

所見 本跡の床上に第16号住居が構築されていることや、本跡と第16号住居の貼床の構築状況が類似していることから、本跡から第16号住居へ建て替えたものとみられる。時期は、出土土器から8世紀後葉に比定できる。



第53図 第41号住居跡出土遺物実測図

第41号住居跡出土遺物観察表（第53図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
171	土師器	壺	[15.2]	(3.5)	-	長石・赤色粒子	に赤い赤褐色	普通	体部外・内面横枝のヘラ書き	貼床構築土内	10%
172	須恵器	鉢	-	(6.5)	-	長石・石英・小穂	灰	良好	体部斜面の平行明き・下端ヘラ削り・内面へり	貼床構築土内	5%
173	土師器	甕	[14.8]	(7.8)	-	長石・石英・紫母・ 赤色粒子	明赤褐色	普通	体部外・内面ナメ	窓覆土中	5%
174	土師器	甕	[19.2]	(5.7)	-	長石・石英	に赤い相	普通	体部外・内面ナメ	窓覆土上層	5%

表5 奈良時代住居跡一覧表

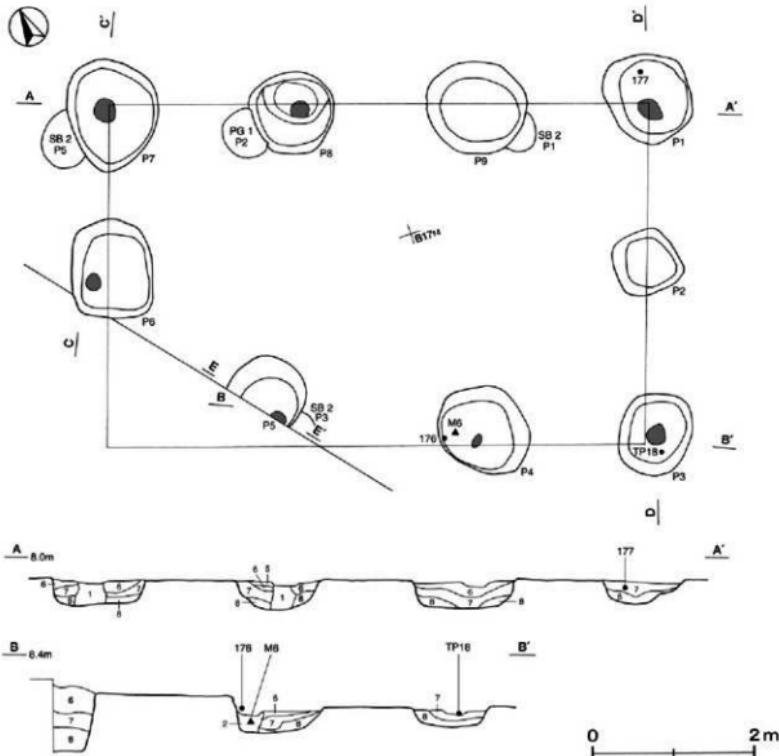
番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁構	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係 (古→新)
								柱穴	出入口	ビット群	壁・窓・軒窓穴				
12	B 17e6	-	【方・矩】	(3.12) × (3.06)	-	-	-	-	-	-	-	-	土師器、須恵器	8世紀後半	本跡 → SK11-13
13	B 17e6	N-77°-W	長方形	3.68 × (3.00)	20	平坦	一部	-	1	-	窓1	-	自然、陶器片	8世紀後半	SK12 → 本跡 → SK14
16	B 17e1	N-73°-W	不整方形	6.40 × 5.93	34	平坦	一部	4	1	-	窓1	-	人為、腰帶	8世紀後半	SK12-4-1 → 本跡 → SK16
17	B 17e5	-	【方形・長方形】	(3.32) × (1.82)	-	平坦	一部	-	-	-	-	-	土師器、須恵器、刀子	8世紀後半	SK13 → 本跡 → SK14-15-23, SK16
41	B 17e3	N-79°-W	【長方形】	(4.56) × (3.30)	28-30	-	-	-	-	-	窓1	-	土師器、須恵器	8世紀後半	本跡 → SK15-16-23

(2) 挖立柱建物跡

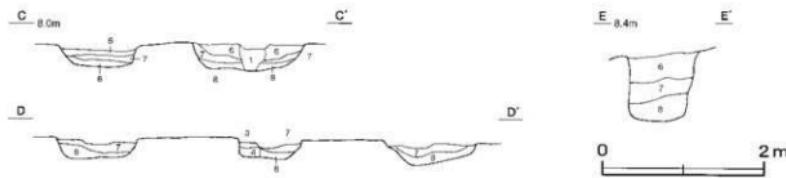
第1号掘立柱建物跡 (第54～56図)

位置 2区南部のB 17e3区、標高75 mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第2号掘立柱建物跡を掘り込み、第1号ビット群に掘り込まれている。



第54図 第1号掘立柱建物跡実測図 (1)



第55図 第1号掘立柱建物跡実測図（2）

規模と構造 南西部の柱穴が調査区域外に延びているが、桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向はN - 72° - Wの東西棟である。規模は桁行6.60m、梁行4.20mで、面積は27.72m²と推定できる。柱間寸法は桁行、梁行ともに2.10m（7尺）を基調とし、均等に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。

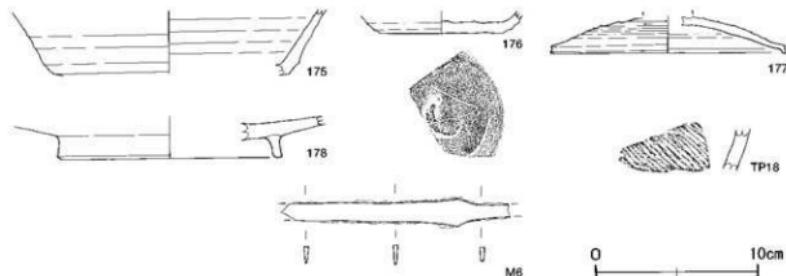
柱穴 9か所。平面形は梢円形または隅丸長方形で、長径80～140cm、短径80～110cmである。深さは15～38cmであるが、P 5は深さ88cmである。掘方の断面形は逆台形またはU字形である。P 1・P 3～8の底面では、径25cmほどの柱のあたりを確認した。土層は第1・8層が柱抜き取り痕で、第2～7層は埋土である。埋土はロームブロック、粘土ブロックを含んだ締まりの強い褐色土と黒褐色土である。

土層解説（各柱穴共通）

1 黄褐色	粘土ブロック少量、ロームブロック少量	5 にくい黄褐色	粘土ブロック少量、ロームブロック微量
2 黒褐色	ローム粒子微量	6 褐色	ロームブロック・粘土粒子微量
3 黑褐色	粘土ブロック少量、ローム粒子・燒土粒子微量	7 黑褐色	ロームブロック・粘土ブロック微量
4 褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック微量	8 褐色	ロームブロック微量、粘土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片5点（甕類）、須恵器片38点（环14、高台付坏1、蓋11、盤1、高盤1、甕類10）、鉄製品1点（刀子）のほか、混入した繩文土器片54点（深鉢）が出土している。177はP 1、178・TP18はP 3、176・M 6はP 4、175はP 9の埋土内からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉に比定できる。規模や構造から、「屋」としての機能が想定される。



第56図 第1号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第56図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
175	瓶	壺	-	(3.9)	-	石英・漂母	灰白	普通	クロコナデ	P9 埋土内	5%
176	瓶	壺	-	(1.4)	(7.6)	長石・石英・白色粒状物	灰黃	普通	瓶部回転ヘラ切り後、ナデ ヘラ記号「□」	P4 埋土内	10%
177	瓶	壺	(14.4)	(2.2)	-	長石・漂母	黃灰	普通	天井部回転ヘラ削り	P1 埋土内	20%

番号	種別	部種	口径	管高	底径	地土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
178	埴造器	盤	-	(2.5)	[13.4]	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	P3 理土内	5%
TP18	埴造器	蹄	-	(2.6)	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部斜位の平行叩き	P3 球土内	PL27

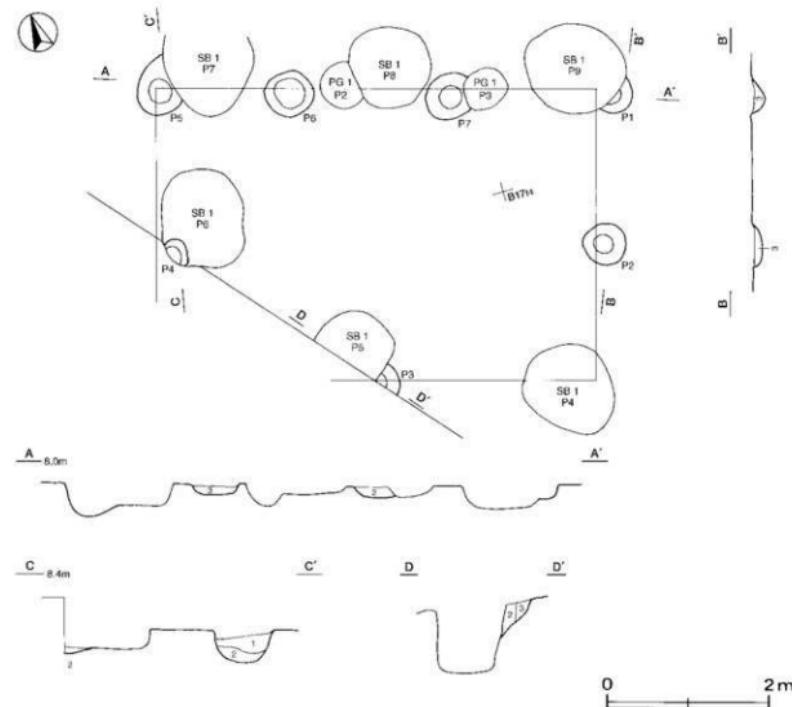
番号	部種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 6	刀子	(14.1)	1.6	0.3	(20.9)	鐵	両端部欠損 刃部前面三角形 葵部前面長方形	P4 球土内	PL29

第2号掘立柱建物跡（第57図）

位置 2区南部のB 17e3区、標高75mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第1号掘立柱建物、第1号ピット群に掘り込まれている。

規模と構造 南西部の柱穴が調査区域外に延びているが、桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向はN-73°Wの東西棟である。規模は桁行5.40m、梁行3.60mで、面積は19.44m²と推定できる。柱間寸法は桁行、梁行ともに1.80m（6尺）を基調とし、均等に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。



第57図 第2号掘立柱建物跡実測図

柱穴 7か所。第1号掘立柱建物跡に掘り込まれているため、遺存状況は不良である。平面形は円形または梢円形で、長径52～78cm、短径50～54cmが確認できただけである。深さは15～40cmで、掘方の断面形は逆台形またはU字形である。土層はすべて柱抜き取り後の覆土で、粘土ブロックやロームブロックを含んだ黒色土である。

土層解説（各柱穴共通）

1 黒 色	ロームブロック・粘土ブロック微量	3 暗褐色	ローム粒子少量
2 黒 色	ロームブロック・粘土粒子微量		

遺物出土状況 土師器片13点（壺類12、瓶1）、須恵器片2点（坏、蓋）が出土しているが、細片のため図示できない。

所見 本跡を掘り込んでいる第1号掘立柱建物と桁行方向がほぼ同じであることから、建て替えが想定できる。時期は、第1号掘立柱建物よりも古い8世紀前半と推測できる。

第3号掘立柱建物跡（第58・59図）

位置 2区南部のB17d2区、標高7.5mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第1号住居跡を掘り込み、第6・23号住居、第2・4・25・49号土坑、第1号ピット群に掘り込まれている。

規模と構造 北部から西部にかけては調査区域外へ延びているため、南北・東西軸とともに3問しか確認できなかつた。構造は柱穴の配列から側柱建物跡で、東西軸方向はN-73°-Wである。規模は南北・東西軸ともに5.40mで、面積は29.16m²以上である。柱間寸法は桁行、梁行ともに1.80m（6尺）を基準とし、均等に配置されている。柱筋はほぼ描っている。

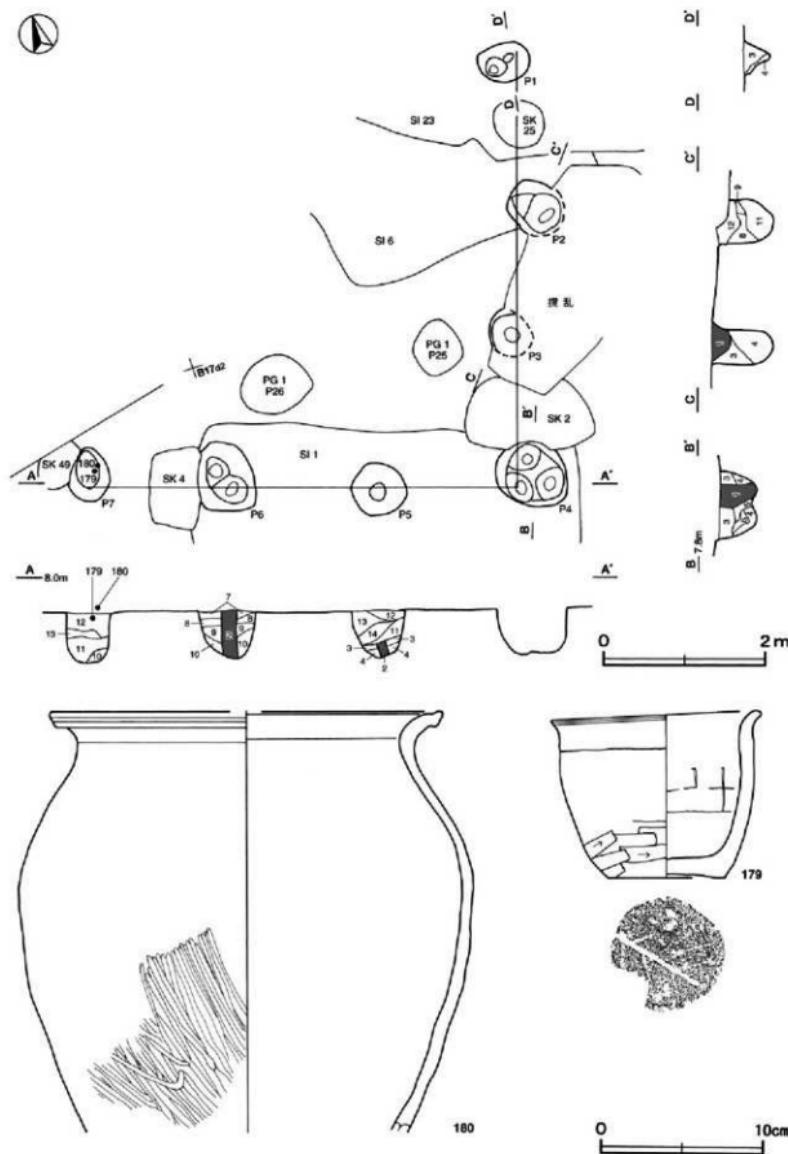
柱穴 7か所。第6・23号住居などに掘り込まれているため、遺存状況は不良である。平面形は円形または梢円形で、長径60～94cm、短径48～78cmである。遺存している深さは44～72cmで、掘方の断面形はU字形である。土層は第1・2層が柱痕跡、第3～11層は埋土、第12～14層は柱抜き取り後の覆土である。埋土は締まりの強いロームブロックや粘土ブロックを主体とした黒色土や暗褐色土である。

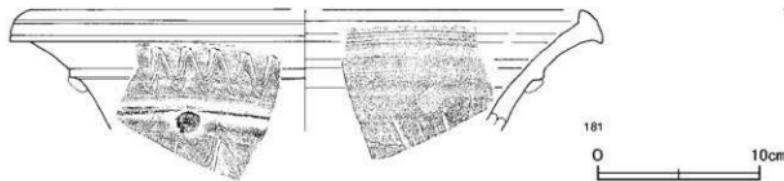
土層解説（各柱穴共通）

1 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土ブロック微量	8 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土粒子微量
2 黒 色	ローム粒子・粘土粒子微量	9 黒褐色	ロームブロック・粘土粒子少量、焼土ブロック微量
3 にぶい褐色	ロームブロック・粘土ブロック・砂粒少量、焼土ブロック・炭化物微量	10 黒褐色	ローム粒子・粘土粒子微量
4 黒褐色	炭化物少量、ロームブロック・粘土ブロック微量	11 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・砂粒微量
5 黒褐色	ロームブロック・粘土粒子微量	12 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック微量
6 暗褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック微量	13 黒褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック・炭化物微量
7 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量	14 黒 色	焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片184点（坏19、壺類165）、須恵器片23点（坏8、瓶類1、壺類14）のほか、混入した繩文土器片7点が出土している。179・180はP7の柱抜き取り後の覆土から、181はP4からそれぞれ出土している。180は破碎された破片が積み重なった状態で出土している。完形である179は、180の下から正位の状態で出土しており、庵絶時に遺棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉に比定できる。





第59図 第3号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第58・59図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
179	土師器	小形壺	12.5	10.2	7.0	良石・石英・漂母・赤色粒子・無理	にふい黄褐	普通	部下半周位のヘラ削り 底部木葉痕	P7柱抜き取 り後	100% P1.23
180	土師器	壺	24.0	(25.7)	-	良石・石英・漂母・赤色粒子	にふい黄褐	普通	部下半周位のヘラ削り	P7柱抜き取 り後	30%
181	土師器	壺	33.8	(7.4)	-	良石・石英	黄灰	普通	口縁部5本の握持痕状文間にボタン状の痕跡 貼り付け	P4内	5% P1.23

第5号掘立柱建物跡（第60図）

位置 2区中央部のB 17b8区、標高7.5mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第28・29・31号住居跡、第2号溝跡を掘り込み、第24号住居、第23・30・32号土坑に掘り込まれている。本跡よりも新しい第4・6号掘立柱建物が内部に存在しているが、柱穴同士の切り合いは確認できなかった。

規模と構造 桁行5間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向はN-74°-Wである。規模は桁行10.20m、梁行3.90mで、面積は39.78m²である。柱間寸法は南桁行が西妻から1.50m(5尺)・2.40m(8尺)・2.10m(7尺)・2.70m(9尺)・1.50m(5尺)で不揃いである。北梁行は南梁行と同じ柱間寸法で柱穴が配置されていたものと想定されるが、確認できなかった。梁行は東西ともに1.95mで、均等に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。

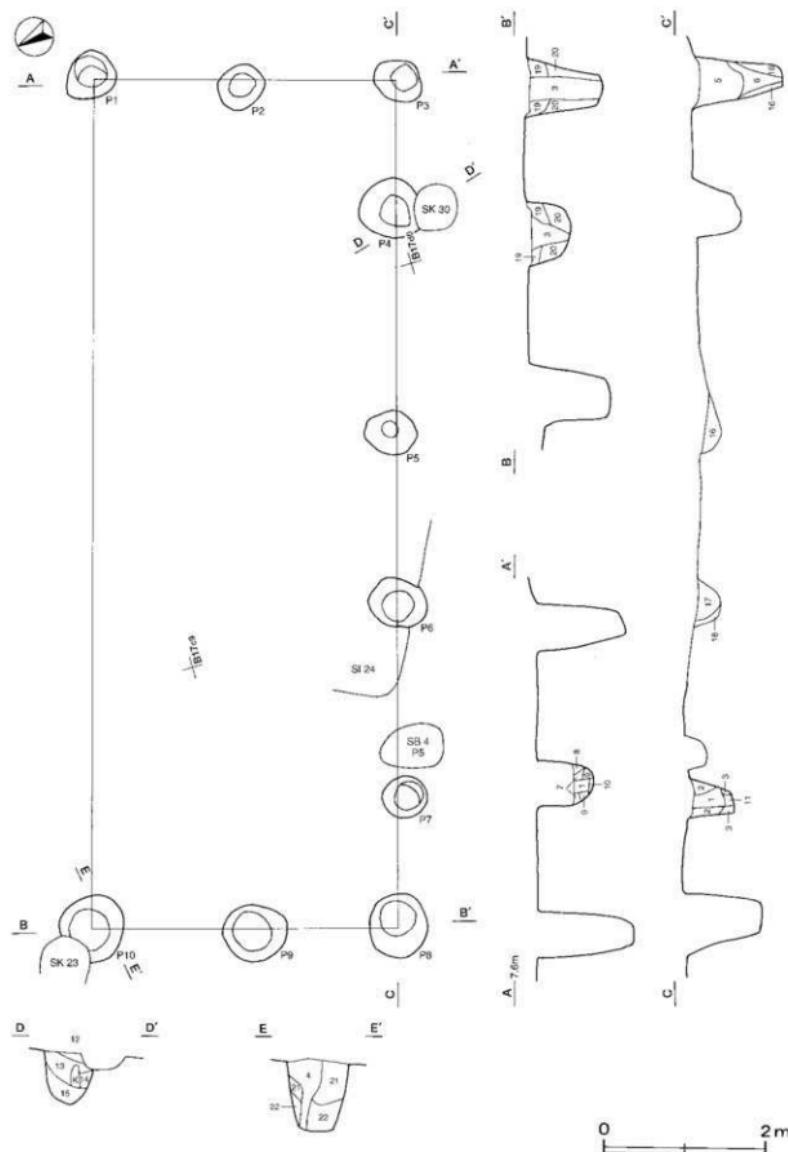
柱穴 10か所。平面形は円形または楕円形で、長径54~80cm、短径50~78cmである。深さはP1~P3、P8~P10が30~120cmで、P4~P7は30~60cmである。土層は第1~6層が柱抜き取り後の覆土で、第7~22層は埋土である。埋土はロームブロックや粘土ブロックを主体とした黒褐色土や暗褐色土である。

土層解説（各柱穴共通）

1	にふい褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック微量	12	極暗褐色	ロームブロック・炭化物微量
2	極暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	13	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
3	極暗褐色	粘土ブロック・ローム粒子少量	14	暗褐色	ロームブロック少量
4	暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量	15	暗褐色	ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量
5	黒色	粘土ブロック・ローム粒子微量	16	褐色	ロームブロック少量
6	黒色	ロームブロック・粘土粒子微量	17	黒褐色	ロームブロック・炭化物微量
7	暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、燒土粒子微量	18	黒褐色	ローム粒子微量
8	極暗褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック微量	19	黒褐色	ロームブロック・粘土粒子微量
9	褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量	20	黒色	ローム粒子微量
10	暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量	21	黒褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック微量
11	黒褐色	粘土ブロック・ローム粒子少量	22	褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片65点(环34、甕類31)、須恵器片1点(蓋)のほか、混入した繩文土器片5点(深鉢)が出土している。いずれも細片で図示できない。

所見 時期は、重複関係や桁行方向が第1~3号掘立柱建物跡とはほぼ同じことから、8世紀前半と推測できる。東西梁行の柱穴が深い構造は、ほかの掘立柱建物と大きく異なる。



第60図 第5号掘立柱建物跡実測図

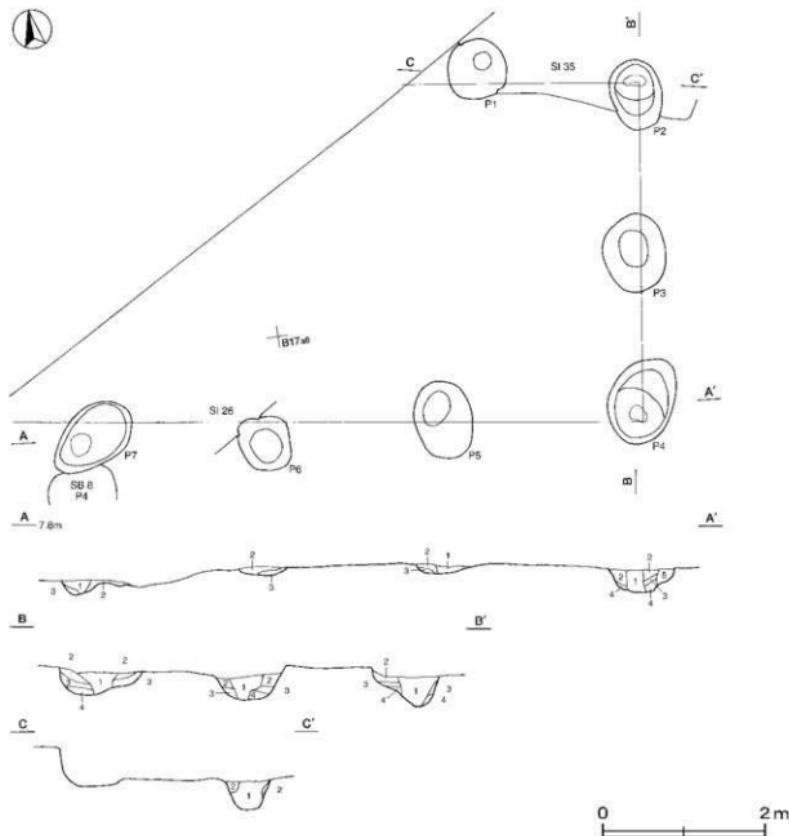
第7号掘立柱建物跡（第61・62図）

位置 2区北部のA 178区、標高7.5mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第8号掘立柱建物跡を掘り込み、第26・33・34・35・38号住居、第48号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 西部は調査区域外へ延びているため、南北軸は2間で、東西軸は3間しか確認できなかった。構造は柱穴の配列から側柱建物跡で、東西軸方向はN-85°-Wである。規模は南北軸が4.20mで、東西軸は6.30mが確認できただけで、面積は26.46m²以上である。柱間寸法は平行、梁行ともに2.10m(7尺)を基準として、ほぼ均等に配置されている。柱筋はP1・P6がやや外側に配置されており、不揃いである。

柱穴 7か所。平面形は円形または梢円形で、長径74~114cm、短径62~80cmである。深さは10~48cmで、掘方の断面形は逆台形あるいはU字形である。土層は第1層が柱抜き取り痕で、第2~5層は埋土である。埋土は含有物にロームを含んだ褐色土や暗褐色土である。



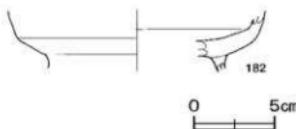
第61図 第7号掘立柱建物跡実測図

土層解説（各柱穴共通）

1 黒 色 ロームブロック・炭化粒子微量	4 極	色 ローム粒子微量
2 細 色 ローム粒子・炭化粒子微量	5 極	色 ローム粒子中量
3 黄 色 ロームブロック少量		

遺物出土状況 土師器片 33 点（坏類 2, 壺類 31), 須恵器片 5 点（坏類 1, 高台付坏 1, 壺類 3) のほか、混入した弥生土器片 1 点（壺）が出土している。182 は P2 から出土しているが、ほかの土器は細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器から 8 世紀後葉に比定できる。



第 62 図 第 7 号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第 7 号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第 62 図）

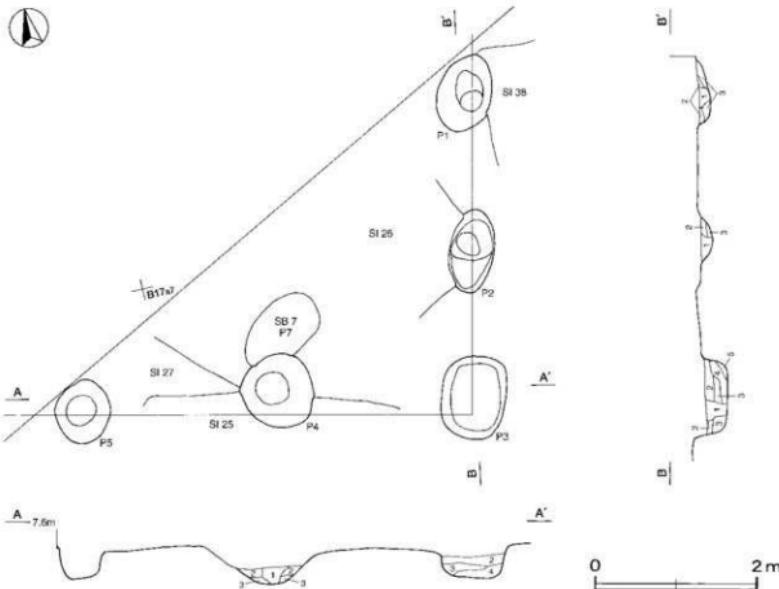
番号	種 別	器 形	口 径	深 度	底 保	動 土	色 调	焼 成	手 法 の 特 徴	ほ か	出土位置	備 考
182	須恵器	高台付坏	-	(3.7)	-	良石・石英・白色針状物	灰黄	普通	ロクロナデ 高台取り付け	P2 内	10%	

第 8 号掘立柱建物跡（第 63・64 図）

位置 2 区北部の B 17a7 区、標高 7.5 m の河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第 25・26・27・38 号住居、第 7 号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と構造 北・西部が調査区域外へ延びているため、南北・東西軸ともに 2 問しか確認できなかった。構造



第 63 図 第 8 号掘立柱建物跡実測図

は柱穴の配列から側柱建物跡で、東西軸方向はN - 76° - Wである。規模は東西軸4.80 m、南北軸3.80 mが確認できただけで、面積は18.24m²以上である。柱間寸法は東西軸2.40 m（8尺）、南北軸1.90 mを基調として、ほぼ均等に配置されている。柱筋はP 4がやや内側に配置されており、不揃いである。

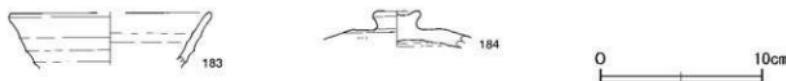
柱穴 5か所。平面形は円形または梢円形、隅丸長方形で、長径80～106cm、短径50～88cmである。深さは16～43cmで、掘方の断面形は逆台形あるいはU字形である。土層は第1層が柱抜き取り痕で、第2～5層は埋土である。埋土はロームを含んだ褐色土や暗褐色土である。

土層解説（各柱穴共通）

1 黑褐色 ロームブロック微量	4 褐色 ロームブロック少量
2 黒褐色 ローム粒子微量	5 褐色 ローム粒子中量
3 暗褐色 ロームブロック少量	

遺物出土状況 土師器片31点（坏3、甕類28）、須恵器片7点（坏5、蓋1、甕類1）、鉄製品1点（刀子カ）のほか、混入した繩文土器片4点（深鉢）が出土している。183はP 2、184はP 4からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉に比定できる。本跡を掘り込んでいる第7号掘立柱建物とはほぼ同時期であることから、短期間の使用であったことが推測できる。



第64図 第8号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第8号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第64図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
183	須恵器	坏	[2.2]	(3.4)	—	良石・石英・雲母	灰	普通	ロクロナデ	P2内	5%
184	須恵器	蓋	—	(2.2)	—	良石・石英・雲母	灰白	普通	天井部回転ヘクタリ	P4内	10%

表6 奈良時代掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	構造	相行方向	柱間数 柱間×奥間	規模(m) 幅×奥	面積 m ²	柱行柱間 (m)	梁行柱間 (m)	柱穴		主な出土遺物	時期	備考 重複関係(古→新)	
									柱穴数	平面形 深さ				
1	B17e3	【倒柱】	N - 72° - W	3 × 2	6.60 × 4.20	[27.72]	2.10	2.10	9	円形 深さ15cm	上縁部、須恵器 形、鉄製品	8世紀中葉	SD2 → 本跡 → PG1	
2	B17e3	【倒柱】	N - 73° - W	3 × 2	5.40 × 3.60	[19.44]	1.80	1.80	7	円形 梢円形	上縁部、須恵器 形	8世紀前半	本跡 → SBL PG1	
3	B17d2	【倒柱】	N - 73° - W	[3] × [3]	5.40 × 5.40	[29.16]	1.80	1.80	7	梢円形 深さ44～72cm	上縁部、須恵器 形	8世紀中葉	SII → 本跡 → SIIe-23 SK2-4-25-49, PG1	
5	B17e8	倒柱	N - 74° - W	5 × 2	10.20 × 3.90	39.78	1.50～ 2.20	1.95	10	円形 梢円形	30～120cm	上縁部、須恵器 形	8世紀後葉	SD2-29-31, SD2 → SII-32-33, SD4-6, SK2D-30-32
7	A17g	【倒柱】	N - 86° - W	[3] × 2	6.30 × 4.20	[26.46]	2.10	2.10	7	円形 梢円形	10～48cm	上縁部、須恵器 形	8世紀後葉	SD2 → SII-30-31-32-33 SK2-31-32-33, SK4-45
8	B17a7	【倒柱】	N - 76° - W	[2] × [2]	4.80 × 3.80	[18.24]	2.40	1.90	5	円形 梢円形	16～43cm	上縁部、須恵器 形、鉄製品	8世紀後葉	SK2-26-27-28, SH7

(3) 土坑

第2号土坑（第65図）

位置 2区南西部のB 17d2区、標高7.5 mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第1号住居跡を掘り込み、第3号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北部が搅乱を受けているため、長径は1.60 mで、短径は0.88 mしか確認できなかった。平面形は橢円形と推定でき、長径方向はN - 65° - Wである。深さは12cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。不自然な堆積状況から埋め戻されている。

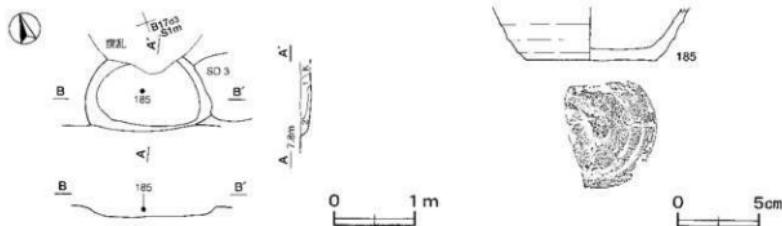
土層解説

1 黒褐色 燃土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量

2 褐褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片7点（壺類）、須恵器片4点（坏1、高台付坏2、整1）のほか、混入した縄文土器片5点（深鉢）、古墳時代の土師器片7点（坏6、器台1）が出土している。185は中央部の覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉に比定できる。



第65図 第2号土坑・出土遺物実測図

第2号土坑出土遺物観察表（第65図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
185	須恵器	坏	-	(3.2)	[8.0]	貝石・石英	灰黄褐色	普通	底部回転へきり後、ナデ	覆土上層	30%

第18号土坑（第66図）

位置 2区南部のB17e8区、標高7.5mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

確認状況 第21号住居跡の南部が調査区域外へ延びていたため、調査範囲を拡張した際に、柱穴の可能性がある土坑の断面を調査区域で確認した。遺存状況は不良で、壁面から覆土の様相と底面に遺構の痕跡が確認できただけである。

重複関係 第21号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南半部が調査区域外へ延びているため、北西・南東方向0.58m、北東・南西方向0.40mしか確認できなかった。平面形及び軸方向は不明である。深さは70~80cmで、底面は平坦である。壁はほぼ直立して立ち上がっている。

覆土 5層に分層できる。第1・2層は柱抜き取り痕、第3~5層は埋土とみられる。

土層解説

1 黒褐色 燃土ブロック少量、ローム粒子・粘土粒子微量

4 褐褐色 粘土粒子少量、ロームブロック・燃土ブロック・

2 灰褐色 粘土粒子中量、ロームブロック・炭化物・燒

化粒子微量

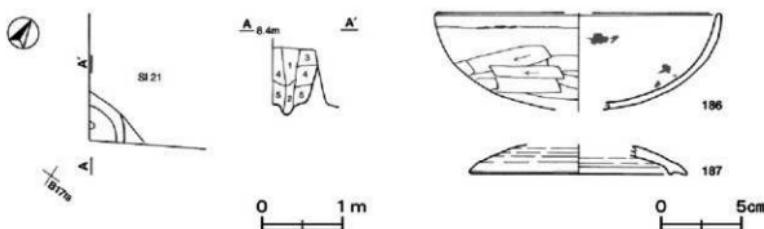
3 極暗褐色 ロームブロック・燃土ブロック少量、炭化物・

粘土粒子微量

4 灰褐色 粘土粒子微量

5 極暗褐色 ロームブロック・燃土ブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器壺1点、須恵器蓋1点が出土している。186・187ともに埋土中からの出土である。
所見 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。類似した柱穴が調査区内から確認できなかったため不鮮明ではあるが、覆土の様相から掘立柱建物の柱穴の可能性がある。



第66図 第18号土坑・出土遺物実測図

第18号土坑出土遺物観察表（第66図）

番号	種別	器種	口径	部高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
186	土師器	壺	[17.2]	(5.0)	-	長石・石英・雲母	褐	普通	体部横位のヘラ削り 内面漆付帯	埋土中	40%
187	土師器	蓋	[13.2]	(1.8)	-	長石・石英	灰	普通	ロクロナデ	埋土中	5%

表7 奈良時代土坑一覧表

番号	位位置	長軸(徑)方向	平面形	規模(m、深さはcm) 長軸(徑)×短軸(徑)×深さ	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (重複関係 古→新)
2	B17a2	N = 65° - W	[施用例]	1.60 × (0.88) 12	外傾	平底	人為	土師器、須恵器	SI1, SI2 → 本跡 → SD3
18	B17e8	-	-	(0.58) × (0.40) 70~80 直立	平底	人為	土師器、須恵器	本跡 → SI21	

(4) 溝跡

第2号溝跡（第67・131図）

位置 2区中央部のB 17a6区からB 18c1区にかけて、標高7.5mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第8・28・29・31・36・40・42号住居跡を掘り込み、第25・37・39号住居、第4・5・6号掘立柱建物、第23・38・40・41号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東・西端ともに調査区域外へ延びているため、確認できた長さは25.0mで、B 17a6区からB 18c1区へ南東方向(N = 108° - E)へ直線的に延びている。規模は上幅1.35~1.60m、下幅1.20~1.48mで、ほぼ均一である。確認面からの深さは10cmで、調査区域では58cmである。底面の標高は西部7.21m、中央部7.25m、東部7.11mで、東部が若干低くなっている。断面形はU字形で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層できる。含有物はブロック主体であることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 細褐色 ロームブロック少量、燒土ブロック微量
- 2 細褐色 ロームブロック・燒土ブロック微量

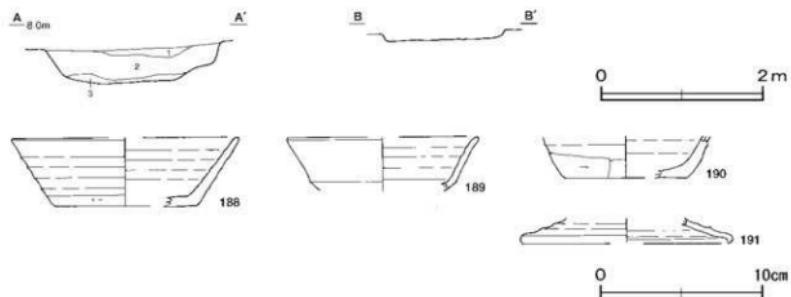
- 3 暗褐色 ローム粘土中量

遺物出土状況 土師器片281点(壺類)、須恵器片82点(壺33、高台付壺4、蓋5、瓶類2、甕類35、櫃3)

のほか、混入した繩文土器片25点(深鉢)、弥生土器片1点(壺)、土師器片26点(壺24、高台付椀2)、灰

釉陶器片2点(瓶類), 瓯1点も出土している。188~191は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉には機能を終えたものと推定できる。直線的に延びていることや南部に存在する第16号住居、第1・3号掘立柱建物とはほぼ同じ軸であることから集落を区画する溝の可能性がある。



第67図 第2号溝跡・出土遺物実測図

第2号溝跡出土遺物観察表(第67図)

番号	種 別	器 形	口 径	部 高	底 径	胎 土	色 調	焼 成	手 法 の 特 徴 は か	出 土 位 置	備 考
188	埴輪器	环	[13.8]	4.2	[8.8]	長石・石英	灰黄褐色	普通	体部下端斜面へラブリ 壁部一方のヘラ削り	覆土中	20%
189	埴輪器	高台付环	[11.6]	[3.3]	-	長石・石英	灰	普通	体部ロクロナデ 下端摩滅による調整不明	覆土中	10%
190	埴輪器	环	-	(2.6)	[7.6]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 壁部一方のヘラ削り	覆土中	5%
191	埴輪器	盖	[12.8]	(1.5)	-	長石・石英	灰	普通	ロクロナデ	覆土中	5%

3 平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、堅穴住居跡22軒、掘立柱建物跡2棟、土坑3基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 堅穴住居跡

第3号住居跡(第68~70図)

位置 2区中央部のB 17d9区、標高7.5mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

確認状況 確認面で竈とその周囲の覆土が遺存しているだけで、床面はほぼ露出した状態で確認した。

重複関係 第18・19・22号住居跡、第39号土坑を掘り込み、第20号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 床面がほぼ露出した状態で検出しているが、規模は床下の構造から長軸4.15m、短軸3.50mと推測できる。平面形は長方形で、主軸方向はN-10°-Eである。壁高は不明である。

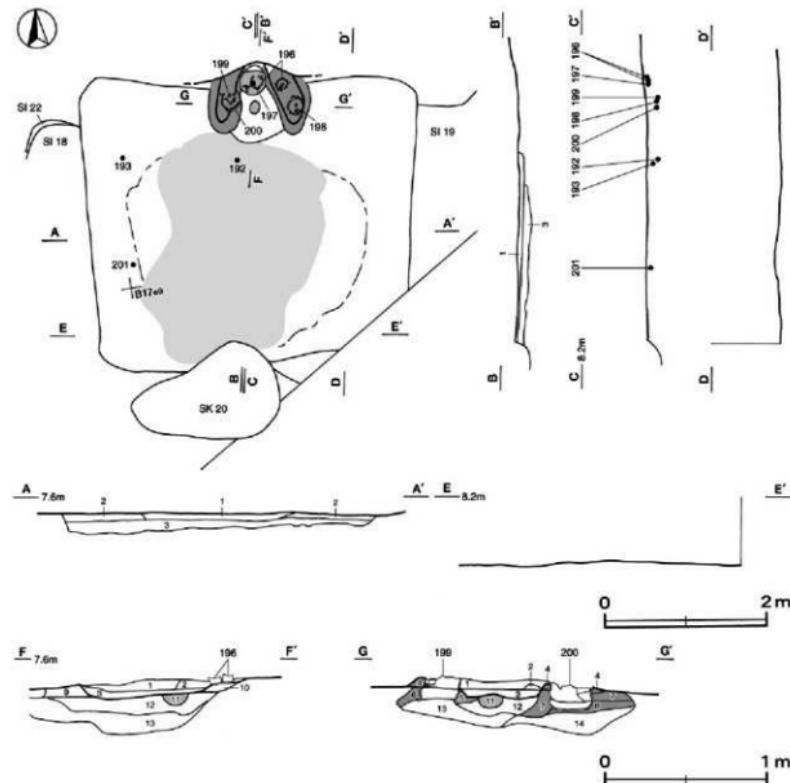
床 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は、下部全体に焼土ブロックや炭化物を含んだ第3層を埋土し、上部は焼土粒子や粘土粒子を多量に含んだ土と黒色土を交互に薄く積み上げた第1層を竈の前面から踏み固められた内側の範囲に、ロームブロックや粘土粒子を含んだ第2層を第1層の外側に埋めて構築されている。第1層は厚さ10cmほどで、含有物や色調から部分的に6層に細分できる範囲もあるが、床の中心か

ら離れるに従って均等な厚みではなく、層厚が1cmに満たない不明瞭な層もある。

粘床土層解説

- | | |
|---|-----------------------------|
| 1 焼土粒子主体の層、黒色土、粘土粒子主体の層、黒色土、
ローム粒子主体の層、黒色土の6層が層厚10cmほど間に薄く積み重ねられている。 | 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子微量 |
| | 3 極暗褐色 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量 |

竈 北壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで98cmで、燃焼部幅は42cmである。袖部は、補強材として右袖部に土師器甕2点、左袖に土師器甕1点を逆位の状態で埋設し、周囲に焼土ブロックや粘土粒子を含んだ第4～8層を積み上げて構築されている。火床部は床面を44cm掘り込んで、焼土ブロックやロームブロックを含んだ第9～14層を埋土して構築されている。火床面は竈内の中央部と中央部から煙道寄りの2か所で確認し、焚口部からの距離は40cm、60cmである。いずれも火を受けて赤変硬化している。煙道寄りで確認された火床面は、土師器甕が逆位の状態で出土している。煙道部は壁外に30cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。



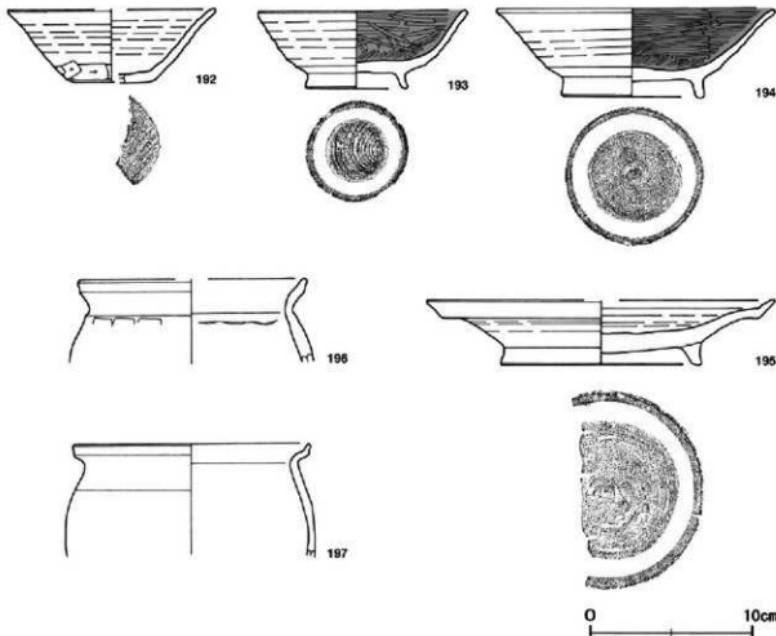
第68図 第3号住居跡実測図

電土層解説

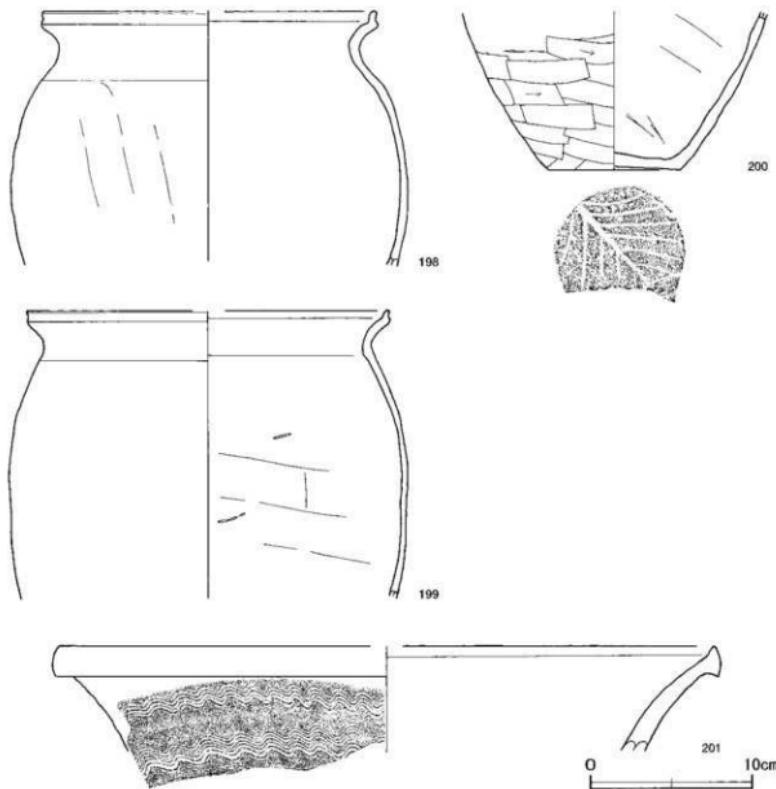
1 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量、粘土粒子・炭化粒子微量	8 にかい赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子少量
2 暗赤褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物・粘土粒子微量	9 暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
3 極暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量	10 暗赤褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック微量
4 暗赤褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・粘土粒子微量	11 明赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子微量
5 極暗褐色	ローム粒子・粘土粒子少量	12 赤褐色	焼土ブロック・粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量
6 黒褐色	焼土ブロック少量、炭化物・ローム粒子微量	13 暗褐色	焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック・粘土ブロック微量
7 極赤褐色	焼土ブロック・炭化物少量、ロームブロック・粘土粒子微量	14 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、粘土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片5点(甕)が出土しているほか、第1層を除く貼床の構築土内から縄文土器片7点(深鉢)、土師器片790点(坏21、椀93、高盤1、甕類674、瓶1)、須恵器片349点(坏203、高台付坏5、盤3、高盤1、蓋29、瓶2、甕類105、瓶1)、瓦1点、鐵滓1点も出土している。197は竈の火床面から逆位の状態で出土しており、支脚として転用されたものである。196・198～200は竈袖部の補強材として使用されていたもので、196・198は右袖内部、199-200は左袖内部から逆位の状態でそれぞれ出土している。192は竈前面の貼床構築土第1層から、ほぼ完形の193は北西部の貼床構築土第2層から正位の状態で、201は南西部の貼床構築土第2層からそれぞれ出土しており、いずれも貼床構築土に埋設されたものとみられる。195・194のはか、図示できない多量の土師器片や須恵器片は第2～3層にあたる貼床構築土内から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。



第69図 第3号住居跡出土遺物実測図（1）



第70図 第3号住居跡出土遺物実測図（2）

第3号住居跡出土遺物観察表(第69-70図)

番号	種別	器種	D径	D高	底径	鉢土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
192	埴造器	环	[D2.8]	4.5	[5.4]	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	体部下端手括ちへラ削り 底部一方側のへラ削り	粘床構造土内	20%
193	土師器	高台付楕	12.7	4.8	6.1	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐	普通	体部内面横位のへラ削き 底部斜軸系切り	粘床構造土内	90%
194	土師器	高台付楕	17.0	5.5	8.5	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐	普通	体部内面横位のへラ削き 底部斜軸へラ削り	粘床構造土内	20%
195	埴造器	楕	[D1.2]	4.0	12.0	長石・石英・黒色粒子	灰	普通	底部斜軸へラ削り後、高台貼り付け	粘床構造土内	P1.25
196	土師器	楕	13.8	5.3	-	長石・石英・赤色粒子	褐	普通	体部外面ナデ	籠袖部	20%
197	土師器	楕	14.4	(6.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部外・内面ナデ 支脚軸用	火床面	20%
199	土師器	楕	[D2.0]	(17.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	体部外面ナデ	籠袖部	30%
200	土師器	楕	-	(9.7)	8.0	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	体部下横位のへラ削り 底部木素直	籠袖部	20%
198	土師器	楕	[D0.4]	(15.7)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	体部外側ナデ	籠袖部	30%
201	埴造器	楕	[D0.4]	(6.5)	-	長石・石英	灰黄	普通	頭部上4本、下6本の横筋波状文 外・内面 自然端	粘床構造土内	5%

第4号住居跡（第71～73図）

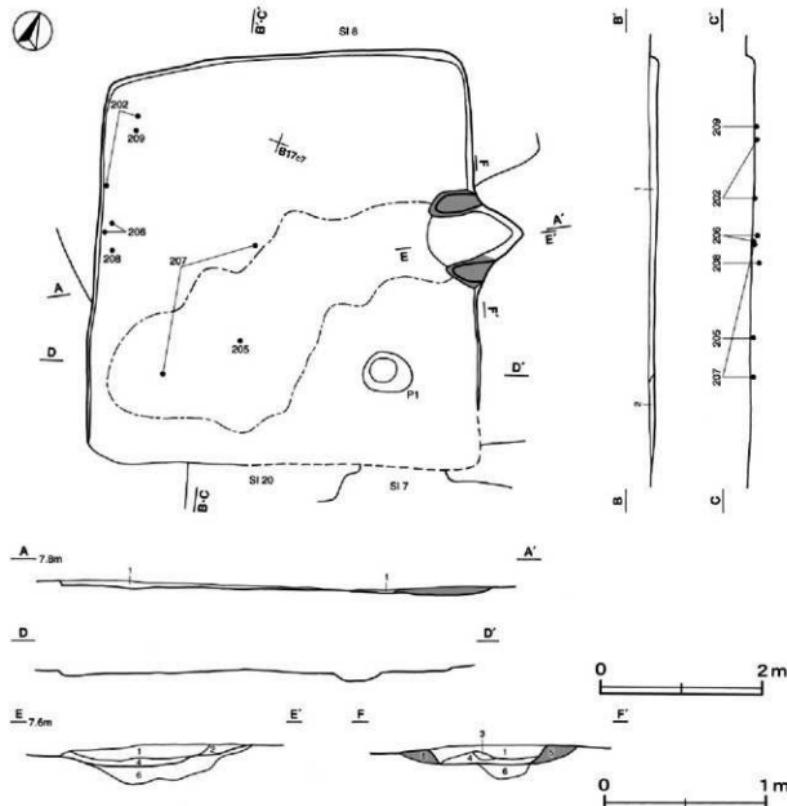
位置 2区中部のB 17c7区、標高75mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第7・8・20号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南部の壁はほとんど削平されて床面が露出している。一辺4.87mの方形で、主軸方向はN-65°-Eである。遺存している壁高は10～14cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北東壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで120cmで、燃焼部幅は58cmである。袖部は、粘土粒子を少量含んだ第5層を積み上げて構築されている。火床部は床面を10cm掘り込んで、ロームブロックや粘土ブロックを含んだ第6層を埋土して構築されている。火床面は赤変硬化していない。煙道部は壁外に54cm掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。



第71図 第4号住居跡実測図

電土層解説

- | | |
|-----------------------------------|------------------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量、粘土ブロック・焼土粒子微量 | 5 極暗褐色 粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 |
| 2 明赤褐色 焼土粒子多量 | 6 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック微量 |
| 3 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | |
| 4 黒褐色 炭化物少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | |

ピット 深さ 10cm である。ほかのコーナー部にはピットが存在しないことから、性格不明である。

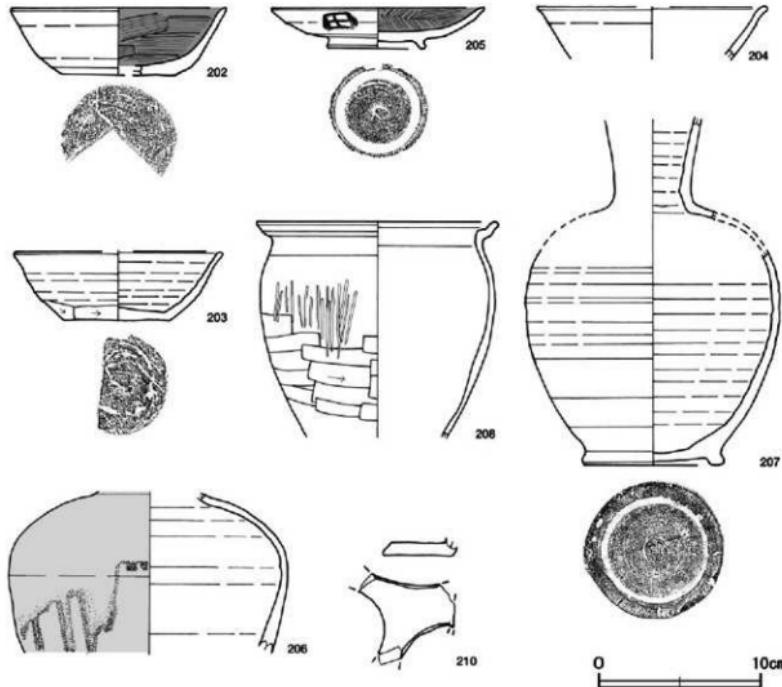
覆土 2 層に分層できる。下部しか確認できなかったが、含有物はロームブロックが主体であることから埋め戻されている。

土層解説

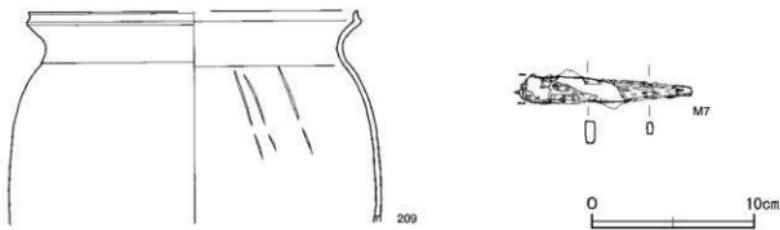
- | | |
|---------------------------|------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量 |
|---------------------------|------------------------|

遺物出土状況 土師器片 749 点(坏 136、高台付椀 8、高台付皿 1、蓋 1、高坏 7、甕類 596)、須恵器片 190 点(坏 116、蓋 13、鉢 7、瓶類 4、甕 48、瓶 2)、灰釉陶器片 5 点(椀 1、長頸瓶 1、瓶類 3)、鉄製品 1 点(刀子)が出土している。207 は中央部と南部の床面からそれぞれ出土した破片が接合している。202・206・208・209 は南西壁付近、205 は中央部の床面から、203・204・210・M7 は覆土中からそれぞれ出土している。いずれも廃絶後の早い段階で投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀後葉に比定できる。



第 72 図 第 4 号住居跡出土遺物実測図 (1)



第73図 第4号住居跡出土遺物実測図(2)

第4号住居跡出土遺物観察表(第72・73図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
202	土師器	环	13.2	4.2	[6.8]	長石・石英・赤色粒子	に赤い模	普通	体部下端回転ヘラ削り 内面側面のへら磨き 底部回転ヘラ削り	裏面	20% PL24
203	灰陶器	环	[12.8]	4.3	[6.4]	長石・石英・雲母	に赤い模	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り 一方手のヘラ削り	覆土中	30%
204	灰陶陶器	碗	[14.2]	[3.2]	-	長石	灰オリーブ	直火	外面ロクロナナ	覆土中	10%
205	土師器	高台付環	13.0	2.6	6.0	長石・石英	に赤い模	普通	体部内面横凹みのへら磨き 瓶部回転ヘラ削り後、直火點付付 体部に墨書「丑」	裏面	95% PL25-26
206	灰陶陶器	瓶	-	[9.8]	-	長石	灰オリーブ	良好	外・内面ロクロナナ	裏面	20%
207	灰陶陶器	長形瓶	-	[21.4]	8.4	長石・黒色粒子	灰オリーブ	底部回転ヘラ削り後、高台點付付 瓶部に へり見せり「一」	裏面	40%	
208	土師器	甕	14.6	(13.4)	-	長石・石英・雲母	に赤い模	普通	体部回転ヘラ削り後、へら磨き 内面 ベラナダ	裏面	40%
209	土師器	甕	[20.2]	(13.0)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	に赤い模	普通	口縁部外・内面横ナダ	裏面	5%
210	灰陶器	瓶	-	[9.9]	[5.8]	長石・石英・黒鉛・ 赤色粒子	暗青灰	普通	底部5孔式。	覆土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M7	万子	(10.6)	1.7	0.4-0.6	(25.0)	鉄	東部断面長方形 周囲に水質わずかに着存	覆土中	PL29

第5号住居跡(第74・75図)

位置 2区中央部のB 17b5区、標高75mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第17号住居跡を掘り込み、第11号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北部および西部が調査区域外へ延びているため、南北軸290m、東西軸2.06mしか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定され、主軸方向はN-84°-Eである。壁高は28cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、竈の前面が踏み固められている。

竈 東壁の南東コーナー寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで110cmと推定され、燃焼部幅は右袖部が第11号土坑に掘り込まれて遺存していないため、50cmが確認できただけである。袖部は、粘土粒子、砂粒を含んだ第8・9層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は赤変化していない。煙道部は壁外に60cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。

遺土層解説

- | | | | |
|----------|------------------------------------|-------|------------------------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒中量、灰化粒子
少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・
砂粒微量 |
| 2 灰黄褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、ローム
ブロック・炭化物微量 | 5 黄褐色 | 焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子微量 |
| 3 に赤い赤褐色 | 焼土ブロック・炭化物・砂粒少量、ローム
ブロック・粘土粒子微量 | 6 黒褐色 | 炭化物少量、ロームブロック・焼土ブロック・
粘土粒子・砂粒微量 |

- 7 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量
8 灰褐色 砂粒多量、炭化物少量、焼土ブロック・ローム粒子微量

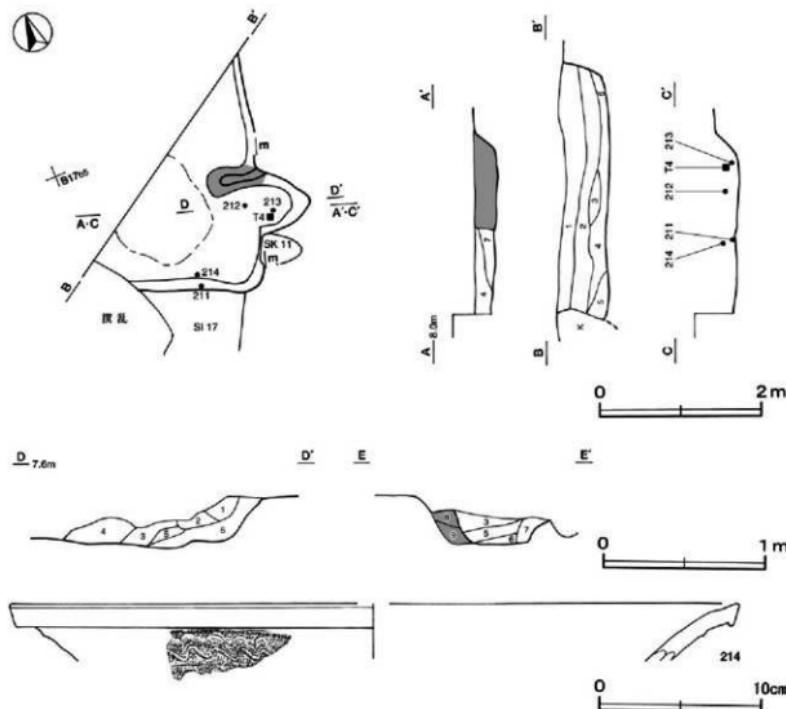
覆土 7層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積である。

土層解説

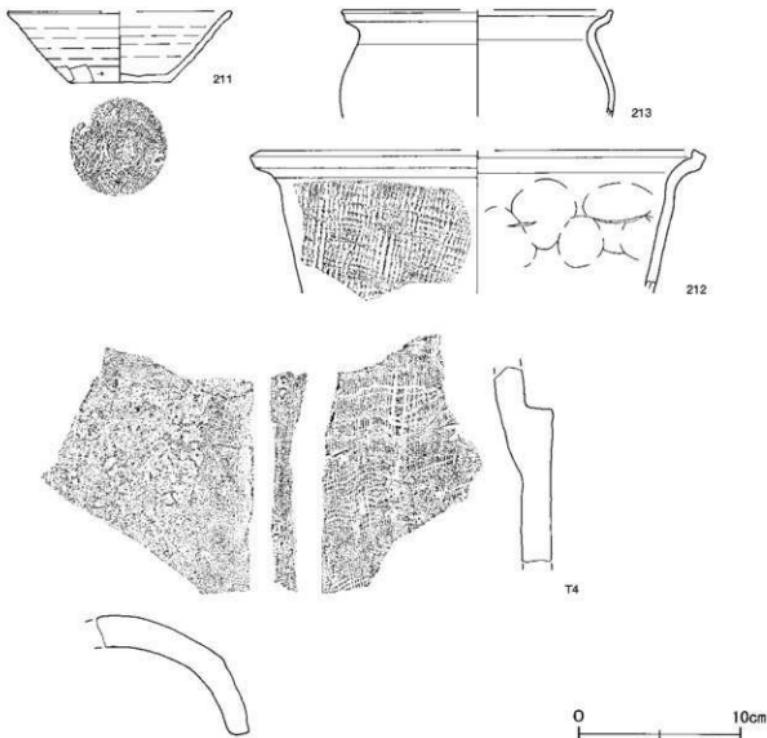
- | | |
|-----------------------------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 5 極暗褐色 焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 烧土ブロック・ローム粒子微量 | 6 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 3 極暗褐色 粘土粒子少量・ロームブロック微量 | 7 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土粒子微量 |
| 4 極暗褐色 烧土ブロック・ローム粒子・粘土粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片 272点（壺11, 壺類240, 壺1）、須恵器片 140点（壺21, 高台付坏2, 盖8, 鉢1, 瓶類6, 壺類102）、灰釉陶器片6点（瓶類）、瓦2点（丸瓦, 平瓦）のほか、流れ込んだ繩文土器片22点（深鉢）、弥生土器片4点（壺）、疊12点も出土している。211は南壁際の床面、212・213・T4は窓内の覆土下層からそれぞれ出土している。T4は凹凸面ともに焼土塊がわずかに付着しており、焼けている。214は南壁際の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉に比定できる。



第74図 第5号住居跡・出土遺物実測図



第75図 第5号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表（第74・75図）

番号	種別	器種	口径	夢高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
211	埴輪器	环	[13.6]	4.4	6.1	長石・石英・雲母	灰黃褐色	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方のヘラ削り	床面	50%
212	埴輪器	鉢	[26.6]	(8.8)	-	長石・石英・雲母	灰	良好	体部離位の格子目押き 内面無文の当て具置	埴覆土下層	5%
213	土師器	甕	[16.6]	6.6	-	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ	埴覆土下層	10%
214	埴輪器	甕	[44.8]	(3.5)	-	長石・石英	灰黃	良好	底部5本の鶴鉢底次文	覆土下層	5%

番号	種別	直さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
T-4	丸瓦	(16.8)	(9.4)	1.9	(450)	長石・石英・雲母	普通	凸面ヘラ削り 内面有目痕	埴覆土下層	PL28

第6号住居跡（第76・77図）

位置 2区中央部のB 17c2区、標高8.0mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第23号住居跡、第3号掘立柱建物跡、第25号土坑を掘り込み、第10号住居に掘り込まれている。

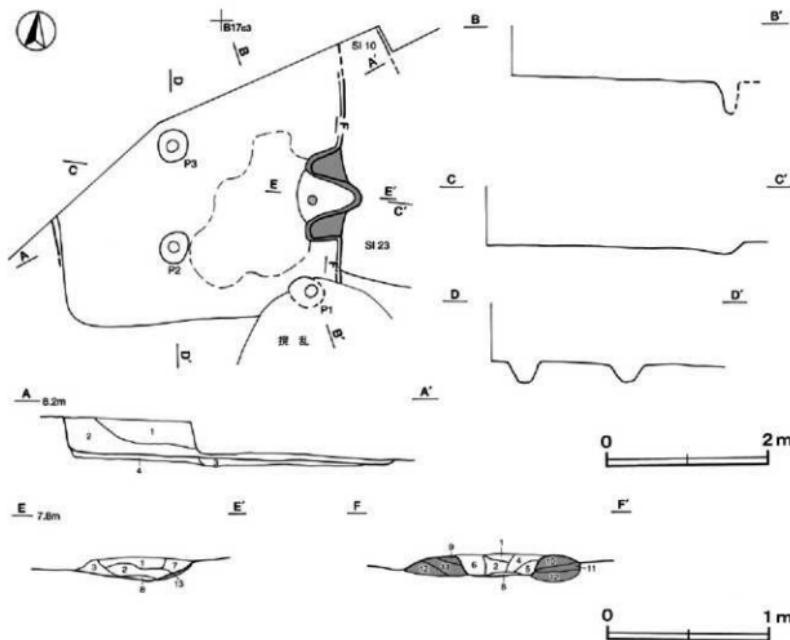
規模と形状 北半部が調査区域外へ延びているため、長軸は345mで、短軸は248mしか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定され、主軸方向はN-89°-Eである。壁高は41cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦な貼床で、窓の前面が踏み固められている。貼床はロームブロックや焼土ブロックを含んだ第3・4層を埋めて構築されている。

竈 東壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで80cmで、燃焼部幅は48cmである。袖部は粘土粒子、砂粒を含んだ第9～12層を積み上げて構築されている。火床部は床面を10cmほど掘り込んでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁内に20cm掘り込まれ、奥壁にローム粒子、粘土粒子を含んだ第13層を貼り付けており、火床面から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

1 暗赤褐色	焼土ブロック・砂粒少量。炭化物・ローム粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物・砂粒微量
2 にぶい赤褐色	砂粒中量。焼土ブロック少量。ローム粒子・炭化粒子微量	8 暗赤褐色	焼土ブロック少量。ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量
3 黒褐色	炭化物少量。ロームブロック・焼土ブロック・砂粒微量	9 灰褐色	砂粒多量。ローム粒子微量
4 暗褐色	焼土ブロック・炭化物少量。ローム粒子・砂粒微量	10 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・砂粒微量
5 暗褐色	ローム粒子・砂粒少量。焼土ブロック・炭化物微量	11 暗褐色	焼土ブロック・砂粒少量。炭化物・ローム粒子微量
6 暗褐色	炭化物・砂粒少量。焼土ブロック・ローム粒子微量	12 黒褐色	焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量
		13 極暗褐色	ローム粒子少量。焼土ブロック・砂粒微量



第76図 第6号住居跡実測図

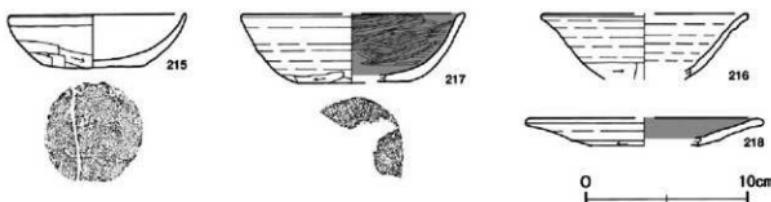
ピット 3か所。P 1・P 2は深さ38cm・23cmで、配置から主柱穴である。P 3は深さ26cmで、性格不明である。
覆土 2層に分層できる。含有物がブロック主体であることから埋め戻されている。第3・4層は貼床の構築土である。

土層解説

1 黒褐色 焼土ブロック少量、粘土ブロック・炭化物、ローム粒子微量	3 黒褐色 焃土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量
2 黒褐色 焃土ブロック・ローム粒子微量	4 帽褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物粒子微量

遺物出土状況 土師器片314点(坏48、高台付楕3、高台付皿16、甕類247)、須恵器片93点(坏14、蓋3、高盤2、瓶類3、甕類70、鉢1)のほか、覆土に混入した繩文土器6点(深鉢)、土製品2点(土器片錐)、礫1点、貼床の構築土内に混入した土師器片18点(坏2、甕類13、鉢1)、須恵器片9点(坏7、甕類2)も出土している。215～218は覆土中からそれぞれ出土しているほか、覆土下層から土師器片や須恵器片が多量に出土している。いずれも廃絶後の早い段階で投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。



第77図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表(第77図)

番号	種別	部種	口径	厚高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
215	土師器	坏	10.7	3.4	6.0	石英・雲母・赤色粒子	浅黄褐	普通	体部下端手持ちへラ削り	覆土中	60% P1.24
217	土師器	坏	[13.6]	4.2	[6.4]	石英・石英・雲母	橙	普通	体部下端手持ちへラ削り 内面横位のヘラ削り	覆土中	40%
216	須恵器	坏	[12.6]	(4.0)	-	長石・石英・雲母	灰黄	良好	体部下端手持ちへラ削り	覆土中	5%
218	土師器	高台付楕	[14.2]	(1.7)	-	長石・石英・赤色粒子	にふい黄褐	普通	体部下端回転へラ削り	覆土中	20%

第7号住居跡(第78・79図)

位置 2区中央部のB 17d7区、標高8.0mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第20号住居跡を掘り込み、第4・21号住居、第12号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 床面がほぼ露出した状態で確認したため、長軸383m、短軸379mしか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定でき、主軸方向はN-Wである。

床 ほぼ平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は下部にロームブロック、粘土粒子を含んだ第3～7層を、上部に焼土粒子、炭化粒子、粘土粒子を含んだ締まりの強い第2層を積み上げて構築されている。

竈 北壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで98cmで、燃焼部幅は47cmである。袖部はロームブロックや粘土ブロックを含んだ第5～7層を積み上げて構築されている。火床部は床面を若干掘り込んでおり、

火床面は赤変硬化していない。煙道部は壁外に50cm掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

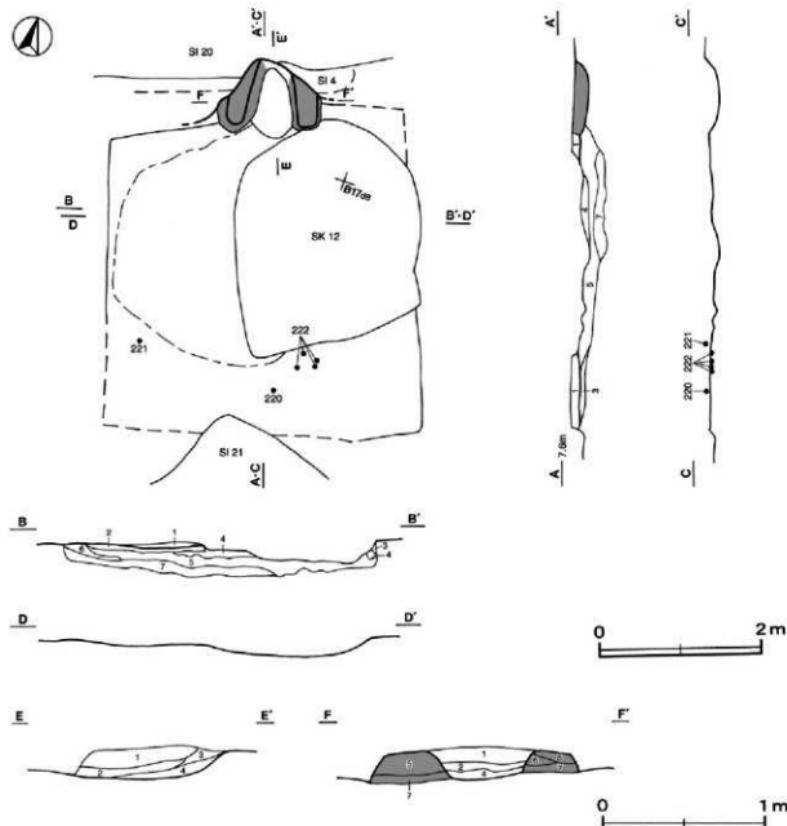
竪土層解説

- | | |
|--------------------------------------|-----------------------------|
| 1 黒 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 5 褐 色 ロームブロック・粘土粒子少量 |
| 2 黒 色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 6 灰 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック微量 |
| 3 喀 褐 色 ロームブロック・粘土粒子少量・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 黒 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗 褐 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量 | |

覆土 単一層で、一部しか遺存していないため、堆積状況は不明である。第2～7層は貼床の構築土である。

土層解説

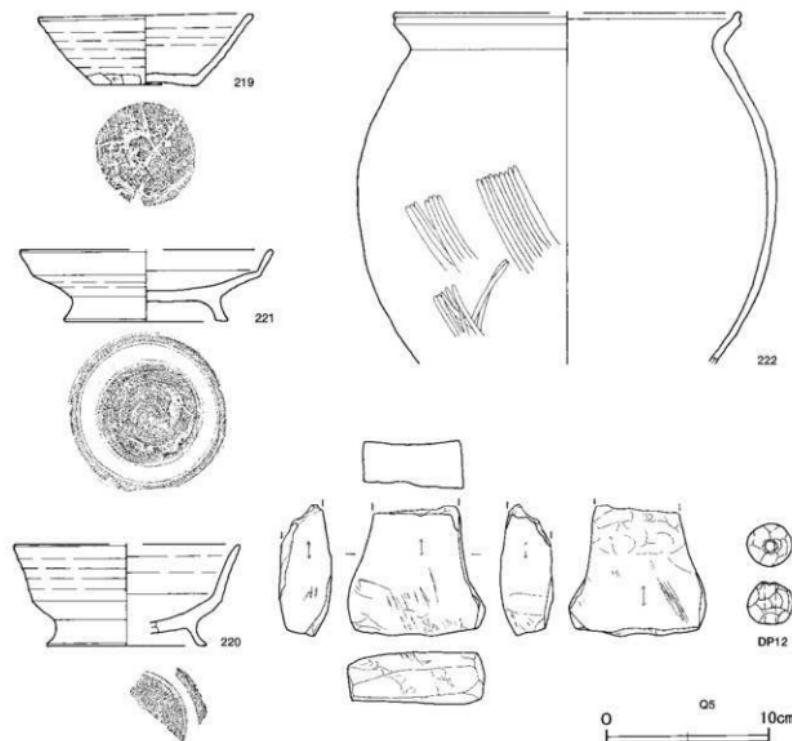
- | | |
|------------------------------------|--------------------------------------|
| 1 灰 褐 色 炭化粒子・粘土粒子少量・焼土粒子微量 | 5 灰 黄 褐 色 ローム粒子多量・粘土粒子少量・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 浅 黄 色 粘土粒子中量・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 灰 褐 色 ロームブロック・粘土粒子中量 |
| 3 灰 褐 色 ローム粒子中量・焼土粒子・炭化粒子微量・粘土粒子微量 | 7 黑 褐 色 ロームブロック中量・粘土粒子少量・焼土粒子微量 |
| 4 黑 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | |



第78図 第7号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片 8 点（坏 1, 高台付椀 6, 椽 1), 須恵器片 14 点（坏 1, 高台付坏 1, 盤 2, 高盤 7, 長頸瓶 3), 土製品 1 点（球状土錘), 石器 1 点（砥石) のほか、貼床の構築土内に混入した繩文土器片 22 点（深鉢), 弥生土器片 1 点（壺), 土師器片 720 点（坏 59, 高坏 5, 鉢 50, 椽 604, 盤 2), 須恵器片 335 点（坏 176, 盖 53, 椽類 106) も出土している。222 は南部の床面から出土している。220 は南部, 221 は西部の覆土上層から, 219・DP12・Q5 は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀前葉に比定できる。



第 79 図 第 7 号住居跡出土遺物実測図

第 7 号住居跡出土遺物観察表（第 79 図）

番号	種 別	部 類	口 径	部 高	底 径	胎 土	色 調	焼 成	手 法 の 特 徴 ほ か	出 土 位 置	備 考
219	須恵器	坏	13.0	4.5	6.2	黄石・石英	黄灰	良好 削り	体部下端手持ちハラ削り 壁部一方向のみハラ	覆土中	60%
220	須恵器	高台付坏	[13.8]	6.3	[9.6]	黄石・石英	浅黄	普通	底部刮板ハラ削り後、高台貼り付け	覆土上層	30%
221	須恵器	槃	[15.4]	4.4	10.0	黄石・石英・雲母	灰	普通	底部刮板ハラ削り後、高台貼り付け	覆土上層	70%
222	土師器	槃	[21.0]	[21.6]	-	黄石・石英	褐	普通	体部下半粗い縦條のハラ削き	床面	20%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DIP12	環状土錐	2.8	2.6	0.8	16.3	土(長石・石英・雲母)	一方向から穿孔 樹頭根	覆土中	PL29
Q 5	砥石	(8.0)	8.4	3.2	(251.0)	粘板岩	断面長方形 砥面4面	覆土中	

第9号住居跡（第80図）

位置 2区南西部のB 175区、標高8.5mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

確認状況 表土除去終了後、調査区内の地表より50cmほど高い位置で、再堆積層である黒褐色土内に遺構の断面を確認した。わずかな覆土と薄い平坦な貼床が確認できたことから住居跡と判断し、遺存している部分の調査を行った。

重複関係 第2号住居跡を掘り込み、第9・13号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北東部を第9号土坑に、南西部を第13号土坑に掘り込まれている。南東部は調査区域外へ伸びており、北西部が削平されていることなどから、北東・南西軸2.95m、北西・南東軸0.30mしか確認できなかった。平面形、主軸方向及び壁高は不明である。

床 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は、下部に粘土粒子を少量含んだ第4・6層を、上部に粘土粒子を多量に含んだ締まりの強い第5層を薄く平坦に積み上げて構築されている。

覆土 3層に分層できる。焼土粒子を多量に含んでおり、不自然な堆積状況であることから埋め戻されている。

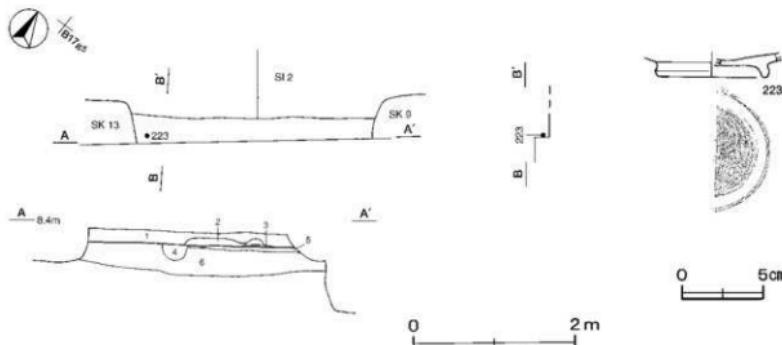
第4～6層は貼床の構築上である。

土層解説

1 黒褐色	燒土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量、砂粒微量	4 黒褐色	燒土粒子・炭化粒子少量、粘土粒子微量
2 明赤褐色	燒土ブロック多量、炭化粒子微量	5 黒褐色	粘土粒子多量、燒土ブロック・炭化粒子微量
3 黒褐色	燒土粒子・粘土粒子微量	6 灰褐色	粘土粒子少量、燒土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片37点（甕類）、須恵器片3点（壺1、甕類2）、灰釉陶器片1点（椀）のほか、混入した礫1点も出土している。223は南西部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉に比定できる。



第80図 第9号住居跡・出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物観察表（第80図）

番号	種 別	器 様	口 径	器 高	底 径	胎 土	色 調	焼 成	手 法 の 符 虑 は か	出土位置	備 考
223	灰釉陶器	碗	-	(1.6)	[6.7]	長石・石英	灰青	真好	底部削除系切り後、高台貼り付け	覆土下層	10%

第10号住居跡（第81・82図）

位置 2区中央部のB 17c3区、標高8.0mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

確認状況 表土除去終了後、調査区内の地表より50cmほど高い位置で、再堆積層とみられる黒褐色土内に遺構の断面を確認した。覆土と薄い平坦な貼床が確認できることから住居跡と判断し、遺存している部分の調査を行った。

重複関係 第6・23号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北部は調査区域外へ延びており、南部は削平されていることから、北東・南西軸は3.30mで、北西・南東軸は0.62mしか確認できなかった。平面形、主軸方向は不明である。壁高は32cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は、粘土ブロックを少量含んだ第4・5層を全体に埋めているが、中央部付近の径50cmの範囲にだけ、砂粒や粘土粒子含んだ第3層を薄く積み重ねて構築している。

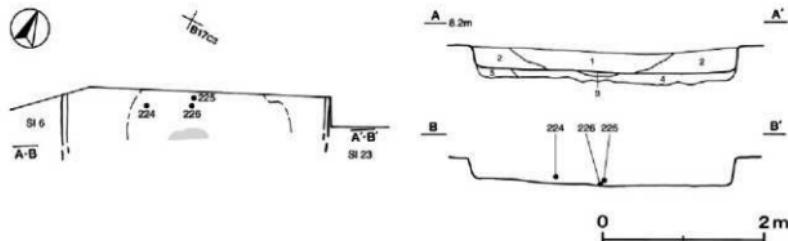
覆土 2層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積である。第3～5層は貼床の構築土である。

土層解説

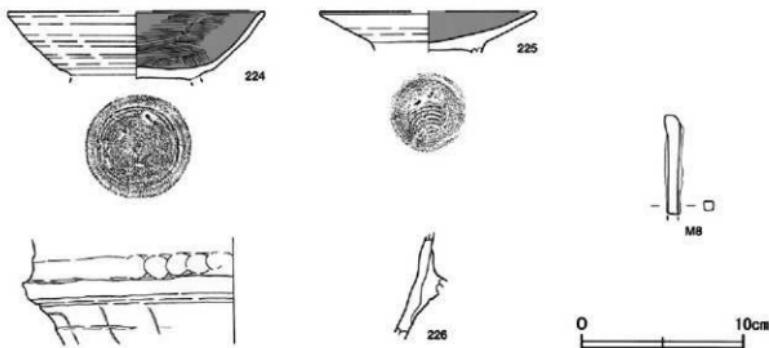
- | | | | | | |
|---|------|----------------------------------|---|-----|--------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・
炭化粒子微量 | 4 | 黒褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量
ローム粒子微量 |
| 2 | 極暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・
炭化物微量 | 5 | 暗褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子少量
炭化物微量 |
| 3 | 暗褐色 | 砂粒中量、粘土粒子少量 | | | |

遺物出土状況 土師器片253点（坏67、高台付碗3、高台付皿1、甕類182）、須恵器片38点（甕類36、瓶2）、土師質土器片1点（羽釜）、鐵製品1点（釘）のほか、流れ込んだ須恵器片31点（坏27、高台付坏2、盤1、短頸壺1）も出土している。226は中央部の床面、224・225は中央部の覆土下層、M8は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀前葉に比定できる。



第81図 第10号住居跡実測図



第82図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表（第82図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴は	出土位置	備考
224	土師器	高台付楕	(15.8)	(4.2)	-	灰石・石英・雲母・赤色粒子	にびい黄褐 普通	内面横位のV字溝き 底部斜面へラ削り 高台付楕	覆土下層	40%
225	土師器	高台付楕	(13.2)	(2.5)	-	灰石・石英・雲母	粗	普通 内部壊滅による渦巻き不明 底部回転系切り後、高台貼り付け	覆土下層	40%
226	土師質土器	鉢兼	-	(6.5)	-	灰石・石英・雲母・赤色粒子	粗 普通	外面ナデ 脊部貼り付け	床面	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M.8	釘	(6.1)	0.6	0.6	(7.85)	鉄	鋸刃方形頭部欠損	覆土中	

第11号住居跡（第83・84図）

位置 2区中央部のB 17d6区、標高75mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第12号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 床面がほほ露出した状態で検出しているが、規模は床下の構造から長軸446m、短軸388mと推測できる。平面形は長方形で、主軸方向はN-76°-Wである。壁高は不明である。

床 平坦な貼床で、10層に分層できる。中央部の狭い範囲が踏み固められている。貼床は下部にロームブロックや焼土ブロック、粘土ブロックを含んだやや層厚のある第7～10層を埋めて、上部に締まりの強いロームブロックや焼土ブロック、粘土粒子を含んだ第1～6層を薄く積み重ねて構築されている。

貼床土層解説

- | | | | |
|---------|--------------------------|----------|-----------------------------|
| 1 灰 黄褐色 | 粘土粒子少量、ロームブロック微量 | 7 黒褐色 | 燒土粒子少量、ロームブロック、粘土ブロック、炭化物微量 |
| 2 灰褐色 | 燒土粒子少量、ロームブロック、粘土粒子微量 | 8 黒褐色 | ロームブロック、燒土ブロック、炭化物微量 |
| 3 黒褐色 | 燒土ブロック少量、ローム粒子、粘土粒子微量 | 9 褐色 | ローム粒子中量、燒土ブロック、粘土ブロック微量 |
| 4 灰 黄褐色 | 粘土粒子多量、ローム粒子、燒土粒子微量 | 10 にびい褐色 | ロームブロック少量、燒土粒子、炭化粒子微量 |
| 5 灰褐色 | ロームブロック、燒土粒子、炭化粒子、粘土粒子微量 | | |
| 6 黑褐色 | 燒土ブロック、粘土粒子少量、ローム粒子微量 | | |

竈 西壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで70cmで、燃焼部幅は46cmである。袖部はローム粒子や粘土粒子を含んだ第5・6層を基部とし、土師器の甕を補強材として両袖に埋設して周間に粘土粒子を含んだ第3・4層を積み上げて構築されている。火床部は床面を20cm掘り込んで、貼床の構築土である第9～

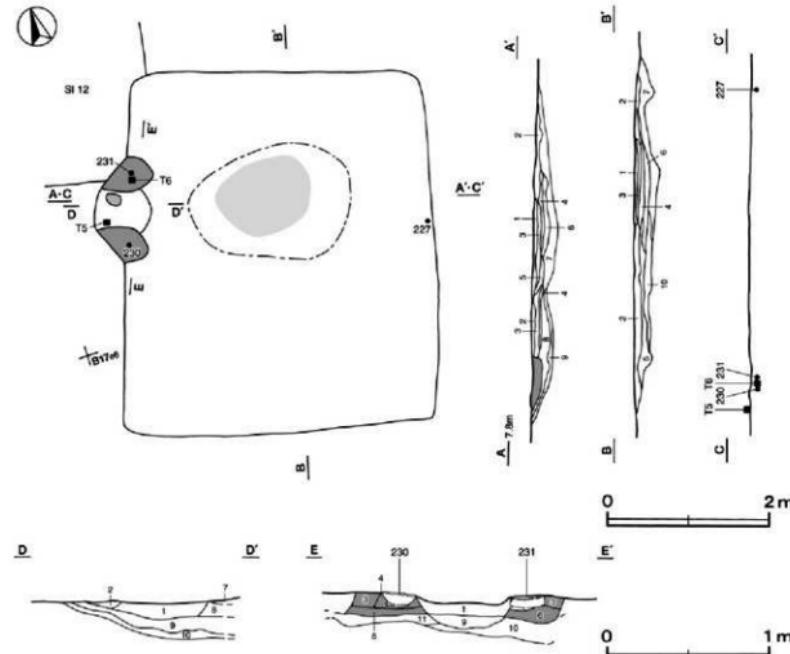
11層の上に粘土ブロックや粘土粒子を含んだ第1・2層を埋土して構築されている。火床面はやや右袖寄りに位置しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に40cm掘り込まれている。

遺土層解説

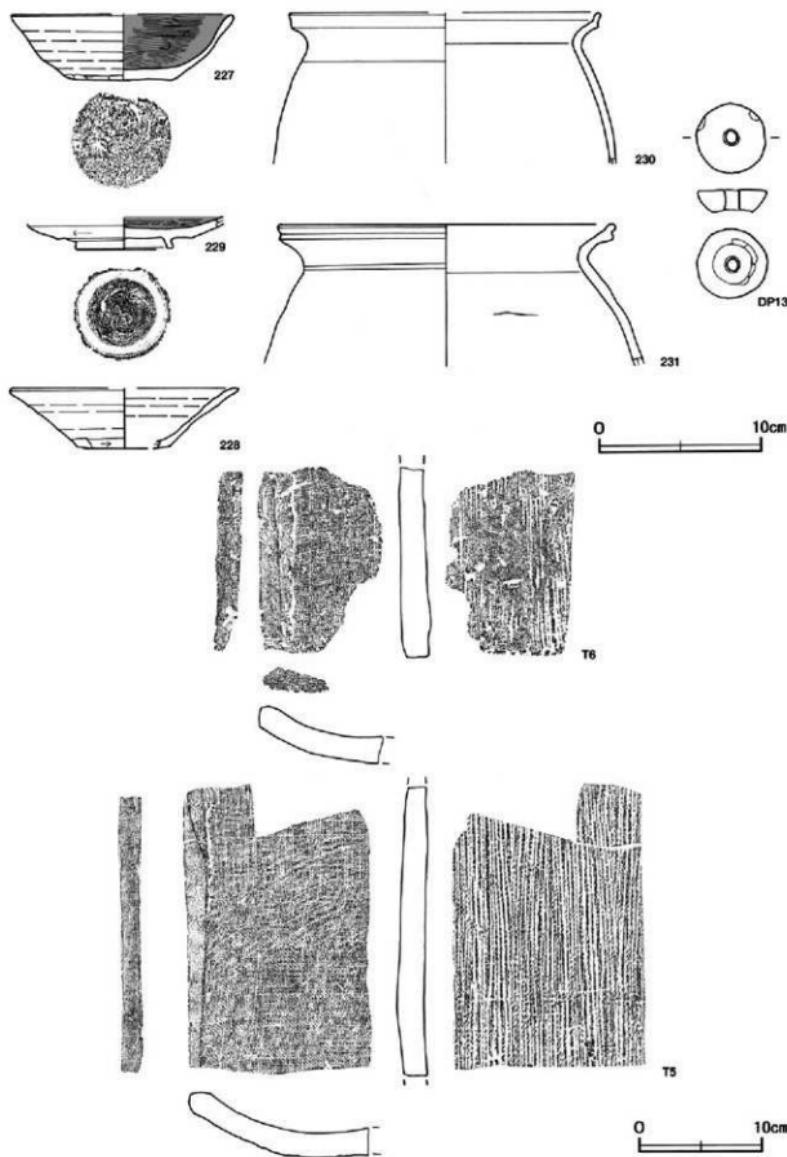
1 黒褐色	粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	6 にぶい褐色	ローム粒子・粘土粒子少量
2 暗赤褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・粘土粒子微量	7 暗褐色	貼床土層第2層と同一
3 暗褐色	焼土ブロック・炭化物少量、ロームブロック・粘土ブロック微量	8 黒褐色	貼床土層第3層と同一
4 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量	9 黑褐色	貼床土層第8層と同一
5 無暗褐色	焼土粒子・ローム粒子少量、炭化物・粘土粒子微量	10 褐色	貼床土層第9層と同一
		11 にぶい褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 窯の袖部から甕2点、平瓦1点が出土しているほか、貼床の構築土内に混入した縄文土器片51点（深鉢）、土師器片856点（环161、高台付皿1、高坏2、甕類692）、須恵器片304点（环165、高盤5、蓋22、瓶類2、甕類110）、石器1点（石鎌）、土製品1点（紡錘車）、鐵滓1点、礫1点、瓦2点（平瓦）も出土している。231・T6は竈の右袖部内、230は竈の左袖部内から逆位の状態で、T5は竈の覆土下層からそれぞれ出土している。227～229、DP13は貼床の構築土内からそれぞれ出土しており、混入したものである。T5は凹面が焼けているが、出土状況から竈の部材か否かは不明である。貼床の構築土内から出土している土師器片や須恵器片は、古墳時代から平安時代まで幅広い時期のものである。

所見 時期は、竈に付設された土器と貼床の構築土内からの出土した土器から9世紀後半と推定できる。



第83図 第11号住居跡実測図



第84図 第11号住居跡出土遺物実測図

第 11 号住居跡出土遺物観察表（第 84 図）

番号	種 別	器 様	口 径	器 高	底 径	胎 土	色 調	焼 成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
227	土鍋器	环	[13.5]	4.0	6.0	良石・石英・雲母・ 白色粒子	に赤い橙	普通	体部下端手持ちへラフ削り 内面横條のへラフ削 り、底部凹部へラフ削り	貼床構築土 内	50%
228	重底器	环	[13.8]	3.8	[5.6]	良石・石英・雲母・ 白色粒子	に赤い赤褐色	普通	体部下端手持ちへラフ削り 底部一方削りへラフ削 り	貼床構築土 内	20%
229	土鍋器	高台付瓶	-	(2.6)	5.9	良石・石英・雲母	に赤い橙	普通	体部下端手持ちへラフ削り 内面横條のへラフ削 り	貼床構築土 内	60%
230	土罐器	甕	[19.0]	(9.2)	-	良石・石英・ 赤色粒子・小櫻	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	竈跡部	20%
231	土鍋器	甕	20.6	(8.6)	-	良石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	竈跡部	20%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DF13	粘土車	4.3	1.4	0.9	26.6	土(良石)	内面台形 裸面ナデ	貼床構築土 内	PL29

番号	種 別	長さ	幅	厚さ	重 量	胎 土	焼 成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
T 5	平瓦	(23.3)	(14.5)	(2.2)	(1240)	良石・石英	普通	凸面長縛叩き 四面布目窓 二次焼成	竈覆土下層	PL28
T 6	平瓦	(15.4)	(10.0)	(2.4)	(454)	良石・石英・雲母	普通	凸面長縛叩き 四面布目窓	竈跡部	PL28

第 14 号住居跡（第 85 ~ 87 図）

位置 2 区中央部の B 17c5 区、標高 75 m の河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第 13・16・17・32 号住居跡を掘り込み、第 16 号土坑に掘り込まれている。西部および南東部は現代の廐穴に搅乱されている。

規模と形状 長軸 4.40 m、短軸 3.44 m の長方形で、主軸方向は N - 22° - E である。壁高は 20 ~ 34 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。窓前面の径 50 cm ほどの範囲だけは貼床で、下部に粘土粒子を含んだ第 8 層を、上部に焼土ブロックを含んだ第 7 層と粘土粒子を含んだ第 6 層を薄く積み上げて構築されている。北東コーナー部の様下には壁溝が巡っている。

窓 北壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 112 cm で、燃焼部幅は 60 cm である。袖部は右袖部に土器部を補強材として埋設し、周囲に粘土粒子を含んだ第 9 層を積み上げて構築されている。窓の覆土は埋め戻されており、内部を壊したためか火床面は遺存していない。煙道部は壁外に 66 cm 堀り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|-------------------------------------|-------------------------------------|
| 1 灰 黒 色 粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | 6 灰 黒 色 粘土粒子多量、ローム粒子微量 |
| 2 に赤い赤褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック・ローム粒子少量 | 7 灰 赤褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量、ロームブロック微量 |
| 3 暗赤褐色 烧土粒子少量、炭化物・ローム粒子・粘土粒子微量 | 8 黒 黑褐色 粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 |
| 4 暗褐色 烧土ブロック・炭化物・ローム粒子・粘土粒子微量 | 9 灰 黑褐色 粘土粒子中量、ロームブロック微量 |
| 5 暗赤褐色 烧土ブロック中量、炭化物・粘土粒子少量、ローム粒子微量 | |

ピット 北東コーナー部に位置している。深さは 32 cm で、ほかのコーナー部にはピットが存在しないことから、性格不明である。

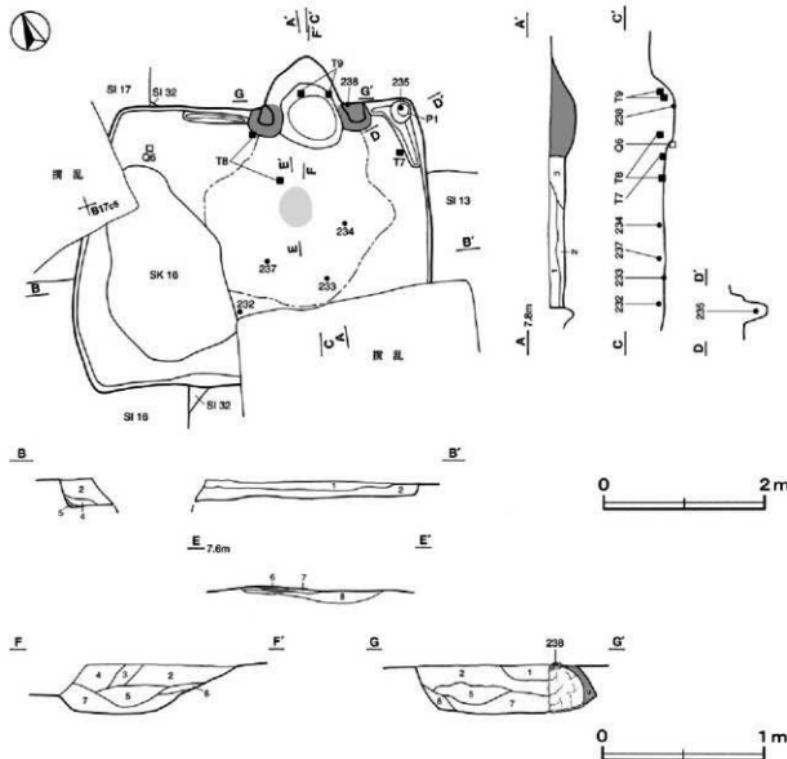
覆土 5 層に分層できる。ロームブロックが各層に含まれていることから埋め戻されている。第 6 ~ 8 層は貼床の構築土である。

土層解説

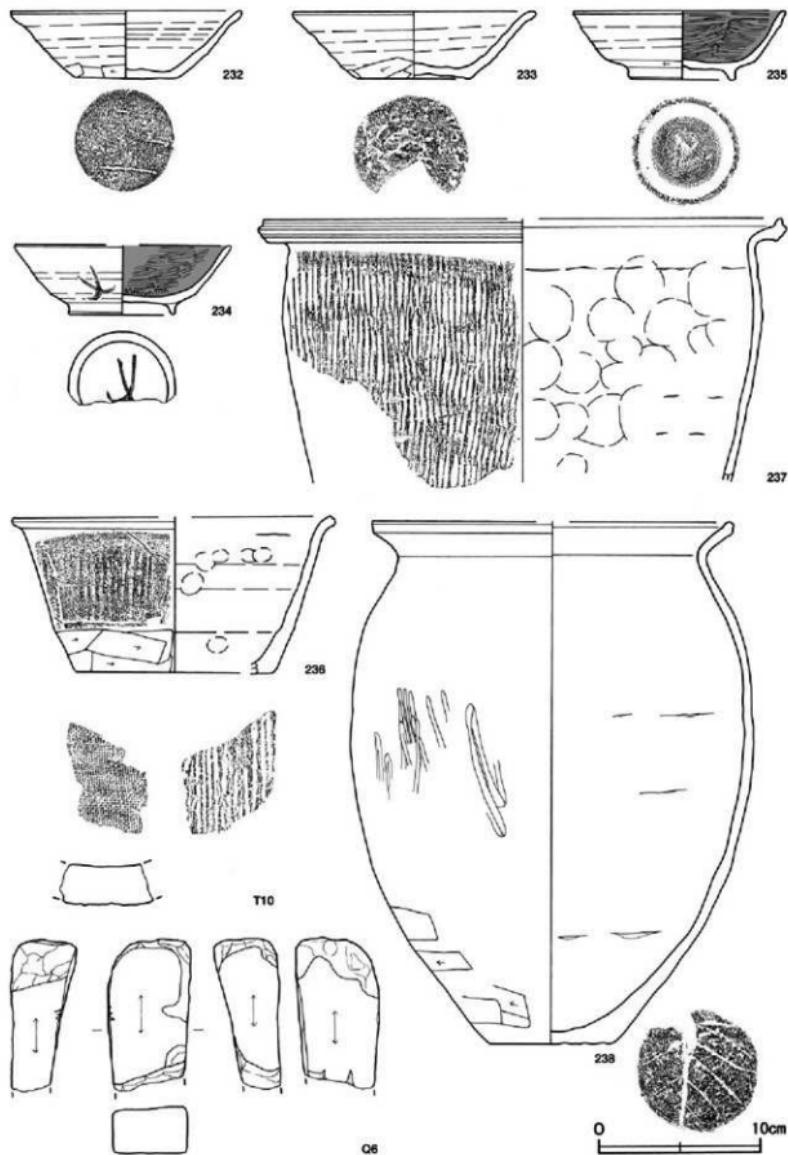
- | | | | |
|----------|-------------------------------|----------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量 | 5 棕色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 | 6 赤褐色 | 焼土ブロック多量、ローム粒子少量、粘土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | 粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | 7 にじい黄褐色 | 粘土粒子多量、炭化物・ローム粒子微量 |
| 4 にじい黄褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子微量 | 8 暗褐色 | 粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量 |

遺物出土状況 土師器片 746 点（坏 88、高台付椀 4、壺類 654）、須恵器片 340 点（坏 140、高台付坏 4、盤 2、高盤 9、蓋 20、鉢 2、瓶 15、壺類 139、瓶 9）、石器 1 点（砥石）。瓦 13 点（丸瓦 4、平瓦 9）のほか、混入した繩文土器片 9 点（深鉢）も出土している。T 9 は竈の覆土中層、238 は竈の右袖部内から逆位の状態でそれぞれ出土している。Q 6 は北部、233 は中央部、T 7 は東コーナー付近の床面から、235 は P 1 の覆土中層から、232・234・237 は中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。T 8 は中央部の床面と竈付近の覆土下層から出土した破片が接合している。いずれも廃絶後の早い段階で投棄されたものとみられる。236 は覆土中からそれぞれ出土している。

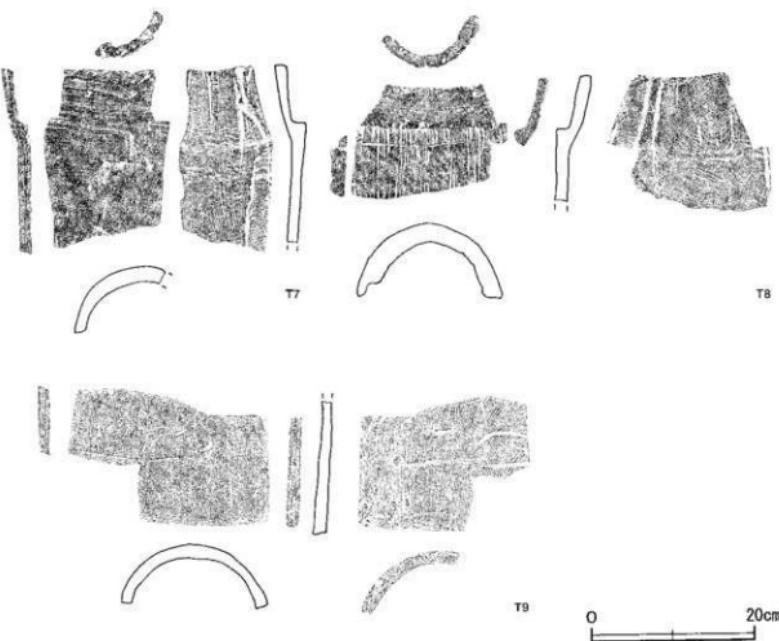
所見 時期は、出土土器から 9 世紀中葉に比定できる。



第 85 図 第 14 号住居跡実測図



第 86 図 第 14 号住居跡出土遺物実測図 (1)



第87図 第14号住居跡出土遺物実測図(2)

第14号住居跡出土遺物観察表(第86・87図)

番号	種別	部種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
232	里窓器	环	14.0	4.2	6.2	長石・石英・黒母	灰黄褐色	普通	体部下端手持ちへラ削り、底部一方削り	覆土下層	100% PL24
233	里窓器	环	14.7	4.1	7.0	長石・石英・黒母・赤色粒子	に赤い粒	良好	体部下端手持ちへラ削り、底部回転へラ切刃後、一方削りへラ削り	表面	60% PL24
234	土師器	高台付柄	[13.2]	4.3	6.4	長石・石英・赤色粒子	に赤い粒	普通	体部内面横凹のへラ削り、底部回転へラ切刃後、底部貼り付け、环延・底面に黒書「口」	覆土下層	30% PL25-26
235	土師器	高台付柄	13.0	4.3	6.1	長石・石英・黒母	に赤い粒	普通	体部内面横凹のへラ削り、底部回転へラ削り後、底部貼り付け	PL1 地上層	60%
236	里窓器	鉢	19.4	9.7	[12.0]	長石・石英・黒母	に赤い質相	普通	体部底位の手行叩き、下端横位のへラ削り	覆土中	60%
237	里窓器	鉢	[32.0]	(16.2)	-	長石・石英・黒母	灰灰	良好	体部底位の手行叩き、内面当て具痕	覆土下層	5%
238	土師器	鉢	[22.2]	32.2	7.4	長石・石英・黒母・赤色粒子	に赤い粒	普通	体部底位の手行叩き、下端横位のへラ削り	電撃部	40%

番号	部種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 6	磁石	(9.4)	5.1	4.1	(231.0)	凝灰岩	磁石4面 断面長方形 刃物痕	表面	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
T 7	丸瓦	(23.6)	(11.0)	1.5~ 1.9~	(720)	長石・石英・黒母	普通	凸面へラ削り、凹面布目痕	表面	PL28
T 8	丸瓦	(16.6)	17.9	2.3~ 2.5~	(903)	長石・石英・黒母	普通	凸面へラ削り、焼上付着、凹面布目痕	表面	覆土下層
T 9	丸瓦	(16.6)	17.9	1.2~ 1.4~	(728)	長石・石英・黒母	普通	凸面長縫叩き、凹面布目痕	覆土中層	PL28
T 10	平瓦	(8.4)	(5.8)	2.4	(177)	長石・石英・黒母	普通	凸面長縫叩き、凹面布目痕	覆土中	PL28

第15号住居跡（第88～90図）

位置 2区中央部のB 17d4区、標高75mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第16・41号住居跡を掘り込んでいる。

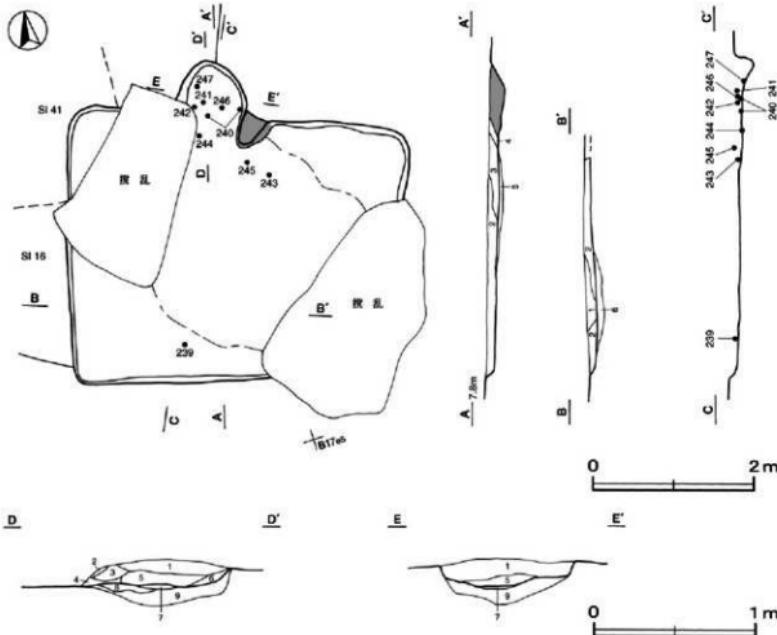
規模と形状 長軸424m、短軸3.43mの長方形で、主軸方向はN-17°-Eである。壁高は10cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、竈前面から南西部にかけての浅いくぼみ2か所だけは貼床で、中央部が踏み固められている。貼床の範囲は明確に捉えることができなかったが、竈前面のくぼみには粘土粒子、砂粒を含んだ第5層を薄く積み上げ、南西部のくぼみにはロームブロックを含んだ第6層を埋めて構築されている。

竈 北壁に付設されている。竈の左袖部は擾乱されているため、燃焼部幅は67cmしか確認できなかった。右袖部は粘土ブロックを含んだ土を積み上げて構築されている。火床部は床面を14cm掘り込んで、粘土ブロック、ローム粒子、砂粒を含んだ第7～9層を埋めて構築されている。火床面は赤変硬化していない。遺存している煙道部は壁外に60cm掘り込まれ、奥壁で直立している。

竈土層解説

1 にぬき褐色	燒土ブロック中量、粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量、砂粒少量	5 暗赤褐色	燒土ブロック少量、炭化粒子微量
2 黄褐色	粘土ブロック・砂粒中量、燒土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	6 黒褐色	ローム粒子・燒土粒子微量
3 黄色	燒土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子微量	7 にぶい橙色	燒土ブロック中量、粘土ブロック・砂粒少量、ローム粒子・炭化粒子微量
4 灰褐色	粘土粒子・砂粒多量、燒土粒子・炭化粒子微量	8 黑褐色	ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量
		9 黑褐色	粘土ブロック・砂粒少量、ロームブロック・燒土粒子・炭化粒子微量



第88図 第15号住居跡実測図

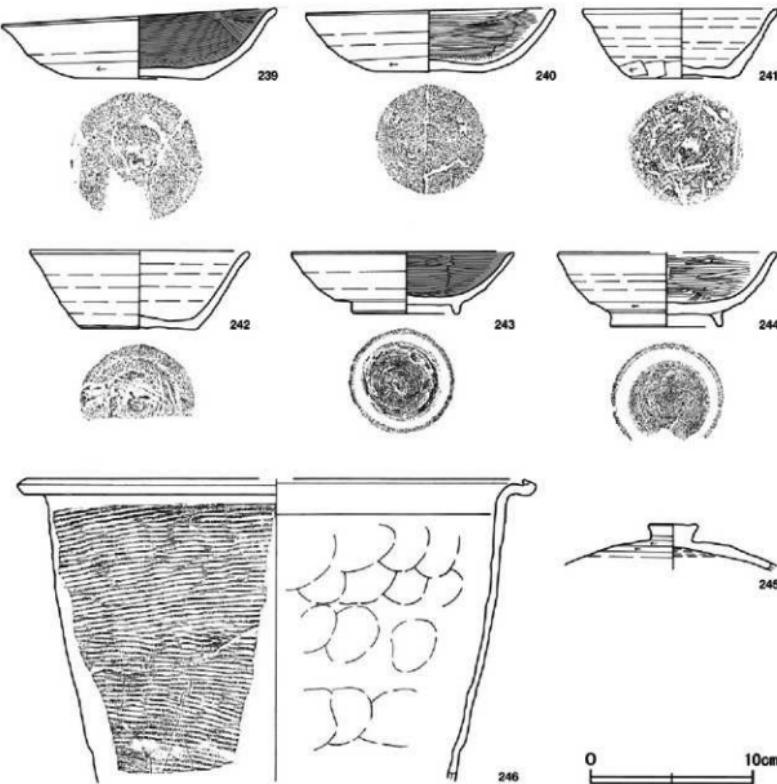
覆土 4層に分層できる。焼土ブロックや粘土ブロックを多量に含んでいる不自然な状況から埋め戻されている。第5・6層は貼床の構築土である。

土層解説

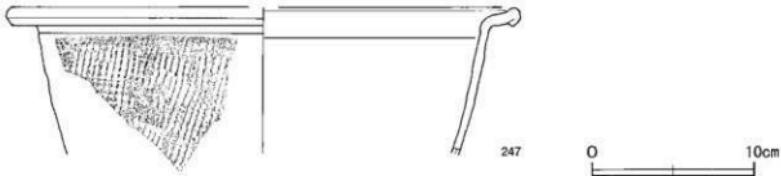
1 灰褐色	燒土ブロック・粘土粒子・砂粒中量	4 黒褐色	粘土粒子・砂粒多量、燒土粒子・炭化粒子少量
2 黒褐色	燒土ブロック・ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量	5 黒褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒多量、燒土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	粘土ブロック・燒土粒子・炭化粒子・砂粒少量、ローム粒子微量	6 褐色	ロームブロック中量、粘土粒子・砂粒微量

遺物出土状況 土器器片 399点(坏15, 高台付椀2, 壺類382), 須恵器片 145点(坏53, 高台付坏1, 盆1, 盖17, 鉢類47, 壺類26). 鉄製品1点(釘)のほか, 混入した繩文土器片6点(深鉢)も出土している。240・244は竈の前面の床面から, 247は竈の覆土下層, 241・242・246は竈の覆土中層, 243・245は竈の前面の覆土中層から下層にかけてそれぞれ出土している。竈内あるいはその周辺に土器片が集中して出土しており, 廃絶時の埋め戻しの際に投棄されたものとみられる。239は南部の覆土下層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から9世紀中葉に比定できる。



第89図 第15号住居跡出土遺物実測図(1)



第90図 第15号住居跡出土遺物実測図(2)

第15号住居跡出土遺物観察表(89・90図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	残度	手法の特徴は	出土位置	備考
239	土器部	杯	16.7	4.4	8.0	長石・石英・漂母	にぶい黄褐色	普通	体部下端回転へラ削り 内面横凹のヘラ削き	縦土下層	90%
240	土器部	杯	15.3	3.9	6.7	長石・石英・漂母・赤色粒子	にぶい相	普通	底部下端回転へラ削り 内面横凹のヘラ削き	縦土下層	P1.24
241	陶器部	杯	11.9	4.3	6.0	長石・石英・漂母・赤色粒子	暗灰黄	普通	体部下端手持ちラ削り 横端回転へラ削り	縦土中層	80%
242	陶器部	杯	[13.4]	4.8	7.1	長石・石英・漂母	黄灰	良好	体部下端回転へラ削り 横端回転へラ削り	縦土中層	70%
243	土器部	高台付楕	13.5	3.8	6.4	長石・石英・赤色粒子	にぶい相	普通	体部下端回転へラ削り 内面横凹のヘラ削き	縦土下層	P1.24-26
244	土器部	高台付楕	[13.2]	4.6	6.8	長石・石英・漂母・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	底部下端回転へラ削り 内面横凹のヘラ削き	縦土中層	50%
245	陶器部	蓋	-	(2.8)	-	長石・石英	灰	良好	天井端回転へラ削り	縦土中層	5%
246	陶器部	鉢	[30.6]	(18.7)	-	長石・石英・漂母・赤色粒子	にぶい相	普通	体部横位の平有叩き 内面當て具痕	縦土中層	10%
247	陶器部	鉢	[31.2]	9.0	-	長石・石英・漂母	灰黄	普通	体部横位の平行叩き	縦土下層	5%

第19号住居跡(91・92図)

位置 2区中央部のB 17d9区、標高7.5mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第18・22号住居跡、第39号土坑を掘り込み、第3号住居、第20号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東半部が調査区域外へ延びているため、長軸は4.09mで、短軸は3.60mしか確認できなかった。

平面形は長方形と推定でき、主軸方向はN-23°-Eである。壁高は20~90cmで、外傾して立ち上がってている。

床 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は、下部にロームブロック、焼土ブロックを含んだ第10~11層を、上部にロームブロックを含んだ締まりの強い第8・9層を平坦に積み上げて構築されている。

竈 北壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで102cmで、燃焼部幅は44cmである。袖部は粘土粒子を多量含んだ締まりの強い第6層を積み上げて構築されている。火床部は床面を20cm掘り込んで、ローム粒子、焼土粒子を含んだ第7~12層を埋めて構築されている。火床面は火を受けて赤変化している。煙道部は壁外に28cm掘り込まれ、外傾して立ち上がってている。

竈土層解説

1	暗赤褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック、粘土粒子微量	7	明赤褐色	焼土ブロック多量、粘土粒子微量
2	暗褐色	焼土粒子・粘土粒子少量、ロームブロック微量	8	暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量
3	赤褐色	燒土ブロック・粘土粒子中量、ローム粒子微量	9	黒褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子微量
4	暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック、炭化粒子・粘土粒子微量	10	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量
5	赤褐色	焼土粒子多量、ローム粒子・粘土粒子微量	11	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・粘土粒子少量
6	灰褐色	粘土粒子多量、ローム粒子少量、焼土粒子微量	12	褐色	ロームブロック少量

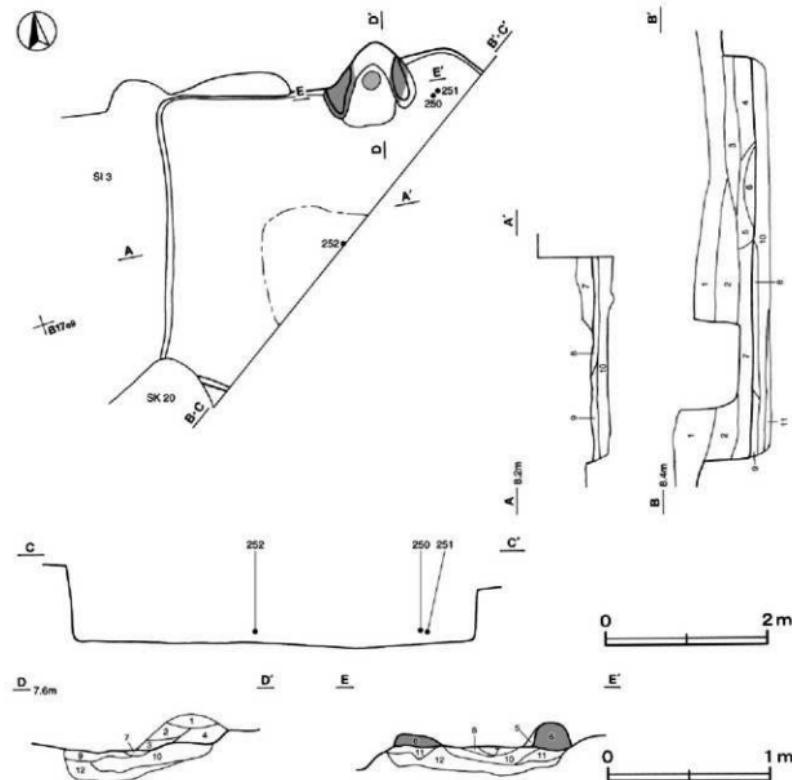
覆土 7層に分層できる。第2層は自然堆積で、第3~7層は不自然な堆積状況から埋め戻されている。第1層は本跡が埋没した後に堆積した黒色粘質土で、第8~11層は貼床の構築土である。

土層解説

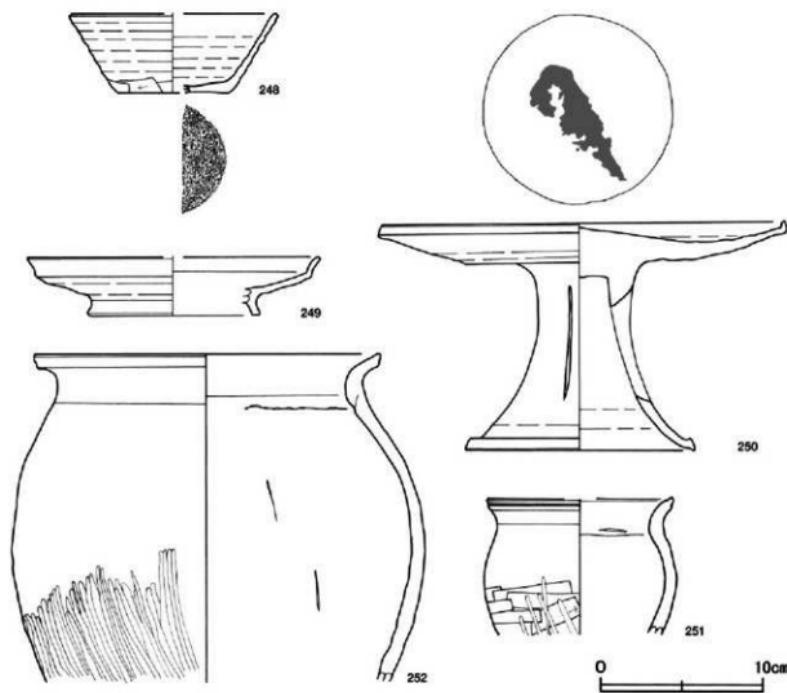
1 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	6 にぶい褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量
2 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	7 桂褐色	ロームブロック少量・焼土ブロック・炭化粒子微量
3 にぶい褐色	ロームブロック少量・焼土ブロック・炭化物微量	8 黒褐色	ロームブロック中量
4 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量・粘土粒子微量	9 黒褐色	ロームブロック少量・焼土ブロック微量
5 褐赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量・炭化物微量	10 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量
		11 黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片 372 点（坏 33、高台付椀 1、壺類 338）、須恵器片 158 点（坏 94、蓋 8、盤 9、高盤 3、壺類 44）のほか、覆土に混入した繩文土器片 26 点（深鉢）、弥生土器片 7 点（壺）、石器 1 点（石棒）、礫 7 点。貼床の構築内に混入した繩文土器片 1 点（深鉢）。土師器片 4 点（壺類）も出土している。250・251 は竈付近、252 は中央部の覆土下層からそれぞれ出土しており、廃絶後の早い段階で投棄されたものとみられる。248・249 は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀前葉に比定できる。



第 91 図 第 19 号住居跡実測図



第92図 第19号住居跡出土遺物実測図

第19号住居跡出土遺物観察表（第92図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
248	灰陶器	环	[12.6]	4.9	[6.8]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちへラ削り 壁部一方向へのラ削り	覆土中	30%
249	灰陶器	盤	[17.6]	3.6	[10.4]	長石・石英	灰	良好	ロクロナデ	覆土中	10%
250	灰陶器	高腹	24.6	14.1	14.0	長石・石英・雲母・小種	灰	良好	盤部下端回転へラ削り 通かし3孔 腹部内面に漆付着	覆土下層	90% PL26
251	土師器	甕	[11.4]	[8.3]	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	体部下半横段のヘラ削り線、腹部のヘラ削き	覆土下層	20%
252	土師器	甕	20.1	(20.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部下半横段のヘラ削き	覆土下層	30%

第21号住居跡（第93・94図）

位置 2区中央部のB 17e8区、標高7.5mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

確認状況 床面が露出した状態で確認した。調査区の壁面に再堆積層である黒褐色土内から本跡の覆土を確認している。

重複関係 第7・20号住居跡、第18号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 南西コーナー部付近は調査区域外へ延びており、北西・南東軸3.45m、北東・南西軸3.40mし

か確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定でき、主軸方向はN-70°-Wである。壁高は調査区の壁面で57cm、外傾して立ち上がっていることを確認した。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。北壁の一部だけは貼床で、ロームブロックを含んだ第5層を埋めている。

竈 西壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで80cmで、燃焼部幅は50cmである。左袖部は粘土ブロック、ローム粒子を含んだ第3・4層を積み上げて構築されている。右袖部は床面に粘土ブロックを貼り付けたわずかな痕跡しか確認できなかった。火床部は床面とほぼ同じ高さで、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に14cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。

遺土層解説

1	暗赤褐色	燒土ブロック・ローム粒子少量	3	灰褐色	粘土ブロック多量	ローム粒子微量
2	黒褐色	燒土ブロック少量	4	黒色	粘土ブロック・炭化物	ローム粒子微量

ローム粒子微量

覆土 調査区の壁面で3層、床上で1層を確認しており、4層に分層できる。全容は明らかでないが、ロームブロックや焼土ブロックが主体であることから埋め戻されている。第5層は貼床の構築土である。

土層解説

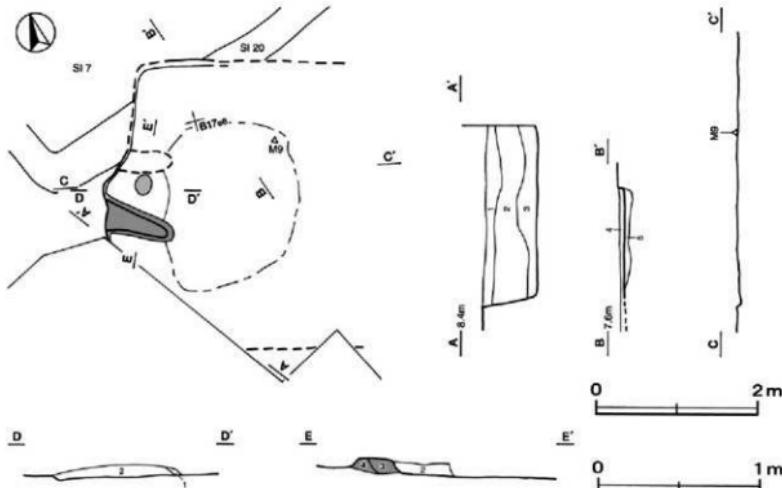
1	暗褐色	炭化物少量	ロームブロック・焼土ブロック・ 粘土粒子微量	3	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量
2	黒褐色	ロームブロック少量	焼土ブロック微量	4	黒色	ローム粒子微量

ローム粒子微量

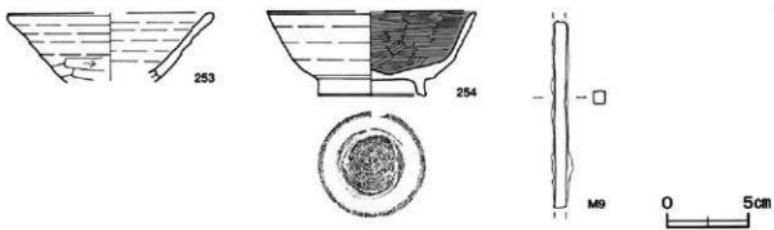
5 細褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片215点(坏17、高台付椀1、高盤2、甕類194、瓶1)、須恵器片41点(坏16、高台付坏2、盤1、蓋8、甕類14)、鉄製品1点(釘)のほか、混入した縄文土器片9点(深鉢)、土師器片5点(器台3、高坏1、壺1)、礫1点も出土している。M9は中央部の床面、253・254は覆土中からそれぞれ出土している。いずれも廃絶後の早い段階で投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉に比定できる。



第93図 第21号住居跡実測図



第94図 第21号住居跡出土遺物実測図

第21号住居跡出土遺物観察表（第94図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	鉢土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
253	須恵器	环	[12.4]	(4.2)	—	長石・石英・雲母	黄灰	良好	体部下端手持ちハラ削り	覆土中	30%
254	土師器	高台付杯	[12.7]	5.2	6.7	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐	普通	体部内面横窓のハラ削き 脇部回転ハラ削り 底後、高台張り付け	覆土中	50%

番号	器種	大きさ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M9	鉢	(15.9)	0.7	0.8	(34.7)	鐵	断面長方形 肩端欠損	床面	PL29

第23号住居跡（第95図）

位置 2区中央部のB 17c3区、標高75mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第16・32・41号住居跡を掘り込み、第6・10号住居、第3号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 北部が調査区域外へ延びていることや、第6・10号住居に掘り込まれているため、南北軸、東西軸とともに4.10mしか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定され、主軸方向は不明である。壁高は24cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦な貼床で、全体が踏み固められている。南東部だけは貼床で、下部にロームブロック、焼土ブロックを含んだ第5・6層を、上部にロームブロック、粘土粒子、砂粒を含んだ第4層を薄く積み上げて構築されている。南壁の一部の壁下には、壁溝が巡っている。

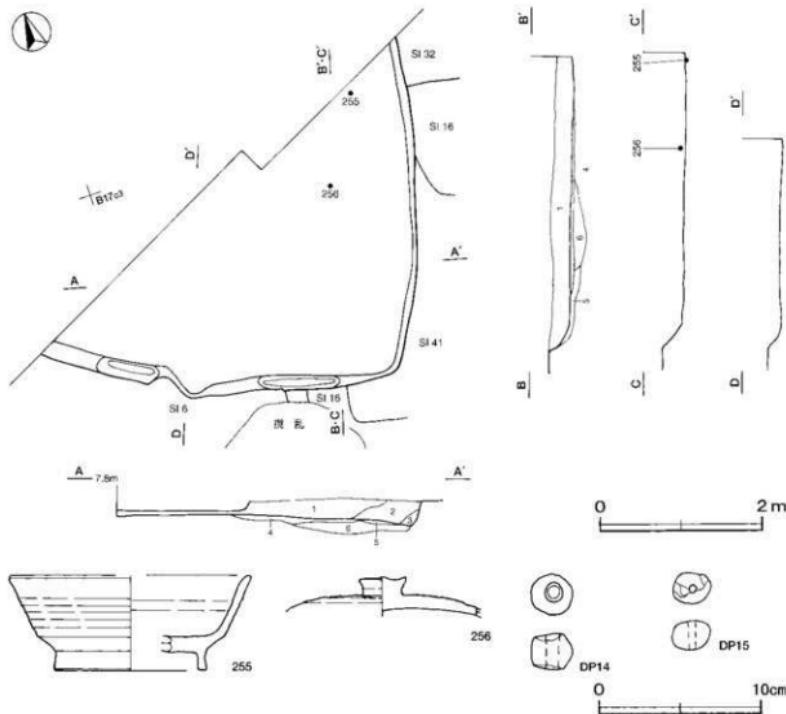
覆土 3層に分層できる。不自然な堆積状況から埋め戻されている。第4～6層は貼床の構築土である。

土層解説

1	暗褐色	炭化物、ローム粒子、粘土粒子、砂粒少量、焼土ブロック微量	4	にい青褐色	ロームブロック、粘土粒子、砂粒中量、桃土粒子、炭化粒子微量
2	暗褐色	焼土ブロック、粘土ブロック、砂粒中量、炭化物、ローム粒子少量	5	黒褐色	ロームブロック、焼土ブロック微量、炭化粒子、粘土粒子、砂粒微量
3	黒褐色	焼土ブロック、炭化粒子、粘土粒子、砂粒中量、ローム粒子少量	6	黒褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片796点（环68、高台付椀3、甕類725）、須恵器片278点（环128、高台付环15、蓋32、高盤9、甕類94）、土製品2点（球状土鍤）のほか、覆土に混入した純文土器19点（深鉢）、土師器片1点（高环）、環1点、貼床の構築土内に混入した織文土器片1点（深鉢）、土師器片23点（环7、甕類16）、須恵器片11点（环6、甕類5）も出土している。255は北東部、256は東部の床面、DP14・DP15は覆土中からそれぞれ出土している。ほかに、埋め戻しの際に投棄されたとみられる土器片が覆土中から多量に出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。



第95図 第23号住居跡・出土遺物実測図

第23号住居跡出土遺物観察表（第95図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
255	瓶	高台付杯	[146]	5.9	[9.2]	長石・石英	灰	良好	底部回転ハラ削り後、高台貼り付け	床面	30%
256	瓶	蓋	-	[2.4]	-	長石・石英・墨母	灰	良好	天井部回転ハラ削り	床面	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP14	環状土器	26	2.3	0.8	12.4	土(長石・石英)	ナデ 一方向から穿孔	覆土中	PL29
DP15	環状土器	2.3	1.9	0.5	6.4	土(長石・石英)	ナデ 一方向から穿孔	覆土中	PL29

第24号住居跡（第96・97図）

位置 2区中央部のB 17c9区、標高7.5mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第28・29号住居跡、第4・5・6号掘立柱建物跡を掘り込み、第32号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.30m、短軸3.18mの長方形で、主軸方向はN-18°-Eである。壁高は4~12cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は粘土粒子を含んだ第2層を埋めて、構築されている。

竈 北壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで74cmで、燃焼部幅は左袖部を壁面に貼り付けた痕跡から、66cmを確認した。右袖部は粘土粒子を含んだ第6・7層を積み上げて構築されている。火床部は床面とはほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に40cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。

遺土層解説

1	暗褐色	燒土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	4	暗赤褐色	燒土粒子・粘土粒子少量・ローム粒子微量
2	暗褐色	粘土粒子少量・燒土ブロック・ローム粒子微量	5	暗赤褐色	燒土粒子少量・ローム粒子微量
3	暗赤褐色	燒土ブロック少量・ロームブロック・炭化物・粘土粒子微量	6	黄褐色	粘土粒子中量・ローム粒子少量
		粘土粒子微量	7	暗褐色	ローム粒子・粘土粒子少量

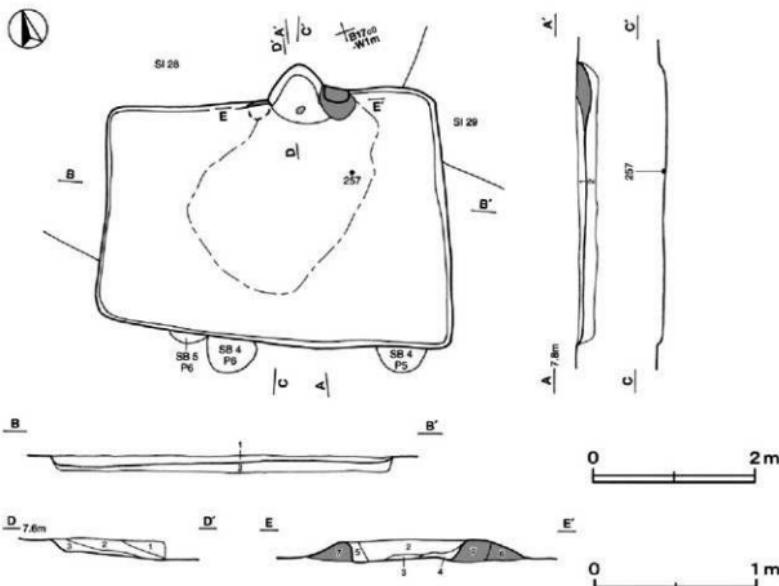
覆土 単一層で、含有物がブロック主体であることから埋め戻されている。第2層は貼床の構築土である。

土層解説

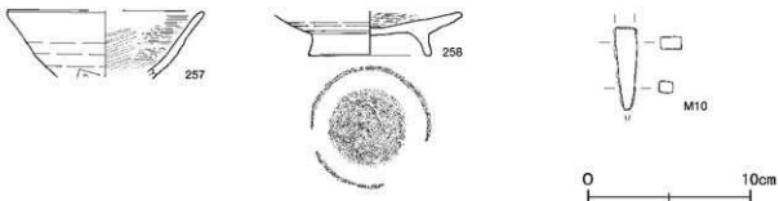
1	暗褐色	燒土ブロック少量・ロームブロック・炭化物・粘土粒子微量	2	極暗褐色	粘土粒子少量・ロームブロック微量
---	-----	-----------------------------	---	------	------------------

遺物出土状況 土師器片159点(坏30、高台付椀1、壺類128)、須恵器片97点(坏43、高台付坏1、蓋6、壺類40、瓶7)、灰釉陶器片1点(瓶類)、鐵製品1点(不明)、瓦1点(平瓦)のほか、貼床の構築土内に混入した土師器片59点(坏1、壺類58)、須恵器片13点(坏7、高盤1、鉢1、壺類4)も出土している。257は中央部の床面、258・M10は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉に比定できる。



第96図 第24号住居跡実測図



第97図 第24号住居跡出土遺物実測図

第24号住居跡出土遺物観察表（第97図）

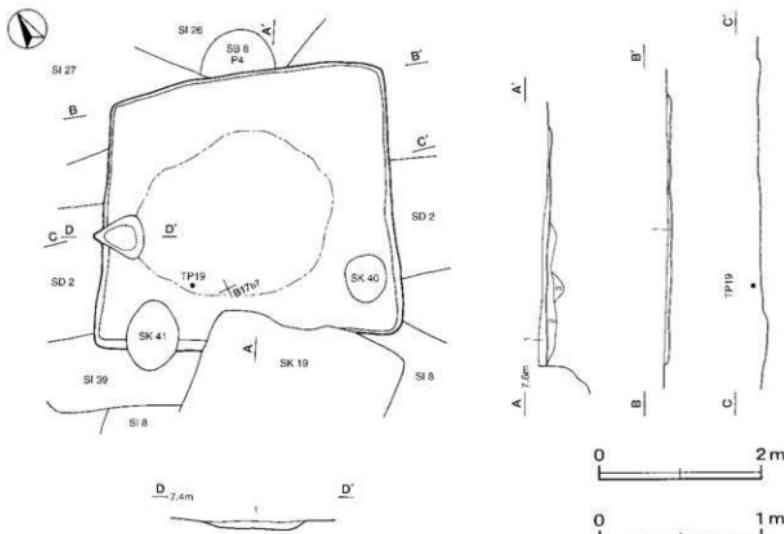
番号	種別	部種	口径	都高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
257	土器	壺	[12㌢] (4.1)	-	長石・雲母・赤色粒子	褐	普通	体部下端手持ちへラ削り 内面横凹のヘラ削	表面	20%	
258	土器	高台付壺	-	(2.8)	7.4	長石・雲母	明赤褐	普通	肩部下端回転へラ削り 底部回転へラ削り 後、高台貼り付け	覆土中	30%

番号	部種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M.10 不明鉄製品	(5.0)	0.9~1.3	0.7	(19.5)	鉄	前面長方形両端欠損	鋒々	覆土中	

第25号住居跡（第98・99図）

位置 2区中部のB 17a7区、標高7.5mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第8・26・27・39号住居跡、第8号掘立柱建物跡、第2号溝跡を掘り込み、第19・40・41号土坑に掘り込まれている。



第98図 第25号住居跡実測図

規模と形状 長軸 3.58 m、短軸 3.34 m の方形で、主軸方向は N - 65° - W である。壁高は 2 ~ 10 cm で、外傾して立ち上っている。

床 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。南部だけは貼床で、下部にロームブロック、焼土ブロックを含んだ第3層を、上部にロームブロックを含んだ締まりの強い第2層を積み上げて構築されている。

竈 北西壁に竈の掘方の一部を確認した。遺存している規模は、長軸 64 cm、短軸 54 cm で、平面形は三角形である。床面を 6 cm 挖り込んでおり、覆土に焼土ブロック、粘土粒子、炭化物を含んでいる。

電土層解説

1 黒褐色 粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量

覆土 単一層で、含有物がブロック主体であることから埋め戻されている。第2・3層は貼床の構築土である。

土層解説

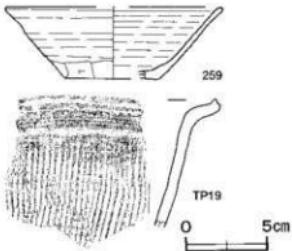
1 黒褐色 ロームブロック少量

2 黑褐色 ロームブロック少量

3 黑褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量

遺物出土状況 土器器片 210 点（壺 21、甕類 189）、須恵器片 93 点（壺 30、高台付坏 2、蓋 1、鉢 4、瓶類 1、甕類 55）、瓦 2 点（平瓦）が出土している。TP19 は中央部の覆土上層、259 は覆土中からそれぞれ出土しており、いずれの土器も床面との高低差がほとんどないことから、廃絶後の早い段階で投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀中葉に比定できる。



第 99 図 第 25 号住居跡出土遺物実測図

第 25 号住居跡出土遺物観察表（第 99 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
259	須恵器	壺	[13.4]	4.4	[5.8]	長石・石英・雲母	灰	良好	体部下端手持ちへ削り 截部一方向へのテラ削り	覆土中	5%
TP19	須恵器	鉢	-	(7.9)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部腹位の平行叩き	覆土上層	PL27

第 26 号住居跡（第 100 図）

位置 2 区北東部の B 17a7 区、標高 8.0 m の河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第 27 号住居跡、第 7・8 号掘立柱建物跡を掘り込み、第 25 号住居に掘り込まれている。

規模と形状 北西部が調査区域外へ延びているため、北東・南西軸は 4.13 m で、北西・南東軸は 2.25 m しか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定できるが、主軸方向は不明である。壁高は調査区の壁面で 74 cm を確認しており、直立している。

床 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は下部にロームブロックを含んだ第6層を埋めて、上部に焼土粒子、粘土粒子を含んだ第3~5層を薄く積み上げて構築されている。

覆土 2 層に分層できる。含有物はブロックが主体で、不自然な堆積状況から埋め戻されている。第3~6層は貼床の構築土である。

土層解説

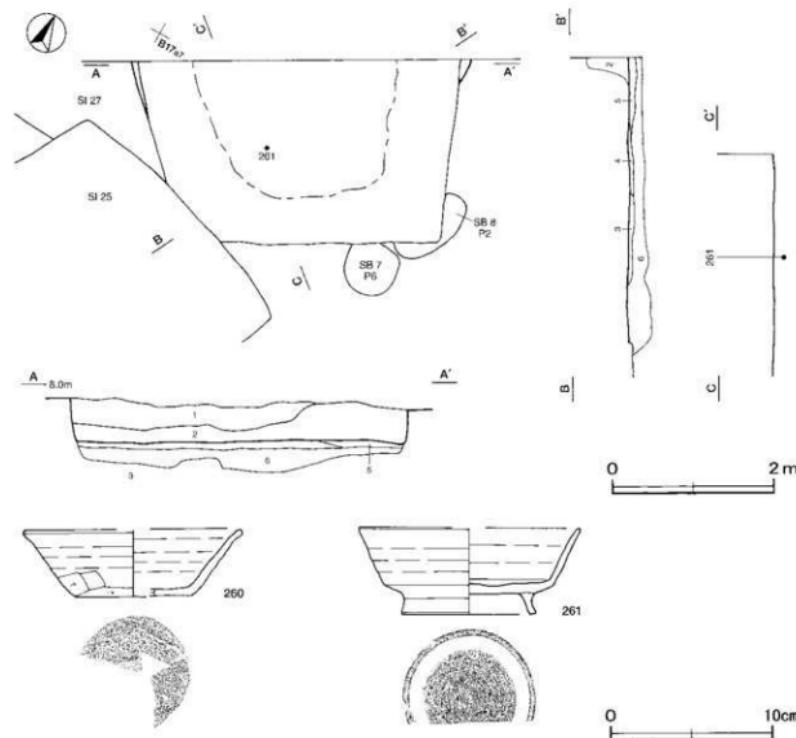
1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

2 黑褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量

3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 158 点（坏 7、高盤 2、甕類 149）、須恵器片 126 点（坏 61、高台付坏 4、蓋 8、甕類 53）のほか、覆土に混入した縄文土器片 6 点（深鉢）、碟 1 点、貼床の構築土内に混入した縄文土器片 1 点（深鉢）、土師器片 38 点（坏 5、甕類 33）、須恵器片 25 点（坏 15、高台付坏 1、蓋 1、盤 2、高盤 3、甕類 3）も出土している。261 は貼床構築土内、260 は覆土中からそれぞれ出土しているが、いずれの土器も床面との高低差がほとんどないことから、廃絶後の早い段階で投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀前葉に比定できる。



第 100 図 第 26 号住居跡・出土遺物実測図

第 26 号住居跡出土遺物観察表（第 100 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
260	須恵器	坏	[13.2]	4.1	[7.0]	良石・石英	灰	良好	体部下端手持ちへラ削り 底部多方向へのラ削り	覆土中	30%
261	須恵器	高台付坏	[13.4]	5.2	8.0	良石・石英	灰	普通	底部回転へラ削り後、高台貼り付け	貼床構築土内	50%

第 27 号住居跡（第 101 図）

位置 2 区北東部の B 17a6 区、標高 8.0 m の河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第 8 号掘立柱建物跡を掘り込み、第 25・26 号住居に掘り込まれている。

規模と形状 北・西部は調査区域外へ延びており、南・東部は第 25・26 号住居に掘り込まれているため、東西軸 3.10 m、南北軸 1.10 m しか確認できなかった。平面形および主軸方向は不明である。壁高は調査区の壁面で 72 cm を確認しており、直立している。

床 平坦な貼床で、南壁際を除いた広い範囲が踏み固められている。貼床はロームブロックを含んだ第 3 層を埋めて構築されている。

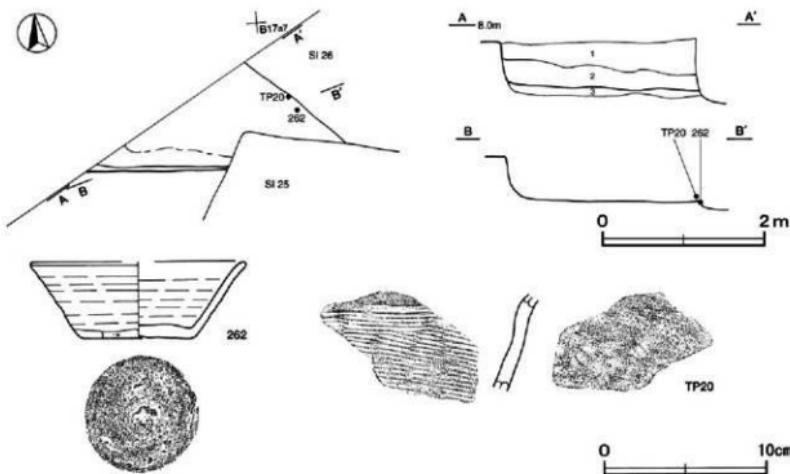
覆土 2 層に分層できる。一部しか確認できなかったが、含有物がブロック主体であることから埋め戻されている。第 3 層は貼床の構築土である。

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・小礫微量	2	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
3	棕褐色	ロームブロック少量			

遺物出土状況 土器片 15 点（甕類）、須恵器片 6 点（坏 5、鉢 1）のほか、混入した繩文土器片 2 点（深鉢）、瓦質土器片 1 点（焙烙）も出土している。262 は南東部の床面から正位の状態で、TP20 は南東部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀前葉に比定できる。本跡は同時期に比定できる第 26 号住居に掘り込まれていることから、使用時期は短期間であったことが推測できる。



第 101 図 第 27 号住居跡・出土遺物実測図

第 27 号住居跡出土遺物観察表（第 101 図）

番号	種 別	器 形	口 径	器 高	底 径	胎 土	色 調	燒 成	手 法 の 特 徴 は か	出 土 位 置	備 考
262	須恵器	坏	13.0	4.7	6.8	長石・石英	灰	良好	底部下端手持ちへラ削り 底部斜軸へラ切り 一方向のへラ削り	床面	60%
TP20	須恵器	鉢	-	(5.9)	-	長石・石英・雲母	灰黄褐	良好	外縁斜削の平行叩き	覆土下層	PL27

第33号住居跡（第102・103図）

位置 2区北東部のB 17a8区、標高7.5mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第34・36号住居跡、第7号掘立柱建物跡を掘り込み、第38号住居、第34号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.35m、短軸3.28mの方形で、主軸方向はN-87°-Wである。壁高は5~16cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈の前面が踏み固められている。

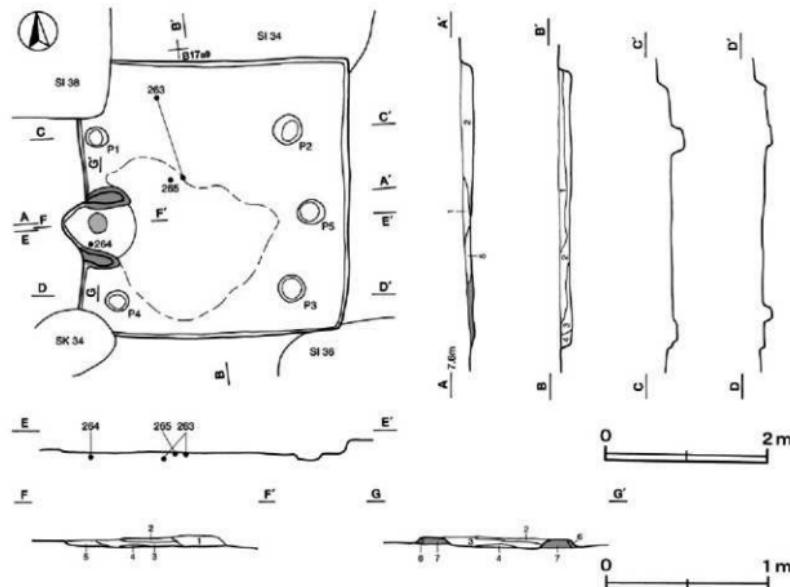
竈 西壁のやや南寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで90cmで、燃焼部幅は54cmである。袖部は粘土粒子を含んだ第7層を基部とし、粘土ブロックを含んだ締まりの強い第6層を外側に積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に30cm掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

竈層解説

1	暗褐色	粘土粒子中量、粘土ブロック、ローム粒子微量	5	暗褐色	粘土ブロック、ローム粒子、炭化粒子微量
2	赤褐色	粘土粒子少量、粘土ブロック、ローム粒子微量	6	灰褐色	粘土ブロック少量、炭化物、ローム粒子、焼土粒子微量
3	褐色	粘土ブロック、ローム粒子、粘土粒子微量	7	にじむ褐色	ローム粒子、粘土粒子少量
4	にじむ褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子、炭化粒子微量			

ピット 5か所。P1~P4は深さ6~16cmで、配置から主柱穴である。P5は深さ6cmで、東壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと推定できる。

覆土 5層に分層できる。含有物はブロック主体であることから埋め戻されている。



第102図 第33号住居跡実測図

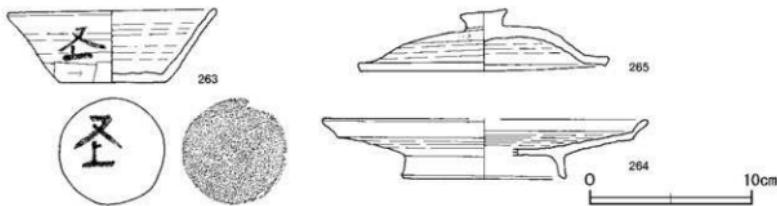
土層解説

- 1 短 暗 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗 暗 暗 色 炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 3 暗 暗 色 ロームブロック微量

- 4 暗 色 ロームブロック少量
- 5 黒 暗 色 粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 101 点（坏 16、高坏 5、甕類 80）、須恵器片 117 点（坏 65、高台付坏 8、盤 1、蓋 10、高盤 1、長頸瓶 1、甕類 28、瓶 3）のほか、混入した縄文土器片 7 点（深鉢）、碟 9 点も出土している。264 は竈の火床面、265 は中央部の床面からそれぞれ出土している。263 は北西部と中央部の床面からそれぞれ出土した破片が接合している。いずれも廃絶後の早い段階で投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀中葉に比定できる。



第 103 図 第 33 号住居跡出土遺物実測図

第 33 号住居跡出土遺物観察表（第 103 図）

番号	種 別	器 形	口 径	器 高	底 径	胎 土	色 調	燒 成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
263	須恵器	坏	12.6	4.5	6.5	長石・石英・雲母	黄灰	良好	体部下部手持ちハラ削り、底部一方回のヘラ削り、体部・底部に黒帯「又ト」	床面	60% P1.25-26
264	須恵器	盤	[20.0]	3.7	[10.0]	長石・石英・雲母・ 小色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転ハラ削り後、高台貼り付け	竈火床面	40%
265	須恵器	蓋	15.1	3.8	-	長石・石英・雲母	黄灰	良好	天井部回転ハラ削り	床面	100%

第 35 号住居跡（第 104・105 図）

位置 2 区東北部の A 17j9 区、標高 75 m の河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第 34 号住居跡、第 7 号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 29.3 m、短軸 23.8 m の長方形で、主軸方向は N - 28° - E である。壁高は 15 ~ 18 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北東壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 86 cm で、燃焼部幅は 44 cm である。袖部は粘土ブロックを含んだ第 8 層と、ローム粒子を含んだ第 7 層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は赤変硬化していない。煙道部は壁外に 30 cm 剥き込まれ、外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 黒 暗 色 ロームブロック・粘土ブロック・燒土粒子・炭化粒子微量
- 2 にぶい赤褐色 ロームブロック・燒土ブロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗 暗 色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 4 黑 暗 色 燃土ブロック・ローム粒子微量
- 5 暗 暗 色 ローム粒子少量
- 6 握 色 ロームブロック少量
- 7 暗 暗 色 ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量
- 8 極 暗 暗 色 粘土ブロック・ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量

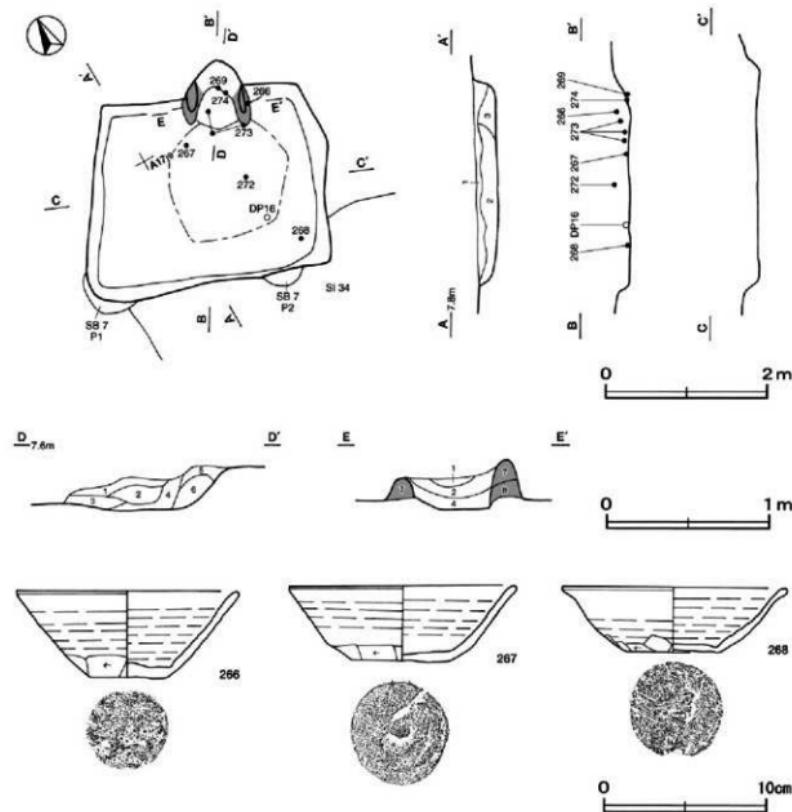
覆土 3層に分層できる。不自然な堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

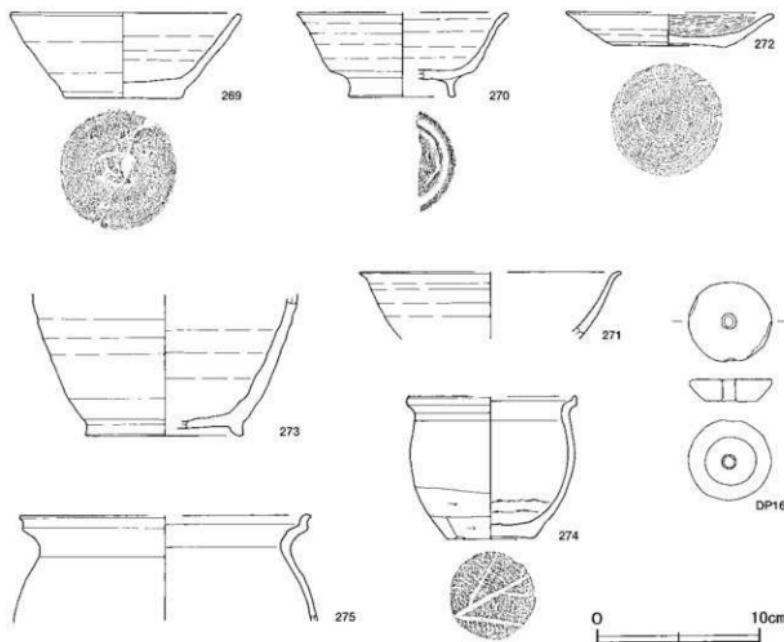
- 1 黒暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、燒土粒子微量
2 黒褐色 ロームブロック少量
3 棕褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 262点（壺50、高台付椀2、皿1、高台付皿4、甕類204、瓶1）、須恵器片 59点（壺33、高台付壺1、瓶2、甕類23）、灰釉陶器片 1点（椀）、土製品 1点（紡錘車）のほか、混入した繩文土器片 7点（深鉢）も出土している。269・274は竈の火床面、267は竈の前面、268・DP16は南部の床面からそれぞれ出土している。266は竈の覆土上層から出土しており、外・内面ともに焼けている。273は竈の覆土下層から中層にかけて出土した3点の破片が接合している。272は中央部の覆土上層、270・271・275は覆土中層からそれぞれ出土しているなど、廃絶後に投棄されたとみられる土器が多量に出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。



第104図 第35号住居跡・出土遺物実測図



第105図 第35号住居跡出土遺物実測図

第35号住居跡出土遺物観察表（第104・105図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼度	手法の特徴ほか	出土位置	備考
266	灰窓器	环	13.5	5.4	4.7	良石・石英・雲母・小繊	赤褐色	普通	体部下端手持ちへラ削り 底部一方削のへラ削り	覆土上層	100% PT.24
267	灰窓器	环	13.6	4.8	6.0	良石・石英	黄灰	良好	体部下端手持ちへラ削り 底部回転へラ切り削り 一方削のへラ削り	覆土面	90% PT.24
268	灰窓器	环	13.7	4.1	5.7	良石・石英・雲母	灰黄褐	普通	体部下端手持ちへラ削り 底部回転へラ切り削り 一方削のへラ削り	床面	90% PT.24
269	灰窓器	环	13.9	5.2	7.1	良石・石英・黒色粘土	灰	良好	底部回転へラ切り削り ナデ	竪火床面	80% PT.25
270	灰窓器	高台付环	[12.8]	5.2	[6.4]	良石・石英・雲母	にごい黄	普通	体部下端回転へラ削り 底部削鉋へラ削り 当台軸付付け	覆土中	40%
271	灰釉陶器	碗	[16.0]	(4.1)	-	良石	灰白	良好	外縁クロロゲ	覆土中	5%
272	土罐器	皿	[12.7]	2.1	6.9	良石・石英・雲母・赤色粘土	橙	普通	体部下端回転へラ削り 内面横状のへラ削き 或底回転へラ削り	覆土上層	20%
273	灰窓器	瓶	-	(8.0)	[9.6]	良石	灰灰	良好	体部下端回転へラ削り 底部高台貼り付け削り ナデ	覆土下層	10% PT.26
274	土罐器	小形甌	[10.2]	8.8	5.4	良石・石英・雲母	明赤褐	普通	体部下端へラ削り 底部木業痕	竪火床面	20%
275	土罐器	甌	[17.8]	(6.5)	-	良石・石英・雲母・赤色粘土	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土中	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	符號	出土位置	備考
DP16	結縛甌	5.2	1.5	0.9	39.4	上(石英)	横面ナデ	床面	PT.29

第37号住居跡（第106・107図）

位置 2区北東部のB 18c1区、標高75mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第40号住居跡、第2号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南・東部が調査区域外へ延びているため、東西軸2.35m、南北軸3.10mしか確認できなかった。

平面形は方形あるいは長方形で、主軸方向は不明である。壁高は28~46cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦な貼床で、踏み固められた痕跡は確認できなかった。貼床はローム粒子を含んだ第8層を全体に埋めて、中央部付近だけは第8層上に粘土ブロックを含んだ第7層を薄く積み上げて構築されている。

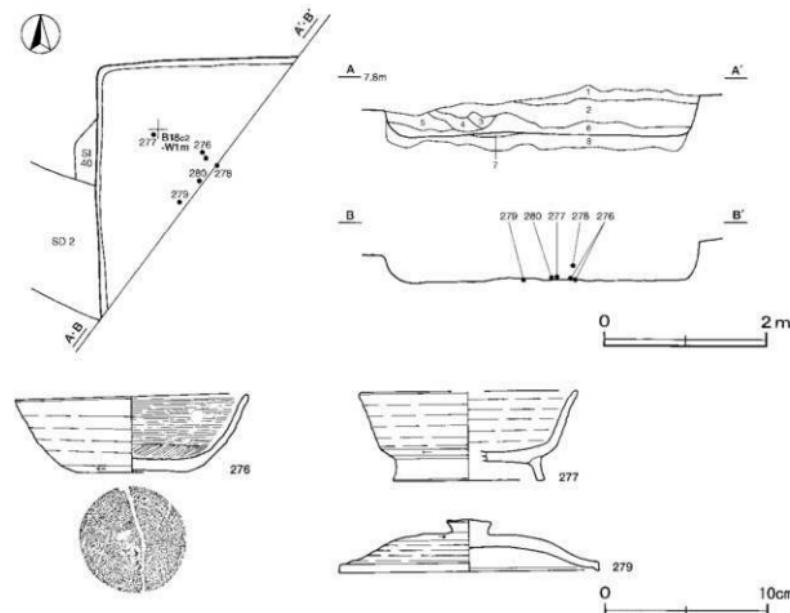
覆土 6層に分層できる。不自然な堆積状況を示していることから埋め戻されている。第7・8層は貼床の構築土である。

土層解説

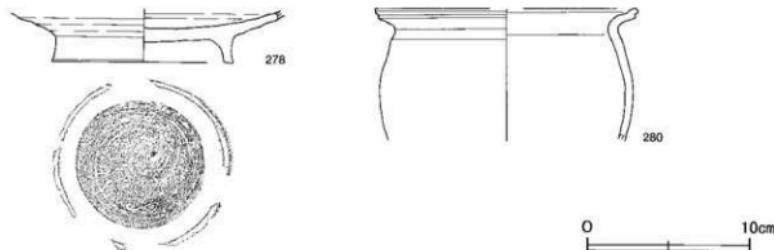
1	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	6	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
2	黒褐色	炭化粒子少量、ローム粒子微量	7	灰褐色	粘土ブロック少量、炭化粒子微量
3	灰褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子、炭化粒子微量	8	極暗褐色	ローム粒子微量
4	赤褐色	焼土ブロック・炭化物、ローム粒子微量			
5	暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子、炭化粒子微量			

遺物出土状況 土師器片17点(坏4、甕類13)、須恵器片16点(坏2、高台付坏1、盤1、蓋5、甕類7)のはか、混入した繩文土器片2点(深鉢)、弥生土器片2点(壺)も出土している。276・279・280は中央部、277は北西部の床面からそれぞれ出土しており、いずれも廃絶後の早い段階で投棄されたものとみられる。278は中央部の覆土上層から出土しているが、床面から出土している土器と時期差はみられない。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉に比定できる。



第106図 第37号住居跡・出土遺物実測図



第 107 図 第 37 号住居跡出土遺物実測図

第 37 号住居跡出土遺物観察表（第 106・107 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
276	土器部	环	14.2	4.8	6.5	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端回転へラ削り、底部回転へラ削り後、ヘラ削り	床面	20% PL.24
277	灰化部	高台付环	[13.2]	5.5	[9.2]	長石・石英・雲母	暗灰	普通	体部下端回転へラ削り、底部回転へラ削り後、高台貼り付け	床面	30%
278	灰化部	盤	—	(3.2)	11.1	長石・石英・雲母	黄灰	普通	底部回転へラ削り後、高台貼り付け	覆土上層	50%
279	灰化部	蓋	15.8	3.2	—	長石・石英	灰	良好	天井部回転へラ削り	床面	90% PL.25
280	土器部	環	[16.0]	(8.1)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	明灰	普通	口縁部外・内面横ナジ	床面	5%

第 38 号住居跡（第 108 図）

位置 2 区北東部の A 178 区、標高 75 m の河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第 33・34 号住居跡、第 7・8 号掘立柱建物跡を掘り込み、第 48 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北東壁だけは遺存しているが、大半の床面が露出して検出されているため、長軸 2.60 m、短軸 2.56 m しか確認できなかった。平面形は方形で、主軸方向は N - 3° - E である。遺存している北・東部の壁高は 2 ~ 7 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、踏み固められた痕跡は確認できなかった。

竈 北壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 104 cm で、燃焼部幅は 54 cm である。袖部は右袖部が遺存しており、ロームブロック、粘土ブロックを含んだ第 5 ~ 9 層を積み上げて構築されている。火床部は床面を若干掘り込んでおり、火床面は赤変硬化していない。煙道部は壁外に 40 cm 割り込まれ、外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------------|---------|-----------------------------|
| 1 灰褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック
微量 | 5 にぶい黄色 | 粘土ブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土粒子、炭化粒子少量、ロームブロック・
粘土粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子・炭化粒子
微量 | 7 暗灰褐色 | 粘土ブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量 |
| 4 褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・
炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子
微量 |
| 9 握色 | ロームブロック微量 | 9 握色 | ロームブロック微量 |

覆土 単一層で、含有物から自然堆積とみられる。

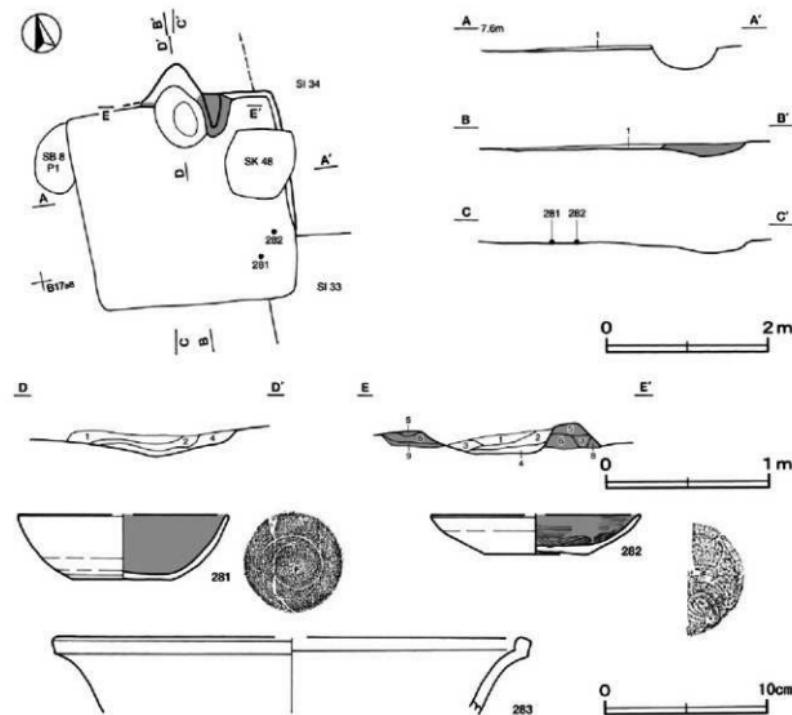
土層解説

- 1 暗褐色

1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 123 点（坏 1, 盆 1, 壶類 121）, 須恵器片 53 点（坏 38, 蓋 1, 壶類 14）のほか, 流れ込んだ弥生土器片 2 点（壺）も出土している。281・282 は南東部の覆土下層から出土しているが, 床面との高低差がほとんどないことから, 廃絶後の早い段階で投棄されたものとみられる。283 は覆土中から出土している。

所見 時期は, 出土土器から 10 世紀前葉に比定できる。



第 108 図 第 38 号住居跡・出土遺物実測図

第 38 号住居跡出土遺物観察表（第 108 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
281	土師器	坏	[口2.8]	4.0	6.0	長石・石英	にふい青白	普通	体部内面摩滅による清楚不明 底部回転へラ 切り挽。ナゲ	覆土下層 P1.24	60%
282	土師器	皿	[口2.8]	2.4	6.2	長石・石英・ 赤色鉱物	にふい橙	普通	体部内面横位のヘラ削き 底部回転糸切り	覆土下層	40%
283	須恵器	壺	[28.2]	(4.7)	-	長石・石英・雲母	灰黄	良好	口縁部外・内面横ナゲ	覆土中	5%

第 39 号住居跡（第 109・110 図）

位置 2 区中央部の B 17b7 区, 標高 7.5 m の河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第8号住居跡、第2号溝跡を掘り込み、第25号住居、第19・41・42号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.91m、短軸2.40mの長方形で、主軸方向はN-22°-Eである。壁高は20~36cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。南部だけは貼床で、下部にロームブロックを含んだ第6層を、上部は締まりの強いロームブロックを含んだ第5層を薄く積み上げて構築されている。

竈 北東壁に付設されている。わずかな覆土と掘方の一部だけを確認した。遺存している規模は長軸80cm、短軸64cmで、平面形は楕円形である。火床部は床面を10cm掘り込んで、ロームブロック、粘土粒子を含んだ第3層を埋土して構築されており、火床部は赤変硬化していない。煙道部は壁外へ16cm掘り込まれていることを確認した。

竈土層解説

1	暗	褐	色	燒土ブロック・燒土粒子少量、ロームブロック・炭化物微量	3	暗	褐	色	ロームブロック少量、燒土ブロック・炭化物微量	
2	灰	褐	色	燒土粒子少量、ロームブロック・燒土粒子微量	4	極	暗	褐	色	ロームブロック・炭化物・燒土粒子微量

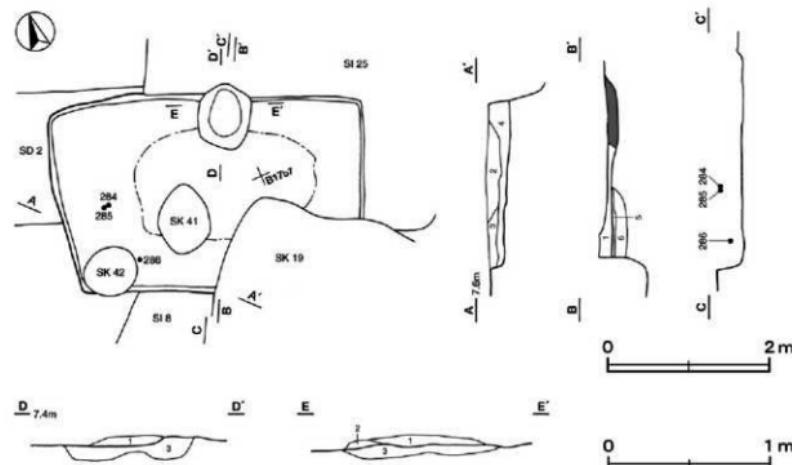
覆土 4層に分層できる。焼土ブロックや炭化物は微量であるが各層に含まれており、埋め戻されている。第5・6層は南部の床面で確認した貼床の構築土である。

土層解説

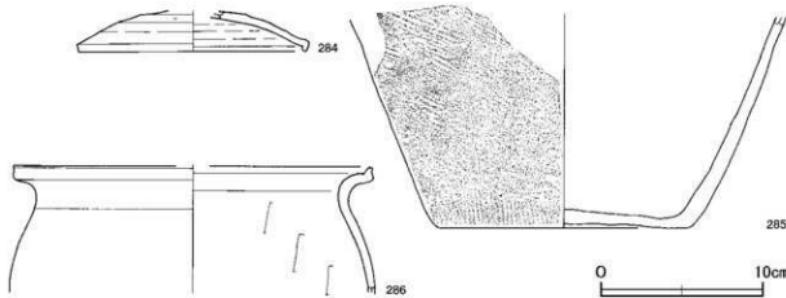
1	暗	褐	色	ロームブロック・燒土ブロック・炭化物微量	4	極	暗	褐	色	ロームブロック・炭化物・燒土粒子微量
2	暗	褐	色	炭化物少量、ロームブロック・燒土ブロック微量	5	暗	褐	色	ロームブロック・燒土ブロック微量	
3	暗	褐	色	ロームブロック・燒土ブロック・炭化物微量	6	暗	褐	色	ロームブロック少量、燒土ブロック微量	

遺物出土状況 土師器片210点(环34、高杯3、甕類173)、須恵器片35点(环18、高台付环1、蓋2、鉢2、瓶類12)が出土している。284・285は南西部の覆土上層、286は覆土中層からそれぞれ出土している。いずれも床面との高低差がほとんどないことから、廃絶後の早い段階で投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。



第109図 第39号住居跡実測図



第110図 第39号住居跡出土遺物実測図

第39号住居跡出土遺物観察表（第110図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
284	埴生器	釜	[14.0] (2.5)	-	良石・石英・赤色粒子	灰	良好	天井盛回転ハラ削り	覆土上層	10%	
285	埴生器	釜	-	(13.0)	15.6	良石・石英	灰	良好	外輪削位の平行引き 内面わずかな当て具根 底部は軽く切り落しナマ	覆土上層	20%
286	埴生器	釜	[22.0] (7.8)	-	良石・石英・雪母	に白い粒 普通	口縁部・内面横ナマ	-	-	覆土中層	10%

表8 平安時代住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m)				床面	埋溝	内部施設	覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係(古→新)
				長軸	短軸	壁高(cm)	壁溝							
3	B17d9	N - 10° - E	長方形	4.15	×	3.50	-	平坦	-	-	埴生	埴生器	9世紀後半	SI18-19-22 SK39 →本跡→SK20
4	B17c7	N - 65° - E	方 形	4.87	×	4.87	10-14	平坦	-	-	1	埴1	人為	SI7-8-20本跡
5	B17b5	N - 84° - E	〔方形・長方形〕 [29.0] × [2.06]	28	平坦	-	-	-	-	埴1	-	自然	SI17-本跡→SK11	
6	B17c2	N - 89° - E	〔方形・長方形〕 [34.5] × [2.48]	41	平坦	-	2	-	1	埴1	-	自然	SI18-9世紀後半 SI23 SK25-本跡→SI10	
7	B17d7	N - 20° - W	〔方形・長方形〕 [38.3] × [3.79]	-	平坦	-	-	-	-	埴1	-	人為	SI20-9世紀後半 SI21-21 SK12	
9	B17b5	-	-	[29.5] × [0.30]	-	平坦	-	-	-	-	-	人為	SI2-本跡→SK9-13	
10	B17c3	-	-	3.30	×	[0.62]	32	平坦	-	-	-	自然	SI1-人為	SI1-本跡→本跡
11	B17d6	N - 76° - W	〔長方形〕 [4.16] × [3.68]	-	平坦	-	-	-	-	埴1	-	人為	SI12-9世紀後半	
14	B17c5	N - 22° - W	長方形	4.40	×	3.44	20-34	平坦	一部	-	1	埴1	人為	SI13-16-17-32-本跡→SI16
15	B17d4	N - 17° - E	長方形	4.24	×	3.43	10	平坦	-	-	埴1	人為	SI16-41-本跡	
19	B17d9	N - 23° - E	〔長方形〕 [4.09] × [3.60]	20-90	平坦	-	-	-	-	埴1	自然 人為	SI18-22 SK39-本跡→SI30		
21	B17e8	N - 70° - W	〔方形・長方形〕 [3.45] × [3.40]	57	平坦	-	-	-	-	埴1	人為	SI7-9世紀後半		
23	B17c3	-	-	[4.10] × [4.10]	24	平坦	一部	-	-	-	人為	SI16-32-41 SK33-本跡→SI10		
24	B17c9	N - 18° - E	長方形	4.30	×	3.18	4-12	平坦	-	-	埴1	人為	SI28-29 SK45-5-本跡→SK33	
25	B17a7	N - 65° - W	方 形	3.58	×	3.34	2-10	平坦	-	-	埴1	人為	SI2-3-4-5-6-7-8-9世紀後半 SD2-4-5-6-7-8-9世紀後半 SI19-40-41	
26	B17a7	-	〔方形・長方形〕	4.13	×	[2.25]	74	平坦	-	-	-	人為	SI27-9世紀-8-本跡→SI25	
27	B17a6	-	-	[3.10] × [1.10]	72	平坦	-	-	-	-	人為	SI28-本跡→SI25-26		
33	B17a8	N - 87° - W	方 形	3.35	×	3.28	5-16	平坦	4 1	-	埴1	人為	SI34-9世紀後半	
35	A17b9	N - 28° - E	長方形	2.93	×	2.38	15-18	平坦	-	-	埴1	人為	SI40-SD2-本跡	
37	B18c1	-	〔方形・長方形〕	[3.10] × [2.35]	28-46	平坦	-	-	-	-	人為	SI40-SD2-本跡		
38	A17b8	N - 3° - E	〔方 形〕	[2.60] × [2.56]	2-7	平坦	-	-	-	-	埴1	自然	SI33-34 SK47-8-本跡→SI48	
39	B17b7	N - 22° - E	長方形	3.91	×	2.40	20-36	平坦	-	-	埴1	人為	SI8-SD2-本跡→SI25 SK19-41-42	

(2) 挖立柱建物跡

第4号掘立柱建物跡 (第111・112図)

位置 2区中央部のB 17b9区、標高75mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第28・29号住居跡、第6号掘立柱建物跡、第2号溝跡を掘り込み、第24号住居に掘り込まれている。

第5号掘立柱建物跡の柱穴が周囲に、第32号土坑が内部に存在しているが、柱穴の切り合いは確認できなかった。

規模と構造 衍行2間、梁行2間の側柱建物跡で、衍行方向はN-18°-Eの東西棟である。規模は衍行420m、梁行420mで、面積は17.64m²である。柱間寸法は衍行、梁行ともに2.10m(7尺)を基調とし、均等に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。

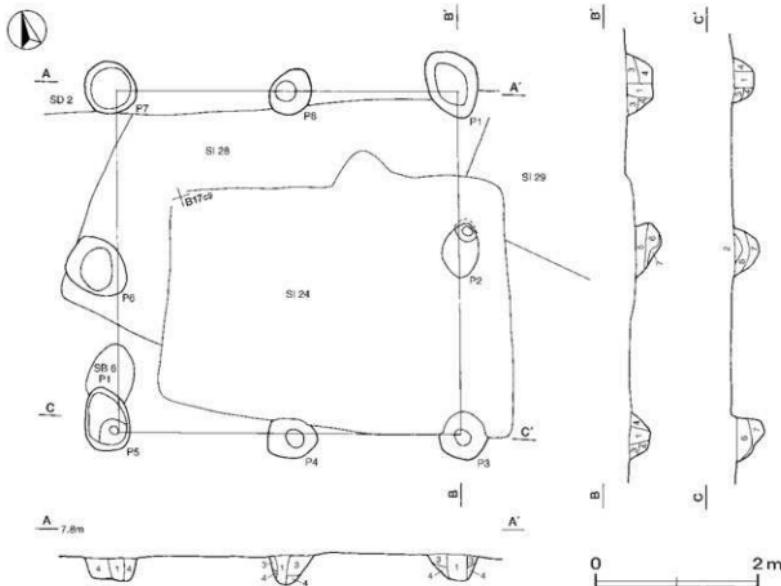
柱穴 8か所。平面形は円形または梢円形で、長径60~90cm、短径44~66cmである。深さは24~38cmで、掘方の断面形は逆台形あるいはU字形である。土層は第1層が柱抜き取り痕で、第2~6層は埋土である。埋土はローム粒子、粘土粒子を含んだ褐色系や黒色系の土である。

土層解説 (各柱穴共通)

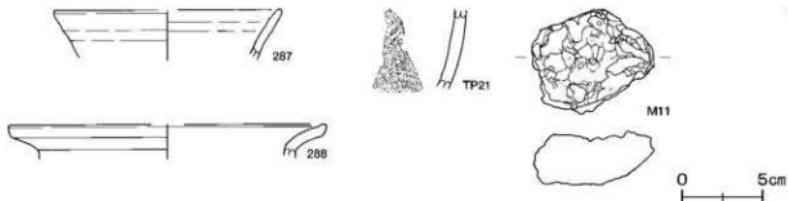
1 黑褐色 粘土粒子少量、ローム粒子微量	4 黑褐色 ローム粒子少量、粘土粒子微量
2 黒褐色 ロームブロック・粘土粒子微量	5 墓褐色 ローム粒子少量
3 黒褐色 ローム粒子微量	6 黑褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 土器片36点(坏8、壺類28)、須恵器片12点(坏7、蓋1、壺類4)、鉄滓1点が出土している。TP21はP1、288はP2、287、M11はP3からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。



第111図 第4号掘立柱建物跡実測図



第112図 第4号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第4号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第112図)

番号	種別	部種	口径	部高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
287	陶器	环	14.0	(3.1)	-	長石・石英・雲母	灰	普通	ロクロナデ	P3 球土中	10%
288	土器	甌	19.4	(2.0)	-	長石・石英・赤色粒子	にふい黄褐	普通	口縁部ナデ	P2 球土中	5%
TP21	陶器	鉢	-	(4.9)	-	長石・石英	褐灰	普通	体部斜傾の平行叩き	P1 球土中	
M11	陶器	甌	7.5	6.4	3.3	167.5	05	鉄	抹茶色 表面は中核部が中心平坦で、輪郭状 余起及び凹凸が点在する。底面は焼成で凹凸少ない。	P3 球土中	

第6号掘立柱建物跡 (第113・114図)

位置 2区中央部のB 17b8区、標高75mの河岸段丘の下位段丘上に位置している。

重複関係 第2号溝跡を掘り込み、第4号掘立柱建物に掘り込まれている。

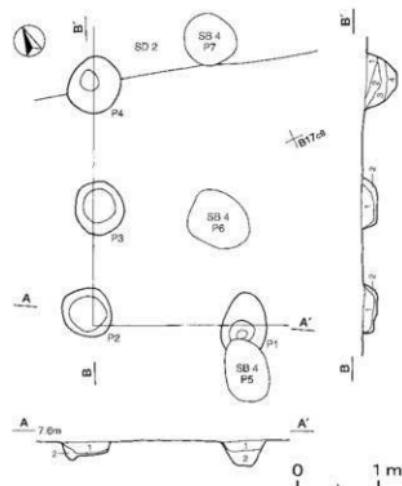
規模と構造 L字状に柱穴が並んでおり、南北軸2間、東西軸1間しか確認できなかった。構造は柱穴の配置

から側柱建物跡で、南北軸方向はN-25°-Eである。規模は南北軸3.60m、東西軸1.80m、面積は6.48m以上であることが確認できただけである。柱間寸法は南北軸、東西軸ともに1.80m(6尺)を基準とし、均等に配置されている。柱筋はほぼ描っている。

柱穴 4か所。平面形は円形または梢円形で、直径60~74cm、短径54~60cmである。深さは15~40cmで、掘方の断面形は逆台形あるいはU字形である。土層はすべて埋土で、粘土ブロックやロームブロックを含んだ黒色土である。

土層解説 (各柱穴共通)

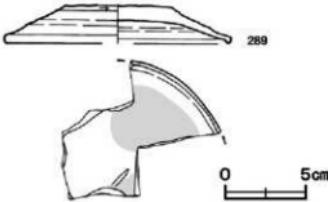
- 1 埋 土 色 ローム粒子微量
- 2 埋 土 色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 埋 土 色 ロームブロック少量
- 4 土 色 ロームブロック少量、炭化物微量



第113図 第6号掘立柱建物跡実測図

遺物出土状況 土師器片7点(高台付椀1, 壺類6), 須恵器片2点(壺, 壺類)のほか, 繩文土器片2点(深鉢)も出土している。289はP2から出土している。

所見 時期は, 出土土器から9世紀前葉に比定でき, 同時期の第4号掘立柱建物より古いことから, 短期間の使用であったことが想定できる。L字形に柱穴が配置されていることから柱列の可能性もある。



第114図 第6号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第6号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第114図)

番号	種別	部種	口径	部高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	はか	出土位置	備考
289	須恵器	壺	[13.8]	[2.0]	-	長石・石英	灰	普通	天井部回転ヘア頭り	朱墨直	P2埋土中	30%

表9 平安時代掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	柱行方向	柱間数 柱間×梁間	規模 幅×奥	面積 m ²	柱行柱間 (m)	梁行柱間 (m)	柱穴			主な出土遺物	時期	備考 基盤開発(古→新)
								構造	柱穴数	平面形			
4	B1768~ B1779	N~18°~E	2×2	4.20×4.20	17.64	2.10	2.10	圓柱	8	円形 横円形	24~30 上縁部、底辺 横溝、斜溝	9世紀前葉	S10~29, S30~6, S32 →本跡→S24
6	B1768~ B1769	N~25°~E	(2)×(1)	(3.60)×(1.80)	(6.48)	1.80	1.80	[圓柱]	4	円形 横円形	15~40 上縁部、底辺 溝	9世紀前葉	S33, S32~本跡 →S24

(3) 土坑

第12号土坑(第115・116図)

位置 2区中央部のB 17d8区, 標高7.5 mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第7・20号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.78 m, 短軸2.30 mの不整長方形で,

長軸方向はN~17°~Wである。深さは20cmで, 底面は凹凸がある。壁は緩やかに立ち上がっている。

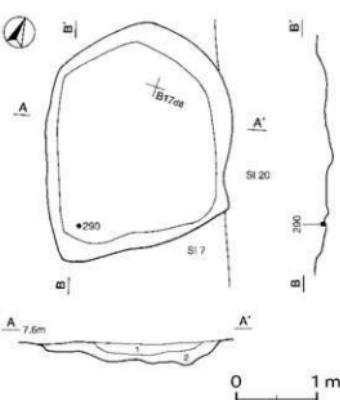
覆土 2層に分層できる。不自然な堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

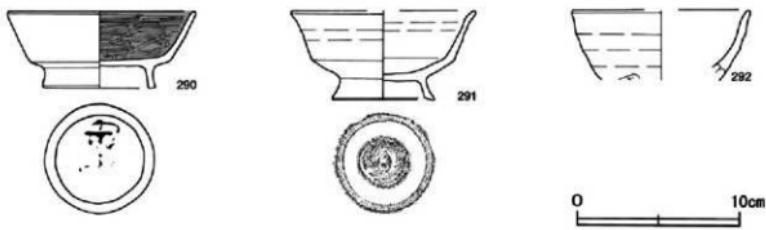
- 1 黒褐色 塗土粒子少量, ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 黄褐色 ローム粒子少量, 煙土粒子少量, 炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片146点(壺24, 高台付椀3, 壺類119), 須恵器片81点(壺33, 高台付壺10, 盖8, 鉢類29, 濱1), 灰釉陶器片1点(椀カ)のほか, 混入した繩文土器片5点(深鉢), 刃片1点(チャート)も出土している。290は南部の覆土下層, 291・292は覆土中から出土している。

所見 時期は, 出土土器から9世紀中葉に比定できる。性格は不明である。



第115図 第12号土坑実測図



第116図 第12号土坑出土遺物実測図

第12号土坑出土遺物観察表（第116図）

番号	種別	器種	口径	晋高	底径	土	色調	焼成	手法の特徴は	出土位置	備考
290	土師器	高台付壺	11.4	4.7	6.8	長石・石英	浅黄褐	普通 高台貼り付け 底部に墨書き「東」	内面底部のへた書き 底部回転へタ削り後 底部に墨書き「東」	覆土下層	70% P1.25-36
291	須恵器	高台付壺	11.2	5.5	6.2	長石・石英・墨母	褐	普通 底部回転へタ削り後 高台貼り付け	底部回転へタ削り後 高台貼り付け	覆土中	50%
292	須恵器	壺	10.8	4.3	-	長石・石英	灰	真好 黒色粒子	ロクロナデ 体部下部へタ削り	覆土中	10%

第14号土坑（第117図）

位置 2区南西部のB 17d3区、標高7.5 mの河岸段丘下位平坦部に位置している。

重複関係 北部の上端を第3号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.78 m、短径0.66 mの楕円形で、長径方向はN - 50° - Eである。深さは36 ~ 54 cmで、底面は凹凸がある。壁はほぼ直立して立ち上がっている。

覆土 7層に分層できる。不自然な堆積状況であることから埋め戻されている。

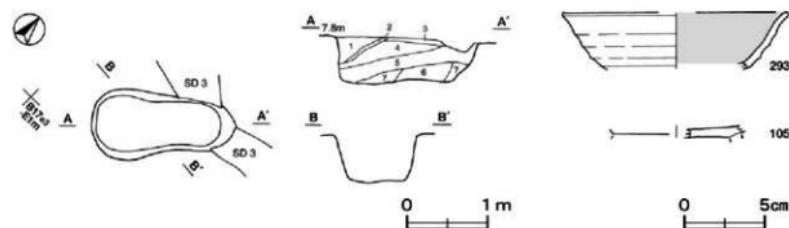
土層解説

- | | | | |
|---------|-----------|--------|-----------|
| 1 灰 黄褐色 | ロームブロック多量 | 5 黒 色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒 暗褐色 | ローム粒子少量 | 6 暗 褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 にい黄褐色 | ロームブロック中量 | 7 褐 色 | ロームブロック多量 |
| 4 灰 黄褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器片19点（壺2、高台付椀1、甕類16）、須恵器片9点（壺4、高台付壺1、蓋1、鉢類3）、

灰釉陶器片1点（椀）、綠釉陶器片1点（皿）のほか、混入した弥生土器片3点も出土している。105・293は覆土中から出土している。ほかの出土土器は細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉に比定できる。性格は不明である。



第117図 第14号土坑・出土遺物実測図

第14号土坑出土遺物観察表（第117図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
293	灰陶陶器	碗	口3.8	(3.4)	-	緻密	胎土灰白 釉灰白	良好	ロクロナデ	覆土中	10%
105	縦船陶器	瓶	-	(0.7)	-	緻密	胎土灰 釉灰白	良好	ロクロナデ 高台欠損	覆土中	5%

第31号土坑（第118～120図）

位置 2区中央部のB 17b6区、標高75mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第8号住居跡を掘り込み、第17・44号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸342m、短軸1.76mの不整長方形で、長軸方向はN-13°-Wである。深さは22～36cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

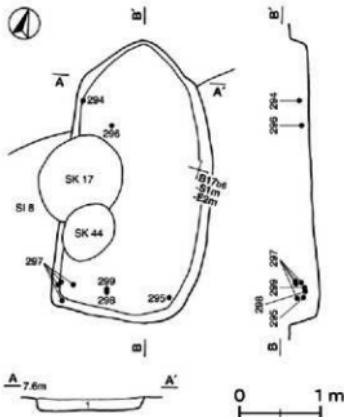
覆土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

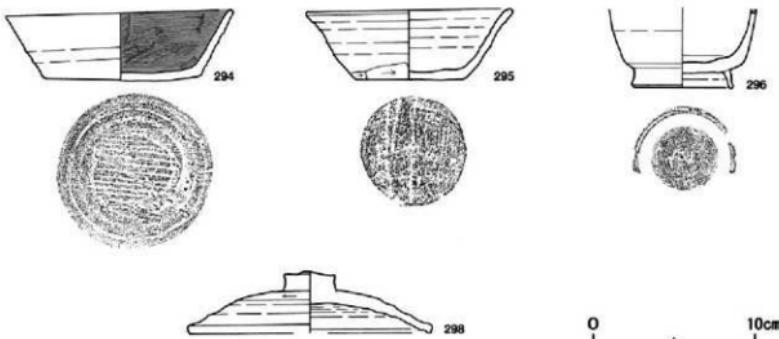
1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片12点（環1、高盤2、甕9）、須恵器片14点（环5、高台付坏2、蓋4、瓶類1、鉢1、甕1）が出土している。294は北西壁際、296は北西部、295は南東壁際の覆土中層から、297は南西壁際の覆土上層から中層にかけてそれぞれ出土した4点の破片が接合したものである。298・299は南部の覆土中層からまとめて出土している。

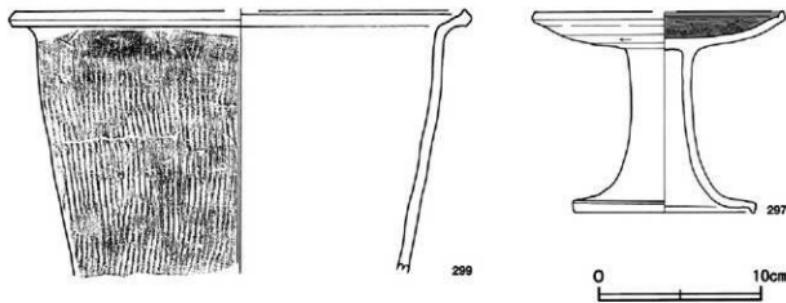
所見 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。性格は不明である。



第118図 第31号土坑実測図



第119図 第31号土坑出土遺物実測図(1)



第120図 第31号土坑出土遺物実測図(2)

第31号土坑出土遺物観察表(第119・120図)

番号	種別	器種	口径	晋高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
294	土器	环	13.8	4.4	9.6	良石・石英・雲母・赤色粒子	暗	普通	内面横位のヘラ削き 底部木口状压痕	覆土中層	25%
295	埴輪	环	12.4	4.3	6.6	良石・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 斧部一方に向かって削り	覆土中層	21.25%
296	埴輪	高台付环	-	(4.9)	6.3	良石・石英・雲母	灰	普通	底部斜削へラ削り後、高台貼り付け	覆土中層	60%
297	土器	高盤	[15.1]	12.4	11.0	良石・石英・赤色粒子	暗	普通	腹部下端回転へラ削り 内面横位のヘラ削き	覆土中層	60%
298	埴輪	盖	[14.8]	3.8	-	良石・石英・雲母	黄灰	普通	天井部目輪へラ削り	覆土中層	60%
299	埴輪	鉢	[27.6]	(16.3)	-	良石・石英・雲母	灰	普通	体部縦位の平行叩き 内面ナデ	覆土中層	10%

表10 平安時代土坑一覧表

番号	位 置	長軸(往)方向	平面形	周 模(m, 深さ(cm))		壇面	底面	覆土	主な出 土 遺 物	(重複関係 古→新)	
				長軸(径)×短軸(径)	深さ						
12	B17d8	N - 17° - W	不整長方形	2.78 × 2.30	20	楕円	凹凸	人馬	土器部、埴輪部、灰被陶器	S7-30 → 本跡	
14	B17d3	N - 50° - E	椭円形	1.78 × 0.66	36~54	直立	凹凸	人馬	土器部、埴輪部、灰被陶器、絆輪	本跡 → SD3	
31	B17d6	N - 17° - W	不整長方形	3.42 × 1.76	22~36	外傾	平坦	人馬	土器部、埴輪部	SH8 → 本跡 → SK17-44	

4 その他の遺構と遺物

今回の調査で、伴う遺物がないことから時期が明らかでない土坑33基、溝跡3条、ピット群1か所を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 土坑

今回の調査で確認した時期・性格ともに不明の土坑33基のうち、遺物が多量に出土している第19号土坑については文章で説明する。そのほかの土坑については、規模、形状等について実測図(第123~125図)及び一覧表を掲載する。

第19号土坑(第121・122図)

位置 2区中央部のB 17b7区、標高75mの河岸段丘下位の平坦部に位置している。

重複関係 第8・25・39号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 軸1.40mの方形で、主軸方向はN-46°Wである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

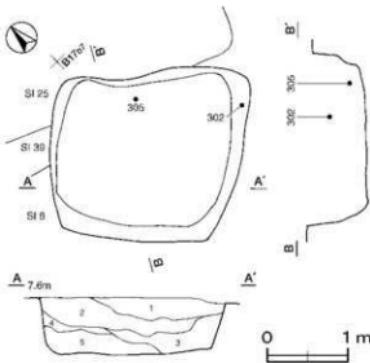
覆土 5層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

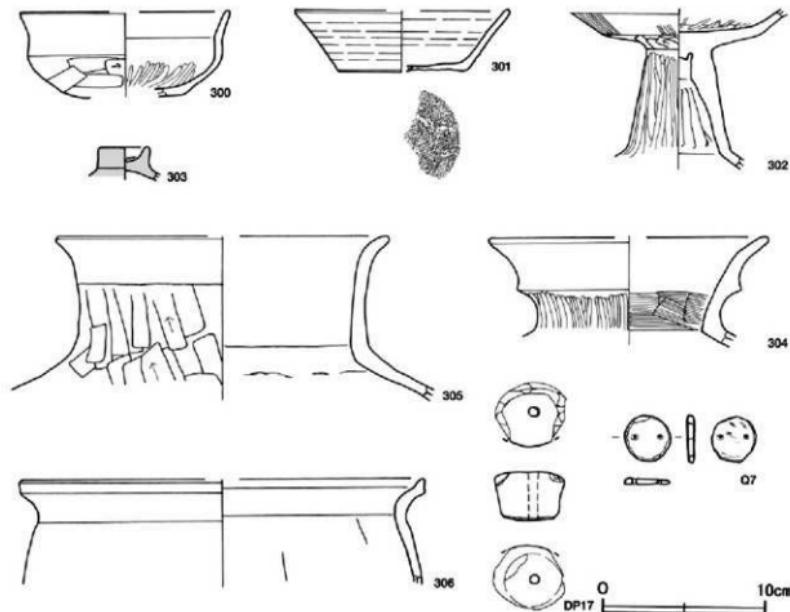
- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック微量
- 3 細砂褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 4 黄褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 5 黄褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量

遺物出土状況 繩文土器片18点(深鉢)、弥生土器片4点(壺)、土師器片343点(壺44、高杯22、蓋1、甕類284、瓶2)、須恵器片28点(壺15、蓋3、高盤2、甕類8)、土製品1点(紡錘車)、石製品1点(双孔円板)が出土している。300~306は覆土中からそれぞれ出土しており、第8・25・39号住居跡から混入したもののか、異なる時代の土器も埋め戻された覆土中に混在している。

所見 時期は、伴う土器がないため不明である。



第121図 第19号土坑実測図

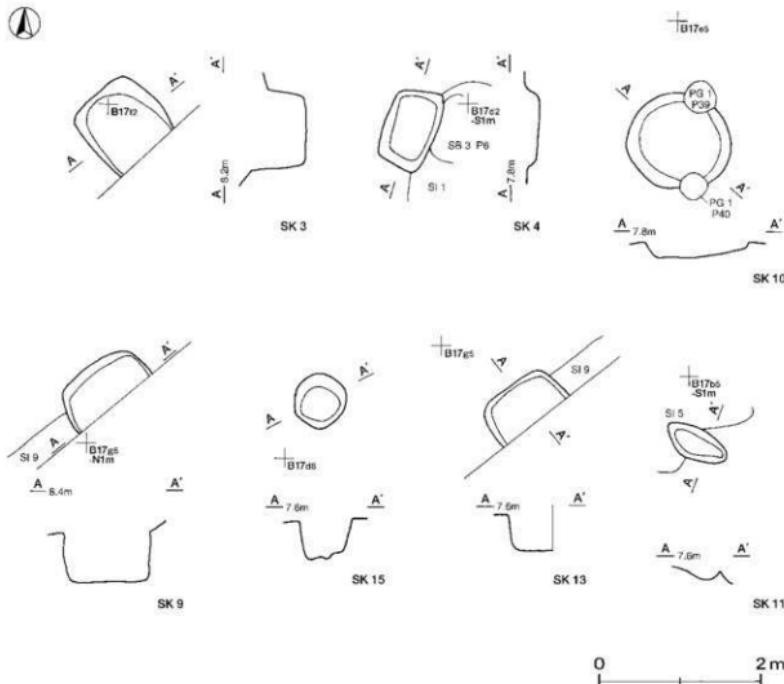


第122図 第19号土坑出土遺物実測図

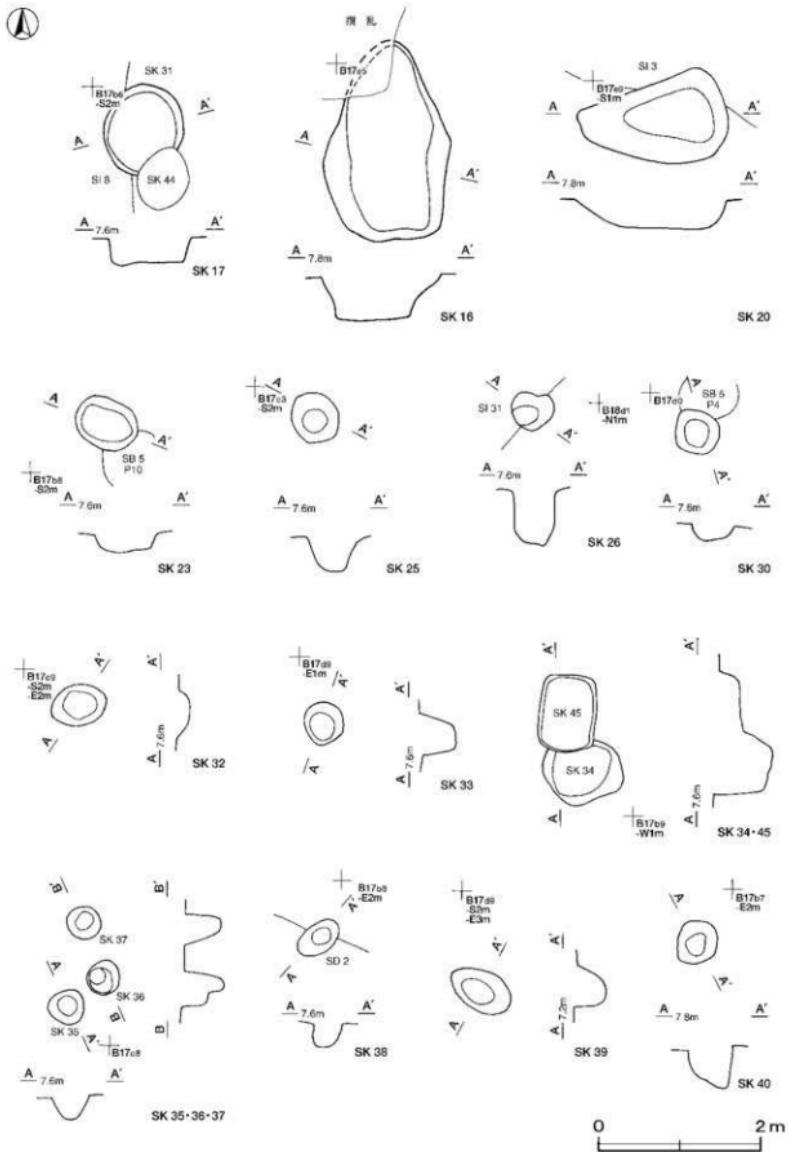
第19号土坑出土遺物觀察表（第122図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
300	土師器	环	[12.0]	(5.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	外面横紋のヘラ削り 内面放射状のヘラ削き	覆土中	50%
301	土師器	环	[13.0]	3.8	[7.3]	長石・石英・雲母	褐灰黄	普通	底部斜削のヘラ削りを残す一方のヘラ削り	覆土中	30%
302	土師器	高杯	-	(10.0)	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部外側斜削のヘラ削き 内面斜削のヘラ削き 底部内側斜削のヘラ削き 内面ヘラ状の工具痕	覆土中	40%
303	土師器	盖	-	(2.0)	-	長石・石英・雲母	赤	普通	外側ナメ 内面工具痕を残すナメ	覆土中	5%
304	土師器	蓋	[6.8]	(6.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	底部外側横紋のヘラ削き 内面横紋のハケ目	覆土中	10%
305	土師器	蓋	[20.2]	(10.3)	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	棕	普通	底部横紋のヘラ削り	覆土中	10%
306	土師器	蓋	[24.0]	(6.5)	-	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい赤褐	普通	外、内面ナメ	覆土中	5%

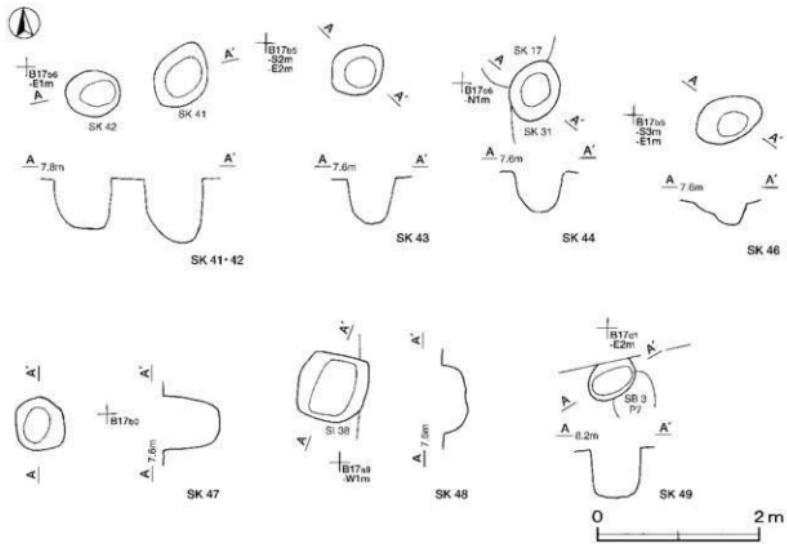
番号	種別	径	厚さ	口径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP17	精錬車	(4.3)	3.0	0.6	54.9	長石・石英	内側台形 上、下の輪郭部欠損	覆土中	PL29
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 7	双孔円板	2.8	2.8	0.5	6.5	滑石	表面研磨	覆土中	PL29



第123図 その他の土坑実測図（1）



第124図 その他の土坑実測図（2）



第125図 その他の土坑実測図（3）

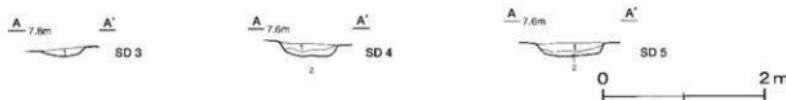
表11 その他の土坑一覧表

番号	位 置	長軸(径)方向	平面形	規 模(m)		深さ(cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	(重複関係 古→新)
				長軸(径) × 短軸(径)	底面						
3	B17d2	N - 40° - W	[方柱・長方形]	(0.98) × 0.96	48~66	外傾	平坦	自然	織文土器、土師器、須恵器		
4	B17d1	N - 12° - E	長方形	1.00 × 0.65	8~18	外傾	平坦	自然		SI1, SI3 → 本跡	
9	B17d6	N - 50° - E	[長方形]	1.12 × (0.54)	42	外傾	平坦	人為	織文土器、土師器、須恵器	SI2-9 → 本跡	
10	B17e5	-	円形	0.65 × 0.60	18	緩斜	平坦	人為	織文土器、土師器	本跡 → PG1	
11	B17b5	N - 60° - W	橢円形	0.84 × 0.38	24	外傾	平坦	人為		SI5-17 → 本跡	
13	B17g5	N - 50° - E	[長方形]	1.01 × (0.54)	92	外傾	平坦	人為	織文土器、土師器、須恵器	SI9 → 本跡	
15	B17c8	-	円形	0.61 × 0.61	44	外傾	凹凸	人為	織文土器、弦生土器、土師器	SI20 → 本跡	
16	B17e5	N - 1° - W	不定形	1.48 × 1.06	54	緩斜	平坦	人為	織文土器、弦生土器、土師器、須恵器、瓦、繩	SI14-16-32 → 本跡	
17	B17b6	-	円形	1.00 × 1.00	32	外傾	平坦	自然		織文土器、土師器、須恵器、玉	SK8, SK31 → 本跡 → SK44
19	B17b7	N - 46° - W	方形	1.40 × 1.40	72	外傾	平坦	人為	織文土器、弦生土器、土師器、須恵器、土師罐、瓦、孔内鉢	SI8-25-39 → 本跡	
20	B17e9	N - 86° - W	不定形	1.86 × 1.10	36	外傾 緩斜	平坦	人為	土師器、須恵器	SI9-18-19-22 → 本跡	
23	B17b8	N - 70° - W	橢円形	0.80 × 0.61	20	外傾	平坦	自然	土師器	SI2, SB5 → 本跡	
25	B17c3	-	円形	0.63 × 0.58	40	外傾	平坦	人為		本跡 → SI6-23	
26	B17c0	N - 85° - E	不定形	0.55 × 0.35	23~68	外傾	圓状	人為		SI31 → 本跡	
30	B17d0	-	円形	0.60 × 0.58	18	外傾	圓状	自然		SB5 → 本跡	
32	B17c9	N - 67° - E	橢円形	0.73 × 0.50	15	緩斜	圓状	人為	弦生土器、土師器、須恵器	SE4 → 本跡	
33	B17d9	N - 5° - W	橢円形	0.55 × 0.49	45	直立	平坦	人為			
34	B17c8	N - 43° - E	橢円形	0.50 × 0.43	35	直立 緩斜	凹凸	自然		SK33 → 本跡 → SR45	

番号	位置	長軸(往)方向	平面形	規 模 (m)		深さ(cm)	表面	底面	覆土	主な出土遺物	備 考 (重複周囲 古→新)
				長軸(往) × 短軸(往)	長軸(往) × 短軸(往)						
35	B17b7	-	円形	0.47	×	0.45	30	縦斜	直状	人為	土師器
36	B17b7	-	円形	0.43	×	0.42	49	外傾	凹凸	自然	
37	B17b7	-	円形	0.43	×	0.40	40	外傾	凹凸	自然	
38	B17b8	N - 50° - E	楕円形	0.58	×	0.35	26	外傾	平坦	自然	SD2 → 本跡
39	B17d9	N - 63° - W	楕円形	0.82	×	0.52	65	外傾	平坦	人為	本跡 → S13-19
40	B17b7	N - 40° - E	楕円形	0.59	×	0.50	25	外傾	直状	自然	SD25, SD2 → 本跡
41	B17b6	N - 25° - E	楕円形	0.87	×	0.65	36	外傾	直状	人為	上師器
42	B17b6	N - 75° - W	楕円形	0.70	×	0.59	33	外傾	凹凸	人為	SD39 → 本跡
43	B17b6	N - 49° - E	楕円形	0.72	×	0.62	56	外傾	直状	自然	繩文土器、土師器
44	B17b6	N - 23° - E	楕円形	0.74	×	0.60	62	外傾	直状	自然	SB8, SK17-31 → 本跡
45	B17a8	N - 5° - E	楕丸長方形	0.98	×	0.69	29	高凸	直状	人為	土師器
46	B17b5	N - 53° - E	楕円形	0.86	×	0.54	24	外傾 縦斜	直状	人為	SK31 → 本跡
47	B17b9	-	円形	0.66	×	0.64	68	外傾	直状	人為	SE36 → 本跡
48	B17b8	N - 19° - E	方形容	0.84	×	0.84	28	外傾 縦斜	直状	人為	繩文土器、土師器、須恵器
49	B17d1	N - 55° - E	楕円形	0.64	×	0.44	59	外傾	直状	人為	SK3 → 本跡

(2) 溝跡（第 126・131 図）

今回の調査で確認した時期不明の溝跡 3 条の規模については一覧表で、土層断面図（第 126 図）と土層解説については遺構順に掲載し、平面図については遺構全体図（第 131 図）で掲載する。



第 126 図 第 3・4・5 号溝跡実測図

第 3 号溝跡土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量

第 4 号溝跡土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

2 黄褐色 ロームブロック少量

第 5 号溝跡土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

2 暗褐色 ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量

表 12 その他の溝跡一覧表

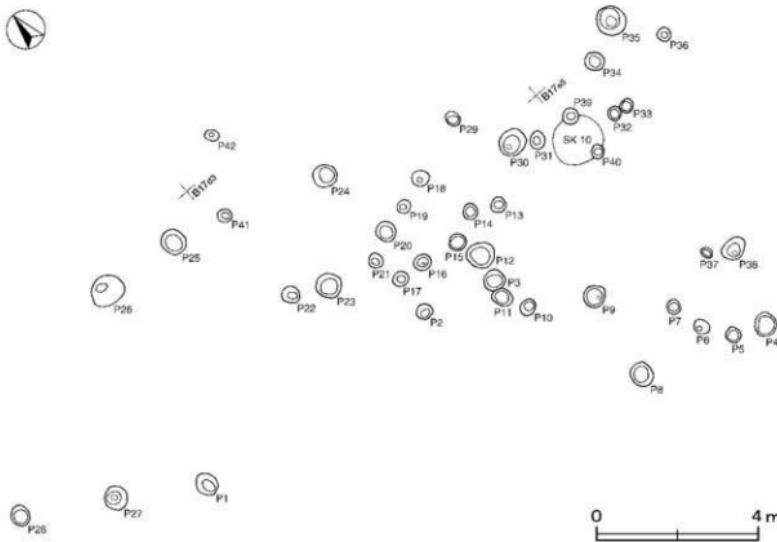
番号	位置	方向	形状	規 模 (m. 深さ(cm))				表面	底面	覆土	主な出土遺物	備 考 (重複周囲 古→新)	
				長さ	上幅	下幅	深さ						
3	B17d3～ B17d4	N - 108° - E	直線状	(7.42)	1.35～1.60	0.10～0.30	9	直状	縦斜	自然	繩文土器、土師器、 焼土上部、赤土上部	SK2 → SK14 → 本跡	
4	A18a6～ B17d9	N - 17° - W	直線状	(8.45)	0.62～0.80	0.28～0.62	11～16	逆台形	外傾	平坦	人為	土師器、須恵器	
5	A18a1～ B18a1	N - 31° - W	直線状	(6.70)	0.60～0.86	0.48～0.70	16	直状	縦斜	平坦	人為	土師器	SK30 → 本跡

(3) ピット群

今回の調査で確認した時期不明のピット群1か所については、ピットごとの計測表と平面図を掲載する。

第1号ピット群（第127図）

2区西部の標高7.5m、B17c3～B17e5区にかけての東西20m、南北13mの範囲から、柱穴状のピット42か所を確認した。平面形は長径26～90cmの円形または梢円形で、深さが5～44cmである。ピットの分布状況から建物跡は想定できない。覆土中から縄文土器片や土師器片が出土しているピットもあるが、いずれも細片である。



第127図 第1号ピット群実測図

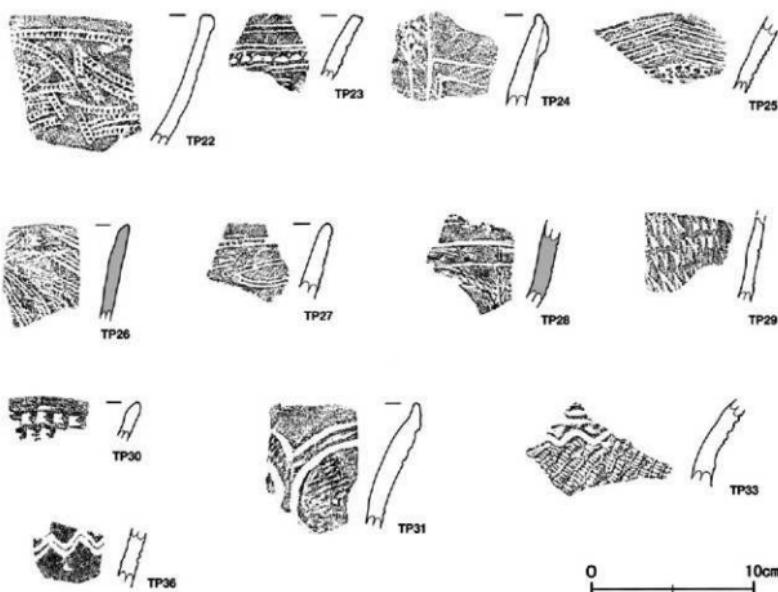
第1号ピット群計測表

番号	位置	形状	規模(cm)			番号	位置	形状	規模(cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	B17e1	梢円形	59	48	12	11	B17e4	梢円形	52	39	7
2	B17e3	[円形]	57	(38)	30	12	B17e4	梢円形	70	60	8
3	B17e4	円形	53	50	7	13	B17e4	円形	38	37	16
4	B17e5	梢円形	59	48	6	14	B17e4	梢円形	40	36	20
5	B17f4	円形	42	39	5	15	B17e4	円形	45	43	7
6	B17f4	梢円形	40	36	9	16	B17e3	円形	40	38	25
7	B17f4	梢円形	37	33	9	17	B17e3	円形	38	35	10
8	B17f4	梢円形	60	51	15	18	B17d4	円形	43	41	22
9	B17f4	円形	53	52	10	19	B17d3	円形	34	34	30
10	B17e4	梢円形	43	37	6	20	B17d3	梢円形	55	50	19

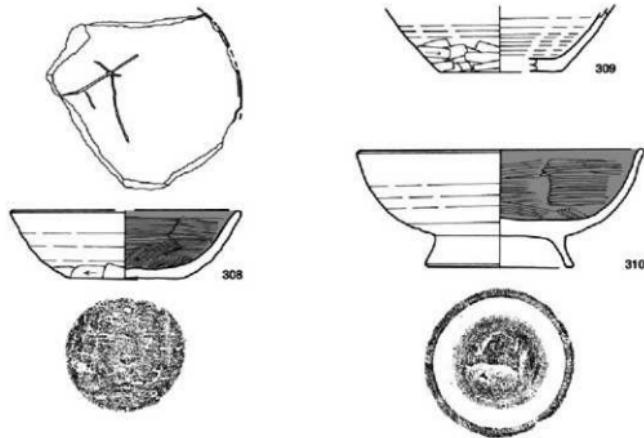
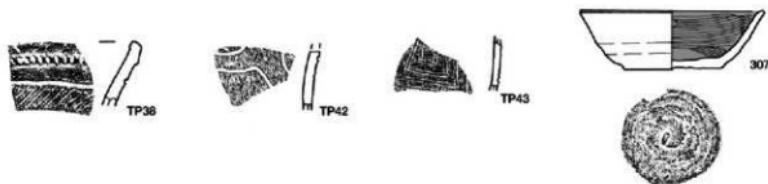
番号	位置	形状	規模(cm)			番号	位置	形状	規模(cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
21	B17e3	円形	35	34	6	32	B17e5	橢円形	35	30	21
22	B17d3	橢円形	45	40	6	33	B17e5	円形	35	32	19
23	B17d3	円形	62	61	44	34	B17e5	円形	48	47	15
24	B17d3	円形	58	56	23	35	B17d5	円形	72	68	30
25	B17d2	円形	69	65	24	36	B17e5	円形	34	34	14
26	B17d2	橢円形	90	73	17	37	B17e5	円形	26	24	7
27	B17e1	円形	60	59	43	38	B17e5	橢円形	68	45	28
28	B16d0	橢円形	50	45	11	39	B17e5	円形	42	40	31
29	B17d4	円形	35	34	16	40	B17e5	円形	34	32	26
30	B17e4	橢円形	73	58	21	41	B17d3	橢円形	37	33	10
31	B17e4	円形	40	40	15	42	B17e3	橢円形	37	26	20

(4) 遺構外出土遺物

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図（第128～130図）と観察表を掲載する。

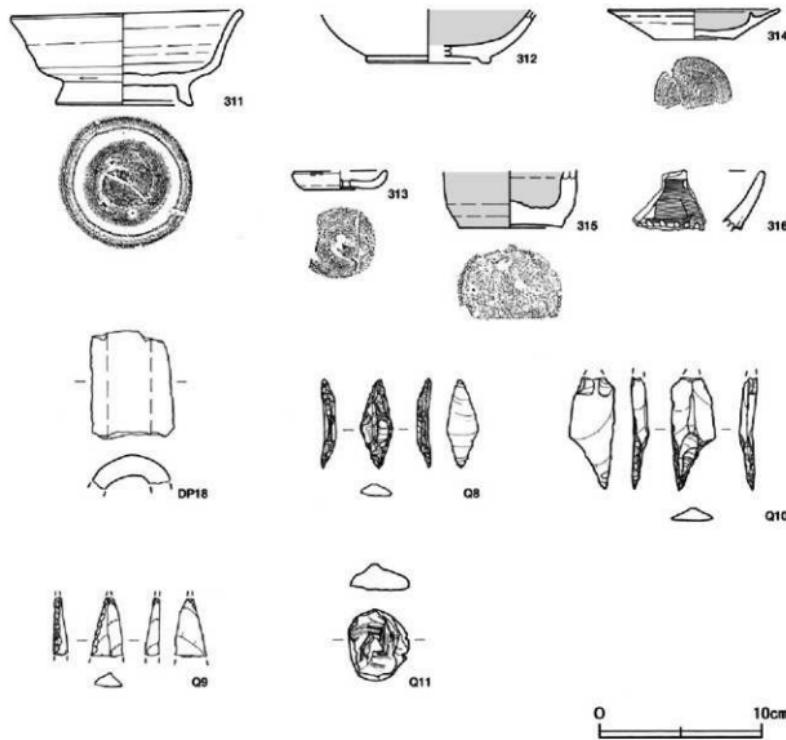


第128図 遺構外出土遺物実測図（1）



0 10cm

第129図 遺構外出土遺物実測図(2)



第130図 遺構外出土遺物実測図（3）

遺構外出土遺物観察表（第128～130図）

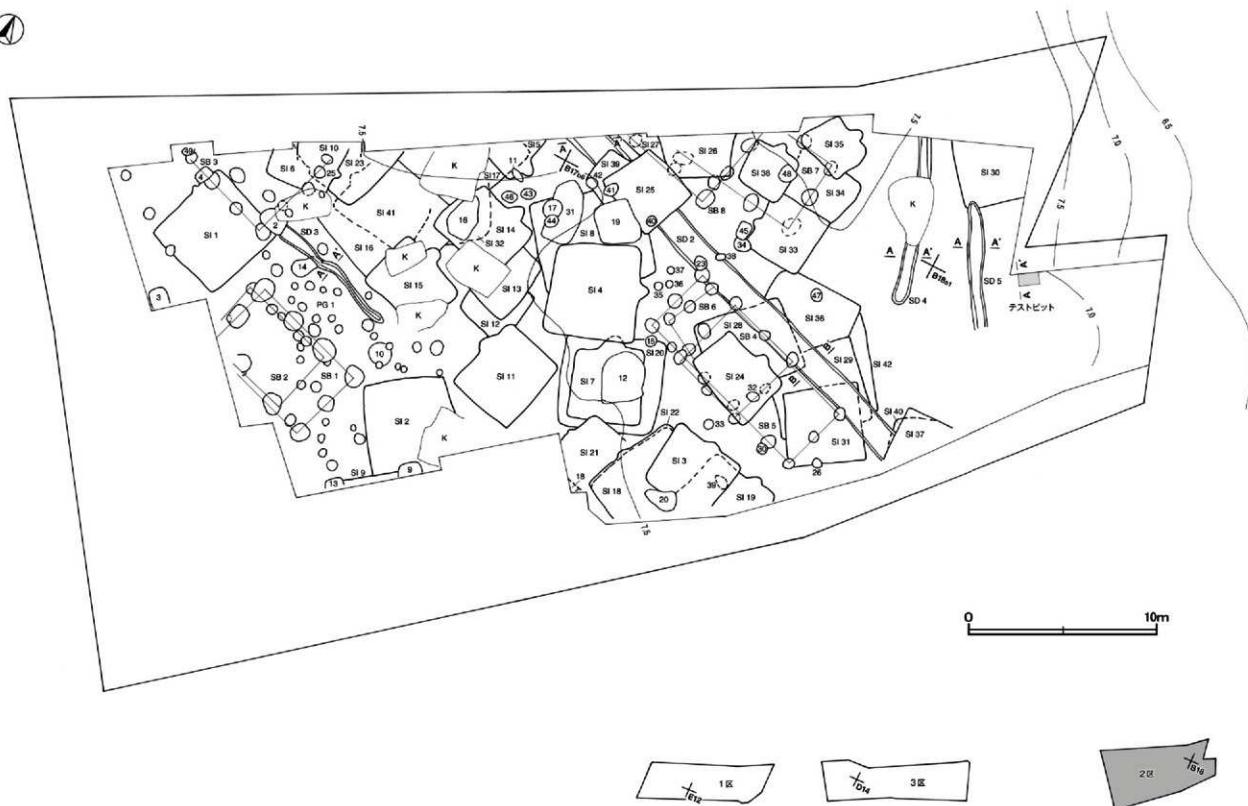
番号	種別	部種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴ほか	出土位置	備考
307	土師器	壺	11.1	3.7	5.9	長石・石英・赤色粒子	にふい黄相	普通	内面横凹のヘラ削き 底部回転ヘラ切り後、アーチ	SK20 腹土中	65%
308	土師器	壺	[13.9]	4.2	7.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	胡麻	普通	底部下端半斜ちへラ削り 内面横凹のヘラ削き 底部回転ヘラ切り後、一方方向のヘラ削り 内面に削痕[太]	表土 PL26	60% PL26
309	須恵器	壺	-	(3.9)	[7.4]	長石・石英・雲母	灰	普通	底部下端半斜ちへラ削り 截弦多方向のヘラ削り	表土	30%
310	土師器	高台付壺	17.3	7.3	9.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	にふい相	普通	高台削り付け	表土	90%
311	須恵器	高台付壺	13.9	4.8	8.2	長石・石英・雲母・赤色粒子・細繩	にふい黄相	普通	底部下端半斜ちへラ削り 底部回転ヘラ削り後、高台削り付け ヘラ記号「-」	表土	95%
312	灰釉陶器	楕	-	(3.3)	[7.4]	長石	灰黄	良好	底部回転ヘラ削り後、高台削り付け	表土	20%
313	土師質土器	小壺	[5.8]	1.1	4.4	長石・雲母・赤色粒子	粗	普通	底部回転糸切り 口縁部に油煙付着	表土	50%
314	陶器	灯明皿	10.4	1.9	4.8	細砂	褐色明	良好	窓口・光澤系 内面施釉	表土	50%
315	陶器	瓶	-	(3.5)	6.4	長石	褐色	底部回転糸切り	表土	10%	
316	土師器	壺	-	(3.7)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にふい相	普通	口縁部横位のハケ口・刺突凹・折り返し口	表土	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴はか	出土位置	備考
TP22	縄文土器	深鉢	-	(8.0)	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	手袋状工具による文様を本施文	表土	中期後半 PL.27
TP23	縄文土器	深鉢	-	(4.0)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	熱系文上に2本の沈縄文とその間に竹管状工具による刺突文を施文	表土	早期中華 PL.27
TP24	縄文土器	深鉢	-	(5.6)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	明赤褐色	普通	口縁部直下にギザギザをもつ隠帶を貼り付け 方的に濃く沈縄文間にしりや頭縄文を施文	表土	中期後半 PL.27
TP25	縄文土器	深鉢	-	(4.7)	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	沈縄文間に2列の刺突文を施文	表土	中期後半 PL.27
TP26	縄文土器	深鉢	-	(5.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい青	普通	熱系文を施文	表土	中期前半 PL.27
TP27	縄文土器	深鉢	-	(4.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい青	普通	熱系文を施文 竹管状工具による楕円形の文様を施文	SH18 覆土中	中期後半 PL.27
TP28	縄文土器	深鉢	-	(5.4)	-	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	にぶい青	普通	L無頭縄文と並行沈縄文を施文	SK10 覆土中	中期前半 PL.27
TP29	縄文土器	深鉢	-	(5.3)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	貝殻模様文を施文	表土	中期後半 PL.27
TP30	縄文土器	深鉢	-	(2.3)	-	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい青	普通	竹管状工具による刺突文を施文	SD16 覆土中	中期後半 PL.27
TP31	縄文土器	深鉢	-	(7.7)	-	長石・雲母・ 赤色粒子	青	普通	R L半節縄文施文後、沈縄文による区画	表土	中期後半 PL.27
TP32	縄文土器	深鉢	-	(5.7)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	口縁部山毛榉工具による内側の刺突文と沈 縄文を施文	SD16 覆土中	中期 PL.27
TP33	縄文土器	深鉢	-	(5.2)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい青	普通	R L半節縄文施文後、沈縄文と波状光澤文を 施文	SE2 覆土中	中期後半 PL.27

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴はか	出土位置	備考
TP34	縄文土器	深鉢	-	(4.3)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	明赤褐色	普通	隠帶による区画文 R L半節縄文施文	表土	中期後半 PL.27
TP35	縄文土器	深鉢	-	(5.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	沈縄文区画文にL R沈縄文施文	表土	中期前半 PL.27
TP36	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子・細繩	にぶい青	普通	波状沈縄文を施文	SK31 表土	中期後半 PL.27
TP37	縄文土器	深鉢	-	(6.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい青	普通	L R半節縄文施文後、沈縄文を施文	SD36 覆土中	中期前半 PL.27
TP38	縄文土器	深鉢	-	(4.1)	-	長石・石英・雲母	黒褐色	普通	隠帶上に工具による刺突文、沈縄文を施文 熱糸文を施文	表土	沈縄文 PL.27
TP39	泥生土器	壺	-	(4.3)	-	長石・石英	青	普通	頭部無文、胴部にR L沈縄文施文	SD36 覆土中	中期後半 PL.27
TP40	泥生土器	壺	-	(5.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	L R沈縄文施文、沈縄文胴部に割り消す	SD16 覆土中	中期後半 PL.27
TP41	泥生土器	壺	-	(4.8)	-	長石・雲母	にぶい黄褐色	普通	10本以上の櫛状工具の沈縄文を施文後、12本 の櫛状工具文を施文	SE20 覆土中	後期 PL.27
TP42	泥生土器	壺	-	(3.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	圓錐状の文様を沈縄文による施文	SD23 覆土中	中期前半 PL.27
TP43	泥生土器	壺	-	(3.3)	-	長石・石英	青	普通	2本の櫛状工具で格子目状に文様を施文	SD19 覆土中	中期後半 PL.27

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
DP18	羽口	(6.2)	(5.1)	(2.0)	(62.8)	長石・石英・ 赤色粒子	先端及び下端部は欠損			表土	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
Q 8	ナイフ形石器	5.5	2.0	0.8	5.7	黒曜石	幅長削片を素材	二輪鋸加工		SD20 覆土中	
Q 9	ナイフ形石器	3.6	2.0	0.8	4.6	頁岩	幅長削片を素材	一輪鋸加工	先端及び下端部は欠損	SK12 覆土中	
Q 10	ナイフ形石器	6.4	2.8	1.1	12.4	珪質頁岩	幅長削片を素材	二輪鋸加工		表土	
Q 11	鏡形未製品	4.4	3.7	1.6	25.1	滑石	円形に加工	表面は時計回りに削り、横状に削り落そとしている		SD16 覆土中	PL.29



第131図 姉久保遺跡2区遺構全体図

第5節 3区の遺構と遺物

1 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴住居跡2軒を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

竪穴住居跡

第47号住居跡（第132・133図）

位置 3区中央部のC 14g6区、標高240mの河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第62号住居、第9号掘立柱建物、第2号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 北西部が調査区域外へ延びているが、長軸625m、短軸595mの方形で、主軸方向はN-22°-Eである。壁高は6-15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。北東コーナー部付近と貯蔵穴東側の覆土下層から長さ20cmほどの炭化材を確認した。

炉 中央部のやや北寄りに付設されている。長径78cm、短径48cmの楕円形で、床面を10cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 黒褐色 炭化物・焼土粒子少量

2 極暗赤褐色 烧土粒子少量、炭化粒子微量

貯蔵穴 南壁際の中央寄りに位置している。第9号掘立柱建物に掘り込まれているため、長径は96cmで、短径は66cmが確認できただけである。平面形は楕円形で、深さは30cmで、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量

4 極暗褐色 ロームブロック微量

2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

5 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

3 黑褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

6 褐色 ローム粒子中量

ピット 3か所。P 1-P 3は深さ34-70cmで、配置から主柱穴である。

覆土 6層に分層できる。不自然な堆積状況であることから埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色 炭化物少量、ロームブロック・焼土粒子微量

4 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

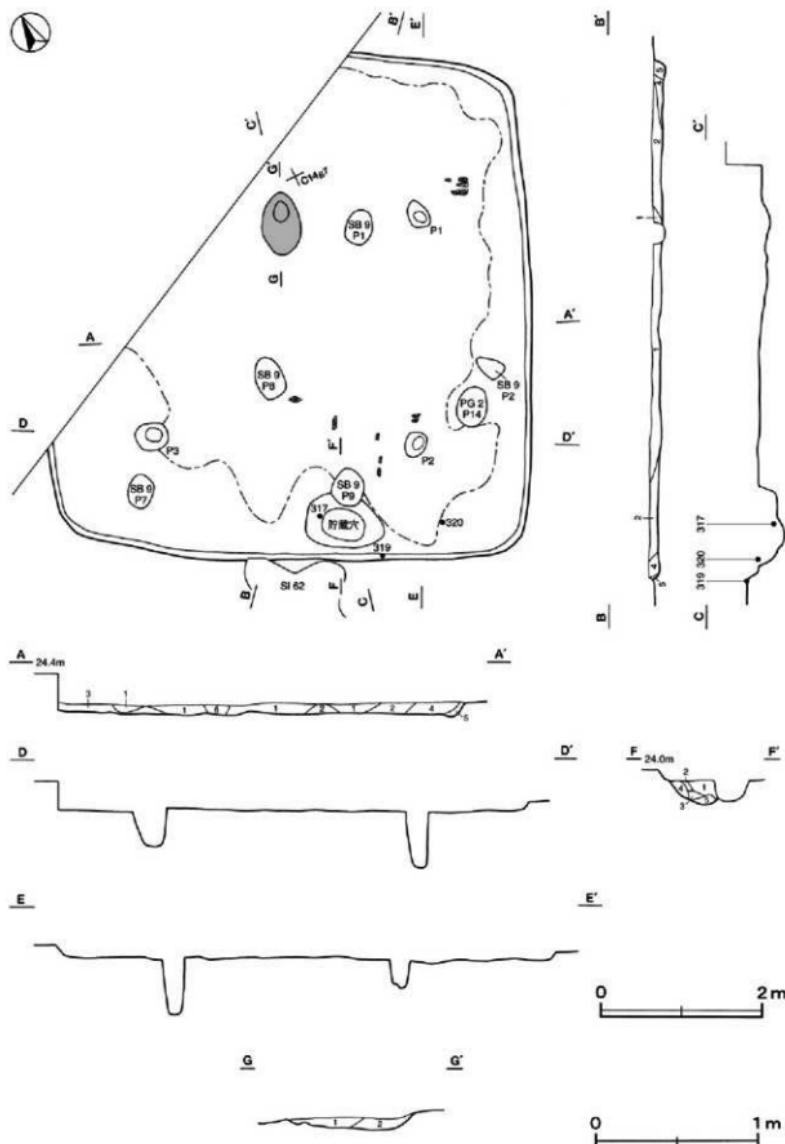
5 褐色 ローム粒子少量

3 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量

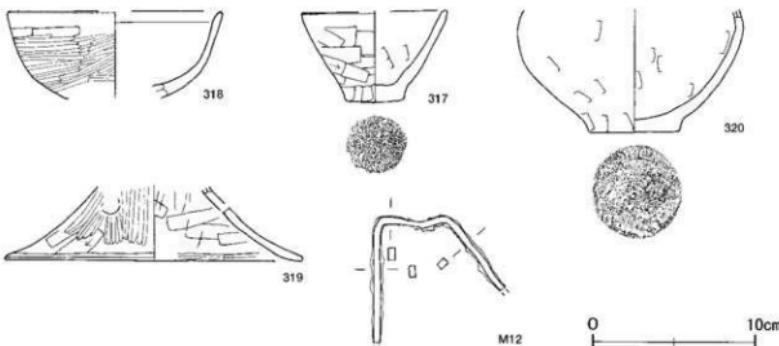
6 褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片303点（壺10、瓶2、高壺1、甕類290）、鉄製品1点（不明）、環4点のほか、混入した繩文土器33点（深鉢）、弥生土器片10点（壺）が出土している。317は貯蔵穴、319は南壁際の覆土下層、320は南東コーナー部付近の床面からそれぞれ出土している。いずれも廃絶後の早い段階で投棄されたものとみられる。318・M 12は西部の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀前半に比定できる。覆土中の焼土が微量で、床は焼けていないが、炭化材が東・南壁際から床の中央部に向かって出土している状況から、焼失住居の可能性がある。



第132図 第47号住居跡実測図



第 133 図 第 47 号住居跡出土遺物実測図

第 47 号住居跡出土遺物観察表（第 133 図）

番号	種 別	器 形	口 径	器 高	底 径	胎 土	色 調	焼 成	手 法 の 特 徴 は が	出上位置	備 考
317	土師器	碗	[8.8]	5.6	3.6	良石・石英・雲母	にふい・黄褐	普通	体部横位のヘラ削り	軒瓦穴覆土下 壁	PL43
318	土師器	碗	[3.0]	(5.3)	-	良石・石英・雲母	にふい・黄褐	普通	体部横位のヘラ削り	覆土中	20%
319	土師器	高环	-	(4.5)	[18.2]	良石・石英・雲母	にふい・褐	普通	脚部外周縫合のヘラ削り後、瓶底のヘラ削りと内面横位のヘラ削り後、ナード。底部横位のハサウエー削り	覆土下層	5%
320	土師器	甕	-	(7.5)	5.4	良石・石英・雲母	にふい・黄褐	普通	内・外面部ナード。底部ナード	床面	30%
M 12	不明復製品	長 爪	(7.9)	(8.5)	0.7	(24.0)	鐵	コの字状 斜面長方形		覆土中	

第 54 号住居跡（第 134 ~ 136 図）

位置 3 区東部の C 15fl 区、標高 235 m の河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第 45 号住居、第 71・75・76・79・80・82・86・89・90 号土坑、第 9 号溝、第 2 号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 北西部が第 9 号溝、南部が第 45 号住居に掘り込まれ、北東部が削平されて壁は遺存していないため、北東・南西軸 5.55 m、北西・南東軸 3.55 m しか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定でき。主軸方向は N - 52° - E である。遺存している南西部の壁高は 35cm で、外傾して立ち上がっている。

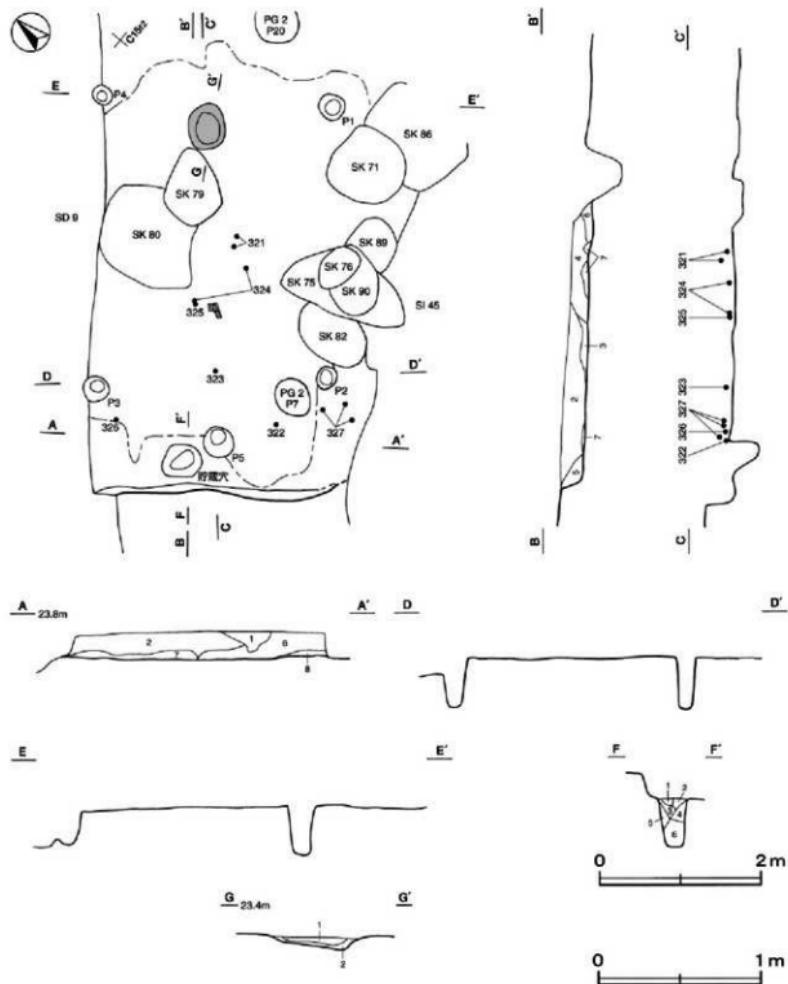
床 平坦で、南西部は壁際まで踏み固められている。中央部付近の覆土下層から長さ 16cm の炭化材が出土しているが、床は焼けていない。

炉 中央部のやや北寄りに付設されている。長径 58cm、短径 48cm の梢円形で、床面を 7cm 削りくぼめた地床炉である。炉床は赤変しているが、硬化はしていない。

炉土層解説

1 にふい赤褐色 煤土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量 2 灰 赤褐色 ロームブロック少量、煤土粒子・炭化粒子微量

貯蔵窓 南西壁際の P 5 付近に位置している。長径 50cm、短径 40cm の梢円形で、深さは 60cm で、底面は平坦である。壁は直立している。



第134図 第54号住居跡実測図

貯蔵土層解説

1	暗	褐	ローム粒子少量	4	褐	色	ローム粒子中量
2	暗	褐	ロームブロック・炭化物微量	5	暗	褐	ローム粒子少量、炭化物微量
3	褐	色	ローム粒子少量	6	褐	色	ロームブロック少量

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ 42～62cmで、配置から主柱穴である。P 5は深さ 33cmで、南西壁際に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと推定できる。

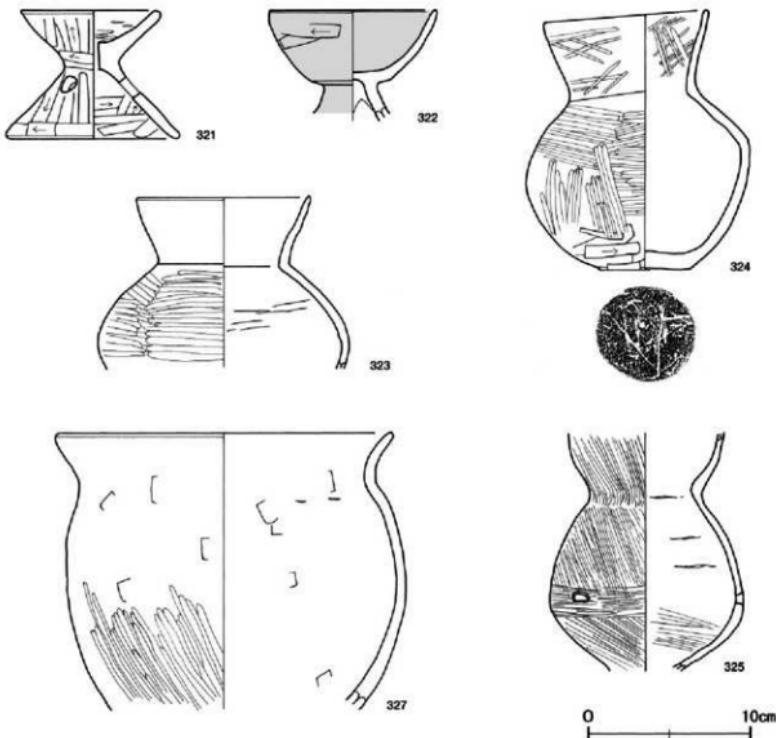
覆土 8層に分層できる。不自然な堆積状況であることから埋め戻されている。

土層解説

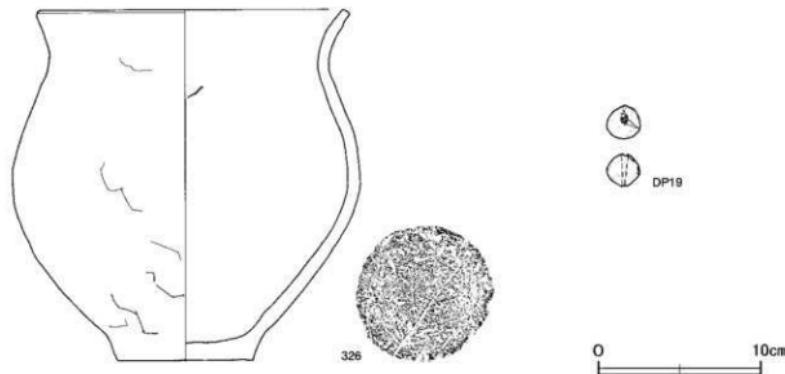
- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 1 黒 褐 色 ロームブロック・炭化材微量 | 5 黒 褐 色 ロームブロック微量 |
| 2 極暗褐色 ロームブロック・炭化材・焼土粒子微量 | 6 黒 褐 色 ローム粒子微量 |
| 3 褐 色 ロームブロック・炭化材微量 | 7 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 4 黒 褐 色 ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量 | 8 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 |

遺物出土状況 土師器片 151 点（坏4、器台1、高坏1、壺3、甕類142）、土製品1点（球状土錘）のほか、混入した縄文土器片 73 点（深鉢）が出土している。323・325は中央部、326は西部、323は南部の覆土下層からそれぞれ出土している。321・324は中央部の覆土下層から出土した2点の破片が、327は南コーナー部付近の覆土下層から出土した3点の破片がそれぞれ接合している。いずれも廃絶後の早い段階で投棄されたものとみられる。DP19は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀前半に比定できる。炭化材は床の中央部のほかに、覆土中にも微量しか含まれていないことから、埋め戻しの際に混入したものとみられる。



第135図 第54号住居跡出土遺物実測図(1)



第136図 第54号住居跡出土遺物実測図（2）

第54号住居跡出土遺物観察表（第135・136図）

番号	種別	器種	口径	身高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
321	土師器	器台	8.2	7.9	10.3	良石・石英・雲母	明赤褐色	普通	受底部外表面のヘラ削り 内面横位のヘラ削き 削り 部外表面横位のヘラ削り後、横位のヘラ削り	覆土下層 PL43	95% PL43
322	土師器	高杯	10.2	(6.7)	-	良石・石英・雲母	赤褐色	普通	環部外表面横位のヘラ削り後、ナデ 内面ナデ	覆土下層 PL43	60% PL43
323	土師器	盃	10.5	(30.6)	-	良石・石英・雲母	灰黄	普通	体部底面のヘラ削り後、横位のヘラ削き 内面ナデ	覆土下層 PL43	60% PL43
324	土師器	盃	10.0	16.0	5.6	良石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部内・外周不定方向のヘラ削き 体部下端にヘラ削り後、横位・横位のヘラ削き 内面ナデ	覆土下層 PL43	90% PL43
325	土師器	盃	-	(14.7)	-	良石・石英・雲母	にぶい褐	普通	外周約5cmのヘラ削り後、体部に横位のヘラ削き 1回削	覆土下層 PL43	80% PL43
326	土師器	盃	18.7	21.6	8.2	良石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	外周ヘラナダ ボトム本素地	覆土下層 PL43	90% PL43
327	土師器	盃	20.6	(17.0)	-	良石・石英・雲母	褐	普通	外周ヘラナダ後、斜位のヘラ削き	覆土下層 PL43	40% PL43

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP19	球状土器	2.0-2.1	2.0	0.15~ 0.4	6.9	良石・石英	ナデ 一方向から穿孔	覆土中 PL54	

表13 古墳時代住居跡一覧表

番号	位置	平面形	主軸方向	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (m)	床面	埋漬	内部施設			覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係(古→新)
								E柱穴	出入人口	ビット	D・窓	浴槽穴		
47	C14g6	方形	N-22°-E	6.25×5.95	6-15	平坦	-	3	-	0.1	1	人骨	土師器、不明鉄製品	4世紀前半 S62-S69 PG2
54	C15f1	〔方形容、長方形〕	N-32°-E	(5.55)×(3.55)	35	平坦	-	4	1	0.1	1	人骨	土師器、土製品	4世紀前半 S6-89-90 SD9 PG2

2 奈良時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、堅穴住居跡8軒、土坑3基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 堅穴住居跡

第44号住居跡（第137・138図）

位置 調査区東部のC 15d1区、標高23.0mの河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第7・8号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北西部が調査区域外へ伸びているため、北東・南西軸は4.35mで、北西・南東軸は1.70mしか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定できるが、主軸方向は不明である。壁高は5~30cmで、外傾して立ち上がっている。

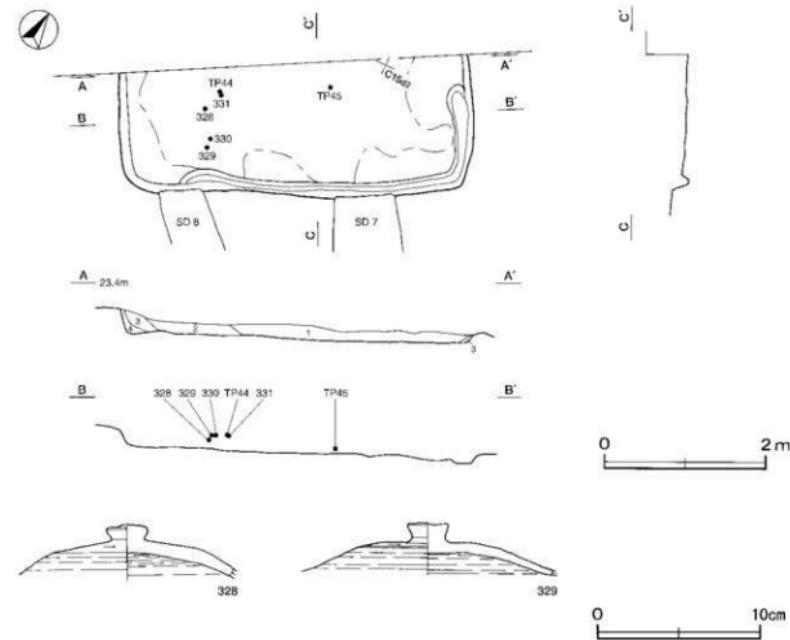
床 ほぼ平坦で、壁際を除いて踏み固められている。東コーナー部と南東側の壁下には壁溝が巡っている。

覆土 4層に分層できる。含有物がブロック主体であることから埋め戻されている。

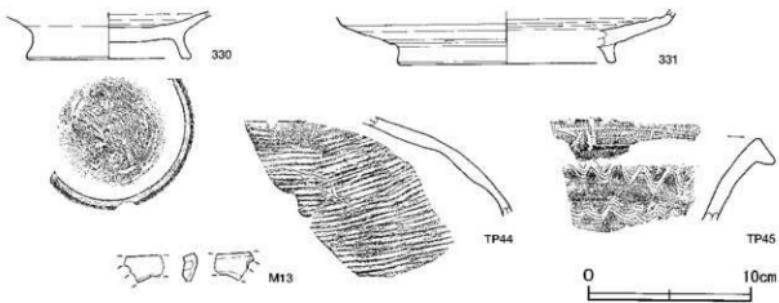
土層解説

1 黒 細 色 ロームブロック微量	3 暗 細 色 ロームブロック少量
2 暗 細 色 ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量	4 暗 細 色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片87点（环8、甕79）、須恵器片73点（环31、皿1、蓋6、盤2、鉢1、甕32）、瓦片1点（平瓦）、土製品1点（支脚）のほか、混入した縄文土器片6点（深鉢）が出土している。TP45は中央部の覆土下層、330は南部の覆土中層、328・329・331・TP45は南部の覆土上層からそれぞれ出土している。
所見 時期は、出土土器から8世紀後葉に比定できる。



第137図 第44号住居跡・出土遺物実測図



第138図 第44号住居跡出土遺物実測図

第44号住居跡出土遺物観察表（第137・138図）

番号	種別	部種	口径	部高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
328	須恵器	壺	-	(3.1)	-	良石・石英・磁輝	灰黄	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土上層	30%
329	須恵器	壺	-	(3.4)	-	良石・石英	灰灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土上層	10%
330	須恵器	壺	-	(3.0)	[10.0]	良石・石英・磁輝	灰黄	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	覆土中層	40%
331	須恵器	壺	-	(3.2)	[3.3]	良石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端ヘラ削り後、高台貼り付け	覆土上層	20%
TP44	須恵器	壺	-	(6.1)	-	良石・雲母	黄灰	普通	体部横窓の平行叩き 内面当て具痕	覆土上層	
TP45	須恵器	壺	-	(5.2)	-	良石・雲母	黄灰	普通	頭部ロクロテ佐、薄模波状文	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	符號	出土位置	備考
M13	不明	(1.7)	(2.4)	0.9	(6.8)	銅	新面彎曲	覆土中	

第46号住居跡（第139図）

位置 3区東部のC 14h0区、標高24.0mの河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第9号溝、第57号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南部は調査区域外へ延びており、東部が第9号溝に掘り込まれているため、東西軸2.25m、南北軸1.70mしか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定できるが、主軸方向は不明である。壁高は34cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。西壁から北壁にかけての壁下には、壁溝が巡っている。

ピット 西壁からやや中央寄りで確認した。深さは24cmで、性格不明である。

覆土 4層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積である。

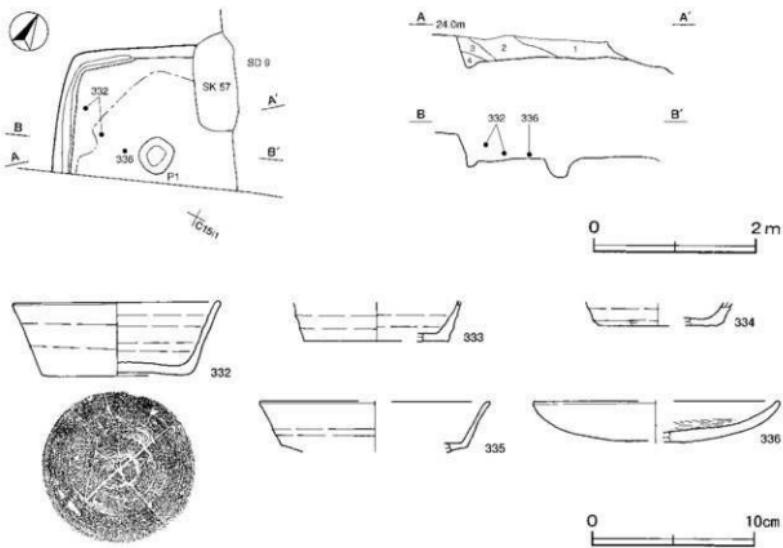
土層解説

- 1 線褐色 ロームブロック少量
- 2 線褐色 ローム粒子少量

- 3 黄褐色 ロームブロック・燒土粒子微量
- 4 植線褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片41点（壺6、盤1、甕34）、須恵器片31点（壺21、高台付壺2、蓋2、盤2、甕4）のほか、流れ込んだ繩文土器片12点（深鉢）、罐2点が出土している。336は中央部付近の覆土下層から出土している。332は西コーナー部付近の覆土下層と覆土中層からそれぞれ出土した破片が接合している。333～335は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉に比定できる。



第 139 図 第 46 号住居跡・出土遺物実測図

第 46 号住居跡出土遺物観察表（第 139 図）

番号	種 別	器 形	口径	部 高	底 槌	胎 土	色 调	焼 成	手 法 の 特 徴 ほ か	出 土 位 置	備 考
332	瓶型器	环	12.6	4.5	9.2	長石・石英・ 黒色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ削り後、回転ヘラ削り ヘラ記 付「6cm」	覆土下等	90%
333	瓶型器	环	-	(2.5)	(9.0)	長石・石英	黄灰	普通	ロクロナデ	覆土中	5 %
334	瓶型器	环	-	(1.8)	(7.2)	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 腹部回転ヘラ削り	覆土中	5 %
335	瓶型器	高台付环	[14.0]	(3.1)	-	長石・石英・ 黒色粒子	灰	普通	ロクロナデ	覆土中	10%
336	土器類	盤	[15.0]	(2.5)	-	長石・石英・雲母	にふい・褐	普通	内面ヘラ削き 底部横立のヘラ削り	覆土下等	30% P145

第 50 号住居跡（第 140 図）

位置 3 区中央部の C 14h5 区、標高 24.0 m の河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第 3 号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 北部が調査区域外へ延びているため、東西軸は 4.15 m で、南北軸は 2.14 m しか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定できるが、主軸方向は不明である。壁高は 2 cm しか確認できなかつたため、壁の立ち上がりは不明である。

床 平坦で、踏み固められた痕跡は確認できなかつた。壁下には壁溝が巡っている。

ピット 壁際からやや離れた中央部付近に位置している。深さ 66 cm で、性格は不明である。

覆土 壁溝内の覆土だけを確認した。2 層に分層できるが、堆積状況は不明である。

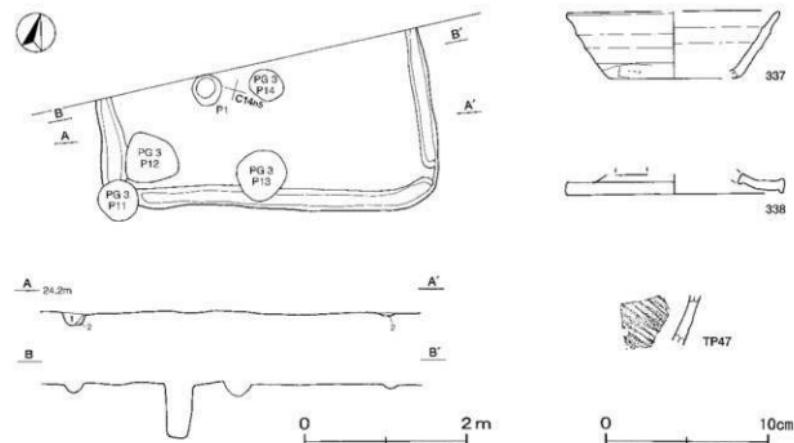
土層解説

1 無暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土器片 23 点（甕類）、須恵器片 16 点（環 6、高盤 1、鉢 8、甕 1）のほか、混入した縄文土器片 2 点（深鉢）。陶器片 1 点（瀬戸・美濃系碗）も確認面から出土している。337・338・TP47 は壁溝内からそれぞれ出土しており、廃絶後の早い段階で投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から 8 世紀後葉に比定できる。



第 140 図 第 50 号住居跡・出土遺物実測図

第 50 号住居跡出土遺物観察表（第 140 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
337	須恵器	环	口3.0	4.1	[7.8]	良石・石英・漂母	褐灰	普通	体部下端手持ちハラ削り	壁溝内	5%
338	須恵器	高盤	-	1.2	[3.4]	良石・石英	灰	普通	ロクロナデ 通かし孔1孔現存	壁溝内	5%
TP47	須恵器	鉢	-	(3.0)	-	良石・石英・漂母	黄灰	普通	体部斜傾の平行叩き	壁溝内	

第 55 号住居跡（第 141・142 図）

位置 3 区東部の C 14f0 区、標高 23.5 m の河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第 9 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南部が第 9 号溝に掘り込まれているため、北東・南西軸は 3.32 m で、北西・南東軸は 3.08 m しか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形で、主軸方向は N - 54° - E である。壁高は 25 ~ 45 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、壁際を除く広い範囲が踏み固められている。北西壁と南西壁の壁下には、壁溝が巡っている。

竈 北東壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 74 cm で、燃焼部幅は 36 cm である。袖部はロームブロックを含んだ第 17 層を基部として、ローム粒子や粘土粒子を含んだ第 13 ~ 16 層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 28 cm 掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。

電土層解説

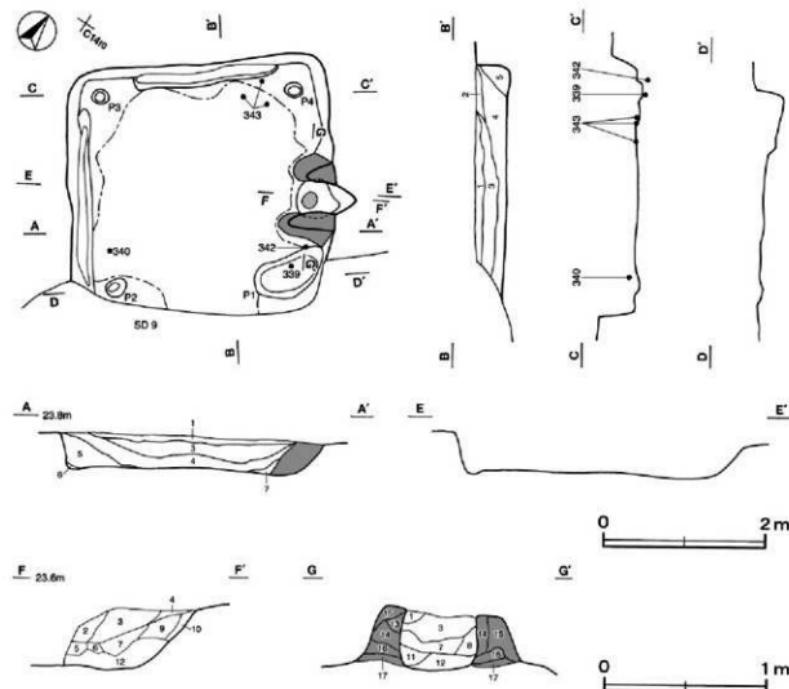
- | | | | |
|---------|--------------------------------|-----------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 10 暗赤褐色 | 焼土粒子少量・ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 粘土粒子・砂粒少量・ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | 11 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック少量・ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量 | 12 暗赤褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・灰少量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量 | 13 にぶい褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 5 褐色 | ロームブロック少量・炭化物・焼土粒子微量 | 14 にぶい橙褐色 | 焼土粒子中量・粘土粒子・砂粒少量 |
| 6 にぶい褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子微量・炭化物微量 | 15 にぶい青褐色 | ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 7 暗褐色 | ローム粒子少量・炭化物・焼土粒子微量 | 16 暗褐色 | ローム粒子少量・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 8 暗赤褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量・炭化物微量 | 17 暗褐色 | ローム粒子少量・焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 9 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物・砂粒微量 | | |

ピット 4か所。P 2～P 4は深さ6cmで、コーナー部に位置していることから補助柱穴とみられる。P 1は深さ15cmで、径がほかのピットよりも大きいが、配置から補助柱穴の可能性がある。

覆土 7層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積である。

土層解説

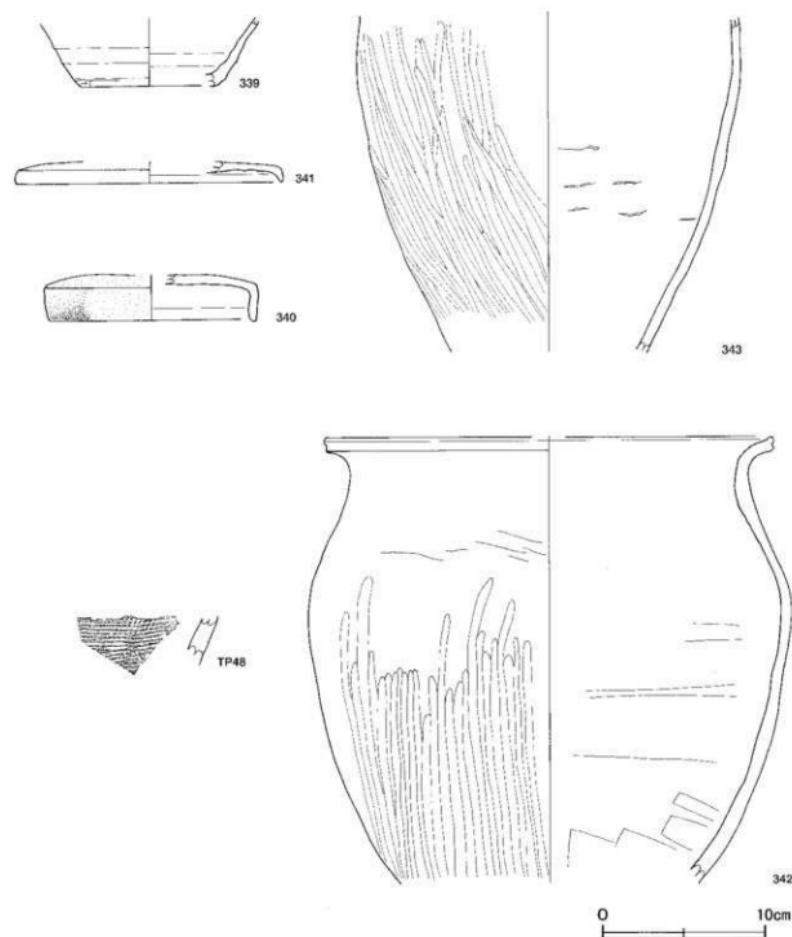
- | | | | |
|--------|---------------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗暗褐色 | ローム粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 暗暗褐色 | ロームブロック・炭化物微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | | |



第141図 第55号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片 152 点（坏 7、高坏 1、甕類 144）、須恵器片 21 点（坏 5、高台付坏 1、蓋 6、鉢 9）のほか、流れ込んだ繩文土器片 49 点（深鉢）が出土している。339 は P 1、340 は南コーナー部付近の覆土下層からそれぞれ出土している。343 は北コーナー部付近の床面からそれぞれ出土した 3 点の破片が接合している。いずれも廃絶後の早い段階で投棄されたものとみられる。341・TP48 は南部の覆土中から出土している。342 は甕の右袖部構築の際に混入したものである。

所見 時期は、出土土器から 8 世紀後葉に比定できる。



第 142 図 第 55 号住居跡出土遺物実測図

第 55 号住居跡出土遺物観察表（第 142 図）

番号	種 別	器 様	口 径	晋 高	底 径	胎 土	色 萬	焼 成	手 法 の 符 虑 ほ か	出土位置	備 考
339	瓶型器	环	-	(4.2)	[8.4]	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端回転ヘラ巻き	P1 覆土下層	5%
340	瓶型器	短頭瓶蓋	[12.8]	2.9	-	長石・黒色粒子	黄灰	普通	ロクロナデ 自然軸	覆土下層	40% PLS5
341	瓶型器	蓋	[16.4]	(1.3)	-	長石・石英	黄灰	普通	ロクロナデ	覆土中	30%
342	土器器	甕	[27.6]	(27.5)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にじい褐色	普通	体部底面のヘラ巻き 内面下端ヘラナデ 工具痕	工 置地部	30%
343	土器器	甕	-	(20.6)	-	長石・石英・雲母	灰黃褐色	普通	体部底面のヘラ巻き	床面	40%
TP48	瓶型器	瓶	-	(3.1)	-	長石・石英・雲母	灰	普通	体部横位の平行叩き	覆土中	PLS2

第 58 号住居跡（第 143 ~ 145 図）

位置 3 区中央部の C 14H4 区、標高 23.5 m の河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第 52・53 号住居、第 15 号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 南部が調査区域外へ延びているため、東西軸は 4.80 mで、南北軸は 4.01 m しか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形で、主軸方向は N = 20° - W である。壁高は 12 ~ 35 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 124 cm で、燃焼部幅は 60 cm である。袖部は粘土塊、粘土粒子、砂粒を含んだ第 8 ~ 15 層を積み上げて構築されている。両袖部から出土した粘土塊は総計 130 点で、総重量が 700.9 g である。大半は径 2 ~ 3 cm、重量 2 g ほどで、最大のものは長径 8 cm で、重量 58.2 g である。粘土塊は袖部に点在して出土している状況から、袖部の構築土に混ぜたものとみられる。火床部は床面にロームブロックや粘土粒子、砂粒などを含んだ第 16 ~ 19 層を高さ 14 cm ほど積み上げて構築されている。火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 28 cm 堀り込まれ、外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1	褐	色	炭化物、ローム粒子少量、燒土ブロック、粘土粒子、砂粒微量	11	褐	暗 褐 色	ローム粒子、炭化粒子、粘土粒子微量
2	にじい褐色	色	粘土ブロック、燒土粒子、砂粒少量、炭化粒子微量	12	にじい褐色	色	粘土粒子、砂粒多量、燒土ブロック、炭化粒子微量
3	褐	色	燒土ブロック、ローム粒子少量、炭化粒子、粘土粒子、砂粒微量	13	黒	褐 色	ロームブロック、燒土ブロック、炭化物、粘土粒子、砂粒微量
4	赤	褐 色	燒土ブロック、粘土ブロック、砂粒少量、炭化物微量	14	褐	色	ロームブロック少量、燒土ブロック、粘土ブロック、炭化物、砂粒微量
5	にじい褐色	色	燒土ブロック少量、炭化粒子、粘土粒子、砂粒微量	15	暗	褐 色	ロームブロック少量、燒土ブロック、炭化物、粘土粒子、砂粒微量
6	褐	色	粘土粒子、砂粒中量、炭化粒子微量	16	赤	褐 色	燒土粒子中量
7	暗	褐 色	ローム粒子、炭化粒子少量、燒土粒子微量	17	褐	色	粘土ブロック、砂粒少量、燒土ブロック、ローム粒子、炭化粒子微量
8	暗	褐 色	粘土粒子、砂粒少量、燒土ブロック、ローム粒子微量	18	暗	褐 色	燒土ブロック、粘土粒子、砂粒少量、ロームブロック、炭化粒子微量
9	にじい褐色	色	粘土粒子、砂粒多量、燒土粒子、炭化粒子微量	19	暗	赤 褐 色	ロームブロック、燒土ブロック、炭化粒子微量
10	暗	赤 褐 色	燒土粒子、粘土粒子、砂粒少量、炭化物微量				

ピット 2か所。P 1・P 2 は深さ 44 cm・46 cm で、配置から主柱穴である。

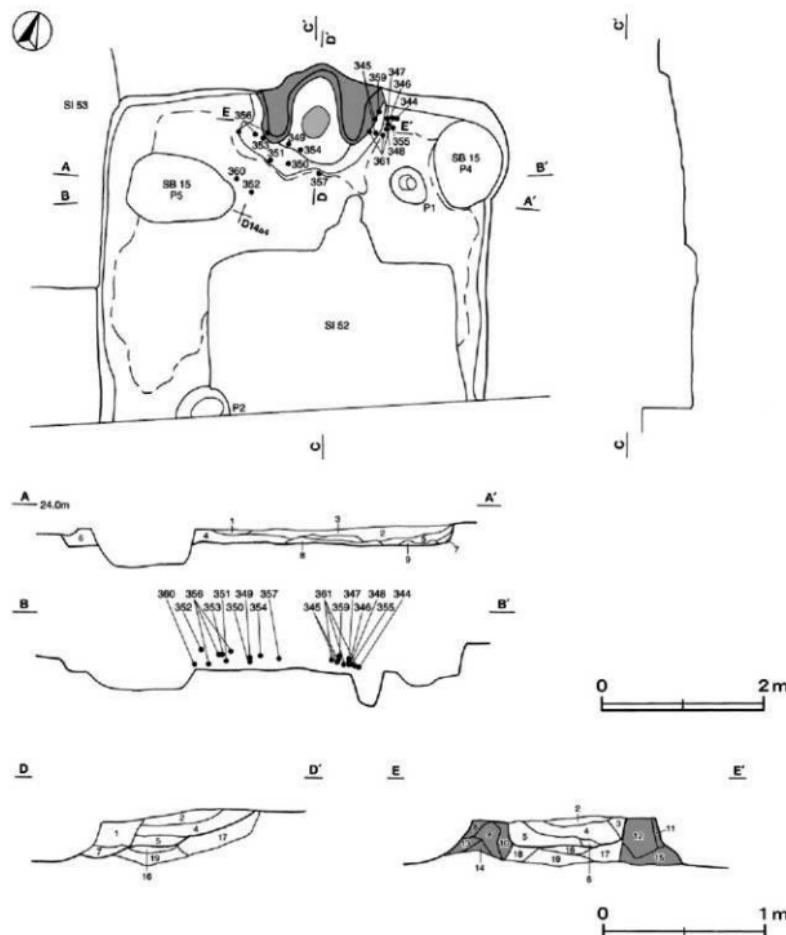
覆土 9 層に分層できる。不自然な堆積状況であることから埋め戻されている。

土層解説

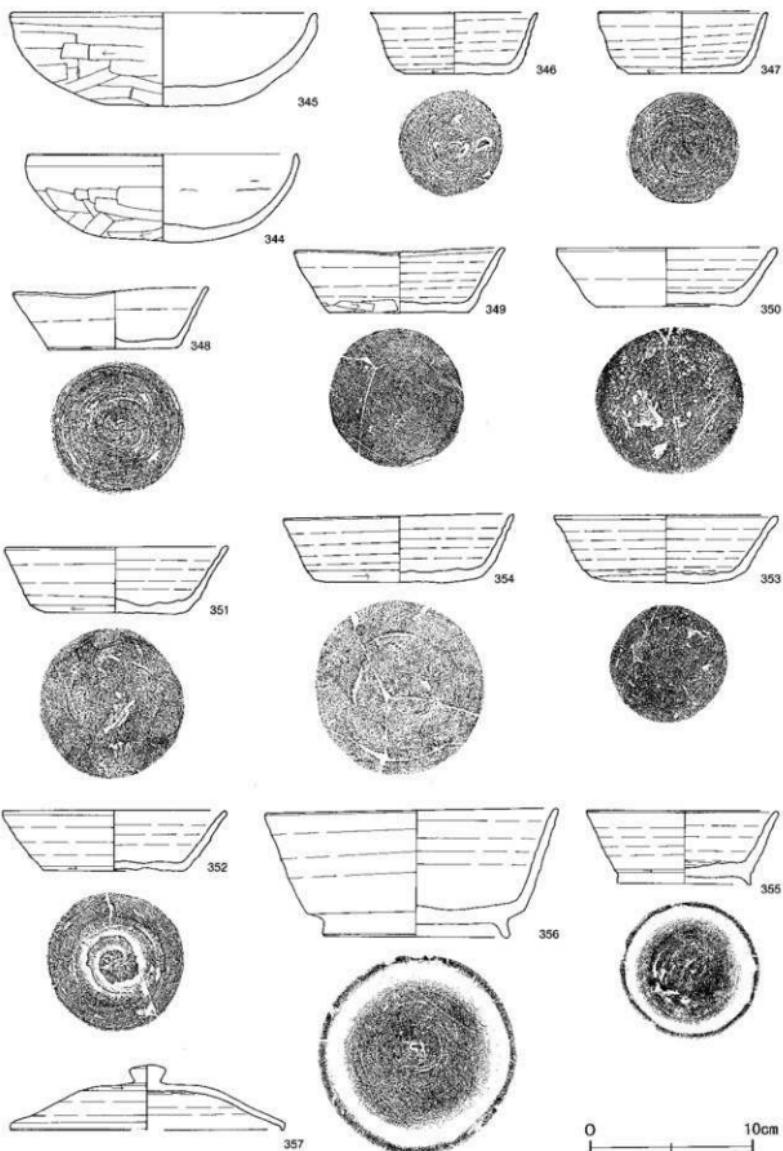
1	暗	褐	色	炭化粒子少量、ロームブロック、燒土ブロック、粘土粒子、砂粒微量	5	褐	色	ローム粒子中量
2	暗	褐	色	ロームブロック少量、燒土ブロック、炭化物微量	6	褐	色	ロームブロック少量
3	暗	褐	色	炭化物中量、ロームブロック、燒土ブロック、炭化物微量	7	黒	褐	ロームブロック中量、燒土粒子微量
4	褐	色	ロームブロック、燒土ブロック、炭化物微量	8	暗	褐	色	ロームブロック、燒土ブロック、炭化物微量

遺物出土状況 土師器片 248 点（坏 9、甕類 238、瓶 1）、須恵器片 121 点（坏 65、高台付坏 3、蓋 7、盤 1、長頸瓶 16、甕 29）のほか、混入した陶器片 2 点（瀬戸・美濃系灯明皿、産地不明皿）が出土している。349～351・354 は竈の焚口部付近、352・360 は竈の前面、344～348・355・359・361 は竈の右袖部外の覆土中層から下層にかけて、353・356 は竈の左袖部外の覆土中層からそれぞれ出土している。竈の周辺からはほぼ完形の土器が多量に出土していることから、廃絶時に投棄されたものとみられる。

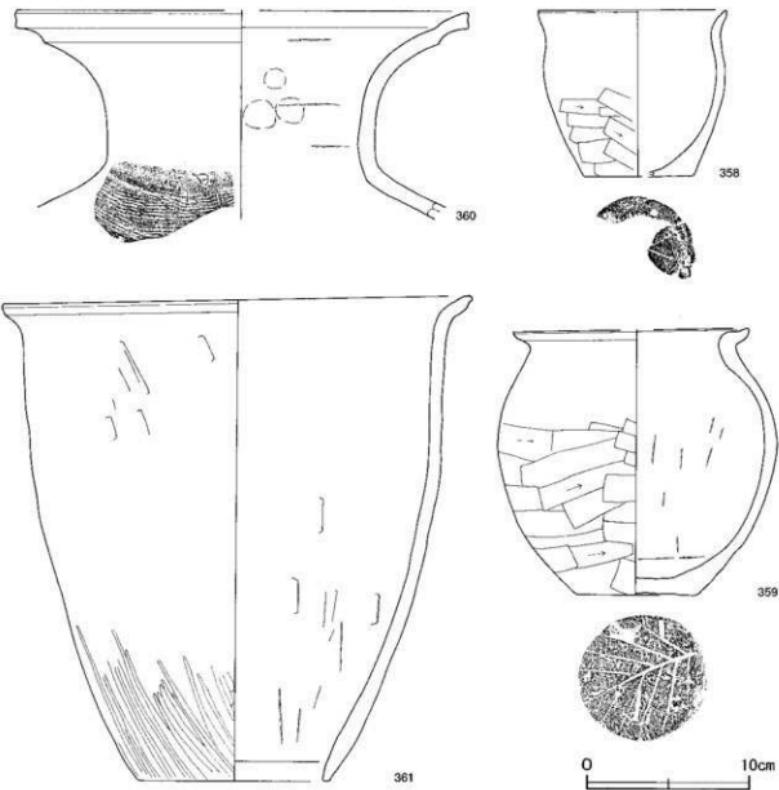
所見 時期は、出土土器から8世紀中葉に比定できる。



第143図 第58号住居跡実測図



第 144 図 第 58 号住居跡出土遺物実測図（1）



第145図 第58号住居跡出土遺物実測図(2)

第58号住居跡出土遺物観察表(第144・145図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	鉢土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
344	土師器	环	16.6	5.4	-	長石・石英・雲母 にぶい橙	普通	体部横位のヘラ削り	覆土下層	100% PL44	
345	土師器	环	18.8	5.7	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	黒	普通 体部・底部横位のヘラ削り	覆土下層	60% PL44	
346	土師器	环	10.4	3.8	6.4	長石・石英・磁鐵 黄灰	普通	体部下端・底部回転ヘラ削り	覆土下層	100% PL44	
347	土師器	环	10.4	3.8	7.0	長石・石英・雲母 黄灰	普通	体部下端・底部回転ヘラ削り	覆土下層	95% PL44	
348	土師器	环	11.9	3.8	7.8	長石・石英・雲母・赤色粒子 灰	普通	体部下端・底部回転ヘラ削り	覆土下層	95% PL44	
349	土師器	环	12.8	4.0	8.5	長石・石英・雲母 黒色粒子 灰	普通	体部下端手打ちヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	覆土下層	95% PL44	
350	土師器	环	13.6	3.7	8.5	長石・石英・雲母 にぶい橙	普通	底部回転ヘラ削り底を残す一方のヘラ削り	覆土下層	95% PL44	
351	土師器	环	13.6	4.2	8.7	長石・石英・黒色粒子 灰	普通	体部下端回転ヘラ削り	覆土下層	95% PL44	
352	土師器	环	13.7	3.7	8.6	長石・石英・雲母 鵝灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り底を残すナデ	覆土下層	100% PL44	
353	土師器	环	13.8	4.1	7.0	長石・石英・雲母 灰黃褐	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	覆土中層	90% PL44	
354	土師器	环	14.2	4.2	10.4	長石・石英・雲母 緑	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り底を残す多方向のヘラ削り	覆土下層	95% PL44	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
355	須恵器	高台付坏	11.7	4.6	8.2	良石・石英・閃長・白色針状物	灰	普通	底部下端斜板へラブリ、底部斜板へラブリ直を残す斜板へラブリ、高台貼り付け	覆土下層	95% PL45
356	須恵器	高台付坏	18.0	8.0	11.2	良石・石英・黑色粒子・白色針状物	黄灰	普通	底部斜板へラブリ直を残す斜板へラブリ、高台貼り付け	覆土中層	95% PL45
357	須恵器	壺	16.8	4.1	-	良石・石英・閃長・白色針状物	褐灰	普通	底部下端斜板へラブリ	覆土下層	40% PL45
358	土師器	壺	11.6	10.3	6.7	良石・石英・閃長・黑色粒子	灰	普通	底部下端斜板へラブリ	覆土下層	50%
359	土師器	壺	14.6	16.3	7.4	良石・石英・雲母	に赤い斑	普通	底部下端斜板へラブリ	底部木葉直	95% PL45
360	須恵器	壺	27.6	(12.9)	-	良石・石英・閃長	灰	普通	底部内面指擦痕、底部供焼の平行印記	覆土下層	5%
361	土師器	壺	28.6	30.0	11.7	良石・石英・閃長	に赤い斑	普通	底部上部ハナナ、下端斜板へラブリ、内面ハナナ・工具痕	覆土下層	90% PL45

第 64 号住居跡 (第 146 図)

位置 3 区東部の C 14e9 区、標高 235 m の河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第 65 号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 大半が調査区域外へ延びているため、東西軸 2.70 m、南北軸 0.37 m しか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定できるが、主軸方向は不明である。壁高は 26 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、踏み固められた痕跡は確認できなかった。

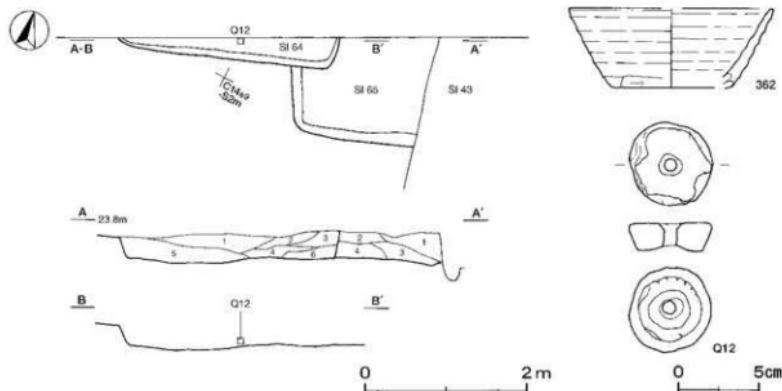
覆土 6 層に分層できる。不自然な堆積状況であることから埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|--------------------------|-------------------------------|
| 1 細 細 色 ロームブロック微量 | 4 細 細 色 ローム粒子少量 |
| 2 細 細 色 ローム粒子少量 | 5 黒 細 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 細 細 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 6 細 細 色 ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片 11 点 (壺類)、須恵器片 8 点 (壺 6、高台付坏 1、高盤 1)、石製品 1 点 (紡錘車) が出土している。Q 12 は南壁際の覆土下層、362 は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡の大半が調査区域外へ延びているため、床は南壁際の一部しか確認できなかった。時期は、重複関係にある同時期の第 65 号住居跡より新しいが、出土土器から 8 世紀後葉に比定できる。



第 146 図 第 64・65 号住居跡、第 64 号住居跡出土遺物実測図

第64号住居跡出土遺物観察表（第146図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
362	黑漆器	环	[D26]	4.9	[7.4]	長石・石英・雲母	褐灰黄	普通	体部下端手持ちハラ削り	覆土中	10%
Q 12	砂輪車		5.1	5.2	1.8	62.1	粘板岩		円錐台形 摺痕	覆土下層	PL54

第65号住居跡（第147図）

位置 3区東部のC 14e9区、標高235mの河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第43・64号住居に掘り込まれている。

規模と形状 東部が第43号住居、西部が第64号住居に掘り込まれ、北部が調査区域外へ延びているため、東西軸1.65m、南北軸1.32mしか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定できるが、主軸方向は不明である。壁高は32cmで、外傾して立ち上がっている。

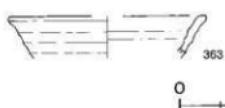
床 平坦で、踏み固められた痕跡は確認できなかった。

覆土 4層に分層できる。不自然な堆積状況であることから埋め戻されている。

土層解説

1	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
2	黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量

3	暗褐色	ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量
4	暗褐色	ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量



遺物出土状況 土師器片5点（甕類4、瓶1）、須恵器片2点（环）のほか、混入した縄文土器片3点（深鉢）が出土している。363は覆土中から出土している。

所見 時期は、重複関係や出土土器から8世紀後葉と推測できる。

第147図 第65号住居跡出土遺物実測図

第65号住居跡出土遺物観察表（第147図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
363	黑漆器	环	[D20]	[26]	-	長石・石英・雲母	灰	普通	ロクロナデ	覆土中	5%

第70号住居跡（第148図）

位置 3区西部のD 14b1区、標高23.0mの河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第60号住居に掘り込まれている。

規模と形状 北部が第60号住居に掘り込まれ、南部が調査区域外へ延びており、西部は削平されているため、竪と竪周辺の床だけを確認した。遺存状況が不良のため、南北軸2.44m、東西軸1.26mしか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形で、主軸方向はN-70°-Eである。壁高は10cmで、緩やかに立ち上がっている。

床 遺存している床は平坦で、踏み固められている。東壁の壁下には、壁溝が巡っている。

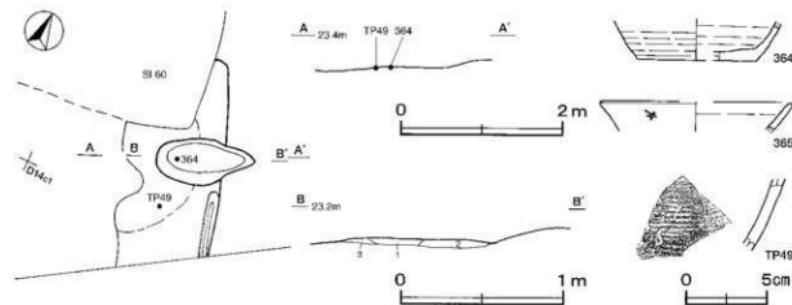
竪 東壁に付設されている。火床部は掘方の一部が遺存しており、床面を5cm以上掘り込んで、燒土粒子やローム粒子を含んだ第1~3層を埋土して構築されていることを確認した。袖部は遺存していない。煙道部は壁外へ36cm掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

掘方遺土層解説

- 1 に赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
 2 褐赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
 3 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子微量、ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片 52 点（环 5、高台付碗 1、甕 46）、須恵器片 17 点（环 6、蓋 2、甕 8、瓶 1）が出土している。TP49 は甕前面の床面から出土している。365 は覆土中、364 は甕の掘方の底面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 8 世紀後葉に比定できる。



第 148 図 第 70 号住居跡・出土遺物実測図

第 70 号住居跡出土遺物観察表（第 148 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	はか	出土位置	備考
364	須恵器	环	-	(2.5)	[7.4]	長石・石英	褐灰	普通	体部下端回転へう振り 底部一方に向かう	縦織方底面	10%	
365	須恵器	环	[11.8]	(1.8)	-	長石・石英	褐灰	普通	ロクロナデ 外面に墨書「□」	覆土中	5% PL51	
TP49	須恵器	甕	-	(4.5)	-	長石・石英	黄灰	普通	体部横位の平行叩き	底面	PL52	

表 14 奈良時代住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	堤高 (cm)	東面	壁構 柱穴・出入口・ビット	内部施設			覆土	主要な出土遺物	時期	備考 重複開発(古→新)	
								柱穴	出入口	ビット					
44	C15d1	-	〔方形・ 長方形〕	4.35 × (1.70)	5~30	平坦	一部	-	-	-	-	土師器、須恵器、 土製品、瓦	8世紀後葉	本跡→SD7-8	
46	C14b0	-	〔方形・ 長方形〕	(2.25) × (1.70)	34	平坦	一部	-	-	1	-	自然	土師器、須恵器	8世紀中葉	本跡→SK37, SD9
50	C14b5	-	〔方形・ 長方形〕	4.15 × (2.14)	2	平坦	一部	-	-	1	-	不明	土師器、須恵器	8世紀後葉	本跡→PG3
55	C14b N-54°-E	〔方形・ 長方形〕	3.32 × (3.08)	25~45	平坦	一部	-	-	4	竈1	-	土師器、須恵器	8世紀後葉	本跡→SD9	
58	C14d N-20°-W	〔方形・ 長方形〕	4.80 × (4.01)	12~35	平坦	-	2	-	-	竈1	-	人為	土師器、須恵器、 瓦製品	8世紀中葉	本跡→SS52-53, SB15
64	C14e9	-	〔方形・ 長方形〕	(2.70) × (0.37)	26	平坦	-	-	-	-	-	人為	土師器、須恵器、 瓦製品	8世紀後葉	SI65→本跡
65	C14e9	-	〔方形・ 長方形〕	(1.65) × (1.32)	32	平坦	-	-	-	-	-	人為	土師器、須恵器	8世紀後葉	本跡→SI43-64
70	D14b1 N-70°-E	〔方形・ 長方形〕	(2.44) × (1.26)	10	平坦	一部	-	-	-	竈1	-	土師器、須恵器	8世紀後葉	本跡→S80	

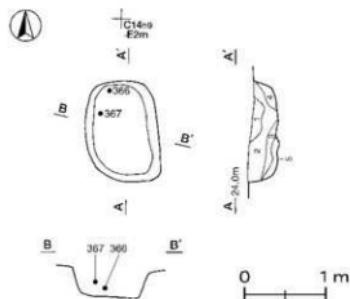
(2) 土坑

第 54 号土坑（第 149・150 図）

位置 3 区東部の C 14b9 区、標高 24.00 m の河岸段丘上位の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 125 m、短軸 0.90 m の隅丸長方形で、長軸方向は N - 4° - W である。深さは 33 cm で、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 5 層に分層できる。第 1 層を除く各層に、ロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。第 4 層に含まれているロームブロックは、火を受けて赤変している。

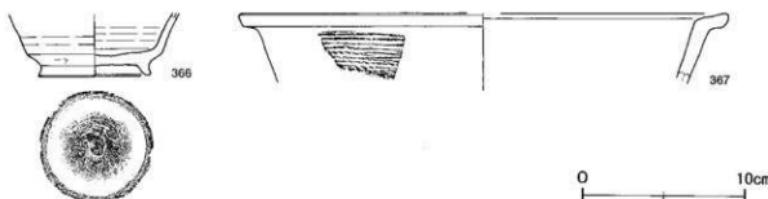


土層解説	
1	暗褐色 ローム粒子少量
2	極暗褐色 ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量
3	黒褐色 ロームブロック微量
4	褐色 ロームブロック少量
5	暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 39 点（鉢 1、壺類 38）、須恵器片 40 点（环 26、高台付环 1、蓋 5、鉢 8）のほか、混入した縄文土器片 6 点（深鉢）が出土している。366 は北部、367 は北西部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 8 世紀後葉に比定できる。

第 149 図 第 54 号土坑実測図



第 150 図 第 54 号土坑出土遺物実測図

第 54 号土坑出土遺物観察表（第 150 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	ほか	出土位置	備考
366	須恵器	高台付环	-	(3.9)	6.8	長石・石英・漂母・半色粒子	灰黄	普通	底部回転へ傾り後、高台貼り付け	覆土中層	50%	
367	須恵器	鉢	[30.2]	(4.3)	-	長石・石英・漂母	灰白	普通	体部側位の平行叩き	覆土中層	5%	

第 87 号土坑（第 151 図）

位置 3 区東部の C 14g8 区、標高 24.0 m の河岸段丘上位の平坦部に位置している。

規模と形状 長径 0.51 m、短径 0.37 m の梢円形で、長径方向は N - 39° - W である。深さは 41 cm で、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3 層に分層できる。不自然な堆積状況から埋め戻されている。

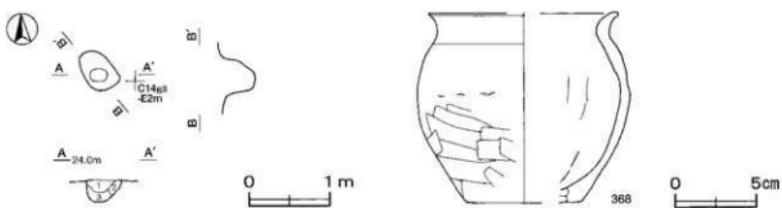
土層解説

1	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
2	褐色	ローム粒子少量

3	暗褐色	ロームブロック微量
---	-----	-----------

遺物出土状況 土師器片 72 点（环 71, 壺 1），須恵器片 4 点（环 3, 盖 1）が出土している。368 は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から 8 世紀前半と推定できる。



第 151 図 第 87 号土坑・出土遺物実測図

第 87 号土坑出土遺物観察表（第 151 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
368	土師器	壺	口 11.6	11.6	底 7.0	長石・石英・粗面	にぶい朱色	普通	移築下平横窓のハラ削り 内面ハラチテ 瓦 加木裏面	覆土中	30%

第 97 号土坑（第 152 図）

位置 3 区西部の D 13d9 区、標高 22.5 m の河岸段丘上位の平坦部に位置している。

規模と形状 南部が調査区域外へ延びているため、東西軸は 0.77 m で、南北軸は 0.65 m しか確認できなかった。平面形は楕円形と推定でき、軸方向は不明である。深さは 15cm で、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

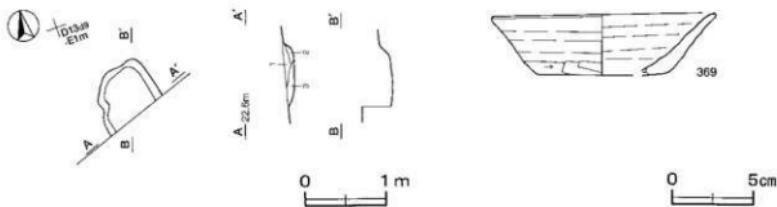
覆土 3 層に分層できる。ロームブロックや粘土粒子を含む不自然な状況から埋め戻されている。

土層解説

- | | | | | | | | |
|---|-----|---|--------------------|---|-----|---|------------------------------|
| 1 | 褐色 | 色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 3 | 暗褐色 | 色 | ロームブロック・燒土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子・灰微量 |
| 2 | 暗褐色 | 色 | ローム粒子・粘土粒子少量、炭化物微量 | | | | |

遺物出土状況 土師器片 7 点（环 5, 壺 2）、須恵器片 3 点（环）が出土している。369 は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から 8 世紀後葉に比定できる。



第 152 図 第 97 号土坑・出土遺物実測図

第97号土坑出土遺物観察表（第152図）

番号	種別	容積	口径	管高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	はか	出土位置	備考
369	須恵器	环	13.6	3.8	8.0	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端手持ちハラ削り 底部一方削のハラ削り	はか	覆土中	40%

表15 奈良時代土坑一覧表

番号	位 置	長軸(往)方向	平面形	規 模 (m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	時 期	備 考 (重複関係 否→)
				長軸(往) × 短軸(往)	深さ(cm)						
54	C14e9	N - 4° - W	圓丸長方形	1.25	× 0.90	33	外傾	平坦	人為 土師器、須恵器	8世紀後葉	
87	C14g8	N - 39° - W	梢円形	0.51	× 0.37	41	外傾	平坦	人為 土師器、須恵器	8世紀前半	
97	D13d9	-	[梢円形]	0.77	× 0.65	15	直斜	平坦	人為 土師器、須恵器	8世紀後葉	

3 平安時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した当時代の遺構は、堅穴住居跡20軒、掘立柱建物跡6棟、柱列跡2列、土坑4基、溝跡1条である。以下、それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

(1) 堅穴住居跡

第43号住居跡（第153～157図）

位置 3区東部のC 14e0区、標高235.5mの河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第65号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北部が調査区域外へ延びているため、東西軸は423mで、南北軸は375mしか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定でき、主軸方向はN - 110° - Wである。壁高は21～51cmで、外傾して立ち上がっていいる。

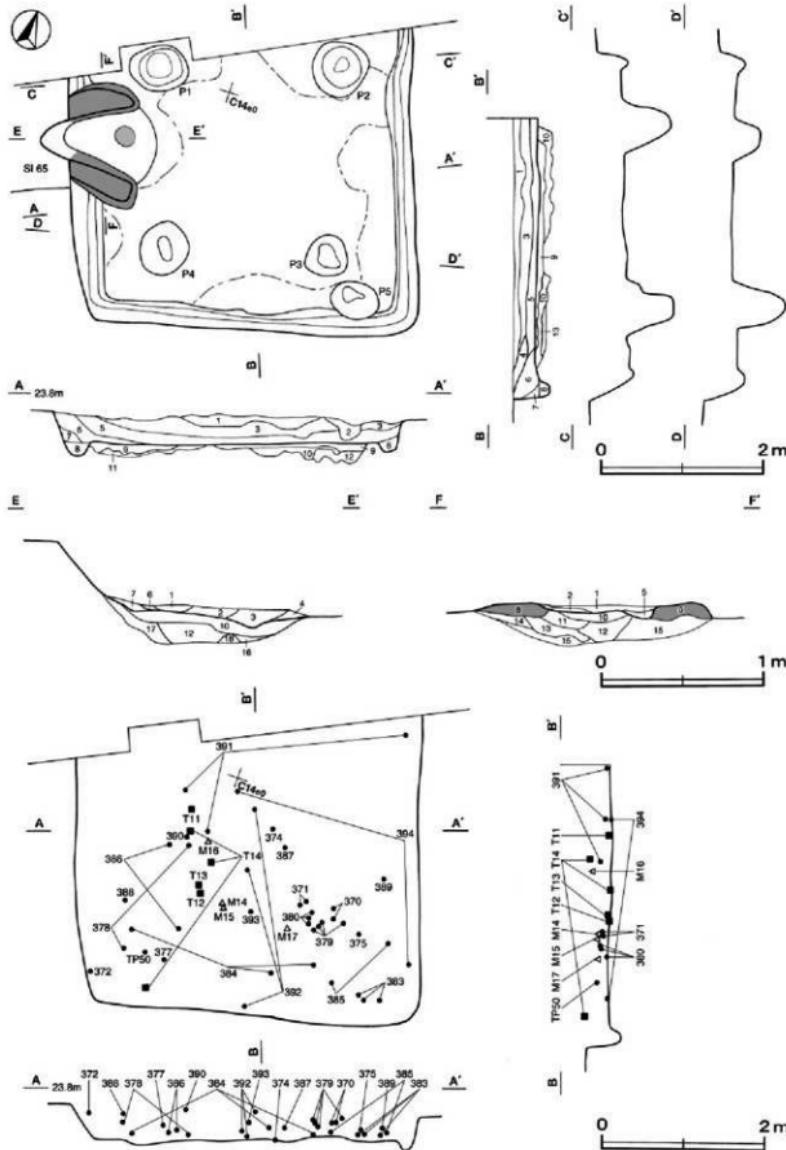
床 平坦な貼床で、壁際を除いて踏み固められている。貼床は、中央部を除いた範囲にロームブロックを含んだ第9～13層を埋めて構築している。壁下には壁溝が巡っている。

竈 西壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで110cmで、燃焼部幅は86cmである。袖部は、粘土粒子や砂粒を含んだ第8・9層を積み上げて構築されている。火床部は、床面を10cm掘り込んでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ35cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっていいる。

竈土層解説

1	赤 褐 色	燒土粒子中量、炭化物微量	10	暗 赤 褐 色	ロームブロック・燒土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量
2	暗 赤 褐 色	燒土ブロック・炭化物少量	11	暗 褐 色	燒土ブロック・炭化粒子少量、粘土粒子・砂粒微量
3	黒 褐 色	燒土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量	12	暗 褐 色	炭化粒子少量、ロームブロック・燒土ブロック微量
4	暗 赤 褐 色	燒土ブロック・粘土ブロック・砂粒少量、ロームブロック・炭化粒子微量	13	褐 色	ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量
5	極暗赤褐色	炭化物・燒土粒子・粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子微量	14	暗 褐 色	ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量
6	暗 赤 褐 色	燒土粒子少量、炭化物・ローム粒子微量	15	暗 褐 色	ロームブロック・燒土粒子少量
7	赤 褐 色	燒土ブロック多量	16	黒 褐 色	ロームブロック少量、燒土ブロック・炭化粒子微量
8	褐 色	粘土粒子・砂粒多量、燒土粒子・炭化粒子微量	17	黒 褐 色	ロームブロック・燒土粒子少量、燒土粒子微量
9	褐 色	粘土粒子・砂粒中量、燒土ブロック・炭化粒子微量	18	褐 色	ロームブロック・燒土粒子少量、炭化粒子微量

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ32～63cmで、主柱穴と考えられる。P 5は深さ26cmで、南東コーナー部付近に位置しているが、性格は不明である。



第153図 第43号住居跡実測図

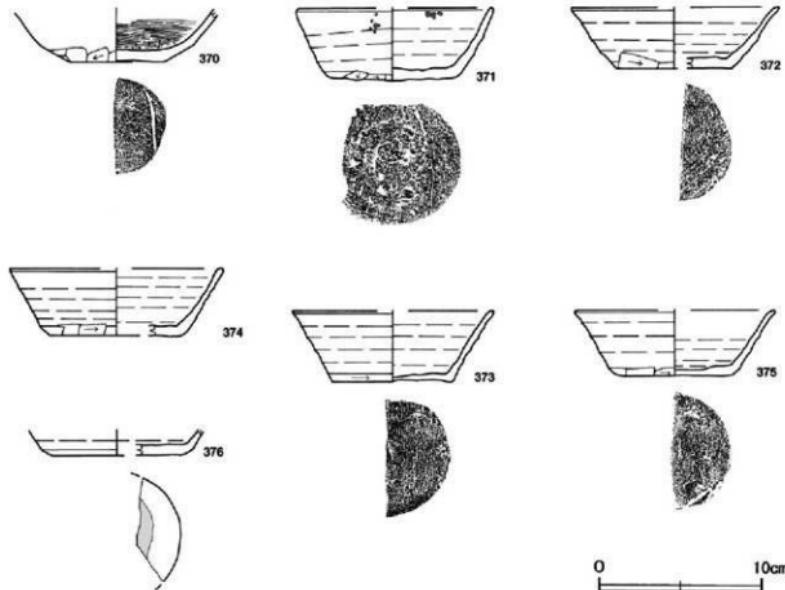
覆土 8層に分層できる。含有物がブロック主体であることから埋め戻されている。第9～13層は貼床の構築土である。

土層解説

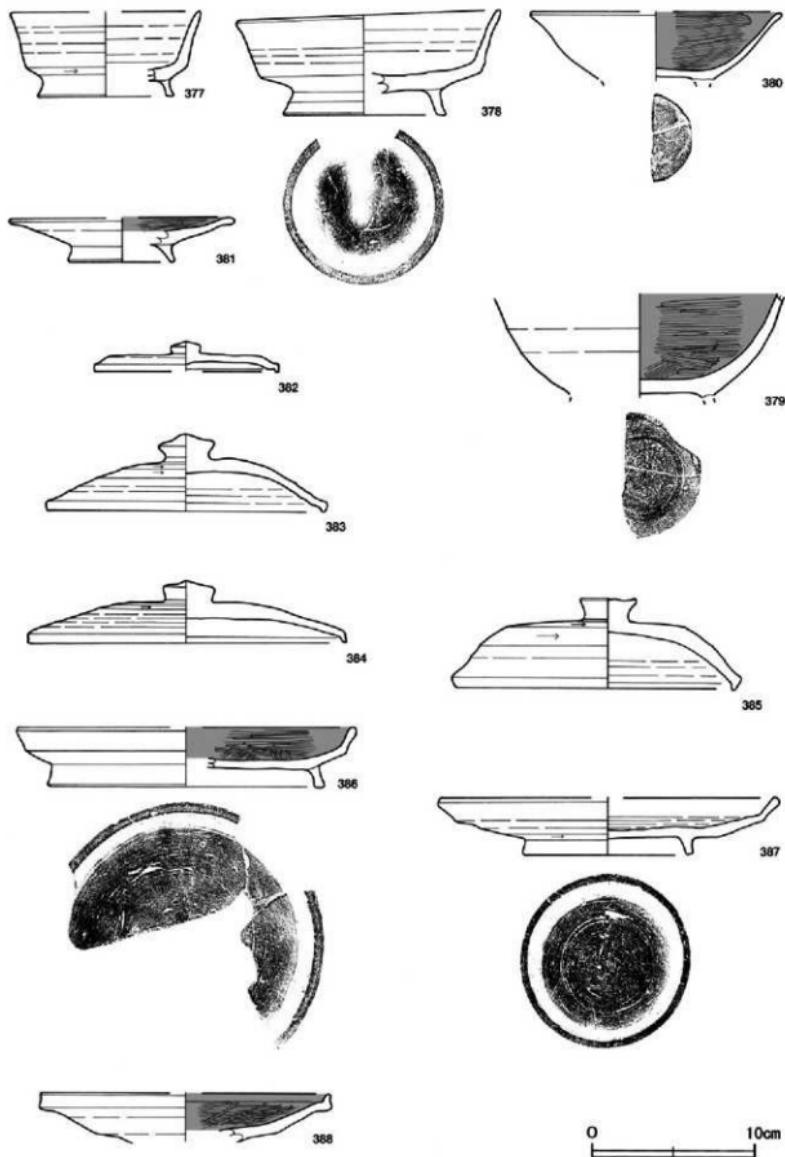
1 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	9 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	10 褐色	ローム粒子中量、粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量	11 褐色	ローム粒子中量
4 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	12 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量	13 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
6 黒褐色	ロームブロック少量、炭化物微量		
7 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量		
8 黒褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物・粘土粒子・砂粒微量		

遺物出土状況 土師器片 1480 点（坏5、碗2、高台付坏116、高台付碗2、高台付皿1、盤1、蓋1、高盤1、甕1350、小形甕1）、須恵器片 211 点（坏6、高台付坏29、盤2、蓋45、高盤5、甕122、円面鏡2）、瓦片 16 点（平瓦15、丸瓦1）、鐵製品4点（刀子1、鎌2、紡錘車1）、銅製品1点（不明）が中央部の覆土下層から中層にかけて出土しているほか、混入した繩文土器片2点（深鉢）が出土している。また、貼床の構築土内から土師器片45点（甕）、須恵器片22点（甕）が出土している。374は中央部、T 12・T 13は中央部西寄りの床面、394は中央部の床面と東南コーナー部の覆土下層、370・371・375・377～380・383～387・389・391～393・TP50・T 11・M 14～M 17は覆土下層から中層にかけて、372・388・390は覆土上層から散在した状態で出土し、T 14は中央部の床面、中央部の覆土中層、南西コーナー部の覆土上層から出土した破片が接合したものである。

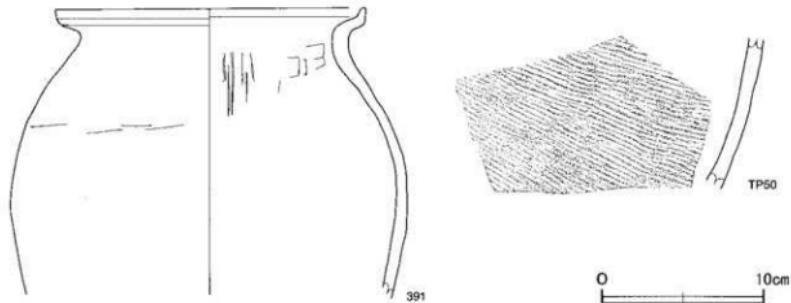
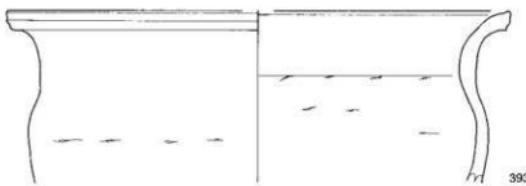
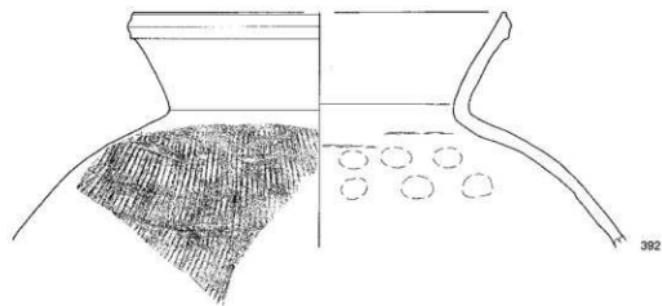
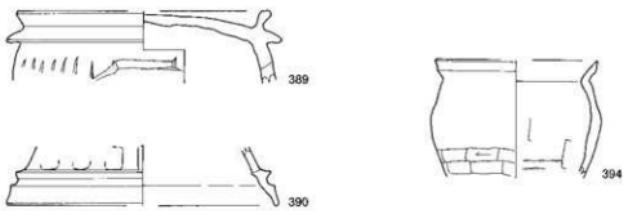
所見 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。



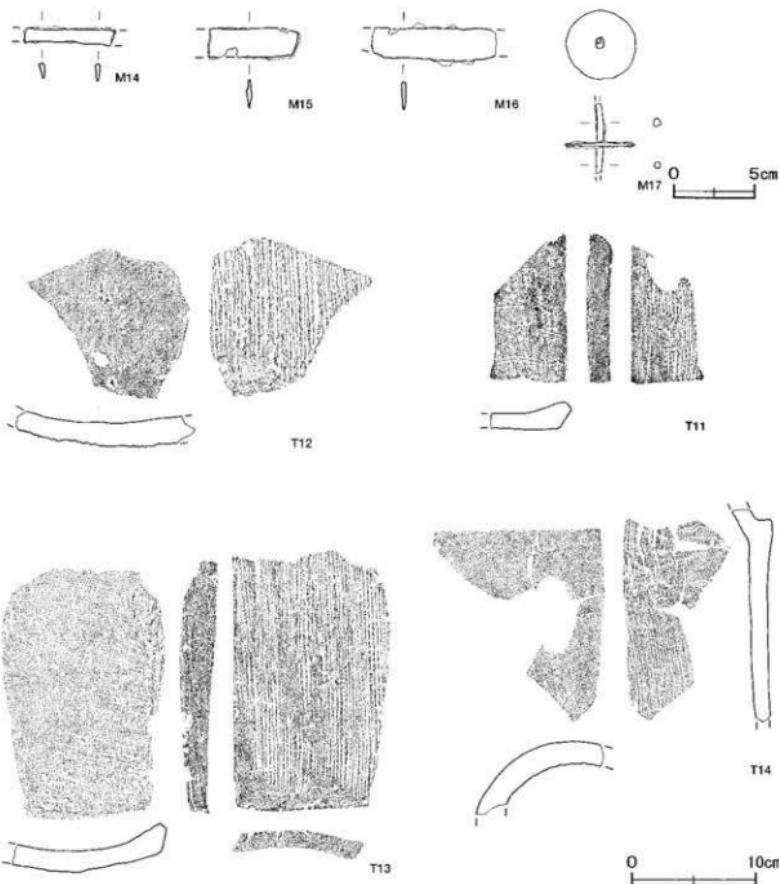
第154図 第43号住居跡出土遺物実測図(1)



第155図 第43号住居跡出土遺物実測図(2)



第 156 図 第 43 号住居跡出土遺物実測図 (3)



第157図 第43号住居跡出土遺物実測図(4)

第43号住居跡出土遺物観察表(第154~157図)

番号	種別	部種	口径	部高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
370	土器部	环	-	(3.3)	6.0	長石・石英・雲母・水色粒子	灰	普通	体側下端手折ちへラ削り 内面横凹のへラ削り 底第一方向のへラ削り	覆土中層	10%
371	陶器部	环	[12.0]	4.5	8.0	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体底下端手折ちへラ削り 脱型斜面へラ切り 焼き土持付 一方向のナメ 口縁部外・内面と底面焼付垂	覆土下層	40% PL47
372	陶器部	环	[12.8]	3.8	[7.0]	長石・石英	黄灰	普通	体底下端手折ちへラ削り 底第一方向のへラ削り	覆土上層	40%
373	陶器部	环	[12.4]	4.4	[7.1]	長石・石英	灰	普通	体底下端回転へラ削り 底部削軋へラ切り 烧き土持付ナメ	覆土中層	30%
374	陶器部	环	[13.2]	4.1	[8.0]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体底下端手折ちへラ削り	未固	20%
375	陶器部	环	[12.2]	4.1	7.0	長石・石英・雲母 細繩	黄灰	普通	体底下端手折ちへラ削り 底部多方向のへラ削り	覆土下層	20%
376	陶器部	环	-	[1.6]	[8.0]	長石・石英・針状鉱物	灰	普通	底部削軋へラ削り・朱墨痕	覆土中	10% PL50
377	陶器部	高台付环	[11.6]	5.2	[8.4]	長石・石英	黄灰	普通	体底下端回転へラ削り 高台削り付け	覆土中層	30%

番号	種別	器種	口径	基高	直径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
378	須恵器	高台付杯	16.2	6.4	10.0	長石・石英・雲母・ 細繩	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	覆土下・中層	80%
379	土罐器	高台付碗	-	(6.4)	-	長石・石英・雲母・ に赤い縞	青緑	普通	高台貼り付け	覆土中層	30%
380	土罐器	高台付碗	[15.6]	(4.2)	-	長石・石英・雲母・ 未色粒子	縞	普通	内部構造のハラ焼き、底部回転差切り後、ヘ ラ削り	覆土中層	40%
381	土罐器	高台付碗	[13.8]	2.7	(6.2)	長石・石英・雲母	黒縞	普通	内部構造のハラ焼き、高台貼り付け	覆土中	20%
382	須恵器	盃	[11.4]	1.8	-	長石・石英	灰白	普通	ロクロナメ	覆土中	20%
383	須恵器	盃	17.0	4.7	-	長石・石英・雲母・ 細繩	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土下層	80% PL48
384	須恵器	盃	19.6	3.7	-	長石・石英・細繩	褐灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土下・中層	60%
385	須恵器	盃	[17.2]	5.5	-	長石・石英・雲母・ 未色粒子	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土下層	30% PL48
386	土罐器	盤	[20.7]	3.6	17.0	長石・石英・雲母・ 未色粒子	に赤い縞	普通	内面構造のハラ焼き、底部回転ヘラ削り後、 高台貼り付け	覆土下層	40% PL48
387	須恵器	盤	[20.4]	3.5	10.4	長石・石英・雲母・ 細繩	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	覆土中層	60%
388	土罐器	高盤	[17.6]	(3.0)	-	長石・石英・雲母・ 未色粒子	に赤い縞	普通	内部構造のハラ焼き、放射状の工具痕	覆土上層	10%
389	須恵器	円筒觀	[19.5]	(4.3)	-	長石・石英・ 白色粒子	黄灰	普通	側面凹面鏡、上位立管を水平やや斜めに貼り 付け、縫合に平行のナサミを入れた後、方形 状の透かし	覆土中層	30% PL49
390	須恵器	円筒觀	-	(3.7)	[16.7]	長石・石英・ 白色粒子	黄灰	普通	側面凹面鏡、通子状の透かし現存4ヶ所	覆土上層	5% PL49
391	土罐器	甕	19.0	(17.7)	-	長石・石英・雲母	に赤い縞	普通	外・内面ヘラナダ、内面工具痕	覆土下層	40%
392	須恵器	甕	[22.8]	(14.5)	-	長石・石英・雲母	に赤い縞	普通	体部構造の平行叩き、内面当て具痕	覆土中層	5%
393	須恵器	甕	[31.0]	(16.5)	-	長石・石英・雲母	灰	普通	外・内面ナダ	覆土中層	5%
394	土罐器	甕	[10.0]	(7.2)	-	長石・石英・雲母	明赤鉄	普通	体部下半横段のヘラ削り	床面・覆土 下層	10%
TP50	須恵器	甕	-	(9.2)	-	長石・石英	灰	普通	体部斜面の平行叩き	覆土中層	

番号	形種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M14	刀子	(5.7)	1.2	0.4	(5.7)	鉄	刃部・茎部欠損 刃部斜面三角形	覆土中層	PL54
M15	鍔	(5.7)	1.8	0.1	(7.9)	鉄	柄嵌着部欠損	覆土中層	PL54
M16	鍔	(7.7)	2.7	0.3	(15.5)	鉄	柄嵌着部欠損	覆土中層	PL54

番号	形種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M17	鍔輪車	4.3	0.2	0.5	(14.8)	鉄	鍔輪車輪 4.4cm 現存 輪轂断面円形	覆土中層	PL54

番号	形種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
T 11	平瓦	(12.3)	(6.8)	2.2	(149)	長石・石英・雲母	凹面布目痕 凸面長溝叩き	覆土下層	PL53
T 12	平瓦	(13.2)	(14.6)	2.3	(351)	長石・石英・雲母	凹面布目痕 凸面長溝叩き	床面	PL53
T 13	平瓦	(21.2)	(13.6)	2.0	(704)	長石・石英	凹面布目痕 凸面長溝叩き	床面	PL53
T 14	丸瓦	(17.4)	(12.4)	2.0	(327)	長石・石英	凹面布目痕 残す切り 凸面ナダ	床面・覆土 中・上層	PL53

第 45 号住居跡（第 158 ~ 160 図）

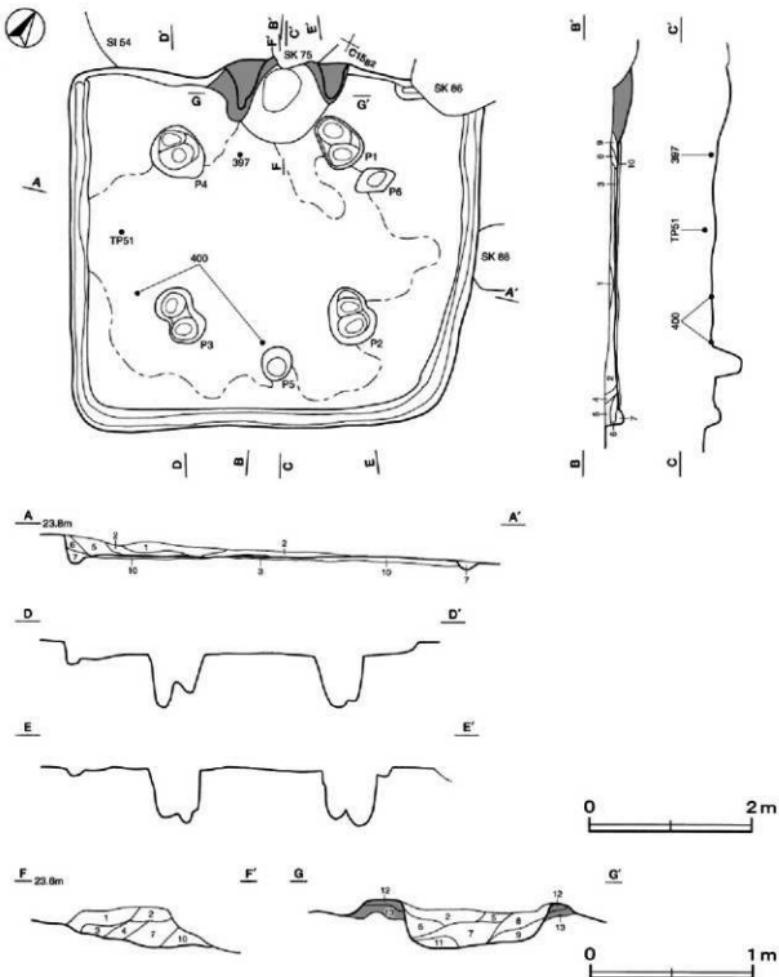
位置 3 区東部の C 15g1 区、標高 23.5 m の河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第 54 号住居跡、第 88 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 5.05 m、短軸 4.40 m の長方形で、主軸方向は N - 28° - W である。壁高は 6 ~ 25 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床はロームブロックを含んだ第 10 層を埋めて構築されている。北西壁を除いて、壁下には壁溝が巡っている。

竈 北西壁のほぼ中央部に付設されている。規模は燃焼部幅 84 cm である。袖部は地山を掘り残し、上部にローム粒子や粘土粒子を含んだ第 12・13 層を積み上げて構築されている。火床部は床面から 20 cm ほんどおり、火床面は赤変硬化していない。煙道部は第 75 号土坑に掘り込まれているため確認できない。



第158図 第45号住居跡実測図

遺土層解説

- | | | | |
|----------|----------------------------|---------|------------------------------------|
| 1 黒褐色 | 燒土粒子少量、炭化物・ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量 | 7 黒褐色 | 燒土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量 |
| 2 暗赤褐色 | 燒土粒子中量、炭化物・粘土粒子・砂粒微量 | 8 暗褐色 | ローム粒子少量、燒土ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 黑褐色 | ローム粒子・燒土粒子少量、炭化物・粘土粒子・砂粒微量 | 9 黑褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、燒土粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 | 燒土粒子・粘土粒子・砂粒少量、炭化物・ローム粒子微量 | 10 暗褐色 | 燒土粒子少量、ロームブロック微量 |
| 5 にぶい赤褐色 | 燒土粒子・粘土粒子・砂粒少量 | 11 暗褐色 | ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量 | 12 黑褐色 | ローム粒子・燒土粒子・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量 |
| | | 13 暗赤褐色 | ローム粒子少量、燒土ブロック微量、粘土ブロック・炭化粒子・砂粒極微量 |

ピット 6か所。P 1～P 4は深さ48～66cmで、主柱穴である。P 1～P 4は、底面が2か所ずつ確認できることから、建て替えが行われたことが想定できる。P 5は深さ35cmで、南東壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと推定できる。P 1の東側に存在しているP 6は、性格不明である。

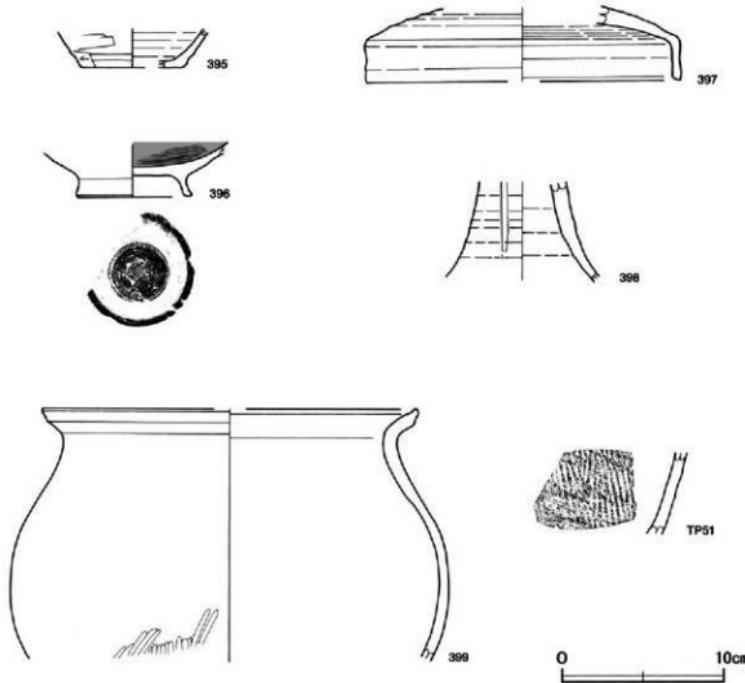
覆土 9層に分層できる。含有物がブロック主体であることから埋め戻されている。第10層は貼床の構築土である。

土層解説

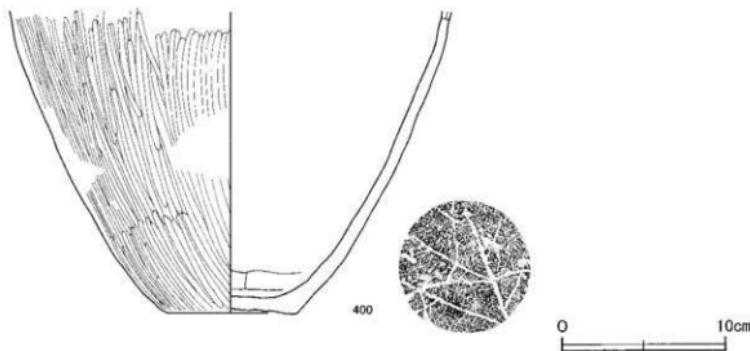
1 黒 葵 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	7 暗 色 ローム粒子中量
2 暗 暗 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	8 暗 褐 色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
3 暗 褐 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量	9 暗 褐 色 粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子・焼土粒子微量
4 暗 褐 色 ローム粒子少量、焼土粒子微量	10 暗 褐 色 ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量
5 褐 色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	
6 暗 褐 色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	

遺物出土状況 土師器片205点（坏16、高台付椀1、壺188）、須恵器片140点（坏56、皿1、蓋57、高盤1、壺25）、灰釉陶器片3点（瓶）、瓦片4点（平瓦）、銅製品1点（不明）のほか、混入した弥生土器片14点（壺）が出土している。400は南西部の床面、397は北部の覆土下層、TP51は西部の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。



第159図 第45号住居跡出土遺物実測図（1）



第160図 第45号住居跡出土遺物実測図(2)

第45号住居跡出土遺物観察表(第159・160図)

番号	種別	器種	口径	厚高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
395	須恵器	环	-	(2.4)	(6.2)	長石・石英	黄灰	普通	体部下端手持ちへラ削り 底部斜面へラ切り 瓢箪多方向のハラナデ	覆土中	5%
396	土師器	高台付椀	-	(3.2)	6.7	長石・石英・雲母	に赤い褐	普通	内を横腹のハラ削き 底部斜面へラ切り後 高台底付付け	覆土中	30%
397	須恵器	壺	(4.6)	[19.4]	-	長石・石英	灰	普通	クロロナデ	覆土下層	20%
398	須恵器	高盤	-	(6.0)	-	長石・石英	黄灰	普通	クロロナデ 脚部造小し孔	覆土中	5%
399	土師器	甕	[23.0]	(15.4)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 外面へラ削き	覆土中	20%
400	土師器	甕	-	(18.4)	7.8	長石・石英・雲母	褐	普通	外端へラ削き 内面下端へラ削り 底部木葉	表面	30%
TT51	須恵器	甕	-	(5.0)	-	長石・石英・細纈	黄灰	普通	体部横腹の平行叩き 下端へラ削り 内面ナデ	覆土上層	

第48号住居跡(第161図)

位置 3区中央部のC 14i7区、標高24.0mの河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第49号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南部が調査区域外へ延びており、東西軸は5.55mで、南北軸は1.32mしか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定できるが、主軸方向は不明である。壁高は50cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、壁際を除いて踏み固められている。北壁付近の覆土下層から長さ20cmほどで、厚みが4cmの角材と丸材の炭化材が出土している。

覆土 10層に分層できる。不自然な堆積状況であることから埋め戻されている。

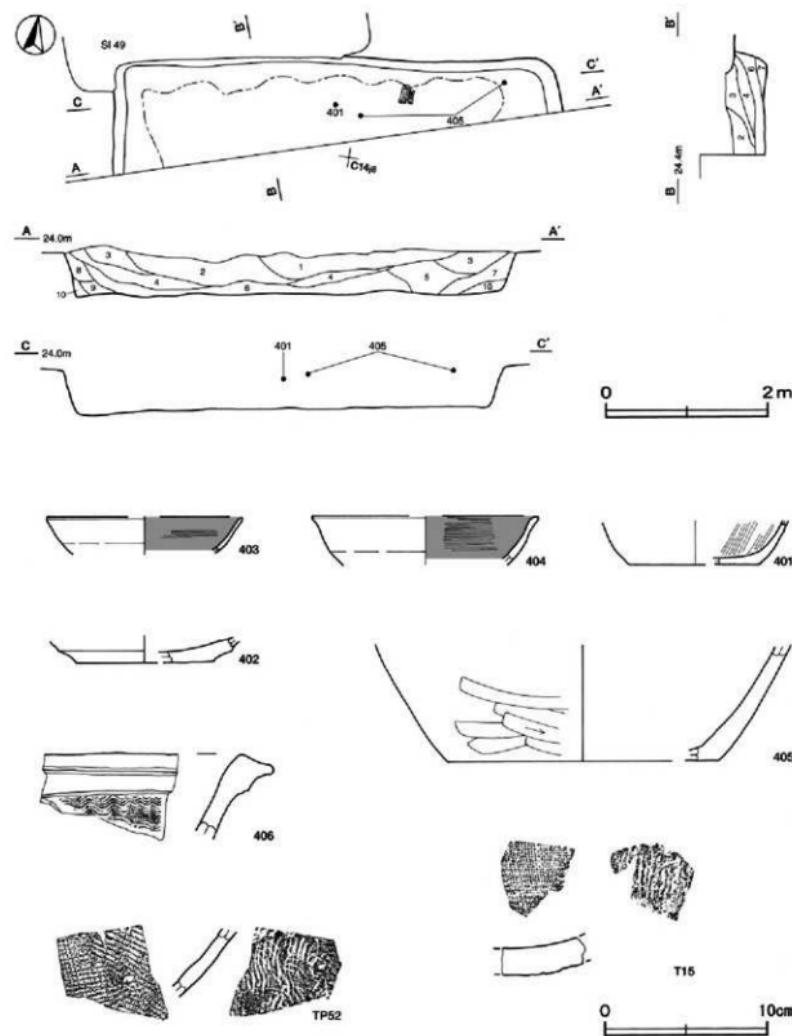
土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・炭化物・燒土粒子微量	6 噴褐色	ロームブロック・燒土ブロック・炭化物微量
2 暗褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量	7 噴褐色	ロームブロック微量
3 黒褐色	ロームブロック微量	8 噴褐色	ローム粒子少量
4 黑褐色	ロームブロック・燒土粒子微量	9 黑褐色	ロームブロック・炭化物微量
5 暗褐色	ロームブロック微量、燒土ブロック・炭化物微量	10 褐色	ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片104点(环17, 高台付椀2, 高坏1, 壺類84), 須恵器片25点(环2, 高台付坏2, 盖2, 壺2, 鉢17), 瓦1点(平瓦)のほか, 混入した繩文土器片107点(深鉢), 弥生土器片2点(壺)が

出土している。401は北壁際の覆土上層、405は北壁際と北東コーナー部付近の覆土上層からそれぞれ出土した破片が接合している。402～404・406・TP52・T 15は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉に比定できる。炭化材は北壁のほかに出土していないことから、埋め戻しの際に混入したものとみられる。



第161図 第48号住居跡・出土遺物実測図

第48号住居跡出土遺物観察表（第161図）

番号	種 別	器 様	口 径	晋 高	底 径	胎 土	色 調	焼 成	手 法 の 対 数 は か	出土位置	備 考
401	土師器	环	-	(2.7)	[8.6]	長石・石英	褐	普通	内面縦位の細いヘラ削き	覆土上層	40%
402	土師器	环	-	(1.6)	[8.6]	長石・石英・ 赤色粒子	褐	普通	クロコナデ	覆土中	5%
403	土師器	环	D2.0	(2.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	内面横位のヘラ削き	覆土中	5%
404	土師器	环	D3.8	(3.1)	-	長石・石英・雲母	褐	普通	内面横位のヘラ削き	覆土中	5%
405	土師器	鉢	-	(2.7)	[8.0]	長石・石英・雲母・ 黒色粒子	灰	普通	体部半斜傾の平行叩き 下端横位のヘラ削 り	覆土上層	10%
406	土師器	鉢	-	(5.2)	-	長石・石英	灰	普通	頭部5枚の櫛目叩き 内面同心円状の当て真 似	覆土中	5%
TP52	土師器	鉢	-	(4.2)	-	長石・石英	灰	普通	体部格子目次の叩き 内面同心円状の当て真 似	覆土中	PL52

番号	種 別	長 S	幅	厚 さ	重 量	胎 土	色 調	焼 成	手 法 の 対 数	出土位置	備 考
T 15	平瓦	(5.2)	(5.4)	17	(45.3)	長石・石英	黄灰	普通	門面毎日直 口面へラ削り	覆土中	PL53

第49号住居跡（第162～164図）

位置 3区中央部のC 1417区、標高24.0mの河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第48号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.86m、短軸3.77mの方形で、主軸方向はN-80°-Eである。壁高は17～20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦な貼床で、中央より南側は、壁際を除いて踏み固められている。貼床はロームブロックを含む第19層を埋めて構築されている。中央から北壁下にかけての幅3.4mは、南半部の床面より16cmほど高く、ベット状を呈している。南壁を除いて壁下には塗溝が巡っている。

竈 東壁の中央より南側に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで82cmで、燃焼部幅は38cmである。袖部は右袖部に土師質土器釜、左袖部に土師器甕を補強材とし、埋設して構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に66cm掘り込まれ、緩やかに立ち上がりがある。

竈土層解説

1	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量	7	暗褐色	ローム粒子・砂粒少量、粘土ブロック・炭化粒子微量
2	にぶい赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量	8	褐色	焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量
3	暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量、ロームブロック微量	9	褐色	ローム粒子少量、焼土粒子極微量
4	暗赤褐色	炭化粒子中量、焼土粒子少量、ローム粒子・砂粒微量	10	褐色	ローム粒子微量、焼土粒子微量
5	暗褐色	粘土粒子少量、ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量	11	褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
6	にぶい青褐色	砂粒多量、粘土粒子中量、ローム粒子少量、燒土粒子微量	12	灰褐色	ローム粒子微量、焼土粒子・炭化粒子極微量
			13	褐色	ロームブロック微量

ピット 3か所。P 1・P 2は深さ10cm・18cmで、主柱穴と考えられる。P 3は深さ10cmで、西壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと推定できる。

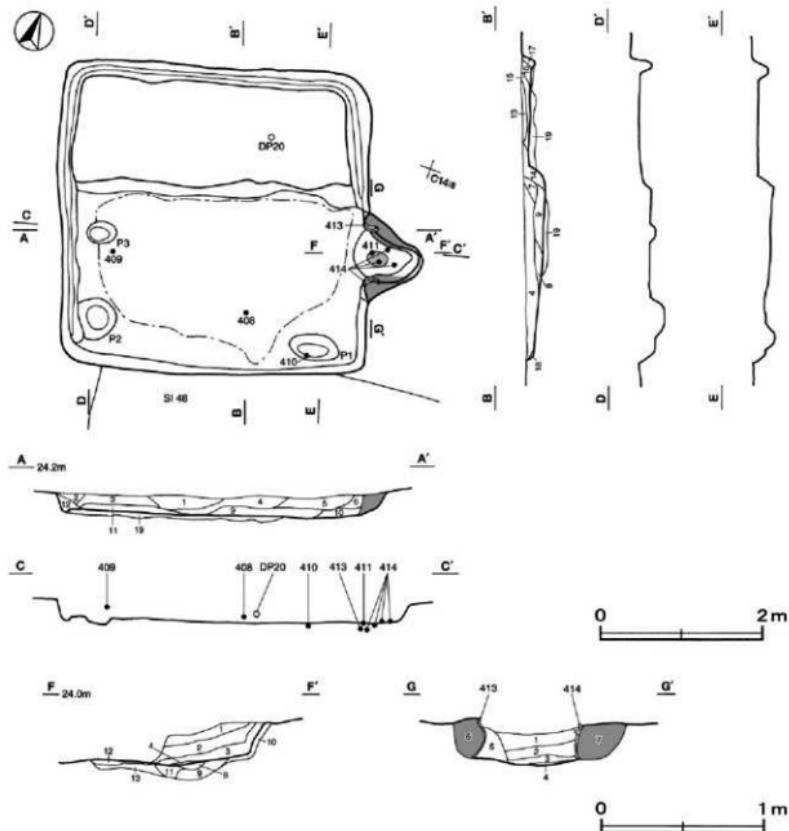
覆土 18層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。第19層は貼床の構築土である。

土層解説

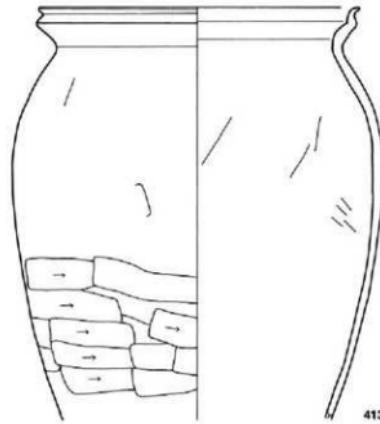
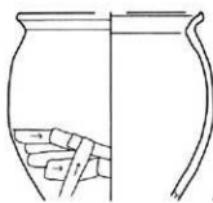
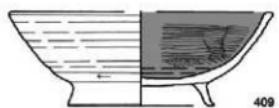
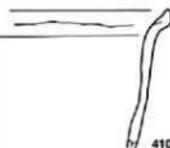
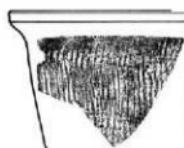
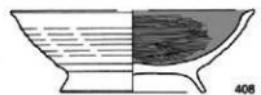
1	褐色	ローム粒子中量	10	褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量
2	褐色	ローム粒子少量	11	暗褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3	褐色	ロームブロック少量	12	褐色	粘土粒子少量、ロームブロック微量
4	暗褐色	炭化粒子中量、ローム粒子少量	13	褐色	ローム粒子少量
5	暗褐色	ロームブロック・砂粒中量、粘土ブロック微量	14	褐色	ロームブロック微量、焼土粒子微量
6	灰褐色	粘土粒子少量、ローム粒子微量	15	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
7	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	16	褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
8	黒褐色	炭化粒子・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	17	褐色	ロームブロック微量
9	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	18	褐色	ローム粒子多量
			19	暗褐色	ロームブロック微量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 383 点（坏 52, 高台付坏 15, 高台付坏 1, 壺 315）, 須恵器片 104 点（坏 42, 高台付坏 5, 高盤 3, 瓶 1, 鉢 35, 壺 18）, 土師質土器片 1 点（羽釜）, 鉄製品 1 点（不明）のほか, 流れ込んだ縄文土器片 15 点（深鉢）, 混入した陶器片 4 点（常滑壺 2, 濑戸美濃燈明皿 1, 濑戸美濃壺 1）が出土している。また, 貼床の構築土内から縄文土器片 5 点（深鉢）, 弥生土器片 2 点（壺）, 土師器片 55 点（坏 26, 鉢 29）, 須恵器片 34 点（坏 14, 高台付坏 5, 鉢 15）, 土製品 1 点（球状土錐）, 平瓦 1 点が出土している。413 は左袖の基部, 414 は右袖の基部から正位で据えられた状態で出土しており, 空袖強材として使用されたものである。411 は竈の覆土下層, 410 は P 1 の覆土上層, 408 は南部の覆土下層, 409 は西部の覆土中層, DP20 は北部の貼床構築土内からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から 9 世紀後葉に比定できる。

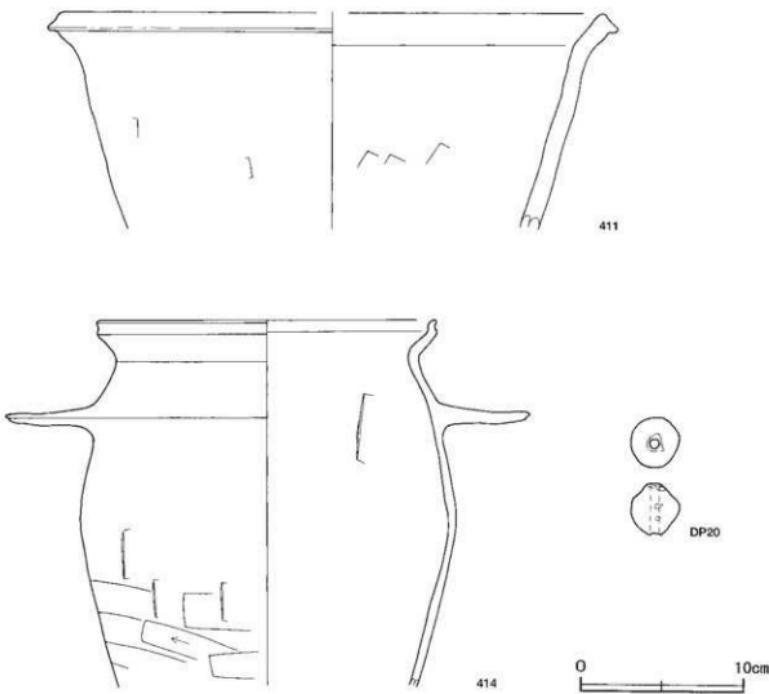


第 162 図 第 49 号住居跡実測図



0 10cm

第163図 第49号住居跡出土遺物実測図(1)



第 164 図 第 49 号住居跡出土遺物実測図（2）

第 49 号住居跡出土遺物観察表（第 163・164 図）

番号	種別	器種	口径	器高	裏様	胎土	色調	地皮	手法の特徴ほか	出土位置	備考
407	埴輪器	环	-	(3.0)	(7.2)	長石・石英・雲母	にふい黄橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部多方凹のヘラ削り	覆土中	5%
408	土師器	高台付杯	[15.0]	5.0	9.0	長石・石英・雲母	橙	普通	内面縁位のヘラ削き 底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	覆土下層	49%
409	土師器	高台付楕	[16.2]	5.8	9.0	長石・石英・雲母	にふい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 内面縁位のヘラ削き 滲痕跡跡へア削り後、高台貼り付け	覆土中層	49% PL47
410	埴輪器	鉢	[21.8]	(8.5)	-	長石・石英・雲母	にふい黄橙	普通	体部縁位の平行叩き 内面ヘラナデ	P1 覆土上層	5%
411	埴輪器	鉢	[33.4]	(13.4)	-	長石・石英・雲母	にふい橙	普通	外・内面ナデ	覆土下層	5%
412	土師器	甌	[11.2]	(11.6)	-	長石・石英・雲母	にふい赤褐色	普通	体部下半横位のヘラ削り	覆土中	30%
413	土師器	甌	19.4	(25.5)	-	長石・石英・雲母	にふい橙	普通	体部下端横位のヘラ削り 内面ヘラナデ	籠左袖基部	50% PL49
414	土師質土器	羽釜	20.6	(22.5)	-	長石・石英・雲母	にふい橙	普通	体部下端横位のヘラ削り 内面ヘラナデ	籠右袖基部	49% PL50

番号	種別	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP20	球状土球	2.9	3.1	0.6	26.8	土（長石・雲母）	ナデ 一方向から穿孔	覆土下層	PL54

第 51 号住居跡（第 165 図）

位置 3 区中央部の C 14/6 区、標高 24.0 m の河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第58・59・60号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南部が調査区域外へ延びているため、東西軸は3.72mで、南北軸は0.88mしか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定でき、主軸方向はN-22°Wである。壁高は12cmで、外傾して立ち上がっている。

床 確認できた範囲はほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁のはば中央部に付設されている。焚口部南部が第59号土坑に掘り込まれているため、確認できた燃焼部から煙道部までの長さは44cm、燃焼部幅50cmである。左袖部は地山を三角状に掘り残し、基部としている。火床部は、床面を15cm掘り込んでおり、火床面は赤変硬化していない。煙道部は壁外に38cm掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

遺土層解説

1	極暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化物・粘土粒子・砂粒微量	5	暗赤褐色	焼土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
2	暗赤褐色	焼土粒子微量	6	暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
3	暗赤褐色	焼土粒子微量	7	暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子少量（3層より締まり強）
4	にい赤褐色	焼土粒子中量、粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量	8	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

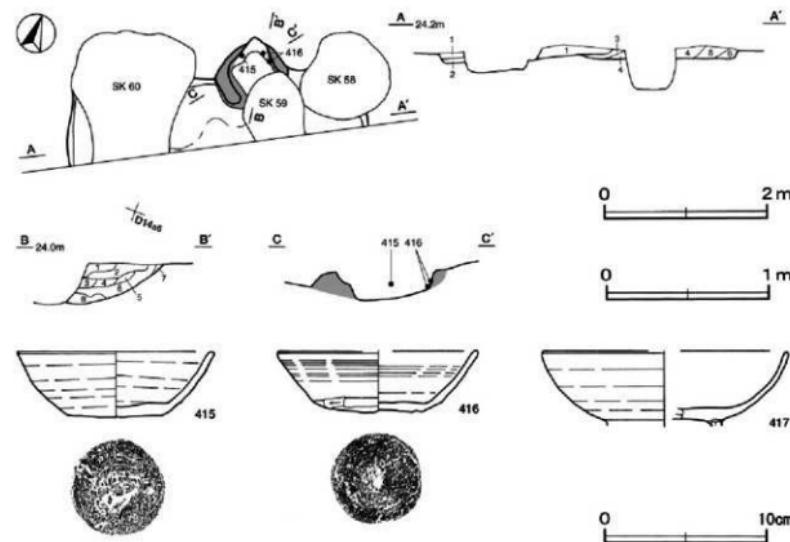
覆土 6層に分層できる。含有物がブロック主体であることから埋め戻されている。

土層解説

1	褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	4	暗褐色	ローム粒子少量
2	褐色	ロームブロック中量	5	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
3	褐色	粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子・焼土粒子微量	6	褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片27点（环1、高台付碗1、甕25）、須恵器片13点（环3、皿1、盤2、甕7）が出土している。415・416は竈煙道部上から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。



第165図 第51号住居跡・出土遺物実測図

第51号住居跡出土遺物観察表（第165図）

番号	種別	器種	口径	壁高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
415	頭窓器	环	11.9	4.0	5.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	に赤い粒	不良	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	龍燈道部上	100% PL46
416	頭窓器	环	[12.1]	3.7	5.8	長石・石英	無	不良	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	龍燈道部上	66% PL46
417	土師器	高台付碗	[15.0]	4.5	-	長石・石英・赤色粒子	無	普通	ロクロナデ 高台凧引付け	覆土中	30%

第52号住居跡（第166・167図）

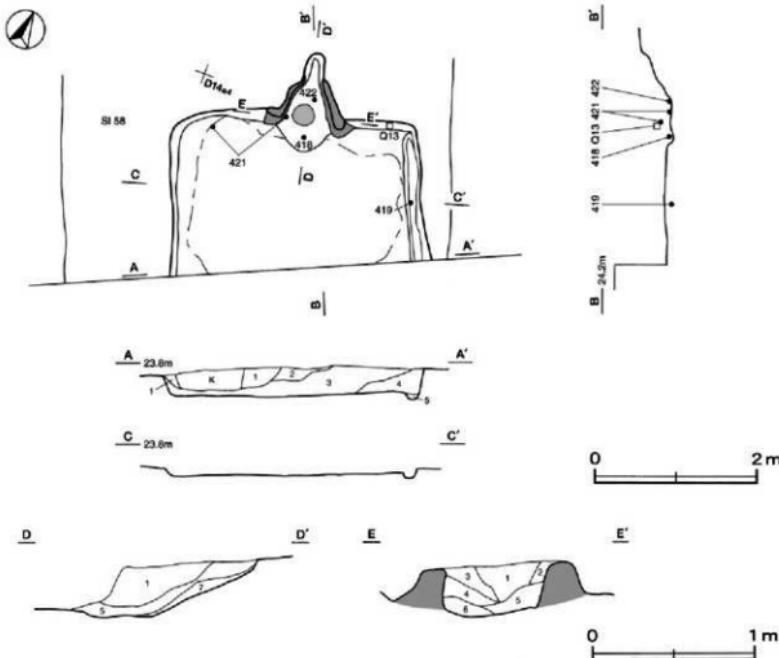
位置 3区中央部のD 14a4区、標高 23.5m の河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第58号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南部が調査区域外へ延びているため、東西軸は3.10mで、南北軸は2.01mしか確認できなかつた。平面形は方形あるいは長方形と推定でき、主軸方向はN - 21° - Wである。壁高は5~26cmで、外傾して立ち上がつてゐる。

床 平坦で、壁際を除いて踏み固められている。東壁下には壁溝が巡つてゐる。

竈 北壁のほばは中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで122cmで、燃焼部幅は50cmである。袖部は地山を掘り残し、基部としている。火床部は、床面を5cm掘り込んでおり、火床面は火を受けて赤変硬化化している。煙道部は壁外に76cm掘り込まれ、緩やかに立ち上がつてゐる。



第166図 第52号住居跡実測図

竪土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物・粘土粒子・砂粒微量
- 2 にぶい黄褐色 烧土ブロック・ローム粒子・砂粒微量
- 3 暗褐色 焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量、ローム粒子微量
- 4 黒褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・粘土粒子微量
- 5 黒褐色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒微量
- 6 暗赤褐色 烧土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック・砂質粘土粒子微量
- 7 にぶい赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化物・粘土粒子・砂粒微量

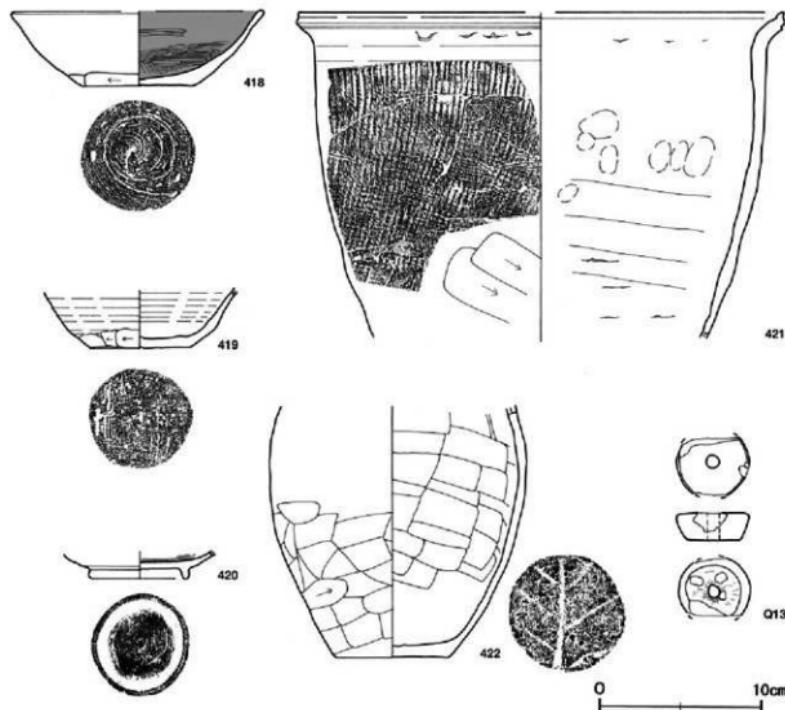
覆土 5層に分層できる。ブロック状の堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
- 4 暗褐色 炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量
- 5 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土器器片 229点（坏51、高台付坏2、甕175、瓶1）、須恵器器片 92点（坏32、盤1、鉢1、甕3、甕55）。石製品1点（紡錘車）のほか、混入した繩文土器片2点（深鉢）、陶器片3点（甕）、磁器片2点（甕）が出土している。422は甕の火床部から逆位の状態で出土しており、支脚に使用されたものと考えられる。419は東壁下の壁溝底面、418は焚口部の覆土下層、Q13は北壁際の覆土中層からそれぞれ出土している。421は火床部底面、北部の覆土下層からそれぞれ出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。



第167図 第52号住居跡出土遺物実測図

第52号住居跡出土遺物観察表（第167図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
418	土罐器	环	口5.3	4.6	6.7	長石・石英・漂母・半色粒子	に赤い橙	普通	底部下端手持ちへラ削り 内面ヘラ磨き 施	焼口部覆土	70%
419	單壁器	环	-	(3.6)	6.1	長石・石英・漂母	灰黄	普通	底部下端手持ちへラ削り 底部一方削り	下層	75.46
420	土罐器	高台付环	-	(1.7)	6.0	長石・石英・漂母・半色粒子・白色針状物	に赤い黄橙	普通	底部下端手持ちへラ削り 内面側面のヘラ磨き 施	燒溝底面	40%
421	單壁器	环	[29.6]	(20.0)	-	長石・石英・漂母	に赤い橙	不良	底部下端手持ちへラ削り 施	覆土中	20%
422	土罐器	束	-	(15.5)	6.8	長石・石英	橙	普通	底部下端手持ちへラ削り 内面ヘラ削り 施	燒火床	20%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 13	結晶車	4.5	1.7	0.8	(47.8)	燧灰岩	全面研磨 下面に羅列文 一方向から穿孔	覆土中層	PL54

第53号住居跡（第168・169図）

位置 3区中央部のD 14a3区、標高 23.5 m の河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第58号住居跡を掘り込み、第100号土坑に掘り込まれている。

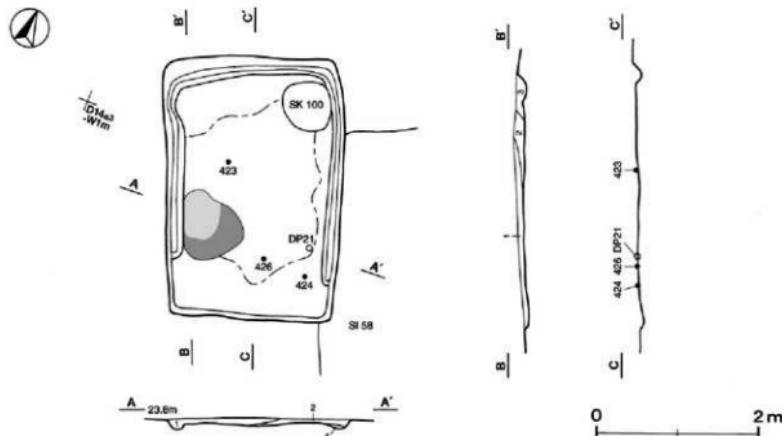
規模と形状 長軸 32.5 m、短軸 22.2 m の長方形で、主軸方向は N - 20° - W である。壁高は 4 ~ 10 cm で、外傾して立ち上がりっている。

床 平坦で、壁際を除いて踏み固められている。西壁際の中央部付近は赤色硬化しており、周辺には砂粒を含んだ粘土粒子を確認した。南壁を除いた壁下には壁溝が巡っている。

覆土 4層に分層できる。含有物がブロック主体であることから埋め戻されている。

土層解説

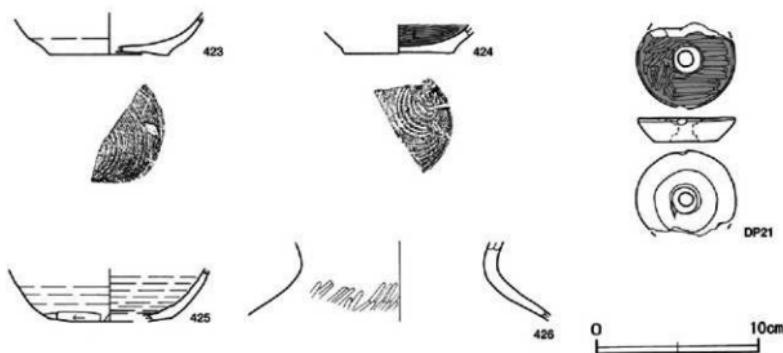
- | | |
|---------------------------------|-----------------------------|
| 1 細 色 ロームブロック少量、燒土ブロック・炭化物・砂粒微量 | 3 細 暗 色 ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 細 暗 色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 4 細 暗 色 ロームブロック中量 |



第168図 第53号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片 140 点（坏 35, 壺 105）, 須恵器片 45 点（坏 17, 蓋 3, 瓶 3, 壺 22）, 灰釉陶器片 2 点（瓶）, 土製品 1 点（紡錘車）のほか, 混入した繩文土器片 2 点（深鉢）が出土している。423 は中央部, 426 は南部の床面, 424・DP21 は南東コーナー部付近の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 10 世紀前葉に比定できる。



第 169 図 第 53 号住居跡出土遺物実測図

第 53 号住居跡出土遺物観察表（第 169 図）

番号	種別	器種	口径	厚高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
423	土師器	坏	-	(2.6)	[7.2]	長石・石英・赤色粒子	に赤い程	普通	外・内面ロクロナナデ 底部回転糸切り	床面	5%
424	土師器	坏	-	(1.8)	6.7	長石・石英・雲母	明褐色	普通	内面横旋のヘラ削き 底部回転糸切り	覆土下層	10%
425	須恵器	坏	-	(3.2)	[7.6]	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰黄	不良	底部下端手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ切り後、一方四面ヘラ削り	覆土中	10%
426	土師器	壺	-	(4.9)	-	長石・石英・雲母	白	普通	底部外・内面横ナナデ 外面ヘラ削き	床面	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	底径	胎土	特徴	出土位置	備考
DP21	紡錘車	6.0	1.5	0.9	(50.2)	長石・石英・雲母・赤色粒子・細繊	上面ヘラ削き 二方向から段状に穿孔	覆土下層	PL54

第 56 号住居跡（第 170 図）

位置 3 区東部の C 14g0 区、標高 23.5 m の河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第 9 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 東部が第 9 号溝に掘り込まれているため、南北軸は 3.76 m で、東西軸は 2.54 m しか確認できなかった。平面形は方形と推定でき、主軸方向は N - 18° - W である。壁高は 12 ~ 20 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 確認できた範囲はほぼ平坦で、壁際を除いて踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 90 cm で、燃焼部幅は 56 cm である。袖部は地山を掘り残し、基部としている。火床部は、床面を 8 cm 掘り込んでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 48 cm 掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

竪土層解説

- | | | | |
|----------|-----------------------------------|-------|-----------------------|
| 1 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土
粒子・砂粒微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |

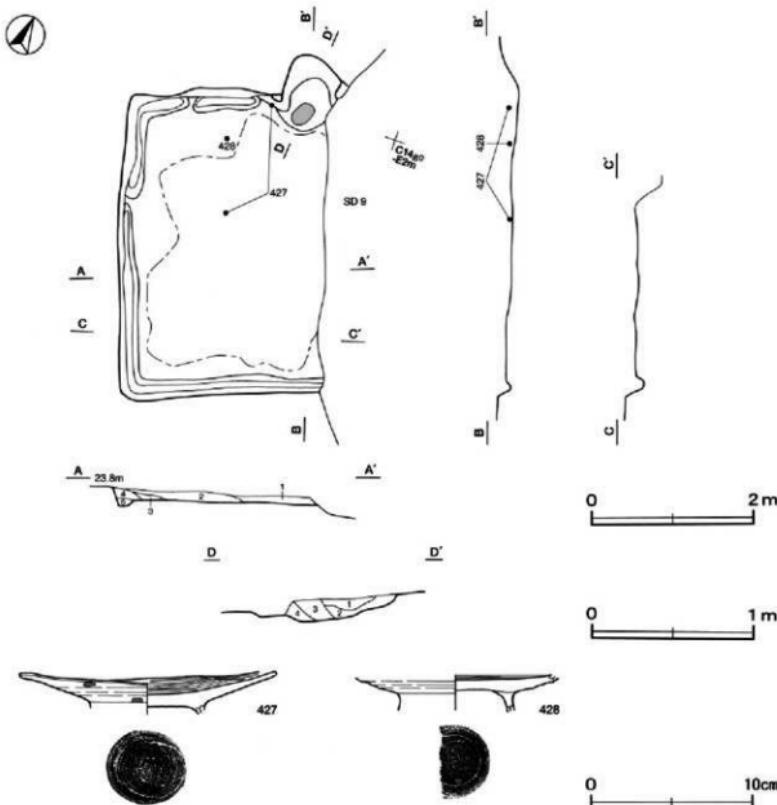
覆土 5層に分層できる。含有物がブロック主体であることから埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | 粘土ブロック・砂粒少量、ロームブロック・焼
土粒子・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック少量 |
| | | 5 暗褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片 49 点（坏 14、高台付皿 2、甕 33）、須恵器片 24 点（坏 10、蓋 1、甕 13）のほか、混入した縄文土器片 3 点（深鉢）が出土している。428 は北西部の覆土下層、427 は竪左袖部付近の覆土中層、中央部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀後半に比定できる。



第 170 図 第 56 号住居跡・出土遺物実測図

第 56 号住居跡出土遺物観察表（第 170 図）

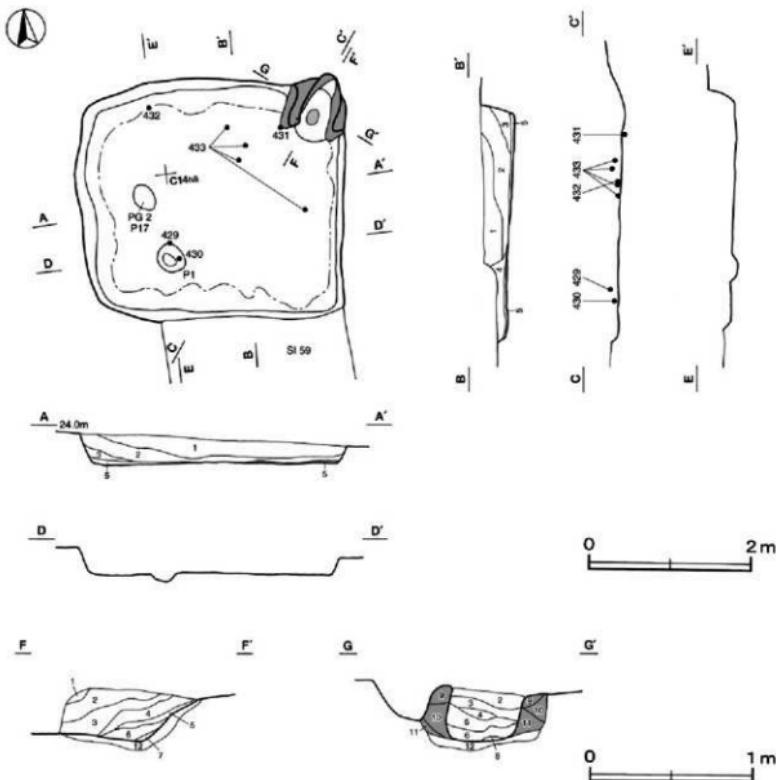
番号	種 別	器 様	口 径	器 高	底 径	胎 土	色 調	焼 成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
427	土罐器	高台付皿	157	(26)	-	長石・石英	褐	普通	内面ヘラ削き 底部斜面ヘラ切り後、高台貼り付け	覆土下・中層	90%
428	土罐器	高台付皿	-	(2.2)	-	長石・石英	明赤褐	普通	内面擦痕のヘラ削き 底部斜面ヘラ切り後、高台貼り付け	覆土下層	20%

第 57 号住居跡（第 171 ~ 173 図）

位置 3 区中央部の C 14h8 区、標高 24.0 m の河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第 59 号住居・第 2 号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.30 m、短軸 2.95 m の長方形で、主軸方向は N - 35° - E である。壁高は 18 ~ 33 cm で、外傾して立ち上がっている。



第 171 図 第 57 号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、壁際を除いて踏み固められている。

竈 北東コーナー部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 84cm で、燃焼部幅は 34cm である。袖部は、ローム粒子や粘土ブロックを含んだ第 9 ~ 11 層を積み上げて構築されている。火床部は、床面を 4cm 剥り込んで、ローム粒子を多量に含んだ第 12 層を埋めて構築されている。火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 20cm 剥り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

遺土層解説

1	にい青褐色	砂粒中量、粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量	6	暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量
2	にい青褐色	砂粒中量、ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量	7	暗赤褐色	焼土粒子少量、ロームブロック・粘土ブロック・炭化物微量
3	にい赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量	8	赤褐色	焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子微量
4	にい赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量、粘土ブロック・ローム粒子微量	9	褐色	焼土ブロック・炭化粒子微量
5	暗赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子・砂粒少量	10	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
			11	褐色	ローム粒子少量、粘土ブロック・焼土粒子微量
			12	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量

ピット 深さ 8cm で、性格不明である。

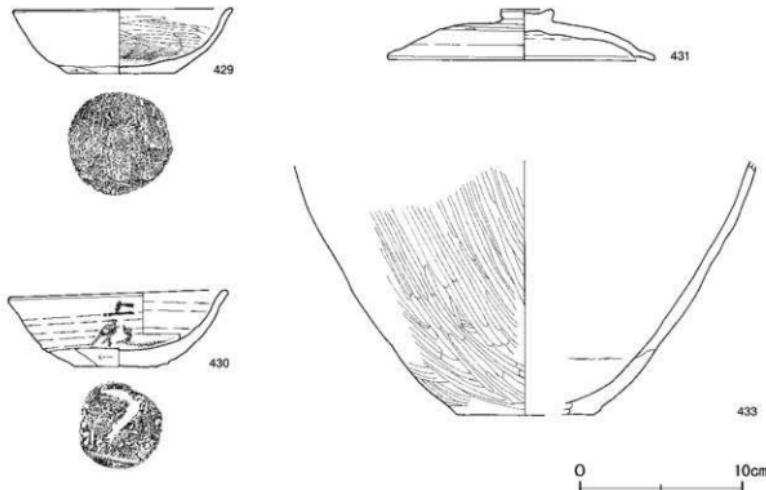
覆土 5 層に分層できる。含有物がブロック主体であることから埋め戻されている。

土層解説

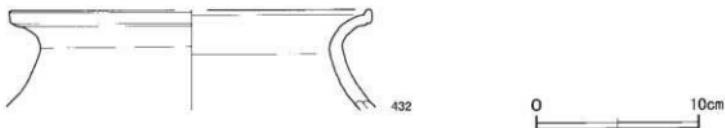
1	黒褐色	ロームブロック少量	4	褐色	ローム粒子中量
2	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	5	黒褐色	ローム粒子少量
3	暗褐色	ローム粒子微量			

遺物出土状況 土師器片 168 点（坏 52、高台付坏 1、甕 115）、須恵器片 63 点（坏 21、盤 3、蓋 8、甕 30、瓶 1）、陶器片 1 点（鉢）のほか、混入した繩文土器片 47 点（深鉢）が出土している。431 は竈の左袖基部下、430 は南部、429 は北部の覆土下層、429 は南部覆土中層からそれぞれ出土している。433 は北東部の覆土中層から下層にかけて出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀中葉に比定できる。



第 172 図 第 57 号住居跡出土遺物実測図 (1)



第 173 図 第 57 号住居跡出土遺物実測図 (2)

第 57 号住居跡出土遺物観察表 (第 172・173 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
429	土師器	杯	13.3	4.0	6.5	長石・石英・雲母	褐	普通	体側下端手持ちハラ削り 内面ヘラ削き 底部一方向のヘタ削り	覆土上層	100% PL46
430	須恵器	杯	13.3	4.7	5.4	長石・石英・雲母・水色粒子	に赤い褐	不良	体側下端手持ちハラ削り 底部一方向のヘタ削り 体側に黒漆「上絵」	覆土下層	100% PL47-51
431	須恵器	蓋	16.4	3.1	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	瓦井部削板ヘタ削り	覆土中層	70% PL48
432	土師器	甕	-	[22.1]	(6.0)	長石・石英・雲母・水色粒子	に赤い褐	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土下層	5%
433	土師器	甕	-	(15.5)	[8.3]	長石・石英・雲母・水色粒子	に赤い黄褐	普通	外側ヘラ削き 底部木葉痕	覆土下・中層	20%

第 59 号住居跡 (第 174 図)

位置 3 区中央部の C 14h8 区、標高 24.0 m の河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第 57 号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 252 m、短軸 222 m の長方形で、主軸方向は N - 3° - W である。壁高は 13 ~ 20 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。東壁際中央部と南東部の床面の一部が赤変硬化している。

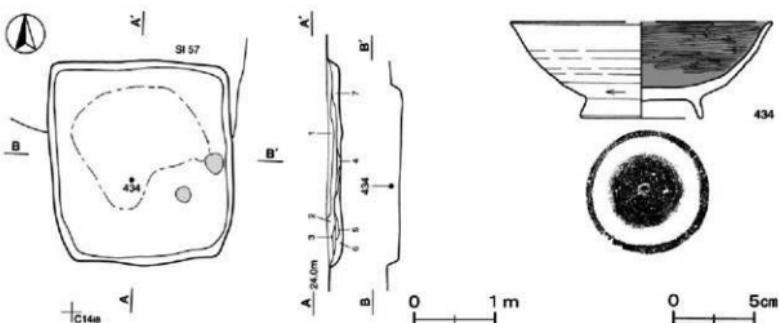
覆土 7 層に分層できる。含有物がブロック主体であることから埋め戻されている。

土層解説

1	黒	褐	色	ロームブロック・焼土粒子極微量	5	に赤い黄褐色	ロームブロック少量	
2	暗	褐	色	ローム粒子少量	6	褐	色	ローム粒子中量
3	暗	褐	色	ロームブロック少量	7	褐	色	ロームブロック中量
4	暗	褐	色	ロームブロック微量				

遺物出土状況 土師器片 39 点 (环 15、高台付坏 1、甕 23)、須恵器片 19 点 (环 8、盤 1、蓋 2、甕 8) が出土している。434 は中央部の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀末葉に比定できる。



第 174 図 第 59 号住居跡・出土遺物実測図

第 59 号住居跡出土遺物観察表（第 174 図）

番号	種 別	器 様	口 径	器 高	底 径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
434	土罐器	高台付环	口15.8	5.9	7.5	長石・石英・雲母	に赤い擦	普通	体基下部回転ヘラ削り 内面横筋のヘラ削き 底部回転ヘラ切り鉈 高台粘土付け	覆土中層	40%

第 60 号住居跡（第 175・176 図）

位置 3 区西部の D 13b0 区、標高 23.5 m の河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第 69・70 号住居跡を掘り込んでいる。

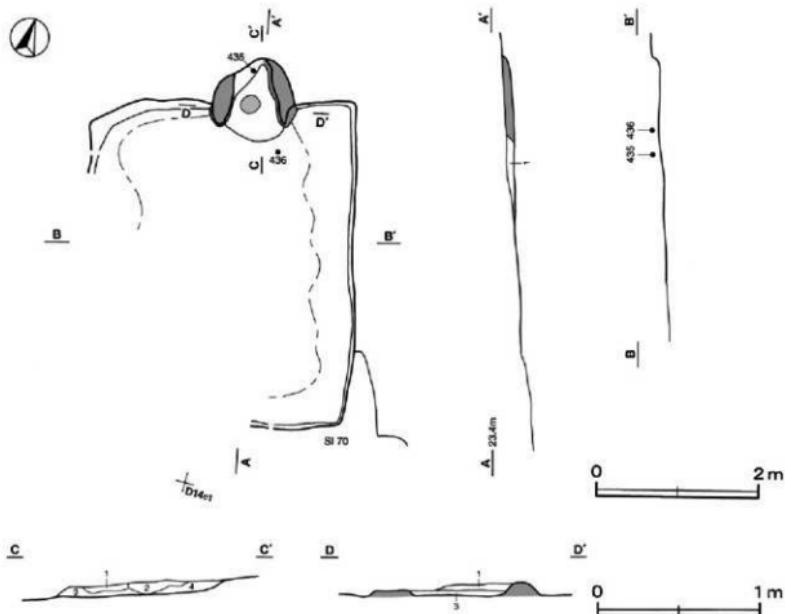
規模と形状 南・西壁の大半は削平を受けしており、床が露出した状態で確認した。南北軸 398 m、東西軸 3.19 m の長方形で、主軸方向は N - 9° - W である。壁高は 7 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 確認できた範囲はほぼ平坦で、壁際を除いて踏み固められている。

竈 北壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 95 cm で、燃焼部幅は 64 cm である。火床部は、床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 52 cm 掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|---|------------------------------------|---|-----------------------------------|
| 1 | 褐 色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量。焼土ブロック・炭化粒子微量 | 3 | 褐 色 焼土粒子・炭化粒子少量。ロームブロック・粘土粒子・砂粒微量 |
| 2 | 褐暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量。炭化物微量 | 4 | に赤い褐色 焼土粒子少量。炭化物・ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量 |



第 175 図 第 60 号住居跡実測図

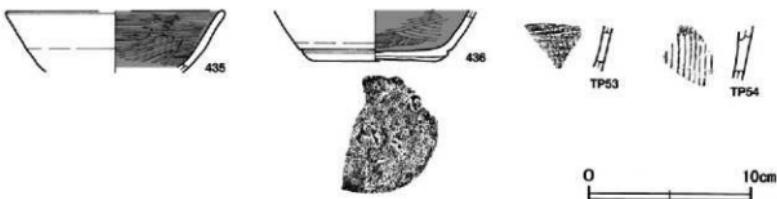
覆土 単一層である。周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

1 級 色 ローム粒子中量、炭化物・焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片 187 点（坏 22、高台付坏 2、甕 163）、須恵器片 23 点（坏 7、盤 3、蓋 5、鉢 2、甕 6）、土師質土器片 1 点（羽釜）のほか、流れ込んだ縄文土器片 3 点（深鉢）が出土している。435 は竈煙道部の覆土中層、436 は竈右袖部付近の覆土中層、TP53・TP54 は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀後半に比定できる。



第 176 図 第 60 号住居跡出土遺物実測図

第 60 号住居跡出土遺物観察表（第 176 図）

番号	種 別	器 形	口 径	器 高	底 径	胎 土	色 调	焼 成	手 法 の 特 徴 ほ か	出 土 位 置	備 考
435	土師器	坏	[13.4]	(3.8)	-	長石・石英・漂母	明褐	普通	内面横位のウラ焼き	竈煙道部 覆土中層	20%
436	土師器	坏	-	(3.1)	[7.6]	長石・石英・漂母・ 鐵錆	にぶい赤褐色	普通	体部下端回転へラ切り 底部回転へラ切り	竈右袖部 覆土中層	20%
TP53	須恵器	鉢	-	(2.7)	-	長石・漂母	灰黄	普通	体部格子状の平行叩き 内面指捺痕	覆土中	
TP54	須恵器	鉢	-	(3.3)	-	長石	褐灰	普通	体部格子状の平行叩き	覆土中	

第 61 号住居跡（第 177・178 図）

位置 3 区西部の D 13a9 区、標高 23.0 m の河岸段丘上位の平坦部に位置している。

確認状況 竈とその周囲の覆土が一部遺存しているだけで、床面がほぼ露出した状態で確認した。

重複関係 第 69 号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南壁と西壁の一部が削平されているため、南北軸は 293 m で、東西軸は 250 m しか確認できなかつた。主軸方向は N - 20° - W である。壁高は 13 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 確認できた範囲はほぼ平坦で、出入り口部付近を除いて踏み固められている。

竈 北壁に付設されている。規模は、燃焼部幅 28 cm である。袖部は砂粒と粘土粒子を含んだ構築土を壁に貼り付けた痕跡がわずかに遺存していることだけを確認した。火床部は、床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は赤変硬化していない。煙道部は削平を受けており、確認できない。

竈土層解説

1 にふい赤褐色 粘土粒子・砂粒中量、燒土粒子少量、炭化粒子微量

3 暗褐色 黃土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量

2 黑褐色 炭化粒子微量

4 黑褐色 炭化物・ローム粒子・燒土粒子微量

ピット 深さ 33 cm で、南壁際の東側寄りに位置していることから、出入り口施設に伴うピットと推定できる。

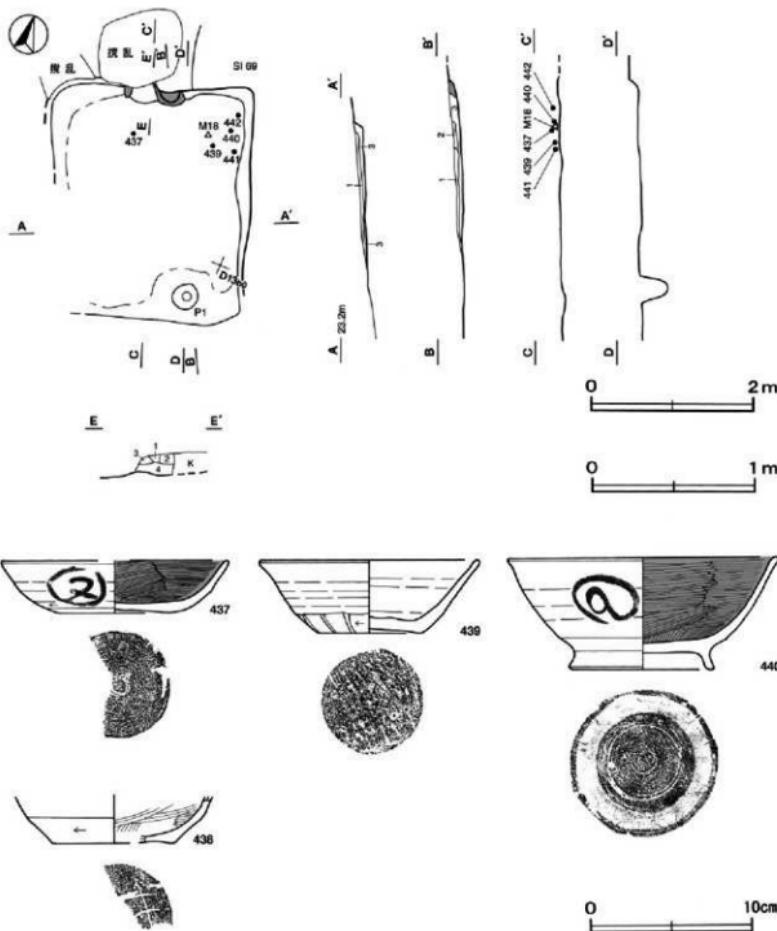
覆土 3 層に分層できる。含有物がブロック主体であることから埋め戻されている。

土層解説

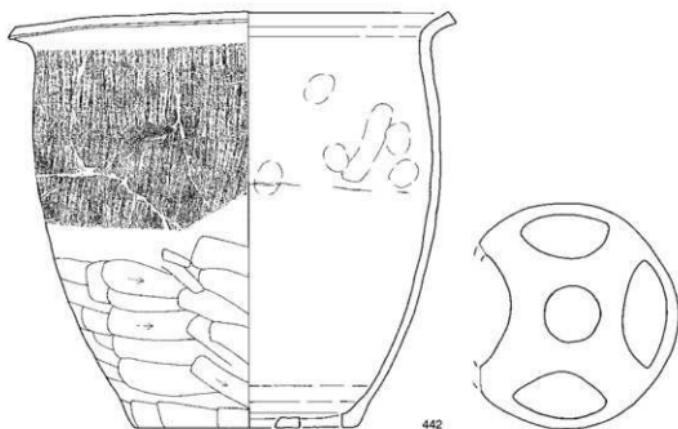
- 1 細 開 色 ローム粒子少量、炭化材・焼土ブロック微量
2 細 開 色 ロームブロック多量

遺物出土状況 士師器片 155 点（坏 44, 高台付坏 3, 壺 108）, 須恵器片 66 点（坏 20, 高台付坏 1, 盖 5, 盆 1, 壺 38, 瓶 1）, 金属製品 1 点（刀子）のほか、混入した縄文土器片 3 点（深鉢）が出土している。437 は北部, 439 ~ 442・M 18 は北東コーナー部付近の覆土下層, 438 は覆土中からそれぞれ出土している。

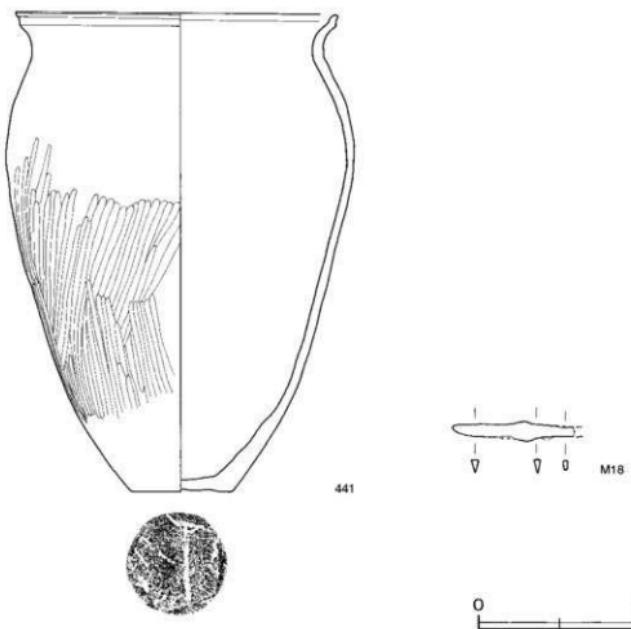
所見 時期は、出土土器から 9 世紀後葉に比定できる。



第 177 図 第 61 号住居跡・出土遺物実測図



442



441

第178図 第61号住居跡出土遺物実測図

第61号住居跡出土遺物観察表（第177・178図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
437	土師器	环	-	[13.8]	3.2	6.8	長石・石英・雲母 に赤い鉄粒	普通	体部下端回転へラ削り 内面ヘラ削き 底部 斜削へラ削り 体部に墨書き〔◎〕	覆土下層	50% PL47-51
438	土師器	环	-	(2.9)	[7.4]	長石・石英・雲母・ 針状鉄粒物	明赤褐	普通	体部下端回転へラ削り 内面横條のヘラ削き 底面一方向のヘラ削り 烟墨書き〔□〕	覆土中	5% PL51
439	土師器	环	13.3	4.5	6.3	長石・石英・雲母	灰黄	普通	底面へラ削り	覆土下層	100% PL46
440	土師器	高台付环	16.6	6.9	8.8	長石・石英・雲母	褐	普通	体部下端回転へラ削り 底面一方向のヘラ削り	覆土下層	90% PL47-51
441	土師器	壺	19.4	29.6	6.1	石英・雲母 に赤い鉄粒	普通	体部下端回転へラ削り	覆土下層	95% PL49	
442	土師器	瓶	26.9	25.6	13.6	長石・石英・雲母・ 针理	灰黄褐	不良	体部上半部分の平行削き 下半横筋のヘラ削り 内面鉛滑脂	覆土下層	80% PL49

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M18	万子	(7.5)	1.2	0.3	0.4	鐵	刃部・茎部欠損 刃部前面三角形	覆土下層	PL54

第62号住居跡（第179・180図）

位置 3区中央部のC 14h6区、標高24.0mの河岸段丘上位の平坦部に位置している。

確認状況 窯とその周囲の覆土が一部遺存しているだけで、床面がほぼ露出した状態で確認した。

重複関係 第47号住居跡を掘り込み、第9号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 床の大半が削平されているため、窯と窯周辺の床だけを確認した。南北軸150m、東西軸0.94mしか確認できなかった。主軸方向はN-70°-Eである。

床 窯前面の踏み固められた部分を除いて削平されている。

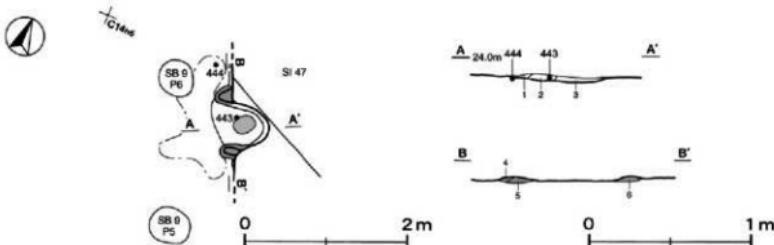
窯 東壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで64cmで、燃焼部幅は52cmである。袖部は、粘土粒子やローム粒子を含んだ第4～6層を積み上げて構築されている。火床部は、床面を6cm掘り込んでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に42cm掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

窯土層解説

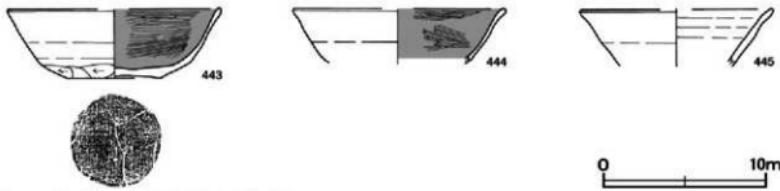
- | | | | |
|---------|----------------------------|-------|--------------------------|
| 1 灰褐色 | 砂粒中量。ローム粒子少量。炭化粒子・粘土粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量。粘土粒子微量 |
| 2 に赤い鉄粒 | ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量。燒土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 3 赤褐色 | 燒土粒子中量。ロームブロック少量。炭化粒子・砂粒微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量。燒土粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片16点（环13、高环1、壺2）、須恵器片4点（环1、盤1、蓋2）のほか、縄文土器片2点（深鉢）が出土している。444は窯左袖部付近の床面、443は窯火床部の覆土下層、445は窯の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後半に比定できる。



第179図 第62号住居跡実測図



第 180 図 第 62 号住居跡出土遺物実測図

第 62 号住居跡出土遺物観察表（第 180 図）

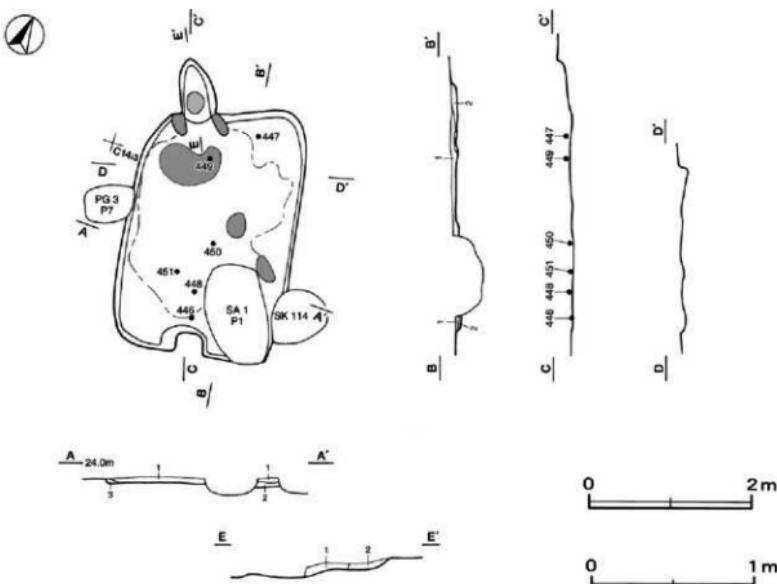
番号	種 別	部 位	口 径	壁 高	底 径	胎 土	色 调	焼 成	手 法 の 特 徴 は か	出上位置	備 考
443	土器器	环	[13.0]	4.2	5.5	長石・石英・漂母	に赤い粒	普通	底部下端手持ちへラ折り 内面ヘラ磨き	蓋 蓋火灰泥 覆土下層	40%
444	土器器	环	[12.8] (3.3)	-	-	長石・石英・漂母・ 赤色粒子	に赤い粒	普通	外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き	床面	5 %
445	照壺器	环	[11.8] (3.5)	-	-	長石・石英・漂母	灰褐色	普通	外・内面ロクロナデ	籠置土中	5 %

第 63 号住居跡（第 181 ~ 183 図）

位置 3 区中央部の C 14i3 区、標高 24.0 m の河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第 114 号土坑、第 1 号柱列、第 3 号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.00 m、短軸 2.08 m の長方形で、主軸方向は N - 21° - W である。壁高は 3 ~ 8 cm で、外



第 181 図 第 63 号住居跡実測図

傾して立ち上がっている。

床 確認できた範囲はほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。竈付近に1か所、東壁寄り2か所で粘土の広がりが確認できた。

竈 北壁の北西コーナー部附近に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで78cmで、燃焼部幅は30cmである。袖部は、粘土ブロック等を積み上げて構築された痕跡が認められる。火床部は、床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に70cm掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

遺土層解説

1 塗 色 ローム粒子少量、焼土ブロック微量

2 塗 色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

覆土 3層に分層できる。含有物がブロック主体であることから埋め戻されている。

土層解説

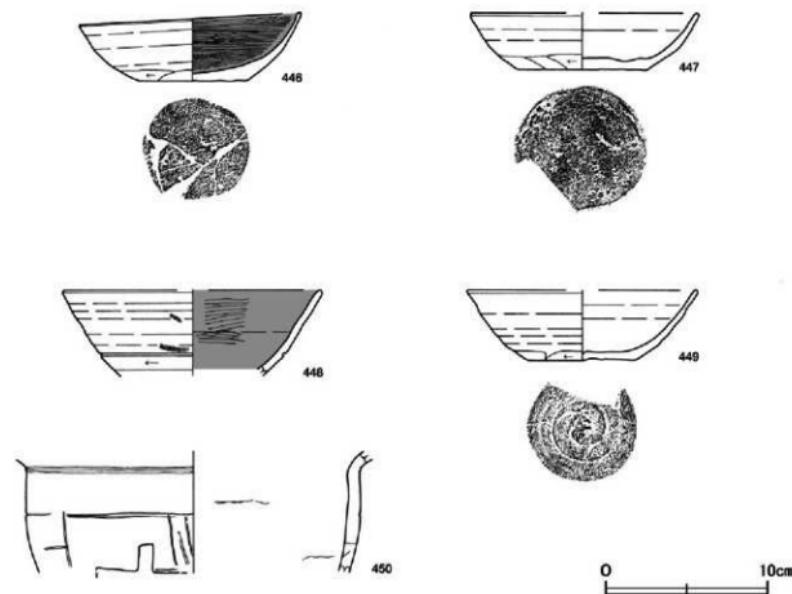
1 塗 塗 色 ロームブロック少量、炭化物、焼土粒子微量

2 塗 塗 色 ロームブロック・焼土粒子微量

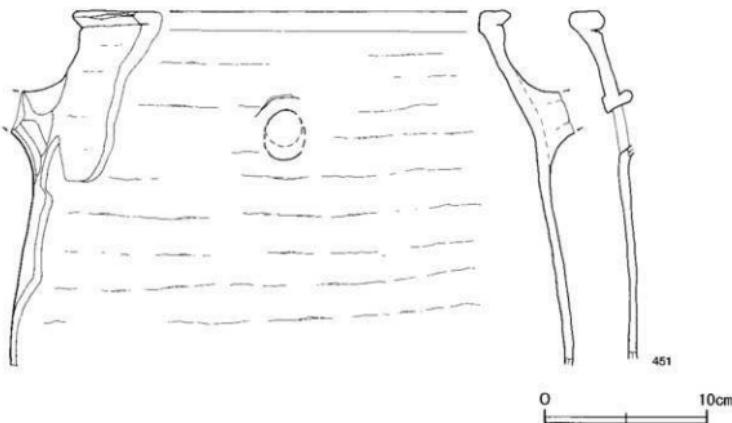
3 塗 塗 色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片77点（坏26、甕51）、須恵器片30点（坏13、蓋2、甕15）、土師質器片1点（置き甕）のほか、混入した縄文土器片3点（深鉢）が出土している。446は南部の床面、447・449は北部、450は中央部、448・451は南部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。



第182図 第63号住居跡出土遺物実測図(1)



第183図 第63号住居跡出土遺物実測図(2)

第63号住居跡出土遺物観察表(第182・183図)

番号	種別	部種	口径	部高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
446	土師器	环	13.4	4.2	6.5	長石・石英・黒母	にぶい黄褐	普通	体部下端手持ちハラ削り 内面ヘラ削き 底面二方向のツブ削り	底面	100% PL46
447	土師器	环	[13.9]	3.5	7.9	長石・石英・黒母	にぶい褐	普通	体部下端手持ちハラ削り 底部二方向のハラ削り	覆土下層	50%
448	土師器	环	15.6	(5.3)	—	長石・石英・黒母	にぶい褐	普通	体部下端手持ちハラ削り 内面横段のハラ削き	覆土下層	5%
449	埴生器	环	[14.0]	4.3	6.6	長石・石英・黒母	灰白	普通	体部下端手持ちハラ削り 底部回転ヘラ削り	覆土下層	30%
450	黑泥質土器	束	—	(7.5)	—	長石・石英・黒母	暗灰黄	普通	横段に平行の削み残し 縱條の削み十字の落小孔	覆土下層	10%
451	土師質土器	置き壺	[26.5]	(21.8)	—	長石・石英	にぶい褐	普通	背面に孔を穿つ 外面縦方向のハラ削り 内面削り	覆土下層	30% PL50

第66号住居跡(第184～186図)

位置 3区中央部のC 144区、標高24.0mの河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第67号住居、第12・13・14・15号掘立柱建物、第112・113号土坑、第3号ピット群に掘り込まれている。

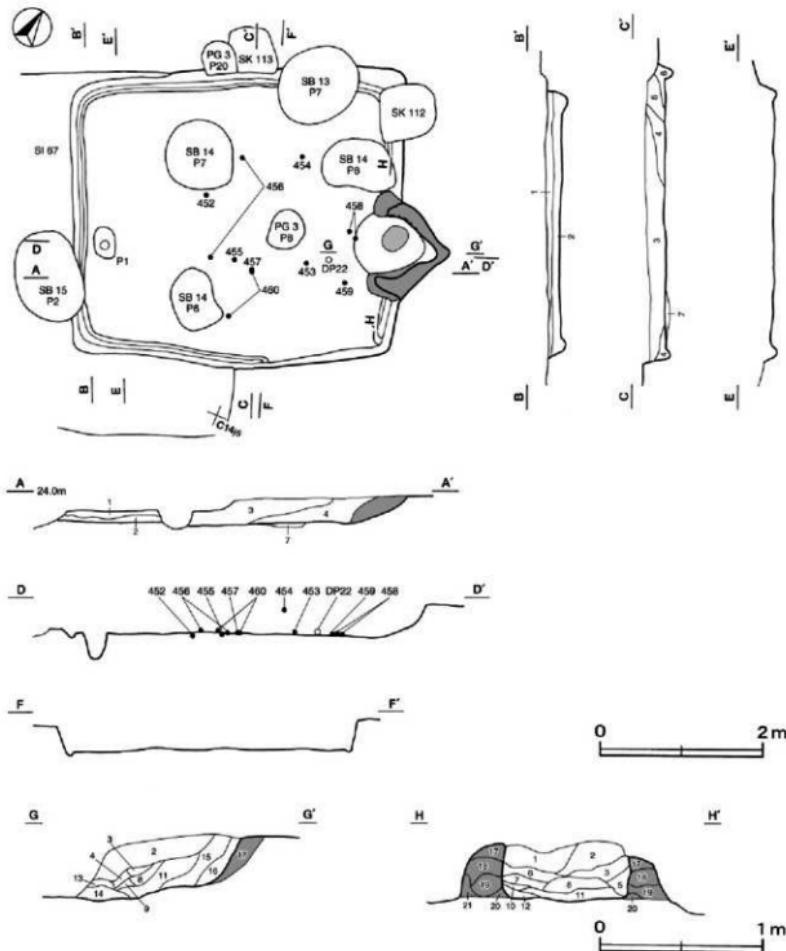
規模と形状 確認できた東西軸は4.10m、南北軸は3.61mの長方形で、主軸方向はN-71°-Eである。壁高は20～35cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦な貼床で、踏み固められた痕跡は確認できなかった。貼床はロームブロックを含む第7～14層を埋めて構築されている。壁下には壁溝が巡っている。

竈 東壁のやや南側寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで101cmで、燃焼部幅は70cmである。袖部は、粘土粒子やロームブロックを含んだ第17～21層を積み上げて構築されている。火床部は、床面を4cm掘り込んでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に44cm掘り込まれ、奥壁にロームブロック、粘土粒子を含んだ第17層を貼り付けており、緩やかに立ち上がっている。

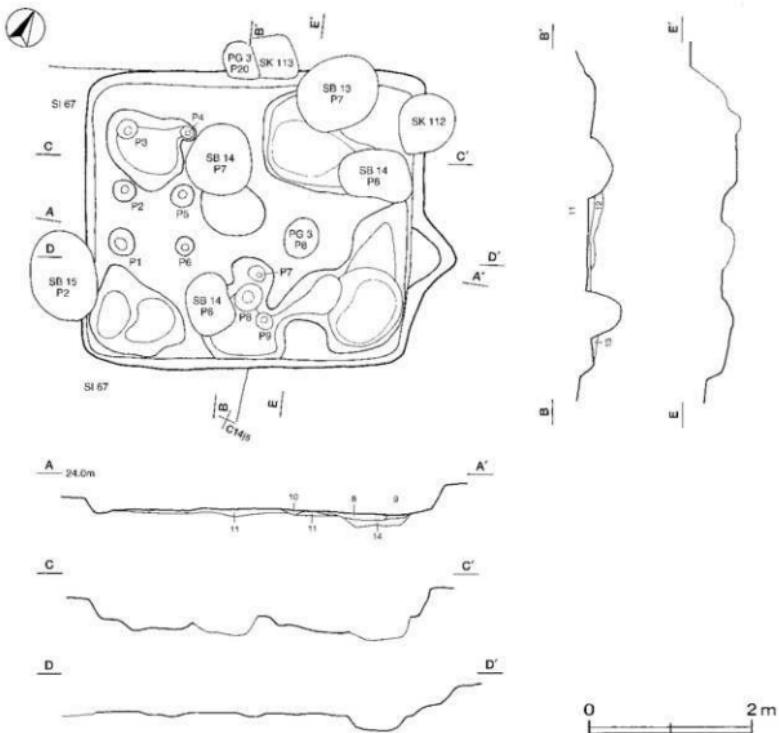
竈土層解説

1	暗褐色	ローム粒子、粘土粒子、砂粒少量、燒土粒子、炭化粒子微量	4	暗褐色	ロームブロック、燒土粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子少量、燒土粒子、炭化粒子微量	5	暗褐色	燒土粒子、炭化粒子、砂粒、粘土粒子少量
3	褐色	粘土粒子、砂粒中量、燒土粒子少量、ローム粒子、炭化粒子微量	6	暗褐色	ローム粒子、粘土粒子、砂粒少量、燒土粒子、粘土粒子、砂粒微量
		炭化粒子微量	7	暗褐色	ローム粒子、燒土粒子、炭化粒子、粘土粒子、砂粒微量



第184図 第66号住居跡実測図

- | | |
|---------------------------------------|-------------------------------|
| 8 赤褐色 燐土粒子多量、炭化粒子微量 | 15 暗褐色 燐土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子極微量 |
| 9 暗褐色 燐土粒子少量、炭化粒子微量、ローム粒子極微量 | 16 褐色 ローム粒子中量、燒土粒子極微量 |
| 10 赤褐色 燐土粒子多量 | 17 桂褐色 燐土粒子・砂粒少量、ロームブロック微量 |
| 11 黒褐色 燐土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 18 にじい黄褐色 燐土粒子・砂粒多量、ロームブロック微量 |
| 12 暗褐色 ローム粒子少量、燒土粒子極微量 | 19 にじい黄褐色 燐土粒子・砂粒多量 |
| 13 黄褐色 粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・炭化粒子微量、燒土粒子極微量 | 20 暗褐色 ロームブロック少量、粘土粒子・砂粒微量 |
| 14 暗褐色 ローム粒子微量、燒土粒子・炭化粒子極微量 | 21 暗褐色 ローム粒子中量 |



第185図 第66号住居跡掘方実測図

ピット 深さ31cmで、西壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

なお、掘方調査で床下の西壁際からP2～P6、南壁際からP7～P9を確認したが、性格不明である。

覆土 6層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。第7～14層は貼床の構築土である。

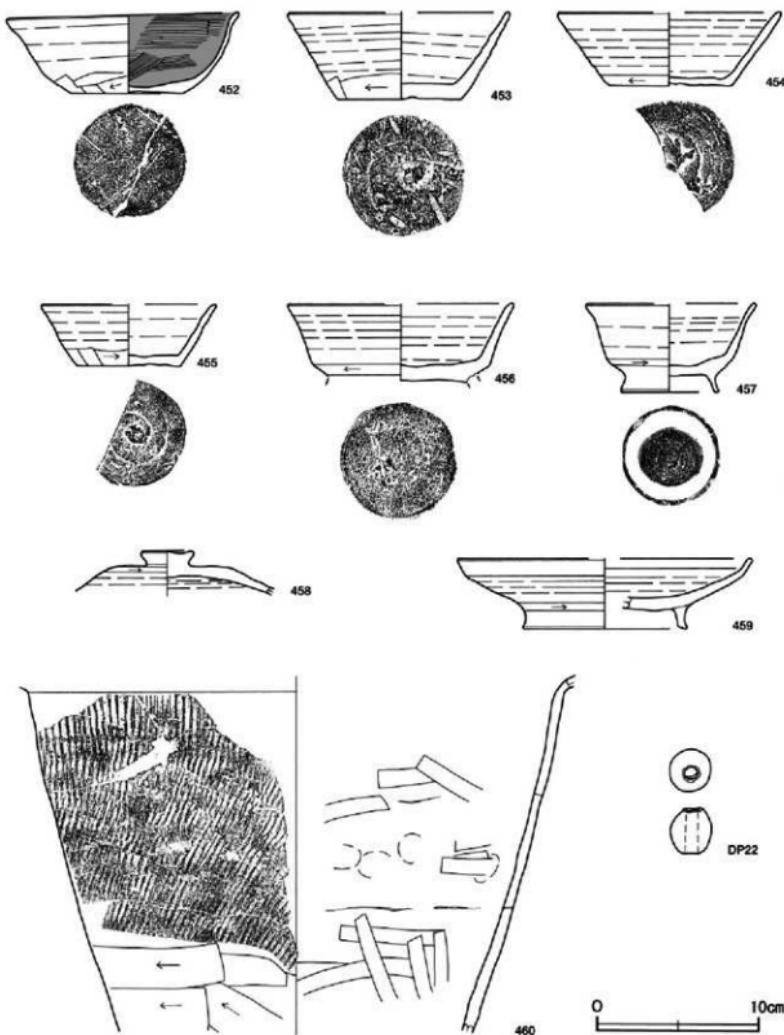
土層解説

1 細 梅 色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	8 暗 暗 色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
2 暗 梅 色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子極微量	9 暗 暗 棕褐色 ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量
3 棕 色 ロームブロック少量、焼土粒子極微量	10 暗 暗 色 ローム粒子少量
4 に赤い黄褐色 ローム粒子中量	11 棕 色 ロームブロック中量
5 に赤い黄褐色 ロームブロック微量、焼土粒子極微量	12 棕 色 ローム粒子中量
6 に赤い黄褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量	13 暗 暗 棕褐色 ローム粒子少量、炭化物微量
7 に赤い黄褐色 ローム粒子中量（4層より締まり強）	14 黒 暗 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片379点（壺78、高台付壺3、甕296、小形甕2）、須恵器片373点（壺142、高台付壺19、蓋42、盤1、高壺1、鉢1、瓶3、甕164）、灰釉陶器片1点（瓶）、土製品1点（球状土錐）、鐵滓6点（89g）のほか、混入した陶器片2点（碗）、磁器片2点（碗）、貼床構築土内から繩文土器片11点（深鉢）、土師器片18点（甕）、須恵器片8点（壺6、甕2）が出土している。452・453・455～457は中央部、458は

竈焚口部付近、460は南部の床面、DP22は竈前の覆土下層、459は竈右袖部付近の覆土下層、454は中央部の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。



第186図 第66号住居跡出土遺物実測図

第 66 号住居跡出土遺物観察表（第 186 図）

番号	種 別	器 様	口 径	器 高	底 径	胎 土	色 質	焼 成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
452	土師器	环	14.2	5.0	6.8	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	体部下端手持ちハラ削り 内面ヘラ磨き 亂 第二方向のヘラ削り	床面	50% PL46
453	須恵器	环	[13.5]	5.4	7.6	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部下端手持ちハラ削り 底部回転ヘラ切り	床面	75% PL47
454	須恵器	环	[13.6]	4.5	[7.4]	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部下端回転ヘラ削り 横土上層	49%	
455	須恵器	环	[10.6]	3.8	6.4	長石・石英・細纈	黄灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 横土上層	50% PL46	
456	須恵器	高台付环	[3.7]	(4.8)	-	長石・石英	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ切り	床面	60%
457	須恵器	高台付环	[10.4]	5.4	5.9	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ切り 後、直角貼り付け	床面	60% PL48
458	須恵器	表	-	(2.7)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	天井部左端のヘラ削り	床面	70%
459	須恵器	裏	[18.0]	4.3	[10.0]	長石・石英	黒灰	普通	体部左端回転ヘラ削り 高台貼り付け 丸、下端へテリ面、内面ヘラナア 当て具痕	覆土下層	30%
460	須恵器	鉢	-	(22.0)	-	長石・石英・雲母	黒灰	普通	内面端外・内面横下部 体部外面部の平行印	床面	10%
<hr/>											
番号	器 様	深さ	口径	重量	材 質	特 徴			出土位置	備 考	
DP22	埴狀土錐	2.5	2.7	0.8	18.1	土 (長石・石英)	ナデ	一方向から穿孔	覆土下層		

第 67 号住居跡（第 187 図）

位置 3 区中央部の C 1414 区、標高 24.0 m の河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第 66 号住居跡、第 14・15 号掘立柱建物跡、第 1 号柱列跡、第 113 号土坑、第 3 号ピット群を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 4.42 m、短軸 4.26 m の方形で、主軸方向は N - 71° - E である。壁高は 3 ~ 10cm で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いて踏み固められている。

竈 東壁の中央に附設されている。規模は焚口部から煙道部まで 104cm で、燃焼部幅は 50cm である。火床部は、床面を 4 cm 剥り込んでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 6 cm 剥り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | | | |
|---|--------|--------------------------|---|------|------------------------|
| 1 | にぶい黄褐色 | 粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子少量、燒土粒子微量 | 3 | 黒褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子微量、燒土粒子極微量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子少量、燒土ブロック、炭化粒子極微量 | 4 | 明赤褐色 | ローム粒子・燒土粒子中量、粘土粒子・砂粒微量 |

ピット 深さ 28cm で、西壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと推定できる。

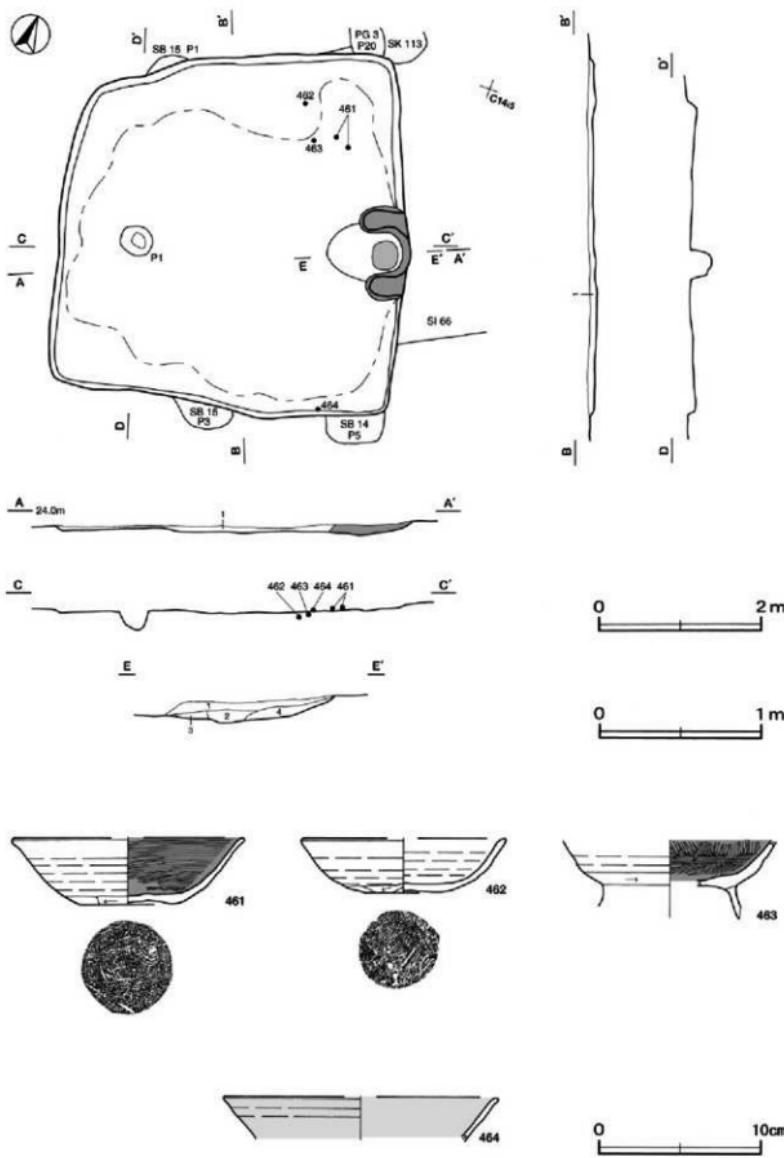
覆土 単一層である。周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・燒土粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 615 点（环 225、高台付环 17、高台付椀 1、鉢 1、甕 371）、須恵器片 176 点（环 37、高台付环 6、蓋 6、高环 1、甕 126）、綠釉陶器片 1 点（椀）、灰釉陶器片 3 点（椀）、不明鉄製品 2 点のほか、流れ込んだ織文土器片 2 点（深鉢）が散在した状態で出土している。462・463 は北東コーナー部付近、464 は南側壁際の床面、461 は北東コーナー部付近の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 10 世紀前葉に比定できる。



第187図 第67号住居跡・出土遺物実測図

第 67 号住居跡出土遺物観察表（第 187 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
461	土師器	环	D4.0	4.1	5.6	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	体部下端手持ちハラ削り 内面ヘラ磨き 亂	覆土中層	40%
462	須恵器	环	D12.5	3.4	4.5	長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい橙	普通	体部下端手持ちハラ削り 底部二方向のハラ削り	表面	60% PL46
463	土師器	高台付楕	-	(4.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	体部下端回転へラ削り 内面ヘラ磨き 高台	表面	20%
464	結晶陶器	楕	D6.8	(2.6)	-	鉛釉	オリーブ灰	良好	ロクロナデ 外・内面施釉	表面	5% PL52

第 68 号住居跡（第 188 図）

位置 3 区東部の C 15g3 区、標高 23.0 m の河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第 6 号構に掘り込まれている。周囲に第 50・68・69・70・77・93 号土坑が存在しているが、重複関係は不明である。

規模と形状 炉とその東側に広がるわずかな床が露出した状態で確認した。遺存状況が不良のため、北東・南西軸 1.44 m、北西・南東軸 1.30 m の範囲しか確認できなかった。平面形と主軸方向は不明である。

床 遺存している床は平坦で、炉の東側が踏み固められている。

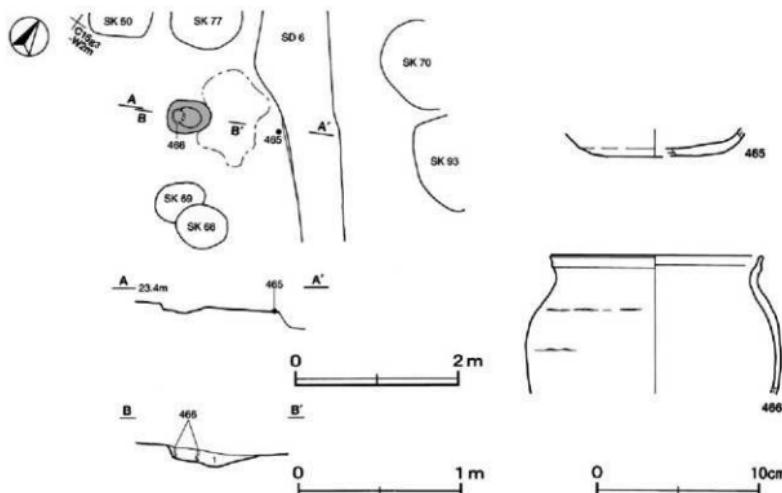
炉 確認した硬化面の西側に付設されている。長径 54cm、短径 40cm の梢円形で、床面を 18cm 剥りくばめた地床炉である。炉床は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 種類 色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量

遺物出土状況 土師器片 12 点（環 1、壺 11）、須恵器片 1 点（環）が出土している。465 は確認できた硬化面の東部、466 は炉床から逆位の状態でそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀代と推測できる。



第 188 図 第 68 号住居跡・出土遺物実測図

第68号住居跡出土遺物観察表（第188図）

番号	種別	器種	口径	管高	壁径	胎土	色調	焼成	手法の符号	ほか	出土位置	備考
465	灰陶器	环	-	(1.7)	[6.0]	長石・石英・雲母	白	不良	底部一方向のヘラ削り		床面	5%
466	土加器	甕	13.0	(8.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい中褐	普通	内・外面ナデ		仰床	40%

第69号住居跡（第189・190図）

位置 3区西部のD 13a0区、標高235mの河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第60・61号住居、第104号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南部が削平されているため、中央部から南側までの壁は遺存していない。東西軸は4.95mで、南北軸は4.65mしか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定でき、主軸方向はN-17°-Wである。壁高は10cmで、外傾して立ち上がっている。

床 確認できた範囲はほぼ平坦で、東側・西南コーナー部の壁際を除いて踏み固められている。貼床はロームブロックや粘土ブロックを含んだ第5-16層を埋めて構築されている。北東コーナー部の壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁の東コーナー部寄りに付設されている。焚口部から煙道部付近まで搅乱を受けており、燃焼部幅は104cmである。袖部は、粘土ブロックや焼土粒子を含んだ第8-9層を積み上げて構築されている。煙道部は壁外に50cm掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

1	暗褐色	ローム粒子少量、粘土粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量	5	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子極微量
2	暗褐色	ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子・粘土粒子・砂粒微量	6	褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
3	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒微量	7	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
4	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量、炭化粒子極微量	8	にぶい黄褐色	粘土粒子・砂粒中量
			9	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量

ピット 4か所。P.1-P.4は深さ18-38cmで、主柱穴である。

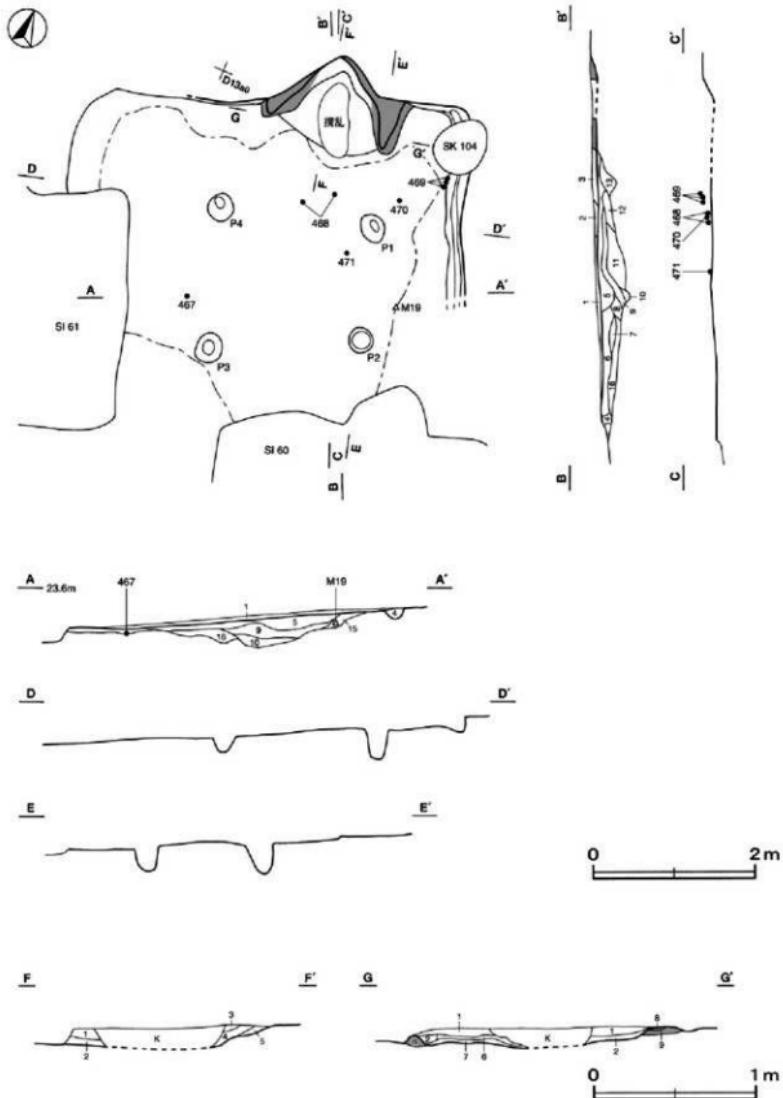
覆土 4層に分層できる。含有物がブロック主体であることから埋め戻されている。第5-16層は貼床の構築土である。

土層解説

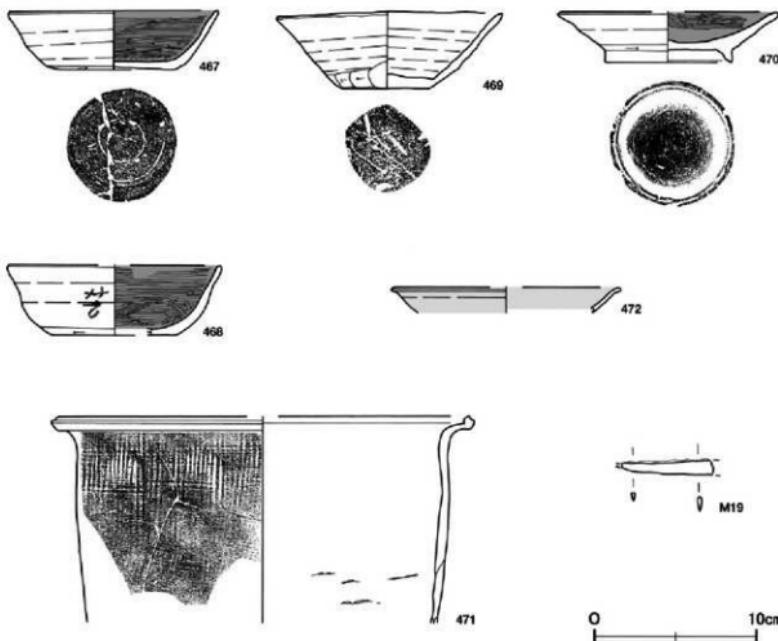
1	暗褐色	ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量	8	褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	9	褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
3	暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物・粘土粒子・砂粒微量	10	褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物・粘土粒子・砂粒微量
4	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	11	褐色	ローム粒子少量
5	褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	12	褐色	ローム粒子中量
6	暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子・砂粒微量	13	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
7	暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・粘土ブロック・微量	14	暗褐色	ロームブロック中量
			15	暗褐色	ロームブロック少量
			16	暗褐色	ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片169点（环60、甕1、高台付皿1、甕107）、須恵器片89点（环24、高台付环1、蓋8、甕55、甕1）、灰陶釉陶器片6点（碗）、土師質土器片5点（羽釜）、鐵製品1点（刀子）のほか、貼床構築土内から繩文土器片25点（深鉢）、土師器片156点（环20、高台付环2、甕134）、須恵器片52点（环25、蓋8、甕19）が出土している。471は中央部の床面、468は北部、470は北東部の覆土下層、469は東側壁際の覆土中層、472は覆土中層からそれぞれ出土している。467は中央部、M19は東部の貼床構築土内からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。



第189図 第69号住居跡実測図



第190図 第69号住居跡出土遺物実測図

第69号住居跡出土遺物観察表（第190図）

番号	器種	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
467	土罐器	环	12.7	3.6	7.0	良石・石英	にぶい黄褐色	普通	体底下端斜面へラブリ 内面横凹のヘラ書き	粘土下層	90%
468	土罐器	环	[12.9]	4.3	[7.6]	良石・石英・雲母・ 水電粒子・白色鉱物	にぶい橙	普通	体底下端斜面へラブリ 内面へラブリ 薄張 斜面へラブリ 体底下端黒青「方」	粘土下層	20%
469	須恵器	环	13.7	4.8	5.4	良石・石英・雲母	にぶい黄褐色	不均	体底下端手持ちへラブリ 基盤一方向へのラブ リ	陶土上層	80% PL47
470	土罐器	高台付皿	[13.3]	3.1	7.8	良石・石英・ 白色鉱物	粗	普通	体底下端斜面へラブリ 内面へラブリ 高台 付付	粘土下層	70%
471	須恵器	瓶	[25.2]	(12.7)	-	良石・石英・雲母	黄褐色	不良	口縁部外、内面横ナメ 外面格子状の平行印 字	陶土	10%
472	灰釉陶器	碗	[13.7]	(1.6)	-	緻密・黑色粒子	灰白	良好	ロクロナメ 外、内面施釉	陶土中	5% PL52

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	符號	出土位置	備考
M19	刀子	(5.8)	1.0	0.3	(3.4)	鉄	刀部・革部欠損 刀部断面三角形	粘土下層	PL54

第71号住居跡（第191・192図）

位置 3区西部のD 13c8区。標高 22.5 m の河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第4号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 西部は削平を受けているため、床面は遺存していない。確認できた北西・南東軸は 3.00 m で、北東・南西軸は 2.70 m しか確認できなかった。主軸方向は N - 34° - W である。壁高は 3 ~ 20 cm で、外傾して

立ち上がっている。

床 確認できた範囲はほぼ平坦で、踏み固められた痕跡は確認できなかった。南・東壁の壁下には壁溝が巡っている。

竈 北西壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで74cmで、燃焼部幅は28cmである。火床部は床面を4cm掘り込んでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に52cm掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

電土層解説

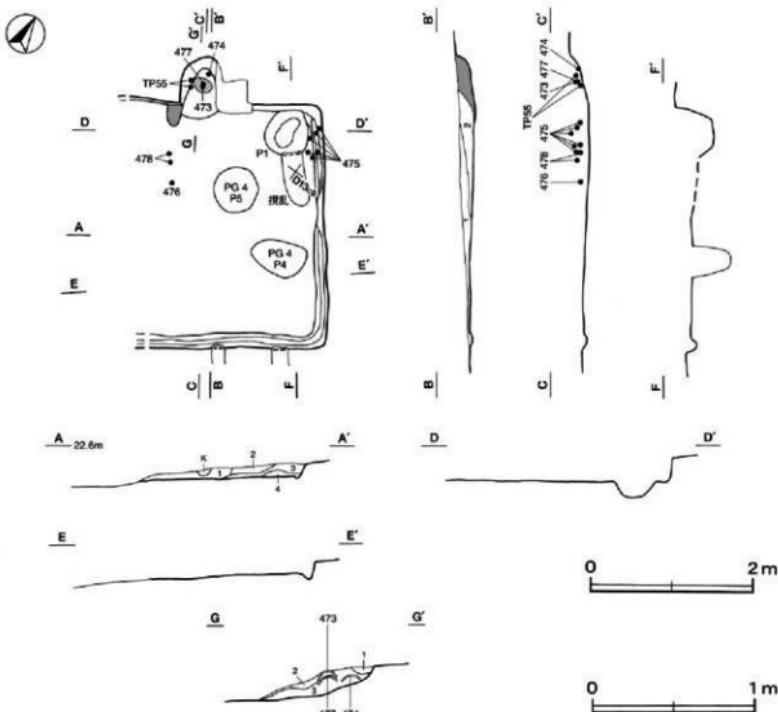
- | | |
|----------------------------|-----------------|
| 1 明 棚 色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量 | 3 にぶい赤褐色 焼土粒子多量 |
| 2 棚 色 ロームブロック多量、炭化粒子微量 | |

ピット 深さ20cmで、性格不明である。

覆土 4層に分層できる。不自然な堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

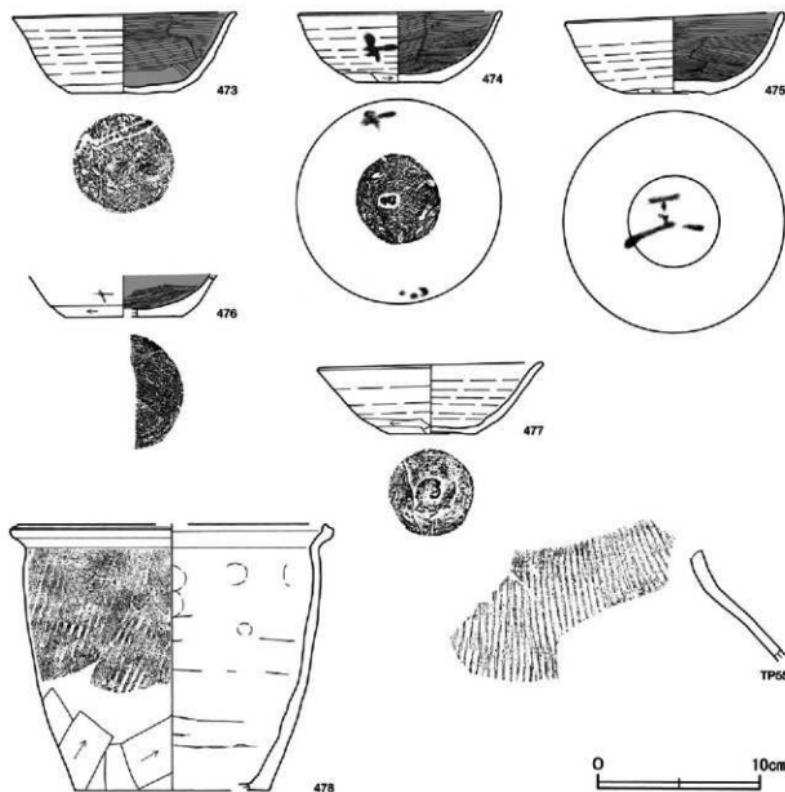
- | | |
|----------------------------------|-------------------|
| 1 棚 色 ロームブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 3 棚 色 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 棚 色 粘土粒子少量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 棚 色 炭化粒子微量 |



第191図 第71号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片 252 点(环 28, 高台付坏 2, 壶 222), 須恵器片 98 点(坏 7, 鉢 1, 壶 90), 鉄製品 1 点(鎌)が出土している。474 は竈煙道部の底面, 473・477 は竈火床部の覆土下層, 476 は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。TP55 は竈火床部の覆土下層, 478 は北部の覆土中層から出土しており, 475 は東側壁際の覆土中層から上層にかけて出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀後葉に比定できる。



第 192 図 第 71 号住居跡出土遺物実測図

第 71 号住居跡出土遺物観察表（第 192 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	底上	色調	焼成	手 法 の 特徴 は か	出土位置	備考
473	土師器	坏	13.6	5.0	6.0	長石・石英・雲母 にぶい程	普通	底下端手折ちへう折り 内面へラ溝き 亂 部一方のへう折り	竈 煙道下層	100%	P1.46
474	土師器	坏	12.4	4.5	5.1	長石・石英・雲母 にぶい程	普通	底下端手折ちへう折り 内面へラ溝き 亂 部端部丸切ちへう折り 体部に墨書き「七」	竈 煙道部底 部	95%	P1.47-51
475	土師器	鉢	13.3	5.0	5.9	長石・石英・雲母 にぶい程	普通	底下端手折ちへう折り 内面へラ溝き 亂 部一方のへう折り 底部に墨書き「王」	覆土中層	75%	P1.47-51
476	土師器	坏	-	(26)	(72)	長石・石英・雲母 浅黄橙	普通	底下端手折ちへう折り 内面へラ溝き 亂 部一方のへう折り 体部に黒書き「十」	覆土中層	10%	P1.51

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
477	瓶壺器	环	13.7	4.4	5.2	長石・石英・雲母	灰	不良	体部下端手持ちラブリ 底部斜面ヘラ切り	縦埋土下層	100% PL46
478	瓶壺器	鉢	[18.9]	16.5	12.0	長石・石英・雲母・水色粒子・細繩	灰黄	普通	口縁部外・内面横ナゲ 外面斜面の平行叩き	縦土中層	40% PL49
TP55	瓶壺器	束	-	(6.8)	-	長石・石英・雲母・針状物	にぶい米褐色	普通	体部綱目付の平行叩き 内面ナゲ	縦埋土下層	

第 72 号住居跡 (第 193 ~ 195 図)

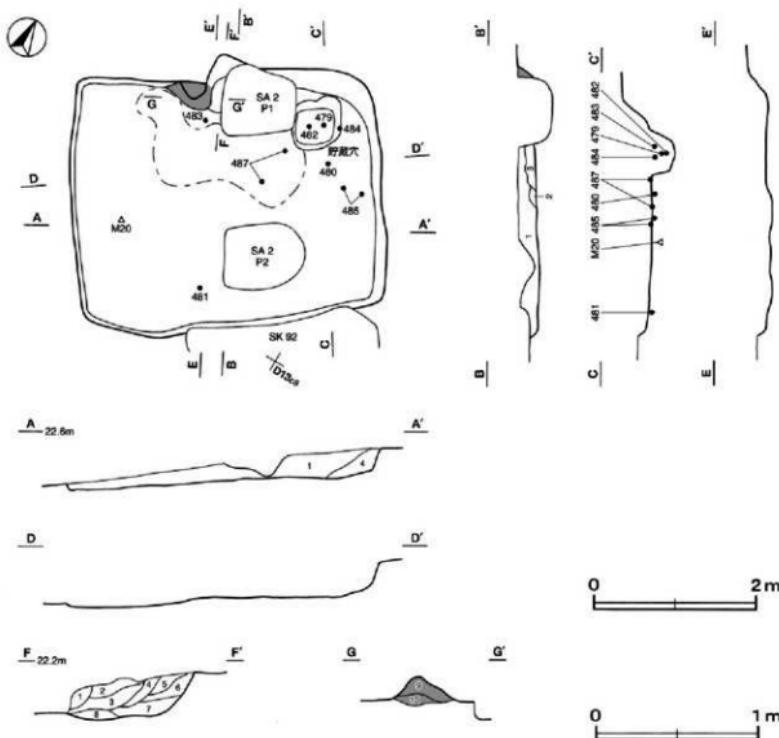
位置 3 区西部の D 13b7 区、標高 22.5 m の河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第 2 号柱列、第 92 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.85 m、短軸 3.16 m の長方形で、主軸方向は N - 30° - W である。壁高は 28cm で、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、甌付近が踏み固められている。

竈 北西壁に付設されている。焚口部から煙道部にかけて第 2 号柱列の P 1 に掘り込まれているため、左袖部



第 193 図 第 72 号住居跡実測図

と煙道部の一部しか確認できなかった。左袖部は、粘土粒子や砂粒を含んだ第9・10層を積み上げて構築されている。火床部は、第2号柱列に掘り込まれているため、確認できない。煙道部は壁外に34cm掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

遺土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック・炭化物微量	6 暗褐色 粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
2 暗褐色 炭化物・ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子微量	7 極暗褐色 炭化粒子少量、ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子微量
3 暗褐色 炭化粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子微量	8 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック・粘土粒子微量
4 暗褐色 焼土粒子中量、炭化物・ローム粒子微量	9 暗褐色 粘土粒子・砂粒多量、ローム粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色 炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量	10 灰褐色 砂粒少量、粘土ブロック・ローム粒子微量

貯蔵穴 北コーナー部に位置している。長軸62cm、短軸58cmの隅丸方形である。深さは24cmで、底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

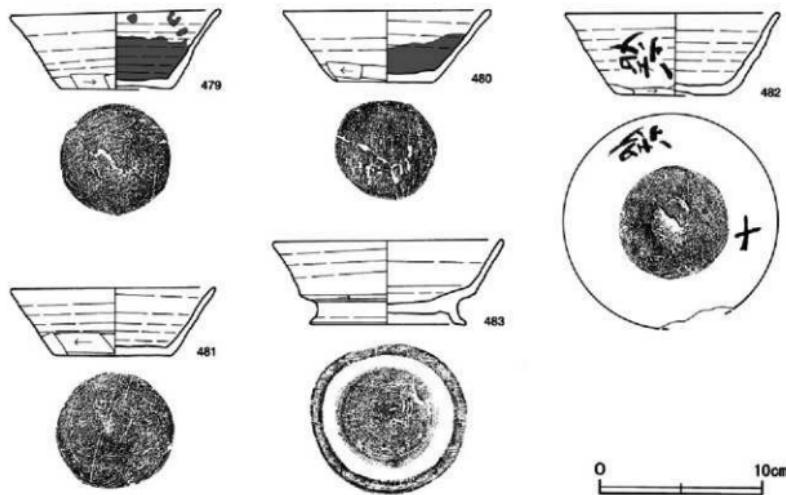
覆土 4層に分層できる。含有物がブロック主体であることから埋め戻されている。

土層解説

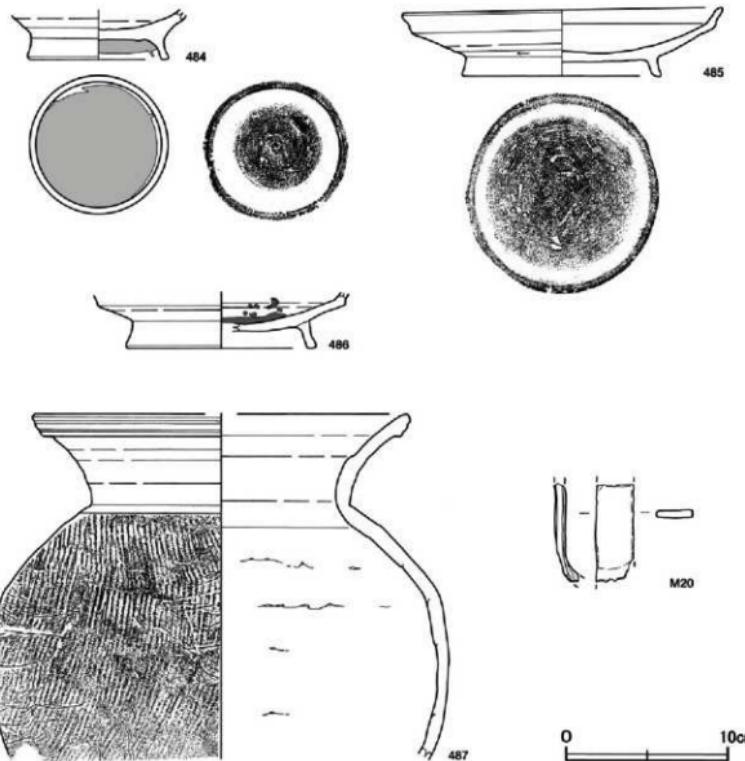
1 褐色 ローム粒子中量、粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物・砂粒微量	3 にじみ黄褐色 粘土ブロック・砂粒中量、ローム粒子・炭化粒子少量、焼土ブロック微量
2 褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子・砂粒微量	4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片580点（坏68、高台付坏4点、高坏1、壺506、小形甕1）、須恵器片482点（坏105、高台付坏23、蓋17、盤4、甕332、瓶1）、灰陶軽器片4点（壺）、鐵製品8点（不明）が散在した状態で出土しているほか、混入した陶器片3点（碗）が出土している。また、貼床構築土内から繩文土器片7点（深鉢）、土師器片65点（甕）、須恵器片42点（坏17、蓋6、盤5、甕14）が出土している。479・482・484は北部の貯蔵穴、483は北西部、480は北東部、485は東部、481は南東部、M20は南西部、487は中央部の床面、486は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。



第194図 第72号住居跡出土遺物実測図(1)



第195図 第72号住居跡出土遺物実測図(2)

第72号住居跡出土遺物観察表(第194・195図)

番号	種別	部種	口径	脚高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
479	陶器	环	12.7	4.9	6.6	長石・雲母	褐灰	普通	体底部下端手持ちへラ削り 底部二方向のへラ削り	竪穴式 PL47-50	100%
480	陶器	环	12.5	4.5	6.3	長石・石英・雲母・磁鐵	褐灰	普通	(体底部下端手持ちへラ削り 底部一方向のへラ削り 内側縦付着)	床面 PL47-50	100%
481	陶器	环	12.4	4.2	7.2	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体底部下端手持ちへラ削り 底部一方向のへラ削り	床面 PL46	100%
482	陶器	环	13.2	5.1	7.1	長石・石英・雲母・水色粒子	灰黃褐色	普通	(体底部下端手持ちへラ削り 底部一方向のへラ削り 体底部黒漆着[十]口)	竪穴式 PL47-51	99%
483	陶器	高台付环	14.0	5.2	9.6	長石・石英・雲母・黑色粒子	褐灰	普通	体底部下端回転へラ削り 高台貼り付け	床面 PL48	100%
484	陶器	高台付环	-	(3.1)	8.3	長石・石英・雲母	褐灰	普通	高台貼り付け 底面黒漆	竪穴式 PL50	99%
485	陶器	盤	19.5	4.2	12.1	長石・石英・雲母・水色粒子	灰黃	普通	体底部下端回転へラ削り 高台貼り付け	床面 PL48	100%
486	陶器	盤	-	(3.5)	[11.6]	長石・石英	褐灰	普通	高台貼り付け 内面漆付着	覆土中 PL50	10%
487	陶器	甌	[22.6]	(21.3)	-	長石・石英・雲母・黑色粒子	灰黃褐色	不良	体部外表面底面の平行凹き	床面 PL49	20%

番号	形種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M20	根付	(6.0)	2.4	0.8	(27.5)	鐵	先端純丸 断面長方形	床面	PL54

表16 平安時代住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	埋没	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係 (古→新)
								柱穴	出入口	ビット	鉢				
43	C 14g6	N - 11° - W	【方形・長方形】	4.23 × (3.75)	21~31	平坦	全埋	4	-	1	竪1	-	人馬 土師器、瓦 鉢類品	9世紀前業 S86 → S38	
45	C 15g1	N - 28° - W	長方形	5.05 × 4.40	6~25	平坦	14.12 全埋	4	1	1	竪1	-	人馬 土師器、瓦 鉢類品	9世紀前業 S14.5, S38.8 → S38 S27.5 → S6	
48	C 14f7	-	【方形・長方形】	5.55 × (1.32)	50	平坦	-	-	-	-	-	-	人馬 土師器、瓦 鉢類品	9世紀中葉 S37 → S49	
49	C 14f7	N - 80° - E	方形	3.86 × 3.77	17~20	平坦	一部	2	1	-	竪1	-	自然 土師器、瓦 鉢類品	9世紀後業 S48 → S38	
51	C 14f6	N - 22° - W	【方形・長方形】	3.72 × (0.88)	12	平坦	-	-	-	-	竪1	-	人馬 土師器、瓦 鉢類品	9世紀後業 S38 → S38.8, 50~60	
52	D 14a6	N - 21° - W	【方形・長方形】	3.10 × (2.01)	5~26	平坦	一部	-	-	-	竪1	-	人馬 土師器、瓦 鉢類品	9世紀後業 S38 → S38	
53	D 14a3	N - 20° - W	長方形	3.25 × 2.22	4~30	平坦	一部	-	-	-	-	-	人馬 土師器、瓦 鉢類品	10世紀前業 S38 → S38 → SK100	
56	C 14g9	N - 18° - W	【方・矩】	3.26 × (2.54)	12~20	平坦	14.12 全埋	-	-	-	-	-	人馬 土師器、瓦 鉢類品	9世紀後半 S38 → S38	
57	C 14g8	N - 35° - E	長方形	3.30 × 2.95	18~33	平坦	-	-	-	1	竪1	-	人馬 土師器、瓦 鉢類品	9世紀中葉 S38 → S38, PG2	
59	C 14g8	N - 3° - W	長方形	2.52 × 2.22	13~20	平坦	-	-	-	-	-	-	人馬 土師器、瓦 鉢類品	9世紀後業 S38.8 → S38	
60	D 13g6	N - 9° - W	【長方形】	3.98 × 3.19	7	平坦	-	-	-	-	竪1	-	自然 土師器、瓦 鉢類品	9世紀後半 S38 → 70 → S38	
61	D 13g6	N - 20° - W	【長方形】	(2.93) × (2.50)	13	平坦	-	-	1	-	竪1	-	人馬 土師器、瓦 鉢類品	9世紀後業 S38 → S38	
62	C 14g6	N - 20° - E	-	-	-	-	-	-	-	-	竪1	-	人馬 土師器、瓦 鉢類品	9世紀後半 S38 → S38 → S38	
63	C 14d3	N - 21° - W	長方形	3.00 × 2.08	3~8	平坦	-	-	-	-	竪1	-	人馬 土師器、瓦 鉢類品	9世紀後業 S38 → SK114, SAI, PG2	
66	C 14d4	N - 71° - E	【長方形】	(4.10) × 3.61	20~35	平坦	一部	-	1	-	竪1	-	自然 土師器、瓦 鉢類品	9世紀前業 S38 → S67, SH13~14~15, SK112~113, PG3	
67	C 14d4	N - 71° - E	方形	4.42 × 4.26	3~10	平坦	-	-	1	-	竪1	-	自然 土師器、瓦 鉢類品	10世紀前業 S38 → S67, SH14~15, SAL, PG3 → S38	
68	C 15g3	-	-	(1.44) × (1.30)	-	平坦	-	-	-	-	か1	-	土師器、瓦 鉢類品	9世紀代 S38 → S38, SK30~68~69~70~77~78, これは新井家明	
69	D 13a6	N - 17° - W	【方形】	(4.95) × (4.65)	10	平坦	一部	4	-	-	竪1	-	人馬 土師器、瓦 鉢類品	9世紀後業 S38 → S60, GL, SK104	
71	D 13g8	N - 34° - W	【長方形】	3.00 × (2.70)	3~20	平坦	一部	-	-	1	竪1	-	人馬 土師器、瓦 鉢類品	9世紀後業 S38 → PG4	
72	D 13g7	N - 30° - W	長方形	3.85 × 3.16	28	平坦	-	-	-	-	竪1	1	人馬 土師器、瓦 鉢類品	9世紀前業 S38 → SA2, SK32	

(2) 挖立柱建物跡

第9号掘立柱建物跡 (第196図)

位置 3区中央部のC 14g6～C 14h7区、標高24.0mの河岸段丘上位の平坦面に位置している。

重複関係 第47・62号住居跡を掘り込んでいる。

規模と構造 桁行、梁行ともに2間の総柱建物跡で、桁行方向N - 73° - Eの東西棟である。規模は桁行が4.20mで、梁行は西妻3.60m、東妻4.20mで、面積は16.36m²である。柱間寸法は桁行が2.10m(7尺)で等間隔に配置されている。梁行は西妻が1.80m(6尺)で、東妻は北から2.40m(8尺)・1.80m(6尺)で配置されている。柱筋は不揃いである。

柱穴 9か所。平面形は円形または楕円形で、長径36~56cm、短径28~38cmである。深さは14~34cmで、

掘方の断面形は逆台形である。土層は第1~3層が柱抜き取り後の覆土、第4~7層が埋土である。

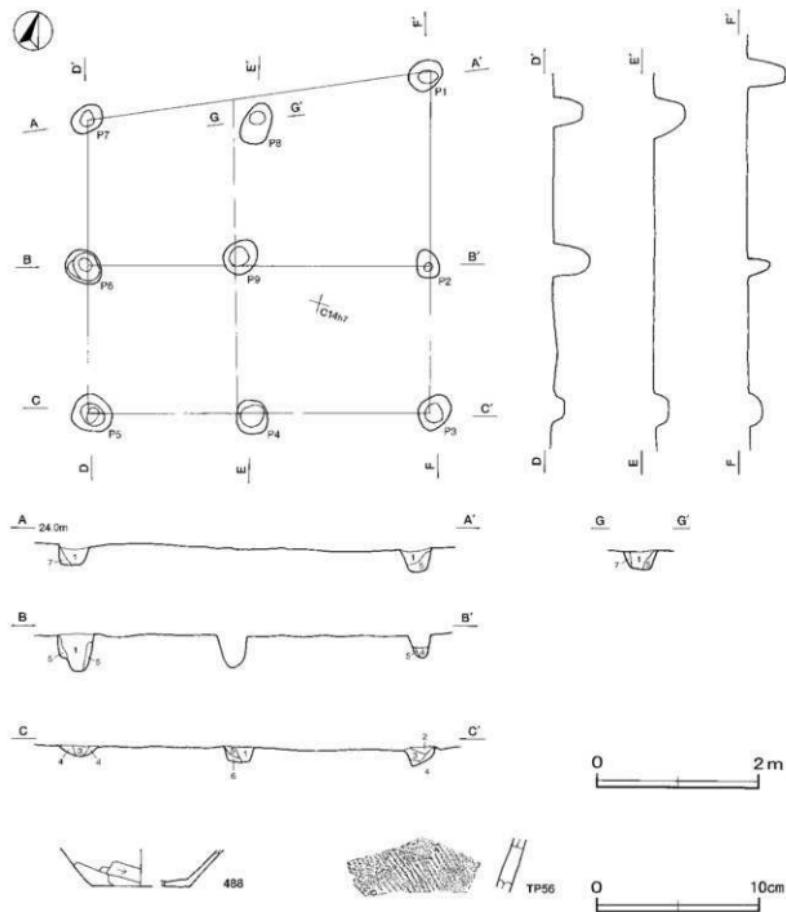
土層解説

1	暗	褐色	ローム粒子、炭化粒子微量	5	にぶい黄褐色	ローム粒子少量
2	暗	褐色	ローム粒子微量	6	にぶい黄褐色	ロームブロック微量
3	褐	色	ローム粒子少量	7	黄	褐色
4	褐	色	ローム粒子中量			ロームブロック中量

遺物出土状況 土器片19点(坏3、壺類16)、須恵器8点(坏4、蓋1、鉢3)のほか、混入した繩文

土器片2点(深鉢)が出土している。488はP 4内、TP56はP 7内からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉に比定できる。



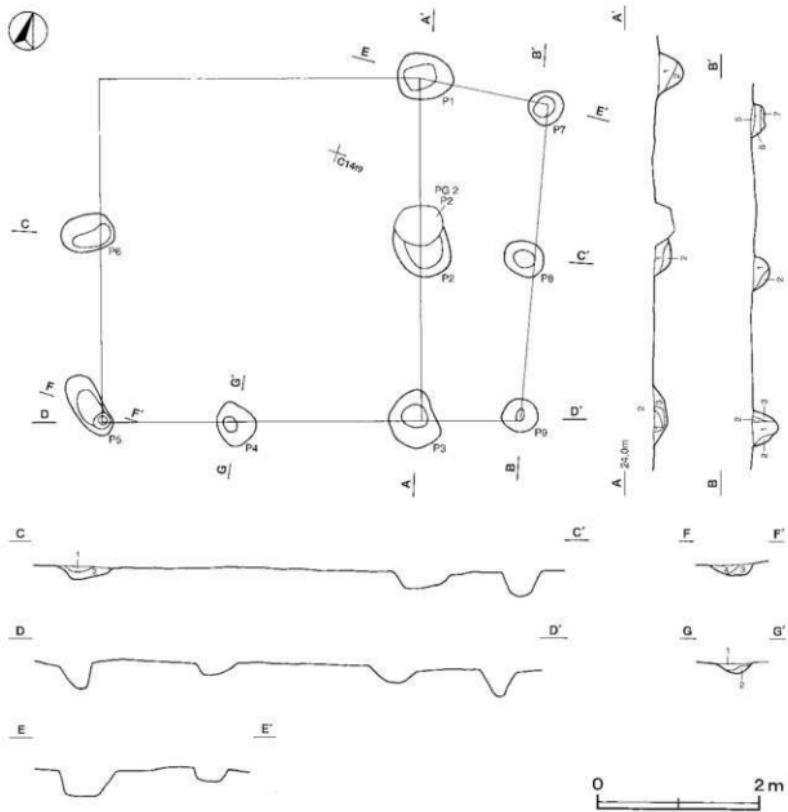
第196図 第9号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第9号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第196図）

番号	種 别	器 種	(口)径	器 高	底(径)	胎 土	色 调	焼成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
488	陶器器	环	-	(2.3)	[6.0]	良石・石英・雲母	灰白	普通	体部下端手持ちハラ削り	P1内	5%
TP56	陶器器	钵	-	(3.4)	-	良石・石英・雲母	黄灰	普通	体部斜位の平行叩き	P1内	P1.52

第10号掘立柱建物跡（第197・198図）

位置 3区東部のC 14e8～C 14f9区、標高24.0mの河岸段丘上位の平坦部に位置している。



第197図 第10号掘立柱建物跡実測図

重複関係 第2号ピット群に掘り込まれている。

規模と構造 北西コーナー部と北平の中間柱穴が確認できなかったが、柱穴の配置から桁行、梁行ともに2間の側柱建物跡と推定できる。東に庇が付く、桁行方向N-72°-Eの南北棟である。規模は身舎が桁行4.20m、梁行3.90mで、面積は16.38m²である。庇の出は北が150m、南が120mで、庇も含めると梁行は北が550m、南が5.00mと不揃いで、面積は21.45m²である。身舎の柱間寸法は東平が北から2.10m(7尺)・2.40m(8尺)で、西平はP6・P5間が2.40m(8尺)しか確認できなかった。梁行は南妻が西から150m(5尺)・2.40m(8尺)で、北妻は不明である。庇の柱間寸法は、1.95m(6.5尺)の等間隔である。

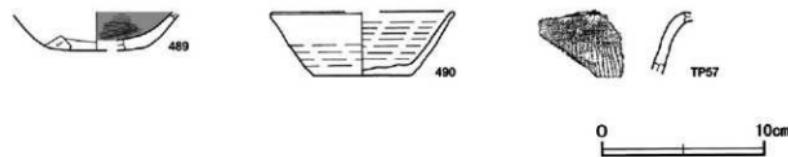
柱穴 9か所。平面形は円形または楕円形で、長径44~84cm、短径34~68cmである。深さは14~31cmで、掘方の断面形は逆台形またはU字形である。第1層は柱抜き取り痕、第2~7層は埋土である。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量	5	にふい黄褐色	粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック微量	6	にふい黄褐色	粘土粒子・砂粒中量
3	にふい黄褐色	ロームブロック少量	7	にふい黄褐色	粘土粒子・砂粒多量
4	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量			

遺物出土状況 土師器片 53 点（坏 7、高台付挽 2、高坏 1、壺類 43）、須恵器片 21 点（坏 9、蓋 3、鉢 8、壺類 1）のほか、混入した繩文土器片 8 点（深鉢）、弥生土器片 1 点（壺）が出土している。489 は P 1 内、TP57 は P 4 内、490 は P 5 内からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀前葉に比定できる。



第 198 図 第 10 号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第 10 号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第 198 図）

番号	種別	器種	口径	厚高	底径	助土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
489	土師器	环	-	[2.4]	[6.0]	良石・石英 赤色粒子・白色針状物	暗褐色	普通	体部下端手持ちハラ削り 内面横位のヘラ削り	P1 内	5%
490	須恵器	坏	[11.0]	3.9	6.1	良石・石英	灰褐色	普通	底部多方向のハラ削り	P5 内	30%
TP57	須恵器	鉢	-	(3.8)	-	良石・石英・雲母	黄褐色	普通	体部側面の平行叩き	P4 内	PL53

第 12 号掘立柱建物跡（第 199 図）

位置 3 区中央部の C 14i5 ~ C 14j6 区、標高 24.0 m の河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第 66 号住居跡、第 13・14 号掘立柱建物跡、第 110 号土坑を掘り込んでいる。第 108・109・111 号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と構造 北西コーナー部の柱穴は第 66 号住居跡と重複しており、確認できなかったが、柱穴の配列から桁行 3 間、梁行 2 間の側柱建物跡と推定できる。桁行方向は N - 68° - E の東西棟である。規模は桁行 480 m、梁行 390 m で、面積は 18.72m² である。柱間寸法は桁行が東から 1.80 m (6 尺)・1.50 m (5 尺)・1.50 m (5 尺) で、梁行は南から 1.80 m (6 尺)・2.10 m (7 尺) である。

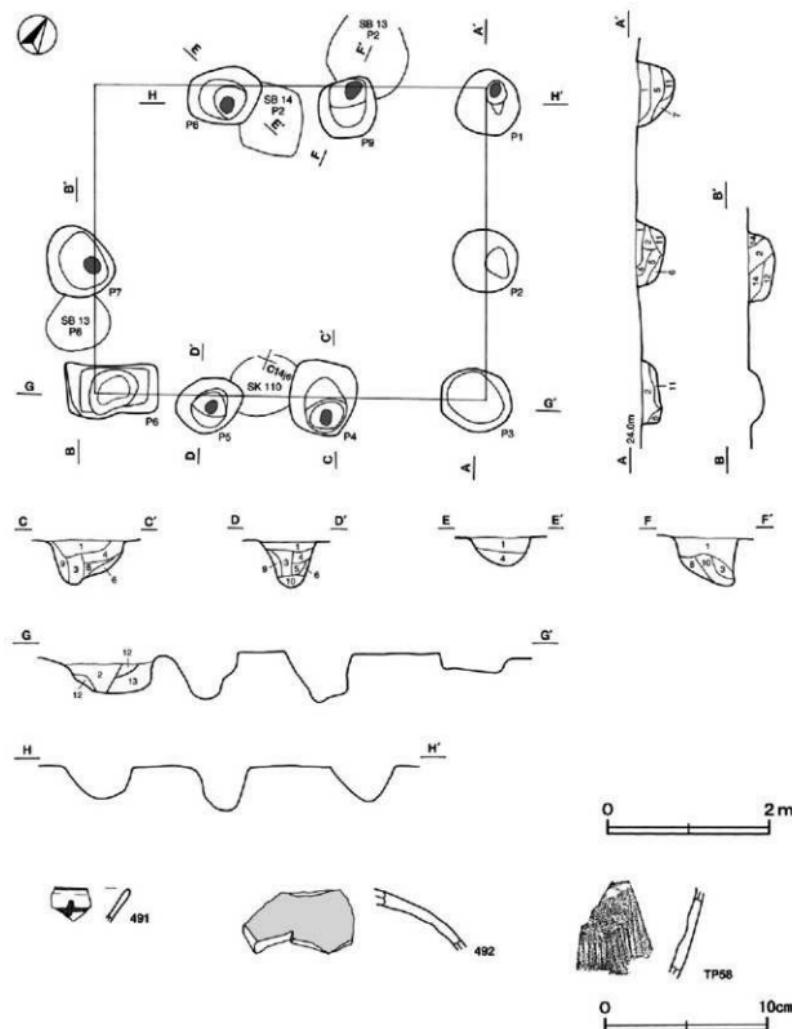
柱穴 9 か所。平面形は長方形または楕円形で、長軸・長径 80 ~ 114cm、短軸・短径 53 ~ 84cm である。深さは 18 ~ 60cm で、掘方の断面形は逆台形または U 字形である。第 1 層は柱抜き取り後の覆土、第 2・3 層は柱抜き取り痕、第 4 ~ 14 層は埋土である。第 3・6・11・14 層は締まりが強い。P 1・P 4・P 5・P 7 ~ P 9 の底面では、柱のあたりを確認した。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	8	褐色	ローム粒子少量
2	暗褐色	ローム粒子少量	9	褐色	ローム粒子少量 (8 層より締まり弱)
3	暗褐色	ロームブロック微量	10	褐色	ローム粒子中量
4	暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	11	暗褐色	ロームブロック少量 (7 層より締まり強)
5	褐色	ロームブロック少量	12	褐色	ロームブロック、繩文微量
6	褐色	ロームブロック中量	13	褐色	ロームブロック微量
7	暗褐色	ロームブロック少量	14	褐色	ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片 55 点（坏 21, 壺類 34), 須恵器片 44 点（坏 20, 高台付坏 1, 蓋 4, 盤 1, 鉢 17, 壺類 1), 灰釉陶器片 1 点（長頭瓶）のほか、混入した繩文土器片 4 点（深鉢）が出土している。TP58 は P 4 内、492 は P 8 内、491 は P 9 内からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀後葉に比定できる。



第 199 図 第 12 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第12号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第199図）

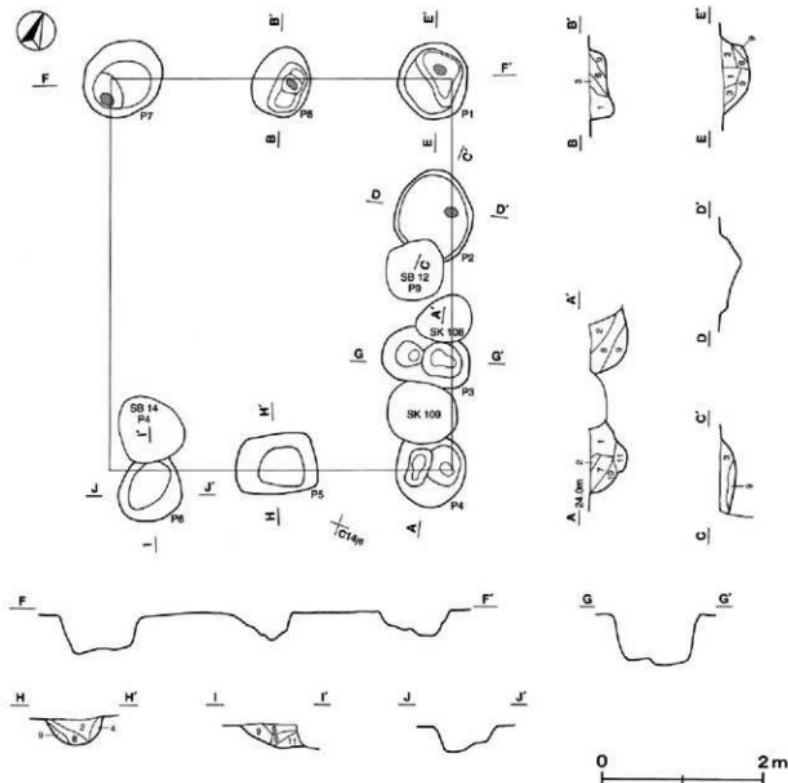
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の符號はか	出土位置	備考
491	土師器	环	-	(2.1)	-	良石・石英・雲母	灰黃褐色	普通	ロクロナダ 外面に墨書き「□」	P9内	5% PL53
492	灰釉陶器	長頭瓶	-	(3.9)	-	良石・石英・雲母	にぶい緑	普通	外表面施釉	P8内	3%
TP58	灰陶器	鉢	-	(5.7)	-	良石・雲母・赤色鉱子	黒灰	普通	体部縦位の平行叩き	P4内	PL32

第13号掘立柱建物跡（第200・201図）

位置 3区中央部のC 14h4～C 14i6区、標高24.0mの河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第66号住居跡を掘り込み、第12・14号掘立柱建物、第108・109号土坑に掘り込まれている。第111・112号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と構造 西平の中間柱穴が第66号住居跡と重複しているため確認できなかったが、柱穴の配置から桁行



第200図 第13号掘立柱建物跡実測図

3間、梁行2間の側柱建物跡と推定できる。桁行方向はN-20°-Wの南北棟である。規模は桁行4.80m、梁行4.20mで、面積は20.16m²である。柱間寸法は、P6が掘り込まれているため不明であるが、梁行は2.10m(7尺)で、桁行は東平が北妻から1.80m(6尺)・1.80m(6尺)・1.20m(5尺)である。柱筋はほぼ揃っている。

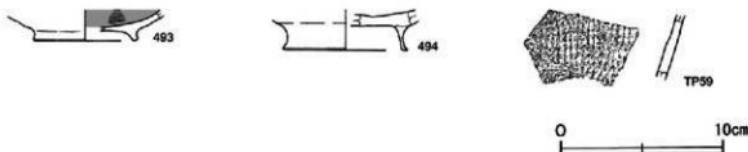
柱穴 8か所。平面形は長方形または楕円形で、長軸・長径87~110cm、短軸・短径68~96cmである。深さは28~62cmで、掘方の断面形は逆台形またはU字形である。第1・2層は柱抜き取り痕、第3~11層は埋土である。P1・P2・P7・P8の底面では、柱のあたりを確認した。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子少、焼土粒子微量	7	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック少、炭化粒子微量	8	暗褐色	ロームブロック少
3	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	9	褐色	ローム粒子中量
4	褐色	ロームブロック微量	10	褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
5	褐色	ローム粒子少、焼土粒子微量	11	褐色	ロームブロック少
6	暗褐色	ローム粒子少			

遺物出土状況 土師器片51点(坏5、高台付碗1、甕類45)、須恵器片50点(坏17、高台付坏1、蓋4、鉢9、甕類18、不明1)、灰釉陶器片2点(長頸瓶)が出土している。494はP2内、TP59はP3内、493はP8内からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。



第201図 第13号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第13号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第201図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	粘土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
493	土師器	高台付碗	-	(1.9)	(6.4)	良石・石英	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 内面横区のヘラ削り	P8内	5%
494	須恵器	高台付杯	-	(2.6)	(7.6)	良石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	P2内	5%
TP59	須恵器	鉢	-	(4.0)	-	良石・石英・黒母	黒灰	普通	体部横区の平行叩き 縦区の平行叩き	P3内	PL52

第14号掘立柱建物跡(第202図)

位置 3区中央部のC1414~C1415区、標高24.0mの河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第66号住居跡、第13号掘立柱建物跡を掘り込み、第67号住居、第12号掘立柱建物に掘り込まれている。第3号ピット群と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行2間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向N-68°-Eの東西棟である。規模は桁行4.20m、梁行3.60mで、面積は15.12m²である。柱間寸法は桁行が西妻から1.80m(6尺)・2.40m(8尺)で、梁行は1.80m(6尺)である。柱筋はほぼ揃っている。

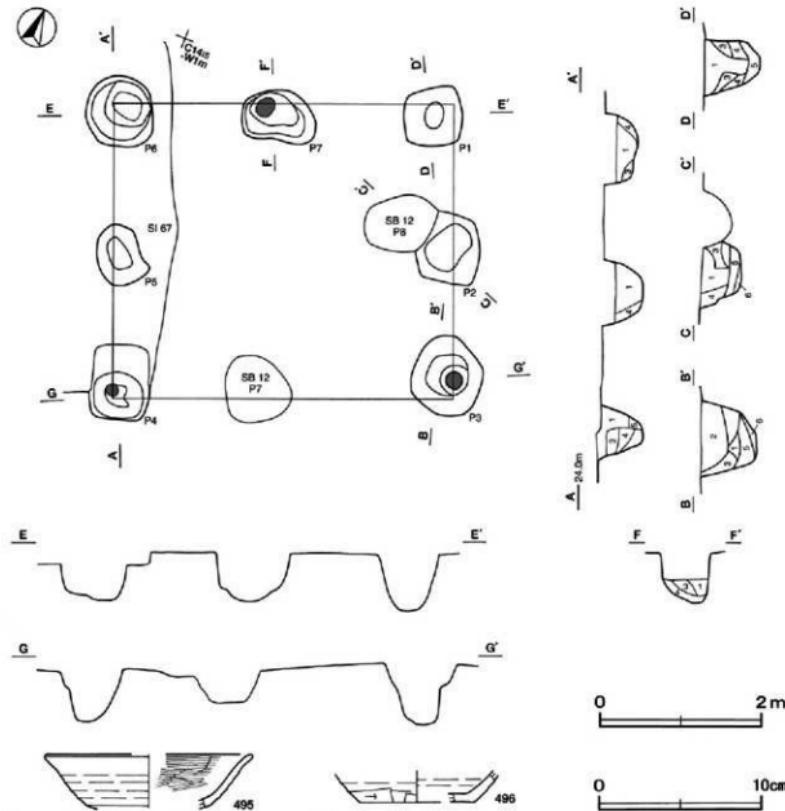
柱穴 7か所。平面形は長方形または楕円形で、長軸・長径82~98cm、短軸・短径52~90cmである。深さは20~68cmで、掘方の断面形は逆台形またはU字形である。第1・2層は柱抜き取り痕、第3~11層は埋土である。P3・P4・P7の底面では、柱のあたりを確認した。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック微量 (3層より總まり弱)	5 極暗褐色 ロームブロック微量
2 暗褐色 ロームブロック少量	6 黒褐色 ローム粒子微量
3 黒褐色 ロームブロック微量	7 暗褐色 ローム粒子少量
4 暗褐色 ロームブロック少量	

遺物出土状況 土師器片 58 点 (坏 4, 高台付椀 1, 壺類 53), 須恵器片 115 点 (坏 27, 高台付坏 5, 蓋 19, 高盤 1, 壶類 2, 鉢 14, 壺類 47), 灰釉陶器片 1 点 (瓶類) が出土している。495 は P8 内, 496 は P2 内からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀前葉に比定できる。



第 202 図 第 14 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第 14 号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第 202 図)

番号	性別	器種	口径	器高	底径	勘上	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
495	土師器	坏	(12.0)	(3.3)	-	良石・黄母・白色粒状物	黄灰	普通	内面横位のヘラ削き	P8 内	5 %
496	須恵器	坏	-	(2.0)	(7.0)	良石・石英・黄母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ切り	P2 内	5 %

第15号掘立柱建物跡（第203・204図）

位置 3区中央部のC 14i3～C 14j4区、標高24.0mの河岸段丘上位の平坦部に位置している。

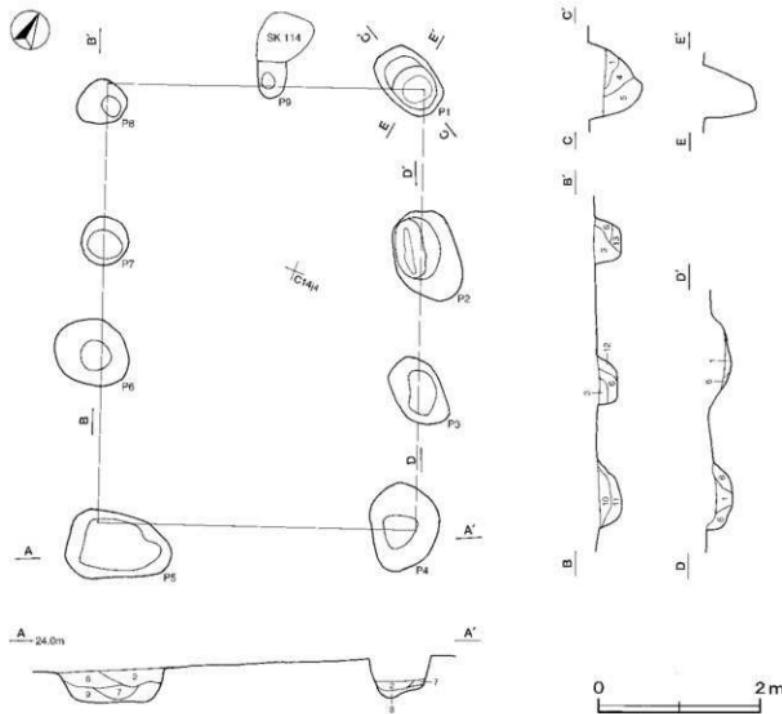
重複関係 第58・67号住居跡を掘り込み、第114号土坑に掘り込まれている。内部に第1号柱列跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と構造 南妻の中間柱穴は、第58号住居跡と重複しているため確認できなかったが、桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向N-21°-Wの南北棟である。規模は桁行5.40m、梁行3.90mで、面積は21.06m²である。柱間寸法は桁行が1.80m（6尺）の等間隔に配置されている。梁行は北妻が1.95m（6.5尺）で、南妻は中間柱穴が確認できなかった。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 9か所。平面形は円形または梢円形で、長径56～124cm、短径36～88cmである。深さは20～68cmで、掘方の断面形は逆台形またはU字形である。第1～3層は柱抜き取り痕、第4～13層は埋土である。

土層解説

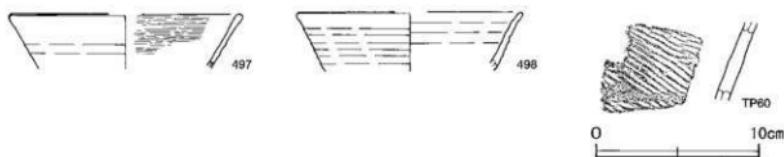
1	暗	褐	色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	8	褐	色	ロームブロック微量
2	暗	褐	色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量	9	褐	色	ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量
3	褐	色	色	ロームブロック少量	10	褐	色	ロームブロック少量、炭化物微量
4	褐	色	色	ローム粒子中量	11	褐	色	ローム粒子中量、炭化物微量
5	黒	褐	色	ロームブロック・焼土粒子微量	12	褐	色	ロームブロック中量
6	暗	褐	色	ローム粒子少量	13	暗	褐	色
7	暗	褐	色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量				ロームブロック少量



第203図 第15号掘立柱建物跡実測図

遺物出土状況 土器器片6点(坏3、壺類3)、須恵器片9点(坏4、鉢2、壺類3)が出土している。497・498はP1内、TP60はP3内からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。



第204図 第15号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第15号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第204図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
497	土器器	坏	[14.2]	(3.3)	-	長石・石英・雲母	灰黃褐色	普通	内面横位のウラ焼き	P1内	5%
498	須恵器	坏	[14.0]	(3.5)	-	長石・石英・雲母	褐灰	普通	ロクロナデ	P1内	5%
TP60	須恵器	鉢	-	(4.9)	-	長石・石英・雲母	灰黃	普通	体部斜位の平行叩き	P3内	PL32

表17 平安時代掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	構造	桁行方向	柱間数 柱×梁 (間)	規格 幅×奥 (m)	面積 (㎡)	柱間寸法	柱穴		出土遺物	時期	備考 (重複関係古→新)	
								柱間	梁間	柱穴数	平面形	深さ (cm)	
9	C14g6~C14g7	楕柱	N-73°-E	2 × 2	4.20 × 4.20	16.36	2.1	1.8~ 2.4	9	内形・ 楕円形	14~34	上土器、須恵器 9世紀中葉	SI47・62→本跡
10	C14g8~C14g9 東壁 身位 底合	(東壁)	N-72°-E	(2) × (2)	4.20 × 3.90	16.38	4.2	3.9	(6)	内形・ 楕円形	14~31	上土器、須恵器 9世紀前葉	本跡→PC2
					5.50 × 3.90 (5.00)	21.45	2.1	1.5~ 2.4	3	楕円形	14~28	上土器、須恵器 9世紀前葉	本跡→PC2
12	C14g10~C14g11 【楕柱】	N-68°-E	3 × 2	4.80 × 3.90	18.72	1.5~ 1.8	1.8~ 2.1	(9)	長方形・ 楕円形	18~60	上土器、須恵器 9世紀後葉	SI66、SB13-14、SK110→ 本跡、SK108-109-111とは 新旧不明	
13	C14g12~C14g13 【楕柱】	N-20°-W	3 × 2	4.80 × 4.20	20.16	2.1	1.2~ 1.8	(8)	長方形・ 楕円形	28~62	上土器、須恵器 9世紀後葉	SI66→本跡→SB12-14、 SK108-109 SK111-112とは新旧不明	
14	C14g14~C14g15 楕柱	N-68°-E	2 × 2	4.20 × 3.60	15.12	1.8~ 2.4	1.8	7	長方形・ 楕円形	20~68	上土器、須恵器 9世紀前葉	SI67、SB12→ 本跡→ PG3とは新旧不明	
15	C14g16~C14g17 楕柱	N-21°-W	3 × 2	5.40 × 3.90	21.06	1.8	1.95	(9)	内形・ 楕円形	20~68	上土器、須恵器 9世紀前葉	SI69-70→本跡→SK114 SA1とは新旧不明	

(3) 柱跡跡

第1号柱跡跡(第205図)

位置 3区中央部のC14i3~C14j4区、標高24.0mの河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第63号住居跡を掘り込み、第67号住居に掘り込まれている。第15号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

規模と構造 南北軸2間、東西軸1間のL字形に配置された柱穴4か所を確認した。南北軸方向はN-13°-Wで、柱間寸法は、南北方向が1.80m(6尺)、東西方向が1.50m(5尺)で、柱筋はほぼ通っている。

柱穴 平面形は円形または楕円形で、長径78~120cm、短径66~76cmである。深さは16~26cmで、掘方の断面形は逆台形またはU字形である。第1層は柱痕跡、第2~4層は埋土である。P2~P4の底面では、柱のあたりを確認した。

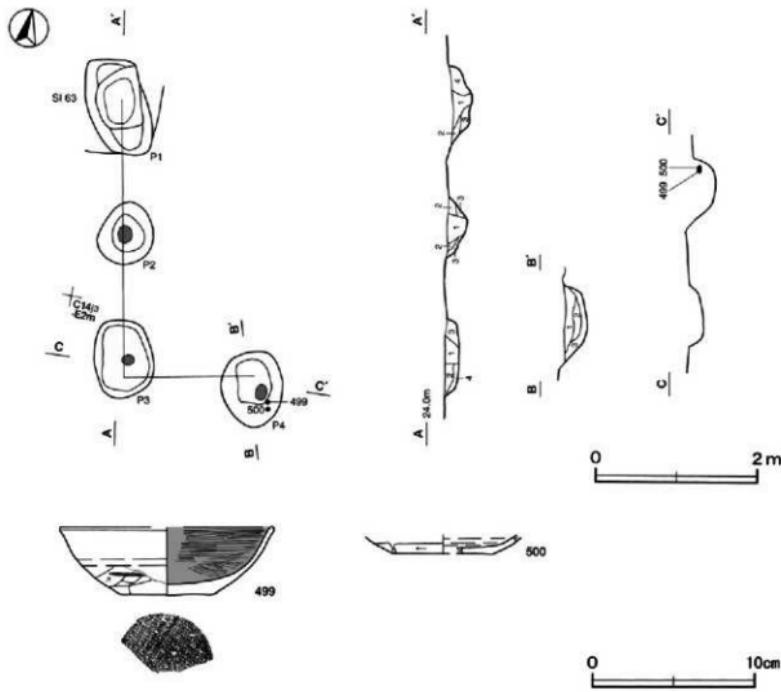
土層解説

- | | |
|-------------------------------|----------------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物・燒土粒子微量 | 3 黒褐色 粘土ブロック・砂粒少量。ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック・炭化物・砂粒微量 | 4 褐色 ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片 32 点（坏 17, 高台付碗 1, 壺類 14）, 須恵器片 7 点（坏 5, 高台付坏 1, 盖 1）のほか,

混入した縄文土器片 4 点（深鉢）が出土している。499・500 は P 4 の埋土内からそれぞれ出土している。

所見 時期は、重複関係や出土土器から 9 世紀後葉に比定できる。



第 205 図 第 1 号柱列跡・出土遺物実測図

第 1 号柱列跡出土遺物観察表（第 205 図）

番号	種別	部種	口径	部高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	ほか	出土位置	備考
499	土師器	坏	口 3.0	4.2	5.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰青褐	普通	底部下端手持ちハラ削り 内面横裂のハラ削き	P4 埋土内	40%	P1.51
500	須恵器	坏	-	(1.2)	[6.2]	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰青	普通	底部一方斜めハラ削り 外面に墨書き □	P4 埋土内	10%	底部下端手持ちハラ削り 瓶部一方斜めのハラ削り

第 2 号柱列跡（第 206 図）

位置 3 区西部の D 13a8 ~ D 13c8 区、標高 22.5 m の河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第72号住居跡を掘り込んでいる。

規模と構造 直線状に配置された柱穴4か所を確認した。軸方向はN-33°-Wで、柱間寸法は1.95m(6.5尺)の等間隔で、柱筋はほぼ通っている。

柱穴 平面形は長方形または隅丸長方形で、長軸76~99cm、短軸64~82cmである。深さは29~50cmで、掘方の断面形は逆台形またはU字形である。第1層は柱抜き取り痕、第2~4層は埋土である。P2・P3の底面では、柱のあたりを確認した。

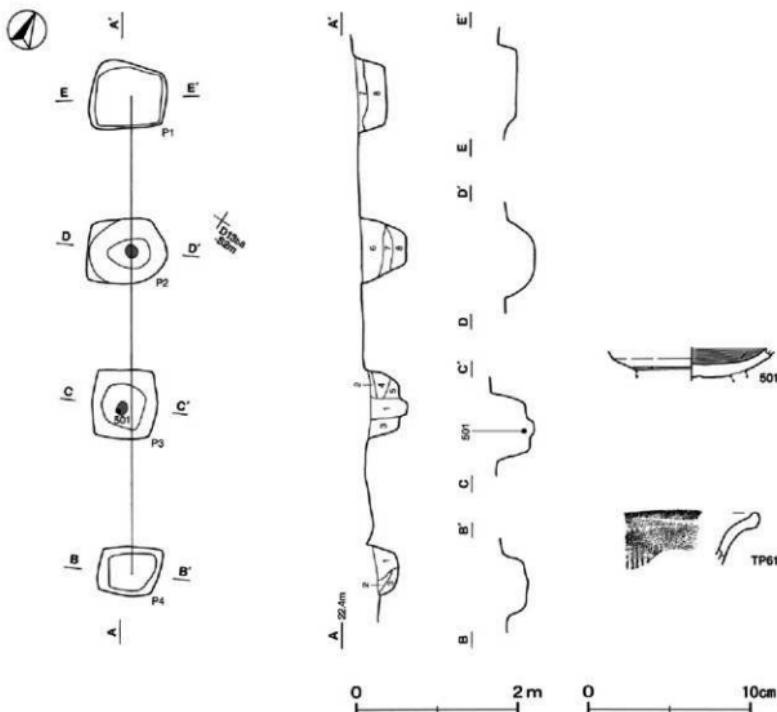
土層解説

1	褐色	ロームブロック・粘土ブロック・炭化物微量	6	暗褐色	粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量
2	暗褐色	粘土粒子少量、ロームブロック・炭化物微量	7	暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック微量
3	褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物粒子微量	8	にい青褐色	粘土ブロック・ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量
4	にい青褐色	粘土粒子中量、ロームブロック微量			
5	暗褐色	ロームブロック微量			

遺物出土状況 土師器片32点(坏17、高台付楕1、壺類14)、須恵器片7点(坏4、高台付坏1、蓋1、鉢1)

のほか、混入した繩文土器片4点(深鉢)が出土している。501はP3の柱抜き取り痕内から出土している。

所見 時期は、重複関係や出土土器から9世紀後半と推定できる。



第206図 第2号柱列跡・出土遺物実測図

第2号柱跡出土遺物観察表（第206図）

番号	種 別	器 様	口 径	器 高	底 径	胎 土	色 萬	焼 成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
501	土師器	高台付皿	-	(1.9)	-	長石・石英・雲母	褐	普通	体部下端回転ヘラ削り、内面側面のハラ削き 底部回転ヘラ削り底、高台貼り付け	P3付近多頭 立直穴	20%
TP61	埴輪器	鉢	-	(3.2)	-	長石・石英・雲母	にほい黄褐	普通	体部縦位の平行叩き	P3内	PL52

表18 平安時代柱跡一覧表

番号	立 直	軸方向	柱間数(間)	規模(m)	柱間寸法				出土遺物	時 期	備 考 (重複関係 古→新)
						柱穴数	平面形	深さ(cm)			
1	C143- C144-	N - 13° - W	2 × 1	3.6 × 1.5	1.8 1.5	4	円形 楕円形	16 - 26	土師器、埴輪器	9世紀後葉 SB15とは斜軸不規則	SB63 → 本跡 → SB67
2	D13a8- D13a9	N - 33° - W	3	5.85	1.95	4	長方形 楕木形方孔	29 - 50	土師器、埴輪器	9世紀後半	SI72 → 本跡

(4) 土坑

第60号土坑（第207図）

位置 3区中央部のC 145区、標高 24.0 m の河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第51号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南部が調査区域外へ延びているため、短軸は 1.50 m で、長軸は 1.55 m しか確認できなかった。平面形は隅丸長方形で、長軸方向は N - 20° - W である。深さは 12 ~ 32 cm で、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっているが、北東コーナー部のみ段を有している。

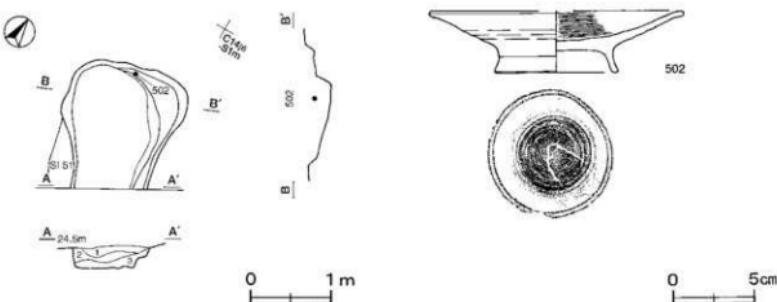
覆土 3層に分層できる。各層とも粘性が弱い不自然な状況から埋め戻されている。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|-----------------------|---|----|-----------|
| 1 | 暗褐色 | 灰化粒子少量、ロームブロック・燒土粒子微量 | 3 | 褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 | 褐色 | ロームブロック・燒土粒子・灰化粒子微量 | | | |

遺物出土状況 土師器片 1点（高台付皿）が出土している。502は北壁際の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から 9世紀後葉に比定できる。



第207図 第60号土坑・出土遺物実測図

第60号土坑出土遺物観察表（第207図）

番号	種 別	器 様	口 径	器 高	底 径	胎 土	色 萬	焼 成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
502	土師器	高台付皿	[15.3]	3.8	7.7	長石・石英・雲母	褐	普通	内面側面のハラ削き 底部回転ヘラ削り底、高台貼り付け	覆土中層	30%

第90号土坑（第208図）

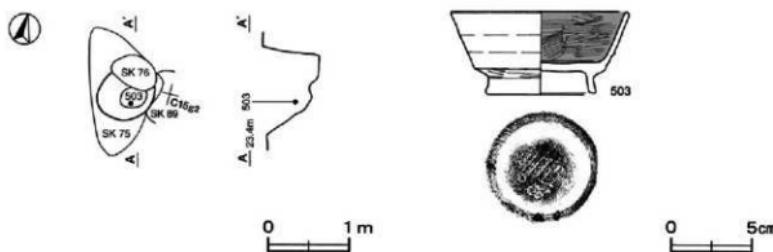
位置 3区東部のC 15g1区、標高23.0mの河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第54号住居跡、第82・89号土坑を掘り込み、第75・76号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 上部を第75号土坑、北部を第76号土坑に掘り込まれているため不鮮明である。東西軸は0.70mで、南北軸は0.66mしか確認できなかった。平面形は楕円形と推定でき、軸方向は不明である。深さは50cmで、底面は皿状である。壁は緩やかに立ち上がっている。

遺物出土状況 土師器片1点（高台付环）が出土している。ほぼ完形の503は覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。



第208図 第90号土坑・出土遺物実測図

第90号土坑出土遺物観察表（第208図）

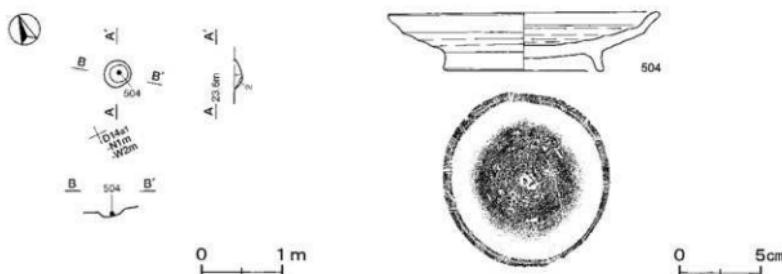
番号	種別	器種	口径	基高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	はか	出土位置	備考
503	土師器	高台付环	10.8	5.1	6.6	長石・石英	にぶい橙	普通	覆土下層、外・内面積付のヘク面	或根本	覆土下層	P1.48

第106号土坑（第209図）

位置 3区西部のC 13j0区、標高23.5mの河岸段丘上位の平坦部に位置している。

規模と形状 径0.34mの円形である。深さは8cmで、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積である。



第209図 第106号土坑・出土遺物実測図

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

2 暗褐色 ローム粒子少量・炭化粒子微量

遺物出土状況 須恵器片 1 点（盤）が出土している。504は中央部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。

第106号土坑出土遺物観察表（第209図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	鉢土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
504	須恵器	盤	16.5	3.7	9.8	長石・石英・雲母・ 磁鐵	にふい黄褐	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	覆土下層	95% P.L.48

第114号土坑（第210図）

位置 3区中央部のC 1413区、標高24.0mの河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第63号住居跡、第15号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.76m、短径0.60mの楕円形で、長径方向はN-43°Wである。深さは18cmで、底面は皿状である。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックや粘土粒子を含む不自然な状況から埋め戻されている。

土層解説

1 暗赤褐色 炭化物・ローム粒子少量・粘土粒子・砂粒微量

2 暗褐色 ロームブロック少量・焼土粒子・炭化粒子・粘

土粒子・砂粒微量

3 暗褐色 粘土粒子・砂粒少量・ロームブロック・炭化粒

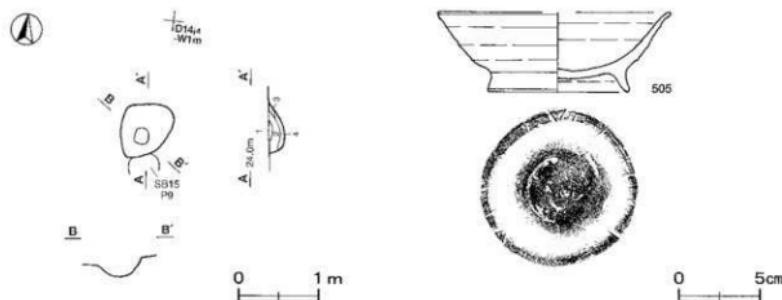
子微量

4 褐色 ロームブロック中量・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片12点（环3、甕類9）、須恵器片4点（环1、高台付环1、鉢2）が出土している。

505は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。



第210図 第114号土坑・出土遺物実測図

第114号土坑出土遺物観察表（第210図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	鉢土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
505	須恵器	高台付环	14.4	4.9	8.6	長石・石英・雲母・ 磁鐵	にふい橙	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	覆土中	80% P.L.48

表19 平安時代土坑一覧表

番号	位 置	長軸(往)方向	平面形	規 模 (m)		底面	覆土	主な出土遺物	時 期	備 考 (重複開拓 古→新)
				長軸(往) × 短軸(往)	深さ(cm)					
60	C 14b5	N - 20° - W	[周丸長方型]	(1.55) × 1.50	12~32	外傾	平坦	人為 土器器	9世紀後葉	S51 → 本跡
90	C 15g1	-	[椭円形]	0.70 × 0.66	50	傾斜	圓状	不明 土器器	9世紀前葉	S54 SK82 · 89 → 本跡 → SK75 · 76
106	C 13g9	-	円形	0.34 × 0.34	8	外傾	圓状	自然 須恵器	9世紀前葉	
114	C 14g3	N - 43° - W	椭円形	0.26 × 0.60	18	傾斜	圓状	人為 土器器、須恵器	9世紀後葉	S63 SB15 → 本跡

(5) 溝跡

第9号溝跡 (第211~213図)

位置 3区東部のC 14b0 ~ C 15d3区、標高230~235mの河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第46・54~56号住居跡、第57号土坑を掘り込み、第52・66・80号土坑、第2号ピット群、第7・8号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南端部及び北東端部が調査区域外へ延びているため、長さは2250mほどしか確認できなかった。C 15h1区から標高237mほどの高さで、北西方向(N - 28° - W)へ750mほど直線的に延び、C 14g0区ではほぼ90度北東方向(N - 50° - E)へ屈曲して15.00mほど緩やかに下っている。規模は上幅1.60~2.00m、下幅0.42~0.98mで、南部が北東部に比べてやや幅広である。深さは30~52cmで、底面の標高は南端部23.27m、屈曲部23.20m、東端部22.40mで、底面は南端部から屈曲部まではほぼ同じ高さで、東端部に向かって若干低くなっている。断面形は逆台形かU字形で、壁は北東部の北壁が緩やかに立ち上がっているが、ほかは外傾して立ち上がりっている。

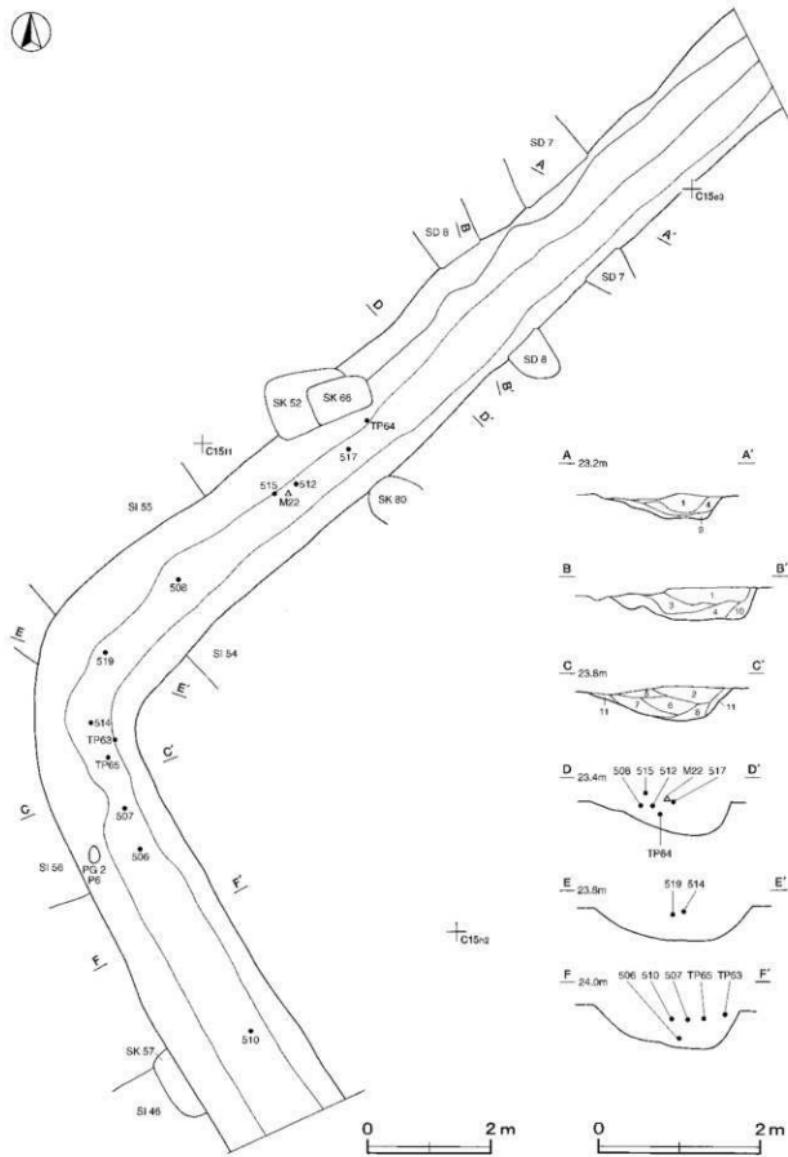
覆土 A-A' が3層、B-B' が4層、C-C' が6層に分層できる。いずれもレンズ状に堆積していることから自然堆積である。

土層解説

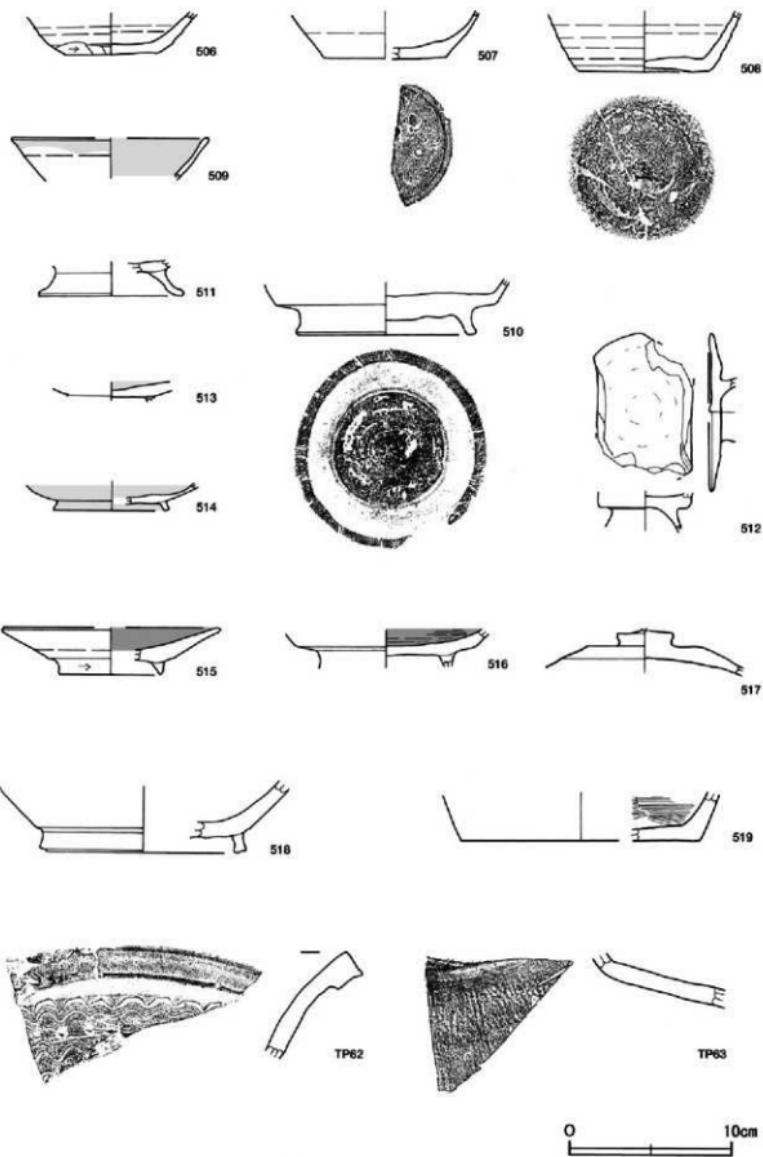
1	黒	褐	色	ローム粒子、燒土粒子、炭化粒子微量	7	黒	褐	色	ロームブロック、燒土粒子微量
2	暗	褐	色	ローム粒子微量、燒土粒子微量	8	暗	褐	色	ローム粒子微量
3	無	暗	褐色	ロームブロック、燒土粒子、粘土粒子、炭化粒子微量	9	黒	褐	色	ロームブロック微量
4	黒	褐	色	粘土ブロック、ローム粒子、燒土粒子微量	10	暗	褐	色	ローム粒子微量、炭化粒子微量
5	黒	褐	色	ローム粒子微量	11	暗	褐	色	ロームブロック微量
6	黒	褐	色	ローム粒子微量、燒土粒子微量					

遺物出土状況 土器器片996点(坏260、高台付楕67、高台付坏1、高台付皿1、耳皿1、鉢1、甌644、瓶1)、須恵器片539点(坏173、高台付坏45、蓋41、盤6、高盤3、鉢199、瓶類13、甌54、瓶5)、灰釉陶器片8点(楕3、皿1、瓶類4)、綠釉陶器片1点(皿)、土製品4点(管状土錐1、支脚1、不明2)、鐵製品4点(釘1、鎌2、不明1)、瓦2点(丸瓦、平瓦)、楕状溝2点、蝶1点(雲母片岩片)のほか、流れ込んだ繩文土器片86点(深鉢)、石核3点(チャート)、剥片3点(石英2、頁岩1)、混入した中世陶器片17点(甌類)、中世瓦2点が出土している。510は南部の覆土中層から出土している。506は屈曲部の覆土下層、507・TP63・TP65は屈曲部の覆土中層、508・514・519は屈曲部の覆土上層からそれぞれ出土している。512は屈曲部北側の覆土下層、515・517・M 22は屈曲部北側の覆土上層からそれぞれ出土している。509・511・513・516・518・TP62・M 21は覆土中層からそれぞれ出土しているなど、そのほかの土器も覆土上層から覆土中層にかけて多量に出土しており、廃絶後の埋没段階で投棄されたものとみられる。

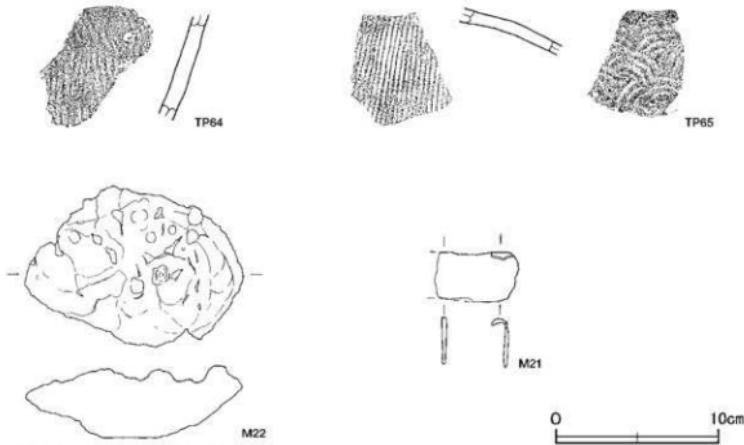
所見 時期は、出土土器から9世紀後葉には機能を終え、投棄場として利用したものと推定できる。第56号住居跡を掘り込んでいることから、短期間の使用であったことが推定できる。本跡の両端が削平された調査区域外へ延びているため、全容は明らかでないが、L字形の形状から何らかの区画溝の可能性がある。



第211図 第9号溝跡実測図



第212図 第9号溝跡出土遺物実測図（1）



第213図 第9号溝跡出土遺物実測図（2）

第9号溝跡出土遺物観察表（第212・213図）

番号	種 別	器 樹	口 径	部 高	底 径	鉢 土	色 调	焼 成	手 法 の 特 徴 は か	出 土 位 置	備 考	
506	灰陶器	环	-	(2.6)	[5.6]	長石・石英・雲母・赤色粒子・黒色粒子	に赤い黄 普通	体部下端手付ちへラ削り 底部回転へラ削り 頭を複数一方斜めのへラ削り	覆土上層	20%		
507	灰陶器	环	-	(2.9)	[7.6]	長石・石英・雲母	に赤い褐	不良 ロクロナデ 底部ナデ	覆土中層	10%		
508	灰陶器	环	-	(3.0)	8.0	長石・石英・雲母	黄灰	普通 体部下端回転へラ削り 底部回転へラ削り頭 を複数一方斜めのへラ削り	覆土上層	50%		
509	灰陶陶器	碗	[12.0]	(2.6)	-	長石	白灰	精 沈押アーチ 筋 勉強アーチ 筋 土付	ロクロナデ 白練部外・内面施釉	覆土中	10%	
510	灰陶器	高台付环	-	(3.4)	10.8	長石・石英・ 黑色粒子	黄灰	普通 底部回転へラ削り後、高台貼り付け	覆土下層	50%		
511	土脚器	高台付碗	-	(2.2)	[8.6]	長石・石英・ 赤色粒子	褐	普通 内面へラ削き 底部高台貼り付け	覆土中	5%		
512	土脚器	耳皿	-	(2.4)	-	長石・石英・雲母	褐	普通 ロクロナデ 底部高台貼り付け	覆土下層	5%	PL49	
513	灰陶陶器	皿	-	(1.2)	-	長石	白灰	精 沈押アーチ 筋 土付	内面施釉	覆土中	10%	
514	灰陶陶器	皿	-	(1.7)	[7.1]	長石	白灰	精 沈押アーチ 筋 土付	外・内面施釉 底部高台貼り付け	覆土上層	20%	PL52
515	土脚器	高台付碗	[13.3]	2.9	[6.3]	長石・石英・雲母	に赤い褐	普通 頭部下端回転へラ削り 底部回転へラ削り 内面施釉	覆土上層	30%		
516	土脚器	高台付杯	-	(2.4)	-	長石・石英・ 赤色粒子	明赤褐色	普通 明赤褐色 内面施釉	高台貼り付け	覆土中	20%	
517	灰陶器	皿	-	(2.8)	-	長石・石英・ 赤色粒子・細繩	褐灰	普通 天井回転へラ削り	覆土上層	20%		
518	灰陶器	瓶	-	(4.5)	[11.6]	長石・石英・ 赤色粒子	黄灰	普通 細繩自然輪 底部回転へラ削り後、高台貼り 付け	覆土中	5%		
519	土脚器	鉢	-	(3.0)	[14.6]	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	褐	普通 内面横筋のへラ削り 内面横筋のへラ削り 底部ナデ	覆土上層	5%		
TP62	灰陶器	甌	-	(6.6)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通 陶盤6本の輪掛波状文を2段以上	覆土中	PL52		
TP63	灰陶器	甌	-	(3.4)	-	長石・石英	灰	普通 体部縦位の平行明き	覆土中層	PL52		
TP64	灰陶器	鉢	-	(6.4)	-	長石・石英	灰	普通 体部縦位の平行明き	覆土中層	PL52		
TP65	灰陶器	甌	-	(2.8)	-	長石・石英	灰	普通 体部縦位の平行明き 内面同心円状の当て具	覆土中層	PL52		

番号	器 樹	長さ	幅	厚さ	重 量	材 質	特 徴	出 土 位 置	備 考
M 21	罐	(5.2)	4.1	0.3	(15.2)	鐵	断面長方形 先端部欠損	覆土中	PL54

番号	器 樹	長さ	幅	厚さ	重 量	材 質	特 徴	出 土 位 置	備 考
M 22	施淡涙	9.9	13.4	4.5	662.9	陶	地色は黒褐色 表面は輪紋状突起及び乳孔が点在し、凹凸がある。裏面は施淡で凹凸少ない。	覆土上層	PL54

4 中世の遺構と遺物

当時代の遺構は、墓坑1基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

墓坑

第95号土坑（第214・215図）

位置 3区西部のD13b9区、標高225mの河岸段丘上位の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸1.15m、短軸0.78mの長方形で、長軸方向はN-56°Wである。深さは27cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックが多量に含まれていることから埋め戻されている。

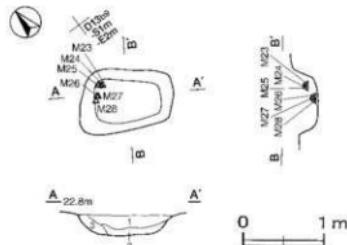
土層解説

- 1 褐 色 ローム粒子少量
- 2 褐 色 ロームブロック少量
- 3 塗 褐 色 ロームブロック少量

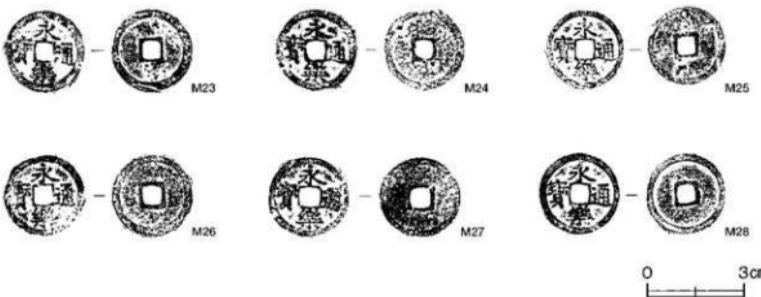
遺物出土状況 古銭6点（永楽通寶）が出土している。

ほかに混入した土器片8点（壺5、甌類3）、須恵器片6点（壺4、鉢2）が出土している。M23～M25は北コーナー部の覆土中層、M26～M28は西壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から中世後半（15世紀後半から16世紀後半）と推測できる。骨片は確認できなかつたが、古銭の出土状況が六道銭とみられることから墓坑である。



第214図 第95号土坑実測図



第215図 第95号土坑出土遺物実測図

第95号土坑出土遺物観察表（第215図）

番号	銭名	径	孔幅	重量	相隔年	材質	特徴	出土位置	備考
M23	永楽通寶	2.52	0.56	3.7	1408	銅	明銭 無背	覆土中層	P154
M24	永楽通寶	2.58	0.57	3.3	1408	銅	明銭 無背	覆土中層	P154
M25	永楽通寶	2.42	0.55	2.5	1408	銅	明銭 無背	覆土中層	P154

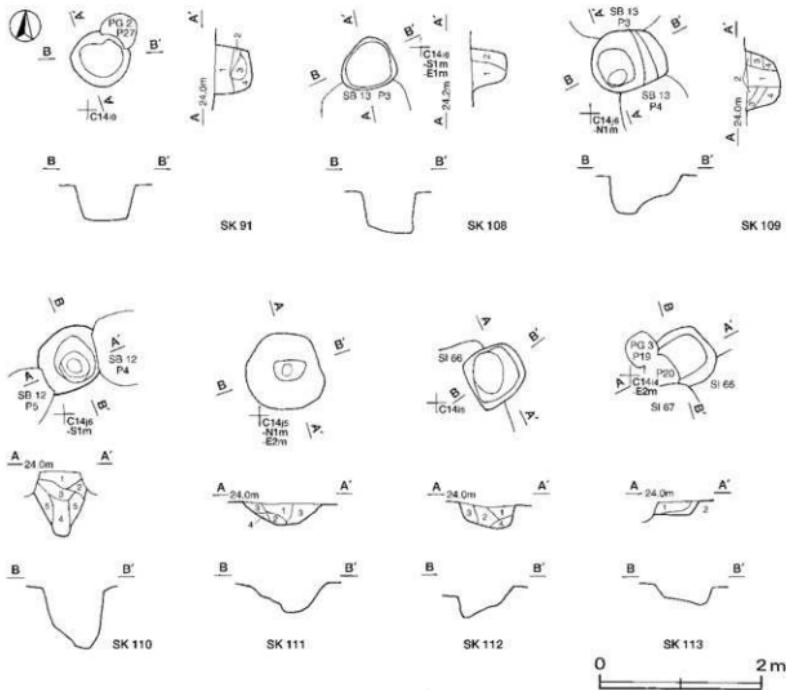
番号	鉢名	径	孔幅	重量	初期年	材質	特徴	出土位置	備考
M 26	水葉通貫	2.50	0.60	2.2	1408	銅	明鏡 無背	覆土下層	PL54
M 27	水葉通貫	2.51	0.59	2.3	1408	銅	明鏡 無背	覆土下層	PL54
M 28	水葉通貫	2.50	0.58	3.2	1408	銅	明鏡 無背	覆土下層	PL54

5 その他の遺構と遺物

今回の調査で、本跡に伴う遺物が出土していないことから、時期が明らかでない柱穴の可能性がある土坑7基、土坑41基、溝跡3条、ピット群3か所を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 柱穴の可能性がある土坑（第216図）

今回の調査で、建物跡は想定できないが、形状や土層の堆積状況から柱穴の可能性がある土坑7基を確認した。これらの土坑については、規模・形状などについて実測図（第216図）、土層解説と一覧表を掲載するにとどめる。



第216図 第91・108～113号土坑実測図

第 91 号土坑土層解説

- 1 にふい・褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量。燒土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量
- 4 にふい・褐色 ロームブロック少量

第 108 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黑褐色 ローム粒子微量

第 109 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 斜暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック中量

第 110 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 斜暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 黑褐色 ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子微量
- 5 黑褐色 ロームブロック・炭化物微量

表20 柱穴の可能性がある土坑一覧表

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規格(m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (重複関係 古→新)
				長軸(径) × 短軸(径)	深さ(cm)					
91	C14b6	-	円形	0.72 × 0.69	43	外傾	平坦	-	礫文土器、土師器、埴造器	本跡 → PG2
108	C146	N - 47° - E	楕円形	0.70 × 0.63	50	直立	平坦	-	土師器、須恵器	SB13 → 本跡、SB12とは新旧不明
109	C146	N - 78° - E	楕円形	0.90 × 0.80	45	外傾	平坦	-	礫文土器、土師器、須恵器、灰陶器	SB13 → 本跡、SB12とは新旧不明
110	C146	-	[円形]	0.73 × 0.70	75	外傾	平坦	-	土師器、須恵器	本跡 → SB12
111	C145	-	円形	1.00 × 0.98	34	傾斜	平坦	-	土師器、須恵器	SB12-13-14とは新旧不明
112	C14b5	N - 57° - E	方形	0.70 × 0.68	30	外傾	平坦	-		SB66 → 本跡
113	C14b4	-	[円形]	0.72 × 0.68	18	外傾	平坦	-	礫文土器、土師器、須恵器、灰陶器、埴造	SB66 → 本跡 → SB67, PG3

(2) 土坑

今回の調査で、性格や時期が不明な土坑 40 基のうち、出土遺物や重複関係から古代の土坑と考えられる 3 基については文章で説明する。その他の土坑については、規模・形状等について一覧表と実測図（第 220 ~ 222 図）を掲載するにとどめる。

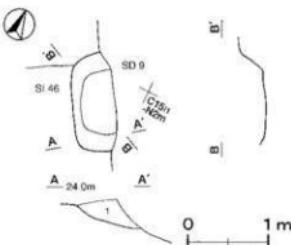
第 57 号土坑（第 217 図）

位置 3 区東部の C 14h0 区、標高 24.0 m の河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第 46 号住居跡を掘り込み、第 9 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 東部を第 9 号溝に掘り込まれているため、北西・南東軸は 1.20 m で、北東・南西軸は 0.50 m しか確認できなかった。

平面形は方形あるいは長方形と推定できる。深さは 30 cm、底面が平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。



第 217 図 第 57 号土坑実測図

覆土 単一層である。ロームブロックが含まれており、粘性、締まりともに弱いことから埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・炭化物微量

所見 時期は、重複関係から8世紀中葉よりも新しく、9世紀後葉以前とみられるが、出土土器がないため詳細は不明である。

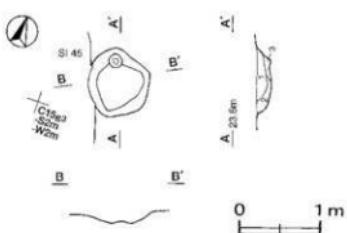
第88号土坑（第218図）

位置 3区東部のC 15g2区、標高23.5mの河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第45号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長径0.80m、短径0.78mの不整円形である。深さは12cm、底面が平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 3層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積である。



第218図 第88号土坑実測図

土層解説

1 喀褐色 ローム粒子少量・燒土ブロック・炭化粒子微量
2 喀褐色 ローム粒子少量・燒土粒子微量
3 喀褐色 ローム粒子中量・燒土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片11点（甕類）、須恵器片12点（坪4、高台付坪1、蓋4、鉢3）が出土している。出土土器は埋没過程で流れ込んだものとみられるもので、細片のため図示できない。

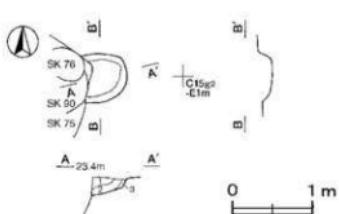
所見 時期は、重複関係から9世紀後葉以前とみられるが、詳細は不明である。

第89号土坑（第219図）

位置 3区東部のC 15a2区、標高23.5mの河岸段丘上位の平坦部に位置している。

重複関係 第54号住居跡に掘り込み、第75・76・90号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 西部を第75・76号土坑に掘り込まれていることから、南北軸は0.60mで、東西軸は0.44mしか確認できなかった。平面形は梢円形と推定できる。深さは16cm、底面が平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。



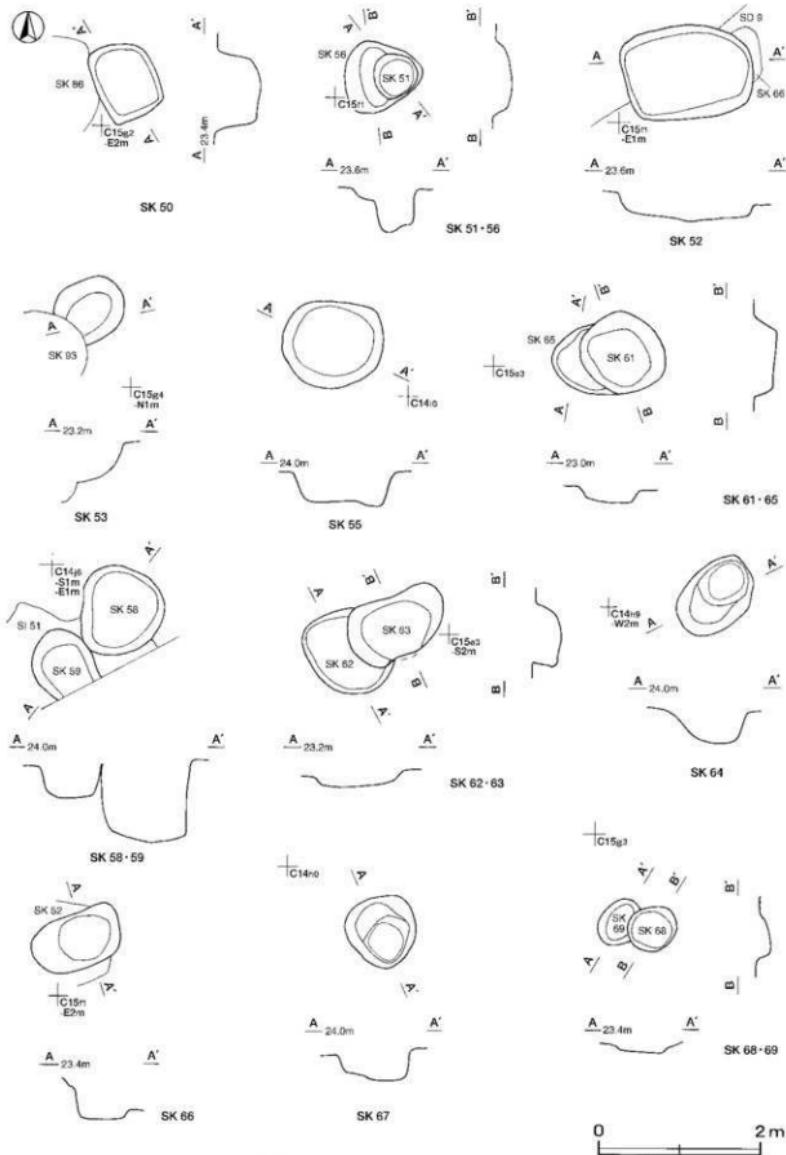
第219図 第89号土坑実測図

覆土 3層に分層できる。焼土ブロックや炭化物を含む不自然な状況から埋め戻されている。

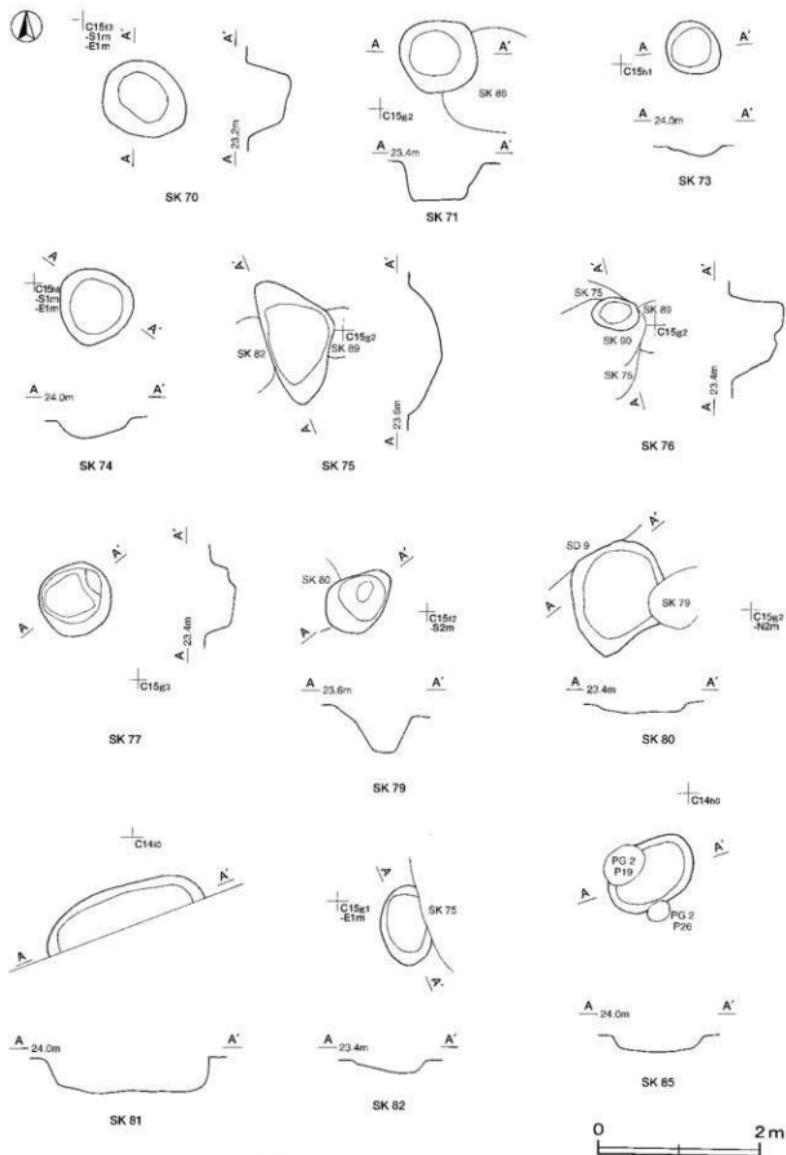
土層解説

1 喀褐色 ロームブロック・燒土ブロック・炭化物微量
2 黒褐色 炭化物・ローム粒子・燒土粒子・粘土粒子・移校微量
3 喀褐色 ローム粒子少量

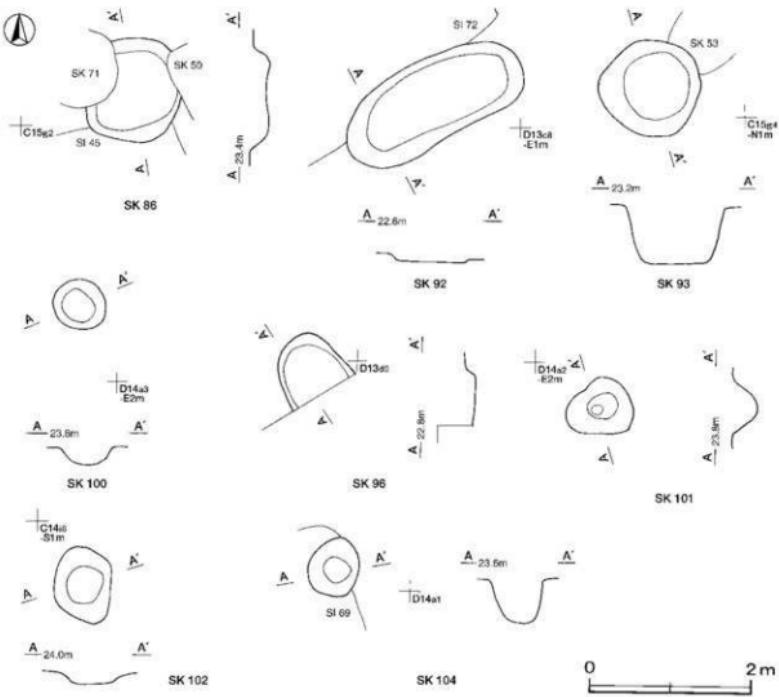
所見 時期は、重複関係から4世紀前半よりも新しく、9世紀前葉以前とみられるが、出土土器がないため詳細は不明である。



第220図 その他の土坑実測図（1）



第221図 その他の土坑実測図（2）



第222図 その他の土坑実測図(3)

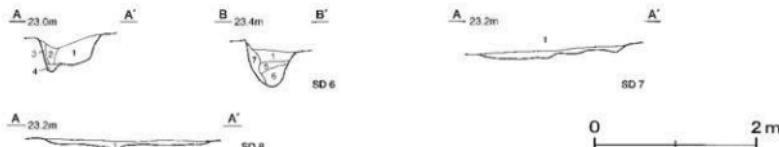
表21 その他の土坑一覧表

番号	位 置	長軸(徑)方向	平面形	規 模 (m)		壁面	底面	覆土	主な 所 土 遺物	備 考 (重複関係 古→新)
				長軸(徑) × 短軸(徑)	深さ(cm)					
50	C15e2	N - 23° - W	長方形	0.97 × 0.78	53	外傾	平坦	人為	縞文土器、土師器、須恵器	SD4-68, SK86 → 本跡
51	C15e1	-	円形	0.52 × 0.52	50	直立	圓状	人為	縞文土器、土師器、須恵器	SK56 → 本跡
52	C15e1	N - 78° - E	橢丸長方形	1.60 × 1.15	22	外傾	平坦	自然	縞文土器、土師器、須恵器	SD4, SD9 → 本跡 → SK96
53	C15g3	-	〔円形〕	0.75 × (0.70)	40	外傾	平坦	自然	土師器、須恵器	本跡 → SK93
55	C14e9	N - 66° - W	橢円形	1.25 × 1.08	35	外傾	平坦	人為	縞文土器、土師器、須恵器	
56	C15e1	-	不要円形	0.96 × 0.90	20	縞斜	平坦	自然	土師器、須恵器	本跡 → SK51
57	C14e6	-	〔長方形〕	1.20 × (0.50)	30	縞斜	平坦	人為		SD46 → 本跡 → SD9
58	C14e6	-	円形	1.15 × 1.06	100	外傾	平坦	人為		SD51 → 本跡
59	C14e6	N - 29° - W	〔橢円形〕	(0.80) × 0.77	37	外傾	平坦	自然	平瓦	SD51 → 本跡
61	C15d3	-	円形	1.03 × 0.97	28	外傾	平坦	人為		SK65 → 本跡
62	C15e2	N - 40° - W	〔橢円形〕	1.15 × (0.55)	14	縞斜	平坦	自然		本跡 → SK63
63	C15e2	N - 63° - E	不整然円形	1.28 × 0.70	32	外傾	平坦	人為	縞文土器、土師器、須恵器	SK62 → 本跡
64	C14g8	N - 50° - E	橢円形	1.07 × 0.75	39	外傾	平坦	人為	縞文土器、土師器	
65	C15d3	-	〔円形・橢円形〕	0.78 × (0.37)	17	縞斜	平坦	人為		本跡 → SK61

番号	位置	長軸(往)方向	平面形	規模(m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (重複周辺 古→新)
				長軸(往) × 幅軸(往)	深さ(cm)					
66	C15e1	N - 67° - E	楕円形	1.17 × 0.68	52	外傾 平坦	人為	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器	SD4、SD9、SK52 → 本跡	
67	C1469	-	円形	0.85 × 0.83	36	外傾 平坦	人為	縄文土器、土師器、須恵器	SD4、SD9、SK52 → 本跡	
68	C15g3	N - 56° - E	楕円形	0.63 × 0.56	15	外傾 平坦	人為	弥生土器、土師器、須恵器	SD69 → 本跡	
69	C15g3	N - 30° - E	【楕円形】	0.65 × (0.33)	6	破片 平坦	不明	須恵器	本跡 → SK68	
70	C15d3	N - 52° - W	楕円形	1.10 × 0.90	53	外傾 平坦	人為	縄文土器、土師器、須恵器、陶器	SD66 → 本跡	
71	C15d2	-	円形	0.97 × 0.97	45	外傾 平坦	人為	土師器、須恵器	SD4、SK86 → 本跡	
73	C15g1	N - 50° - W	楕円形	0.71 × 0.63	11	破片 平坦	自然	縄文土器、土師器、須恵器		
74	C15h1	-	円形	0.98 × 0.92	22	破片 平坦	人為	土師器、須恵器		
75	C15g1	N - 20° - W	不整地円形	1.60 × 0.90	40	破片 斜状	人為		SD45-54、SK76-82-89-90 → 本跡	
76	C15d1	N - 75° - W	楕円形	0.60 × 0.40	70	直立 平坦	人為	土師器、須恵器	SD4、SK89-90 → 本跡 → SK73	
77	C15d2	-	円形	0.90 × 0.85	32	外傾 平坦	人為	土師器、須恵器	SD68 → 本跡	
79	C15d1	N - 50° - E	楕円形	0.94 × 0.67	55	外傾 平坦	人為	土師器、須恵器	SD4、SK80 → 本跡	
80	C15d1	N - 17° - E	不整地円形	1.47 × 1.22	8	破片 平坦	人為		SD99 → 本跡 → SK79	
81	C1469	N - 68° - E	【楕円形】	2.00 × (0.96)	45	外傾 凹凸	人為	縄文土器、土師器、須恵器	PG2 → 本跡	
82	C15g1	N - 2° - E	【楕円形】	0.97 × (0.96)	14	破片 平坦	人為		SD4 → 本跡 → SK75-90	
85	C1469	N - 38° - E	楕円形	1.15 × 0.80	20	外傾 平坦	不明	縄文土器、土師器、須恵器	本跡 → PG2	
86	C15d2	N - 12° - W	楕円形	1.30 × 1.36	20	破片 平坦	人為	土師器	SD45-54 → 本跡 → SK50-71	
88	C15g2	-	不整地円形	0.80 × 0.28	12	破片 平坦	自然	土師器、須恵器	本跡 → SD45	
89	C15g2	-	【楕円形】	0.60 × (0.69)	16	外傾 平坦	人為		SD4 → 本跡 → SK75-76-90	
92	D13d7	N - 64° - E	楕円形	2.38 × 1.02	8	破片 平坦	自然		SD72 → 本跡	
93	C15d3	-	円形	1.27 × 1.22	71	外傾 平坦	人為	縄文土器、土師器、須恵器、陶器	SD68、SK53 → 本跡	
96	D13d9	N - 35° - W	【楕円形】	(0.85) × 0.25	15	外傾 平坦	人為	土師器、須恵器		
100	C14d3	N - 32° - W	楕円形	0.67 × 0.60	19	外傾 斜状	人為	土師器	SD33 → 本跡	
101	D14a2	N - 69° - E	楕円形	0.82 × 0.70	30	外傾 斜状	人為	土師器		
102	C1468	N - 20° - W	楕円形	0.97 × 0.72	12	破片 平坦	人為			
104	C13d0	N - 15° - E	楕円形	0.74 × 0.60	53	外傾 平坦	不明	須恵器	SD69 → 本跡	

(3) 溝跡 (第 223・229 図)

今回の調査で、確認した時期不明の溝跡 3 条の規模については一覧表で、土層断面図 (第 223 図) と土層解説については造構順に掲載し、平面図については造構全体図 (第 229 図) で掲載する。



第 223 図 第 6 ~ 8 号溝跡実測図

第 6 号溝跡土層解説

- | | | | | | |
|-------|----|----------------|-------|----|-----------|
| 1 暗褐色 | 褐色 | ロームブロック少量 | 5 暗褐色 | 褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 褐色 | 褐色 | ローム粒子少量、粘土粒子微量 | 6 褐色 | 褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 黒褐色 | 褐色 | ローム粒子少量、炭化物微量 | 7 褐色 | 褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 暗褐色 | 褐色 | ローム粒子、粘土粒子少量 | | | |

第7号溝跡土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量

第8号溝跡土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量、粘土粒子、炭化粒子微量

表22 その他の溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模 (m. 深さ(cm))				断面形	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				長さ	上幅	下幅	深さ						
6	C15e3-C15e4	N-43°-W N-48°-E	L字状	(1185)	0.50-0.90	0.08-0.23	32-44	U字形	外傾	直線	人為	礎文土器、土師器、灰 陶器、灰陶瓦器、陶器 器、土質品、鉄製品 瓦	S168→本跡
7	C15d1-C15e2	N-29°-W	直線状	(6.40)	0.67-1.30	0.50-1.11	10	浅いU字形	緩斜	凹凸	人為	礎文土器、劣生土器、 土師器、瓦器、土器 質土器、陶器	S144, SD9→本跡
8	C15d1-C15e2	N-35°-W	直線状	(7.10)	0.45-0.90	0.34-0.75	10	浅いU字形	緩斜	凹凸	人為	土師器、瓦器	S144, SD9→本跡

(4) ピット群

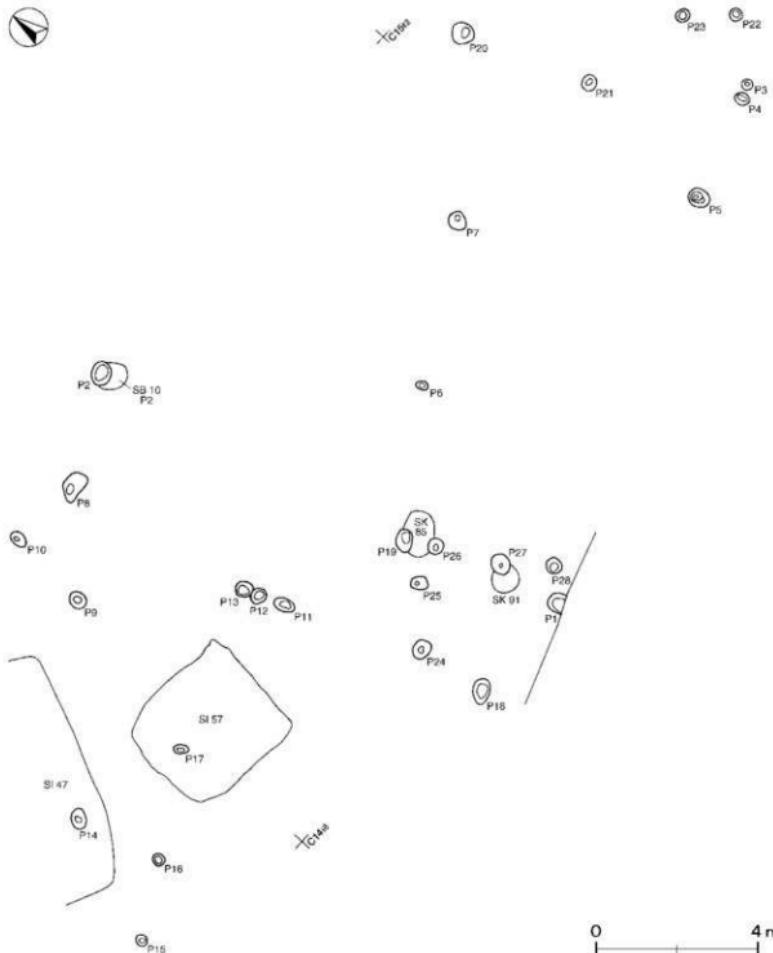
今回の調査で確認したピット群3か所については、いずれも建物跡を想定できるような配置ではなく、時期も不明である。ここではピットごとの計測表と平面図を掲載する。

第2号ピット群 (第224図)

3区東部の標高23.0~23.5 m. C 14f8~C 14i9区にかけての東西27m, 南北12mの範囲から、柱穴状のピット28か所を確認した。平面形は長径26~75cmの円形または楕円形で、深さが15~81cmである。ピットの分布状況から建物跡は想定できない。覆土中から繩文土器片や土師器片、須恵器片、灰釉陶器片が出土しているピットもあるが、いずれも細片である。時期・性格ともに不明である。

第2号ピット群計測表

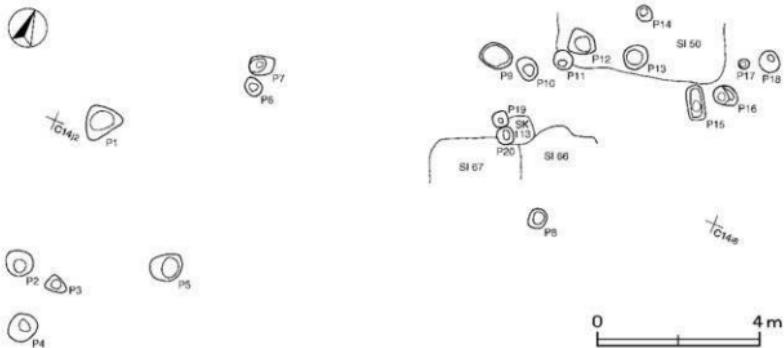
番号	座標	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	C14e0	楕円形	49	(40)	59	15	C14b6	楕円形	30	26	33
2	C14e9	楕円形	60	51	24	16	C14h7	円形	30	28	28
3	C15g3	円形	29	29	32	17	C14h7	楕円形	36	24	43
4	C15g3	楕円形	38	32	57	18	C14g9	楕円形	61	42	25
5	C15h2	楕円形	52	43	54	19	C14h9	楕円形	60	40	41
6	C14g0	楕円形	26	20	46	20	C15f2	楕円形	58	52	15
7	C15h1	楕円形	50	42	25	21	C15g2	楕円形	40	35	20
8	C14g8	楕円形	75	42	81	22	C15g3	円形	30	30	46
9	C14g8	楕円形	42	38	65	23	C15g3	楕円形	35	30	27
10	C14h8	円形	30	30	29	24	C14h9	楕円形	52	42	35
11	C14h9	楕円形	52	32	46	25	C14h9	楕円形	43	33	38
12	C14h8	楕円形	41	37	40	26	C14h9	円形	40	39	35
13	C14h8	円形	42	40	27	27	C14h0	楕円形	55	45	35
14	C14h7	楕円形	50	38	65	28	C14h0	円形	40	40	44



第224図 第2号ピット群実測図

第3号ピット群（第225図）

3区中央部の標高23.5m、C 14g5～D 14a2区にかけての東西16m、南北15mの範囲から、柱穴状のピット20か所を確認した。平面形は長径28～95cmの円形または楕円形で、深さが11～91cmである。ピットの分布状況から建物跡は想定できない。覆土中から土師器片や須恵器片、灰釉陶器片、陶器片が出土しているピットもあるが、いずれも細片である。時期・性格ともに不明である。



第225図 第3号ピット群実測図

第3号ピット群計測表

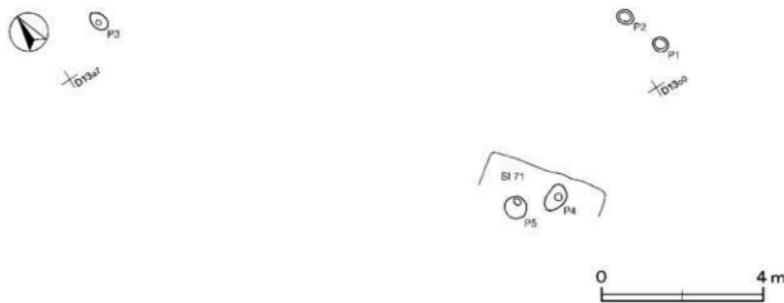
番号	位 置	形 状	規 模 (cm)			番号	位 置	形 状	規 模 (cm)		
			長 径	短 径	深 さ				長 径	短 径	深 さ
1	C14a2	不定形	95	88	20	11	C14b4	円形	48	48	65
2	C14a2	円形	70	64	30	12	C14b4	不定形	67	62	27
3	C14a2	不定形	41	39	30	13	C14b5	円形	64	60	13
4	D14a2	椭円形	75	68	24	14	C14g5	椭円形	42	28	15
5	C14a3	椭円形	80	68	25	15	C14h5	長椭円形	86	42	25
6	C14a3	椭円形	48	40	39	16	C14h5	椭円形	60	49	53
7	C14a3	椭円形	67	50	65	17	C14h5	円形	28	26	13
8	C14a4	椭円形	51	45	17	18	C14g5	椭円形	56	50	65
9	C14a4	椭円形	80	60	11	19	C14h4	円形	38	38	19
10	C14b4	椭円形	60	48	91	20	C14h4	椭円形	46	40	23

第4号ピット群（第226図）

3区西部の標高23.5m、C 13j7～D 13e9区にかけての東西12m、南北8mの範囲から、柱穴状のピット5か所を確認した。平面形は長径39～66cmの円形または椭円形で、深さが15～55cmである。ピットの分布状況から建物跡は想定できない。覆土中から細片の土師器片や須恵器片、土師質土器片が出土しているピットもあるが、いずれも細片である。時期・性格ともに不明である。

第4号ピット群計測表

番号	位 置	形 状	規 模 (cm)			番号	位 置	形 状	規 模 (cm)		
			長 径	短 径	深 さ				長 径	短 径	深 さ
1	D13b6	椭円形	39	35	35	4	D13e9	椭円形	66	44	47
2	D13b6	椭円形	41	35	15	5	D13e8	円形	55	55	50
3	C13j7	椭円形	52	35	49						



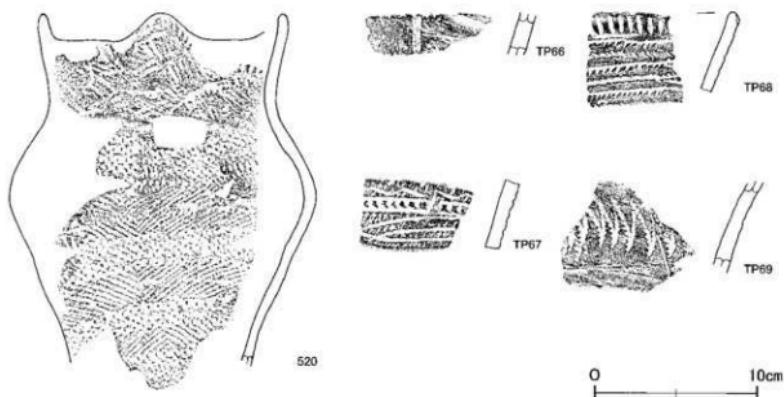
第226図 第4号ピット群実測図

表23 その他のピット群一覧表

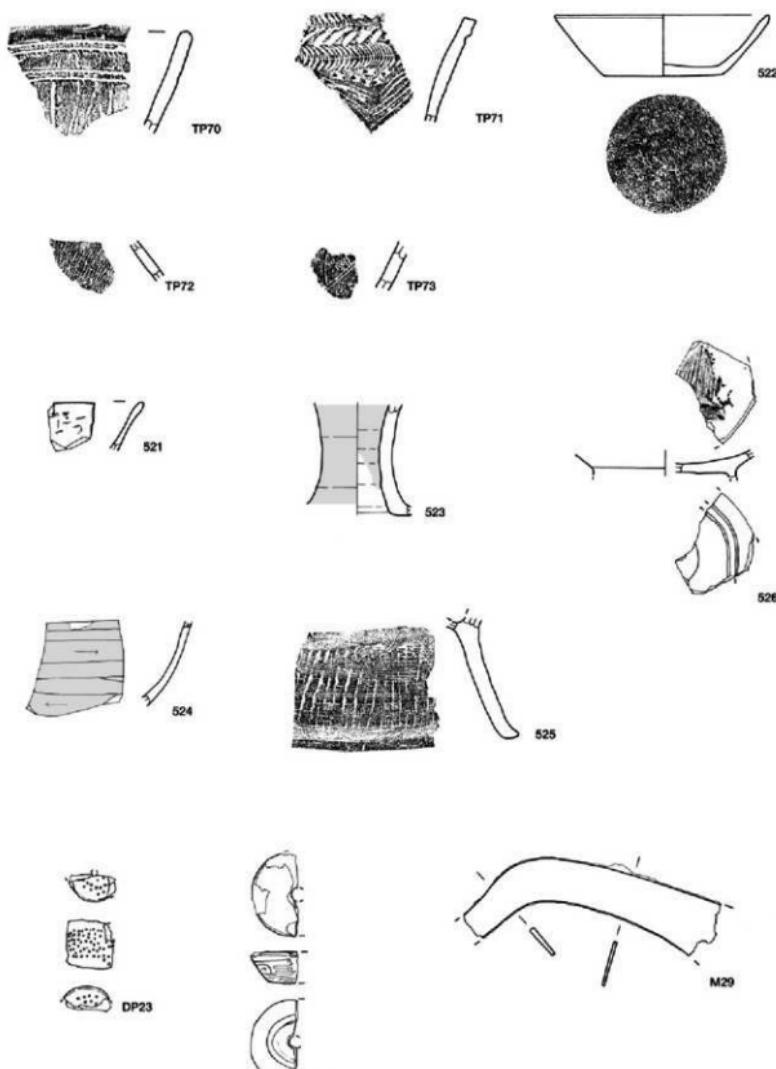
番号	位 置	柱穴 (長さの単位はすべてcm)				出 土 遺 物	時 期	備 考 (重複関係 古→新)	
		柱穴	平面形	長径 (軸)	短径 (軸)				
2	C14b8~C14b9	28	円形・椭円形	26~75	20~52	15~81	織文土器、土師器、須恵器、灰陶陶器、瓦	-	SI47-54-57-59 SB10. SI81-85-91 →本跡
3	C14b5~D14a2	20	円形・椭円形	28~95	26~88	11~91	織文土器、土師器、須恵器、灰陶陶器、瓦、縄文土器、土器	-	SI50-66 SK113-114 →本跡
4	C13d7~D13d9	5	円形・椭円形	39~66	35~55	15~55	織文土器、土器、須恵器、上部瓦、瓦、調査	-	SI71 →本跡

(5) 遺構外出土遺物（第227・228図）

今回の調査で、出土した遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。



第227図 遺構外出土遺物実測図（1）



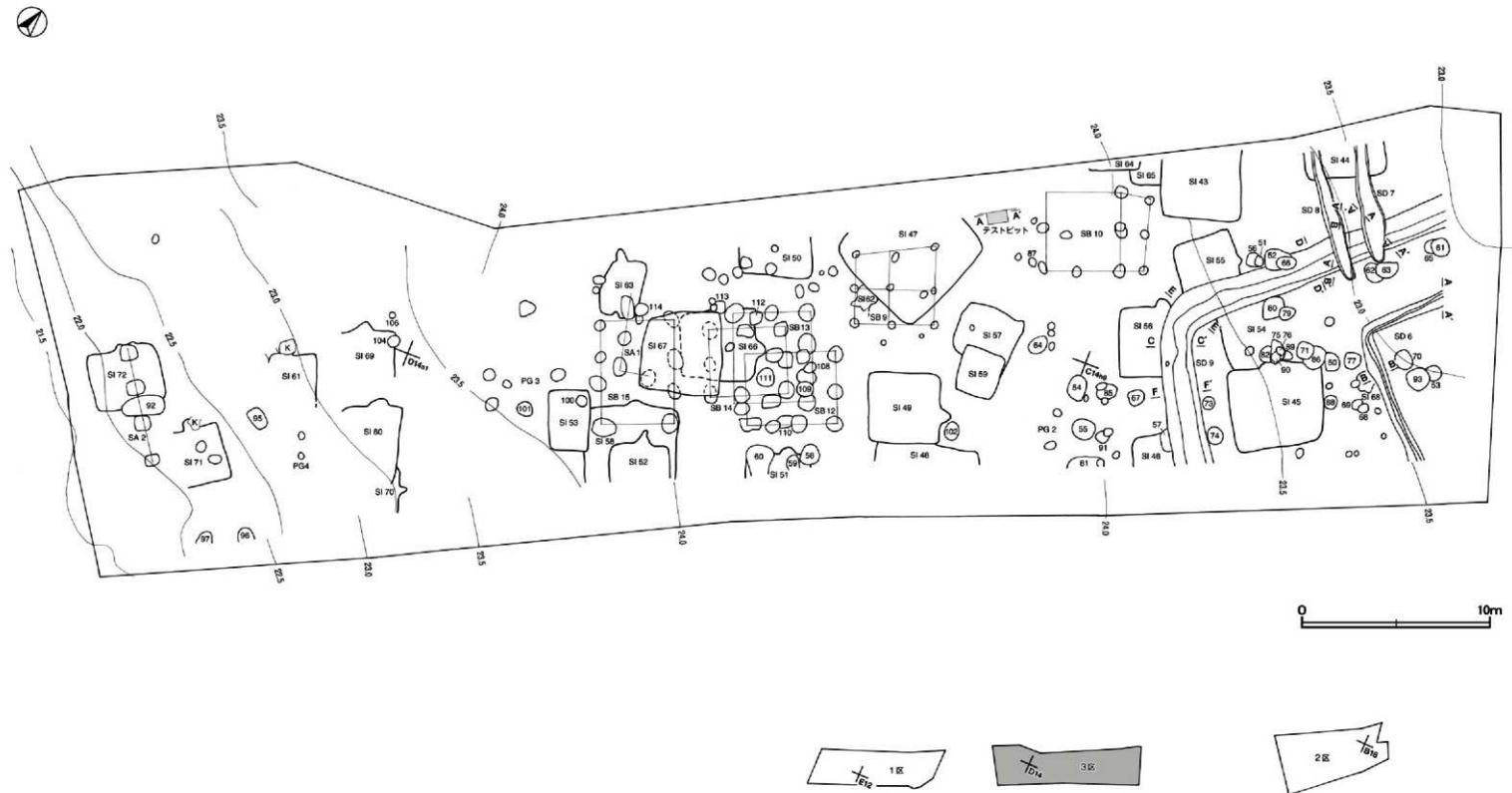
第228図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表（第227・228図）

番号	種 別	器 種	口 径	基 高	底 径	胎 土	色 調	焼 成	文様・手法の特徴はか	出土位置	備 考
520	縞文土器	深鉢	[14.8]	(21.5)	-	長石・石英	黒褐色	普通	口縁部地文の上に半載竹管状工具の押引きによる模子目文。側面部は三段のループ文間に羽根文を施す。	表土 S63 黏土	20% PL31 前期後半
521	土師器	环	-	(3.0)	-	長石・雲母・赤色粒子	褐	普通	内面横位のヘラ削き。外面上に想似「鳥」。表土	表土 PL51	5% PL51
522	埴器	环	13.1	3.8	7.4	長石・石英	にぶい褐	普通	外・内面墨漬による渦巻き。底部回転ヘラ切り。	表土 PL53	60% PL53
523	灰釉陶器	長颈瓶	-	(6.8)	-	長石	灰白	良好	ロクロナゼ 外面施釉	S66 粘土中 PL53	5% PL53
524	灰釉陶器	瓶	-	(5.2)	-	長石・黑色粒子	灰黄	良好	ロクロナゼ 外面施釉	IG3 PL6 粘土中 PL53	5% PL53
525	土師質土器	火鉢	-	(7.5)	-	長石・石英・雲母	褐	普通	脚部外面墨押文様(折縞文) 縞横直	SB13 P8 内 PL53	5% PL53
526	磁器	皿	-	(1.6)	-	長石	灰白	良好	見込みに山水文 高台欠損 線の日高台	表土 PL53	5% PL53
TP66	縞文土器	深鉢	-	(2.7)	-	長石・石英・雲母	黒褐色	普通	脚部沈縞文頭を削り出す 亂帯による仄	SA45 粘土中 PL53	中期後半 PL53
TP67	縞文土器	深鉢	-	(4.2)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	黒褐色	普通	半載竹管状工具の押引きによる支桿による支撑下に	S56 粘土中 PL52	中期後半 PL52
TP68	縞文土器	深鉢	-	(4.9)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁部地文に羽根文と利奇瓦形文を施す	SB6 粘土中 PL52	中期後半 PL52
TP69	縞文土器	深鉢	-	(5.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	脚部沈縞文頭を削り出す 亂帯による仄	SD9 粘土中 PL52	中期後半 PL52
TP70	縞文土器	深鉢	-	(6.2)	-	長石・石英	にぶい褐	普通	ヘラ抜きによる沈縞文 半載竹管状工具の押引きによる支撑下に	表土 PL52	中期後半 PL52
TP71	縞文土器	深鉢	-	(6.5)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	半載竹管状工具の押引きによる支撑下に	SD10 P5 内 PL52	中期後半 PL52
TP72	泥生土器	壺	-	(2.5)	-	長石・雲母	にぶい黄褐	普通	脚部斜片墨文施文	SD9 粘土中 PL52	後期 PL52
TP73	泥生土器	壺	-	(3.0)	-	長石	明赤褐	普通	2本の沈縞による菱形文を施す	SD9 粘土中 PL52	中期後半 PL52

番号	種 別	径	厚さ	孔 径	重 量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
DP23	切跡車	(2.9)	3.0	0.03	(15.3)	土(長石・石英)	上・下・側面に円形の刺突文 斜面あき形。	SD4 粘土中 PL54	
DP24	切跡車	(5.1)	1.9	0.09	(35.9)	土(長石・石英・雲母・相撲)	側面横位のヘラ削り後 横位のヘラ削き 円錐台形	表土 PL54	

番号	種 別	長さ	幅	厚さ	重 量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
M 29	鋸	(15.9)	(3.9)	0.35	(76.7)	鉄	曲刃 細・先端部欠損 斜面長方形	SD6 粘土中 PL54	



第229図 姥久保遺跡3区遺構全体図

第6節 まとめ

1はじめに

姥久保遺跡は、恋瀬川右岸に位置しており、1区が標高13～15mの台地上の斜面部に、2区が標高7～8mの河岸段丘下位に、3区が標高22～24mの河岸段丘上位に立地している。当遺跡の北・東側には恋瀬川に沿って帯状に広がる低地部から樹枝状に開析された支谷があり込んでいる。その北側には姥久保遺跡（未調査区）が広がっているほか、市川遺跡や石岡別所遺跡など、恋瀬川を望む河岸段丘上に多くの遺跡が存在している。南・西側は標高20～30mほどのやや高低差のある新治台地が広がり、姥久保古墳、熊野古墳などが存在している。

当遺跡の調査は、平成19年10月から平成20年1月に1区と2区を、平成20年6月から8月に3区を実施し、堅穴住居跡72軒、掘立柱建物跡14棟、柱列跡2列、粘土探掘坑1基、火葬土坑1基、墓坑1基、柱穴の可能性がある土坑7基、土坑88基、溝跡10条、遺物包含層1か所、ピット群4か所などを確認した。当遺跡は現在の6号国道に沿うように、東西に細長く広がった遺跡として周知されている。今回の調査は、遺跡の東部から中央部付近にかけて実施したが、調査区の幅が狭く、しかも断片的である。遺跡の一部を調査したにすぎないが、河岸段丘下位（以下、「2区」と略す）、河岸段丘上位（以下、「3区」と略す）に断続的に集落が広がっていたことや、台地上の斜面部（以下、「1区」と略す）に投棄された遺物包含層などを確認することができた。特に、2区では古墳時代前期から平安時代の住居跡が42軒、掘立柱建物跡8棟などが、3区では古墳時代前期と奈良・平安時代の住居跡30軒、掘立柱建物跡6棟などが確認でき、ほぼ同時期の集落が存在していることが判明した。しかし、2区と3区では標高差が約16mある河岸段丘下位と上位の異なる地形であり、未調査区を挟み直線距離で約75m離れていることから、今回の調査からは集落の関わりを明らかにできない。

よって、今回の調査で確認できた2区・3区の古墳時代から平安時代までの集落の様相については、それぞれの区で分けて考察することとする。さらに2区・3区で特徴ある出土遺物や住居の床の構築状況についても触れながら、まとめとする。

2各時代の様相

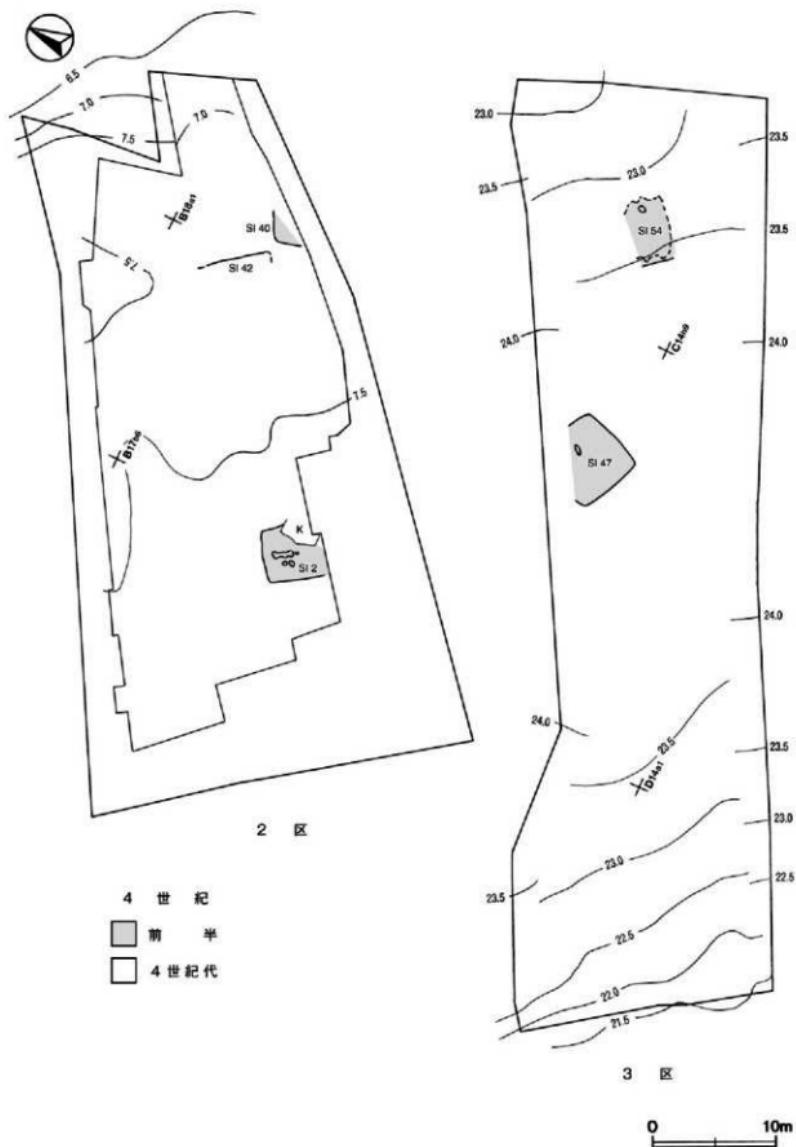
(1) 繩文時代・弥生時代

2区・3区ともに遺構は確認できなかったが、表土や後世の遺構の覆土に混入あるいは流れ込んだ土器片が確認できた。土器片は、縄文時代が早期から中期にかけての田戸下層式期、諸磯式期、浮島式期、阿玉台式期、加曾利E式期のものが主で、その出土量からは周辺に集落が存在する可能性もある。弥生時代は、中期後半の野沢式期あるいはその並行期、足洗式期あるいはその並行期や後期とみられる土器片も出土しており、石岡別所遺跡でも同様の土器を確認している。

(2) 古墳時代

①4世紀前半（第230図）

当該期の遺構は、2区が第2・40・42号住居跡の3軒、3区が第47・54号住居跡の2軒である。出土土器から第42号住居跡を除く4軒が4世紀前半に比定できる。今回の調査では、2区・3区ともにこれらの住居跡が最も古い段階のものである。なお、2区で確認した第42号住居跡は、出土土器から時期を



第230図 姫久保遺跡集落変遷図（4世紀）

細分することができなかったため、4世紀代とした。

2区で確認した3軒のうち、第40・42号住居跡は主軸方向が不明であるが、3軒の遺存している壁の方角で比べてみると、第2・42号住居跡はおおよそ同じ北西方向に振れているが、第40号住居跡は2軒よりもやや北方向に振れている。第2号住居跡は、床面が全体的に硬化している状況や、床の中央部から北部にかけて複数の炉が確認できたことから、比較的長期間の使用が認められる。貯蔵穴は南西コーナー部にあり、床との境にわずかな高まりを有している。床面あるいは覆土下層から土師器高壺、壺、甕などが出土しているほか、ミニチュア土器も出土しており、住居廃絶に伴った儀礼行為も推測できる。また、本跡から鉄製品は出土していないが、土師器壺の体部に刃物を研いだ痕跡があることから、集落内では鉄製品を保有しているものとみられる。

3区で確認した2軒は、いずれも遺存状況が不良である。2軒ともに確認できた壁が異なる方向に振れていることや、主柱穴が確認できたことは、2区で確認した住居跡と様相が異なっている。炉は2軒ともに確認でき、中央部からやや北寄りに付設されている。

2区・3区ともに遺構が調査区域外へ延びていることや、後世の遺構に掘り込まれていることで、全容を明らかにできたものは1軒もないが、4世紀前半の時期は、住居が点在する小規模な集落が標高差約16m異なる地形においても存在していたことが明らかとなった。

その後、2区は5世紀前葉まで、3区は8世紀中葉まで集落が存在しない空白期間となる。なお、周辺に存在するほぼ同時期の集落としては、当遺跡の北西500mに市川遺跡¹⁾、同じく北西1kmに当遺跡よりやや古い様相をもつ石岡別所遺跡²⁾がある。

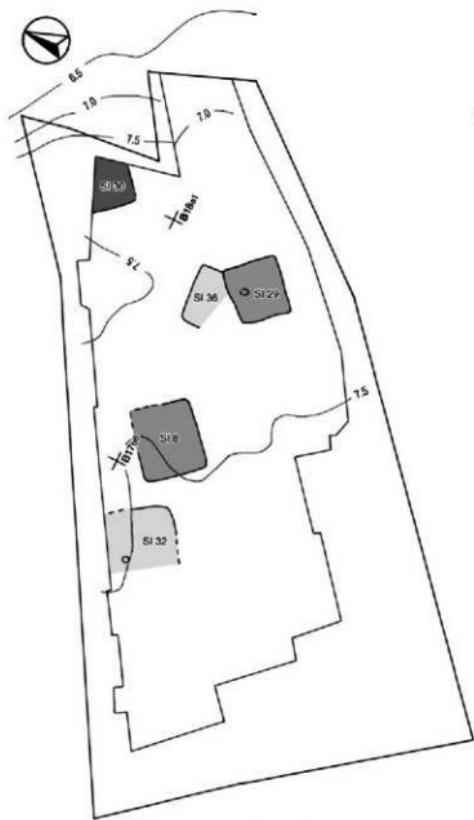
②5世紀代（第231図）

当該期の遺構は、2区で確認した住居跡の5軒である。出土土器の様相から第32・36号住居跡が5世紀前葉、第8・29号住居跡が5世紀中葉、第30号住居跡が5世紀後葉に比定できる。

5世紀前葉の2軒は、ともに後世の住居に掘り込まれており、遺存状況が不良である。遺存している壁の方向は第32号住居跡が北西方向に、第36号住居跡がほぼ北方向に振れており、方向が異なっている。第36号住居跡から出土した土師器椀は、器高がやや高いものの、ハケ目調整後に横位の粗いヘラ磨き調整が施されており、やや古い様相をもっていることから5世紀初頭と位置づけられる。5世紀中葉の2軒は、壁の方向がほぼ同じで、北西方向に振れている。第8号住居跡は、埋め戻しに伴って多量の土師器細片が投棄されているが、ミニチュア土器1点や土師器壺5点が床面あるいは覆土中から、球状土錐7点のうち4点が貯蔵穴内から出土している。このことは、単なる投棄とは異なる可能性があり、住居廃絶に伴った儀礼行為も推測できる。5世紀後葉は、第30号住居跡の1軒だけである。本跡は南コーナー部付近しか確認できなかったが、遺存している壁の方角から、5世紀中葉とはほぼ同じ方角を意識して建てられたものと推定できる。貯蔵穴は南コーナー部にあり、地山を掘り残したL字形の高まりによって区画している。本跡には中央部付近の床面、あるいは貯蔵穴付近の覆土下層から土師器椀、高壺、甕などが投棄されている。土師器椀は口縁部に2か所、土師器鉢は底部に1か所の焼成後に穿孔されている特徴がある。

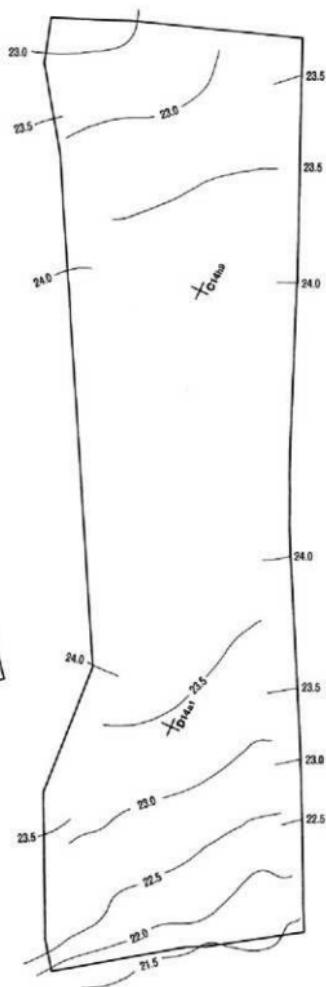
③6・7世紀代（第232図）

2区で確認した住居跡7軒である。出土土器の様相から第28・34号住居跡が6世紀前葉、第18号住居跡が6世紀中葉、第20・22号住居跡が6世紀後葉、第31号住居跡が7世紀前葉、第1号住居跡が7世紀



2 区

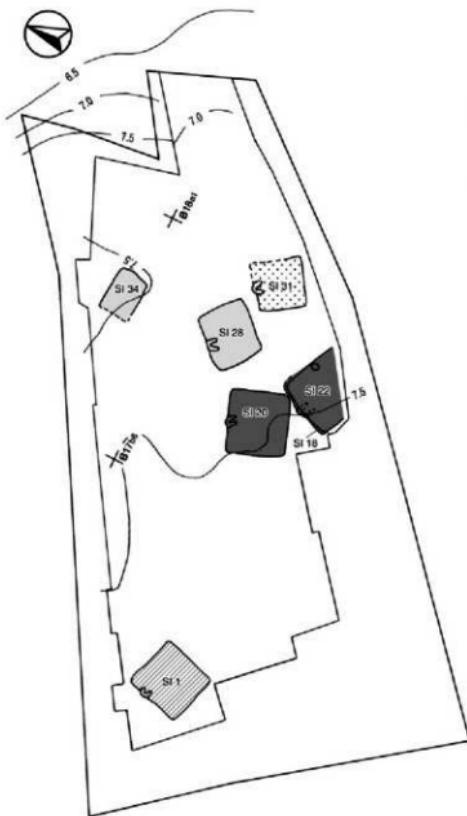
5世紀	
■	前葉
■	中葉
■	後葉



3 区

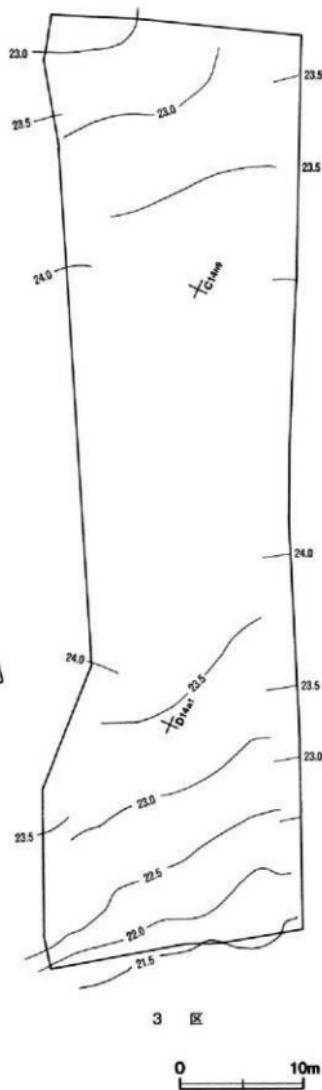
0 10m

第231図 姶久保遺跡集落変遷図（5世紀）



2 区

6世紀	
■	前葉
■	中葉
■	後葉
7世紀	
■	前葉
■	後葉



第232図 姉久保遺跡集落変遷図（6世紀・7世紀）

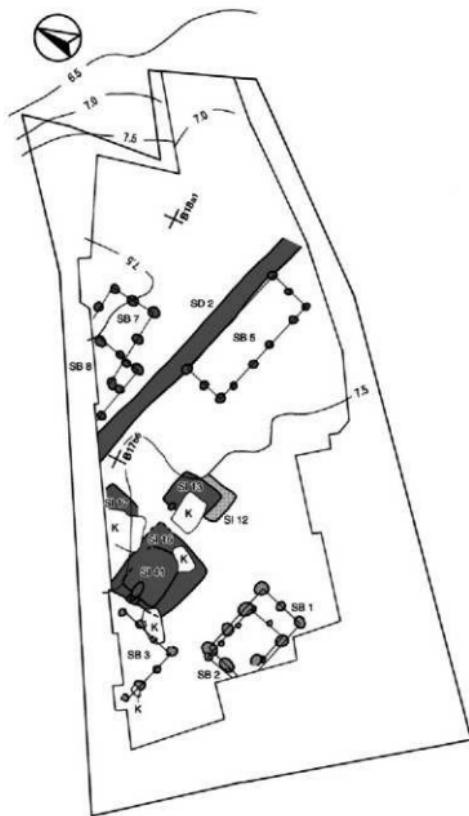
後葉に比定できる。

6世紀前葉は2軒である。第28号住居跡は竈が北西壁に付設されており、当該期になって竈が付設されるようになる。竈の袖部は、粘土粒子と砂粒を含んだ部材を壁に貼り付けており、煙道部は壁外へ大きく掘り込まれない、いわゆる竈導入期の様相を残したものである。貯蔵穴は平面形が隅丸長方形で、竈と向かい側の壁際中央部寄りに付設されており、古墳時代中期で確認できた貯蔵穴と比較すると、やや小さい。第34号住居は後世の遺構に掘り込まれて西壁が遺存していない。遺存している壁の方向を第28号住居跡と比べると、大きく異なっている。6世紀中葉は、第18号住居跡の1軒だけである。主柱穴は確認できたが、竈は北東壁に付設した痕跡が確認できただけである。本跡の使用後、第22号住居跡への建て替えが行われている。6世紀後葉は2軒で、その位置は近接している。第22号住居跡は、貼床をして第18号住居跡から建て替えをしていることから、連続的な使用が想定できるため、近接している第20号住居跡は第22号住居跡の廃絶後に建てられたものと推測できる。7世紀前葉は第31号住居跡の1軒だけである。竈が北西壁に付設されていることは、6世紀後葉の第20号住居跡とはほぼ同じである。出土した土師器環の口径は、6世紀後葉と比較すると小さく、黒色処理が施されている特徴がある。土師器高環は破片であるが、脚部が外に開き、短くなる様相を示している。7世紀後葉は第1号住居跡の1軒だけで、7世紀前葉よりも主軸方向がさらに西に大きく振れている。後続する奈良時代に構築された掘立柱建物跡も本跡とはほぼ同じ向きで建てられていることから、この後の集落の起点となる住居とも推測できる。本跡の竈の位置は、北西壁の中央部からやや北コーナー寄りに付設されている。竈が移設された痕跡もなく、当該期以前の住居のように中央部に付設された竈の位置とは異なった特徴をもっている。

(3) 奈良時代（第233図）

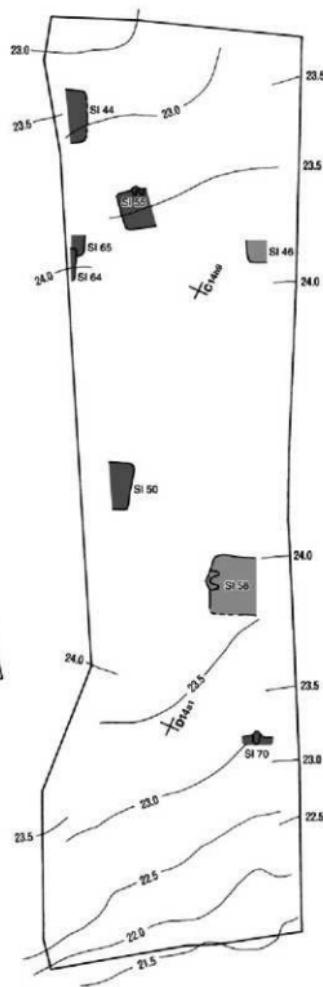
2区で確認した住居跡5軒、掘立柱建物跡6棟、溝跡1条、3区で確認した住居跡8軒である。出土土器の様相から2区の第1・3号掘立柱建物跡と3区の第46・58号住居跡が8世紀中葉、2区の第13・16・17・41号住居跡と第5・7・8号掘立柱建物跡、第2号溝跡、3区の第44・50・55・64・65・70号住居跡が8世紀後葉に比定できる。なお、出土土器や遺存状況が不鮮明な2区の第12号住居跡、第2号掘立柱建物跡は8世紀前半とした。

2区では、奈良時代になると住居に掘立柱建物が加わって集落を形成するようになる。当時代の遺構を概観すると、建物の方角は前述した7世紀後葉の第1号住居跡と同じで、西に大きく振れており、全体的に当時代の建物跡はほぼ同じ向きになっている。当時代の出現期は、8世紀前半の第12号住居跡と第2号掘立柱建物跡で、8世紀中葉には第1・3号掘立柱建物跡が構築されている。第1号掘立柱建物跡は柱穴の掘方径が約1mと当遺跡の中では大型で、柱穴の形状や柱間寸法が整っている。本跡は第2号掘立柱建物跡を掘り込み、桁行方向が同じであることから第2号掘立柱建物跡からの建て替えが推定でき、建物の規模を拡張したものとみられる。第2号溝跡は直線的に調査区域外へ延びているため、全容が明らかでないが、第1～3号掘立柱建物跡と走行方向がほぼ一致していることから、集落を区画する溝の可能性がある。本跡の覆土から8世紀後葉の土器が出土していること、第5号掘立柱建物跡に掘り込まれていることなどから、8世紀後葉には役割を終え、埋め戻されている。第2号溝の廃絶後に建てられた第5号掘立柱建物跡は、北桁行の中間柱穴が確認できなかったが、今回の調査では最も大型の掘立柱建物である。また、その北側にはこれまで同じ方向に振れていた掘立柱建物跡と桁行方向がやや異なる第7・8号掘立柱建物が構築されているなど、当該期に3棟の掘立柱建物が建てられるようになる。確認した住居跡は4



8世紀

- 中葉
- 後葉
- 前半



0 10m

第233図 姫久保遺跡集落変遷図（8世紀）

軒で、そのうち竈が確認できたのは3軒である。主軸方向はいずれの住居も大きく西に振れており、第1～3号掘立柱建物跡とほぼ同じである。第41号住居跡の床上に構築されている第16号住居跡は今回の調査区では大形の住居で、投棄された多量の土器片や貼床の構築状況から、当時代の集落の中心的な役割をもった住居であったものとみられる。貼床の住居跡は第16・17・41号住居跡の3軒で、ロームブロックを下部に埋め、上部に粘土粒子や焼土粒子を薄く積み重ねた床を確認しており、貼床の構築に薄い版築状の技法が取り入れられている。

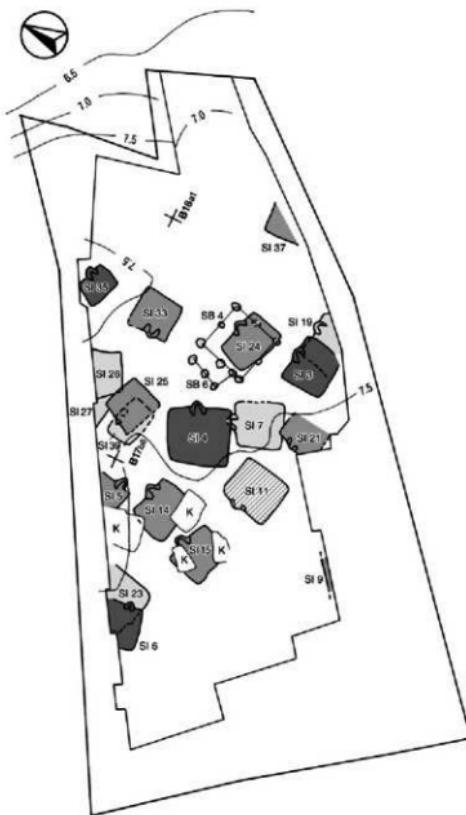
3区では、8世紀中葉になると4世紀前半に途絶えていた集落が再び確認できた。第58号住居跡は主軸方向がほぼ北に振れており、2区で確認した第1・3号掘立柱建物跡と本跡の軸方向を比べると異なっている。本跡の竈袖部材からは粘土のほか粘土塊が少量出土している。粘土塊は径2～3cm、重量約2gで、総重量が700.9gあり、竈の袖部に使用した粘土に混ざって出土している状況から、補強のために混ぜたものとみられる。8世紀後葉の6軒は、4軒が調査区域外へ延びていることで、竈が確認できなかつた。竈が確認できたのは第55・70号住居跡で、2軒ともに北東壁に付設されていることは、8世紀中葉で確認した第58号住居跡と異なっている。なお、3区では貼床の住居跡は確認できなかつた。

(4) 平安時代

①9世紀代（第234図）

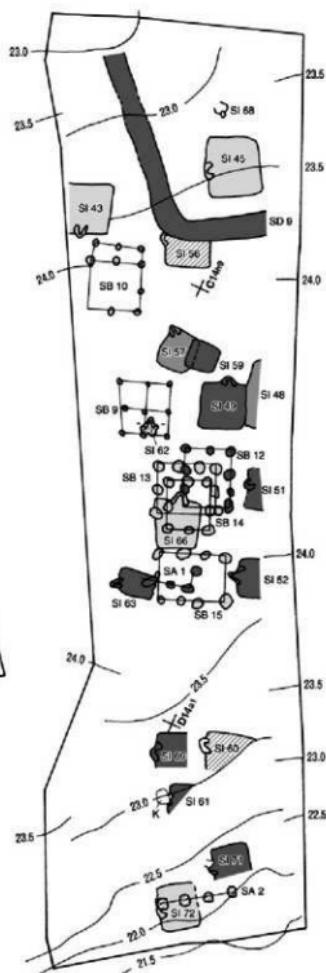
2区で確認した住居跡20軒、掘立柱建物跡2棟、3区で確認した住居跡18軒、掘立柱建物跡6棟、溝跡1条である。出土土器の様相から、2区の第7・19・23・26・27・39号住居跡と第4・6号掘立柱建物跡、3区の第43・45・66・72号住居跡と第10・13～15号掘立柱建物跡が9世紀前葉、2区の第5・9・14・15・21・24・25・33・37号住居跡、3区の第48・57号住居跡と第9号掘立柱建物跡が9世紀中葉、2区の第3・4・6・35号住居跡、3区の第49・51・52・59・61・63・69・71号住居跡と第12号掘立柱建物跡、第1号柱列跡、第9号溝跡が9世紀後葉に比定できる。なお、出土土器から時期が不鮮明な3区の第68号住居跡を9世紀代、2区の第11号住居跡と3区の第56・60・62号住居跡、第2号柱列跡を9世紀後半とした。

2区では、9世紀前葉は住居跡が6軒、掘立柱建物跡2棟である。竈は、第19・39号住居跡のように竈を北東壁に付設するものと、第7号住居跡のように北西壁に付設するものとに分けることができ、6軒すべてが貼床を構築している。掘立柱建物は、第4号掘立柱建物跡が8世紀後葉に構築されていた第5号掘立柱建物跡とほぼ同じ北西方向に振れている。第6号掘立柱建物跡はL字形に柱穴が確認できただけで、別の建物に付随する柱列跡の可能性もある。9世紀中葉は住居跡が9軒で、2区で最も住居跡の軒数を確認できた時期である。今回の調査区では、当該期から掘立柱建物がみられなくなる。竈が確認できた住居跡は7軒で、付設されている方向は北東壁が3軒、北西壁が3軒、南東壁が1軒と、さらに多様化の傾向にある。第9号住居跡は調査区境の壁面で、遺構確認面より約50cm上に本跡の床の断面を確認したものである。同時期の住居よりも床面の標高が高い位置にあるが、本跡の上部に道路建設に伴った盛土があるため、床上の覆土や壁の立ち上がりは確認できず、平地式住居か否かは確認できなかつた。当該期で確認した住居跡9軒のうち7軒は貼床である。9世紀後葉は住居跡が4軒で、確認した軒数は9世紀中葉よりも減少している。竈の付設されている方向は北壁が1軒、北東壁が2軒、東壁が1軒で、9世紀中葉と同じく多様である。中央部に存在する第4号住居跡の規模は同時期の住居と比較するとやや大形で、灰釉陶器碗や長頭瓶が出土している。



9世紀

- 前葉
- 中葉
- 後葉・末葉
- 後半
- 9世紀代



0 10m

第234図 姶久保遺跡集落変遷図（9世紀）

3区では、9世紀前葉は住居跡が4軒である。竈の付設されている方向は北西壁が2軒、西壁が1軒、東壁が1軒で、2区と同じく多様である。貼床の住居は第43・45・66号住居跡の3軒で、ロームブロックを含んだ褐色土を埋めて構築している。8世紀代では確認できなかった掘立柱建物跡は、4棟を確認した。調査区東部の第10号掘立柱建物跡は、今回の調査で唯一庇をもつ建物として存在している。第13号掘立柱建物跡は、第15号掘立柱建物と同じ9世紀前葉で、同じ桁行方向に振れて並列している状況から、同時に構築された可能性がある。また第14号掘立柱建物跡は、同時期である第13号掘立柱建物跡を掘り込んでおり、主軸方向を変えた建て替えが行われたものである。このように、3区の中央部付近は、掘立柱建物が集中して構築されている状況から、何らかの重要な役割をもった場所とみられる。9世紀中葉は住居跡が2軒、掘立柱建物跡が1棟で、ともに調査区の中央部に位置している。第48号住居跡は調査区域外へ延びているため全容が明らかでないが、竈が確認できた第57号住居跡は、北東コーナー部に付設されている。第9号掘立柱建物跡は、柱間寸法が不揃いであるが、唯一確認できた総柱建物跡である。9世紀後葉は住居跡が8軒、掘立柱建物跡1棟、柱列跡1列で、9世紀後半が住居跡が3軒、柱列跡1列も加えれば、3区で最も多くの遺構を確認できた時期である。竈が付設されている位置は、北壁と北西壁が8軒、東壁が2軒である。貼床の住居は第49・69号住居跡の2軒で、ロームブロックを含んだ暗褐色土を埋めて構築している。第12号掘立柱建物跡は、柱穴の配置から9世紀中葉までに構築された掘立柱建物跡の方向と同じであるが、桁行方向を北東へと変えている。第2号柱列跡は、掘方の径が掘立柱建物跡の柱穴とはほぼ同じである。中央部からやや傾斜した調査区の西端部に位置しており、その西側は、1区に向かって急激に下っている地形から、3区集落の境に位置した門としての役割も想定できる。第9号溝跡は、覆土下層から中層にかけて出土した多量の遺物から9世紀後葉に比定できるが、第56号住居跡を掘り込んでいることから、9世紀末葉に位置づけられ、比較的短期間の使用であったとみられる。L字状に屈曲して両端とともに調査区域外へ延びており、何らかの区画溝とみられるが、今回の調査からは詳細な性格を明らかにことができなかつた。

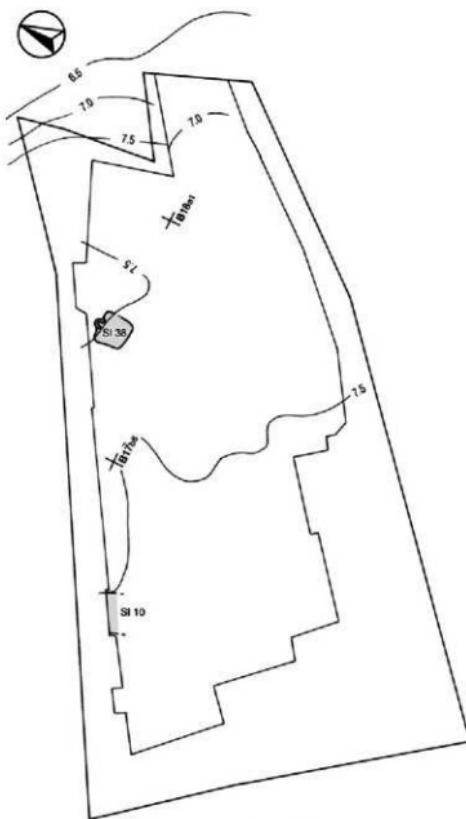
なお、1区では8世紀から9世紀にかけての遺物包含層を確認した。主な出土遺物は、土師器片763点、須恵器片1072点、灰釉陶器片26点である。土器片は3区の集落や未調査区に広がっている姥久保遺跡の集落から不要になったものを投棄したもの、あるいは流れ込んだ土器が埋没して形成されたものとみられ、台地上の斜面部の1区は、授業場として主に利用されていたことが判明している。

② 10世紀代（第235図）

2区で確認した住居跡2軒、3区で確認した住居跡2軒で、出土土器の様相から10世紀前葉に比定できる。2区・3区ともに9世紀後葉と比較した住居跡の軒数は大きく減少している。

2区では、竈が確認できたのは第38号住居跡だけで、北壁に付設されている。第10号住居跡は調査区境の壁面で、床の断面を確認できたものである。本跡は確認面から約50cm上で床を確認しており、床面はほんの一部しか確認できなかったため、竈の有無は不明である。出土土器に土師質土器の羽釜鉢部が出土していることから、置き竈を有していた可能性もある。

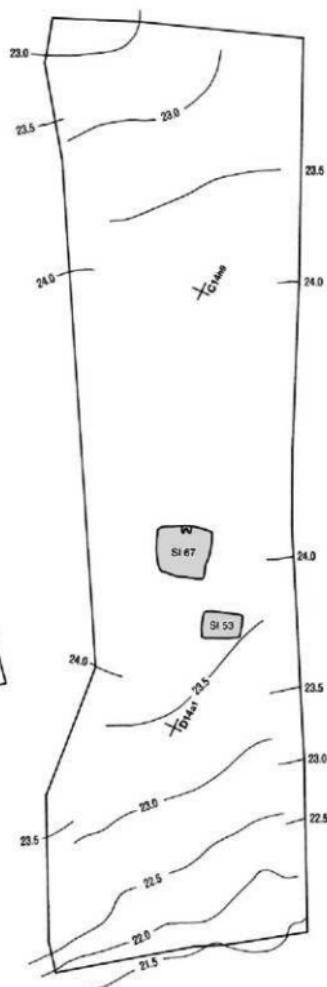
3区では、竈が付設されているのは第67号住居で、東壁に付設されている。第53号住居は竈が付設された痕跡がなく、焼土塊が床面で確認できたため、本跡も置き竈を有していた可能性がある。



2 区

10世紀

■ 前 葦



3 区

0 10m

第235図 姶久保遺跡集落変遷図（10世紀）

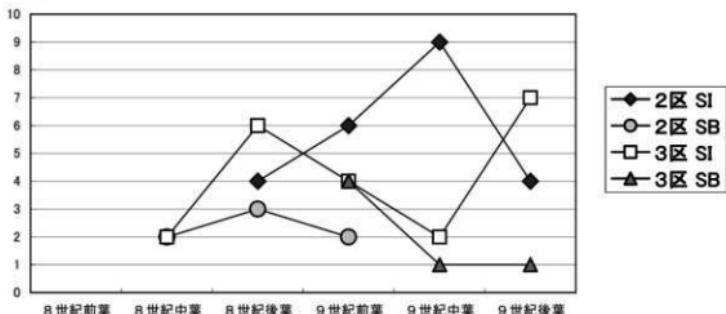
1区で確認した火葬土坑1基、3区で確認した墓坑1基で、1区と3区はおよそ500～600年の空白期間を経た後、墓域として利用されている。互いの遺構の関連は明らかでないが、1区で確認した火葬土坑は、遺構の形態やほかの遺跡の調査例などから中世と考えられる。3区で確認した墓坑は、出土した六道銭がすべて永楽通寶で、3枚ずつがまとめて出土している。古銭の時期から15世紀後半から16世紀後半に比定できる。

以上、今回の調査で確認できた縄文時代から中世までの各区での様相を概略して述べた。2区・3区ともに部分的な調査ではあるが、4世紀から10世紀までの集落を確認することができた。

2区は、4世紀前半から7世紀後葉まで断続的ではあるが、集落が形成されていたことが判明した。8世紀中葉から8世紀後葉にかけては、住居跡の壁の方角と掘立柱建物跡の桁行がほぼ同じ方向に振れており、これまで住居だけで構成されていた古墳時代の集落の様相とは一変している。今回の調査では、9世紀前葉になると同じような位置に構築されていた掘立柱建物が姿を消し、9世紀中葉には住居が主体となって集落を形成している。確認できた住居跡の軒数も多くなり、集落の拡大期を迎えている。

3区は、4世紀前半の後、今回の調査区からは一旦集落が確認できなくなる。表土や後世の遺構への覆土中にも、5世紀から7世紀代の土師器壺や高环などの破片は確認することができなかった。前述したように、当遺跡の南側には4世紀後葉に築造された熊野古墳が存在している³⁾。3区は熊野古墳の墳頂とほぼ同じ標高で、古墳と近接していることからも、集落が形成されなかつた空白期間が存在したものとみられる。2区と同じ8世紀中葉になると、再び集落が確認できるようになる。掘立柱建物は9世紀前葉に現れ、中央部付近で密に構築されている。9世紀後葉になると、8世紀後葉から減少傾向にあった住居跡の軒数が増加しており、拡大期を迎えている。

(軒・棟)



第236図 2区・3区における8～9世紀の住居跡・掘立柱建物跡の確認数⁴⁾

今回の調査から確認できた集落を概観してみると、4世紀前半の集落を始まりとしていること、10世紀中葉には集落が確認できなくなっていることは、2区・3区ともに同じであった。しかし、2区・3区の住居、掘立柱建物の出現時期や最も確認できた軒数には時期差があること、住居の窓の付設方向に違いがあることが明らかとなった。

3 2区・3区の特徴

ここでは、2区・3区で確認した奈良・平安時代の住居跡や掘立柱建物跡から出土した墨書き器や灰釉陶器、床の構造状況などについて触れ、それぞれの区の特徴を述べる。

(1) 文字資料について

今回の調査区から、墨書き17点、刻書き2点、ヘラ書き1点が出土している。時期別では、8世紀後葉が1点、9世紀前葉が1点、9世紀中葉が5点、9世紀後葉が11点である。文字が記された器種は、土師器や須恵器の坏が圧倒的に多く、ほかの遺跡同様に、最も生活に密着していて、数量の多い土器に文字が記されている。

2区は、墨書きが4点、時期別では9世紀中葉が4点、9世紀後葉が1点で、すべて遺構内から単独で出土している。記された文字について見ると、第33号住居跡から出土した「又上」は、つくば市中原遺跡から8点出土している。中原遺跡では、調査区北半部に位置している住居跡5軒から出土しており、「集落における共通の標識ともいえる文字」と述べられている⁵⁾。当遺跡で「又上」は1点だけの出土で、今回の調査では集落内における共通の標識ととらえることはできない。第12号土坑から出土した「里カ」は、土器の表面剥離のため、「甲」の可能性もあり、不鮮明である。第4号住居跡から出土した「田」は、生産（条里）に関わる文字とみられ、当遺跡の北側を流れる恋瀬川対岸の台地上に存在している石岡市鹿の子A遺跡、国分遺跡、幸町遺跡などでも出土している。刻書きは1点で、表土採集のものである。内面が黒色処理された上に「太」と記されている。

表24 姥久保遺跡2区・3区出土文字資料一覧表

区	番号	篆文	種別	材質	器種	部位	出土遺構	遺物番号	時代	備考
2区	1	田	墨書き	土師器	高台付皿	体部 外面	第4号住居跡	205	9世紀後葉	
	2	又上	墨書き	須恵器	坏	体・底部 外面	第33号住居跡	263	9世紀中葉	
	3	里。	墨書き	土師器	高台付坏	底面	第12号土坑	290	9世紀中葉	
	4	□	墨書き	土師器	高台付碗	体・底部 内面	第14号住居跡	234	9世紀中葉	
	5	太	刻書き	土師器	坏	底部 内面	遺構外	308	-	
	6	□	ヘラ書き	須恵器	坏	底部 外面	第15号住居跡	242	9世紀中葉	
3区	11	上殿	墨書き	須恵器	坏	体部 外面	第57号住居跡	430	9世紀中葉	
	12	芳	墨書き	土師器	坏	体部 外面	第69号住居跡	468	9世紀後葉	
	13	㊀*	墨書き	土師器	高台付坏	体部 外面	第61号住居跡	440	9世紀後葉	
	14	㊁*	墨書き	土師器	坏	体部 外面	第61号住居跡	437	9世紀後葉	
	15	王。	墨書き	土師器	坏	体部 外面	第71号住居跡	475	9世紀後葉	
	16	士。	墨書き	土師器	坏	体部 外面	第71号住居跡	476	9世紀後葉	
	17	十。□	墨書き	土師器	坏	体部 外面	第71号住居跡	474	9世紀後葉	
	18	十。□	墨書き	須恵器	坏	体部 外面	第72号住居跡	482	9世紀前葉	
	19	□	墨書き	須恵器	坏	体部 外面	第70号住居跡	365	8世紀後葉	
	20	□	墨書き	土師器	坏	体部 外面	第12号掘立柱建物跡	491	9世紀後葉	
	21	□	墨書き	土師器	坏	体部 外面	第1号柱列跡	499	9世紀後葉	
	22	□	墨書き	土師器	坏	体部 外面	第63号住居跡	448	9世紀後葉	
	23	島。	墨書き	土師器	坏	体部 外面	遺構外	521	-	
	24	□	刻書き	土師器	坏	底部 外面	第61号住居跡	438	9世紀後葉	

3区は、墨書が13点で、時期別では8世紀後葉が1点、9世紀前葉が1点、9世紀中葉が1点、9世紀後葉が10点、表土採集のため不明が1点である。記された文字について見ると、第57号住居跡から出土した「上殿」は、殿が尊称または邸宅の呼称とみられることから有力者の邸宅、あるいは3区が河岸段丘上位に位置していることから、地形からみた高い位置に存在する邸宅とも推測できる。第69号住居跡から出土した「芳」は、吉祥文字とみられるが、「廿万」の合わせ文字の可能性もある。第71号住居跡は「王カ」、「十カ」、「十、□」の3点が出土しており、「王」は前述した「上殿」と同じく権威を表す文字とみられる。第61号住居跡からそれぞれ出土した「@カ」や「@カ」は解説不能であるが、何らかの記号とみられる。このような記号化された文字について平川南氏は、「当時の東日本各地の村落において、土器の所有をそうした文字（記号）で表示した可能性もあるが、むしろ一定の祭祀や儀礼行為のさいに、土器になかば記号として文字を記す。言い換えれば、祭祀形態に付随し、一定の字形（なかば記号化した文字）が記載されたと考えらる」と述べている⁶⁾。第61号住居跡から出土した2点の記号化された文字は、覆土下層からそれぞれ出土しており、廃絶後の早い段階で投棄されたものとみられるが、確認面から床面までの深さが13cmしかないこと、本跡の覆土が埋め戻されていることも加味すれば、住居廃絶に伴った儀礼行為が行われたことも推測できる。

(2) 施釉陶器・鏡・瓦などについて

ここでは、2区・3区の集落で出土した各区の様相を示す特徴ある土器や土製品、鉄製品、瓦などについて述べる。なお、それぞれの項目で示した数は破片数で、2区・3区のすべての遺構から出土した数と表土採集の数を合計したものである。

灰釉陶器の破片数は、2区と3区で比較すると、3区が2区の約16倍の量で、大半は細片のため図示できないものが多い。時期別に見ると、2区は9世紀中葉が9点、9世紀後葉が6点で、3区は9世紀前葉が7点、9世紀後葉または9世紀末葉が13点、10世紀前葉5点である。破片数が最も多い時期は、2区・3区のそれぞれで遺構を最も確認できた時期と一致している。綠釉陶器は、2区が土坑1点、表土採集3点で、表土の3点は細片のため図示できない。

今回の調査で破片の出土量が目立ったのは高盤で、2区と3区で比較すると土師器高盤が6倍、須恵器高盤が67倍ほど2区が3区を上回っている。2区の集落は、奈良時代に建物が同じ方向に触れている住居や掘立柱建物が確認できており、3区の集落よりも優位に立っていたものとみられることから、高盤の出土量は2区の性格に関連している可能性がある。

瓦は2区・3区ともには同じである。2区は9世紀中葉の住居跡3軒から17点、9世紀後葉の住居跡2軒から3点である。また、3区は8世紀後葉の住居跡1軒から細片1点、9世紀前葉の住居跡2軒から20点、9世紀後葉の住居跡1軒から細片1点で、出土量が最も多い時期は2区が9世紀中葉、3区は

表25 姥久保遺跡2区・3区出土土器等一覧表

調査区	区粗陶器	緑釉陶器	高盤			瓦			結蹄車			主張玉類			刀子	鏡	墨付着	そのほか
			土師器	須恵器	丸瓦	平瓦	土質	石質	鉄製	土玉	球状土跡							
2区	28	4	6	95	5	15	3	0	0	0	20	4	0	朱1	須恵器コップ形土器1 土製管状土跡1			
3区	40	2	1	14	1	21	2	2	1	1	2	4	2	朱1	土製管状土跡1 鉄製鍵3			

9世紀前葉で、やや時期差がある。2区・3区ともに、丸瓦は凸面がヘラ削り調整で、凹面に布目痕が残る、あるいは糸切り痕が残るものも確認できた。平瓦は凹面に布目痕、凸面に長縄叩き痕が残っている。

紡錘車や刀子、鎌などの製品については、特に目立った出土量ではない。土製玉類は2区が20点と多いが、古墳時代が16点を占めており、2区・3区ともに8～10世紀代の遺構からは3点ずつしか出土していない。恋瀬川対岸に位置する田島遺跡（三面寺地区）や田崎遺跡の出土量と比較しても保有率が大きく下回っている。

ほかに、2区ではコップ形土器1点が第17号住居から、3区では硯2点が第43号住居跡から出土している。コップ形土器は計量器としての用途とみられるもの⁷⁾。近年の調査報告ではつくば市上野陣馬遺跡や茨城町大塚遺跡などから出土していることが知られている。コップ形土器の表面や胎土の色は灰色で、周辺の窯で焼かれた土器とは大きく色調が異なっており、搬入品とみられる。硯は円面硯で、脚部と硯部の破片で、その全容は不明である。円面硯は、当遺跡周辺では石岡市鹿の子C遺跡で出土している。また、墨痕や朱墨痕が付着した土器は3点で、2区の第6号掘立柱建物跡の柱穴から出土した内面に朱墨痕がある須恵器蓋、3区の第72号住居跡から出土した高台内部に墨痕がある高台付环は、硯として転用した可能性がある。

(3) 漆付着土器について

今回の調査で、漆付着の土器は8点出土している。2区は3点で、出土した遺構に時期差がある。8世紀後葉に比定できる第16号住居跡から出土した土師器壺は、外・内面とともに漆が付着している状況から、漆を溜めた容器として使用していた可能性がある。3区は5点で、すべて9世紀代である。特に9世紀前葉に比定できる第72号住居跡から出土した須恵器壺や盤は、内面に多量の漆が付着している。1軒からこのような土器が3点も出土していることから、漆工人の存在も想定される。

表26 姥久保遺跡2区・3区出土土器等一覧表

区	番号	種別	材質	器種	部 位	出土遺構	遺物番号	時代	備 考
2区	1	漆付着	土師器	壺	体部 外・内面	第16号住居跡	166	8世紀後葉	
	2	漆付着	須恵器	高盤	盤部 内面	第19号住居跡	250	9世紀前葉	
	3	漆付着	土師器	环	体部 内面	第18号土坑	186	8世紀前葉	
3区	4	漆付着	須恵器	环	体部 外・内面	第43号住居跡	371	9世紀前葉	
	5	漆付着	土師器	高台付环	体部 内面	第56号住居跡	427	9世紀後半	
	6	漆付着	須恵器	环	体部 内面	第72号住居跡	479	9世紀前葉	
	7	漆付着	須恵器	环	体部 内面	第72号住居跡	480	9世紀前葉	
	8	漆付着	須恵器	盤	盤部 内面	第72号住居跡	486	9世紀前葉	

(4) 貼床の構築状況について

ここでは、2区・3区の地形にも触れながら、今回の調査で確認した住居の貼床の構築状況について述べる。

2区の調査前の地形は、南西から北東方向に向かって緩やかな斜面をなしている（第2図）。前述した基本層序では、ソフトローム層やハードローム層が確認できず、流れ込んだ堆積土が確認できたことか

ら、造構を明確に確認できたのは現地表からおよそ1~15m下であったが、第19号住居跡や第1号掘立柱建物跡の柱穴は、本来の造構確認面が70cmほど上で、黒色土や極暗褐色土を掘り込んで構築している。2区の建物群は、古墳時代には埋没していた再堆積上に構築されたものとみられる。地山に構築した場合と比較すると、軟弱な地盤であったと推測できる。3区の調査前の地形は、ほぼ平坦な地形である（第3図）。前述した基本層序では、ソフトローム層が確認できなかったが、現表下に縮まりの強いハードローム層が確認できている。2区と比較しても標高が23mと高く、好立地であったとみられる。

表27 姫久保遺跡2区・3区貼床構築住居一覧表

区	番号	遺構名	貼床を構成している主な構築土	貼床の特徴	分類	時期
	1	第1号住居跡	ローム・焼土・粘土・砂粒微量	2層を平坦に埋めている。	B	7世紀後葉
	2	第12号住居跡	ローム・焼土微量	床面は削平されており、下部の1層のみ確認した。	-	8世紀前半
	3	第16号住居跡	ローム・焼土・炭化物・粘土・砂粒	下部に8層を埋めて、上部に粘土・砂粒を含んだ3層を薄く積み上げている。	C	8世紀後葉
	4	第17号住居跡	ローム・焼土・炭化物・粘土・砂粒	下部にロームブロック主体の5層を埋めて、上部にロームブロック・粘土粒子・砂粒を含んだ3層を薄く積み上げている。	C	8世紀後葉
	5	第41号住居跡	ローム・炭化物・粘土	下部にロームブロックを含んだ1層を、上部に粘土粒子を含んだ1層を中央部に薄く積み上げている。	C	8世紀後葉
2区	6	第3号住居跡	ローム・焼土・炭化物・粘土・砂粒 版張状跡は焼土・粘土粒子主体の層、黒色土・粘土粒子主体の層、黒色土・ローム粒子主体の層。黒色土の6層が層厚10cmほどの間に薄く積み重なっている。	下部に焼土・炭化物を含んだ1層を埋めて、上部中央には版張状に積み上げた貼床1層を薄く積み上げ、その周りにローム・焼土を含んだ1層を埋めている。	C	9世紀後葉
	7	第6号住居跡	ローム・焼土	ローム・焼土を含んだ2層を埋めている。	C	9世紀後葉
	8	第7号住居跡	ローム・焼土・炭化物・粘土	下部にローム・粘土を含んだ5層を埋めて、上部に焼土・炭化物・粘土を含んだ繊まりの強い1層を薄く積み上げている。	C	9世紀前葉
	9	第9号住居跡	焼土・炭化物・粘土	下部に粘土を含んだ2層を埋め、上部に粘土を多量に含んだ繊まりの強い1層を薄く平坦に積み上げている。	C	9世紀中葉
	10	第10号住居跡	ローム・焼土・炭化物・粘土・砂粒	粘土を含んだ第2層を全体に埋めているが、中央部付近の径30cmの範囲にだけ、砂粒や粘土を含んだ1層を薄く積み重ねている。	C	10世紀前葉
	11	第11号住居跡	ローム・焼土・炭化物・粘土・砂粒	下部にローム・焼土・粘土を含んだやや層厚のある4層を埋め、上部に繊まりの強いロームや焼土・粘土を含んだ6層を薄く積み重ねている。	C	9世紀後半
	12	第14号住居跡	ローム・焼土・炭化物・粘土	裏前面だけが貼床で、下部に粘土を含んだ1層を、上部に焼土を含んだ1層と粘土を含んだ1層を薄く積み上げている。	C	9世紀中葉
	13	第15号住居跡	ローム・焼土・炭化物・粘土・砂粒	裏前面の床面に粘土・砂粒を含んだ1層を薄く埋め、南部の床面にロームを含んだ1層を埋めている。	A	9世紀中葉
	14	第19号住居跡	ローム・焼土・炭化物・粘土	下部にローム・焼土を含んだ2層を、上部にロームを含んだ繊まりの強い2層を平坦に積み上げている。	C	9世紀前葉
	15	第21号住居跡	ローム	北壁の一部だけが貼床で、ロームを含んだ1層を埋めている。	A	9世紀中葉
3区	16	第23号住居跡	ローム・焼土・炭化物・粘土・砂粒	東南部だけが貼床で、下部にローム・焼土を含んだ2層を、上部にローム・粘土・砂粒を含んだ1層を薄く積み上げている。	C	9世紀前葉
	17	第24号住居跡	ローム・粘土	粘土を含んだ1層を埋めている。	A	9世紀中葉
	18	第25号住居跡	ローム	東部だけが貼床で、下部にローム・焼土を含んだ1層を、上部にロームを含んだ繊まりの強い1層を薄く積み上げている。	C	9世紀中葉
	19	第26号住居跡	ローム・焼土・粘土	下部にロームを含んだ1層を埋めて、上部に焼土・粘土を含んだ3層を薄く積み上げている。	C	9世紀前葉
	20	第27号住居跡	ローム	ロームを含んだ1層を埋めている。	A	9世紀前葉
	21	第37号住居跡	ローム・粘土	ロームを含んだ1層を全体に埋め、中央付近にだけ上部に粘土を含んだ1層を薄く積み上げている。	C	9世紀中葉
	22	第39号住居跡	ローム・焼土	東部だけが貼床で、下部にロームを含んだ1層を、上部は繊まりの強いロームを含んだ1層を薄く積み上げている。	C	9世紀前葉
	23	第43号住居跡	ローム	ロームを含んだ5層を埋めている。	B	9世紀前葉
	24	第49号住居跡	ローム	ロームを含んだ1層を埋めている。	A	9世紀後葉
	25	第66号住居跡	ローム・炭化物	ロームブロックを含む8層を埋めている。	B	9世紀前葉
	26	第69号住居跡	ローム・焼土・炭化物・粘土・砂粒	ローム・焼土・炭化物・粘土・砂粒を含んだ4層を埋めている。	B	9世紀後葉

2区で貼床を構築している住居は22軒で、時期別に見ると7世紀代が1軒、8世紀代が4軒、9世紀代が16軒、10世紀代が1軒となっている（表27）。特に時期に確認した軒数での割合は、8世紀代が80%、9世紀代が73%で、確認した住居跡の大半を占めている。3区で貼床を構築している住居は9世紀代の4軒だけで（表27）、時期別に確認した軒数での割合は20%である。2区と比較すると貼床の軒数や確認した軒数での割合は低くなっている。

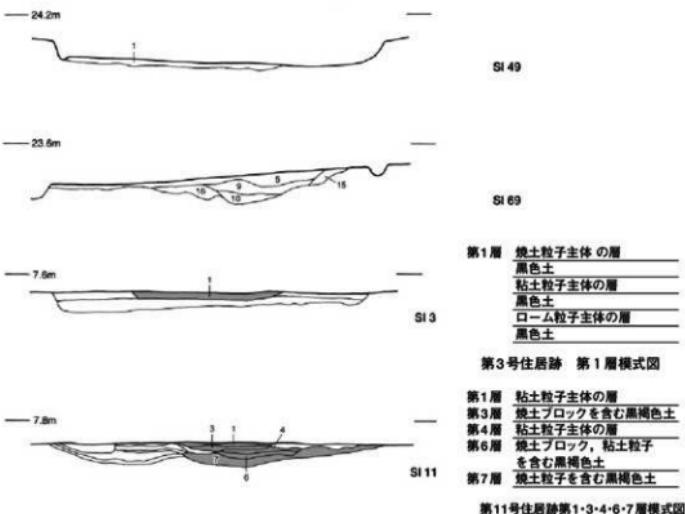
さらに、2区・3区全体で見る貼床の特徴は、下のように分類できる。

A類・・・構築土は単一の層で埋められ、その直上を床面としているもの。

B類・・・構築土は複数の層で埋められ、その直上を床面としているもの。

C類・・・構築土は単一あるいは複数の層で埋められ、その直上にローム・焼土・粘土などを薄く積み重ねた上を床面としているもの。

この分類に従って、貼床を構築している住居を見てみると、2区はA類が4軒、B類が1軒、C類が16軒である。3区はA類が1軒、B類が3軒で、C類は1軒も確認できなかった。A類は構築土が単一層で、ロームを主体とした土で貼床を構築していることが特徴である。B類は3区の第69号住居跡で、周囲からレンズ状に埋められた構築土で構成されている。C類は下部に単一層の構築土を一気に埋めているものや、複数の層を積み重ねた上に薄く構築土を積み上げている。分類できる第3～10・12～14・16・21・22号住居跡の13軒は、貼床構築土の上部に粘土にロームや焼土、炭化物を使って薄く積み上げて床面を構築している特徴がある。第11・19号住居跡の貼床は、やや厚層のある黒色土やロームを多量に含んだ褐色土、粘土を多量に含んだ灰黄褐色土を複数積み重ねており、版塗状を呈している。その状況はつくば市下平塚蕪木台遺跡の第55・100号住居跡と類似している⁸⁾。また、第3号住居跡の版塗状貼床である第1層



第237図 版塗状貼床土層図

は、層厚が10cmほどの中に6層が非常に薄く積み重ねられている。床の中央から周辺に向かうに従って細分できる6層は減少したり再度6層に分層できたりするが、その構築状況から非常に丁寧な作りが読みとれ、特筆される技法である。

以上のような貼床の構築する理由については、住居の上屋構造も当然加味する必要があるが、ハードローム層が確認できた3区は標高が高く、地盤が比較的強固であることから貼床を構築している住居が少なく、再堆積層に立地している2区は低地で、地盤が軟弱であったことが大きく起因しているものと推定できる。

3 おわりに

以上、今回の調査で確認できた姥久保遺跡の特徴を少しでも明確にできるよう、遺構・遺物について考察を試みてきた。調査区全体をみれば、2区・3区の両地点に集落が存在していた時期もあるが、2区・3区で出土した墨書き器や土師器・須恵器などの高盤の出土量、住居跡や掘立柱建物跡の時期別確認数などから、それぞれの区における集落の拡大期には時期差があり、また建物の方角が区で異なっていることが判明した。姥久保集落の一部が明らかになったとはいえる。今回の調査が部分的な調査であるため、性格づけまでは辿り着くことができなかった。しかし、各時代の様相や出土土器の特徴からは、河岸段丘上位と下位の集落が、何らかの異なる役割をもつ別の集団の可能性が高い。

さらに、2区では8世紀後葉から続いた版築状の貼床技法を9世紀代まで続いていることが分かった。この技法については、今後の調査事例の増加とともに明らかになっていくと思われる。

恋瀬川右岸に位置する当遺跡は、古墳時代が熊野古墳や周辺の古墳との関わり、律令期が常陸國府の対岸に位置する遺跡として注目できる遺跡である。全容については、今回の調査区以外の未調査部分や恋瀬川流域に存在する遺跡の調査によって解明できるものと期待したい。

註

- 1) 西宮一男 鈴木幹男「千代田村埋蔵文化財調査報告書(1) 市川遺跡 根崎道路 清水並木線」千代田村教育委員会 1969年2月
- 2) 後藤孝行「石岡別所遺跡 一般県道石岡つくば線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」「茨城県教育財团文化財調査報告」第244集 2004年3月
- 3) 田中裕「茨城県千代田町熊野古墳の測量調査」筑波大学 先史学・考古学研究』第8号 1997年3月 田中氏は熊野古墳の築造時の絶対年代を一説4世紀末前後と考えておきたいと述べている。
- 4) 表中の遺構確認数については、時期を前葉・中葉・後葉(末葉)に比定できる遺構の数で、3区分に該当しない遺構の数は除いている。
- 5) 白田正子・高野節士・仲村浩一郎・白田和宏「中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書『中原道路3』」「茨城県教育財团文化財調査報告」第170集 2001年3月
- 6) 平川南『墨書き土器の研究』吉川弘文館 2000年11月
- 7) 井上尚明「コップ形須恵器の考察 -奈良時代の計量器について-」「考古学雑誌」第79巻 第4号 1994年6月
- 8) 白田正子ほか「下平坂墓石道跡 萩城一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書VI」「茨城県教育財团文化財調査報告」第326集 2009年3月

参考文献

- ・石岡市文化財関係資料編纂会「石岡市の遺跡 歴史の里の発掘100年史」茨城県石岡市教育委員会 1995年3月
- ・古墳時代研究班(集落グループ)「茨城の『S字状口縁付甕』について(3)」「研究ノート」第7号 茨城県教育財团 1997年6月
- ・浅井哲也「茨城県における古墳時代前期の土器」「領域の研究 -阿久津久先生還暦記念論集-」阿久津久先生還暦記念事業実行委員会 2003年4月
- ・櫻村宜行「奈式土器編年考-茨城県を中心として-」「研究ノート」第5号 茨城県教育財团 1996年6月
- ・櫻村宜行「茨城県南部における鬼高式土器について」「研究ノート」第2号 茨城県教育財团 1993年7月
- ・佐々木義則「古代常陸國新治廻群の基礎的研究(1) -奈良・平安時代の須恵器編年を中心に-」「奈良岐考古」第20号 奈良岐考古人会 1998年5月
- ・帝京大学山梨文化財研究所「掘立柱・礎石建物建築の考古学-都城・官衙・集落・寺院における分析と研究法-」 2006年3月

写 真 図 版



平安時代土器集合

1区

PL 1



1区遺構確認状況



1区完掘全景



1区完掘全景

1区

PL 2



第1号粘土探掘坑
完掘状況



第1号粘土探掘坑
完掘状況



第1号粘土探掘坑
遺物出土状況



第1号遺物包含層
トレンチ2
遺物出土状況



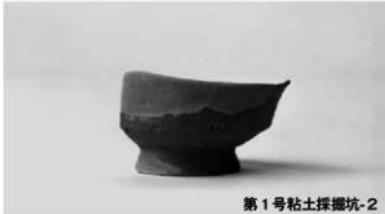
第1号遺物包含層
トレンチ2
遺物集中箇所



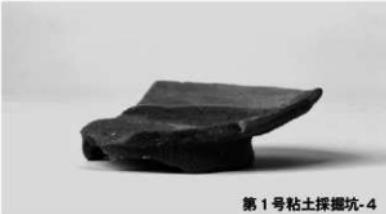
第1号溝
完掘状況

1区

PL 4



第1号粘土探掘坑-2



第1号粘土探掘坑-4



HG 1-12



第1号粘土探掘坑-1



HG 1-13



HG 1-15



HG 1-8



HG 1-16

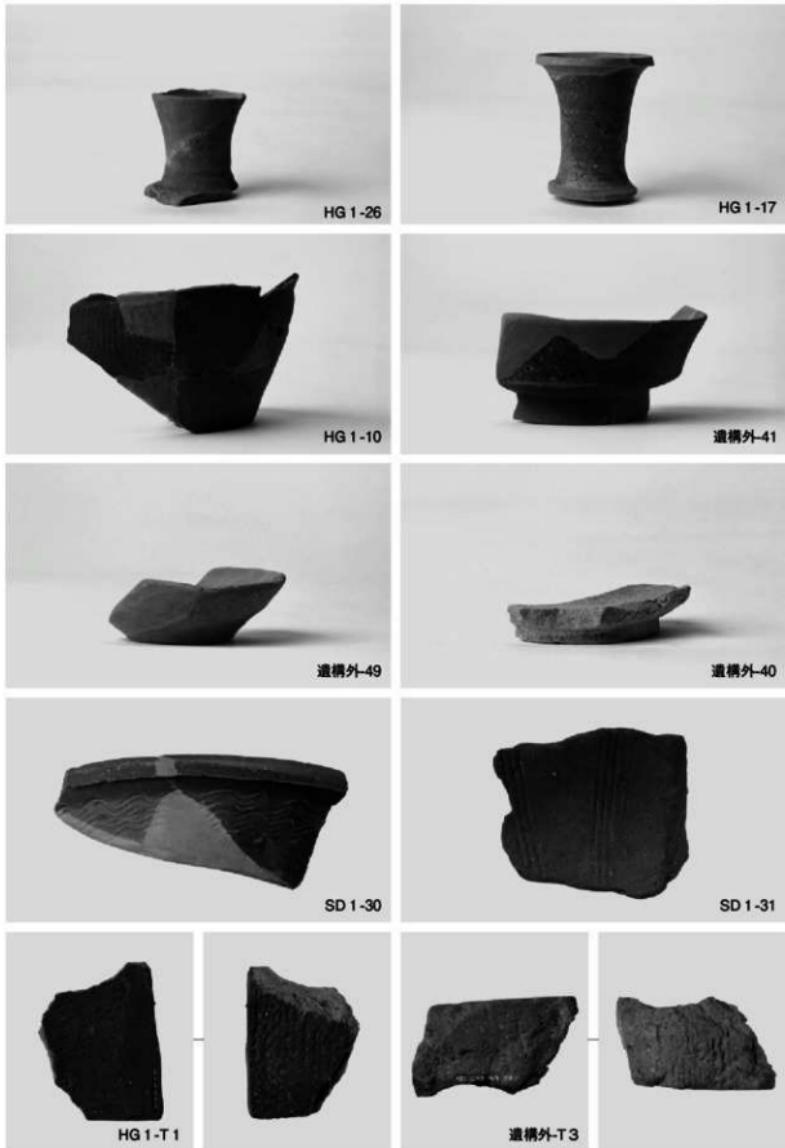


HG 1-19



HG 1-9

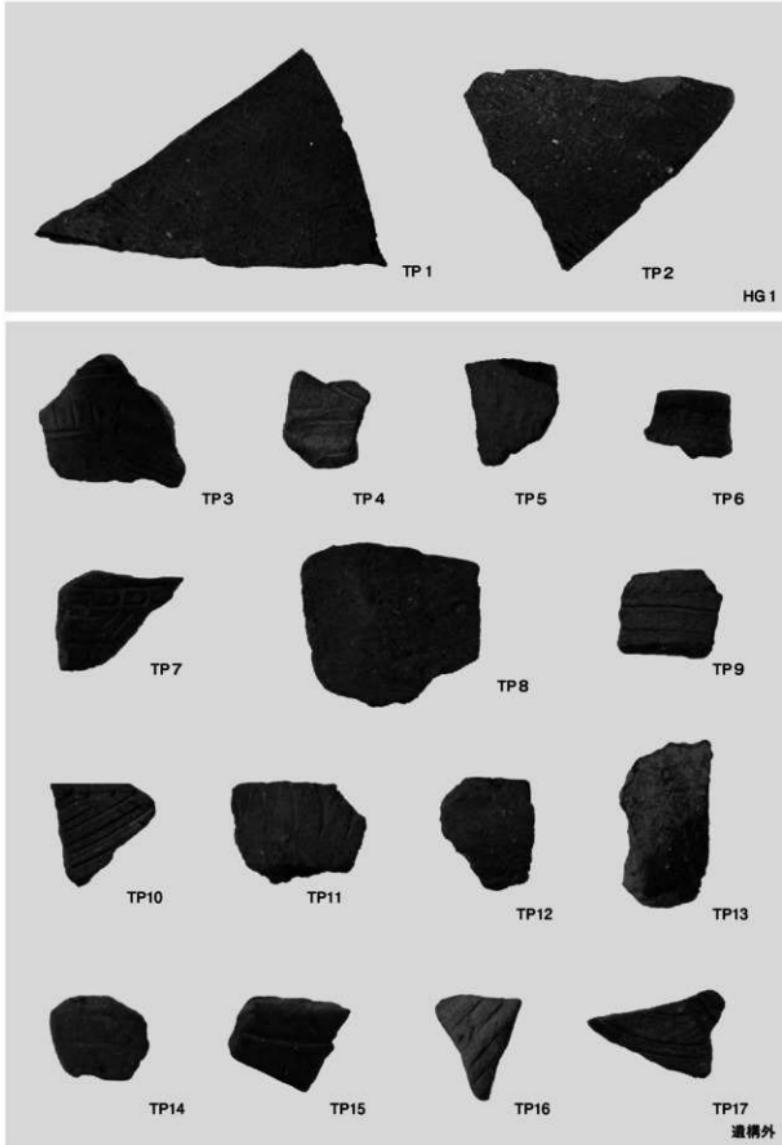
第1号粘土探掘坑，第1号遗物包含层出土遗物



第 1 号遺物包含層、第 1 号溝跡、遺構外出土遺物

1区

PL 6



第1号遺物包含層、遺構外出土遺物

2区

PL 7



2区遺構確認状況



2区完掘全景



2区全景真上から

2区

PL 8



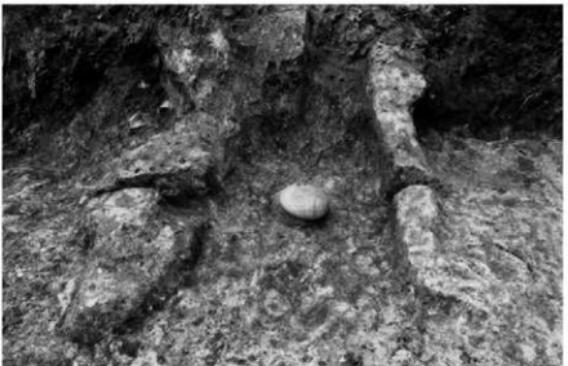
第1号住居跡
完掘状況



第2号住居跡
遺物出土状況



第20号住居跡
完掘状況



第20号住居跡
遺物出土状況



第28号住居跡
遺物出土状況



第29号住居跡
遺物出土状況

2区

PL 10



第29号住居跡
遺物出土状況



第30号住居跡
完掘状況



第30号住居跡
遺物出土状況



第34号住居跡
遺物出土状況



第36号住居跡
遺物出土状況



第16号住居跡
遺物出土状況

2区

PL 12



第16号住居跡
遺物出土状況



第16・41号住居跡
貼床土層断面



第17号住居跡
遺物出土状況



第41号住居跡
完掘状況



第2号溝跡
完掘状況



第3号住居跡
完掘状況

2区

PL 14



第9号住居跡
版築状貼床
土層断面



第10号住居跡
版築状貼床
土層断面



第10号住居跡
遺物出土状況



第 11 号 住 居 跡
貼 床 土 層 断 面



第 14 号 住 居 跡
版 繁 状 貼 床
土 层 断 面



第 15 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況

2区

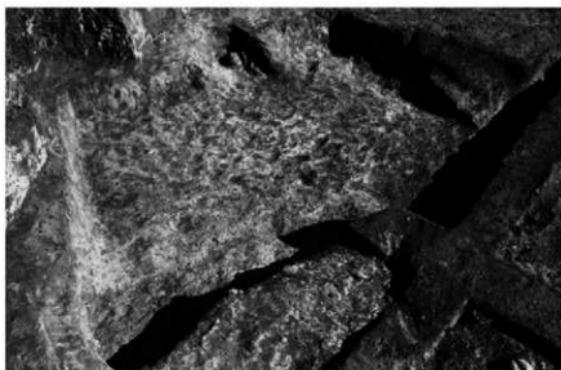
PL 16



第 19 号 住 居 跡
貼 床 土 層 断 面



第 33 号 住 居 跡
完 挖 状 況



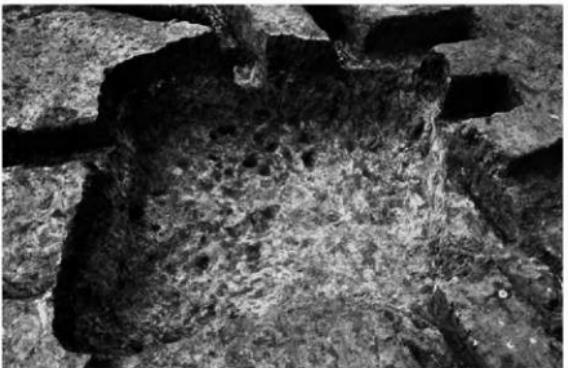
第 35 号 住 居 跡
完 挖 状 況



第35号住居跡
遺物出土状況



第4号掘立柱建物跡
完掘状況



第19号土坑
完掘状況



SI 1-63



SI 22-90



SI 34-128



SI 20-88



SI 20-87



SI 34-127



SI 8-76



SI 18-85



SI 34-130



SI 8-78



SI 8-77



SI 8-79



第2・28・29・30・36号住居跡出土遺物

2区

PL 20



第2・29・30号住居跡出土遺物



第2・8・13・16・28・34号住居跡、第3号掘立柱跡出土遺物



第13・16・17号住居跡出土遺物



SB 3-179



SI 16-164



SI 16-163



SI 13-152

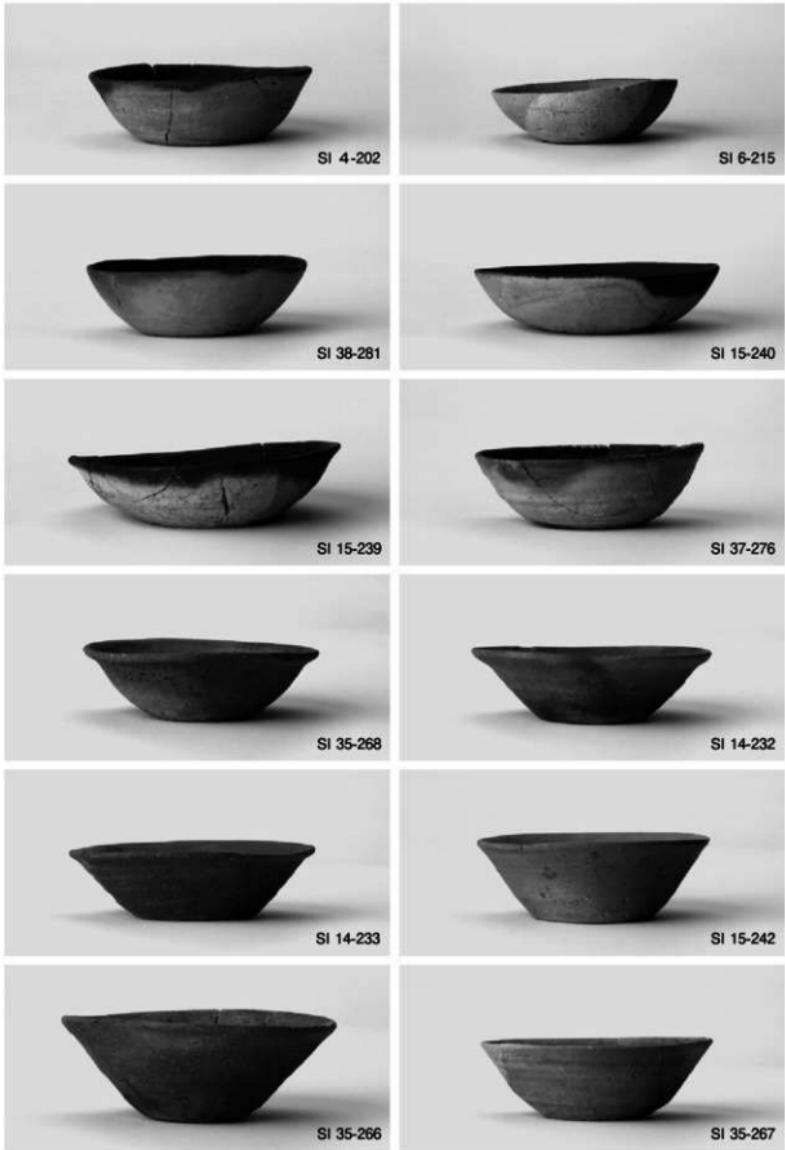


SI 16-162



SI 16-165

第13・16号住居跡、第3号掘立柱建物跡出土遺物



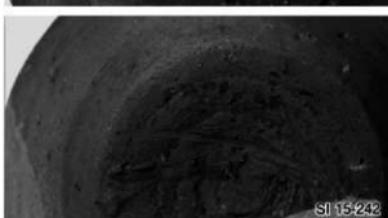
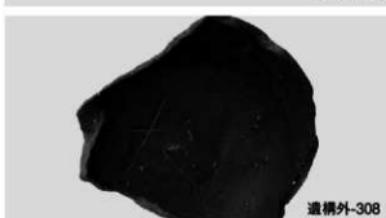
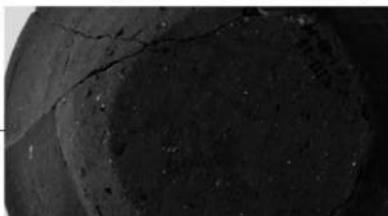
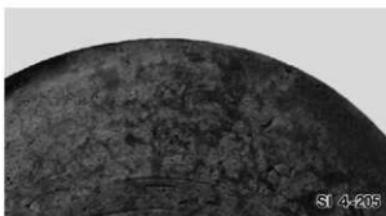
第4・6・14・15・35・37・38号住居跡出土遺物



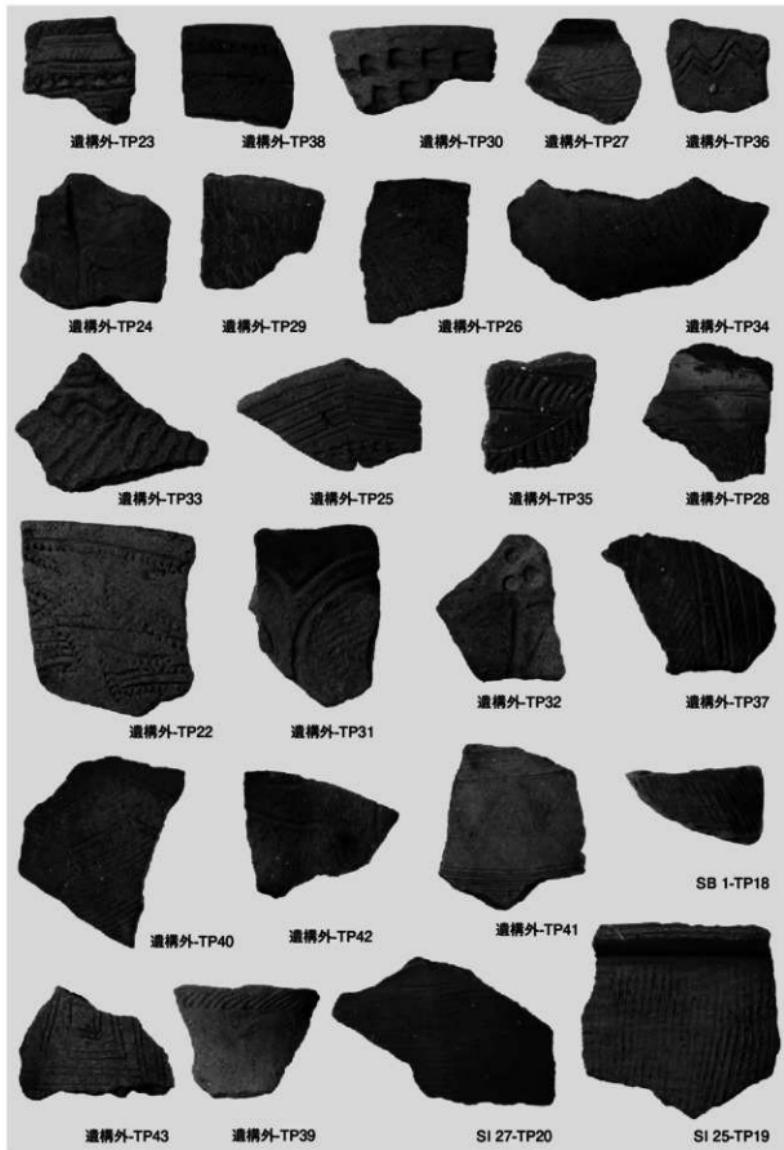
第3・4・14・15・31・33・35・37号住居跡、第12・31号土坑出土遺物

2区

PL 26



第4・14・15・19・33・35号住居跡、第12号土坑、遺構外出土遺物



第25・27号住居跡、第1号掘立柱建物跡、遺構外出土遺物

2区

PL 28



SI 14-T9



SI 14-T10



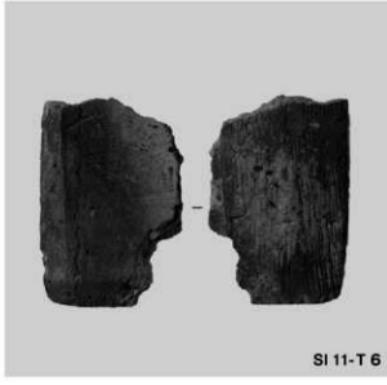
SI 5-T4



SI 11-T5



SI 14-T7



SI 11-T6



第4・7・8・11・21・23・28・35・36号住居跡、第19号土坑、第1号掘立柱建物跡、
遺構外出土遺物

3区

PL 30



3区遠景 南から



3区全景 真上から



3区中央部全景 真上から



第54号住居跡
遺物出土状況①



第54号住居跡
遺物出土状況②



第55号住居跡
完掘状況

3区

PL 32



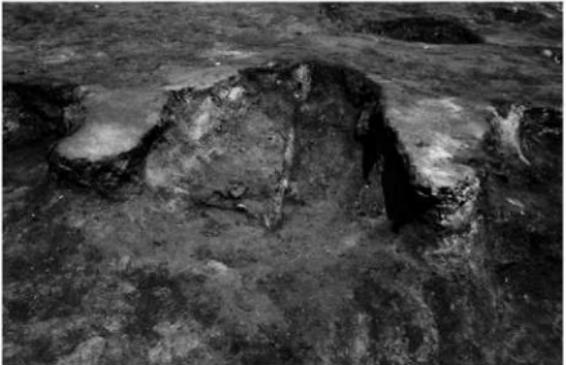
第55号住居跡
遺物出土状況



第55号住居跡
竪穴掘状況



第58号住居跡
遺物出土状況



第 58 号 住 居 跡
完 挖 状 況



第 54 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況



第 43 号 住 居 跡
完 挖 状 況

3区

PL 34



第43号住居跡
遺物出土状況



第45号住居跡
完掘状況



第49号住居跡
完掘状況



第49号住居跡
遺物出土状況



第52号住居跡
完掘状況



第52号住居跡
遺物出土状況

3区

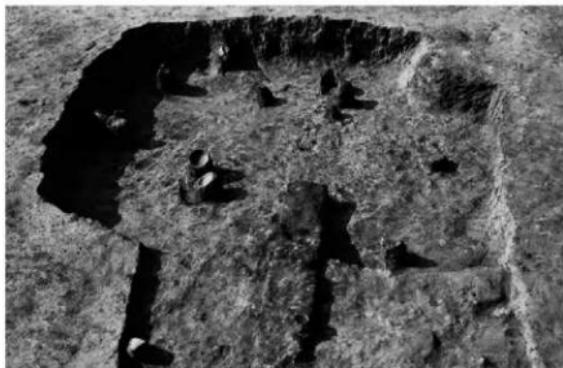
PL 36



第53号住居跡
遺物出土状況



第57号住居跡
完掘状況



第57号住居跡
遺物出土状況①



第 57 号 住 居 跡
遺 物 出 土 狀 況 ②



第 60 号 住 居 跡
完 剥 狀 況



第 61 号 住 居 跡
完 剥 狀 況

3区

PL 38



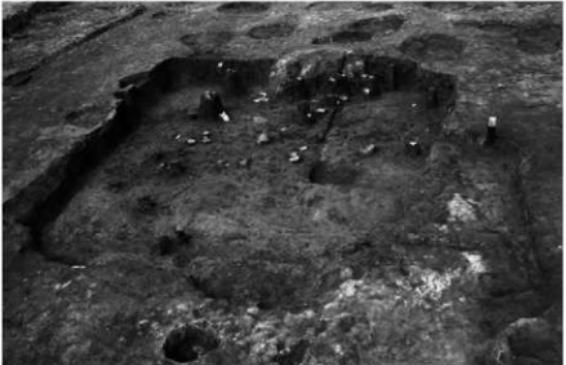
第61号住居跡
遺物出土状況



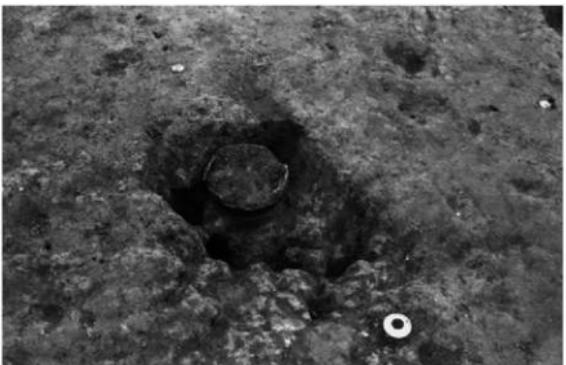
第63号住居跡
遺物出土状況



第66号住居跡
完掘状況



第66号 住居跡
遺物出土状況



第68号 住居跡
炉遺物出土状況



第69号 住居跡
完掘状況

3区

PL 40



第71号住居跡
遺物出土状況



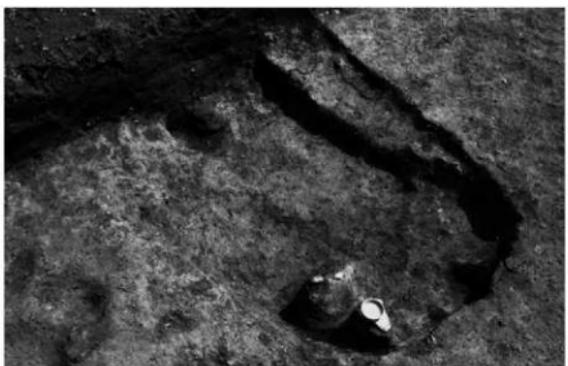
第72号住居跡
遺物出土状況①



第72号住居跡
遺物出土状況②



第 2 号 柱 列 踪
第 72 号 住 居 踪
完 挖 状 況



第 60 号 土 坑
遗 物 出 土 状 況



第 95 号 土 坑
遗 物 出 土 状 況

3区

PL 42



第9号溝跡
完掘状況



第9号溝跡
遺物出土状況①



第9号溝跡
遺物出土状況②



SI 47-317



SI 54-321



SI 54-323



SI 54-322



SI 54-324



SI 54-325



SI 54-326



SI 54-327

第47·54号住居跡出土遺物



第58号住居跡出土遺物



SI 58-356



SI 58-355



SI 55-340



SI 46-336



SI 58-357



SI 58-359



SI 58-361



第46·55·58号住居跡出土遺物

3区

PL 46



SI 57-429



SI 52-418



SI 71-473



SI 66-452



SI 63-446



SI 67-462



SI 66-455



SI 72-481



SI 51-416



SI 61-439

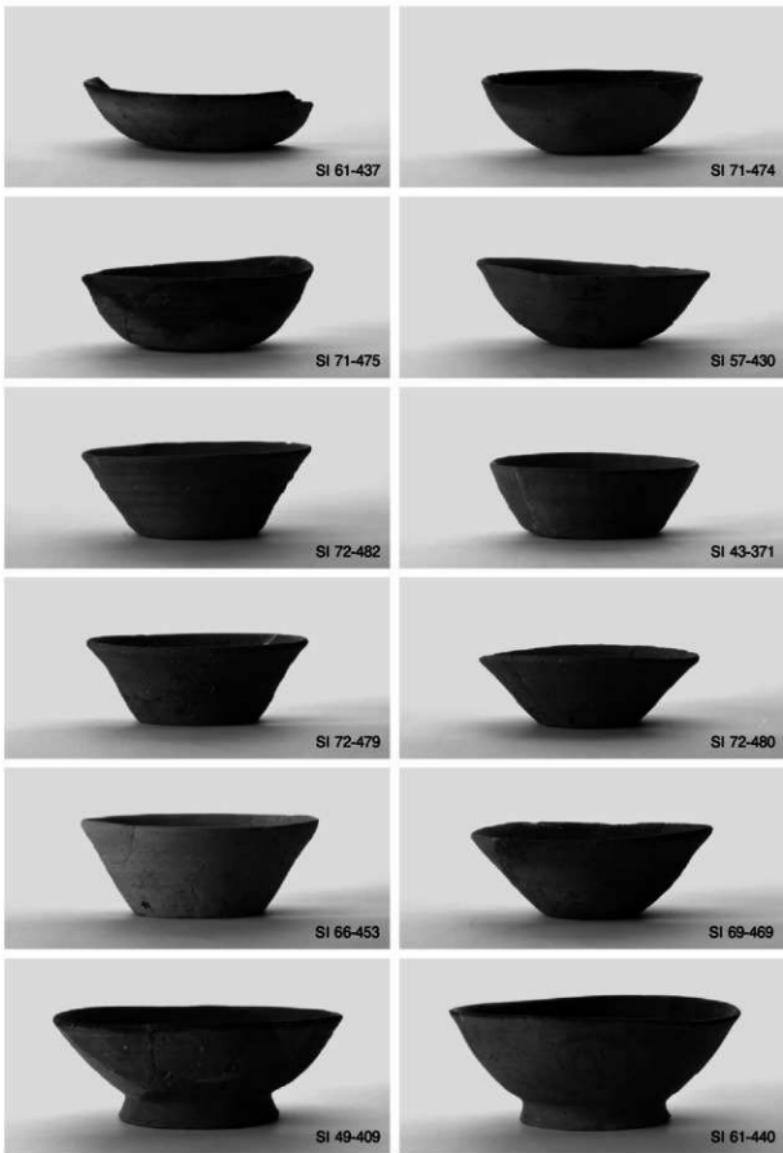


SI 51-415



SI 71-477

第51・52・57・61・63・66・67・71・72号住居跡出土遺物



第43・49・57・61・66・69・71・72号住居跡出土遺物

3区

PL 48



SK 90-503



SI 66-457



SI 72-483



SK 114-505



SI 72-485



SI 56-427



SI 43-386



SK 106-504



SI 57-431



SI 45-397



SI 43-385



SI 43-383

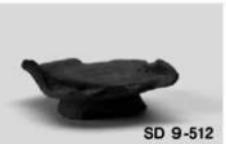
第43・45・56・57・66・72号住居跡、第90・106・114号土坑出土遺物



SI 43-389



SI 43-390



SD 9-512



SI 71-478



SI 72-487



SI 49-413



SI 61-441



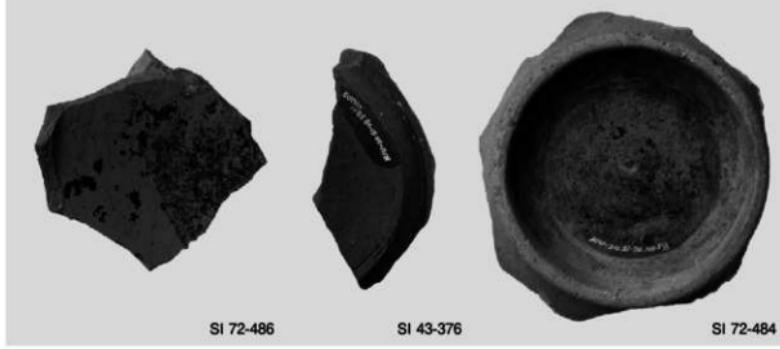
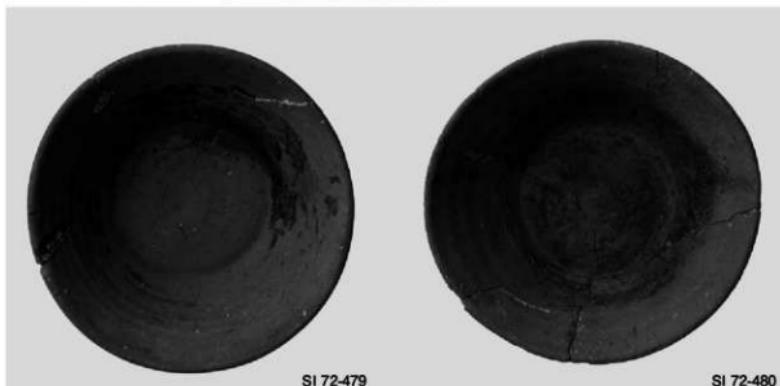
SI 61-442



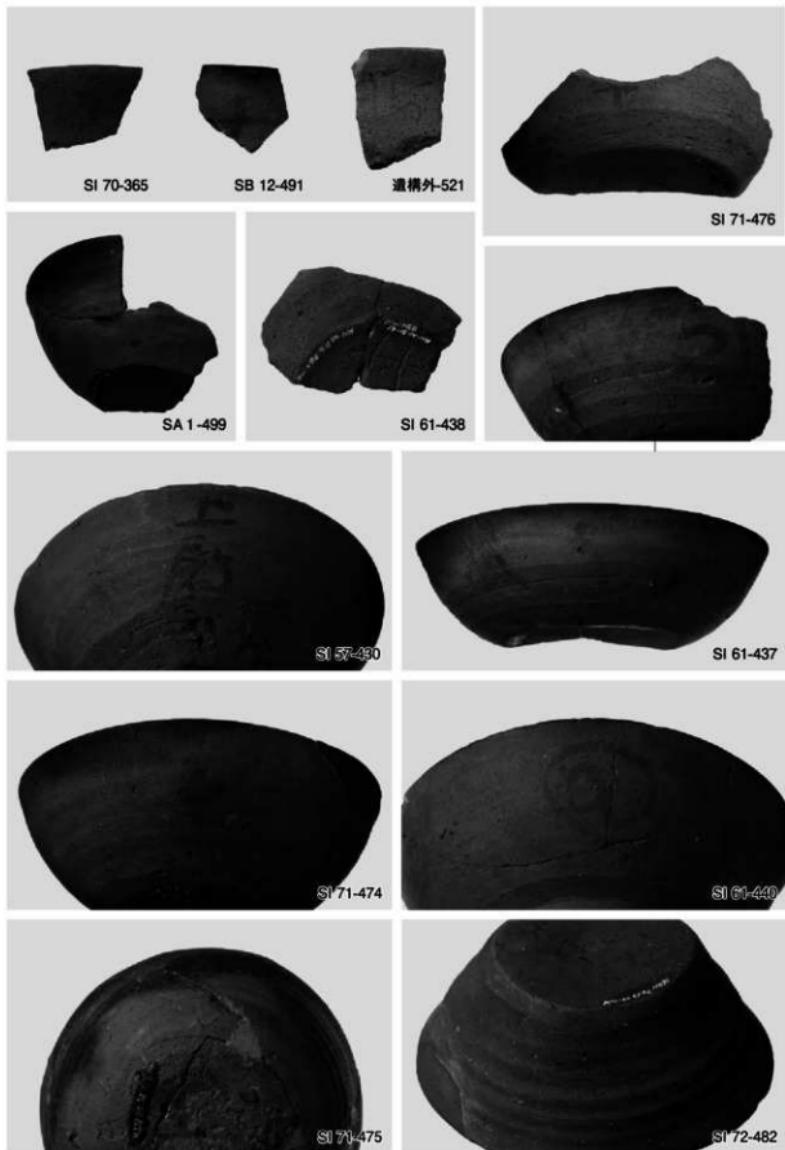
第43・49・61・71・72号住居跡、第9号溝跡出土遺物

3区

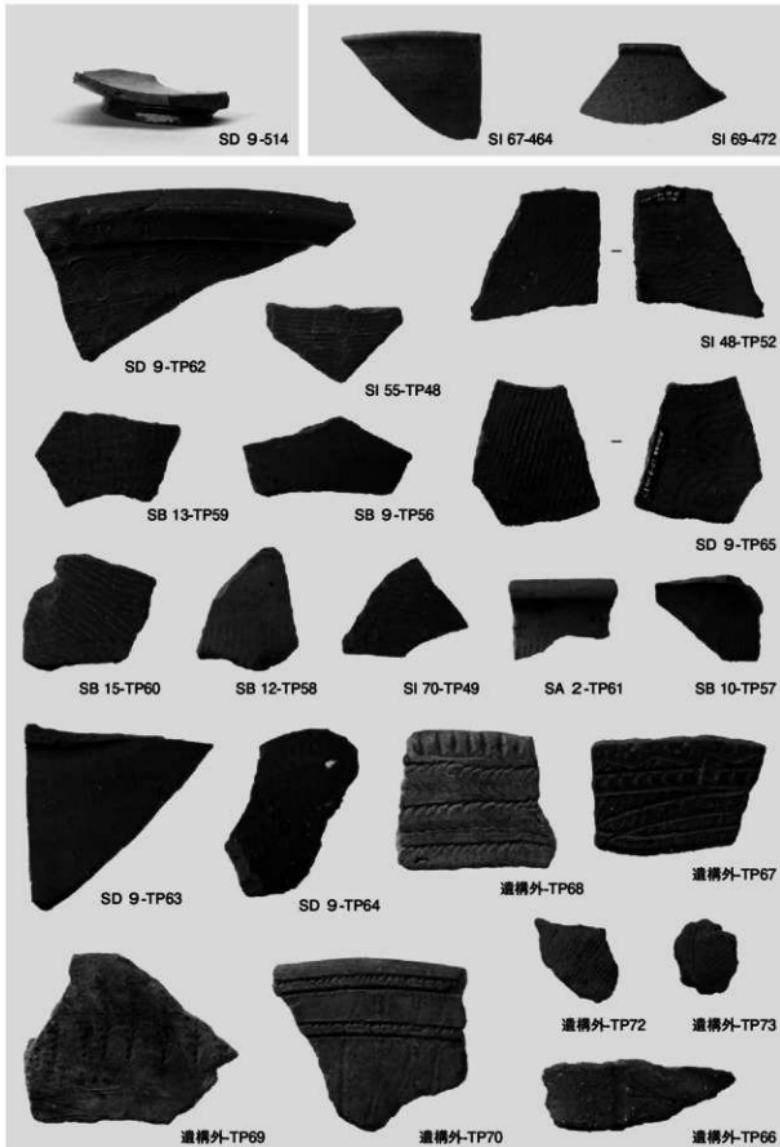
PL 50



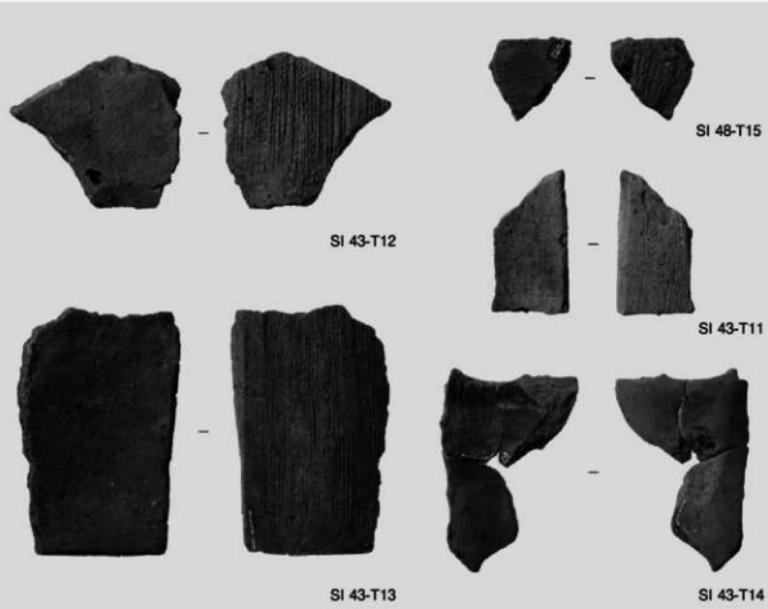
第43・49・63・72号住居跡出土遺物



第57·61·71·72号住居跡、第1号柱列跡出土遺物



第48·55·67·69·70号住居跡、第9·10·12·13·15号堀立柱建物跡、第2号柱列跡、第9号溝跡、遺構外出土遺物



第43・48号住居跡、造構外出土遺物

3区

PL 54



第43・49・52・53・54・61・64・69・72号住居跡、第95号土坑、第9号溝跡、造構外出土遺物

抄 錄

ふりがな	うばくほいせき							
書名	姥久保遺跡							
調書名	一般国道6号千代田石岡バイパス(かすみがうら市市川~石岡市東大橋)事業地内埋蔵文化財調査報告書							
卷次	6							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第339集							
編著者名	本橋弘巳 櫻井亮介 舟橋理 佐々木愛理							
編集機関	財團法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2011(平成23)年3月23日							
ふりがな所 収遺跡	ふりがな所 在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
姥久保遺跡	茨城県かすみがうら市大字市前庄美塚51番地の1ほか	08230 - 46152	36度 10分 32秒	140度 15分 47秒	7.0 / 24.0 m	20071001 / 20080131 / 20080601 / 20080831	4,127 m ² 1次 2,683 m ² 2次 1,444 m ²	一般国道6号 千代田石岡バイパス(かすみがうら市市川~石岡市東大橋)建設工事に伴う 事前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項
姥久保遺跡	集落跡	古墳	堅穴住居跡	17軒	土師器(环・椀・蓋・壺・器台・ 高环・鉢・壺・甕・瓶・ミニ チュア)、土製品(球状土錘・ 管状土錘)、石器(砾石)、石 製品(反孔円板)			河岸段丘下位では、や まとくを重ねて安 定的に住居を確 認した。河岸段 丘上位では、時代 から平安時代に かけての土器を 多く見つか る。
		奈良	堅穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 溝跡	13軒 6棟 5基 1条	土師器(环・甕)、須恵器(环・ 高台付环・甕・高盤・壺・鉢・ 甕・瓶・短頸壺・コップ形土器)			
		平安	堅穴住居跡 掘立柱建物跡 柱列跡 粘土探柵坑 土坑 溝跡 遺物包含層	42軒 8棟 2列 1基 8基 1条 1か所	土師器(环・高台付椀・高台 付皿・高盤・甕・耳皿)、須 恵器(环・高台付环・盤・ 高盤・鉢・甕・壺・円面 鏡)、土師質土器(羽釜・置き 灰陶器(碗・長頸瓶)、繩 袖陶器(碗・皿)、土製品(筋 縫車)、石器、石製品(砾石・ 鉄錆車)、鉄製品(刀子・鍊 筋錆車)、瓦(丸瓦・平瓦)			
		墓跡	中世	火葬土坑 墓坑	1基 1基	古銭(永樂通寶)		
		その他	時期不明	柱穴の可能性 がある土坑 土坑 溝跡 ピット群	7基 76基 8条 4か所	土師器、須恵器、土師質土器 (小皿)、陶器(壺・甕)、磁 器(碗・皿)		

印 刷 仕 様

編 集 OS Microsoft Windows XP
Professional Version2002.ServicePack3
編集 Adobe Indesign CS4
図版作成 Adobe Illustrator CS4
写真調整 Adobe Photoshop CS4
Scanning 6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000
図面類 EPSON GT-X750
使用Font OpenType リュウミンPro・L
写 真 線数 モノクロ175線以上 カラー210線以上
印 刷 印刷所へは、Adobe Indesign CS4でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第339集

姥 久 保 遺 跡

一般国道6号千代田石岡バイパス
(かすみがうら市市川~石岡市東大橋)
事業地内埋蔵文化財調査報告書6

平成23(2011)年 3月17日 印刷

平成23(2011)年 3月23日 発行

発行 財團法人茨城県教育財團

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org/>

印刷 (有)川田プリント

〒310-0041 水戸市上水戸4丁目6-53

TEL 029-253-5551